

旧約聖書注解 1

創世記→Ⅱ列王記

ウィリアム・マクドナルド著

アーサー・ファースタッド編

ゴスペルフォリオプレスジャパン

Believer's
BIBLE
COMMENTARY

WILLIAM MACDONALD

EDITED BY ART FARSTAD

GOSPEL FOLIO PRESS JAPAN

目 次

著者による序文	5
編集者による序文	6
『旧約聖書注解』（ウィリアム・マクドナルド著）について	9
旧約聖書への序説	11
モーセ五書への序論	19
創世記	25
聖書の主要な契約	38
割礼のしるし	50
同性愛	52
予型論	74
出エジプト記	85
ディスペンセーション	106
幕屋：神によって描かれたキリスト	123
レビ記	137
民数記	173
申命記	207
歴史書序論	243
ヨシュア記	247
逃れの町	263
士師記	271
主の使い	279
ルツ記	299
サムエル記第一	307
サムエル記第二	337
列王記第一	367
王国の分裂	383
列王記第二	401

カバーデザイン
ロゴス・デザイン 長尾 優

著者による序文

この注解書の目的は、一般のクリスチャン読者に、そもそも聖書には何が書かれているのかという基本的な知識を提供することである。

もう一つの目的は、聖書に対する愛と関心を呼び起こし、その無尽蔵の宝をさらに掘り下げようという、信仰者の欲求を喚起することにある。神学者が本書を読んで、たましいの糧が得られれば幸いではあるが、本書は、もともとそのような専門家を想定して書かれたものではないことを理解していただければ幸いである。

(聖書本文は太字にし)、全巻に序論と後注を付した。

旧約聖書の講解は、詩篇、箴言、伝道者の書を除いて、通常、一節ごとではなく、段落ごとに扱った。聖書本文の解説は、霊的真理の実際的な生活への応用や、適切と思われる場合には予型論的な考察を加えた。

また、来るべき贖い主を指し示す箇所は、特別に注意し、より詳細な解説を加えた。

詩篇、箴言、および伝道者の書は要約にはなじまない上、多くの信徒がより深く学びたい分野であるため、一節ずつ解説した。

解釈の分かれる聖書本文についても正面から扱い、可能な限り、代替的な説明を加えた。しかし、注解者を悩ませる箇所も多く、それらについてはまだ「鏡にぼんやり映るものを見ているだけ」である、と告白しなければならない。

どんな注解書よりも重要なのは、神の御霊によって意味が明らかにされた神のことばである。それなしには、いのちも、成長も、聖さも、神に喜ばれる奉仕もありえない。私たちは、神のことばそのものを読み、学び、暗記し、黙想し、とりわけ、それに服従するべきである。ある人が言ったように、「従順は霊的理解を左右する器官」なのである。

編集者による序文

「注解書を軽んじてはいけない」。これは、1950年代の終わり頃、聖書を講じる教師が、エマオ聖書学校（現在は大学）で、自分のクラスにした助言である。少なくとも学生の一人はその後30年間、このことばを覚えていた。その教師とは、この注解書の著者であるウィリアム・マクドナルドである。その学生とは、本書の編集者、アーサー・ファースタッド（私）で、当時、まだ青二才の新入生であった。それまで読んだことのある注解書といえば、ハリー・A・アイアンサイド著『天上の世界』(In the Heavens)（エペソ人への手紙の注解）だけであった。ある年の夏、まだ十代であったファースタッド（私）は、毎晩それを読み、注解書とはどういうものかを理解した。

注解書とは

注解書とは、厳密にどのようなものをいうのだろうか。また、なぜ軽視してはいけないのだろうか。最近、ある有名なキリスト教系出版社が、聖書に関連する書物を、何と15種類に分類した。もし、注解書とスタディー・バイブル（解説付き聖書）との違いが正確に分からない人がいたとしても、あるいは、コンコルダンス（聖書語句索引辞典）、アトラス（聖書地図帳）、インターニア（行間訳付き原語聖書）、聖書辞典（これで5つ）との区別が分からないとしても、驚くにはあたらない。

注解書とは聖書本文に注釈を施すもの、あるいは、（願わくは）役に立つ解説を、時には一節ごとに、時には段落ごとに提供しようとするものである。クリスチャンの中には注解書を冷笑してこう言う人もいる。「私は神がみことばを語られるのを聞き、聖書そのものを読みただけだ」と。これは敬虔に聞こえるがそうではない。注解書は、ひたすら最良の（同時に最も困難な）聖書の解き明かしを活字にして、神のことばを一節ずつ教え、説いている。注解書の中には、（たとえばアイアンサイドの注解書のように）文字通り、説教を活字にしたものもある。さらにありがたいことに、あらゆる時代、あらゆる言語による、極めて優れた聖書講解が、英語版で入手できる。しかし、その多くは分厚い上に古めかしく、しかも難解なため、一般のクリスチャンは、途方に暮れると言わないまでも、敬遠してしまうのである。本書が書かれた理由はまさにそこにある。

注解書の種類

理論的には、聖書に関心のある人ならだれでも注解書を書くことができる。まさにこの理由から、注解書は、極めて自由主義的なものから、非常に保守的なものまで分布し、その両者の間に、あらゆる考えの濃淡が存在している。

本注解書は非常に保守的な部類に属し、聖書を神の靈感を受けたもの、また無謬（むびゆ

う)の神のことばとして受け入れ、信仰と実践にとって何の不足もないものとする立場である。

注解書は、高度に専門的なもの（たとえば、ギリシア語やヘブル語の構文に関する詳細な議論）から、非常に分かりやすく要点をまとめたものまでさまざまである。本書はおおよそ、その中間に位置する。専門的な知識を必要とする箇所については、後注を巻末に記したが、より難解な箇所や個人的な適用を避けたわけではない。それは本文の細部にまで真剣に目を配った結果である。マクドナルド氏の講解は内容が充実している。それは、最低の要件を満たすだけのありふれたクリスチャンではなく、弟子を生み出すことが目的だからである。

注解書は、どの神学的立場に立つかによって異なる。保守派か、それとも自由主義派か、プロテスタントか、ローマ・カトリックか、前千年王国説、それとも無千年王国説か、などなど。本書は、保守的立場、プロテスタント、前千年王国説に立つものである。

本書の活用法

本書の扱いには幾通りかの方法がある。大体、次のような順番で試してみるとよい。

- (1) 拾い読み——聖書を愛読する人は、本書のページを素早くめくり、あちらこちらを読んで、本書全体の雰囲気をつかむであろう。
- (2) 特定の箇所——ある節や段落について疑問がある場合、助けが必要となる。そのような時は、その箇所を文脈から調べれば、役立つ資料が見つかるはずである。
- (3) 教義——天地創造、安息日、諸契約、ディスペンセーション（※神の計画と視点から見た聖書の時代区分）、あるいは救いについて調べる場合には、それらの主題を扱う（本文中の）補説を参照するとよい。それ以外の主題については、コンコルダンス（聖書語句索引辞典）を使ってキーワードを確認し、主要な箇所の解説に進むとよい。
- (4) 聖書各巻——あなたは日曜学校のクラス、または集会で、聖書中の一書を読み進めることがあるかもしれない。その時、前もってその箇所を読んでおけば霊的に豊かにされる（また議論をする場合は、有益な意見を提供することができる）。もちろんリーダーが本書を主要な参考書として使っている場合には、二種類の注解書を持つのもよいだろう。
- (5) 聖書全体——最終的には、すべてのクリスチャンが聖書全体を読み通すことが望ましい。難解な聖句は至るところに存在するが、本書のような、かゆい所に手が届く保守的立場の本は、その人の学びを大いに向上させてくれることだろう。

聖書の学びは、最初は「刻んだ小麦」(shredded wheat)のように「滋養はあるが味気ない」ものかもしれない。しかし、学びが進むにつれて、「チョコレート・パイ」に変化していくものである。

30年前、マクドナルド氏が私に言った助言は「注解書を軽んじてはいけない」であった。聖書本文を従来のKJV（欽定訳）からNKJV（新欽定訳）に切り換える編集過程で、氏の

旧約聖書と新約聖書の注解を熟読した私は、その助言をもう一歩進めてこう言いたい。「注解書を楽しもうではないか」と。

『旧約聖書注解』(ウィリアム・マクドナルド著) について

本書は、ウィリアム・マクドナルド(1917～2007)著、Believer's Bible Commentaryの旧約聖書部分の翻訳である。英語の原著は出版以来、今日まで一卷本の聖書注解書として不動の地位を保ち、現在まで42か国語に翻訳されている。日本語への翻訳は、すでに『新約聖書注解』(1～3巻)が伝道出版社から刊行されている(2008)が、本書はそれと併せて読まれるべきものである。

今回の翻訳においては、旧約聖書部分の注解を書順に従い三分割とした。

- 第一巻 (旧約聖書序論)(モーセ五書序論) 創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記、(歴史書序論) ヨシュア記、士師記、ルツ記、サムエル記第一・第二、列王記第一・第二
- 第二巻 歴代誌第一・第二、エズラ記、ネヘミヤ記、エステル記、(詩歌序論) ヨブ記、詩篇
- 第三巻 箴言、伝道者の書、雅歌、哀歌、(預言書序論) イザヤ書、エレミヤ書、エゼキエル書、ダニエル書、ホセア書、ヨエル書、アモス書、オバデヤ書、ヨナ書、ミカ書、ナホム書、ハバクク書、ゼパニヤ書、ハガイ書、ゼカリヤ書、マラキ書、(中間時代)

なお、本書の初版が出版されたのは1980年であり(改訂版は1989年)、現在の読者にとってはなじみの薄い世界情勢への言及や、当時の知見による解説が含まれている。また「編集者による序文」にもある通り、本書はディスペンセーション主義に立つものである。

訳者

《付記》

1. 聖書本文は新改訳聖書2017年版からのものであり、引用箇所は原著の例に従い、太字にした。
2. 「英訳」とあるのはKJV (King James Version, 1611, 英語欽定訳) を示す。
3. 原文でJehovah (エホバ) と書かれている部分は、「ヤハウェ」とした。
4. 原文でLordとなっているところは「主」、LORDとなっているところは「主」(太字)とした。
5. 〈 〉は、本文中に埋没しそうなキーワードを目立たせようとしたものである。
6. 原文でイタリック体(斜字体)は、可能な限り傍点を施した。
7. ※は、翻訳者が必要であると判断して施した注を示す。
8. 長さの単位であるキュビトは、原著に従い、1キュビト=18インチ(約46cm)とした。(新改訳聖書2017では約44cmとしている。)
9. 本書で使われている主な英語翻訳は以下の通りである(順不同)。

- ・KJV (King James Version, 1611) 欽定訳
- ・NKJV (New King James Version, 1982) 新欽定訳
- ・ASB (American Standard Bible, 1901) 米国標準訳
- ・NASB (New American Standard Bible, 1960) 新米国標準訳
- ・RSV (Revised Standard Version, 1952) 改訂標準訳
- ・NIV (New International Version, 1978) 新国際訳
- ・Knox Bible (1949) ラテン語聖書(ウルガタ)からの英訳

旧約聖書への序説

「私たちが旧約聖書を受け入れるべき究極の理由は、キリストご自身に由来する。もしそれが贖い主に不可欠であったなら、贖われた者にとって不可欠でないはずがない。」

G・A・スミス教授 (George Adam Smith)

I. 「旧約聖書」という名称

旧約聖書の研究という深海に漕ぎ出す前に、あるいは、ある特定の書巻の比較的狭い範囲を調べる前に、私たちが「旧約聖書」と呼ぶ神聖な書物に関して、いくつかの一般的な事実を簡単に述べておくことは有益であろう。

「契約」という語は、ヘブル語の〈ベリート〉*⁽¹⁾ということばの翻訳である。新約聖書の「契約」も「遺言」も、同じギリシア語の〈ディアテケー〉を訳したものである。聖書の名称に「契約」という意味が込められるのが望ましいことは言うまでもない。なぜなら聖書こそ、神とその民との間の盟約、すなわち〈契約〉の基礎となるものだからである。

〈旧約〉(すなわち古い契約)と呼ぶのは、〈新約〉と対比させるためである。もちろん、「より古い契約」という方が名称としては優っているかもしれない。なぜなら

〈古い〉というのは、まるで学ぶ価値のないもの、というニュアンスを感じる人もいるからである。それでは霊的、歴史的、文化的視点から見て、致命的な間違いを犯すことになる。旧新両約とも、神の靈感によって書かれたものであり、したがって、すべてのクリスチャンにとって有益なものからである。キリストを信じる者が、(新約)聖書を開いて、特に主について、また主の教会について、また弟子である者に主が何を望んでおられるかを知ろうとすることは常々行われているにしても、円熟した信仰者になるためには、旧約聖書がどれほど大切であるか、その重要性はいくら強調しても足りないほどである。

アウグスティヌスは、旧約聖書と新約聖書がどのような関係にあるのかを、見事に言い表している。

新約は旧約の中に隠され、

旧約は新約の中で解き明かされている。^{*(2)}

II. 旧約聖書の正典

“Canon”（英語で「正典」の意、ギリシア語で〈カノーン〉）は、ある対象を測定または評価するための「基準」を意味することばである。旧約聖書の正典とは、古代イスラエルの霊的指導者たちによって認証された、権威ある、神の靈感を受けて書かれた書物の集大成である。どうしてこれらの書物だけが正典に含まれるのか、つまり、これらの39冊の書物がすべて揃っていないとどうして分かるのだろうか。古くから他の宗教書（異端的なものも含む）もあったのに、どうして「これらが正典である」と断言できるのだろうか。

よく言われるのは、1世紀後半にユダヤ人の公会議で正典のリストが作成された、というものである。ところが実際には、これらの書物は書かれた時から〈正典〉として認められていたのである。敬虔なユダヤ人たちは、神の靈感を受けた聖書を、最初から見分けることができたのである。しかし、一部の書物（エステル記、伝道者の書、雅歌、など）については、一時期、論争が起った。

ユダヤ人は、旧約聖書を三つの部分に分けている。トーラー（モーセ五書）、預言書（前期、後期）、そして諸書*⁽³⁾である。

たとえば、預言書であるダニエル書が諸書の中に含まれている理由については、いくつかの説がある。一般的な自由主義的見解は、ダニエル書は第二の区分に入れるのに間に合わなかった、つまりダニエル書が書かれた時には、すでにその区分の編集が終わっていた、とする（ダニエル書の序論を参照）。（これに対して）保守的な立場がダニエル書を第三の区分に入れるのは、ダニエルは政治家であって、職務としての預

言者ではなく、神に用いられて預言を書いた、と考えるからである。メルリ・F・アンガー博士（Dr. Merrill F. Unger）は、このように三つの区分になったのは、執筆者の立場の違いによるものだとしている。

*⁽⁴⁾

以下は私たちが正しいと信じている保守的な見解である。すなわち、旧約の各巻は、神聖視され、神の権威を帯びる、という明確な目的をもって書かれた、ということである。したがって、その出現の瞬間から、それは正典の刻印を帯びているのである。旧約聖書が三部構成になっているのは、筆者の公的な立場や地位によるものであり、靈感の程度や内容、年代配列の違いによるものではない。*⁽⁵⁾

私たちの正典を公認した公会議は、実は何世紀にもわたって一般に受け入れられていたことを追認したに過ぎない。公会議が作成したのは、（神の）靈感を受けた書物のリストであって、リストが靈感を受けていたわけではない。

クリスチャンにとってさらに重要なのは、主ご自身がヘブル語旧約聖書のこの三つの部分から、しばしば引用し、それらを権威ある書物として扱っておられた、という事実である。たとえば、ルカ24章27節と44節を見ていただきたい。さらに言えば、キリストは、いわゆる聖書外典の書物からは一度も引用してはおられない。

III. 外典

東方正教会、ローマ・カトリック、そしてプロテスタントの聖書学者たちは、新約聖書の正典がその27巻であることに同意している。書巻の配列も概ね*⁽⁶⁾同じであ

り、合計260章であることにも意見の相違はない。一方、旧約聖書はそれに比べ、やや複雑である。

旧約聖書の内容については、プロテスタントとユダヤ人の意見は一致しているものの、東方正教会とローマ・カトリック^{*(7)}は、ユダヤ教の歴史書や詩歌の一部を認め、これを第二正典 (deutero-canonical. ギリシア語で、「第二級の正典」の意) と呼んでいる。プロテスタントやユダヤ教では、これらを外典 (apocryphal. ギリシア語で「隠された」「秘密の」の意^{*(8)}) と呼んでいる。

現在のKJV (英語欽定訳)^{*(9)}、NKJV (新欽定訳)、およびその他のプロテスタント主流派の翻訳は、ヘブル語聖書と全く同じ24巻で構成されている。巻数の違い (39巻ではなく24巻) は、ユダヤ教の旧約聖書では、いくつかの巻が統合されているためである。たとえば、サムエル記、列王記、歴代誌は全6巻であるが、3巻とされ、「十二の書」と呼ばれる小預言書は、まとめて1巻とされている。

ユダヤ人は他にも多くの宗教書を著したが、ヘブル語で書かれていないことも珍しくなく、神の靈感や権威があるものと見なされてはいなかった。その中には、『第一マカベヤ書』『第二マカベヤ書』のように、中間時代の歴史を知る上で貴重なものもあるが、『ベルと竜』のように、読む人が読めば、非正典であることが分かるものもある。

ユダヤ教の書物のうち、価値の低いものは偽典 (Pseudepigrapha. ギリシア語で「偽の書物」の意)、それよりもましなものが外典 (Apocrypha) と呼ばれている。

古代のユダヤ人や一部のキリスト教徒、特にエジプトのグノーシス派は、このような書物の一部を含む膨大な正典を受け入れ

ていた。

学者肌の聖ヒエロニムスは、ローマの司教ダマススから、外典のラテン語訳を依頼されたが、不本意ながらそれを実行したに過ぎない。なぜなら、ヒエロニムスはそのヘブル語本文を熟知しており、それがユダヤ教の正統な正典ではないことを知っていたからである。そのため、せいぜい二流の地位しかないと分かっているながら、ラテン語のウルガタ聖書に収録するために翻訳することにしたのである。今日、これらの外典は、New American Bible (新米国訳)、Jerusalem Bible (エルサレム聖書) のようなローマ・カトリック訳、および、New English Bible (新英語訳)、Revised English Bible (改訂英語訳)、New Revised Standard Version (新改訂標準訳) のような、エキュメニカルな (※キリスト教各派の再一致を目的とする運動) 翻訳 (※日本語では「新共同訳」など) で読むことができる。

ローマ・カトリック教会でさえ、外典を正典として公式に認めたのは、反宗教改革期 (1500年代) になってからである。^{*(10)} バチカンには、死者のための祈りなど、カトリックの教えの一部が外典にあることから、外典を認めるようになった。実際のところ、外典のほとんどはユダヤ教の文学と歴史であって、キリスト教の教義には直接関係がなかった。外典の中には、神の靈感を受けたものではないとはいえ、文化的・歴史的な観点から読む価値のあるものもある。ただしそれは、神の靈感を受けたヘブル語正典の書物をしっかり理解した上での話である。

IV. 著者問題

旧約聖書の著者は聖霊なる神である。聖

霊は、モーセ、エズラ、イザヤ、そして無名の著者を動かし、その導きのもとに書かせた。旧約聖書はどのようにして完成されたのだろうか。この質問を理解する、最良で正しい方法は「二重の著者」と呼ばれるものである。旧約聖書は、人間的な部分と神的部分から構成されているのではなく、完全に人間的であり、同時に完全に神的部分である。神的部分な要素が、人間的な要素による誤りを未然に防いでいた。その結果、原典において誤りのない、完璧な書物が出来上がったのである。

〈書かれた〉みことばを理解するには、〈生ける〉ことばである主イエス・キリストの二重の特性が手がかりとなる。主は、ギリシア神話のように、一部が人間で一部が神なのではなく、完全に人間であると同時に完全に神であられた。その神性のゆえに、主が人間的な過ちや罪を犯すことはあり得なかったのである。

V. 執筆年代

わずか半世紀（およそ西暦50～100年）しかかからないで執筆された新約聖書とは異なり、旧約聖書は、少なくとも完成までに千年を要している（およそ紀元前1400～400年）。*⁽¹¹⁾ 最初に書かれた書巻群は、モーセ五書（紀元前1400年頃）か、またはヨブ記である（執筆の年代は不明であるが、その内容から、律法が付与される前の時代であることが推察される）。

それに続く他の諸書巻は、ヨシュア記からサムエル記までのように、〈捕囚以前〉（紀元前600年頃）に書かれたもの、哀歌やエゼキエル書のように、〈捕囚のさなかに〉書かれたもの、あるいは歴代誌、ハガイ書、ゼカリヤ書、マラキ書のように、〈捕囚後〉（紀元前400年頃）に書かれたものがある。

VI. 内容

旧約聖書の内容は、プロテスタント版の順序に従えば、以下のように簡略にまとめることができるであろう。

〈モーセ五書〉	創世記から申命記まで
〈歴史書〉* ⁽¹²⁾	ヨシュア記からエステル記まで
〈詩歌〉	ヨブ記から雅歌まで
〈預言書〉	イザヤ書からマラキ書まで

旧約聖書のこれら四つの主な区分に対する序論は、それぞれ本書の適切なところに記した。

これらの書巻のみならず、この後に示される新約聖書という一層豊かな啓示をよく理解するクリスチャンは、「すべての良い働きにふさわしく、十分に整えられた者」（※Ⅱテモテ3:17）となることであろう。

多くの信徒がまさにそうなるために、本書が大いに役立つよう祈ってやまない。

VII. 言語

1. ヘブル語

セム系の言語*⁽¹³⁾であるアラム語で書かれた少数の箇所を除けば、旧約聖書はもともヘブル語で書かれたものである。

信徒であるなら、ご自身のみことばの前半部分（※旧約聖書のこと）を運ぶ最も適した手段として、神が（ヘブル語を）用いられたことに驚きはしない。ヘブル語は、色彩、慣用表現に富み、旧約聖書を構成する、靈感を受けた物語、詩歌、また律法の表現によく適合する、表現力豊かな言語だからである。ヘブル語は古代言語のひとつであるが、ある国家の日常の言語として（ほとんど奇跡的に）現代*⁽¹⁴⁾によみがえ

った唯一の古代語である。その国家とはイスラエルに他ならない。

ヘブル語は、右から左へと書き、もともとは子音だけを記した。音読する場合は、読み手がヘブル語の知識をもとに、適切な母音を補った。ヘブル語の聖書本文が何世紀もの間、読み継がれることとなったのは天の配剤である。時代や国、地域⁽¹⁵⁾とともに変化するのは主に母音だからである。

時には、たとえば神の御名⁽¹⁶⁾のように、書かれたもの（ヘブル語で〈ケティーヴ〉と呼ばれる）が非常に神聖であるために発音できない、と考えられた場合があった。そこで、音読（ヘブル語で〈ケレー〉）してよいものはどれかを示す注が余白に書かれた。また、書写者の誤りや、何世紀にもわたって低俗と見なされるようになった語についても同様である。

キリスト教時代初期の数百年に、マソラ学者（ヘブル語の「伝統」という語にちなむ）と呼ばれるユダヤ人学者たちが登場した。ヘブル語が時代遅れの言語になりつつあるのを見、神聖なる旧約聖書本文の正しい読み方を保存したいと願った彼らは、手の込んだ音声記号を考案した。点と横線を22のヘブル語の子音の上段、および中段、そして、おもに下段に記して、広く認められた単語の発音の仕方を明示したのである。今日ですら、古代のこの〈母音符号〉は、英語、フランス語、またドイツ語の綴りと比べてさえも、科学的で正確である。

子音だけからなる聖書本文もまた、読み方に論争を巻き起こす原因となっている。一組の子音群は、場合によっては、異なった母音で読むことができるため、意味も異なることになるからである。大抵の場合は、文脈からどちらが本来の読み方か決定できるが、常にそうとは限らない。たとえば、歴代誌（その注解を参照のこと）の人名表

記が創世記と異なるのは、このような現象が一因である。

しかし全体としては、伝統的な聖書本文であるマソラ本文は、保存状態が格段に良好である。それは、ユダヤ人たちの神のこゝとばに対する畏敬の思いの深さを示す生きた証である。また古代訳（タルグム [旧約聖書のアラム語による部分訳]、七十人訳 [ギリシア語訳旧約聖書および外典]、ウルガタ聖書 [カトリック教会で用いるラテン語訳聖書]）の助けによって、問題の箇所

の異文から正しいものを選択できることが少なくない。20世紀半ば以降、死海写本は、ヘブル語本文に関して、主に本文の正確さを裏付ける新たな情報をもたらした。

旧約聖書を英訳で読む者にとって幸いなのは、ヘブル語が英訳に適していることである。たとえば、16世紀の宗教改革期の偉大な翻訳者であるウィリアム・ティンダル（William Tyndale）が指摘するように、ラテン語に訳すよりもはるかにうまくいくのである。

本書が聖書本文の基にしている翻訳は、ティンダルが訳し始めた旧約聖書の流れを直接に汲むものである。ティンダルは創世記から歴代誌まで、さらに詩歌、預言書の一部を何とか完成させたが、その努力は報われず、ついに異端審問によって火刑に処されたのであった（1536年）。ティンダルの旧約聖書翻訳は、他の人々の助けによって完成し、1611年に出版された欽定訳（King James Version）、さらに最近では1982年に出版された新欽定訳（New King James Version）で改訂を見た。

2. アラム語

アラム語はヘブル語と同様、セム語系の言語であるが、異邦人の言語であり、古代世界では何世紀にもわたって広く話されて

いた。ヘブル語がユダヤ人にとって死語となったため、旧約聖書はユダヤ人のためにアラム語で再解釈される必要が生じた。そのため、近い関係にあるが、異なる言語であるアラム語を導入するに至ったのである。通常ヘブル語のものとされる文字は、おそらく紀元前400年頃、アラム語から借用され、やがて今日ヘブル語を学ぶ人々が親しんでいる優雅な方形文字に発展していった、と考えられる。^{* (17)}

ヘブル語に関する上記の事実の大半は、旧約聖書のアラム語で書かれた部分にも当てはまる。そのような箇所はごく僅かで、バビロン捕囚のさなか、またその後の時期など、異邦人との接触に関連したものであることは言うまでもない。^{* (18)}

VIII. 翻訳

英語は多くの（むしろ多すぎるほどの）翻訳に恵まれている。しかし、新約聖書に比べると、旧約聖書の翻訳は圧倒的に少ない。これらの翻訳は、主に四つの類型に分けることができる。

1. 直訳

J・N・ダービー（J. N. Darby）による、1882年の新訳（新約聖書はこれよりずっと以前に完成）、1881年のEnglish Revised Version（英語改定訳）、そのアメリカ的分身である、1901年に出版されたAmerican Standard Version（米国標準訳）は非常に直訳的である。そのため、綿密な研究には重宝するが、礼拝や公の場での朗読、および暗唱には向いていない。大多数の会衆は、ティンダルから欽定訳へと続く、品格と美を備えた伝統的な翻訳を捨ててまで、上記の、重宝ではあるが、やや硬い翻訳を好んで使っていない。

2. 完全等価翻訳

直訳にかなり近く、しかも、できる限りヘブル語やギリシア語に忠実であることを目指しながら、文体の美しさや慣用句の点でやむを得ない場合には、ある程度自由な訳を取り入れた翻訳の中には、KJV（King James Version, 英語欽定訳）、RSV（Revised Standard Version）、NASB（New American Standard Bible）、およびNKJV（New King James Version, 新欽定訳）がある。残念なことに、RSVは、新約についてはおおそ信頼できる訳でありながら、多くのメシア預言を軽く扱う旧約聖書訳と関連性が深い。この危険な傾向は、今日、これまで健全であった学者たちの中にも見られる。本書（英語版の原書）は、美しい（が古めかしい）KJVと、現代的な表現の中間に位置するNKJVを、現実的な選択と考え、それに準拠した。

3. 動的等価翻訳

このタイプの翻訳は、完全等価翻訳より制約が少なく、時には意識に頼ることもあるが、読者がそれを承知している限りにおいては、有効な手法である。NEB（New English Bible）、NIV（New International Version）、Jerusalem Bibleは、みな、このジャンルに分類される。モーセやイザヤが、今日、しかも英語で書いたとしたら使ったであろう構成の中に、考えたことのすべてを盛り込もうとするのである。保守的な立場で行えば、この方法是有用な手段となり得る。危険なのは、この手法を使う翻訳者たちの多くが、神学的な厳密さを欠いていることである。

4. 意識

意識では、本文を、考えのまとまりごとに伝えようとする。しかし、自由自在に内

容を追加することが珍しくない。その表現が原文とかけ離れているため、解釈過剰になる危険が常に伴う。たとえばリビングバイブルは、福音主義的ではあるが、控え目に言っても議論の余地がある箇所において、解釈を決定づけている例が多い。

比較のためには、これらのジャンルの、少なくとも三つの中から聖書を一冊ずつ選ぶのがよい。しかし、本書に展開されているような、きめ細かな聖書の学びをするためには、直訳、もしくは完全等価翻訳が一番無難である。

IX. 靈感

(聖書をめぐる) 歴史的、専門的な意見が乱れ飛ぶ中で、かの偉大な英国の説教者、ス ポ ル ジ ョ ン (Charles Haddon Spurgeon) のことばを、じっくり考えてみるのは賢明である。

この書物 (聖書) は生ける神が (自ら) 書かれたものである。一文字一文字は全能の神の指で書かれ、その中の一語一語は、永遠なる方の唇から滴 (したた) り落ちた。そして一文一文は、聖霊が口述されたものである。モーセがその燃えるような筆致で歴史を書くのに起用されたにしても、その筆の動きを導かれたのは神である。豎琴を奏で、詩篇の美しい旋律が、ダビデの指からこぼれ落ちたとしても、黄金の豎琴の生きた弦をつまびく手を動かしたのは神である。愛の雅歌を歌い、珠玉の知恵のことばを説いたのはソロモンであっても、その唇を論し、雄弁な伝道者にしたのは神である。ナホムの馬が大水をかきわけて進む時の雷鳴の轟きも、ハバククが見るクシヤンの天幕の騒ぎも、また大地がかまどのように燃えるマラキ書のことばも、ことごとくみな

神の声であり、人の声ではない。そのことばは神のことば、永遠者にして、見えざる者、全能者にして、この地を司るヤハウエのことばなのである。* (19)

後 注

1. ユダヤ人の互助組である「ブナイ・ブリス」(B'nai B'rith [契約の子ら]) にもこの語が使われている。
2. アウグスティヌスのことば (ラテン語) は次のようにも訳されている。「新約は旧約の中に含まれ、旧約は新約の中で説明されている」。
3. ヘブル語聖書、あるいはその翻訳では、旧約聖書24巻の配列が以下になっている。
 - I. 律法 (トーラー) 5巻
創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記
 - II. 預言書 (ネビーイーム) 8巻
 1. 前預言書
ヨシュア記、士師記、サムエル記、列王記
 2. 後預言書
イザヤ書、エレミヤ書、エゼキエル書、12の書 (ホセア書からマラキ書まで)
 - III. 諸書 (ケトビーム) 11巻
詩篇、ヨブ記、箴言、ルツ記、雅歌、伝道者の書、哀歌、エステル記、ダニエル書、エズラ記・ネヘミヤ記、歴代誌
4. Merrill F. Unger, *Introductory Guide to the Old Testament*, p. 59.
5. 同上
6. しかし、たとえばロシア語の新約聖書は福音書の後の配列が異なっている。
7. これらのグループによって正典に加えられる

た書籍については、New Revised Standard Version with Apocryphaの序文を参照のこと。(これらのグループの間でも、すべての書物について意見が一致しているわけではない。)

8. このことばは「偽造」という概念と結び付けられるようになった。
9. 17世紀の欽定訳の初期版には、外典が含まれていたが、その地位が一段低いものであることを示すために、旧約聖書と新約聖書の間に挟まれていた。欽定訳が唯一の正統な聖書であるとする多くの人にとって、かつて欽定訳聖書には、神の靈感によらない書物が多数含まれていたことを知るの大きな驚きである。
10. 1545～1563年にイタリアのトレントで断続的に開催された、ローマ・カトリック教会の公会議において。
11. それほど保守的ではない学者は年代を後ろにずらしているが、期間の長さは結局似たようなものになっている。
12. モーセ五書も含めて「歴史書」とする研究者も少なくない。
13. セム語とはおもにセムの子孫によって話された言語群であり、今も話されている。ヘブル語のほか、アラビア語、フェニキア語、アッカド語などが含まれる。
14. 言語の専門家たちは、古代ヘブル語の語根に基づくフランス語、英語、そして新しい造語や構文を頼りに、この古代言語を20世紀に復活させるための貢献をした。
15. たとえば、英語圏の人は、pastという単語の発音が、オックスフォード、ボストン、ダラス、ブルックリンで異なることを意識している。子音は同じであるが、“a”の発音が都市によって全く違う。
16. たとえば、KJV/NKJVでは、LORD（すべて大文字、一般に読まれているヘブル語のAdōnaiを表す）と書かれているが、実際に

は、神の契約名Yahweh（英語の伝統ではJehovah）を綴る神聖な「テトラグラマトン」（4文字、YHWH）なのである。

17. Unger, Introductory, p. 124.
18. アラム語の部分はエズラ4:8～6:18、7:12～26、エレミヤ10:11、ダニエル2:4～7:28である。
19. チャールズ・ハドン・スボルジョンの説教集より（Spurgeon's Sermons, I:28）。「口述」ということばは、現代の秘書が言われたことをそのまま書きとる、という意味にとるべきではない。引用した他の部分から分かるように、靈感に関する正統的教え（著者は人間でもあり神でもある、という二重構造）をスボルジョンは信じていた。

モーセ五書への序論

「近代批評学は、大胆不敵にも、聖書のほとんどすべての書卷の権威を貶（おとし）め、それらを攻め立ててきた。とりわけ、ダニエルの預言を別にすれば、モーセ五書に対する無遠慮な姿勢は際立っている。…キリストを、人としてはもちろん神として受け入れたすべての者は、キリストが権威をもってこの問題に対し、あまねく、また深く、そして決定的に決着をつけてくださったという土台の上に、今こそ、しっかりと立つべきである。」

ウィリアム・ケリー (William Kelly)

「モーセ五書は、神のことば全体にとって、なくてはならない導入部分である。それは、この後に展開するものへの扉を開き、遠いけれども確実な完成へと、希望を持って私たちを導いてくれる。」

サミュエル・リッドアウト (Samuel Ridout)

モーセによる個々の書について注解する前に、モーセ五書全体に関するいくつかの事実を整理しておきたい。五書は、聖書の啓示の非常に基本的な部分だからである。

1. モーセ五書の書名

聖書の最初の五卷は、一般に「五書」(the Pentateuch, penta-は「5」の意)と呼ばれている。古代、書物は、「写本」(codex)という本の形ではなく、巻物の形で製本されていた。このような巻物は、ギリシア語で〈テウコイ〉(teuchoi) * ⁽¹⁾ と呼ばれ、鞘(さや)のような容器に収められていた。「五卷」をギリシア語にすると、penta-

teuchosとなり、ここからPentateuch(「五書」という語が派生した。

ユダヤ人は、五書を「トーラー」(ヘブル語で「律法」「教え」の意)と呼び、(旧約)聖書の最も重要な部分として扱っている。

この書卷群に対する、三番目に多い呼称は「モーセの書」である。ヨーロッパ北部の国々の聖書の中には、五書の著者がモーセであることを広く否定しておきながら、「創世記」「出エジプト記」と呼ばずに、「モーセの第一の書」「モーセの第二の書」と呼ぶものがあるのは、何とも皮肉なことである。

Numbers(「民数記」という名前がギ

リシア語の〈アリスモイ〉(Arithmoi)、またラテン語の〈ヌメリ〉(Numeri)をそのまま英語化したものであることを除けば、この五巻(英語版聖書の場合)はギリシア語の七十人訳(Septuagint)の書名をそのまま留め、綴りと発音を英語式にしている(それぞれの意味については、個々の書巻の項を参照のこと)。

ユダヤ人は、ヘブル語本文の最初の数語を、そのまま書名として使うことが多い。したがって、創世記は〈ベレシート〉(「初めに」)と呼ばれる。

II. モーセ五書の内容

英語の〈law〉(律法)は、ヘブル語の〈トーラー〉よりも限定的な意味で使われるため、この五巻からなる書物の重要性を表現するには、「モーセ五書」という呼び方が、キリスト教的な用法として最も適切である。

A. 創世記

Genesis(創世記)とは、実に適切な名前である。ギリシア語で〈始まり〉を意味するからである。聖書の最初の書は、宇宙、地球、人間、結婚、罪、真の宗教、民族、多様な言語、そして選ばれた民の起源をたどっている。最初の11章は、人類史の大まかな流れを語っているが、12章から50章までは、アブラハム、イサク、ヤコブとその息子たちの一族に話を絞っている。

B. 出エジプト記

Exodus(出エジプト記)は、ギリシア語で〈脱出〉を意味し、400年の間に、アブラハムの一族がエジプトで、ファラオの強制労働の下で、一つの民族として成長し、モーセの下に贖い出された様子が描かれている。モーセの律法と幕屋の詳細な描写が、

この書の残りの部分を構成している。

C. レビ記

レビ記はレビ人のための手引書であり、それが名前の由来となっている。その時代の罪深い人間が、聖なる神と交わるために必要な儀式が記されている。レビ記には、キリストの犠牲を描くものや予型も含まれている。

D. 民数記

民数記は、その名の通り、民の数を数えること、つまり国勢調査のことが巻頭と巻末に書かれている。(しかし)ヘブル語の表題「荒野にて」(ベミドバル)の方が、表現力に富んでいる。民数記は、イスラエル人が荒野をさまよっていた間に経験した歴史的な出来事を語っているからである。

E. 申命記

Deuteronomy(申命記)は、ギリシア語で〈第二の律法〉を意味しているが、新しい世代に対する、単なる律法の再述にとどまらない。後に続く歴史書への橋渡しでもある。モーセの死とその後継者ヨシュアへの世代交代が記されているからである。

グリフィス・トマス(W. H. Griffith Thomas)は、いつものように明晰かつ簡潔な文体で、モーセ五書の内容を次のように要約している。

モーセ五書は、神を起源とする宗教がこの世に導入されたことを記録している。それぞれの書は神の御計画の一つの局面を示し、それらがひとつになって、真の一体性を構成している。創世記は、宗教の起源と、その仲介者として神に選ばれ

た人々について述べる。出エジプト記は、その人々が一つの民族に整えられ、神との関係が確立した過程を記録している。レビ記は、この関係が維持されるためのさまざまな方法を示す。民数記は、天との宗教による生活を約束の地で開始するために、民がどのように整えられていったかを示している。また、民の失敗と、その結果としての遅延、そして再編成について述べる。最後に、申命記は、約束の地の境にまで来た民が、その地に入るのを目前にしてどのように整えられていったかを示す。^{*} ⁽²⁾

III. モーセ五書的重要性

旧約聖書全体どころか聖書全体が、この最初の五巻の書物を土台としているのであるから、啓示された宗教にとってモーセ五書がどれほど重要であるかは改めて言うまでもない。もし合理主義を信奉する、信仰を持たない学者によって、これらの書物の信憑性や信頼性に対する信仰が損なわれるとすれば、ユダヤ教の起源は限りなく疑わしいものになってしまう。クリスチャンであれば、そのような攻撃が自分に影響をおよぼすことはない、と高を括(くく)つてはならない。新約聖書も、私たちの主も、モーセの書を真実で信頼できるものとして引用しているからである。

メルル・アンガー博士 (Merrill F. Unger) はこの問題について、極めて率直に述べている。

すべての啓示された真理と、神の贖いの計画は、モーセ五書に基づいている。

もし、この土台が信頼できないものであるなら、聖書全体も信頼できないことになる。^{*} ⁽³⁾

IV. モーセ五書の著者問題

初期のキリスト教時代に、トラー (モーセ五書) の著者をエズラとした人々^{*} ⁽⁴⁾を除けば、ユダヤ・キリスト教の正統派においては、何世紀にもわたってモーセを著者とする見解が広く支持され、現在もそれは変わらない。

A. 著者はモーセか

資料仮説はおおむね、モーセが著者であることを否定するが、それを手短かに検証する前に、モーセが著者であることを示す明確な根拠に目を留めてみよう。

1. モーセの有資格性

19世紀のドイツの批評家ハルトマン (Anton Hartmann) は、モーセが作者であることは、文字通り不可能であると言って否定した。その根拠は、文字がまだ発明されていなかった、というのである (当時は、そのような考え方が一般的であった!)。考古学は、モーセが初期のヘブル語の文字体系、エジプトの象形文字、アッカド語の楔形 (くさびがた) 文字で書くことに何の問題もなかったことを示している。もちろん、使徒7:22は、考古学によって確認されるはるか以前に、モーセが「エジプト人のあらゆる学問を教え込まれ」ていたことを信徒に教えていた。モーセがその五書を「書いた」というのは、それ以前にあった資料を創世記で用いた、という意味を含むと同時に、靈感を受けた編集者によって更新された可能性もある。というのも、

ヘブル語の書体は何世紀も経るうちに変化してきたからである。もちろん、モーセが五書を書いた可能性があるとというのが事実であっても、それはモーセが実際に書いたという証明にはならない。しかし、ユダヤ教信仰の生みの親であるモーセが、後世のために神の啓示を永久に記録しようとしたことは必然的なことであった。だからこそ、神はモーセにそうお命じになったのである。

2. モーセ五書の主張

トラー（モーセ五書）の本文には、ところどころに、神のご命令のもと、確かにモーセが書いた、と具体的に述べているところがある。出エジプト記17:14、24:4、34:27、民数記33:2、申命記31:19がその例である。

3. その後の聖書の主張

神のことばは、モーセ五書以外の部分でも、モーセが著者であることを認めている。ヨシュア記1:7、1列王記2:3、新約聖書ではルカ24:44と1コリント9:9がその例である。

4. キリストの証言

クリスチャンにとっては、私たちの主ご自身が、著者はモーセであるとお認めになったという事実が、この問題に決着をつけるはずである。イエスが人間であったゆえに、科学や歴史に無知であったとか、本当はよく知っていたながら、同胞の無知や偏見に合わせた、という考えは、信仰者の検討に値しない。

5. 考古学とモーセ五書

モーセのものにしては時代が新しすぎる、と自由主義の批評家がかつて主張していた多くの習慣、ことば、名前、歴史的、文化

的詳細が、今ではモーセよりも何世紀も古い時代のものであることが判明している。だからといって、モーセが著者であることの「証明」となるわけではないが、数世紀後の「編集者」たちがこれらの詳細（当時は大半が失われていた）をことごとく知っていて、それを見事に継ぎ合わせた、という説よりも、はるかに伝統的見解に合致する。

B. 資料仮説

1753年に、フランス人医師ジャン・アストリュク（Jean Astruc）は、モーセが二つの文書をもとに創世記を編集した、という仮説を提唱した。神の名として〈ヤハウェ〉（Jehovah）を使用している箇所と、〈エロヒーム〉（Elohim）を使用している箇所は出典が異なる、と書いたのである。これらの推定上の出典を、アストリュクは、それぞれ「J」および「E」と名づけた。

その後、自由主義的な学者たちはこの仮説をさらに発展させ、最終的には、出典のすべてを、モーセよりはるか後代のものとした。他に提案された資料には「D」（Deuteronomic/申命記資料）と「P」（Priestly/祭司資料）がある。モーセ五書は、紀元前9～6世紀の間に、複数の出典をもとに構築された、つぎはぎだらけの資料とみなされたのである。この仮説は「JEDP学説」として一般に知られるようになった。

19世紀の学者にとって、この仮説はいくつかの点で魅力的であった。まず、ダーウィンの進化論によく合致していた。当時、進化論は生物学にとどまらず、多くの分野にも適用されていた。次に、当時の反超自然主義的な精神は、聖書を人間的なレベルに落とすことに喜びを見出していた。第三に、神の啓示を人間の努力に置き換えるヒューマニズム的な風潮が、この仮説と軌を

一にしていたのである。

1878年、ユリウス・ヴェルハウゼン (Julius Wellhausen) は、巧妙でいかにももっともらしく見える欺瞞 (ぎまん) 的な方法でこの資料仮説を普及させた。

この短い序論の中では、その仮説への反論⁽⁵⁾として、いくつかの点に言及ができるだけである。

この仮説の重大な問題点は以下の通りである。

1. 写本の証拠がない

「JEDP仮説」に提起されたような編集があったという証拠は、写本に全く存在しない。

2. 相反、矛盾する主観的な断片化

学者たちはモーセ五書を、全く異なる断片に分割しているが、それは極端な個人的見解と、仮説を裏付ける具体的で客観的証拠の欠如を露呈している。

3. 考古学

考古学は、モーセ五書の記述、慣習、宗教的知識などがかなり古代のものであり、ヴェルハウゼンの仮説が提唱するような、はるか後代のものではないことを支持する傾向にある。

4. 言語学

モーセ五書の中で「後代」のものと想定されている言語形式や個人名は、モーセの時代よりもはるか以前の資料の中で発見されている。近年発掘された「エブラ粘土板」はその一例で、そこには、モーセ五書に見られる名前が数多く含まれている。

5. モーセ五書の統一性

編集的観点からすると、モーセ五書には

緊密な一体性があり、これらの書物を「はさみと糊で切り張りしてできたもの」とする進化論的考え方と一致させるにはかなりの無理がある。

6. 霊的破産

最後に、霊的な観点から見ると、この資料仮説は、たとえ考古学やその他の類似した仮説によって修正を加えたとしても、これらの書物に宝蔵されている、偉大で美しい真理とは似ても似つかぬものである。もしそれらの仮説が本当であるとするなら、モーセ五書は、(アンガー博士の表現を借りれば)「信憑性に欠け、歴史を歪曲したものであり、信頼するに足りない捏造 (ねつぞう) 品にすぎず、神の手によるものではない」ことになる。⁽⁶⁾

V. モーセ五書の執筆年代

モーセ五書の内容は天地創造までさかのぼるが、実際に書かれたのは、もちろん、それから数千年後のことである。執筆された年代は、だれが書いたのか、ということによって決まるのはごく当たり前のことである。

自由主義的な学者たちは、モーセ五書が出来上がるまでの理論化の段階を、大きく次のような年代に定める。いわゆる「J文書」は紀元前850年頃、「E文書」は紀元前750年頃、「D文書」は紀元前621年頃⁽⁷⁾、そして「P文書」は紀元前500年頃である、と。

保守的な学者たちは、モーセ五書の年代を出エジプトの頃、すなわち紀元前15世紀とするのが一般的である。中には、(出エジプトを)それから150年後とする学者もいる。

すべての聖書資料に最も適合する年代は、

おそらく紀元前1450～1410年の間のどこかであろう。詳しくは、本書の各巻の項を参照されたい。

VI. 結論

モーセ五書の序論の最後に、カナダを代表する旧約聖書学者のことばを紹介する。

「モーセ五書は五巻から成る均質な書物であり、別々の、偶然に関連した作品の集合体ではない。そこには、事実であると認定された歴史を背景に、神がどのようにして、ご自身を人間に現し、イスラエル民族を特別な任務につかせ、世界において、また人類の歴史の中で証しをさせるために選ばれたかが記されている。この文学的集大成を形成する上でモーセが果たした役割は際立っている。したがって、イスラエル民族が発展していく壮大な歴史物語の中で、大きな栄誉がモーセに帰され、古代の律法の偉大な仲介者として、ユダヤ人からもクリスチャンからも敬愛されるのは、十分な理由があったことである。」* (8)

後 注

1. 「テウコス」(単数形)ということばは、もともと道具や器具を意味し、さらに文字を書くための巻き物という意味もあった。
2. W. H. Griffith Thomas, *The Pentateuch*, p. 25.
3. Merrill F. Unger, *Unger's Bible Handbook*, p. 35.
4. ユダヤ人の哲学者スピノザ (Spinoza) もエズラを著者としている。
5. キリスト教的なアプローチはハリソン (R. K. Harrison) の *Introduction to the Old Testament* (Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Publishing Co., 1966) に見ることができる。ユダヤ系アメリカ人の小説家ハーマン・ウォーク (Hermann Wouk) はこの学説を *This Is My God* (Garden City, NY: Doubleday & Co., 1959) で暴いている。
6. Unger, *Handbook*, p. 35.
7. 多くの自由主義者が、このような具体的な年を事実であるかのように仮定するのは、ヨシヤ王が都エルサレムに礼拝の中心を置こうとして、現在、申命記と呼ばれている書物を都合よく「発見した」(捏造(ねつぞう)した)、という間違った考えに基づいている。
8. Harrison, *Introduction*, p. 541.

創世記

序 論

「聖書の第一巻は、いくつかの理由で、聖書の中でも、とりわけ興味深く、魅力的な部分の一つである。正典における位置、聖書の他の部分との関係、および、その内容の多様性と印象的な特徴がいまって、聖書の中でも、ひときわ目立つものの一つとなっている。それゆえに、あらゆる時代の神の民がこの書物に目を留め、真剣に注意を払ってきたのは、真の靈的洞察力があったからなのである。」

W・H・グリフィス・トマス (W. H. Griffith Thomas)

I. 正典における独自性

創世記（ギリシア語名は「始まり」）は、適切にもユダヤ人からは〈ベレシート〉（ヘブル語で「始めに」）という名前がつけられている。この興味深い一書には、その場におられた唯一の御方、すなわち創造者（！）による、唯一の、真実な天地創造の説明がある。

聖霊は神のしもべモーセを通して、男、女、結婚、家庭、罪、いけにえ、都市、交易、農業、音楽、礼拝、そして世界の言語、民族と国家の始まりを辿（たど）り、そのすべてが、最初の11章に書かれている。

そして12～50章にかけては、神の「試験管」の民、イスラエルが、世界のあらゆる民族の靈的縮図となる始まりが描かれている。族長アブラハム、イサク、ヤコブ、

そしてその12人の息子たち、とりわけ敬虔なヨセフは、幼児から一流の旧約聖書学者に至るまで、数えきれないほど多くの人々に感化を与えてきた。

創世記を正しく理解することは、聖書の残り65巻を理解するために不可欠である。それらすべては、創世記という美しく均整のとれた文学的土台の上に成り立っているからである。

II. 著者問題

筆者は、イスラエルの律法を定めた神の人モーセによって創世記が書かれ、編集されたという、古代ユダヤ教、キリスト教の教えを受け入れるものである。創世記に書かれているすべての出来事はモーセ以前のものであることから、モーセが古代の資料

や、おそらくは口承による記録を聖霊の導きによって用いたことは確実と言ってよい。モーセが著者であるかどうかの考察については、「モーセ五書への序論」を参照のこと。

III. 執筆年代

最も保守的な学者たちは、概して出エジプトを紀元前1445年頃と考えている。したがって、創世記が書かれたのは、おそらくこの時から40年後のモーセの死までの間のことであろう。もちろん、モーセ五書のひとつであるこの書が、出エジプト以前に書かれた、という可能性は常にある。創世記の中の出来事のすべては、その（出エジプトという）大きな出来事よりも前に起きているからである。

詳しくは「モーセ五書への序論」を参照のこと。

IV. 背景と主題

聖書やユダヤ教、あるいはキリスト教に対して極端な偏見を持つ人を除けば、創世記が遙か昔の魅力的な記録であり、ヨセフ物語のように驚くほど美しい物語が含まれていることは、ほとんどだれもが認めるところである。

しかし、それはともかく、聖書のこの最初の書物が書かれた背景は何なのだろうか。要するに、創世記とは何なのだろう。

人格神の存在を否定する人たちは、創世記を〈神話〉を集積したものとして分類する傾向がある。メソポタミアの異教徒の〈神話〉をアレンジし、多神教の悪い要素を洗い流し、一神教のヘブル人の精神を高揚させようとしたものだ、というのである。

それほど懐疑的ではない人々の中には、創世記を、〈年代記〉や〈伝説〉の選集と

みなし、幾分かの歴史的価値をその中に見出す人もいる。

さらに、（創世記の）物語群を、自然界や文化の事物の起源の説明として捉える人もいる（専門的には「原因論」と呼ばれる）。確かに、旧約聖書の中には、原因について言及している箇所が幾つかある（罪の起源、虹の起源、ヘブル民族の起源、など）。しかし、だからといって（創世記で）説明されているさまざまなことが、歴史的事実でないとは言えない。

創世記は〈歴史〉である。すべての歴史がそうであるように、そこには解釈も含まれている。それは神学的な歴史なのである。あるいは、神のご計画という枠組みの中で語られる一連の事実と言ってもよい。”History is His story.”（「歴史とは神の物語である」）とは、よく言ったものである。

創世記は「律法」の最初の書を成すものであるが、法的な内容はほとんど含まれてはいない。それが「律法」（〈トーラー〉（「教示」を意味するヘブル語））と言われるのは、出エジプト記から申命記までの土台、およびモーセを通して神が律法を与える土台となっているためである。（創世記は）聖書の歴史すべて、もっと言えば歴史そのものの基礎となっているのである。

祝福と呪い、という一対（いっつい）の〈主題〉は、創世記という織物、そして実に、神のことばの全体に、入念に編み込まれている。従順は祝福をもたらし、不従順はその正反対のものをもたらす。

〈呪い〉の最たるものは、（人類の）墮落による刑罰、全世界的規模の大洪水、そしてバベルでの言語の混乱である。

〈祝福〉の最たるものは、贖い主が来られるという約束、大洪水を生き延びた残りの者たち、神の恵みの経路となるべく選ばれた特別な民族イスラエルである。

もし、創世記が事実に基づいた歴史であるとするなら、モーセは一体どうやって古代の系図やさまざまな会話や出来事、そしてそれらの正しい解釈のすべてを知り得たのだろうか。

最初に言うておかなければならないのは、多くの分野、とりわけ族長たちやその（時代の）慣習についての創世記の記録が、考古学によって裏づけられている（「証明されている」というのではなく、確認され例証されている）という点である。

19世紀の自由主義的神学者の中には、ハルトマン（Anton Hartmann）*⁽¹⁾のように、モーセがその五書を書いたはずはない、と教える者がいた。まだ文字が発明されていなかったから、というのである。しかし、現在では、古代の文字のどれを使っても書くことがモーセに可能だったことが分かっている。なにしろ、モーセはエジプトのすべての学問に通じていたのである。

モーセは、ヨセフの残したさまざまな記録のみか、アブラハムとその子孫が古代メソポタミアから持ち込んだ書字板、羊皮紙、口頭での翻訳を使ったに違いない。その中には「アダムの世界」を始めとする系図や（創世記の）主要な部分が含まれていたはずである。

（しかし）結局のところ、上記の説明では不十分である。モーセは神の聖霊による靈感を受けて、適切な内容を正確に選び、その他のものを排除したのである。さまざまな会話やその他の細部は、おそらく直接の啓示によって補足したのであろう。

最終的に、これは〈信仰〉の問題に帰結する。神は、このような書物を、ご自身のしもべを通して作ることができるか、できないかのどちらかである。太古の時代から現在に至るまで、どの時代においても、信仰者は、神に偽りはない、ということに心

からの同意を表明している。

考古学は、族長時代の文化を復元し、聖書の記述をいっそう鮮明にするのに役立つかもしれないが、*⁽²⁾ 創世記の真実性を、信徒の心と日々の歩みに解き明かしてくれるのは、聖霊をおいて他にない。

本書で、創世記あるいは旧約聖書の他の書物を読むにあたって、〈聖なることばそのもの〉を照らしてくださる聖霊の光に頼らなければ、その解説から真の益を受けることはできない。真の注解とは、それ自体が独立した手段なのではなく、「主はこう仰せられる」というところを指し示す矢印なのである。

構 成

I. 世界の最古の時代（1～11章）

- A. 創造（1～2章）
- B. 誘惑と堕落（3章）
- C. カインとアベル（4章）
- D. セツとその子孫（5章）
- E. 罪の蔓延と世界的な洪水（6～8章）
- F. 洪水後のノア（9章）
- G. 諸国家の一覧（10章）
- H. バベルの塔（11章）

II. イスラエルの族長たち（12～50章）

- A. アブラハム（12:1～25:18）
 - 1. アブラハムの召し（12:1～9）
 - 2. エジプトへ行き、また戻る（12:10～13:4）
 - 3. ロトとメルキゼデクをめぐる経験（13:5～14:24）
 - 4. アブラハムに約束された世継ぎ（15章）
 - 5. 肉の子、イシュマエル（16、

- 17章)
- 6.ソドムとゴモラ (18、19章)
- 7.アブラハムとアビメレク (20章)
- 8.約束の子、イサク (21章)
- 9.イサクを献げる (22章)
- 10.家族の埋葬地 (23章)
- 11.イサクの花嫁 (24章)
- 12.アブラハムの子孫 (25:1～18)
- B. イサク (25:19～26:35)
 - 1.イサクの家族 (25:19～34)
 - 2.イサクとアビメレク (26章)
- C. ヤコブ (27:1～36:43)
 - 1.ヤコブ、エサウをだます (27章)
 - 2.ヤコブのハランへの逃避行 (28章)
 - 3.ヤコブとその妻たち、そして彼の子どもたち (29:1～30:24)
 - 4.ヤコブ、ラバンを出し抜く (30:25～43)
 - 5.ヤコブのカナンへ帰還 (31章)
 - 6.ヤコブとエサウの和解 (32、33章)
 - 7.シェケムでの罪 (34章)
 - 8.ベテルへの帰還 (35章)
 - 9.ヤコブの兄、エサウの子孫 (36章)
- D. ヨセフ (37:1～50:26)
 - 1.ヨセフ、奴隷として売られる (37章)
 - 2.ユダとタマル (38章)
 - 3.ヨセフの試練と勝利 (39章)
 - 4.ヨセフ、献酌官と料理官の夢を解き明かす (40章)

- 5.ヨセフ、ファラオの夢を解き明かす (41章)
- 6.エジプトに来たヨセフの兄弟たち (42～44章)
- 7.ヨセフ、兄弟たちに素性を明かす (45章)
- 8.ヨセフと家族との再会 (46章)
- 9.エジプトでのヨセフの家族 (47章)
- 10.ヨセフの息子たちを祝福するヤコブ (48章)
- 11.息子たちに関するヤコブの預言 (49章)
- 12.ヤコブ、次いでヨセフ、エジプトで死す (50章)

注 解

I. 世界の最古の時代 (1～11章)

A. 創造 (1～2章)

1:1 「はじめに神が…」。

聖書の冒頭にあるこの数語が、信仰の土台を形成する。このことばを信じるなら、聖書の他の部分もすべて信じることができるからである。創世記は、あらゆる時代の人々に深い意味のある(天地)創造に関する唯一の権威ある記録であり、その意味を完全に理解することはだれにもできない。この天与の記録は、神の存在を証明しようとするものではなく、むしろ、神の存在を前提にしている。聖書は、神を否定することを選択した人々に特別の名前をつけている。その名は「愚か者」である(詩篇14:1、53:1)。聖書が神から始まるように、私たちの人生においても神が第一であるべきである。

1:2 創世記の天地創造に関する保守的

な解釈の中に、創造再構築説がある。1節と2節との間に、大変動（おそらく、サタンの墮落。エゼキエル書28:11～19参照）が起こったとするものである。^{* (3)} そのため、神の本来の完璧な創造のわざは無に帰した（ヘブル語で「トーフー・ワヴォーフー」）。神は地を茫漠とした、むなしいものに〈創造〉されたのではない（イザヤ45:18参照）ので、2節の混沌とした状態は、途方もない大変動でしか説明できない。この説の主唱者は、ここで、**何もなく**、と訳されている語（ヘブル語で「ハー・イェター」）は、「存在しなくなった」と訳することが可能である、と指摘する。^{* (4)} その場合は、「地は荒廃し、むなしくなった」となる。

神の霊がその水の面を動いていたのは、その後続く偉大な創造と再建の準備のためであった。残りの節では、地を人間が住めるようにするための六日間に及ぶ創造と再建が描かれている。

1:3～5 第一日目、神は光が闇の中から輝き出よ、と命じられ、ここに昼と夜のサイクルが確立された。この御わざと、四日目に太陽・月・星々が造られたことを混同してはならない。Ⅱコリント4:6で、使徒パウロは、光と闇が最初に分離されたことを、罪人の回心（の経験）になぞらえている。

1:6～8 第二日以前、地は分厚い水の層に完全に覆われていたようである。それは濃い水蒸気の状態であったかもしれない。第二日に、神はこの層を分割された。地表を水で覆う部分と、雲を形成する部分に分け、その中間に、大気の層（大空、あるいは「丸天井」）を設けられた。神は大空を天と名づけられた——つまり、地に接する広大な空間である（星空や、神が住まわれる第三の天ではない）。20節から明らかな

ように、ここでいう天とは、鳥が飛ぶ領域のことである。

1:9～13 次に神は、乾いた所が、地表を覆っていた水の中から現れるようにされた。このようにして、**地と海**が誕生した。第三日に、神はまた、地からあらゆる種類の植物や木々が大地から芽生えるようにされた。

1:14～19 第四日に主は、光を運ぶ者として、また暦を定める手段として、太陽、月、星を天の大空に置かれた。

1:20～23 第五日には、水は魚で満たされ、大地は鳥類と昆虫で満たされた。鳥と訳されている語は「(空を) 飛ぶもの」という意味で、コウモリも含まれる。おそらく飛ぶ昆虫も含まれるであろう。

1:24～25 第六日に、神は、まず動物と爬虫類を創造された。生殖の法則は、**種類ごと**にという語句の中に繰り返して示されている。生物の「種類」の中には相当の違いがあるが、ある種類から別の種類に移ることはない。

1:26～28 神の御わざのクライマックスは、**人をご自身のかたちとして創造されたこと**である。これは、人間が神の代理として地上に置かれ、ある面では神に似ていることを意味する。神が三位一体（父、子、聖霊）であられるように、人間も三つの部分から成る存在である（霊、たましい、体）。神と同じように、人間も知性、道徳心、他者と意思疎通する能力、本能を超越した感性がある。ここには、外見の類似性という考えはない。動物とは対照的に、人間は礼拝者であり、明確な意思疎通の能力があり、新しいものを創造することができるのである。

26節では三位一体が推測されるだけでなく、暗黙のうちに示唆されている。神（「エロヒーム」複数形）は**仰せられた**（ヘ

ブル語で単数を示す動詞形)。「さあ、人をわれわれのかたちとして、われわれの似姿に造ろう」。

聖書は性別の起源を神の創造の御わざとして描いている。進化論は今もなお、性差がどのようにして生じたかを全く説明できないままである。人間は、生めよ、増えよと命じられている。

神は人間に、自然界を**従えよ**、そしてそれを**支配せよ**との命令を与えた。それを利用すると同時に、濫用してはならない、という命令である。今日、地球環境が危機にさらされているのは、人間の貪欲、身勝手さ、そして不注意が原因である。

1:29, 30 この数節から明らかなように、動物はもともと草食であり、人間は菜食であった。これが変わったのは大洪水の後のことである (9:1~7参照)。

創造の六日間は、文字通り24時間の一日を基本としていたのだろうか。それとも、地質年代のことなのだろうか。あるいは、天地創造の次第がモーセに〈啓示〉されたのは、〈ドラマ化された幻〉の六日間だったのだろうか。この六日間は、文字通りの太陽日 (たいようじつ) であった、という考え方を否定する科学的証拠は今も何一つ見つかってはいない。「夕があり、朝があった」という表現は24時間の一日を指し示している。他の箇所はどこを見ても、旧約聖書では、この語が意味しているのは、普通の一日のことである。アダムは (創造の) 七日目を過ぎ、(その後) 930年目に死んだ。したがって、七日目が地質年代であったはずがない。旧約聖書の中で、「日」という語が数詞とともに使われている箇所 (「第一日」のように) では、どこでも、文字通りの一日を意味している。神が、安息日に休むことを命じられたのは、ご自身が六日間働いたのち、七日目に休まれた、という

事実がもとになっている (出エジプト記 20:8~11)。ここで、一貫した解釈をするためには、「日」という語が同じ意味でなければならない。

しかし問題は、今日の太陽日 (たいようじつ) が始まったのは、第四日以降であったかもしれない、ということである (14~19節)。

聖書に限って言えば、天地創造の日付は書かれていない。人間の創造にも日付はない。しかし、系図は (聖書に) 記されている。仮に、その系図に欠落があったとしても、進化論者が必要とする何百万年もの間、人類が地上にいた、という計算にはどうやってもならない。ヨハネ1:1, 14、コロサイ1:16、およびヘブル1:2から分かるのは、主イエスが創造の御わざに積極的に関与されたことである。その驚異的で果てしない創造の御わざのゆえに、イエスは永遠に礼拝されるにふさわしい御方なのである。

1:31 創造の六日間を終えて、神はご自分が造ったすべてのものを見られた。見よ、それは非常に良かった。

2:1~3 神は第七日にすべての創造のわざを休まれた。これは疲労の後の休息のことではなく、よい仕事を終えた後の満足と充足の休息のことである。この時、神は人間に、安息日を守るように命じてはおられないが、七日のうちの一日を休みに充てる、という原則を教えておられる。

2:4~6 神である主 (ヤハウェ・エロヒーム) という名称が初出するのは4節であるが、それは人間が創造されてからのことである (1:27)。エロヒームとは創造者としての神を表す。ヤハウェとは人間との契約関係にある神を表す。これを見落としたために、一部の聖書学者は、神に対して異なった名称が使われているのは、著者が異なると説明するしかない、と結論づけたのである。

これは…経緯である（4節）とは、1章に描かれたもろもろの始まりのことを指している。5節の、「**地にはまだ、野の灌木もなく、野の草も生えていなかった**」というのは、1:10の乾いた地は現れたものの、植物が現れる前の地上の状況の描写である。大地は、**雨**というよりは、霧（※NKJV、新欽定訳）によって潤されていた。

2:7 次に人の創造についての詳細な説明がある。神は、**大地のちり**をもとに人のからだを**形造**られたが、神の息が吹き込まれたときに初めて人は**生きるもの**となった。アダム（「赤」または「地」の意）という名がつけられたのは、アダムが赤い土から造られたことに由来している。

2:8~14 神がエデンに設けられた園は、東の方角、すなわち聖書による方角の基準点であるパレスチナの東にあった。それはメソポタミア地方のティグリスとユーフラテスという（二つの）川の近くに位置していた。善悪の知識の木は、人間の従順を試す試金石であった。その実を取って食べることが間違っている理由は一つしかない。神がそう仰せられたからである。この果実は、形を変えて、今日も私たちのそばにある。

2:15~23 その戒めに背いた場合の罰は死であった（17節）。即時の霊的な死と、徐々に進行する肉体の死であった。

アダムは、動物や鳥に名前をつける過程で、オスとメスがいることに気がついたことであろう。各々には、自分と似ていながら、しかも異なった連れ合いがいたのである。これは、アダムが自分にふさわしい助け手を迎えるための準備となった。花嫁はアダムが眠っている間に、アダム自身のあばら骨の一つから形造られた。同様に、キリストの脇腹から、キリストの花嫁は、無事に取り出された。それは、キリストが言

語に絶する苦悶を味わい、いのちの血潮を流されたからである。女はアダムの頭から取られなかった。アダムを支配することのないためである。またアダムの足から取られることもなかった。踏みつけられることのないためである。（女は）腕の下から取られた。保護されるためである。また心臓の近くから取られた。愛されるためである。

神が男に代表的な立場を与えられたのは、罪が入る前のことであった。パウロはこの点を、創造の順序（「男が先に造られた」）、そして創造の目的（「女が男のために造られた」）（1コリント11:8,9）から論証している。それだけでなく、最初に罪を犯したのはエバであったにもかかわらず、罪がこの世に入ってきたのは、代表的な立場にいたアダムによるものである、と書かれている。アダムが代表の立場にいたからこそ、責任を負わなければならなかったのである。

19節の意味は、時制を大過去^{*(5)}とすると、一層明瞭になる。主は…あらゆる野の獣…をすでに**形造**って、とあるのは、人間が創造される以前のことである。

2:24 24節のことばによれば、神は一夫一婦制の結婚を制定された。神が制定されたものはすべてそうであるように、それは人間に益をもたらすために設けられたのであって、安易に違反することはできない。結婚の絆はキリストと教会との関係を例示している（エペソ5:22~32）。

2:25 アダムとエバはエデンの園で全く衣服をまとうことなく暮らしていたが、**恥ずかしいとは思わなかった**。

B. 誘惑と墮落（3章）

3:1~6 エバの前に現れた蛇は、後にサタン自身であることが明らかにされる（黙示録12:9参照）。聖書を「非神話化」しようとする人々は、人間のこの墮落の記

述は寓話的なもので、文字通りにとるべきではない、と考えている。口を利く蛇がその証拠である、と言うのである。蛇がエバを欺いたという話を、事実として受け入れることができるのだろうか。使徒パウロは、できる、と考えた（Ⅱコリント11:3）。使徒ヨハネもそうである（黙示録12:9, 20:2）。しかも、動物が口を利く、という例は、聖書中ここだけではない。神は、（預言者）バラムの狂気の沙汰を思いとどまらせるために、ろばに（人間のような）声を与えられた（民数記22章）。そして使徒ペテロは、これを文字通り起きた出来事として受け入れている（Ⅱペテロ2:16）。これら三人の使徒は、聖霊に導かれてそのように書いたのである。したがって、人間の墮落の記述が字義通りであることを否定することは、聖書が神の靈感を受けていることを否定するに等しい。聖書にも寓話はあるが、これはその一つではない。

人類を罪に陥れた段階に注目しよう。第一に、サタンは遠回しに、神のことばに疑念を持たせようとした。「神は本当に言われたのですか」。サタンは、神がアダムとエバに、園の木のどれからも食べることを禁じているように誤解させた。次に、エバは「園の中央にある木の実については、それを食べてはならない。それに触れてもいけない」と言っている。しかし、神は、触れる、という点については何も言っておられない。すると、サタンは、神に真っ向から反対し、背いた者に下るさばきの必然性をいとも簡単に否定した。サタンに従う者たちが、今日も、地獄や永遠の刑罰という事実を否定するのと同じである。サタンは、あたかもアダムとエバに有益となるはずのものを神が差し控えておられるという、誤った印象を与えた。エバは三つの誘惑に屈した。すなわち肉の欲（「食べるのに良

く」）、目の欲（「目に慕わしく」）、暮らし向きの自慢（「賢くするというその木」）である。そうすることによって、エバは、自分のかしらであるアダムから独立した行動をとった。エバはアダムの権威を奪うのではなく、アダムに相談すべきであった。「女はその実を取って食べ（た）」ということばの中に、それ以来人類を悩ませ続けてきた、あらゆる病気、悲しみ、苦しみ、恐れ、罪悪感、そして死のすべてが説明されている。ある人が言ったように、「地上の荒廃と無数の墓は、神が真実であり、サタンが偽り者であったことを証明している」のである。エバは騙されたが（Ⅰテモテ2:14）、アダムは故意に神に反逆したのである。

世俗的ヒューマニズムは、「あなたがたは神のようになる」というサタンの偽りを今も言い続けている。

3:7～13 罪の最初の結果は、恥と恐れであった。いちじくの葉で腰の覆いを作った、というのは血を流すことなしに、善行によって自分を救おうとする人間の試みを表している。神が説明を求めると、罪人は言い訳をする。アダムは、「私のそばにるようにとあなたが与えてくださったこの女が」と、あたかも神を非難するような言い方をした（箴言19:3参照）。エバはエバで「蛇が…」と言った（13節）。

神は愛とあわれみをもって、墮落してしまった被造物（人間）を探し、「あなたはどこにいるのか」と問いかけられた。この問いは二つのことを示している。人が迷い出たこと、しかし神は人を探し求めに来られたことである。それは人間の罪と神の恵みを証しするものである。^{* (6)} 神は、サタンがエバに疑わせたもの、すなわちご自分の愛を示し、救いの主導権を握っておられるのである。

3:14 神である主は、蛇を呪い、降格、

不名誉、敗北を宣告された。蛇が、どんな家畜よりも、どんな野の生き物よりもろわれている、というのは、サタンよりむしろ爬虫類が念頭に置かれていることを暗示している。

3:15 しかし、15節では、悪魔自身に焦点が移っている。この節は、〈原福音〉、すなわち「最初の福音」として知られている節である。それは、サタンと女（全人類の象徴）の間に、またサタンの子孫（サタンの手下）と女の子孫（メシア）との間に、敵意が果てしく続くことを予告しているのである。女の子孫は悪魔の頭を砕き、致命傷を与える、というのは、悪魔が完全に敗北することを意味している。その傷が悪魔に加えられたのは、カルバリで、救い主が決定的勝利を得られた時のことである。その代わり、サタンはメシアのかかとを打つ。かかととはここで、苦難、または肉体の死をも意味しているが、究極的な敗北という意味ではない。ゆえに、キリストは十字架上で苦しみ、死までも経験されたが、死者の中からよみがえり、罪と地獄、そしてサタンに対して勝利されたのである。「女の」子孫と呼ばれているのは、（キリストの）処女降誕を暗示しているのかもしれない。以下に続く諸節で、さばきを言い渡す前にメシアを約束された神のご慈愛を見落としてはならない。

3:16~19 罪に伴う結果は避けられない。女は、出産という苦しみで宣告された。また夫に服従することになった。男は、呪いの結果、茨とあざみが生える大地から生活の糧を得るように言い渡された。それは労苦と汗が伴うことを意味する。そして、いのちが尽きると、自ら土のちりに帰るようになされた。ここで付け加えておくと、労働そのものが呪いではない。むしろ労働は祝福であることが多い。労働に伴う悲しみ、

労苦、挫折、汗、そして疲労が呪いなのである。

3:20, 21 アダムは妻の名をエバと呼ぶことで信仰を示した。エバは生きるものすべての母ではあったが、この時点では、一人の赤子も生まれていなかったからである。それから神は、皮の衣を用意された。そのためには一匹の動物が死ななければならなかった。これは、有罪となった罪人に与えられる義の衣を表し、〈神の子羊〉が流した血により、信仰を通して私たちに与えられるものである。

3:22~24 エバが神のようになれる、と言ったサタンの嘘（5節）には、一抹の真理が含まれていた。しかし、エバもアダムも、辛い経験を経て善悪を知ることになったのであった。もし二人が、あの時のちの木から取って食べていたなら、病気、老化、衰弱の道をたどる肉体を持ったまま永遠に生きることになっていたであろう。したがって、エデンに戻ることができないようにされたのは、神のあわれみであった。ケルビムは「墮落した人間が思い上がって高慢になったとき、神の聖さを立証する」*⁽⁷⁾、天界の生き物である。

アダムとエバは、嘘をついているのが神なのか、それともサタンなのかを判断しなければならなかった。二人は、神である、と結論づけた。「信仰がなければ、神に喜ばれることはできません」とある。したがって、二人の名前はヘブル書11章の信仰者たちの「成績優秀者名簿」にはないのである。

エデンの園の環境は理想的であったとしても、罪の侵入を阻止することはできなかった。好適な環境があっても、人間が抱える問題の解決にはならないのである。

C. カインとアベル (4章)

4:1 人は、その妻エバを知った、というのは、彼女と性的関係を持った、という意味である。カインが生まれると、エバはこの出産がひとえに主の力によるものであることを認めた。カイン（「獲得」の意）と名づけたエバは、〈約束の子孫〉を産んだ、と思ったかもしれない。

4:2~6 しばらく時間が過ぎて、という3節のことは、世界の人口がかなり増えるだけの時間が経過したことを思わせる。その間に、カインとアベルは、罪ある人間が聖なる神に近づくためには、身代わりのいけにえの血が流されなければならないことを教えられる機会があったはずである。カインは、この啓示を受け入れず、果物や野菜など、血を伴わないささげ物を持って来た。アベルは、神の命令を信じ、動物を屠（ほふ）って献げた。そうすることによって、彼は自分の信仰を示し、神によって義と認められたのである（ヘブル11:4）。アベルは自分の羊の初子の中から、肥えたものを持って来た。つまり、彼は主が最良のものを受けるのにふさわしいことを実際に表現していたのである。アベルのささげ物は、〈神の子羊〉が身代わりに死に、世の罪を取り除いてくださることを指し示していた。

4:7 妬みに駆られたカインの怒りは殺人につながりかねないため、神は、愛情を込めて警告された。7節には幾通りかの解釈がある。

1. 「もしあなたが良いことをしているのなら（つまり悔い改めるなら）、あなたは怒りと罪責感から解放されて、再び顔を上げることができる。しかし、もし良いことをしていないのであれば（つまりアベルを憎み続けるなら）、戸口で罪が待ち伏せて、

あなたを今にも破滅させるだろう。彼（アベル）はあなたを恋い慕う（アベルはあなたをリーダーとして認めるだろう）。そして、あなたは彼を治めなければならない（もし、あなたが善処するなら）。

2. 「もしあなたが良いことをしているのなら（つまり、七十人訳のように「あなたのささげ方が正しいなら」）あなたが受け入れられないわけがあるのか」。ここで、良いことをする、とはささげ物に関係しており、アベルが良いことをした、というのは、神に受け入れられるささげ物の背後に身を隠すことができた、という意味になる。カインが過ちを犯したのは、血を伴わないささげ物を持って来たからである。そして、カインのその後の行動は、このまやかしの礼拝の必然的な結果に過ぎなかったのである。^{*(8)}

3. RSV（改訂標準訳）は「もしあなたが正しく行っているなら、受け入れられないことがあろうか。しかし、もし正しく行わないなら、罪は戸口であなたを待ち伏せている。罪はあなたを恋い慕っている。しかし、あなたはそれを治めなければならない」と訳す。

4. F・W・グラント（F. W. Grant）は、「もしあなたが正しく行っているなら、罪のきよめのささげ物が戸口で伏せている、または待機している」、^{*(9)} 言い換えれば、もしカインが望みさえするなら、その備えはできている、という意味であるとする。

4:8~12 妬みで激怒したカインの邪悪な態度が、邪悪な行動に変わるのに時間

はかからなかった。カインは弟を殺害してしまうのである。アベルは死んだが、今なお、信仰による人生が生きるに値する人生であることを私たちに証ししてくれている（ヘブル11:4）。主が愛情を込めて尋ねた質問に対して、彼が悔い改めず、傲慢な答えをしたため、カインにさばきが宣告された。——もはや、大地から生活の糧を得ることができず、さすらい人として、地上をさまようことになる、と。

4:13~16 カインが泣きながら訴えたのは、自分の罪の罪責感よりもその結果に対する後悔の念からであった。しかし、それでも主はカインを保護する一つのしるしを与え、カインを殺す者に呪いをかけ、逃亡者が命を失うかもしれない、という恐れを和らげてくださった。カインは主の前から出て行ったが、これほど悲しい旅立ちはどこにもない。

4:17~24 カインは自分の姉妹、または血のつながった親族と婚姻関係を結んだ。すでに触れたように、創世記4:3は人口が増えるための時間の経過があったことを暗示している上、創世記5:4は、アダムが息子、娘たちを生んだと明確に述べている。当時、近親結婚は禁じられていなかった（また、遺伝的なリスクもなかった）のである。

17~24節には、カインの子孫と、最初の出来事が列挙されている。エノクと名づけられた最初の町、最初の一夫多妻制、最初の組織的な畜産、最初の音楽や金属工芸、そして最初の暴力と流血をテーマにした歌などが含まれている。この歌の中で、レメクは妻たちに正当防衛で一人の若者を殺したが、それはカインが弟を殺したような計画的なものではなかったのも、レメクは報復を免れることはない、と説明している。

4:25, 26 ここで一転して、安堵すべ

きことに、神を畏れ敬うセツの家系が紹介される。この家系からやがてはメシアが誕生するのである。エノシュ（「脆い」または「死すべき者」の意）が生まれたとき、人々は主（ヤハウェ）の名を用い始めた。あるいは、公の礼拝においてヤハウェという名を唱え始めた、というべきかもしれない。

D. セツとその子孫（5章）

5章は「弔いの鐘が鳴る章」と呼ばれてきた。それは、「こうして彼は死んだ」という表現が幾度となく繰り返されているからである。そこに記録されているのは、アダムからノアの息子セムまでのメシアの血統である（ルカ3:36~38参照）。

5:1~17 アダムは神の似姿として造られた。セツはアダムの似姿として生まれた。この二つの出来事の間に、〈人類の墮落〉が起り、人の中にあつた神の似姿は罪によって損なわれたのである。5節は、2:17で神がこれから起こると予告されたことが、实际的な意味で現実となった記録である。霊的な意味で現実となったのは、アダムが罪を犯したその日のことである。

5:18~24 ここで言及されているエノクとレメクを、4章に登場するエノクとレメクと混同してはならない。18節のエノクは、アダムから数えて七代目（ユダ14）であり、三代目ではない。信仰によって、エノクは三百年間神とともに歩み、主に喜ばれた（ヘブル11:5）。息子の誕生は、彼の人生をきよめ、高貴なものにするきっかけになったようである（22節）。スタートが良いのは幸いであるが、最後まで堅実に継続するのはそれにまさる。歩んだ、という語は、たまたま知り合ったということではなく、着実に成長を伴う関係を示唆している。神とともに歩む、ということは、

一生の仕事であり、一時間だけのパフォーマンスではない。患難時代が始まる前にやがて教会が携挙されるように（1テサロニケ4:13～18、黙示録3:10）、エノクは洪水の前に天に移された。

5:25～32 メトシェラは、だれよりも長く生きた（その全生涯は九百六十九年であった）。もし、ウイリアムズ（George Williams）が言うように、メトシェラという名前が「それが送り込まれる」という意味であるとするなら、*⁽¹⁰⁾ 予言であるとも言える。洪水はメトシェラが死んだ年にやって来たからである。レメクが息子をノアと名づけたのは、ノアの偉大な子孫、主イエス・キリストを通してやがて世界にもたらされる慰めを予見していたためかもしれない。ノアという名前は「休息」という意味である。年月が経つにつれ、人間の平均寿命は短くなっている。詩篇90:10では、70歳が標準であると書かれている。

E. 罪の蔓延（まんえん）と世界的な洪水（6～8章）

6:1, 2 2節に関しては、主に二つの解釈がある。一つは、神の子らとは、自分たちがいるべき領域を放棄して（ユダ6）、地上の女性たちと異種結婚、つまり、神が最も厭（いと）われるような性的乱交をした御使いたちであるというものである。このような見方をする人は、ヨブ1:6と2:1の「神の子ら」ということばが、神に謁見できる御使いを指していると指摘する。それだけでなく、「神の子ら」が御使いを意味するのは、セム語族の標準的な表現でもある。ユダの手紙6, 7節は、自分のいるべき所を放棄した御使いたちが、下劣な性行為をして罪を犯したことを暗示している。7節では、「ソドムやゴモラ」という語句が最初に出て来るが（※英訳）、墮落した御使い

たちについて説明した直後である点を見落としてはならない。

この見解に対する主な反論は、私たちの知るかぎり、御使いは生殖活動を行わないというものである。マタイ22:30は、イエスが御使いは結婚しないと教えたことの根拠として用いられる。しかし、その聖句が実際に言っているのは、天においては御使いが娶（めと）ったり嫁（とつ）いだりすることはない、ということである。御使いたちは人間の姿をとってアブラハムに現れた（創世記18:1～5）。そして聖書の本文によれば、ソドムに行った二人には、人間のような側面や感情があったようである。

もう一つは、神の子らとは、神を畏れるセツの子孫であり、人の娘たちとは、カインの邪悪な子孫である、という見解である。その主張は次のようなものである。前の文脈で、カインの子孫（4章）と、セツの子孫（5章）が取り扱われている。（したがって）創世記6:1～4は、これら二つの系統の間の婚姻が描かれている。この文脈では御使いという語は出て来ない。3, 5節は、人間の邪悪さについて述べている。もし、罪を犯したのが御使いたちであったなら、なぜ人間が滅ぼされなければならないのだろうか。創世記6:2のヘブル語の言い方と厳密に同じではないにしても、神を畏れ敬う人々は神の子らと呼ばれている（申命記14:1、詩篇82:6、ホセア1:10、マタイ5:9参照）。

この見解には、いくつかの問題がある。なぜ、セツの家系の男たちはみな敬虔であるのに、カインの家系の女たちはそろいもそろって不敬虔であるのか。また、セツの家系が敬虔なままであったことを示すものは何もない。もし彼らが敬虔なままであったなら、なぜ彼らまで滅ぼされなければならないのか。また、敬虔な男たちと不敬虔

な女たちの結合から、なぜ巨人が生まれるのだろうか。

6:3 「わたしの霊は、人のうちに永久にとどまることはない」と主は警告された。しかし、さばきの大洪水が起こるまでに、百二十年の猶予が与えられた。神は忍耐強く、一人でも滅びることを望んでおられないとはいえ、限度がある。ペテロによれば、ノアを通して洪水以前の人々に、聖霊によって宣教していたのはキリストであった（Ⅰペテロ3:18～20、Ⅱペテロ2:5）。彼らはその使信を拒んだ。その結果、彼らは今、幽閉されているのである。

6:4, 5 ネフィリム（ヘブル語で「堕ちた者」の意）について、メルル・アンガー（Merril F. Unger）は次のように説明している。

ネフィリムとは、巨大な半神半人であり、自然の理に反して「人の娘たち」（死を免れない女性）が「神の子ら」（御使い）と一緒に暮らした結果生まれた子孫である、と多くの人々が考えている。この全く不自然な結合は、神の創造した秩序を破るものであり、大洪水という世界的なさばきを必要とするほどの衝撃的な異常事態であった。^{*(11)}

6:6, 7 主が心を痛められた、というのは、勝手な心変わりを示しているわけではない。人間の立場からするとそのように思えるかもしれないが、そうではない。むしろ、人間の行動の変化に対する神の態度の変化を示しているのである。神は聖なる御方なので、罪に立ち向かわないわけにはいかない。

6:8～22 ノアは主の心になつていたので、箱舟を造るように、事前に警告を

受けた。その寸法はキュビトで示された。したがって、箱舟は、（1キュビトを約46センチと仮定）全長137メートル、幅29メートル、そして高さ18メートルの三層構造であったことが分かる。16節の天窓とは、直訳すれば「光の場所」であり、おそらく光と空気を取り入れる開口部のことで、箱舟の全長にわたって設けられている。

ノアは恵みによって、すなわち神の主権的行為によって救われた。ノアは、すべて神が命じられたとおりにし、そのように行った（22節）が、それは、人間の責任に基づく行為であった。ノアは家族を救うために箱舟を造ったが、その扉を閉め封印したのは神である。（このように）神の主権と人間の責任は相容れないものではなく、互いに補い合うものなのである。

ノア（9節）とエノク（5:22）以外に、聖書には神とともに歩んだと言われている人物は一人もいない。エノクが、天に携挙される教会を象徴しているとすれば、ノアは、患難時代に、（神によって）守られ、生き残るユダヤ人信徒を象徴している。

18節では、聖書で初めて契約について言及されている。スコフィールド（C. I. Scofield）は、8種類の契約を列挙している。エデン契約（創世記2:16）、アダム契約（創世記3:15）、ノア契約（創世記9:16）、アブラハム契約（創世記12:2）、モーセ契約（出エジプト記19:5）、パレスチナ契約（申命記30:3）、ダビデ契約（Ⅱサムエル7:16）、そして新しい契約（ヘブル8:8）である。この八つにソロモン契約を加えたものを、次の補説で扱うこととする。言うまでもなく、契約のような込み入った主題は、神学の学派によって解釈が異なる。ここに紹介するのは、前千年王国説と伝統的ディスペンセーション主義に基づくものである。

聖書の主要な契約

エデン契約（創世記1:28～30、2:16, 17）

エデン契約によって、まだ罪を知らない人間に、増え、地を人で満たし、地を従える、という責任が与えられた。（また）すべての生き物を支配する権威が与えられた。人間は園を耕し、善悪の知識の木の実以外は、園が生み出すもののすべてを食べてよいことになっていた。その命令に従わない場合は、死がもたらされることになった。

アダム契約（創世記3:14～19）

人が墮落した後、神は蛇を呪い、蛇と女、サタンとキリストは敵対関係になる、と予告された。サタンはキリストに傷を与えるが、キリストはサタンを滅ぼされる。女は出産で苦痛を経験し、夫の権威の下に置かれる。大地は呪われる。人間は、大地を耕すとき、茨（いばら）やあざみと戦わなければならないようになった。その労働には汗と疲労が伴い、最後には自分が生まれた塵に帰る。

ノア契約（創世記8:20～9:27）

神はノアに、二度と地を呪わず、洪水で全地を滅ぼさないと約束された。その証しとして、神は虹をお与えになった。しかしこの契約には、死刑の権限を持つ人間の政府の樹立も含まれている。神は時間帯と季節の規則性を保証し、地が再び人で満ちるように命じ、再び被造物を支配する権限をお与えになった。人間は、それまでの菜食に肉を加えることができるようになった。ノアの子孫について言えば、神は、ハムの息子カナンを呪い、セムとヤベテのしもべとされた。神はセムに特権的な地位をお与

えになったが、その中にメシアにつながる血統が含まれていることが分かる。ヤベテは大きな発展を遂げ、セムの天幕に住むことになる。

アブラハム契約（創世記12:1～3、13:14～17、15:1～21、17:1～8）

アブラハム契約は無条件の契約である。創世記15:12～21には、「煙の立つかまどと、燃えているたいまつ」としてご自身を現された神だけが、二つに切り裂かれたいけにえの動物の間を通られた、と書かれている。このことは極めて重要である。二者が契約を「結ぶ」（ヘブル語では「切る」）際には、契約の条件を守るという意思表示として、両者は一緒に、二つに切り裂かれたものの間を歩いた。（ところが）神はアブラハムに対して何の条件も課されなかった。そのため、アブラハムの子孫がいかに忠実であろうとなかろうと、次のような規定が与えられた（あるいは与えられている）のである。

神の古代の民（イスラエル）に未来はない、と考える人々は、この契約を、少なくとも土地に関しては条件付きであるかのように見せかけようとする。そして、すべての祝福は教会に属し、イスラエルにはほとんど何も残らない、と主張する。

この契約には、アブラハムとその子孫に対する次のような約束が含まれている。偉大な国民（イスラエル）、アブラハムへの個人的祝福、名声、他の人々の祝福の源（12:2）、アブラハムの友には神の恵み、敵には呪い、すべての国民への祝福（キリストを通して成就。12:3）、カナン、後にイスラエル、またパレスチナとして知られる土地の永遠の所有（13:14, 15, 17）、多くの自然的、および霊的子孫（13:16、15:5）、イシュマエルとイサクを通して、

多くの国や王の父となること (17:4,6)、神との特別な関係 (17:7) (がその内容である)。

モーセ契約 (出エジプト記19:5、20:1～31:18)

モーセ契約は、最も広い意味では、神と隣人への義務を記した十戒 (出エジプト記20:1～26)、イスラエルの社会生活に関する多くの規定 (出エジプト記21:1～24:11)、宗教生活に関する詳細な規定 (出エジプト記24:12～31:18) を含んでいる。この契約は異邦人ではなく、イスラエル民族に与えられたものである。これは、条件付きの契約であり、人間の側の服従を求めるものであった。そのため、「肉によって弱くなった」(ローマ8:3) のである。十戒は決して救いを与える意図をもって制定されたのではなく、むしろ、罪や失敗を自覚させるためのものであった。十戒のうちの九戒は、(安息日に関するものを除き) 新約聖書でも繰り返されているが、罰を伴う律法としてではなく、恵みによって救われた者にふさわしい行動として書かれている。クリスチャンは律法ではなく恵みのもとに置かれ、愛という、より高い動機によってキリストと結ばれているのである。

パレスチナ契約 (申命記30:1～9)

この契約は、まだ未来に残されている土地の所有に関する契約である。神はアブラハムに、「エジプトの川 (ナイル川ではなく、エジプトの小川) から、あの大河ユーフラテス川まで」(創世記15:18) と約束された。イスラエルはそこまでの土地を完全に領有したことは一度もない。ソロモンの時代、東方の国々は貢物を納めた (Ⅰ列王記4:21,24) が、それをもって、保有した、または占有した、ということとはできない。

パレスチナ契約は、イスラエルが不従順のために諸国に散らされ、主に立ち返ること、主の再臨、再びその地に集められること、その地で繁栄すること、心が変えられて主を愛し従うようになること、そして彼らの敵が罰せられることを予見している。

ダビデ契約 (Ⅱサムエル7:5～16)

神はダビデに、その王国が永遠に続くだけではなく、直系の子孫が常に王位に就くと約束された。これは無条件の契約であり、ダビデの従順や義に少しも依存しない契約であった。キリストが、ソロモンを通してダビデの王位を継ぐ正統な継承者であることは、ヨセフの系図から明らかである (マタイ1章)。

キリストが、ナタンを通してダビデの直系の子孫であることは、マリアの系図から明らかである (ルカ3章)。キリストは永遠に生きておられるので、その王国は永遠である。地上における、キリストの千年王国は、やがて永遠の王国へと統合される。

ソロモン契約 (Ⅱサムエル7:12～15、Ⅰ列王記9:4,5、Ⅱ歴代誌7:11～22)

ソロモンとの契約は、永遠の王国に関する限りは無条件であったものの、ソロモンの子孫が王座に就くことに関しては条件付きであった (Ⅰ列王記9:4,5、Ⅱ歴代誌7:17,18)。ソロモンの子孫の一人、エコンヤは、直系の子孫がダビデの王座に就くことは許されなかった (エレミヤ22:30)。すでに述べたように、イエスはソロモンの(直系の) 子孫ではない。もしそうであったら、エコンヤの呪いを受けることになったはずである。

新しい契約（エレミヤ31:31～34、ヘブル8:7～12、ルカ22:20）

新しい契約が、イスラエルの家とユダの家に対して結ばれることは明らかである（エレミヤ31:31）。エレミヤがそう書いた時点では、まだ未来のことであった。それは、イスラエルが破ったモーセ契約のような条件付きの契約ではなかった（エレミヤ31:32）。その中で、神は以下のことを無条件で約束しておられる（“I will”の繰り返しに注目）。イスラエルの再生（エゼキエル36:26）、聖霊の内住（エゼキエル36:27）、神の御心を進んで行おうとする心（エレミヤ31:33）、神と神の民との独自の関係（エレミヤ31:33）、イスラエルで主が広く知られること（エレミヤ31:34）、罪が赦され、忘れ去られること（エレミヤ31:34）、そして国が永遠に続くこと（エレミヤ31:35～40）である。

国としてのイスラエルは、この新しい契約の恩恵をまだ受けてはいないが、主の再臨の時に受けることになる。それまでは、真の信者ならだれでもその契約の祝福の一部にあずかることができる。教会がこの新しい契約に関与していることは、主の晩餐を見れば明らかである。すなわち杯は、契約を批准した血を象徴している（ルカ22:20、I コリント11:25）。また、パウロは、自分と他の使徒たちを、新しい契約に仕える者と言っている（II コリント3:6）。

箱舟には、食料だけでなく、あらゆる生き物が、一つがいつつ入れられなければならなかった。批評家は、すべての種類の動物、および1年と17日分の食料を積めるほど箱舟は大きくはなかった、と主張する。しかし、箱舟の中に入ったのは、動物や鳥類の原種のみで、多くの変種が生まれたの

はその後のことであった、と思われる。そうであるなら、箱舟の大きさは申し分なかった。

7:1 「入りなさい」 (come) という語が（聖書で）初めて出て来るのは第1節である。恵みある福音の招きである。「安全なこの箱舟に入りなさい」。

7:2～18 なぜノアは、きよい動物の中から、七つがいつつ箱舟に入れ、きよくない動物は一つがいつつしか入れないように命じられたのか、その理由は明らかにされていない。おそらく、それは食用のためであり、きよい動物がいけにえとして必要になると見越してのことであったと思われる（8:20参照）。箱舟は、七日の間に、そこに住むものたちが満ちたが、やがて雨が降り始め、地下に蓄えられていた水が噴き出した。この激流は四十日四十夜続いた。四十とは、聖書で、試練や試みを意味する数である。

7:19～24 一部の人が主張するように、これは、局所的な洪水だったのだろうか。以下のことを考えてみよう。「天の下にある高い山々もすべておおわれた」（19節）。局所的な洪水から逃れるためであったなら、フットボール場の1.5面分と、鉄道車両800両分の箱舟を建造するように、神がノアに命じる必要はなかった。8人と動物たちを別な場所に移動させれば事は簡単に済んだのである。世界的な洪水があった、という言い伝えは、世界各地に残っている。アララテの山々は標高5,100メートルにも及ぶ。洪水はそれよりさらに十五キュビト高かったのである（19, 20節）。どのような奇跡が起きて、これだけの水を局所に閉じ込めることができた、というのだろうか。創世記9:15で神は、大水が再びすべての肉なるものを滅ぼすことはない、と約束された。それ以来、数多くの局所的な洪水が

あったが、世界的な洪水は一度もない。もし、(ノアの)洪水が局所的なものであったなら、神の約束は破られたことになる。それはありえない結論である。ペテロは、かつて世界が水によって滅ぼされたことを、将来、地球が火で滅ぼされることを象徴する出来事として用いている(Ⅱペテロ3:6)。

箱舟はキリストを象徴し、大水は神の審判を描いている。主イエスは、カルバリで神の怒り、という大水の中に呑み込まれた。キリストの内にいる人は救われている。外にいる者は滅びを免れない(Ⅰペテロ3:20)。

8:1~19 洪水の時系列は次の通りである。

1. 7日間 : ノアが箱舟に入った時から洪水が始まるまで(7:10)。
2. 40日40夜 : 雨が降り続いた期間(7:12)。
3. 150日間 : 雨の降り始めから、水が引き始め(8:3)、箱舟がアララテの山地にとどまるまで(7:11と8:4を比較)。
4. 224日間 : 洪水が始まってから、山々の頂が現れるまで(7:11と8:5を比較)。
5. 40日間 : 山々の頂が現れてから、ノアが鳥を放つまで(8:7)。
6. 7日間 : 鳥を放った時から、初めて鳩を放つ時まで(8:6~10、10節の「それからさらに七日待つて」)。
7. さらに7日間 : 鳩が、二度目に放たれるまで(8:10)。
8. なお7日間 : 鳩が最後に放たれるまで(8:12)。
9. 314日間 : 洪水の始まりから、ノアが箱舟の覆いを取り払うまで(7:11と8:13を比較)。
10. 371日間 : 洪水の始めから、地が

すっかり乾ききるまで(7:11と8:14を比較)。この時に、ノアは箱舟から出よ、と命じられる(16節)。

きよくない鳥(7節)と、きよい鳩(8節)は、信仰者の古い性質と新しい性質を表す好例である。古い性質は、ごみや腐肉をあさるのを好むが、新しい性質は、死とさばきの場に満足を見出せない。「復活」という「地面」に足を置くまで、安息を得ることができないのである。

8:20~22 ノアは祭壇を築き、神の救いの恵みに応えた。来るべき御怒りから救い出された私たちも同様に、心からの礼拝を神に献げるべきである。それは、ノアの時代と同じく、今日でも受け入れられ、喜ばれることである。「わたしは、再び、わたしがしたように、生き物すべてを打ち滅ぼすことは決してしない」という契約を主は結ばれた。それだけでなく、この地が続くかぎり、季節が規則的に巡ってくるようにされた。

6章5節、および、ここ21節で、神は人の心が極めて邪悪であると言われる。前者ではいけにえがなかったために、さばきが行われた。ここにはいけにえがある。それゆえに、神はあわれみをもって行動されるのである。

F. 洪水後のノア(9章)

9:1~7 3節によると、大洪水の後、人々は初めて肉を食べることが許されたようである。しかし、血を食べることは禁じられた。それは血が肉のいのちであり、いのちは神のものであるからである。

死刑制度は、政府の権限の確立を前提としている。だれかが、そしてだれもが殺人の復讐をすれば、混乱は収まらない。それができるのは、正当に任命された政府だけ

である。新約聖書は、政府に関し、「彼は無意味に剣を帯びてはいない」(ローマ13:4)と述べ、死刑制度を永続させるべきものとしている。

9:8~17 虹は、「大洪水が再び起こって地を滅ぼすようなことはない」という神の約束のしるしとして立てられた。

9:18~23 ノアは、神から与えられた恵みにも関わらず、ぶどう酒を飲んで酔い、自分の天幕の中で裸になる、という罪を犯した。ハムは父を見て、その出来事を二人の兄弟に告げたが、彼らは父の裸を見ないで、その恥をおおった。

9:24, 25 酔いからさめると、ノアはカナンに呪いを宣告した。ここで「なぜハムではなくカナンに呪いがかけられたのか」という疑問が生じる。一つの説明として可能なのは、すでにハムのうちに悪を好む傾向が現れていたが、それがカナンにはもっと顕著であったということである。したがって、この呪いは、カナンの不道德な行動と、それにふさわしい罰を預言したものであった。もう一つの説明は、カナン自身が祖父に対して、何らかの卑猥な行為を行い、ノアが後になって、末の息子が自分にしたことを知った、というものである。24節で、末の息子、と言われているのは、ハム、という弟息子の意味ではなく、ノアの最年少の孫、ということかもしれない。聖書の中で「息子」は、「孫」などの子孫を意味する場合が多い。ここでカナンがのろわれた原因は、父親の罪のせいではなく、自分の罪のせいである。しかし、もう一つの可能性としては、神の恵みのゆえに、呪いは人類の三分の一にではなく、ハムの子孫のごく一部にしかかからなかった、ということである。

9:26~29 カナンは、セムとヤフェテのしもべとなるという呪いを受けた。カナ

ン人がイスラエルの民に使役されるようになった様子は、ヨシュア記9:23、および士師記1:28に見ることができる。この箇所は、黒人の奴隷化を連想させるものとして使われてきたが、そのような見方を裏付ける根拠は何一つない。カナンは、イスラエルがやって来るまで聖地に住んでいたカナン人の先祖であった。そのカナン人が黒人であったという証拠は皆無である。セムとヤフェテは支配権を持つ者として祝福された。27節は、ヤフェテがセムの子孫であるイスラエル人を通して、霊的祝福を受けることを暗示しているのかもしれない。

ノアの長子がセムであったのか、それともヤフェテであったかは、意見が分かれるところである。10:21には、「セムは…ヤフェテの兄であった」と書かれている。また創世記5:32およびI歴代誌1:4の系図では、セムが最初に登場している。

G. 諸国家の一覧 (10章)

10:1~32 セム、ハム、ヤフェテは諸国の父祖となった。

セム：セム系の諸民族 — ユダヤ人、アラブ人、バビロニア人、アッシリア人、アラム人、フェニキア人。

ハム：ハム系の諸民族 — エチオピア人、エジプト人、カナン人、ペリシテ人。場合によってはアフリカおよび東洋の人々(ただし、東洋人をヤフェテ系とみなす学者も多い)。

ヤフェテ：ヤフェテ系の諸民族 — メディア人、ギリシア人、キプロス人等。おそらくヨーロッパおよび北アジアの白人もそうであろう。多くの学者は東洋人をこのグループに含めている。

この章では、ヤフェテの子ら (2~5節)、

ハムの子ら (6～20節)、そしてセムの子ら (21～31節) という順序になっている。神の御霊は、この時点からセムとその子孫が旧約聖書の中心になるように意図している。5節の言語ごとの記述は、バベルの塔 (11:1～9) 以降の時代を先取りしてのことであろう。

この章では、人類の分割について、三つの言及があることに注意しよう。5節では、ヤフェテの諸族が異なる地域に分けられたこと、25節では、ペレグの時代に (バベルで) 地が分けられたこと、32節は、11章にあるバベルの塔への導入部となっており、ノアの子孫の諸氏族から、異なる言語を持つもろもろの国民が分かれ出たことが

記されている。

ニムロデ (8～10節) (という名前) は〈反逆者〉を意味する。ニムロデは、洪水後、**地上で最初の勇士** (8節)、また、**王国を築いた最初の人物** (10節) として登場する。ニムロデは神に反逆して**バベル** (バビロン)、また**アッシュルのニネベ** (11節) も建設する。ニネベもまた神の民の宿敵となる。

すでに述べたように、21節には、**ヤフェテの兄**として、**セム**の名が挙げられている。

これらの多様な民族がどこに定住したかを特定することは不可能である。しかし、これから学ぶにあたって、以下のことは参考になるであろう。

タルシシュ (4節)	——	スペイン
キティム (4節)	——	キプロス
クシュ (6節)	——	エチオピア
エラム (22節)	——	ペルシア
ミツライム (6節)	——	エジプト
プテ (6節)	——	リビア
カナン (6節)	——	パレスチナ
アッシュル (11節)	——	アッシリア
アラム (22節)	——	シリアとメソポタミア

H. バベルの塔 (11章)

11:1～4 時系列的には11章の後に位置する10章において、人類は言語によって分けられた (10:5, 20, 31)。ようやくここでその分離の原因に行き着く。神が意図されたように、全地に分散しなかった人類はシンアル (バビロン) に、**町と塔を建設した**。彼らは言った。「さあ、われわれは自分たちのために、**町と、頂が天に届く塔を建てて、名をあげよう。われわれが地の全面に散らされるといけないから**」。つま

り、それは高慢 (自分たちの**名をあげる**) と、反逆 (**散らされないように**) の政策だったのである。私たちににとってこの塔は、墮落した人間が、無代価の恵みの賜物としての救いを受けるのではなく、自らの行いによって天に到達しようとする、絶え間ない努力を描くものと言えるかもしれない。バベルの塔は、バビロニア人が主神マルドゥクを礼拝する場所として建造したジグラットに類似したものであったかもしれない。

11:5～9 主は彼らのことばを混乱さ

せて、人々をさばかれた。今日、世界に数多くの異なった言語があるのは、これが始まりである。五旬節（ペンテコステ）（使徒2:1～11）は、だれもが自国語で神のすばらしい御わざを聞いた、という意味でバベルの正反対である。「バベル」とは〈混乱〉を意味する。それは神を除外した一致、あるいは神によらない一致の必然的な結果である。

11:10～25 以下に続く諸節は、セムからアブラムに至る系譜をたどる。このようにして、歴史の記録は、人類全体からその中の一つの系統（セム族）へ、そして一人の人物（アブラム）へと絞られ、アブラムはヘブル民族の父祖となる。旧約聖書はこれ以降、ほとんどがこの民族の歴史である。

11:26～32 アブラムは、信仰の勇者であり、歴史上、最も重要な人物の一人である。アブラハムはユダヤ教、キリスト教、そしてイスラム教という、三つの世界的宗教で尊敬されている。旧約聖書では16巻、新約聖書では11巻がアブラハムに言及している。アブラムという名前は「高貴な父」を意味し、後に改名された「アブラハム」は「多くの者の父」を意味する。

この箇所には数学的な問題がある。デレク・キドナー（Derek Kidner）はこのように説明している。

テラが死んだ年齢は難しい問題を提起している。なぜなら、その通りだとすると、テラの長男は135歳ということになるが（26節）、その時、アブラムはまだ75歳であったからである（12:4を使徒7:4と比較）。これを解決する一つの方法は、アブラムが末子で、長男より60年後に生まれたにも関わらず、11:26,27の系図

では、その重要性から、彼の名が最初に記載されたと考えることである（マナセよりエフライムが優先されたように）。

もう一つの方法は、サマリア写本にしたがって、テラの死亡時の年齢を145歳とするものである。こちらの方が優れているように思われる。実の父親が130歳でアブラムを生んだのであれば、アブラムは17:17にあるように驚嘆することはなかったと思われるからである。^{*(12)}

カルデア人のウル（31節）は、メソポタミアにあり、異教の偶像礼拝の中心地であった。テラとその家族は、北西にあるハランに向かって旅をした。そこはカナン¹の地に向かう途中の町であった。

Ⅱ．イスラエルの族長たち（12～50章）

A. アブラハム（12:1～25:18）

1. アブラハムの召し（12:1～9）

12:1～3 主の召しは、アブラムがまだウルにいた時にすでに与えられていた（1節と使徒7:1～3を比較）。自分の土地、親族、そして父の家を離れて、長い旅に出るように召されたのである（ヘブル11:8）。神はアブラムと驚くべき契約を結ばれたが、そこには次の重要な約束が含まれていた。地—すなわち、カナンの土地が与えられること。大いなる国民—すなわち、ユダヤ民族となること。アブラムとその子孫のために物質的また霊的祝福が与えられること。アブラムとその子孫に大いなる名が与えられること。他の国々にとって祝福の経路となること。イスラエルの友は祝福され、反ユダヤ主義者は呪われること。アブラムによって、地のすべての部族は祝福を受けること。これは、アブラムの子孫としてやが

て来られる主イエス・キリストを指し示すものである。この契約は、13:14～17、15:4～6、17:10～14と22:15～18で、更新され拡充されている。

12:4～9 「ハランで無駄に過ごした年月」と表現されるように、何年も進展がなかった後、アブラムは、妻のサライと、甥のロト、その他の親族や財産とともに、カナンに移り住んだ。一行はまずシェケムにやって来て、アブラムはそこに祭壇を築いた。そこには敵対するカナン人がいたが、信仰によって歩む者にとっては何の障害にもならなかった。

次にアブラムはベテル（「神の家」とアイの間に移動した。いつものように、彼は天幕を張っただけでなく、主のための祭壇を築いた。これは、この神の人の優先順位について非常に多くのことを語っている。9節の時点で、アブラムはなおもネゲブ（すなわち南）へ移動を続けている。

2. エジプトへ行き、また戻る (12:10～13:4)

12:10～20 しかし、信仰には後退もつきものである。ある深刻な飢饉の折、アブラムは神が選ばれた土地を離れて、エジプトという、この世を象徴する場所に逃げ込んだ。この移動が災いをもたらすことになった。アブラムは、ファラオがアブラムを殺して、見目麗しい妻サライを奪い、後宮に入れるのではないかと、という恐怖に取りつかれた。そこでアブラムはサライを説得して、自分の妹だと嘘をつかせた。実際、サライはアブラムの異母妹であったが(20:12)、騙す意図があった、という点で、嘘に変わりはない。この策略はアブラムには有利に働いた（アブラムは多額の謝礼を受け取った）が、サライには不利に働いた（ファラオの後宮に入らなければなら

ないことになった）。そればかりか、ファラオにも不利な事態をもたらした（ファラオもファラオの家の者たちも、疫病で倒れた）のである。正しさにおいてまさる行動をとったのは、アブラムではなく、欺かれたことを知ったファラオの方であった。ファラオはアブラムを厳しく叱責した後、カナンに送り返した。

この出来事から気づかせられることがある。肉的な武具を用いて霊的な戦いをするべきではないこと、目的は手段を正当化しないこと、そして、罪を犯しておきながら、その責任を免れることはできない、ということである。

神はアブラムを見捨てはしなかったが、罪の最終的な結果が現れるのを許された。アブラムはファラオから公然と屈辱を受け、面目を失って国外退去となったのである。

「ファラオ」とは固有名詞ではなく、王、皇帝、大統領、等と並ぶ称号である。

13:1～4 アブラムがエジプトからベテルへ戻った理由は、神との交わりを回復するためであった。「ベテルに帰れ」というのは、主から離れてさ迷うすべての人への呼びかけである。

3. ロトとメルキゼデクをめぐる経験 (13:5～14:24)

13:5～13 アブラムの家畜の牧者たちと、ロトの家畜の牧者たちの間に、彼らの羊の放牧地をめぐる争いが起こった。アブラムは、真の礼節と優しさで無私の心をもって、ロトに「全地のどこでも選びなさい」と申し入れた。アブラムは心を低くして、他人を自分よりすぐれた者と思ったのである（ピリビ2:3）。ロトは、ヨルダンの低地にある青々とした牧草地を選んだが、そこは罪の町ソドムとゴモラに隣接していた。紛れもない信者でありながら（Ⅱペテ

ロ2:7,8)、ロトは世俗の人であった。ある人が言うように、「ロトは家畜のために草 (grass) を得たが、アブラムは子孫のために恵み (grace) を得た」(15,16節)のである。

ソドムの人々が邪悪で主に対して甚だしく罪深い者たちであったにも関わらず、ロトの選択に迷いはなかった。ロトが世俗の深みにはまっていく段階を記しておこう。

ロト (と家畜の牧者たち) は、争いを経験した (7節)。

ロトは見た (10節)。

ロトは選んだ (11節)。

ロトはソドムに天幕を移した (12節)。

ロトは神の祭司がいる所から離れて生活した (14:12)。

ロトは政治的権力の座である町の門に座るようになった (19:1)。つまり、ソドムの地方官になったのである。

13:14~18 アブラムは、最高の牧草地を得ることはできなかったが、神はアブラムとその子孫にカナンの地をすべて、永久に与えられた。そればかりか、主はアブラムに数えきれないほどの子孫を約束された。ヘブロンに定住したアブラムは、主のための第三の祭壇を築いた。彼はいつも神のために祭壇を築き、自分のために家を建てることはなかった。

神はアブラムに、この地をくまなく歩き、自分の所有となるものを見るように言われたことに注目しよう。私たちも同様に、神のさまざまな約束を信仰によって適用しなければならぬ。

14:1~12 この章の中心となる出来事が起きる13年前、エラム (ペルシア) の王ケドルラオメルは、塩の海 (死海) に隣接する草原で諸王を征服した。十三年目、捕虜となった5人の王たちはケドルラオメルに背いた。そこで彼は、バビロン地方の

他の三人の王と同盟を結び、死海の東側を南下し、西側を北上してソドム、ゴモラなどの平野の町々に進軍した。戦いはシディムの谷で行われたが、そこには瀝青 (れきせい) の穴が多くあった。侵略軍は反乱軍を打ち破り、戦利品と捕虜を手に入れて北へ進軍したが、その中にはアブラムの甥で、不信仰に逆戻りしたロトもいた。

14:13~16 アブラムはその知らせを受けると、三百十八人のしもべたちを集めて、北のダンまで、勝者たちを追跡した。アブラムは、ついにシリアのダマスコの近くで彼らを打ち破り、ロトと戦利品のすべてを取り戻した。信仰から離れる者は、自分自身に不幸をもたらすだけではなく、他の人々に迷惑をもたらすものである。アブラムはこの時、剣の力でロトを救出するが、後になって、執り成しの祈りによってロトを救出することになる (18~19章)。

14:17, 18 アブラムが帰途につこうとすると、ソドムの王が彼を迎えに出て来た。大きな霊的勝利の後に、しばしばサタンが信者を誘惑するのに似ている。しかし、サレムの王、いと高き神の祭司であるメルキゼデクが、パンとぶどう酒を持って、アブラムを励ましに登場する。パンとぶどう酒が (聖書の中で) 初めて言及されるこの箇所を読む時に、救い主の受難の象徴としてのパンとぶどう酒を思わないわけにはいかない。私たちを罪から救うために、主が払ってくださった代価を思う時、どのような罪深い誘惑であってもそれに抵抗する力が与えられるのである。

聖書に登場する名前にはそれぞれ意味がある。メルキゼデクは「義の王」を意味する。そしてサレム (エルサレムの省略形) は「平和」という意味である。したがって、メルキゼデクは義の王であり、平和の王なのである。彼こそは、正真正銘の義と平和

の王であり私たちの大祭司であるキリストを象徴している。ヘブル7:3に、メルキゼデクには「父もなく、母もなく、系図もなく、生涯の初めもなく、いのちの終わりも」ない、と書かれているが、それは祭司職に限定した場合のことと理解すべきである。ほとんどの祭司は、その職を世襲し、一定の期間、職務を行う。それに対し、メルキゼデクの祭司職はそれと全く異なっている。記録されている限りにおいて、その祭司職は両親から彼に引き継がれたものではなく、また、そこには開始の時期も終了の時期もないからである。キリストの祭司職は「メルキゼデクの位に等しい」（詩篇110:4、ヘブル7:17）ものである。

14:19, 20 メルキゼデクがアブラムを祝福すると、アブラムはすべての戦利品の十分の一を、この神の祭司に与えた。ヘブル7章を見ると、これらの行動の背後には深い霊的な意味のあったことが分かる。アロンの先祖であるアブラムは、アロンに発する祭司職を代表する存在と見なされているのである。メルキゼデクがアブラムを祝福した、という事実は、メルキゼデクの祭司としての地位がアロンの地位にまさることを意味している。なぜなら、祝福を与える者は、祝福を受ける者よりも立場が上だからである。アブラムが十分の一のものをメルキゼデクに献げた、という事実は、アロンの祭司職よりもメルキゼデクの祭司職の方が上位であることの例証と見なされている。十分の一は下位の者が上位の者に納めるものだからである。

14:21~24 ソドムの王が言ったことは、言い換えれば「人は私がもらう。あなたは物を持って行け」ということである。このように、サタンは今でも私たちを誘惑し、周りの人々が滅びようとしているのに、塵に過ぎない玩具で夢中にさせるのである。

アブラムは、「糸一本、履き物のひも一本さえ受け取りはしない」と答えた。

4. アブラハムに約束された世継ぎ（15章）

15:1 第1節は、14章の最後の部分と密接な関係がある。族長（アブラム）が、ソドムの王からの報酬を拒否したとき、ヤハウェは「アブラムよ、恐れるな。わたしはあなたの盾である。あなたへの報いは非常に大きい」と仰せになり、アブラムを保護し、信じられないほど富む者にされた。

15:2~6 子がいなかったアブラムは、ダマスコのエリエゼルというしもべが相続人になることを恐れていた。それが当時の法律であったからである。しかし、神はアブラムに一人の跡取りと、星のように多くの子孫を約束された。人間的に言えば、これは不可能なことであった。サライが子どもを産める年齢はとうに過ぎていたからである。しかし、アブラムは、神の約束を信じた。そして神はそれを彼の義と認められたのである。ここで強調されている信仰による義という真理は、ローマ4:3、ガラテヤ3:6、ヤコブ2:23でも繰り返されている。13:16で、子孫は塵のように多くなる、と神は約束しておられたが、ここ15:5では星のように多くなる、と言っておられる。「塵」とはアブラムと血のつながった子孫、すなわち生まれながらのユダヤ人のことである。それに対し「星」とはアブラムの霊的子孫、すなわち、信仰によって義と認められた者のことを指している（ガラテヤ3:7）。

15:7~21 子孫を与える約束（1~6節）、地を与える約束（7, 8, 18~21節）を確証するために、神は奇妙で意味深い象徴的な行為をされた（9~17節）。デイヴィッド・バロン（David Baron）はこのように説明

している。

古代オリエントにおける契約の作法によれば、契約の両当事者は、切断された動物の間を行き来することになっていた。そうすることで、彼らは自分たちが交わした約束の履行に命を賭けることを象徴的に示したのである（エレミヤ34:18,19）。しかし創世記15章では、煙の立つかまどと、燃えているたいまつに象徴される神だけが、切り裂かれた物の間を通り抜けておられるのに対し、アブラムはただ、神の無代価の恵みを見事なまでに示すこの儀式を見ているに過ぎない。^{*（13）}

これは、この契約が、履行の責任を神だけが負われる〈無条件の〉契約であることを示している。

別の説によれば、切り裂かれたいけにえは、イスラエル民族を表す。「猛禽」とは異邦の諸国を指し、「自分たちのものでない地」とは、もちろん、エジプトである。イスラエルは、エジプトでの奴隷状態から解放され、四代目の者たちがカナンに戻って来る。「煙の立つかまどと、燃えているたいまつ」とは、イスラエル民族の宿命、すなわち、苦難を受けること、および証しを担うことを表す。

イスラエルの解放はアモリ人の咎が満ちてからやっと実現することになる。カナンの異教徒の住民は、最終的には絶滅されなければならない。しかし、神は悪をさばく前に、民に害を及ぼすような悪を最後まで放置しておかれることがよくある。神は忍耐深くあられ、たとえそれが、墮落したアモリ人であっても、一人も滅びることを望んではおられない（Ⅱペテロ3:9）。また、悪が結実するのを容認し、邪悪な生活の恐

ろしい結末がだれの目にも明らかになるようにされる。こうして、神の怒りは完全に正当なものであることが示されるのである。

13,14節には、年代上の問題が提起されている。アブラムの子孫は、自分たちのものでない地で、四百年の間、奴隷となって苦しめられるが、その時が満ちると、多くの財産とともに、そこから出て来る、との予告である。使徒7:6でも、この四百年という数字は繰り返されている。

出エジプト記12:40,41には、イスラエルの民がエジプトに滞在していた期間は、ちょうどその日まで四百三十年であった、と書かれている。

さらに、ガラテヤ3:17で、アブラハム契約が確証されてから、律法が与えられるまでの期間は四百三十年であった、とパウロは書いている。

この数字の違いはどうしたら一致するのであろうか。

創世記15:13,14、および使徒7:6に言及されている四百年とは、イスラエルがエジプトで過酷な隷属状態におかれた期間のことである。ヤコブとその家族が、最初エジプトに来たとき、奴隷にはされなかった。それどころか、彼らは王族としての待遇を受けたのである。

出エジプト記12:40,41にある四百三十年とは、イスラエルの民が、まさにその日までエジプトで過ごした期間の総計のことである。これは正確な数字なのである。

ガラテヤ3:17の四百三十年とは、出エジプト記12:40,41とほぼ同じ期間のことを言う。それは、神が、ちょうどエジプトに下る準備をしていたヤコブにアブラハム契約を確証された時を起点とし（創世記46:1～4）、出エジプト後、約三か月後に律法が授与される時にまで及ぶ。

創世記15:16にある四世代とは、出エジ

プト記6:16～20に見ることができる。すなわち、レビ、ケハテ、アムラム、そしてモーセである。イスラエルは18～21節で約束されている土地をまだ占領してはいなかった。ソロモンは、その土地を属国として支配はしたが（1列王記4:21,24）、民がそこを占領したわけではなかった。この契約は、キリストが再臨し、統治されるときに成就する。その成就を妨げることのできるものは何もない。神が約束されたことは、すでに起きたことと同じように確実なのである。

「エジプトの川」（18節）とは、一般的に、ナイル川のことでなく、ガザの南にある、ワディ・エル・アリシュ（Wadi el Arish）という名で知られている小川のことであり、と考えられている。

5. 肉の子、イシュマエル（16、17章）

16:1～6 罪の性質である、落ち着きのなさがここに垣間見える。神を待ち望むのではなくサライはアブラムを説き伏せて、自分の女奴隷ハガルによって子どもを得ようとした。ハガルは、おそらく、エジプトへのあの運命的な旅の間に得たのであろう。神は、御民の結婚生活に起きた過ちを決して認めないとしても、忠実に記録される。ハガルは身ごもると、自分の女主人を軽く見るようになった。その報復として、サライは、アブラムを責め、ハガルを家から追い出した。これは律法と恵みとの対立を表している。この二つは共存することができないのである（ガラテヤ4:21～31）。この部分の行動の一部は、当時の文化では許容されたかもしれないが、キリスト信仰の立場からは、もちろん正常ではないことである。

16:7～15 ハガルがエジプトに向かう途中、シュルの荒野にいた時、主の使いが

彼女のもとに来た。これは、受肉前の主イエスの姿の一つで、「キリスト顕現」（Christophany）と呼ばれるものである（士師記6章の、主の使いに関する補説を参照のこと）。主の使いは、サライのもとに帰って身を低くするように忠告し、ハガルの子が大いなる国民の父となる、と約束した。もちろん、その約束はアラブ民族という形で成就された。「帰り、身を低くしなさい」ということばは、神と関わった多くの人々にとって人生の大きな転機となった。

13節のハガルの驚きの叫びを「あなたは目で見ることのできる神です」と意識してもよいだろう。なぜなら「私を見てくださる方のうしろ姿を見て、なおも私がここにいるとは」と言っているからである。ハガルはその井戸をベエル・ラハイ・ロイと名づけた（直訳すると、「生きて、私を見てくださる方の井戸」）。*⁽¹⁴⁾

16:16 ハガルにイシュマエルが生まれたのは、アブラムが八十六歳の時であった。イシュマエルという名前は、「神は聞き給う」という意味である。この場合、神はハガルの苦悩に耳を傾けてくださったのである。この物語を通して、ハガルが律法を表し、サライが恵みを表していることを私たちは忘れてはならない（ガラテヤ4章参照）。

17:1～14 神が1節でアブラムに言うておられるのは、アブラムが自分の力で何とかしようとするのをやめて、**全能の神**に任せよ、という婉曲的な表現であったかもしれない。その直後、神は**契約**を更新し、族長アブラム（「高貴な父」という名をアブラハム（「多くの者の父」）に改めた。次いで、割礼がその契約のしるしとして定められた。この「外科手術」は、神に選ばれた地上の民の一員であることを示す身体的なしるしとして、男子に施されるものであ

った。この当時、中東ではすでに行われていたことではあるが、アブラハムとその家族にとっては、新しい意味を帯びるものとなった。アブラハムの家の男子はすべて割礼を受け、それ以来、どの男の子も、生まれて八日目に割礼を受けなければならないことになった。さもなければ、自分の民から断ち切られなければならない、すなわち、イスラエル人の会衆から追放される（9～14節）のである。断ち切るという表現は、死刑にする、という意味もあり、出エジプト記31:14, 15はその例である。しかし、この箇所のように、禁ずる、あるいは放逐（ほうちく）する、という意味もあるように思われる。

使徒パウロは、アブラハムが割礼を受ける前に、義と認められた（15:6）という点を注意深く指摘している。その割礼は、「割礼を受けていないときに信仰によって義と認められたことの証印」だったのである（ローマ4:11）。信徒は今日、身体上のしるしによって証印を押されているのではない。回心した時に、聖霊によって証印を押されたのである（エペソ4:30）。

割礼のしるし

割礼は、ご自身と御民との間に結ばれた契約の身体的なしるしとして神が導入されたものである（創世記17:10～14）。こうして、アブラハムの子孫はすべて「割礼の者」と呼ばれ（使徒10:45※英訳）、異邦人は「無割礼の者」と呼ばれるようになった（エペソ2:11※英訳）。割礼はまた、アブラハムが信仰によって受けた義のしるしであり証印でもある（ローマ4:5）。

しかし、その後、「割礼」や「割礼を受ける」ということばは、さまざまな意味を

持つようになっていった。「唇に割礼を受けていない」（出エジプト記6:12）というのは、人前で話すのが下手であることを意味した。「無割礼の耳」や「無割礼の心」とは、主の声を聞かず、主を愛さず、主に従わないことを意味する（レビ記26:41、申命記10:16、30:6、エレミヤ6:10、使徒7:51）。「肉体に割礼を受けていない」（エゼキエル44:7）とは、汚れていることを意味する。

新約聖書で「キリストの割礼」（コロサイ2:11）というのは、十字架上のキリストの死を指す。信徒は、キリストと同一化されることによって、割礼を受けるのである。パウロは「あなたがたは人の手によらない割礼を受けました。肉のからだを脱ぎ捨てて、キリストの割礼を受けたのです」（コロサイ2:11）と言う。この割礼とは、肉の性質に対して死んだことを示している。立場的には、どの信徒についてもそれが当てはまるとはいえ、肉による罪の行いを実際に葬り去ることがそれに続かなければならない（コロサイ3:5）。使徒パウロは、信徒を「(真の)割礼の者」と呼んでいるが（ピリピ3:3）、それは「割礼派の人々」と呼ばれていたユダヤの律法主義者の一団と対比しているのである（ガラテヤ2:12）。

象徴的な意味に加え、神のご配慮による律法の中には、神の民が異邦人社会の病気から解放されるように規定されたものがある。今日、権威ある医学者の多くは、割礼によって、夫も妻もある種の癌にかかりにくくなる傾向がある、と考えている。

17:15～17 神はサライの名をサラ（「王女」と改め、九十歳の妻に男の子が生まれる、と約束された。族長（アブラハム）は笑ったが、それは不信仰のためでは

なく、思いがけない喜びのためであった。アブラハムの信仰は揺らぐことがなかった（ローマ4:18～21）。

17:18～27 アブラハムが、「どうか、イシュマエルが御前で生きてますように」と願うと、契約はアブラハムの子イサクを通して成就する、と告げられた。しかし、イシュマエルも、その子孫は増え、その数は大いに増やされ、大いなる国民となる、と。イサクはキリストの象徴であり、キリストを通してこの契約は最終的に成就するのである。

アブラハムが即座に従ったことに注目しよう。その日のうちに、アブラハムとその子イシュマエルは割礼を受けた。

6. ソドムとゴモラ（18、19章）

18:1～15 17章の出来事からまもなくのこと、三人の人がアブラハムの前に現れた。そのうちの二人は、実は御使いであり、もう一人は主ご自身であった。中東特有の温かいもてなしで、アブラハムとサラは、御使いとは知らないまま（ヘブル13:2）、御使いと御使いよりも偉大な御方を歓待した。一年も経たぬうちに子どもを授かる、と主が言われるのを立ち聞きして笑ったサラは、思わず不信仰を露呈してしまった。サラは「主にとって不可能なことがあるだろうか」という、心探られる質問で責められた。しかし、彼女の疑いにはお構いなしに、この約束は繰り返された（9～15節）。ヘブル11:11によれば、サラはこのような一瞬の過ちにも関わらず、基本的には信仰の女性であったことが分かる。

18:16～33 ご自身がソドムを滅ぼそうとしていることを主がアブラハムに明かされ、二人の御使いがソドムに向かって歩き始めると、アブラハムの偉大な執り成しのカウントダウンが始まった。五十人…四

十五人…四十人…三十人…二十人…十人と。たとえ正しい者が十人であったとしても、主はソドムを滅ぼし尽くさない、というのである。アブラハムの祈りは、実効性のある執り成しのすばらしい実例である。それは、全地をさばくお方（25節）の義なる性質に基づいたものであり、神を親密に知る者のみが持つ大胆さと深い謙遜を証明している。主は、アブラハムの嘆願が終わってからやっとこの件に幕を引き、去って行かれた（33節）。人生には数多くの謎があるが、それに対する満足な答えは、25節が真実である、という以外にはない場合が多い。

アブラハムほど家族思いの人物はいない、と神が称賛しておられる点を見落としてはならない（19節）。それは憧れに値するものである。

19:1～11 ソドムという名は、同性愛または男色の罪と同義語になっている。しかし、性的な倒錯だけが原因でソドムという町が滅びたわけではない。エゼキエル書16:49,50で、主はソドムの罪を「高慢で、飽食で、安逸を貪（る）」と表現された。

ロトは二人の御使いを迎え、「どうか…お泊まりください」としきりに勧めた。さもないと彼らがどんな目に遭うかよく分かっていたからである。それでもなお、ソドムの男たちは、天からの訪問者に対して同性愛的な暴行を加えようとしたのである。自分への訪問客を救おうと必死になったロトは、恥もためらいもなく二人の娘を差し出した。その最悪の事態から救われたのは奇跡というほかはない。御使いたちは、ソドムの人々に一撃を下して、一時的に目が見えなくなるようにし、彼らを混乱させた。

同性愛

旧約聖書（創世記19:1～26、レビ記18:22、20:13）および新約聖書（ローマ1:18～32、I コリント6:9、I テモテ1:10）の双方において、神は同性愛という罪を断罪しておられる。ソドムとゴモラの町を滅ぼすことによって、神は同性愛に対する怒りを表明された。モーセの律法によれば、男色は死をもって罰せられるのが妥当とされている。同性愛にふける者が神の国を受け継ぐことはできない。

いわゆる「ゲイ」と呼ばれる人々は、その不道徳な生き方のゆえに高い代償を払わなければならない。パウロが言っているように、「その誤りに対する当然の報いをその身に受けてい（る）」のである（ローマ1:27）。そこには、性病、ニューモシスチス肺炎、カポジ肉腫（癌の一種）、エイズが伴うばかりか、罪責感、精神的・情緒的な障害、および性格の異変がつきまとう。

（しかし）他の罪人すべてと同様、同性愛者の男女が、もし罪を悔い改めて主イエス・キリストを個人的に救い主として受け入れるなら、救いにあずかることができる。神はゲイの人も、レズビアンの人でも愛しておられる。ただその罪を憎んでおられるだけなのである。

同性愛が生活の一部になっている、ということと、同性愛的な傾向がある、ということとは同じではない。聖書が断罪するのは実際の習慣であり、その性向ではない。同性に魅力を感じても、それに屈しない人は多くいる。御霊の力によって、彼らは、自らを訓練し、誘惑に屈せず、純潔を保っているのである。生まれつき同性愛の傾向を持っているクリスチャンの多くはこう言う。

…彼らには、自分の状態を思うと、悲しみと悔恨の思いしかない。しかし、どうしてもそれを変えることができないので、自制と純潔の力をいただくため、御霊に抛り頼んできた。それこそが聖潔でなくて何であろうか。…彼らは、キリストに身を委ね、消え去ることのない、その内なる傷を献げ、それが神の御用に役立つように、と願う。それは人間の弱さの中に神の力が完全に現されるためである。^{*(15)}

ある人は、このような性向を持って生まれたのは、神のせいだ、と言う。しかし、責任は、神ではなく、人間の罪深さにある。アダムの子孫はそれぞれみな堕落し、悪に走る傾向がある。ある人の弱点は、他の人の弱点と同じではない。誘惑を受けるだけでは罪にならない。罪とは誘惑に屈することである。

男性であれ、女性であれ、同性愛から解放される道がある。どのような情欲からも自由にされる道があるのと同じである。とはいえ、信仰厚い人の継続的な助言が、ほとんどどの場合にも大変重要であることは言うまでもない。

クリスチャンはどうするべきか。同性愛という生き方を是認しないまでも、同性愛者の男女を受け入れるべきである。彼らのためにもキリストが死んでくださった以上、聖い生き方にしっかり導けるように、あらゆる可能な方法を模索するべきである。「聖さがなければ、だれも主を見ることができない」からである（ヘブル12:14）。

19:12～29 御使いたちは、ロトと家族の者たちが町を出るよう、しきりに促し

た。しかしロトが婿たち（または「まもなく婿になろうとしていた者たち」）の説得にかかる、彼らにはそれが悪い冗談のように思われた。不信心な生活に逆戻りしていたロトの証しは、危機が訪れた時に、もはや無力なものとなっていたのである。夜が明けるころ、御使いたちはロトと彼の妻と二人の娘をソドムの外に連れ出した。ここに至っても、ロトは煮え切らない態度をとり、ツォアルという、近郊の、悪名高い町の一つに留まる方を選んだ。ソドムの町には、正しい者は十人すらいなかった、神はソドムを滅ぼされた。しかし、アブラハムの祈りは応えられないままでは終わらなかった。なぜなら、「神はアブラハムを覚えておられた。それで、ロトが住んでいた町々を滅ぼしたとき、神はロトをその滅びの中から逃れるようにされた」とあるからである。

ロトの妻はその町を出るには出たが、その心はまだそこに残っていたため、神のさばきを自らの上に招くことになった。「ロトの妻のことを思い出しなさい」（ルカ 17:32）と言われたキリストは、ご自身の救いの提供を軽んじるすべての人々への警告として、彼女を例に取り上げたのである。

19:30～38 ツォアルを出たロトは山の洞穴に逃げ込んだ。そこで二人の娘はロトに酒を飲ませ、近親相姦に誘（いざな）った。姉はその結果、男の子を産み、その子をモアブと名づけ、妹もまた、男の子を産んで、その子をベン・アミと名づけた。このようにして、モアブ人とアンモン人（の歴史）が始まったが、彼らは繰り返し、イスラエルの苦痛の種となっていく。モアブの娘たちはイスラエルの男たちが不道德なことを行うようにそそのかし（民数記25:1～3）、アンモン人はイスラエルに、子どもをいけにえとする（偶像神）モレク礼拝を教えた

のであった（Ⅰ列王記11:33、エレミヤ 32:35）。

Ⅱペテロ2:7,8によればロトは義人であったが、世俗の人であったため、証しも（19:14）、妻も（19:26）、婿たち、友人も失い、霊的交わり（そもそもソドムには皆無であった）、財産（来た時は富んでいたが、去るときは貧しくなり果てた）、品性（19:35）、一生をかけた仕事を失ったばかりか、危うく命も失うところであった（19:22）。ロトの娘たちの墮落した行動は、彼女たちがソドムの不道德な基準に影響されていたことを示している。（処罰から）逃げる場所はどこにもない（ヘブル2:3）。

7. アブラハムとアビメレク（20章）

20:1～18 アブラハムが、ファラオに対してサラを自分の妹だと詐称してしまった同じ失敗を、二十年も経たないうちに繰り返すとは、信じがたいことである。しかし、私たち自身にも罪を犯す傾向があり、その傾向は決して消えることがないことを思い出すと、ようやく納得がいくのである。ゲラルでのアビメレクと関わった時の出来事は、（かつて）エジプトで二枚舌を使った時の再現と言ってもよいほどである（12:10～20）。神はイサクの誕生という御心を成し遂げるために介入されたが、もしそうでなければ、それは水の泡になっていたところだった。神は、アビメレクを咎め、あなたは死ななければならない、と仰せられた。神は、決して歴史の傍観者などではない。神は、御民の悪を無効にするために、新生していない人の人生を用いる場合さえあるのである。この場合、異教徒であるアビメレクの方が、「神の友」と言われたアブラハムよりも正しい行いをしている。（「アビメレク」は称号であって、個人名ではない。） 信仰者が、この世の人から正し

い叱責を受けなければならない、というのは、実に恥すべきことである。真実が半分しかないのに、それが真実のすべてであるかのように人に言うとするなら、それは、偽りでしかない。何と、アブラハムは、責任の一端を神に負わせようとし、そもそも自分をさすらいの旅に出したのは神である、と言った。自分の過ちを素直に認める方がどれほど知恵ある態度であったことだろうか。しかし、それでも、アブラハムが神の人でなくなったわけではなかった。そこで主は、アビメレクをアブラハムのもとに遣わし、アブラハムがその家の者たちのために祈るようにされた。それは、不妊が癒されるためであった。

「これであなたは、すべての人の前で正しいとされるだろう」(16節)という表現は、直訳すると「目を覆うものとなる」ということで、宥めのための贈り物を意味する。したがって、このように言い換えることができる。「これはあなたを満足させるために支払われるもので、あなたと、あなたとともにいるすべての人にとって、過ちが正されたことの証拠となる」。

8. 約束の子、イサク (21章)

21:1~10 アブラハムとサラに約束の子が生まれると、親となった彼らは我を忘れるほど喜び、神に命じられたとおり(17:19, 21)、彼をイサク(「笑い」と名づけた。この名前は、彼ら自身の大きな喜びと、その知らせを聞いたすべての人々の大きな喜びを表している。イサクが乳離れしたのは、おそらく2才から5才までの間のことであろう。イシュマエルは13才から17才の間ぐらい、ということになる。イシュマエルがイサクの乳離れの祝宴でイサクをからかっているのを見たサラは、ハガルとその子を追い出してください、とア

ブラハムに指図した。パウロはこの行動を取り上げ、律法は恵みを脅かすものであり、律法と恵みは共存できず、霊的祝福は律法の原則からは生まれてこないことの証拠と解釈している(ガラテヤ4:29)。

21:11~13 アブラハムは、ハガルとイシュマエルを失うことで悲嘆にくれた。しかし、神は、イシュマエルも一つの偉大な国民の父祖となる、と約束してアブラハムを慰めた。それでも主は、イサクこそ、契約が成就する約束の子であることを明確にされたのであった。

21:14~21 ハガルとその子が、カナンの南の荒野で、渇きで死にそうになった時、神は井戸を見つけさせ、彼らは命拾いした。イシュマエルはそのとき十代であった。したがって、15節は、おそらく、弱っていた彼を、ハガルが一本の灌木の下に押し込んだ、という意味であろう。イシュマエルの名前の意味である「神は聞いてくださる」という語句は17節で2回、繰り返されている。子どもも、若者も、祈るように励まさなければならない。神は聞いてくださり、答えてくださるからである。

21:22~34 22節のアビメレクは20章のアビメレクと同一人物とは限らない。この族長のしもべたちはアブラハムのしもべたちから井戸を奪い取っていた。アビメレクとアブラハムが友好の契りを結ぶと、父祖アブラハムは、差し押さえられた井戸のことをアビメレクに話した。その結果、井戸はアブラハムのものと認める、という契約が結ばれた。アブラハムは即座にそれをベエル・シェバ(「誓いの井戸」と名づけた。その場所は、後に都市となり、国土の最南端の境界線を形成することになった。アブラハムは記念としてそこに一本のタマリスクの木を植えた。

9. イサクを献げる (22章)

22:1~10 カルバリのキリストの十字架を除けば、聖書の中で、これほど胸を刺す場面、これほど鮮やかに神の愛するひとり子の十字架の死を予感させる場面はないであろう。アブラハムの信仰の究極の試練は、神が**モリヤの地でイサクを全焼のささげ物として献げよ**、とお命じになった時に訪れた。実は、アブラハムにそれを完遂させようとおつもりは神に全くなかった。人間をいけにえにする、ということに神が同意されたことは一度もない。**モリヤ**とはエルサレムを含む山岳地帯のことであり(Ⅱ歴代誌3:1)、カルバリの場所でもある。**あなたが愛しているひとり子イサク**という神のことばは、アブラハムの心に深く突き刺さり、その傷は時間とともに深くなっていったに違いない。イサクがアブラハムのひとり子である、というのは、約束のひとり子、二人としない、奇跡の誕生をした息子、という意味である。

あることばが初めて聖書に登場すると、そのことばが聖書全体における基準の用法となることが珍しくない。この箇所では、**愛** (2節) と **礼拝** (5節) が初めて登場する。アブラハムの息子への**愛**は、神の主イエスへの愛をほのかに反映している。イサクを献げるという行為は、神の御旨を達成するために、救い主が自らを犠牲にされるという、最大の礼拝行為を描いている。

22:11, 12 「アブラハム、アブラハム」との呼びかけは、聖書の中で繰り返し名前が呼ばれる10の例のうちの最初のものである。7つは神から人への呼びかけで(創世記22:11、46:2、出エジプト記3:4、Ⅰサムエル記3:10、ルカ10:41、22:31、使徒9:4)、残りの3つはマタイ7:21, 22、23:37、マルコ15:34である。これらは、特別に重要な事柄を告げる前に使われてい

る。「主の使い」(11節) とは、神のことである(12節)。

22:13~15 イサクを献げる、というのは間違いなく、アブラハムにとって究極の試練であった。神はすでにアブラハムに、その息子を通して、数えきれないほどの子孫を与える、と約束しておられた。イサクはその時、25才ほどで、しかも未婚であった。仮にアブラハムがイサクを殺してしまったら、その約束はどのように果たされるのだろうか。ヘブル11:19によると、アブラハムは、たとえひとり子を献げても、神は死者の中からよみがえらせてくださると信じていた。この信仰は驚くべきものである。なぜなら、この時点まで、世界のどこにも死者が復活した、という記録はなかったからである。22:5のアブラハムの信仰にも注目しよう。「**私と息子はあそこに行き、礼拝をして、おまえたちのところに戻って来る**」。アブラハムはまず信仰によって義と認められたが(15:6)、ここでは行いによって義とされた(義が実証された)のである(ヤコブ2:21参照)。その信仰は救いの手段となり、その行いは彼の信仰が本物であることの証拠となった。イサクが、「**全焼のささげ物にする羊は、どこにいますか**」と尋ねると、「**神ご自身が、全焼のささげ物の羊を備えてくださるのだ**」と、父親(であるアブラハム)は答えた。この約束が最終的に実現したのは13節の雄羊によるのではなく、神の子羊によってであった(ヨハネ1:29)。

この章にはキリストを見事に象徴するものが二つある。第一はイサクである。ひとり子として、父に愛され、父の望むことを喜んで行い、比喩的な意味ではあるが、死者の中からよみがえったからである。第二は雄羊である。罪なき犠牲が他者の身代わりとなって死に、その血が流され、神のた

めに完全に焼き尽くされる**全焼のささげ物**となったからである。ある人は、イサクの身代わりに**雄羊**を備えたことで、神は「アブラハムには免除された悲痛な思いを、ご自身は甘んじてお受けになった」と言う。11節と15節にある**主の使い**とは、旧約聖書全体に見られるように、主イエス・キリストのことである。アブラハムはその場所をヤハウエ・イルエ（「主は備え給う」と名づけた（14節）。旧約聖書には神を表す七つの複合名があるが、これはそのひとつである。その他は以下の通りである。

ヤハウエ・ロフエカ	「主はあなたを癒やす者」 (出エジプト記15:26)
ヤハウエ・ニシ	「主はわが旗」 (出エジプト記17:15)
ヤハウエ・シャロム	「主は平安」 (士師記6:24)
ヤハウエ・ロイ	「主は私の羊飼ひ」 (詩篇23:1)
ヤハウエ・ツイデケヌー	「主は私たちの義」 (エレミヤ23:6)
ヤハウエ・シャンマー	「主はそこにおられる」 (エゼキエル48:35)

22:16~19 主は、自分にかけて誓われた。ご自身より偉大な存在によって誓う、ということができないからである（ヘブル6:13）。神が誓われたことによって確証されたこの約束の中には、キリストによる異邦人国家の祝福が含まれている（ガラテヤ3:14）。17節の終わりには、すでに大きな祝福を約束された神が、それに加えて、「アブラハムの子孫は**敵の門を勝ち取る**」と言われた。これは、アブラハムの子孫がやがて、「自分たちに敵対する者に対して権威を持つことを意味している。町の門を勝ち取るというのは、町そのものを陥落させることに等しいのである。」^{*(16)}

22:20~24 アブラハムの兄弟ナホルには十二人の息子がいたが、アブラハムは

わずか二人であった。イシュマエルとイサクである。これがどれほどアブラハムの信仰を試みたか、想像に難くない。アブラハムの子孫は空の星のように多くなる、というのが神の約束であったからである。これがきっかけとなって、イサクの嫁を探すためにエリエゼルを遣わすことになったのかもしれない（24章）。22:23にリベカという名があることに注目しよう。

10. 家族の埋葬地（23章）

23:1~16 サラが百二十七歳で死んだ後、アブラハムは**ヘブロン**に住む**ヒッタイト**人と交渉した。**マクペラの洞穴を墓地**として購入するためである。これがアブラハムの、長い寄留者生活の中で、唯一の不動産購入であった。この箇所は、オリエント地方での商取引が具体的にどのように行われていたか、という貴重な記述である。初めのうち、**ヒッタイト人**たちは、その**墓地**の中から、どこでも（好きな）ところを選んではいかがか、と持ちかけた。アブラハムは、過剰なほどの**慇懃**（いんぎん）さでそれを辞退し、ぜひ**エフロン**が所有する洞穴に十分な値をつけて購入したいと言った。次いで**エフロン**は、洞穴だけではなく、**畑地**もすべて無条件に贈り物として差し上げた、と言ったが、アブラハムには、それがうわべだけの礼儀であることがわかっていった。所有者（エフロン）はそれをただで譲る考えは毛頭なかったのである。アブラハムが、ぜひそれを購入させてもらいたい、と応じると、エフロンは**銀四百シェケル**という価格を提示し、あたかもそれが大変な買い得であるように見せかけた。実際は、法外な値段であって、通常、購入する側は値切り交渉をするところであろう。したがって、エフロンが最初に提示した価格にアブラハムが同意すると、だれもが驚いたの

である。アブラハムは信仰を持たない人に借りをすることを望まなかった。私たちも同様であるべきである。

23:17～20 マクペラの洞穴は後に、アブラハム、イサク、リベカ、ヤコブ、そしてレアの墓地となった。その場所として言い伝えられているところに、今ではイスラム教のモスクが建っている。

11. イサクの花嫁 (24章)

24:1～9 アブラハムは最年長のしもべに対し、イサクの花嫁を探すにあたり、イサクがカナン人と結婚することがないように、そしてイサクがメソポタミアに移り住むことがないように誓わせた。2～4節、および9節に記述されている古代の誓約の様式を、チャールズ・F・ファイファー (Charles F. Pfeiffer) は以下のように説明している。

聖書特有の慣用語法に従えば、子どもは父の「もも」または「腰」から出生するものとされている (創世記46:26 ※直訳「彼の腰から出た者」)。ももに手を置く、というのは、結果的に誓いが破られた場合、すでに出生した子どもたち、あるいは、今後「もも」から出生するかもしれない子どもたちが、その背信行為に対して報復することを意味していた。これは、「子孫による誓い」と呼ばれ、この箇所には特にふさわしい行為である。なぜなら、イサクを通してアブラハムの子孫を残すことが、しもべに課せられた任務であったからである。^{*(17)}

24:10～14 このしもべは、御父によって遣わされた聖霊を表す型 (象徴) であり、その使命は、「天のイサク」、すなわち

主イエスの花嫁を見つけることにある。ここには、旅の支度、しもべが運ぶ贈り物の数々、そして主に選ばれた女性がだれなのか見分けるためのしるしについて、事細かに記されている。マードック・キャンベル (Murdoch Campbell) は、以下のように詳しく述べている。

そのしるしは、主人の令息にふさわしい娘に備わるべき人格や気質を照らし出すように計算されたものであった。彼は水を一口 (ヘブル語をそのように訳してもよい) 飲ませてください、と頼むつもりであった。しかし、偉大な民の母、またイエス・キリストの遠い祖先となるべく神が選んでおられる女性であるなら、度量の大きさを示し、他の人に進んで仕え、水を「一口」とはいわず、たっぷりお飲みなさい、と言うはずである。そればかりか、彼女はらくだのためにも水を汲みましよう、という驚くべき申し出もするはずである。さて、広大な砂漠を越える苦労をしたこれらの十頭のらくだが、少なくとも4バレル (636リットルに相当) の水を飲み干してしまうことは明らかであるが、祈りの中で思い描く娘が、ごく自然に、人にも家畜にも仕えんとするなら、それこそは、他者への思いやり、無私の気質、そして最高度の人格を示す女性であろうと考えたのであった。^{*(18)}

24:15～52 もちろん、これらの条件を満たしたのは、美しいリベカであり、そのゆえに (アブラハムの) しもべからの贈り物を受けたのであった。彼女に案内されてその父親の家に行ったしもべは、(花嫁を) 探し求める旅が終わったことを悟った。

リベカが兄弟ラバンに事情を説明すると、ラバンは丁重に（アブラハムの）名代を迎え、しもべの口を通して、リベカをイサクの花嫁として迎えたい、との要請を受けた。しもべの祈りに対する答えとして、状況がもののみごとに整合したことを知ったラバンと、リベカの父親ベトエルは主が一切を取り計らってくださった、と確信したのであった。

24:53～61 それからしもべは、リベカとラバン、そしてリベカの母への贈り物を取り出し、婚約は成立した。朝になると、家族は何とか出発を引き延ばそうとしたが、本人に異存がないことから話はまとまり、リベカは家族の祝福を受けて旅立った。

24:62～67 モリヤ山での出来事の後、イサクが初めて登場するのは、イサクがリベカに会うために出て来た時のことである。それと同じように、主の死と葬り、そして復活と昇天の後、私たちが初めて救い主にまみえるのは、ご自身が選ばれた花嫁を迎えに来られる時のことである（1テサロニケ4:13～18）。イサクがリベカと会った場面は感動的で美しいものである。それまで一度も会ったことがないにもかかわらず、彼は彼女をめとり、**彼女を愛した**。そして他の族長たちとは異なり、彼女以外の妻を迎えることはなかった。

12. アブラハムの子孫 (25:1～18)

25:1～6 1歴代誌1:32を見ると、ケトラはアブラハムの側女（そばめ）と呼ばれている。6節はその裏付けのように思われる。したがって、ケトラは、一人前の妻ではなく、家庭における妻の座をすべて享受していたわけではなかった。神はまたしても、ご自身が決して是とされない、結婚生活の逸脱を、記録にとどめておられる。

25:7～18 アブラハムは幸せな晩年を

過ごし、年老いて満ち足り、息絶えて死に、百七十五年の生涯を終えた。そしてヘブロンにある洞穴に葬られた二例目の人となった。イシュマエルの十二人の子の名前が12～16節に記されているが、それは神のアブラハムに対する約束、すなわち、「彼は十二人の族長たちを生む」（17:20）という約束の成就であった。イシュマエルが死んだことにより、物語はイサクを中心とした舞台へと移行する。

B. イサク (25:19～26:35)

1. イサクの家族 (25:19～34)

25:19～26 結婚してから20年近くというものの、リベカは不妊であった。ところが、イサクの祈りが聞かれて、リベカは身ごもった。腹の中で二人の子どもたちがぶつかり合うようになった彼女は途方にくれるが、やがて、彼女の息子たちが競合する二つの国（イスラエルとエドム）のかしらとなる、と主から告げられる。双子の最初の子はエサウ（「毛深い」）、もう一人はヤコブ（「奪い取る」）と名づけられた。すでに誕生の時から、ヤコブは兄エサウのかかとをつかんで自分が優位に立とうとしていたのであった。双子の男の子が誕生した時、イサクは六十歳であった。

25:27, 28 この子どもたちが成長したとき、エサウは屋外の生活を好む人となり、巧みな狩人となった。一方、ヤコブは穏やかな人となり、天幕に住んでいた。屋内の生活を好む性質だったのである。イサクはエサウをだれよりも愛していたが、リベカはヤコブをだれよりも愛していた。おそらく、ヤコブは「お母さん子」であったのだろう。

25:29～34 長子であるエサウには、父親の財産のうち、二人分を受け継ぐ権利があった。つまり、他の息子がだれであれ、

その二倍ということである。彼はまた、(将来の) 族長または家父長となった。これらが**長子の権利**として知られるものである。エサウの場合には、メシアの先祖に列せられることも含まれていた。ある日、エサウが狩りから戻ると、ヤコブが**赤い煮物**を調理していた。「**その赤い物を食べさせてくれ**」と哀願するように求めたことから、エサウには「赤」(エドム) というあだ名がついてしまった。その名は本人および子孫のエドム人にまでまわりつくこととなった。ヤコブが、エサウの持つ**長子の権利**と引き換えにスープを差し出すと、愚かにもエサウは同意してしまった。「禁断の実を別にすれば、この煮物スープほど高価な代償を払ったものはほかにない」。^{* (19)} 23節の預言は、29～34節で部分的に成就している。神がヤコブの策略を容認しておられるわけではないが、一つの点は明らかとなる。ヤコブが**長子の権利**および神を敬う系譜に連なることに価値を見出したのに対し、エサウは霊的な祝福より肉体の欲求を満たす方を優先した、ということである。

この章は、ヤコブが兄をどのように扱ったか、ということより、エサウがその**長子の権利**をどう扱ったかを強調して終わる。エサウの子孫は、イスラエルに根深い恨みをいだく敵となった。その最終的な滅亡がオバデヤ書に宣告されている。

2. イサクとアビメレク (26章)

26:1～6 イサクは、飢饉に対して、父親(アブラハム)と同じ対応をした(12章および20章)。イサクが南へ移動していくと、主がゲラルで現れ、エジプトへは下って**はならない**、と警告された。ゲラルとは、いわば、エジプトへ向かう道の中点である。神はそのゲラルで一時的に^{* (20)} 寄留するように、と言われたが、イサクは

そうせずにそこに**住んでしまった**。神はまた、かつて**アブラハム**と結ばれた無条件の契約を、再確認された。

26:7～17 イサクは恐怖に対して、父親(アブラハム)と同じ反応をした。自分の妻であるのに、ゲラルの人々には**妹**である、と偽ったのである。父親の弱さが息子の代にまで再現される、という悲しい物語である。欺いたことが露見し、非難されると、イサクは(ありのままを)告白した。告白は祝福につながる。イサクはゲラルで裕福になった。時の支配者アビメレクが、イサクに向かって、ここから出て行ってくれ、と頼むほど富を増したのである。そこでイサクは、ゲラルからあまり遠くない**ゲラルの谷間**に移った。

26:18～25 ペリシテ人は、かつてアブラハムが掘った**井戸**をふさいでいた。これは敵意を表す行為で、新参者を歓迎していないことを意味していた。イサクは井戸をふさいでいたものをきれいに**取り除いた**。**エセク**(「争い」)と**シテナ**(「敵意」)でも、ペリシテ人との反目が続いた。ついにイサクはペリシテ人たちから離れた。今度は、**井戸を掘っても争いがなかった**ので、そこに**レホボテ**(「広々とした場所、空間」)という名をつけた。**彼はそこからベエル・シェバに上った**。その場所で、主は、祝福するという約束を与えてイサクを勇気づけた。イサクはそこに**祭壇を築き**(礼拝)、そこに**天幕を張り**(交わりの継続)、そこに**井戸を掘った**(活力の回復)のであった。肉体にとって水が不可欠であるように、霊的な領域には神のことが不可欠なのである。

26:26～33 26～33節について、ウィリアムズ(George Williams)はこう書いている。

ゲラルの人々が神の祝福を求めてイサ

クのもとに來たのは、彼らからイサクが
きっぱりと分離してからのことであつた。
…クリスチャンがこの世にとって最大の
助けとなるのは、世から分離している時
なのである。^{*}(21)

イサクのしもべたちが水を見つけたのは、
イサクがアビメレクと相互不可侵の契約を
結んだのと同じ日のことであつた。かつて
アブラハムは、その場所にベエル・シェバ
という名をつけていた。その場所で、同時
代のアビメレクと契約を結んだからである
(21:31)。今回は、それと似た状況のもと
で、イサクがそこをシブアまたはベエル・
シェバと再び命名したわけである。

26:34, 35 エサウがユディトとバセ
マテ、という二人の異教徒の女をめとった
ことは、その両親にとって悩みの種となっ
た。それは、その後「つり合わぬくびき」
をつけた多くの人と同様である。これによ
り、エサウが長子の権利にふさわしくない
ことがますますはっきりすることになった。

C. ヤコブ (27:1~36:43)

1. ヤコブ、エサウをだます (27章)

27:1~22 前章の出来事から、およそ
37年が経過した。イサクは今や137歳とな
り、視力も衰え、自分の死期が近い、と考
えた。それは、おそらく、兄のイシュマエ
ルがその年齢で死んだからであろう (創世
記25:17)。しかし、実際はさらに43年間
生きることになる。

イサクが、エサウに、ぜひとも鹿の肉
(※英訳) が欲しい、と願い、その見返り
として祝福を約束した時、リベカは夫を欺
いてでも、愛する息子ヤコブのために祝福
を得ようと画策した。その策略は不要であ
った。神はすでにヤコブを祝福する、と約

束しておられたからである (25:23)。リ
ベカは、おいしい鹿肉の味になるように、
やぎの肉を料理し、子やぎの毛皮をヤコブ
の両腕に被^(かぶ)せた。毛深いエサウのふ
りをするためである。イサクは自分の感覚
に頼る、という過ちを犯した。その毛深い
腕がエサウの腕であるかのように「感じら
れた」のである。霊的な事柄に関して、自
分の感覚を信用してはならない。マルティ
ン・ルター (Martin Luther) が述べてい
る通りである。

感情はやってきたかと思うと、どこか
へ消えるものであり、感情は人を欺く。
私たちの保証となるのは神のことばであ
り、それ以外は何一つ信じるに値しない。

^{*}(22)

欺く計画を立てたのはリベカであつたが、
ヤコブにもそれと同じだけの罪がある。実
行に移したのはヤコブだからである。やが
て、ヤコブは自分の蒔いた種を刈り取るこ
ととなった。マッキントッシュ (C.H.
Mackintosh) はこのように述べている。

ヤコブの生涯をよく観察すると、気づ
かれぬようにうまく父親の祝福を得た
はずのヤコブが、この世の幸福をほとん
ど味わえなかったことに、だれしも気づ
くはずである。兄にあやうく殺されそう
になり、その事態を避けるため、やむな
く父の家を飛び出す。伯父のラバンには
欺かれ、こっそりとラバンの所から逃げ
ざるを得なかった。息子ルベンが卑しい
行動に出、シメオンとレビがシェケムの
住人を裏切り、残忍な仕打ちをするとい
う経験をしなければならなかった。その

次には愛する妻を亡くす、という喪失感、そして、早すぎるヨセフの「死」を経験し、拳句の果てには、飢饉のためやむを得ずエジプトに下り、異国の地で死んだのである。^{*(23)}

27:23～29 イサクは、繁栄、支配権、そして保護があるように、とヤコブを祝福した。興味深いことに、族長たちが語った祝福は預言的であった。それらが文字通りに成就することになったのは、この人々が、真の意味において、(神の) 靈感によって語ったからに他ならない。

27:30～40 エサウが戻り、欺かれたことを知ると、泣きながら祝福を求めた。しかし、すでにその祝福はヤコブに授けられてしまい、撤回することはできなかった(ヘブル12:16, 17)。しかしイサクはエサウにも言うべきことが次のように残っていた。

「肥えた土地から離れたところにお前は住む。高き天の露からはるか離れたところに。お前は剣によって生き、弟に仕える。しかし、お前が背くなら、彼のくびきを打ち砕く」(モファットMoffat訳による)。

ここに、エドム人が荒野に住むこと、戦士となること、イスラエルに支配されること、けれども、いつかその支配に反旗を翻すことが暗示されている。後者の預言は、ユダの王ヨラムの時代に成就した(Ⅱ列王記8:20～22)。

27:41～46 エサウは、父が死んでその喪の日が過ぎたら時を置かずに弟ヤコブを殺そうと計画した。そのことを聞いたリ

ベカは、ハランにいるリベカの兄、ラバンの家に行くように、ヤコブに命じた。ヤコブが殺されるのではないかと恐れただけではなく、エサウが逃げたり、血で血を洗う争いで命を落としたりして、一度に二人の息子を失うかもしれないことを恐れたのである。しかし、いざ、ヤコブが家を出て行く理由をイサクに説明する段になると、ヤコブがエサウのように、ヒッタイト人の娘と結婚するのが心配だから、と言った。ヤコブはすぐにでも戻るつもりでいた。しかし、実際に戻れたのは20年以上も経ってからのことであった。その時、父親はまだ生きていたが、母親はすでに他界していた。

2. ヤコブのハランへの逃避行(28章)

28:1～9 イサクはヤコブを呼び寄せ、彼を祝福して、メソポタミアの地方の一つ、パダン・アラムに送り出した。その目的は、カナン人の中からではなく、母の民の中から妻を見つけることであった。これが刺激となり、エサウはイシュマエルの娘を妻として迎え、父親の祝福を取り戻そうと考えた。それは、善をもたらすために悪を行う(妻を増やす)ことの一例である。

28:10～19 ベテルにおいて、ヤコブは不思議な夢を見た。地上から天に向かってはしご、または階段が伸びている、という夢である。これは、「天と地、特に栄光の中におられる神と、孤独の中にいる人間との間に、現実的で途切れることのない、緊密な交わりがあるという事実」を暗示していた。^{*(24)} 主イエスはナタナエルと会った時、この出来事をご自分の再臨と千年王国の栄光に結びつけて言及された(ヨハネ1:51)。しかし、信仰者は、今ですら、主との絶え間ない交わりを楽しむことができる。この時、ヤコブの心は過去を悔やむ

思いでいっぱいであったことだろう。現在においては寂しさを感じ、将来に不安を感じていたことであろう。そんな時に神は、アブラハムやイサクと契約を結ばれたように、自ら進んでヤコブと契約を結んでくださったのである。主の約束に注目しよう。〈かたわらにいてくださるという約束〉：「わたしはあなたとともにいて」、〈安全の約束〉：「あなたがどこへ行っても、あなたを守り」、〈導きの約束〉：「あなたをこの地に連れ帰る」、〈個人的な保証〉：「わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない」。ヤコブはそこで神と出会ったことを悟り、その地の名をルズ（「別離」）からベテル（「神の家」）に変えた。

「ヤコブはベテルで、思いがけない喜びに驚き、畏怖の念に打たれるまで、神と個人的に接する経験が少しもなかったのである。すべて、人を通してであった」（*Daily Notes of the Scripture Union*）。

28:20～22 次にヤコブは神と交渉しているように見える。実は、神が約束されたものより価値の低いものを手に入れるために交渉していただけであった（14節）。ヤコブの信仰は、まだ神のことばを額面通りに受け止めるほど強くはなかったのである。そのため、十分の一を献げるのは、神が契約に関わるご自分の側の責任を果たした場合だと考えざるを得なかった。しかし、もう一つの解釈は、「もし」（※日本語訳では省略）というのはヘブル語の誓いに固有の部分であり、ヤコブは無条件に十分の一を献げると誓ったと考える（ヘブル語の同様の誓いについては、民数記21:2、士師記11:30、Iサムエル1:11を参照）。

3. ヤコブとその妻たち、そして彼の子どもたち（29:1～30:24）

29:1～14 ヤコブがベエル・シェバを発ってハランに向かったのは77歳の時であった。彼はその後20年間、伯父ラバンに仕え、33年間カナンに戻り、最後の17年間はエジプトに住むことになる。パダン・アラムに到着したヤコブは、まさにハランの羊飼いたちが羊の群れを世話する野に導かれた。ちょうどラケルが羊の群れを連れてやって来て、ヤコブが羊飼いたちと話をしている時であったから、神のタイミングは完璧であった。腕の立つ羊飼いであったヤコブは、まだ日が照っていて、羊に餌をやることができるのに、なぜ皆が井戸のそばで待っているのか不思議に思った。すると羊飼いたちは、羊の群れが全部集まるのを待って、井戸の蓋を開けているのだ、と説明した。ヤコブにとって従姉妹のラケルに会えたことは、まさに感動の瞬間であった。それはラバンも同じで、まもなく甥のヤコブに会うことになる。

29:15～35 ラバンはヤコブが七年間仕えることと引き換えにラケルをヤコブに嫁がせることに同意した。ヤコブは彼女を愛していたのでその年月はほんの数日のように思われた。私たちが主に仕える上でも、かくあるべきである。

レアは目が弱々しく、魅力的ではなかったが、ラケルは姿も美しく、顔だちも美しかった。慣習に則り、花嫁は初夜にベールをかぶり、おそらく部屋が暗くなってから、花婿のところに行くことになっていた。朝になって自分の花嫁がレアであったと知ったヤコブがどれほど怒ったかは、容易に想像がつく。ラバンはヤコブの裏をかいたのである。しかし彼は、この地方では、姉娘を先に嫁がせるのがしきたりであると言って、自分の悪巧みを取り繕った。次にラバ

ンは「この婚礼の一週間を終えなさい（つまり、レアとの結婚関係はそのまま続けよ）。そうすれば、あの娘（ラケル）もあなたにあげよう。その代わり、あなたはもう七年間、私に仕えなければならない」と言うのであった。一週間にわたる婚礼が過ぎて後、ヤコブはラケルとも結婚し、もう七年間彼女のために仕えた。ヤコブはかつて欺きという種を蒔いたが、今やその実を刈り取っていたのである。主はレアが嫌われている（すなわち、ラケルほど愛されていない）のをご覧になって、その埋め合わせにレアに子どもを与えられた。神による、この補填（ほてん）の原理は、今も働いている。すなわち、ある分野で欠けている人は、別の分野で余分に与えられるのである。レアは、主の祝福を認めて、自分の子どもに名前を付けた（32～35節）。祭司職（レビ）、王の家系（ユダ）、そして究極的にはキリストもレアに起源がある。この章には、ヤコブの最初の四人の息子たちが登場する。ヤコブの息子たちは以下のように漏れなく列挙されている。

レアに生まれた息子たち

ルベン	……	「子を見よ」(29:32)
シメオン	……	「聞く」(29:33)
レビ	……	「結ぶ」(29:34)
ユダ	……	「ほめ称える」(29:35)
イッサカル	……	「報酬を与える」(30:18)
ゼブルン	……	「住まい」(30:20)

ラケルの女奴隷ビルハに生まれた息子たち

ダン	……	「さばく」(30:6)
ナフタリ	……	「争う」(30:8)

レアの女奴隷ジルバに生まれた息子たち

ガド	……	「幸運」(30:11)
アシェル	……	「幸せ」(30:13)

ラケルに生まれた息子たち

ヨセフ	……	「加える」(30:24)
ベニヤミン	……	「右手の子」(35:18)

30:1～13 自分の膝の上で遊ぶ子どもが欲しくてたまらなかったラケルは、女奴隷ビルハを内縁の妻、あるいは妾としてヤコブに差し出した。当時、このような取り決めは珍しくなかったが、神の御心に反していた。ビルハはダンとナフタリという二人の男の子を産んだ。ラケルに負けじと、レアは女奴隷ジルバをヤコブに差し出し、さらに二人の男子、ガドとアシェルが生まれた。

30:14～24 ルベンが見つけた恋なすびはトマトの一種で、迷信深い人々は、（それを食べると）子宝に恵まれる、と信じていた。ラケルは子どもができないため、何とかして、その恋なすびを手に入れたいと願った。その交換条件として、ラケルは、レアがヤコブの妻として暮らすことに同意した（理由は明らかにされていないが、レアは妻としての特権を失っていたようである）。その後、さらに二人の男の子——イッサカルとゼブルン——と一人の女の子、ディナが生まれた。最後にラケルは、最初の男の子を出産し、ヨセフと名づけた。それは、神が男の子をもう一人与えてくださる、という信仰の表明でもあった。

4. ヤコブ、ラバンを出し抜く（30:25～43）

30:25～36 ヤコブがカナンの地に戻りたい、と伯父ラバンに告げると、伯父は、

是非とも留まるように、と熱心に説得した。ラバンは、ヤコブのおかげで主が祝福してくださったことを占い（※英訳「経験」）で知っていたのである。そして、もし彼が留まるなら、報酬を彼の要求通りにするとまで言った。ヤコブは条件付きで仕えることに同意した。その条件とは、ラバンが群れの中から、**ぶち毛と斑毛**（まだらげ）の羊とやぎのすべて、そして**黒毛**の子羊全部をヤコブに与え、それ以外の群れの動物はすべてラバンのものとするのであった。ラバンはその取り決めに同意し、「よろしい。あなたの言うとおりになればよいが」と言った。ラバンはヤコブに割り当てた家畜のほとんどを、息子たちの手に渡して放牧させた。おそらくは、ヤコブのものであることを示す子羊や子やぎが生まれると考えたのであろう。その一方で、自分の家畜はヤコブに預け、息子たちのところから三日の距離を置くようにした。こうすることで、ラバンの息子たちが世話をしている群れの中の印のある動物が、ヤコブが放牧している印のない動物と交雑するのを防いだのである。

30:37~43 ラバンの群れを交配する時、ヤコブは白い筋の皮を剥いだ枝を、群れと差し向かいに置いた。羊が黒毛か、模様があるかないかは問題ではなかった。生まれて来る子羊や子やぎはみな縞毛（しまげ）、ぶち毛、斑毛のものであった。それらがヤコブのものであることを意味していたのはもちろんである。これらの若枝で、実際に家畜の毛皮の模様が決まったのであろうか。この方法に科学的根拠があったのか、なかったのかは定かではない（新しい遺伝学的証拠は、そうであったかもしれないという可能性を示唆している）。そうでないとした場合、どうしてヤコブが望んだとおりの模様をもった家畜が生まれたのであろうか。

まず、それは奇跡であったのかもしれない（31:12参照）。

あるいは、ヤコブの巧妙なトリックであったかもしれない。この物語は、ヤコブが交配に関する科学的な知識を持っていたことを示唆している。ヤコブは入念な繁殖技術によって、自分が望む模様のある家畜を作り出しただけでなく、自分のためには強い家畜を、ラバンには弱い家畜が生まれるようにすることができた。もしかすると、白い筋の皮を剥いだ枝とは、交配の秘密を他人に隠すための便宜的なものだったのかもしれない。どう説明するにせよ、ラバンに仕えていた最後の六年間に、ヤコブの資産は増大したのである。

5. ヤコブのカナンへの帰還（31章）

31:1~18 ヤコブはラバンとラバンの息子たちが、嫉妬と憤りを募らせていることに気づいた。そこで主は、いよいよヤコブがカナンに帰るべき時が来た、と告げられた。まず、ヤコブはラケルとレアを呼び寄せ、そのことを話し合った。つまり、ラバンがヤコブを欺き、報酬を何度も変えたこと、（しかし）神が介入していつもヤコブの有利なように（家畜の）群れを繁殖させてくださったこと、20年前に神に立てた誓い（28:20~22）をヤコブに思い出させてくださったこと、主が、カナンに帰れと言われたこと、などを詳しく話した。妻たちは、父親が誠実でなかったこと、そして自分たちが去るべきことに同意した。

グリフィス・トマス（W. H. Griffith Thomas）はここで、神の導きを見分けるための、いくつかの興味深い原則を指摘している。第一に、ヤコブには〈願望〉があった（30:25）。第二に、何らかの変化を必要とする〈状況〉が生じた。第三に、〈神のことば〉がヤコブに強く迫っていた。最

後に、ラバンとの絆があったにも関わらず、妻たちの〈承認と支持〉があったことである。^{* (25)} 神の使い（11節）がベテルの神（13節）であることを見逃してはならない。

31:19～21 密かに逃げる前に、ラケルは、父が所有しているテラフィムを盗み出し、らくだの鞍の下に隠しておいた。このような家の守り神を持つことは、その家のリーダーであることを意味し、結婚した娘がそれを持つことは、父の財産の権利を夫に保証することになった。^{* (26)}（しかし）ヤコブがカナンに逃れた時、ラバンには自分の息子がいたので、父のテラフィムに対する権利は息子たちだけにしか属さない。したがって、ラケルがそれを盗んだことは重大な事件だった。ラケルには、ラバンの財産を相続する優先権を夫のために確保する、という意図があったのである。

31:22～30 ラバンと身内の者たちは、彼らが出て行ったことを知ると、七日間、彼らの後を追った。しかし、主は夢の中で彼らに現れ、ヤコブ一行に迷惑をかけないようにと警告された。ようやく追いついたラバンの不満は、盛大な見送りができなかったことと、偶像を盗まれたことだけだった。

31:31～35 この第一の訴えにヤコブは答えて、ラバンが自分の娘たち（ラケルとレア）を力づくでヤコブから奪うことを恐れて、密かに出て行ったのだと言った。第二の訴えに対しては、ラバンの神々を盗んだことを否定し、もし盗んだのなら、そのような罪人を生かしてはおけない、と軽率なことを言った。ラバンは一行の持ち物すべてを探したが、結局何も見つからなかった。ラケルがその偶像の上に座っていたのであるが、彼女は「生理中」で、らくだの鞍から降りられず、父に敬意を表すことができない、と言い訳をした。

31:36～42 今度はヤコブが怒る番であった。ラバンが自分を盗みの罪で訴えたこと、自分が忠実に、労を惜しまず仕えてきたにもかかわらず、二十年間も不当な扱いを受けたことを激しく非難した。この箇所から見えてくるのは、ヤコブが働き者であったこと、そして主が彼のすべての行いを祝福してくださったということである。私たちは雇い主に忠実だろうか。神の祝福は私たちの仕事の上にあるだろうか。

31:43～50 ラバンは、娘たちや孫たち、あるいは家畜に危害を加えることは無い、とのりくりと弁解し、問題を回避して、契約を結ぶことを提案した。それは、離れていても主が互いを見守ってくれることを期待するような、思いやりや親しみを込めた契約ではなかった。むしろ、二人のペテン師が、互いに目の届かないところにいるときも、悪いことをしないように主に見張りをしていただこう、と願うような契約であった。互いの不可侵条約でありながら、ヤコブはラバンの娘たちをひどい目にあわせたり、ほかに妻をめとったりしてはならない、という責任が付加されていた。ラバンは、その約束の印となる石塚を、アラム語でエガル・サハドタと名づけた。ヤコブはそれをヘブル語でガルエデと呼んだ。どちらも「証拠の石塚」という意味である。この石塚を越えて相手を攻撃してはならない、というのが両者の意図である。

31:51～55 ラバンは、アブラハムの神、ナホルの神、彼らの父祖（テラ）の神にかけて誓った。「神 (God)」が大文字で書かれている（NKJV、NIV、モファット訳）のは、ラバンはアブラハムが知る唯一の真の神のことを指している、と翻訳者が考えたことを示している。しかし、ヘブル語には大文字と小文字の区別がないので、かつてアブラハムやナホルがウルで拜んで

いた異教の神々を指している可能性もあるが、確実ではない。**ヤコブも、父イサクの恐れる方にかけて誓った。**イサクは決して偶像を拜むことはなかった。**ヤコブはまずいけにえを献げ、それからその場に**いるすべての人のために宴会を開き、**山で一夜を明かした。**

翌朝早く、ラバンは孫と娘たちに別れの口づけをして、家路に就いた。

6. ヤコブとエサウの和解 (32、33章)

32:1~8 ヤコブはカナンに向かう途中、神の使いたちの一団に出会い、その場所をマハナイム(「二つの軍団」または「二重の陣営」)と呼んだ。この二つの陣営は神の軍勢(2節)とヤコブの一行である可能性がある。あるいは、二つの軍団は、大群衆の比喩的表現である可能性もある(10節)。ヤコブはその土地に近づくにつれ、**兄のエサウのことを思い出し、復讐を恐れた。**エサウはまだ、自分の祝福をだまし取られたことを怒っているだろうか。そこでヤコブはまず、**兄のエサウに、前もって使いを送り、友好の挨拶を託した。**その後、エサウが**四百人の一団を引き連れてやって来ると聞くと、非常に恐れ、家族を二つの宿営に分けた。**たとえ第一の宿営が減ばされても、第二の宿営は逃げるができる、と考えたからである。

32:9~12 ヤコブの祈りは、神に守っていただくほかはない、という必死の思いから発したものであった。その根底にあったのは、主がヤコブと、その先祖たちとの間に結ばれた契約関係であり、しかも、その祈りは心からへりくだってささげられたものであった。ヤコブは主のみことばに基づいて嘆願し、神の約束によりすがった。

最高の祈りとは、内側の切実な必要から生まれるものである。私たちは、人間的に

安全策を講じることによって、自らを力強い祈りの生活から遠ざけてしまうことがよくある。このような間違いを犯す必要はどこにもない。

32:13~21 次にヤコブは、合計580頭の家畜の群れを、次々と三回に分けてエサウのもとに送った。エサウをなだめたい、との思いからである。こうすることで、エサウは三度、贈り物を受け取ることができるわけである。ヤコブの巧妙な作戦は、ヤコブの不信仰の表れであり、少なくともヤコブに信仰と不信仰が混在していることを示していた。

32:22~32 自分の肉親にヤボク(「彼は空(から)になる」の意)の流れを渡らせた後、ヤコブはその夜、ひとりベヌエルに残ったが、そこで人生最大の出来事が彼の身に起ころうとしていた。**ある人が夜明けまで彼と格闘したのである。**その人とは、御使いであり(ホセア12:4)、ヤハウェの御使い、また主ご自身であられた。主はヤコブのももの関節を打ったのももの関節が外れた。その結果、ヤコブは死ぬまで足を引きずって歩くことになった。この格闘で、ヤコブは力では負けたが、霊的には大勝利を得た。彼は敗北によって勝利し、弱さによって強くなることを学んだのである。ヤコブは自我と、自分の才能に対する自信を「空(から)にされ」、自分がヤコブ、すなわち、人を押しのける者、欺く者であることを告白したのである。すると神は彼の名をイスラエル(「神が治めたもう」「神と争う人」「神の王子」等、さまざまに訳される)に変えられた。ヤコブはその場所をベヌエル(「神の御顔」と名づけた。彼は主を見たことを知ったのである。ファイファー(Charles F. Pfeiffer)は、32節が今日のユダヤ人の間でも踏襲されていることを指摘している。

正統派ユダヤ教徒は、食用の動物を屠殺する前に、坐骨神経、つまり大腿静脈を取り除かなければならない。^{*(27)}

33:1～11 エサウが近づいてくると、ヤコブは思わず恐怖に襲われ、生来の行動に戻ってしまった。そして自分が最も大事にしている者が最も安全な位置に来るように、家族全体が並んでいた順番を変えた。ヤコブは兄に近づくまで、七回地にひれ伏した。ヤコブとは対照的に、エサウはくつろぎ、友好的で、自分の気持ちを素直に表し、まずヤコブに、次に、ヤコブの妻たちや子どもたちに対面した。エサウは、並はずれた数の家畜を贈るという申し出をやりわりと断ったが、最後には受け入れることにした。ヤコブは、卑屈なほどに兄を立て、自分をしもべと呼んだ。エサウの顔を見るのは、神の御顔を見ているようです、とヤコブが言っているのは、お世辞であり、誇張であるという見方がある一方、ここで神の御顔と言ったのは、不仲が解けた表情のこと、と考える見方もある。

33:12～17 エサウが、一緒に旅を続けようかと提案すると、ヤコブは、子どもたちや若い家畜はどうしてもゆっくり歩かなければならないので無理でしょう、と言い繕った。ヤコブは「セイル（エドム）へ参ります」と言ったが、そうするつもりはさらさらなかった。エサウが部下を何人か残し、ヤコブ一家に同行させようとした時も、ヤコブは本当の理由を明かさずに断った。実は恐れと疑いがあったのである。

33:18～20 ヤコブはセイル山に向かって南下せずに、北西に進路をとった。そして、無事にシェケムの町にたどり着き、そこに居を定め、祭壇を築き、（おそらく

は僭越に思いながらも）それをエル・エロヘ・イスラエル（神、イスラエルの神）と名づけた。その20年前、神がベテルで現れた時、ヤコブは主を自分の神とし、自分の財産の十分の一を主に献げ、ベテルを不動の神の家とします、と誓ったはずであった（28:20～22）。ところが今、彼はベテルには戻らず、そこから50キロも離れた肥沃の地、シェケムに腰を落ち着けてしまう。おそらくは家畜のことを考えたのであろう（シェケムはこの世を表している）。神が直接ヤコブにお語りにならないまま数年が経過し、ついに神は、ヤコブが立てた誓いを果たすように呼びかけられた（35章）。34章の悲惨な出来事が起きたのは、その時のことである。

7. シェケムでの罪（34章）

34:1～12 この章に神の御名は出てこない。ヤコブとその家族がシェケムに住んでいた時のこと、娘ディナは、異教の女たちと親しくなった。神を畏れない人々との間に適正な距離を置かなかったのである。そのようなある時、ハモルの子シェケムは、彼女に性的暴行を加えてまで結婚を迫った。ヤコブとその息子たちが激怒していることを知ったハモルは平和的な解決を提案した。イスラエル人とカナン人が互いに縁を結べば、イスラエル人もその土地の住民としてすべての権利が保証される、というのである。（9節は、何度となくメシアに至る血統を汚そうとするサタンの企ての一つと見ることができる。）シェケムは、どんなに高い花嫁料と贈り物を求められても、それを支払いましょう、と言うのであった。

34:13～24 ヤコブの息子たちにはディナをシェケムの言いなりに嫁がせるつもりは毛頭なかったが、もし、町に住む男子が割礼を受けるなら、嫁がせてもよい、と

嘘をついた。神の契約の神聖なしるしが、邪悪な目的のために用いられようとしていたのである。一方、ハモルとその子シェケムそして町の人々は、そのことばを信じ、条件をのんだ。

34:25~31 しかし、シェケム人たちが、(割礼という)外科的処置(の傷)から回復する前に、シメオンとレビは自らの約束を反故(ほご)にし、彼らを惨殺し、その財産を略奪した。ヤコブはやんわりと叱責したが、シメオンとレビは、「妹が遊女のように扱われてもよいのですか」と言うありさまだった。実際のところ、シェケムの男たちになされた戦慄すべき不当行為より、ヤコブは自分の安全を気にしていた様子がうかがえる。(英訳では)30節の中だけで、一人称代名詞“I”が8回も使われていることに注意しよう。

8. ベテルへの帰還 (35章)

35:1~8 35章は、神がヤコブに、約30年前に立てた誓い(28:20~22)を果たすように命じられたところから始まる。主は前章の悲劇的な出来事を用いて、家父長(ヤコブ)がそうするように仕向けてくださったのである。なお、34章では神への言及がなかったのに、この章では約20箇所あることに注目しよう。神のご命令にしたがってベテルに戻る前に、ヤコブは「異国の神々を取り除き、身をきよめ、衣を着替えなさい」と家族に命じた。そうするやいなや、彼らは近隣の異教の人々にとって恐怖的となった。ヤコブがエル・ベテルに祭壇を築いたのは、兄エサウから自分を守ってくださった神を礼拝するのにふさわしいことであつた。

35:9~15 神は、ヤコブの名をイスラエルとし、アブラハムとイサクとの契約を更新したことを宣言された。家父長(ヤコ

ブ)はその神聖な場所に石の柱を立て、改めてそこをベテルと名づけた。

35:16~20 ヤコブの一家がベテルから旅立って南に移動していた時のこと、ラケルは出産のさなかに死んだ。ラケルはその子をベン・オニ(「私の苦しみの子」と名づけたが、ヤコブはこの12番目の息子をベニヤミン(「私の右手の子」と名づけた。この二つの名前は、キリストの受難と、それに続く栄光を予感させるものである。ラケルの墓は、エルサレムからベツレヘムへ向かう道の途中にあるとされてきたが、これはおそらく本物ではない。なぜラケルは、アブラハム、サラ、そしてリベカと同じヘブロン(の)洞穴に埋葬されなかったのだろうか。それは、ラケルが一族に偶像を持ち込んだためかもしれない。

35:21~29 父の側女(そばめ)ビルハに対してルベンが犯した罪が手短かに記されているが、この罪のせいで、ルベンはみすみす長子の権利を失うことになった(49:3,4)。22節の最後の文は新しい段落の始まりであり、「ヤコブの子は十二人であつた」と記されている。続く4つの節では、12人の息子たちが列挙されている。26節を見ると、これらの息子たちは「パダン・アラムで生まれたヤコブの子」と書かれているが、ベニヤミン(24節)は例外である。ベニヤミンはカナンで生まれたのである(16~19節)。ヤコブは、父イサクが生きている間に、ヘブロンに戻ることができた。母リベカはその数年前に亡くなっていた。この章には三つの葬儀が記録されている。リベカの乳母デボラ(8節)、ラケル(19節)、そしてイサクの葬儀(29節)である。

9. ヤコブの兄、エサウの子孫 (36章)

36:1~30 36章は、死海の南東にあ

るエドムの地に住んでいたエサウの子孫について書かれている。その歴史（すなわち系図）は、エサウが一つの国民の長になるという約束（25:23）が成就したことを示している。エサウには三人、ことによると四人の妻がいた。二つの名前を持つ女性が何人いたかによって異なるのである（26:34、28:9、36:2,3を参照）。24節には、アナが温泉を見つけたことが記されている。

36:31～43 創世記の著者モーセは、神の啓示によって（35:11参照）、イスラエルにやがて王が誕生することを知った。創世記4章で、不信仰なカインの家系が七代とりあげられたのと同様に、ここ33～39節では、エサウの家系に連なる不信仰な七代の王たちへの言及がある。「七」という完全数は、おそらく家系の始めから終わりまでを示しているのであろう。エサウの子孫は、神に忠実な者の名簿に一人も記されていない。生ける神から離れた人はみな、忘却の彼方に消えてしまった。はかない富と、東の間の名声は得たかもしれないが、永遠に得たものは何もなかったのである。

D. ヨセフ（37:1～50:26）

1. ヨセフ、奴隷として売られる（37章）

37:1～17 「これはヤコブの歴史である」ということばは唐突に感じられるが、ヤコブの歴史（25～35章）は、エサウの年代記（36章）で中断され、その後37章から創世記の最後まで、ヤコブの息子ヨセフに焦点を置いて続いている。

ヨセフは旧約聖書における、主イエス・キリストの最も見事な予型（象徴）の一人である。ただし、聖書そのものは一度もヨセフを予型と言っていない。ピンク（A. W. Pink）は、ヨセフとイエスの一致点を101個、^{*(28)} ハババージョン（Ada Haber-

shon）は121個挙げている。たとえば、ヨセフは父に愛されていた（3節）。兄弟たちの罪を叱責した（2節）。兄弟たちに憎まれ、敵の手に売られ（4、26～28節）、不当な罰を受け（39章）、高い地位に引き上げられ、世界を救う者となった。世界中が食物を得ようとヨセフのもとにやって来たからである（41:57）。ヨセフは、兄弟たちから拒絶されていた期間中に、異邦人の花嫁をめぐらした（41:45）。

あや織りの長服とは父親が特別に目をかけていたことのしるしであったので、兄たちの妬みと憎しみをかき立てることになった。ヨセフの最初の夢では、11本の穀物の束が12番目の束を伏し拝んだ。いつの日か、兄弟たちがヨセフに対して膝をかかめるようになる、という預言である。次の夢では、太陽と月と十一の星がヨセフを伏し拝んだ。太陽と月は、ヤコブとレアを表している（ラケルはすでに亡くなっていた）。十一の星とはヨセフの兄弟たちのことである（9～11節）。

37:18～28 ヨセフが兄たちのもとに使いに出された時、兄たちは彼を殺そうと企んだ。しかし、ルベンの提案で、ドタンの近くの穴に投げ込むことにした。そして食事をしようと腰を下ろした時、エジプトに向かうイシュマエル人の隊商を見かけたので、ユダの提案で、ヨセフを売ることにした。この箇所では、イシュマエル人は士師記8:22～24の場合と同様、ミディアン人とも呼ばれている。ミディアン人の商人たちが通りかかった時、兄弟たちはヨセフを穴から引き上げ、商人たちに売ったのである。

37:29～36 これらの出来事が起こっていた時、ルベンはその場にいなかった。戻って来た時、ルベンはひどく恐れた。ヨセフがいなくなったことを父親に説明する

のは彼の責任であったからである。そこで、兄たちは、ヨセフのあや織りの長服を雄やぎの血に浸し、平然とヤコブのところに持って帰った。当然ヤコブは、ヨセフは殺されたものと思い込んだ。かつて、ヤコブはやぎで父を欺いたことがある。やぎの毛皮を腕に巻き、毛深い兄（エサウ）になりましたのである（27:16～23）。今度は、ヤコブ自身が、ヨセフの長服についたやぎの血で無残にも騙された。ある人が言うように「欺きがもたらす痛みを（ヤコブは）またもや経験している」わけである。ミディアン人たちは、ヨセフを無償でエジプトまで運び、ファラオの廷臣、その侍従長ポティファルにヨセフを売ったが、それは自分たちが神のご目的を果たすためとは知る由もなかった。このように、神は人の憤りすら、ご自身が賛美されるためにお用いになり、賛美につながらないことは抑制されるのである（詩篇76:10参照）。

2. ユダとタマル（38章）

38:1～11 ユダとタマルの浅ましい罪の物語は、主イエスがユダの子孫としてお生まれになったことを思い起こすと、かえって神の恵みを一層際立たせるものになっている（ルカ3:33）。タマルはマタイ1章の系図に登場する五人の女性の一人で、そのうちの三人——タマル、ラハブ（5節）、バテシェバ（6節）——は不道德の罪を犯している。残りの二人とは、異邦人のルツ（5節）、そして敬虔な乙女マリアである（16節）。ピンク（A. W. Pink）は、この（ユダとタマルをめぐる）道徳的な過ちの物語には、もっと深い意味がある、と指摘する。

創世記37章は、ヤコブの息子たちが
弟ヨセフをミディアン人に売り渡し、ミ

ディアン人はヨセフをエジプトに売り渡すところで終わっている。これはキリストがイスラエルに拒絶され、異邦人の手に引き渡されることを示す予型である。ユダヤの指導者たちが、自分たちのメシアをピラトの手に引き渡した時から、ユダヤ人は民族として、メシアとの関係を失い、神ご自身（の関心）もユダヤ人から異邦人に移ったのである。それゆえに、（ヨセフという）予型には、この時点で重要な変化が起きている。ヨセフは今や、異邦人の手の中にある存在となった。しかし、エジプトにいるヨセフに何が起こるかが語られる前に、聖霊はヨセフの対型である御方（イエス）がイスラエルからいなくなった後のユダヤ民族の歴史がどうなるかという概略を象徴的になぞっておられるのである。^{*}(29)

ヨセフの物語が38章で中断されているのは偶然ではない。ヨセフの家族の不名誉な言動は、かえって、ヨセフの言動を、汚れた世の中でまばゆい光のように輝かせているのである。

ユダのそもそもの間違いは、彼がカナン人、シュアという人の娘と結婚したことに始まった。彼女は三人の男子—エル、オナン、そしてシェラー—を産んだ。エルはタマルというカナン人の女と結婚したが、特定できない悪事のために主によって命を絶たれた。当時は、兄弟や近親者がその未亡人と結婚して、亡くなった人のために子孫を育てるのが慣習であった。オナンはそれを拒んだ。そのようにして生まれた最初の子は、エルの法定相続人となってしまう、自分の跡取りとはならないことを知っていたからである。オナンの罪は、性的なもの、というよりは、むしろ利己的なものであつ

た。(しかも) たった一回の行為ではなく、ヘブル語から明らかなように、執拗な拒絶であった。そして(オナンが)拒絶したことが、(ひいては)ダビデの王座を継ぐ権利を正式に持つキリストの系図にまで影響を及ぼすことになった。オナンの行為は、主の目に悪しきことであったので、主は彼も殺された。これを見たユダはタマルに、三男のシェラが成人するまで実家に戻るように命じたが、実は、本音を隠すための方策に過ぎなかった。ユダは、シェラをタマルと結婚させたくなかったのである。すでに二人の息子を失ったユダは、タマルを「不吉な女」と見ていたからである。

38:12~23 シェラが成人してもユダが一向に結婚の段取りをしようとしないので、タマルはユダを罠にけることにした。タマルは遊女の装いをして、ティムナへの道にあるエナイムの入り口に座った。ユダは羊の群れの毛を刈る者たちに加わるため、そこに向かう途中であった。果たして、ユダは彼女のところに入り、不義の関係を結んだ。まさか、その女が嫁だとは知らなかったからである。二人は群れの中からの子やぎ一匹を報酬とすることで合意したが、「遊女」は、それが自分に届けられるまでは、ユダの印章とひもと杖が欲しい、と要求した。ひもというのは、印章を通して吊り下げるためのものであったかもしれない。ところが、ユダが子やぎを届けてしるしを取り戻そうとしてみると、もはや「遊女」はどこにも見当たらなかった。

38:24~26 三か月ほどして、タマルは姦通の罪を問われた。彼女はやもめであったのに、身ごもっていたからである。ユダは、彼女を焼き殺せと命じた。タマルはそれを予期していたかのように、しるしを取り出して、その持ち主こそが、生まれてくる子の父親なのです、と告げた。それら

は、ユダがタマルと性的関係を持ったことの確証となった。ライト(Walter C. Wright)はこの場面を次のように活写している。

ユダは友人から、あなたの嫁のタマルが売春のまねことをしている、と聞かされた。ユダの判断は迅速かつ決定的であった。「彼女を焼き殺せ」。そこには躊躇も妥協もなかった。この恐ろしい宣告を発する彼の声は、少しも震えてはいなかった。イスラエルの共同体は、このような愚かさや悪から守られなければならないのであった。噂が立った。日時が決められ、準備が進められた。火刑用の柱が立てられた。薪がうず高く積まれた。大変な人だかりとなった。女は逃れようのない破滅へと向かって歩き出した。しかし、その両手には、ある印が握られていた。彼女はその証を手放そうとしなかった。それは杖と印章である。何とその杖は、ユダの杖であり、その印章は、ユダのものであった！それらの印は、まさに女を裁いた者を告発していたのである。ユダの判決は、今や、その重みを全く失っていた。^{*(30)}

38:27~30 タマルの出産の時には、赤子の一人目が手を出したので、助産婦はその手に真っ赤な糸を結び付けた。その子が最初に生まれる、と思ったからである。ところが、その手を引っ込めたとき、もう一人の兄弟が出て来た。それで彼女は、「何という割り込みをするのですか」と言った。助産婦は最初に生まれた子をペレツ(突破)、もう一人をゼラフと名づけた。この双子は両者ともマタイ1:3にその名前

登場するが、メシアの家系に関してはベレツを経由していく。ゼラフはアカンの先祖にあたる（ヨシュア7:1）。グリフィス・トマス（Griffith Thomas）はこう述べている。「神が、これほどまでもにつれた糸のかせを手にとり、それをご自身の図柄に織り込まれたことは、ただ驚嘆するばかりである」。^{*(31)}

ユダがカナン人の女と結婚した（2節）のは、神の民が、不道徳で悪名高い民族と混ざり合っていく第一歩となった。イスラエルは、後に、口にするものはばかられるほど卑猥な自然崇拜という巨悪に汚染されていく。神は分離の神である。この世と親密に交わるなら、恐るべき代償を支払うことになる。

3. ヨセフの試練と勝利（39章）

39:1～19 物語はここでエジプトに戻る。ヨセフは、ファラオの廷臣で侍従長のポティファルの家の管理を任された。主がともにおられたので彼は成功する者となった。ポティファルの妻は何度もヨセフを誘惑しようとしたが、ヨセフは断固として拒否した。ヨセフは主人の信頼を裏切るようなこと、また神に対して罪を犯すことはしなかったのである。ある日、彼女はヨセフの上着をつかんだ。ヨセフは体をよじらせ、彼女がつかんで離さない上着から抜け出て、一目散に逃げた。ヨセフは、上着は失ったが、自分の尊厳を失うことなく、やがては榮譽の冠を被（かぶ）せられることになった。（一方）彼女は、ヨセフが自分に乱暴しようとした「証拠」としてその上着を利用した。

信仰者は、不品行、偶像礼拝、そして若い時の情欲から逃げよ、と（聖書は）教えている。逃げることは墮落にまざる。

39:20～23 適正な捜査もしないまま、

ヨセフの主人は彼を捕らえ、監獄に入れよ、と命じた。しかし、そこでもヨセフは主の祝福を受け、責任ある地位を与えられた。ヨセフが処刑されなかった、という事実は、妻の言っていることをポティファルが鵜呑みにしていなかったことを暗示しているのかもしれない。彼女の本性を知らないはずがないからである。ローマ8:28がいかに真実なものであるかが、この章で見事に描かれている。神は、ヨセフのために、舞台裏で働いておられたのである。ヨセフは誘惑に抵抗し、罪を犯す機会を避けた（8～10節）。それにも関わらず、ヨセフの場合は、誘惑者が仕掛けた罠にはめられる、という目に遭った。そのため、またしてもヨセフは鎖につながれることになった（詩篇105:17～19）。状況が状況であるのだから、ヨセフが動揺してもおかしくはなかった。しかし、ヨセフは状況に支配されてはいなかった。状況の手の届かないところにヨセフはいた。そしてその中に神の御手があるのを認めていたのである。監獄で過ごした期間は、やがて支配者となる時のための訓練期間となった。このようにして、他者が図った悪が、蓋を開けてみれば益に変わっていたのである。

4. ヨセフ、献酌官と料理官の夢を解き明かす（40章）

40:1～19 ヨセフの囚人仲間エジプト王の献酌官と料理官がいた（1～4節）。二人がそれぞれ夢を見たとき、ヨセフはその解き明かしを申し出た（5～8節）。献酌官が見たぶどうの木の前夢は、三日のうちに、ファラオに呼び出され、元の地位に戻れることを意味していた（9～15節）。しかし、料理官が見た、三つの枝編みのかごは三日のうちにファラオから呼び出され、木に吊るされてしまうことを示していた（16～

19節)。

ヨセフは自分を取り巻く環境が(自然に)変わるのを待っていたわけではないことに注意しよう。ヨセフは神を崇め、(自分が置かれた)状況の中で他の人の役に立とうとしていたのである。

40:20~23 献酌官長は釈放されたものの、かねて約束してあった通りに、ヨセフのために執り成しをすることを忘れてしまった(23節)。しかし、主は忘れておられなかった。「あなたが幸せになったときには、どうか私を思い出してください」(14節)。救い主(イエス・キリスト)も、裏切られる夜、それと同様のことばを語られた。象徴としてのパンとぶどう酒にあずかることによって、私たちはそのみことばに従うことができるのである。

5. ヨセフ、ファラオの夢を解き明かす (41章)

41:1~13 エジプトの呪法師が、だれ一人、ファラオの夢、つまり肉づきの良い雌牛七頭と、醜く痩せ細った雌牛七頭の夢、よく実った七つの良い穂と、しなびた七つの穂という夢を解釈できなかったのを見て、献酌官長はヨセフと夢を解き明かすヨセフの能力を思い出した。「それから二年後」と1節にあるのは、ヨセフが収監されていた期間を指すのか、それとも献酌官が釈放されてから経過した期間を指すのかのどちらかであろう。

41:14~32 ファラオの前に呼び出されたヨセフは、エジプト全土に七年間の大豊作が訪れること、そしてそれに続いて、七年間の飢饉が起り、国土が荒廃することを説明した。ファラオの夢が繰り返され、重複しているのは、このことが神によって定められ、神が速やかにこれをなさることを意味していた。これと同じ例を、ヨセフ

の将来に関する二回の夢(37:6~9)、またダニエル書2章と7章にある同様の幻に見ることができる。聖書で「二」は、証人の数である。ヨセフは王宮でファラオに、監獄で廷臣たちに言ったのと同じ返答をしている。「私ではありません。神がファラオの繁栄を知らせてくださるのです」(16節、40:8と比較)。この謙遜があったからこそ、主はヨセフに途方もない責任を委ねられた。ヨセフの場合は、そのようにしても(高慢になって)墮落する心配がなかったのである。

41:33~36 ヨセフはファラオに、大豊作の間に穀物を分けて蓄えておき、飢饉の時に十分な量が確保できるように助言した。ヨセフの構想は、それ以降、「常備穀倉」(※物価の安定や、不作への備えのため、政府が買い取って保管する余剰作物と呼ばれるもの)となった。

41:37~46 ファラオは大喜びで、ヨセフに自分に次ぐ統治権を与え、この計画の実行者に任命した(40節)。もはや、だれもヨセフの許可なしに何かをすることはできなかった(44節)。そして、ヨセフにツァフェナテ・パネアハという新しい名を与えた(45節)が、この名前の意味は不明である。「世の救い主」という説もあれば、「神が語られる。神は生きておられる」という意味ではないか、という説もある。ファラオはまた、異邦人であるアセナテをヨセフの妻にした(45節)。どうしてファラオは、まだ夢の実現を見ていないのに、夢の解き明かしができたという理由だけで、ヘブル人の囚人をエジプト全土の支配者に任命できたのであろうか。その答えは箴言21:1にある。「王の心は、主の手の中にあって水の流れのよう。主は御心のままに、その向きを変えられる」。クリーム(※英語では「最良の部分」という意味)は(や

がて）表面に浮き上がって来る。異邦人の政権で頭角を現した敬虔なユダヤ人は多くいるが、ヨセフはその最初であった。ヨセフがこの任務に就いたのは三十歳の時である（46節）。兄たちの手によって売り渡されてから十三年の時が経過していた（37:2参照）。

41:47～52 最初の七年間は、もはや正確な記録を残すことはできないほどの空前の豊作となった。ヨセフに二人の子が生まれたのはこの時期のことであった。マナセ（「忘れさせる」）とエフライム（「実り多い」）である。自分が受けたさまざまな不正を忘れたヨセフは、豊かな実を結んだのである。

41:53～57 七年の飢饉が始まると、エジプトおよび全地は、穀物を買うためにヨセフのところに来た。このヨセフはキリストの予型（象徴）である。キリストを通して、神のすべての祝福が、地の飢えと渇きに苦しむ人々に分与されるのである。ヨセフがエジプトに連れて来られたのは、家族を飢饉から救うための神の摂理というほかはない。しかし、それはカナンの道徳的退廃から彼らを隔離するためでもあった。38章には、カナンにいたイスラエルの子らに何が起こっていたかが具体的に記されている。神の救済策は、彼らをエジプトに移し、異教の民との関係を事実上断絶させることであった（43:32）。

6. エジプトに来たヨセフの兄弟たち （42～44章）

42:1～5 カナンのヤコブに再び場面が切り替わる。カナンでは飢饉が深刻化していた。エジプトにヨセフがいることを知らないヤコブは、エジプトにあり余る穀物があることを知り、食料を確保するために十人の息子たちを送り出した。ベニヤミン

だけが家に残された。ヤコブの知る限り、ベニヤミンは最愛の妻ラケルの、生きている唯一の子どもだったからである。

42:6～25 ヨセフは兄弟たちが目の前に現れると、荒々しいふるまいをし、「おまえたちは回し者だ」と言って彼らを責め、監獄に放り込んだ。そして、末の弟ベニヤミンを連れて来るがよい、と要求した。ついにシメオンは人質として牢に入れられ、他の九人は、十分な穀物、食糧、および袋の中にひそかに返された銀を持って、カナンに帰って行った。ベニヤミンを連れて来るためである。この物語からはっきり伝わってくるのは、兄たちに対する、ヨセフの隠れた愛と思ひやりであり（24,25節）、20年前に「行方知らず」となった弟に対する兄たちの罪責感の深まりである（21,22節）。ヨセフは、もちろん、兄たちに罪を認めさせて告白に至らせようとしていたのである。

このヨセフは、やがて来る患難時代において、キリストがご自分の「兄弟」であるユダヤ民族にどう対処されるかを示す「予型」である、と筆者は考える。ヨセフが兄たちと和解するクライマックスに至る一連の出来事は、聖書の中で最も感動的な箇所のひとつである。それに比べれば、これほど親密に、また詳細に、そして余すところなくキリストを描いている物語はない、と言ってもよいだろう。

予型論

旧約聖書のある特定の人物、出来事、物事が、新約聖書における「型」（type）〔ギリシア語の $\tau\upsilon\pi\omicron\iota$ から〕、または象徴であることは明らかである。たとえば、アダムはキリストの型と言われている（ローマ

5:14)。また、特に型と明言されていないものの、類似点がありにも多く、明白であるため、否定することができない場合もある。たとえばヨセフの場合、主イエスの型であると断言はされていないが、イエスとヨセフの類似点は百を超える。

悲しみのうちにエマオに向かう二人の弟子に対して、主イエスは「ご自分について〈聖書全体に〉書いてあることを彼らに説き明かされた」（ルカ24:27）。受肉されたキリストは「今、わたしはここに來ております。巻物の書にわたしのことが書いてあります」（ヘブル10:7）と言われた。したがって、聖書全巻の中で、キリストについて書かれたものがあるかどうかを確認するのは正当なことなのである。

旧約聖書におけるイスラエルの経験について「これらのことが彼らに起こったのは、戒め（*tupoi*=「型」）としてであり、それが書かれたのは、世の終わりに臨んでいる私たちへの教訓とするためです」（Ⅰコリント10:11英訳）とパウロは言っている。もしそうだとすれば、具体的に型と呼ばれているものだけが正当なのではなく、他にも多くの型があるという見解には明確な根拠があることになる。

パウロはテモテに、聖書に書かれていることはすべて有益である、と念を押している（Ⅱテモテ3:16）。見る目さえあれば、学ぶべき霊的な教訓が存在しているのである。

ヘブル人への手紙の大部分は、幕屋とその調度品を予型論的に記述したものである。予型論的な見方をあまり制限してしまうと、旧約聖書を霊的に楽しむ信仰者の喜びを抑制してしまう反面、何もかも予型にしたり、歴史のすべてを寓話（アレゴリー）にしたりするという、もう一方の極端も避けなければならない。

予型を、こじつけや思いつきで説明したために、予型論は不評を買ってきた。旧約聖書の、せつかくの霊的な富を、偏った見方で見失うようなことがあってはならない。ある解釈の結果、キリストが崇められ、または（あるいは、それに加えて）、キリストを信じる者の徳が高められ、失われた人々に福音がもたらされ、それが聖書全体の教えと一致するならば、控え目に言っても、その解釈は真理の適用としての正当性を有するのである。

42:26～28 帰り道、兄たちの一人が自分の袋の口に、銀があるのに気づいた。それを知って、彼らは慌てた。窃盗の罪に問われるのではないかと恐れたのである（26～28節）。

42:29～38 家に着いてその話をすると、残りの者たちもそれぞれ銀を見つけたので、彼らの恐怖は倍増した。ヤコブは悲嘆にくれるばかりであった。家父長（ヤコブ）は、ルベンが二人の息子の命を保証として差し出したにもかかわらず、ベニヤミンをエジプトに行かせることに恐れを感じた。ベニヤミンにわざわざ降りかかることを望まなかったのである。

43:1～15 飢饉は凄まじく、ついにヤコブも行動を起こさないわけにはいかなかった。兄たちも、ベニヤミンを置いたまま戻ることではできなかった。それが、支配者ヨセフの出した条件だったからである。そこでユダは、自分がベニヤミンの保証人となることを承諾し、ヤコブもその申し出を受け入れた。少なくともこの一点において、ユダはその子孫となる主イエスを彷彿とさせる。主はあのカルバリの十字架上で、私たちの保証人となってくださったからである。ヤコブはエジプトの支配者（ヨセ

フ)に、贈り物を持って行かせた。その中身は、乳香と蜜を少々、樹膠(じゅこう)と没薬、ピスタチオとアーモンド、つまり飢饉の影響を受けないものだった。また、是非とも二倍の銀を持って行くように、と言った。銀が返されたのは何かの間違いであった場合に備えてのことであった。

43:16~25 兄たちに再会したヨセフの感動はひとしおであったが、まだ自分の正体は明かさなかった。ヨセフはしもべたちに命じて、宴会の支度をさせた。兄たちはヨセフの家に連れて行かれた時、袋に戻されていた銀のために厳しく責められるのだ、と思った。彼らは家を管理するその人に、包み隠さずすべてを説明した。すると、管理者は「何も心配するにはおよびません」と言って、彼らを安心させた。彼の記録によれば、支払いは完全に済んでいる、というのである。シメオンも牢から釈放されて、宴会の準備に加わった。彼らはヨセフが昼に帰って来たときに渡せるように、父からの贈り物を用意した。

戻された銀が、本当にカナンに帰る途中で見つかったのか(42:27、43:21)、それとも家に着いてヤコブの前に出た時に発見したのか(42:35)と問われれば、どちらも正解である。つまり、気がつくのに二つの段階があったのである。兄の一人にとっては、帰宅途中で窮地に立たされたことに気づいたが、他の兄たちは帰宅後に気がついたのである。ヨセフに仕える管理者にその経過を説明する際、要約して説明したのは十分理解ができることである(“*Daily Notes of the Scripture Union*”)。

43:26~34 ヨセフが家に帰って来た

とき、兄たちは地に伏して彼を拝したが、それはヨセフの見た夢が成就した瞬間でもあった(37:7)。ヨセフは家族の安否を尋ね、ベニヤミンを見て、胸がいっぱいになってしまった。宴会では、ヨセフはヨセフ用の食事をとり、11人の兄たちにはそれぞれ別々に食事が出された。エジプト人もエジプト人だけで食事をした。兄たちがひどく驚いたのは、年長者から順に席が割り当てられたことであった。自分たちの生まれた順番を知っている者がエジプトにいるわけがない、と思ったからである。ヨセフの実の弟であるベニヤミンの待遇は別格であった。

44:1~13 兄弟たちがカナンに帰ろうと出発の準備をしていた時、ヨセフは、自分の銀の杯をベニヤミンの袋に隠すように命じた。その杯は、何かを飲むためだけでなく、占い—おそらくは夢の解き明かし—にも使われたものであった。

後に、神の民は占いをすることを禁じられている(申命記18:10~12)。しかし、この時点でも、ヨセフがエジプト式の占いをしていたとは考えにくい。ヨセフの直観と洞察力は主から来たものであるが、おそらくヨセフは、この杯を小道具として用い、自分がエジプト人である、と兄弟たちを納得させたかったのであろう。

その後、ヨセフの兄たちがその杯を盗んだ、と訴えられると、兄たちは無実を訴えたが、軽率にも、もしだれかがその杯を持っていたら、その者の命を差し出します、と言ってしまった。ヨセフに仕える管理者は、罪を犯した者が自分の奴隷となればそれでよい、と言って同意した。杯がベニヤミンの袋から見つかり、兄たちは打ちのめされ、町に引き返した。

44:14~17 ヨセフが彼らを非難すると、ユダは、全員がヨセフの奴隷になるこ

とを提案した。しかし、ヨセフは、奴隷になるのはベニヤミンだけで、他の者は帰ってよい、と言うのであった。ヨセフが銀の杯をベニヤミンの袋の中に隠し、ベニヤミンを拘束しようとしたのは、兄たちが犯した流血の罪を兄たちに認めさせるために、意図的に仕組まれたものであった。ウィリアムズ (George Williams) はこのように書いている。

ヨセフがそのような行動をとったのは、彼らが自らの罪を思い出し、自分の口で告白するためであった。…ヨセフがシメオンを、そしてその後ベニヤミンを拘留したのは、彼らが投獄された兄弟の叫びや、子を失った父親の涙に、相変わらず無関心であるかどうかを見極めるための巧妙な計画であった。ヨセフの計画は見事に成功した。ヨセフの厳しさと優しさの両方によって彼らは不安になり、その温かさによって悔い改めに導かれたのである。^{*(32)}

この情景はまさに、来るべき日の予告である。その日が到来すれば、イスラエルの残りの民は、メシアの死に自分が関わった罪を告白し、あたかもひとり子を失って嘆くように、メシアのために嘆くのである (ゼカリヤ12:10)。

44:18~34 ユダはヨセフのそばに立ち、ベニヤミンが巻き込まれた経緯を詳しく話した。ヨセフ自身が末の弟を連れて来るように要求したこと、息子の一人を失い、その悲しみに暮れていた父は、ベニヤミンがエジプトに行くことに反対したので、ユダが自らベニヤミンの安全を保証する保証人を買って出たこと、などである。もしベニヤミンを連れ帰らなければ、父は死んで

しまうでしょう、とユダは言った。そこで、自分がエジプトに残り、ベニヤミンの代わりに奴隷として働きます、と申し出たのであった。

何という態度の変化がユダに起きたことだろうか。37章において、ユダは冷酷にもヨセフを売って利益を得ようとし、父の断腸の思いを意に介さなかった。38章においては、欺きと不品行にはまってしまった。しかし、神がユダの心の中に働き続けておられたがゆえに、43章ではベニヤミンのために保証人となった。そして、この44章では、ヨセフの前に心を注ぎ出して執り成しをし、自らを奴隷として差し出している。それは、ベニヤミンを失うという壊滅的な悲しみを父に与えないためであった。かつては自分の弟を奴隷として売ったユダが、今度は弟の代わりに自分が奴隷となる、と言うのである。かつては父に冷淡であったユダが、今は父が幸せに暮らせるようにと、自分を犠牲にしようとしている。これはユダの人生に神の恵みが進行している証し以外の何ものでもない。

7. ヨセフ、兄弟たちに素性を明かす (45章)

45:1~8 これは聖書全体を通じ、最も感動的な場面の一つである。ヨセフはしもべに部屋を出るように命じた後、それまで抑えていた感情を解放し、兄弟たちに自分の正体を明かした。かつて自分たちがヨセフにした仕打ちを嘆いてはいけなく、神はむしろそれを良い方向に用いてくださったのだから、と。

45:9~15 彼らの父や家族を、持ち物とともにエジプトのゴシェンの地に連れて来るのが彼らの役割であった。飢饉はあと五年続くからである。エジプトでの私のすべての栄誉を父上に伝えよ、という命令は、

神の御前で愛する御子をほめ称えることに置き換えれば、私たちも従うことができる。ヨセフがベニヤミンの首を抱いて、兄弟みんなに口づけすると、大いなる深淵から泉が湧き出た。

これは、やがてカルバリのキリストがイスラエルの民の前に現れ、ご自身をメシア、また王として示される時に、彼らを待ち受ける喜びを予感させるものである。

45:16~24 事情を聞いたファラオは、ヨセフの兄弟たちに、父と家族を連れてカナンから来るように言った。ただし重い家財は運ぶに及ばない、必要なものはすべてこちらで用意するから、と。こうして彼らは、ファラオが用意した車だけでなく、ヨセフが与えた晴れ着、家畜、そして食糧を携えてカナンに戻って行った。ベニヤミンには祝金と特別にあつらえた晴れ着が与えられた。何年も昔、ヨセフを不当に扱った罪について互いを責めあうのではないか、と心配したヨセフは、「道中、言い争いをしないでください」と釘を刺すのを忘れなかった。

45:25~28 家に到着するとすぐ、彼らはこの知らせを恐る恐るヤコブに告げた。最初は理解が追いつかなかったが、話を最初から最後まで聞き、荷を満載した車を見て、ヤコブはこの話が本当であることを理解した。ヨセフがまだ生きている、そして再び会えるのだ、と。

ヨセフはこの章で五回も、父親に言及している。これは兄たちに対する無償の赦しに加え、ヨセフとキリストの類似性を示している。御父を愛し、その御心を行おうとしたからこそ、罪ある人間を贖うため、主はこの世に来られたのである。その愛の輝きに比べれば、ヨセフのヤコブに対する愛は、かすかな影でしかない。

8. ヨセフと家族との再会 (46章)

46:1~7 イスラエル (ヤコブ) はエジプトに向かう途中、歴史的に重要な場所であるベエル・シェバに立ち寄り、父イサクの神を礼拝した。ここは、イサクを献げる前に、神がアブラハムに現れ (21:31~22:2)、主がイサクに現れてくださった場所である (26:23, 24)。今回はヤコブを励ますために現れてくださった。これは主がヤコブに現れてくださった7回のうちの最後のもので、4節の二番目の約束は、ヤコブがいずれはカナンに帰ることを暗示しているようであるが、もちろん、実際にはエジプトで死んでいる。しかし、この約束は二つの方法で成就している。ヤコブの遺体はカナンに運ばれて埋葬され、ある意味では、ヨシュアの時代にヤコブの子孫が戻って来る時にヤコブも帰っているのである。「ヨセフが、その手であなたの目を閉じてくれるだろう」という表現は、ヤコブの安らかな死を予告している。アトキンソン (Basil F. C. Atkinson) はその慣用表現を的確に説明している。

ヤコブが死ぬと、ヨセフが父の目を閉じてくれる。ヤコブが死を迎える時、ヨセフはその側にいる。私たちは、ヤコブ個人に与えられた恵み深い約束に注目しよう。それは、ヨセフを失ったことによる長年にわたる悲しみと嘆きを補うためであった。神は、ご自分のしもべ一人ひとりの必要に気を配ってくださるのである (1ペテロ5:7)。*⁽³³⁾

こうしてヤコブは、すべての子孫と家畜、そして財産とともにエジプトに来了。

46:8~27 8~27節にあるのは、ヤコブとその子らの「戸籍簿」である。ヤコブ

とともにエジプトにやって来た者は・・・六十六人であった(26節)。この数字を、27節および出エジプト記1:5にある「七十」という数、また使徒7:14にある「七十五」という数と調和させるのは確かに難しい。しかし、これらの数は、直系の子孫から広い親族へと輪が広がっていると考えれば、明快に説明がつく。

46:28～34 イスラエルとヨセフの劇的な再会がゴシェンで実現した。そこはエジプトでも最も肥沃な地域で、ナイル川のデルタ地帯に近い。ヤコブとその息子たちは、そこに滞在することを選んだ。家畜の群れにとっては、最高の牧草地だったからである。そして、自分たちは羊を飼う者であることをファラオに告げることにした。羊飼いは、エジプト人に忌み嫌われる存在であったため、彼らはファラオが王宮から遠く離れたゴシェンの地に住まわせてくれる、と考えたのである。ゴシェンにいればエジプト人と社会的な交流をしないで済む。それは第一に民族が違うからであり(43:32)、第二に職業が違うからである。神は彼らをこの「孵卵器(ふらんぎ)」の中に留め置かれた。それは彼らがやがて強い国民となり、神が彼らの先祖に約束された土地を所有する力を持つようになるまでのことであった。

9. エジプトでのヨセフの家族(47章)

47:1～6 ヨセフの兄弟五人が羊を飼う者であることをファラオに告げると、ファラオは予想通り、緑豊かな牧草地ゴシェンに定住するようにと答えた。ファラオはまた、ヨセフに、身内の者の中から有能な者たちを見つけ、王家の家畜の世話をさせるように命じた。

47:7～12 ヨセフは、百三十歳になった父をファラオに紹介する手はずを整えた。

ヤコブがファラオを祝福した(直訳)という事実は、この年老いた無名のユダヤ人が、エジプトの権力者より偉大であったということである。なぜなら、下位の者は上位の者から祝福されるからである(ヘブル7:7)。ヤコブは、自分の生きてきた年月はわずかで、いろいろなわざわいがあった、と言う。実を言えば、そのほとんどは自ら招いたものであった。ヨセフは家族をエジプトの地で最も良い地に定住させ、彼らの必要のすべてを満たした。彼らはまさに「豊かないのち」を手に入れるに至ったのである。

47:13～26 エジプトとカナンの人々が銀をすべて使い果たした後、ヨセフはその代価として家畜を受け取った。さらにその後、ヨセフは、エジプトの祭司たちの土地を除くすべての土地を買い取り、人々に種を与えて作物を植えさせ、収穫の五分の一を地代として徴収するという、極めて公平な取り決めをした。

47:27～31 イスラエル(ヤコブ)は死ぬ日が近づいたとき、自分をカナンに葬るようにヨセフに約束させた。それから彼は、寝床の枕もとでひれ伏した(あるいは「自分の杖の上に寄りかかって礼拝」した(ヘブル11:21))。実際はヘブル語で同じ子音が使われており、どちらの母音を補うかによって「寝床」にもなり、「杖」にもなるのである。旧来のヘブル語本文では「寝床」と読ませているが、ヘブル人への手紙にも引用されている七十人訳では「杖」となっている。キドナー(Derek Kidner)はこのような注釈を施している。

ヘブル語本文も七十人訳も、48:2においては「寝床」となっているが、これはヤコブが最後の病気で倒れる以前の話である(48:1参照)。したがって「杖」とい

う意味にとる方が正しいであろう。「杖」であるならば、ヤコブの生涯の遍歴の象徴として（32:10の感謝のことばと比較）、また新約聖書のこの箇所で、特筆されるのにふさわしい。^{*(34)}

こうして、かつては人を押しのける者であった人物が、礼拝をしながら生涯を終えるのである。ヘブル11章に登場する信仰の英雄の中で、礼拝者として称えられているのはヤコブただ一人である。神の恵みによって、ヤコブは遥かな旅路を踏破した。そしてまばゆい栄光の輝きに包まれてこの世を去る時が間もなく来ようとしていた。

10. ヨセフの息子たちを祝福するヤコブ（48章）

48:1～7 父が病氣であると知らされたヨセフは、マナセとエフライムを伴い、父の枕元へと急いだ。臨終間近い族長（ヤコブ）は、力を振り絞って床の上に座り、二人の孫を自らの子として迎え入れた。こうすることによって、後年、カナン之地が諸部族の間で分割されるとき、ヨセフ族の受け継ぐ分が倍になるように手を打ったのである。こうしてヨセフは、領地に関する長子の権利を得ることとなった。その後ヨセフに生まれる子どもたちは、ヤコブではなく、ヨセフのものとなり、エフライムとマナセに割り当てられた土地に住むのである。7節を見ると、ヤコブがヨセフの子らを自分の養子にしようとした理由が説明されている。この二人は、若くして亡くなった最愛の妻ラケルによるヤコブの孫であったからである。

48:8～22 次に、ヤコブは孫たちを祝福し、弟であるエフライムに長子の権利を与えた。ヨセフは長子であるマナセが有利

になるように正そうとしたが、ヤコブはわざとそうしたのだ、と言った。信仰によって次男に祝福を与えたヤコブの脳裏にどのような記憶がよぎったのであろうか。はるか何年もの昔、ヤコブの父は、次男である自分を、それとは知らないで祝福したのであった。しかし今、ヤコブが次男を祝福しているのは、それに気づいていないからではなく、未来を握っておられる神と接していたからなのである。イスラエルには、いつの日か、自分の子孫が約束の地に戻って来る、という信仰があった。ヤコブはアモリ人の手から取った丘陵地帯をヨセフに与えた。おそらく、「ヤコブの井戸」という名前で知られるようになった井戸のある地域を指しているものと思われる（ヨハネ4:6）。

11. 息子たちに関するヤコブの預言（49章）

49:1, 2 ヤコブの最後のことは預言であり（1節）、祝福でもあった（28節）。

49:3, 4 長子であるルベンは、子孫を生み出す卓越した父の男らしさを備えており、威厳と力強さを兼ね備えていた。（弟たちの）二倍の取り分、および長子の権利は彼のものであった。しかし、その卓越した立場をみすみす手放す羽目になったのは、暗い欲情を抑えきれず、父の側女ビルハを相手に罪を犯したためであった（35:22）。

49:5～7 シメオンとレビという兄弟は、シェケムの男たちを惨殺し、牛の足の筋を切ったため、ヤコブの中で…引き裂かれ、イスラエルの中に散らされることになる。第二回目の人口調査（民数記26章）の頃には、最小の部族となっていた。ここでいう離散は、シメオン族の大部分がユダに吸収されたこと（ヨシュア19:1～9）ばかりでなく、レビ族が国土全体の四十八の

町々に分散されたことによっても成就した。ヤコブは彼らの残酷な欺きを呪ったが、この二部族の人々そのものを呪ったわけではない。

49:8~12 ユダ（「賛美」の意）は兄弟たちからたたえられ、尊敬を受ける。それは敵に勝利したからである。ユダは、獲物を捕りに出て、だれにも邪魔されずに、十分な休息に戻る獅子に例えられる。ヨセフが領土に関する長子の権利を受け継いだように、ユダは統治に関する長子の権利を受け継いだ。王権はユダ族がシロ（メシア）の到来まで受け継ぎ、その後は永遠にメシアのものとなる。メシアの民は、その力が表される日、喜んでメシアに従う。

シロという名称の意味は不明である。考えられる意味をいくつか紹介してみよう。——〈平和の君〉〈平安〉〈（ユダの）末裔〉〈ユダの子孫〉〈それを支配する者〉（エゼキエル21:27参照）。

49:13 ゼブルンは海上交易による繁栄を享受する。旧約時代、この部族の領地は四方を陸地に囲まれていたので、この預言は千年王国時代を予見しているのかもしれない。

49:14, 15 イッサカルはたくましいろばに例えられる。美しい牧草地で身を伏せることに満足したため、独立を得ようと戦う意志に欠け、敵のくびきに服するようになった。

49:16~18 ダンは、その部族の名にふさわしく、民をさばくことに関わるようになる。17節は難解である。それは暗に、国が減じる原因となった偶像礼拝を持ち込んだのがダンであったことに言及しているのかもしれない（士師記18:30, 31）。反キリストがいずれダンから出ること、そのために、I 歴代誌2:3~8:40や黙示録7:3~8にダン部族が登場しないことを婉曲的に言

っていると考える人は多い。18節で、突然ヤコブは、同胞が最終的に敵の手から、または自分自身が救い出されますように、との祈りを挿入している。

49:19 ヨルダン川の東岸を領地とするガドは、無防備で、敵の襲撃に頻繁にさらされることになる。しかし、ガド族は、敵の軍隊を踏みつぶす。

49:20 アシエル（「幸せ」の意）は幸いにも肥沃な農地に恵まれ、王に出しても恥ずかしくないごちそうを作り出す。

49:21 ナフタリは、束縛から解き放たれた雌鹿に例えられる。目もくらむような速さで跳び出し、良い知らせを伝える。弟子たちは（主を）裏切った者を除いて、みなナフタリの領地出身である。しかも、主の宣教の多くはそこで行われたのである（マタイ4:13~16）。

49:22~26 エフライムとマナセの領土を占めるヨセフは自分の境界線をはるかに越えて実を結び、祝福を届ける若枝である。彼は激しい敵意にさらされたが、屈しなかった。ヤコブの力強い方の手によって強められたからである。その御方からイスラエルの岩（つまり、メシア）である牧者が来られるのである。神はヨセフを豊かな雨、井戸、そしてほとぼしり出る泉、数多くの子孫に恵まれるようにされる。ヤコブは、自分が親たちにまさって祝福された、と謙虚に認めている。今度は、兄弟たちの中から選り抜かれたヨセフに、そのような祝福が降り注ぐことを望んでいるのである。

49:27 戦士ぞろいの部族ベニヤミンは、征服を続け、略奪したものを分ける。ある人が言うように、ベニヤミンは、すべての部族の中で、最も勇猛果敢で好戦的な部族となる。

49:28~33 最後に、自分をマクペラの洞穴に葬ってくれ、とヤコブは息子たち

に指示した。ヘブロン¹のヤコブの家の近くにあり、アブラハムと妻サラ、イサクと妻リベカ、そしてレアが葬られたところである。それからヤコブは足を床(とこ)の中に入れ、息絶えたのであった。

12. ヤコブ、次いでヨセフ、エジプトで死す (50章)

50:1~14 ヤコブが死ぬと、エジプト人までもが、七十日間、泣き悲しんだ。遺体は王宮の医者たちによってミイラにされた。そしてファラオは、ヨセフに家臣、家族、召使いから成る大行列を編成し、遺体をカナンに運ぶことを許した。一行はヨルダンの東に立ち寄り、七日間にわたって深い哀悼の儀式を行ったので、カナン人はその場所をアベル・ミツライム、すなわち「エジプトの牧草地 (または嘆き)」と名づけたほどだった。ヘブロンにあるマクペラの洞穴にヤコブを葬ったのち、ヨセフと側近の一行はエジプトに戻った。

50:15~21 ヤコブが死んだ今、ヨセフが自分たちに復讐を始めるのではないかと恐れたヨセフの兄弟たちは、ヨセフに言い送って、父ヤコブは、兄たちを赦してやりなさい、と言っていた、と伝えた。ヨセフは、仕返しをしようとか、裁こうとかという気持ちは微塵もない、と答えた。それは神にのみ許された特権であるから、というのである。ヨセフはさらに一歩進んで、次のような忘れがたいことばで彼らの不安を和らげた。「あなたがたは私に悪を謀りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとしてくださいました」。

50:22~26 どうやらヨセフは、ヤコブの十二人の息子の中で一番早く死んだようである。父親が死んでから54年の時が経っていた。神はやがてイスラエルの民をカナンに連れ戻してくださる、というヨセ

フの信仰はヘブル11:22でたたえられている。ヨセフは、自分の遺骸はかの地に埋葬するように、と指示した。

今まで指摘されてきたように、創世記は神の完全な創造に始まり、エジプトの棺で幕が閉じる。創世記は、いわば伝記の書である。天地創造の記述に2章が費やされているのに対して、(残りの) 48章は、主に、さまざまな男女の生涯に関係している。神の関心事は第一に人間なのである。神を知る者にとって、なんとという慰めであり、チャレンジであろうか。

後 注

1. (序論) Anton Hartmann (1831). See Merrill F. Unger, *Introductory Guide to the Old Testament*, p. 244.
2. (序論) See, e.g., Gleason Archer, *Archaeology and the Old Testament*.
3. (1:2) 大変動を1節の前とし、1節を要約文とする説もある。
4. (1:2) しかし、ヘブル語の動詞「ハヤー」が「～になる」という意味を示すためには、後に「レ」という前置詞が来なければならないが、この箇所はそれに当てはまらない。
5. (2:15-23) ヘブル語には (分詞を含め) 二つの時制しかない。完了時制と未完了時制である。正確な動詞形を確定するのは文脈である。
6. (3:7-13) C. H. Mackintosh, *Genesis to Deuteronomy*, p. 33.
7. (3:22-24) Merrill F. Unger, *Unger's Bible Dictionary*, p. 192.
8. (4:7) Mackintosh, *Genesis to Deuteronomy*, p. 42.
9. (4:7) F. W. Grant, "Genesis," *The Numerical Bible*, I: 38.

10. (5:25–32) George Williams, *The Student's Commentary on the Holy Scriptures*, p. 12.
11. (6:4,5) Unger, *Bible Dictionary*, p. 788.
12. (11:26–32) Derek Kidner, *Genesis*, p. 112.
13. (15:7–21) David Baron, *The New Order of the Priesthood*, pp. 9– 10 footnote.
14. (16:7–15) F. Davidson, *The New Bible Commentary*, p. 90.
15. (補説) Bennett J. Sims, “*Sex and Homosexuality*,” *Christianity Today*, February 24, 1978, p. 29.
16. (22:16–19) Charles F. Pfeiffer, *The Book of Genesis*, p. 6.
17. (24:1–9) *Ibid.*, p. 62.
18. (24:10–14) Murdoch Campbell, *The Loveliest Story Ever Told*, p. 9.
19. (25:29–34) D. L. Moody, *Notes From My Bible*, p. 23.
20. (26:1–6) 3節のdwell (KJV) は6節とは異なるヘブル語の動詞で、定住には至っていないことを示唆している。
21. (26:26–33) Williams, *Student's Commentary*, p. 31.
22. (27:1–22) Martin Luther, further documentation unavailable.
23. (27:1–22) Mackintosh, *Genesis to Deuteronomy*, p. 114.
24. (28:10–19) H. D. M. Spence and J. S. Exell, “Genesis,” in *The Pulpit Commentary*, pp. 349– 50.
25. (31:1–18) W. H. Griffith Thomas, *Genesis: A Devotional Commentary*, p. 288.
26. (31:19–21) Unger, *Bible Dictionary*, p. 550.
27. (32:22–32) Pfeiffer, *Genesis*, p. 80.
28. (37:1–17) Arthur W. Pink, *Gleanings in Genesis*, pp. 343– 408.
29. (38:1–11) *Ibid.*, pp. 343– 408.
30. (38:24–26) Walter C. Wright, *Psalms*, II: 27.
31. (38:27–30) Griffith Thomas, *Genesis*, p. 366.
32. (44:14–17) Williams, *Student's Commentary*, p. 39.
33. (46:1–7) Basil F. C. Atkinson, *The Pocket Commentary of the Bible, The Book of Genesis*, p. 405.
34. (47:27–31) Kidner, *Genesis*, p. 212.

参考文献

- Atkinson, Basil F. C. *The Pocket Commentary of the Bible. The Book of Genesis*. Chicago: Moody Press, 1957.
- Campbell, Murdoch. *The Loveliest Story Ever Told*. Inverness: Highland Printers Ltd., 1962.
- Grant, F. W. *Genesis in the Light of the New Testament*. New York: Loizeaux Bros. Inc., n.d.
- . “Genesis.” In *The Numerical Bible*, Vol. 1. Neptune, NJ: Loizeaux Brothers, 1977.
- Keil, C. F., and Delitzsch, Franz. “Genesis.” In *Biblical Commentary on the Old Testament*, Vol. 3. Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Publishing Company, 1971.
- Kidner, Derek. *Genesis. The Tyndale Old Testament Commentaries*. Downers Grove, IL: InterVarsity Press, 1973.
- Pfeiffer, Charles F. *The Book of Genesis*. Grand Rapids: Baker Book House, 1976.
- Pink, Arthur W. *Gleanings in Genesis*. Chicago: Moody Press, 1922.
- Ross, Allen P. “Genesis.” In *The Bible*

Knowledge Commentary. Wheaton: Victor Books, 1985.

Spence, H. D. M., and Exell, J. S. "Genesis." In *The Pulpit Commentary*, Genesis. New York: Funk and Wagnalls, n.d.

Thomas, W. H. Griffith. *Genesis: A Devotional Commentary*. Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Publishing Co., 1973.

Yates, Kyle M., Sr. "Genesis." In *The Wycliffe Bible Commentary*. Chicago: Moody Press, 1968.

出エジプト記

序 論

「神学を本質的に神の救済のみわざの説明と考える人々にとって、出エジプト記1～15章は最高の実例であり、これを中心に聖書の他の物語を組み立てることができる。旧約聖書は共同体の礼拝生活から生まれたもの、と考える人々にとって、出エジプト記の核心部分には、イスラエルの祭りの中で最も重要かつ特徴的な過越祭の制定の記述がある。…神のトーラー（律法）を後のイスラエルの生活と思想の中心と見る人々にとって、出エジプト記は律法授与を大切に守り伝え、十戒という形で律法の核心を含んでいる。」

R・アラン・コール (R. Alan Cole)

I. 正典における独自性

出エジプト記 (Exodus=ギリシア語で「脱出」の意) は、ヨセフの死後、イスラエルの民に起こったことの続きを扱っている。過越の祭りに見られるように、ユダヤ教の起源は、イスラエルが四世紀にわたるエジプトでの奴隷状態から脱出したことにある。しかし、それが実現したのは、ファラオがヘブル人の神に頑なに逆らい、自分の国エジプト（聖書では、この世の象徴）にもたらされた十の恐ろしい災いに見舞われた後のことであった。

紅海の横断や、その他の驚くべき奇跡の数々、シナイ山での律法の授与、幕屋に関する詳細な指示などがこのすばらしい書物を構成している。

II. 著者問題

「モーセの第二の書 (=出エジプト記)」は、モーセ五書の他の部分と同様に、実際にモーセによって書かれた、というユダヤ教とキリスト教の伝統的な見解を、筆者は堅持するものである。この見解の擁護については、「モーセ五書への序論」を参照されたい。

III. 執筆年代

聖書学者たちは、エジプトからの脱出の時期を、早ければ紀元前1580年、遅ければ紀元前1230年としている。I 列王記6:1 には、ソロモンが神殿の建設を始める480年前に出エジプトがあった、と記されている。建設が始まったのは紀元前960年頃で

あるから、出エジプトは保守派が主張する紀元前1440年となる。多くの考古学者はそれ以降の年代（紀元前1290年頃）を支持しているが、他の考古学的発見は、それ以前の年代に合致しているようである。もちろん正確な年代は確定できないにしても、あらゆる点を考慮すると、出エジプトの出来事があったのは紀元前1440年で、出エジプト記はそれよりやや後に書かれたと考えるのが最善と思われる。

IV. 背景と主題

出エジプト記は、創世記の最後で見たイスラエル人（の子孫）がエジプトにいたところから始まる。しかし、その後状況は一変していた。すでに四百年以上が経過し、かつて特権的な立場にあったヘブル人たちは奴隷となり、ファラオが推し進める壮大な建築事業のためにれんがを作っていたのである。

出エジプト記の主題は〈贖い〉と〈イスラエルの建国〉である。3,400年以上にわたって、世界中のユダヤ人がこの出来事を祝ってきた。過越の祭りは、(神の)力と(子羊の)血によってエジプトから脱出し、実質的にイスラエルという国家が誕生したことを祝うものである。

キリスト教の「主の晩餐」も、力と血によって神の民が贖われたことを祝うものであり、その歴史的・神学的ルーツは「過越の祭り」である。聖餐式のパンとぶどう酒は、ある程度、過越の祭りの儀式で使われたパンとぶどう酒にその起源を求めることができる。

エジプトから脱出した後、舞台は荒野に変わり、モーセは民のために定められた神の律法を授かる。本書の約半分は、幕屋とその祭司職に関するものである（25～40

章）。その詳細な内容は単に歴史的なものにとどまらない。

出エジプト記を本当に味わうためには、そこにキリストを見出さなければならない。モーセ、過越の子羊、岩、そして幕屋は、主イエスの型（象徴）の一部に過ぎず、その多くは聖書の他の箇所でも言及されている（たとえば、I コリント5:7、10:4、ヘブル3～10章を参照）。願わくは、エマオの途上で二人の弟子にされたように、主が私たちに「ご自分について聖書全体に書いてあること」を解き明かしてくださるよう（ルカ24:27）。

構 成

- I. エジプトで奴隷になったイスラエル（1章）
- II. モーセの誕生と救出、訓練（2章）
- III. モーセの召命（3、4章）
 - A. モーセに対するヤハウェの啓示（3章）
 - B. モーセのためらい（4:1～17）
 - C. モーセのエジプトへの帰還（4:18～31）
- IV. モーセとファラオの対決（5:1～7:13）
 - A. 最初の対決（5:1～7:6）
 - B. 二度目の対決（7:7～13）
- V. 最初の九つの災い（7:14～10:29）
 - A. 最初の災い——ナイル川の水、血に変わる（7:14～25）
 - B. 第二の災い——蛙（8:1～15）
 - C. 第三の災い——ブヨ（8:16～19）
 - D. 第四の災い——アブ（8:20～32）
 - E. 第五の災い——家畜の疫病（9:

- 1～7)
- F. 第六の災い——腫れもの (9:8～12)
- G. 第七の災い——雹と火 (9:13～35)
- H. 第八の災い——いなご (10:1～20)
- I. 第九の災い——三日間の暗闇 (10:21～29)
- VI. 過越と長子の死 (11:1～12:30)
- VII. エジプトからの脱出 (12:31～15:21)
- A. 海に向かっての逃走 (12:31～13:22)
- B. 紅海横断 (14章)
- C. モーセの歌 (15:1～21)
- VIII. シナイへの旅 (15:22～18:27)
- A. シュルの荒野 (15:22～27)
- B. シンの荒野 (16章)
- C. レフィディム (17章)
- D. モーセとイテロ (18章)
- IX. 律法の授与 (19～24章)
- A. 啓示のための準備 (19章)
- B. 十戒 (20章)
- C. 種々の律法 (21～24章)
1. 奴隷に関する律法 (21:1～11)
 2. 人身事故に関する律法 (21:12～36)
 3. 盗難と物的損害に関する律法 (22:1～6)
 4. 不正直に関する律法 (22:7～15)
 5. 誘惑に関する律法 (22:16, 17)
 6. 民事的、宗教的義務に関する律法 (22:18～23:19)
 7. 征服に関する律法 (23:20～33)
 8. 契約の批准 (24:1～8)
 9. 神の栄光の啓示 (24:9～18)
- X. 幕屋と祭司職 (25～40章)
- A. 幕屋の建設の指示 (25～27章)
1. 材料の収集 (25:1～9)
 2. 契約の箱 (25:10～16)
 3. 宥めの蓋 (25:17～22)
 4. 臨在のパンの机 (25:23～30)
 5. 純金の燭台とその付属品 (25:31～40)
 6. 幕屋本体 (26章)
 7. 全焼のささげ物の青銅の祭壇 (27:1～8)
 8. 幕屋の外庭、柱、掛け幕 (27:9～19)
 9. 燭台の油 (27:20, 21)
- B. 祭司職 (28、29章)
1. 祭司の装束 (28章)
 2. 祭司の聖別 (29章)
- C. 幕屋に関する追加の指示 (30、31章)
1. 香をたくための祭壇 (30:1～10)
 2. 償い金 (30:11～16)
 3. 洗盤 (30:17～21)
 4. 注ぎの油 (30:22～33)
 5. 香料 (30:34～38)
 6. 熟練した職人たち (31:1～11)
 7. 安息日のしるし (31:12～18)
- D. 偶像礼拝の発生 (32、33章)
1. 金の子牛 (32:1～10)
 2. モーセの執り成しと怒り (32:11～35)
 3. 民の悔い改め (33:1～6)
 4. モーセの会見の天幕 (33:7

～11)

5. モーセの祈り (33:12～23)
- E. 契約の更新 (34:1～35:3)
- F. 幕屋の調度品の準備 (35:4～38:31)
 1. 民の贈り物と賜物のある人々 (35:4～36:7)
 2. 幕屋を覆う幕 (36:8～19)
 3. 三方の側面の板 (36:20～30)
 4. 板を固定するための横木 (36:31～34)
 5. 至聖所に通じる垂れ幕 (36:35,36)
 6. 聖所に通じる幕 (36:37,38)
 7. 契約の箱 (37:1～5)
 8. 宥めの蓋 (37:6～9)
 9. 臨在のパンの机 (37:10～16)
 10. 金の燭台とその付属品 (37:17～24)
 11. 香の祭壇 (37:25～28)
 12. 注ぎの油と香 (37:29)
 13. 全焼のささげ物の祭壇 (38:1～7)
 14. 洗盤 (38:8)
 15. 幕屋の外庭、柱、掛け幕 (38:9～31)
- G. 祭司の装束の準備 (39章)
- H. 幕屋の建設 (40章)

注 解

I. エジプトで奴隷になったイスラエル (1章)

1:1～8 「さて…名は (ヘブル語で「ウエーレー・シェモート」)」という冒頭の二語が、ユダヤ教による伝統的な書名である。神はどれほど個人を大切にされる御方であろうか。数字でもなく、(初期の) コンピュータ・カードの目盛りでもなく、一人ひとりの名なのである。イエスは、〈良い羊飼ひ〉についてこう言われた。「牧者は自分の羊たちを、それぞれ名を呼んで連れ出します」(ヨハネ10:3)。この箇所において、これほど適切なことばはない。イスラエルの民は羊飼ひとしてエジプトに下って来た。しかし、今は奴隷である。しかし、良き羊飼ひである神は、「彼らを連れ出す」計画をお持ちなのである。

ヤコブの腰から生まれ出た者の七十名については、創世記46:8～27の注解を参照のこと。この七十名は、ユダヤ民族がシナイからカナンに向けて出発する頃には、兵役に就くことのできる者603,550人(民数記1:46)を含む数百万人にまで増加していた。6節と7節は、創世記の終わりから出エジプト記の出来事まで、長い時間が経過したことを物語っている。8節は、ヨセフの子孫を好意的に見ない新しい王が現れたことを意味する。ヨセフは、もちろん他界していた。

1:9～10 イスラエルの民の数と力があまりにも大きくなったので、ファラオは彼らを戦時中の脅威と考え、民を奴隷にし、男の子をすべて殺し、最終的にヘブル民族

を絶滅させることにした。聖書には、罪のない子どもたちを虐殺することを命じた三人の邪惡な支配者が記されている。ファラオ、アタルヤ（Ⅱ列王記11章）、そしてヘロデ（マタイ2章）である。このような残酷行為は悪魔にそそのかされ、メシアの血統を絶やそうとするものであった。創世記3:15にある神の約束を、サタンは片時も忘れていなかったのである。

1:11～14 ファラオは奴隷にしたユダヤ人を使って、倉庫の町ピトムとラメセスを建設した。しかし、ファラオの圧政によって、彼らは一掃されるどころか、ますます増え広がった。ファラオは悪を図って過酷な労働を課したが、神はそれが益となるように転用された。この経験は、ユダヤ人たちがエジプトから約束の地へ向かう困難な旅の準備に役立ったのである。

1:15～19 シフラとプアは、おそらくヘブル人の助産婦たちの長であったが、ユダヤ人の母親が産み台の上で子どもを産むのを見ても、ファラオが命じた通りに男の子を殺すことはしなかった。ヘブル人の子どもは、大抵、予定よりずっと早く生まれてしまう、つまり助産婦が行く前に産んでしまうのです、と彼女たちは弁解した。この主張にはおそらく、それなりの真実が含まれていたと思われる。

1:20～22 助産婦たちについて、“*Daily Notes of the Scripture Union*” は次のような注を施している。

家庭に恵まれる（21節）という報いが助産婦たちに与えられたのは、彼女たちが嘘をついたからではなく、その人間性のゆえであった。これは、目的さえあれば手段は問わない、ということではなく、ましてや、道徳に絶対的な基準はな

い、ということでもない。しかし、罪と罪の結果に満ちた私たちの世界においては、より大きな責務への従順は、より小さい責務を犠牲にして初めて可能なかもしれない。他のすべての場合と同じく「主を恐れることは知識の初め」なのである。

ヘブル人の助産婦たちに阻止されたファラオは、今度は自分のすべての民にその命令を実行させた。

Ⅱ. モーセの誕生と救出、訓練（2章）

2:1, 2 1節のレビの家のある人とはアムラムのことであり、レビ人の娘とはヨケベデのことである（6:20）。つまり、モーセの両親は、ともに祭司の部族レビの出身であった。信仰によって彼らはモーセを三か月間、隠しておいた（ヘブル11:23）。彼らがそうしたのは、彼が運命の子である、という何らかの啓示を受けていたからに違いない。なぜなら、信仰は、啓示された神のことばに基づかなければならないからである。

2:3～8 ヨケベデのかごは、ノアの箱舟と同じように、キリストを表すものである。モーセの姉はミリアムであった（民数記26:59）。この章は、偶然に思える出来事で満ちている。たとえば、なぜファラオの娘が、たまたま、かごが漂って来る場所で水浴びをしようとしたのだろうか。なぜ子どもが泣きだして、王女のあわれみを引き出すことになったのだろうか。なぜモーセの母が乳母として、ファラオの娘の目になつたのだろうか。

2:9, 10 クリスチャンの親であるな

ら、9節のことば（※英訳「この子を連れて行き、わたしのために育てなさい。そうすれば、わたしはあなたに報酬を与えよう」）を、神聖な義務、また信頼できる約束として受け入れなければならない。ファラオの娘がつけたエジプト名「モーセ」は、おそらく〈子〉または〈息子〉を意味している。ヘブル語では、その同じ名前が〈引き出された〉、つまり、水の中から引き出された（者）という意味になる。^{* (1)} マッキントッシュ (C. H. Mackintosh) は、いつものように、鋭い洞察力で次のように述べている。

悪魔はファラオという自分の「武器」で計画が狂った。悪魔が神の目的を阻止するために用いていたファラオは、やがてサタンの力を打ち砕く神の器となるべきモーセを養い育てるために神に用いられたからである。^{* (2)}

2:11, 12 使徒7:23によると、モーセが自分の同胞を訪ねたのは四十歳の時であった。モーセがエジプト人を殺したのは軽率であった。モーセの熱意がモーセの思慮深さを上回ったのである。神は将来、モーセを用いてご自分の民をエジプト人たちの手から解放しようとおつもりであったが、その時はまだ到来していなかった。まず、荒野の奥深くで40年間を過ごし、神の学校で学ぶことが先決であった。神はすでに、神の民が400年間エジプトの地で奴隷になることを予告しておられた（創世記15:13）。したがって、モーセの行動は40年早かったのである。モーセは荒野で孤独を経験する訓練が必要であり、民は、れんがを焼く窯でもっと鍛えられる必要があった。主はその無限の知恵によって、すべて

のことをお決めになる。主は急がれることはないが、必要以上に一瞬でも長く、民を苦難の中に放置されることもないのである。

2:13～15前半 次の日、また外に出たモーセは、二人のヘブル人の喧嘩を仲裁しようとしたが、二人はモーセの指示に従わなかった。後に、ヘブル人がモーセより偉大な御方を拒絶したのと同じである。モーセは、自分がエジプト人を殺したことを彼らが知っていることに気づき、うろたえた。ファラオはこの殺人のことを聞いて、モーセを殺そうと捜したので、モーセはミディアンの地、すなわち、アラビアまたはシナイ地方に逃れた。

2:15後半～22 ミディアンの井戸で、モーセは意地の悪い羊飼いたちの手からミディアンの祭司の七人の娘を助け出し、その羊の群れに水を飲ませた。ミディアンの祭司には名前が二つついている。イテロ (3:1) とレウエル (2:18) である。ミディアン人はヘブル人の遠い縁戚にあたる（創世記25:2）。イテロの娘のツイボラはモーセの妻となり、二人の間に男の子、ゲルショム（「そこではよそ者」の意）が生まれた。

2:23～25 神が民の窮状に気づかないでおられたわけではない。新しい王が即位した時、神は彼らの嘆きを聞き、契約を思い起こされ、イスラエルの子らをご覧になり、彼らの状況を御心に留められた。その応答として、神のしもべ（モーセ）をエジプトに連れ戻し（3章）、世界の創造以来、最大の力を示して、ご自身の民をその地から導き出されたのである。

Ⅲ. モーセの召命 (3、4章)

A. モーセに対するヤハウェの啓示 (3章)

3:1～4 モーセは、イテロの群れの世話をしながら、神の民を導くための貴重な経験を積んでいった。モーセがホレブ（シナイ山）にやって来たとき、主は柴の中に現れた。柴は燃えているのに燃え尽きることがなかった。この柴は神の栄光を暗示しており、モーセは履き物を脱いでその前に立つように命じられた。同時に、これはヤハウェが民の中に住まわれても、民が焼き尽くされないことを予兆しているのかもしれない。ある人はここに、苦難の火で試みられながら、決して焼き尽くされることのなかったイスラエルの運命を見る。私たちも皆、燃える柴のように、神のために燃えつつも、燃え尽きない存在でなくてはならない。^{*(3)}

3:5 主はモーセに、ご自分の民をエジプトから救い出し、8節に挙げた六つの異教の民が住む肥沃な地、すなわちカナンに連れて行くと誓われた。「聖」という語が聖書に登場するのは、この箇所が最初である。モーセは履き物を脱ぐことによって、その場所が聖なる地であることを認めたのである。

3:6 神はモーセに、ご自分が父祖アブラハム、イサク、ヤコブの神であることを再確認された。コール (R. Alan Cole) はこの啓示の重要性を以下のように示している。

モーセは民に、新しい神や未知の神ではなく、民がすでに知っていた神についての、より完全な啓示をもたらしている。

パウロがアテネの人々に語ったことば（使徒17:23）でさえ、この啓示と並べるのは公平ではない。本当の意味で、この箇所と並行するものがあるとすれば、その後何世紀にもわたる神の自己啓示であり、キリストの来臨をもって頂点に達する啓示である。しかし、この時代にモーセに与えられた啓示は、父祖への約束の成就でありながら、イスラエルにとっては、メシアの来臨が後世に与えるのに等しい衝撃的なものであった。^{*(4)}

3:7～12 モーセは、自分の力不足を理由に、神が自分をファラオのもとに遣わされることに抗議した。しかし、主は（モーセと）ともにいてくださることを保証し、解放された民とともに、この山（シナイ山）で神に仕えなければならないと言われた。サンダース (J. Oswald Sanders) は次のように述べている。

自分がいかにふさわしくないかをモーセは延々と述べ、以下の点を列挙している。

- (1) 能力がない (3:11)。
- (2) (伝えるべき) メッセージがない (3:13)。
- (3) 権威がない (4:1)。
- (4) 雄弁ではない (4:10)。
- (5) 特別な状況に適応する能力がない (4:13)。
- (6) 過去の成功体験がない (5:23)。
- (7) 自分の主張を受け入れてもらった経験がない (6:12)。

自分にはできない、という事柄を、これ以上並べたリストを用意することは難しい。しかし、表面上は謙虚でありなが

ら、二の足を踏んでいたモーセは、喜ばれるどころか、主の怒りに触れた(4:11)。実のところ、モーセが自分の能力のなさ示そうと述べた言い訳こそが、神がモーセをこの任務に選んだ理由なのである。⁽⁵⁾

3:13, 14 モーセは主の代弁者として戻った時に、イスラエルの民から質問されることを予期し、自分がだれに遣わされたのかを伝えることができるように願っていた。まさにこの時、神は〈ヤハウェ〉、すなわち偉大なる「在る者」としてご自身を示された。〈ヤハウェ〉はヘブル語の「在る」を意味する〈ハッヤー〉を語源とする。その聖なる御名は、「聖四文字」(テトラグラマトン)として知られている。〈ヤハウェ〉という名称は、ヘブル語のYHWHに、〈エロヒーム (Elohim)〉と〈アドナイ (Adonai)〉という神のその他の御名にあった母音をつけたものである。YHWHの本当の発音はだれにも分からない。古代ヘブル語の綴りでは、アルファベットで実際に母音が使われることがなかったためである。とはいえ、「ヤハウェ」という発音はおそらく正しいであろう。ユダヤ人はYHWH(という御名)を特に神聖視し、口にすることができない。この御名は、神が自存の存在であること、必要な一切がご自身に備わっていること、永遠の存在であること、⁽⁶⁾そして(対抗できるものがない)主権者であられることを宣言するものである。**わたしはある**という、省略のない御名は、「わたしはあるがゆえにある (I AM BECAUSE I AM)」、あるいは「わたしは、わたしがなるようになる (I WILL BE THAT I WILL BE)」という意味かもしれない。

3:15~22 神が確かに存在し、民を助ける準備を整えておられる、というこの啓示に勇気を得たモーセは、イスラエルの民に、「あなたがたはもうすぐ自由になる」と伝えるように命じられた。それに加え、イスラエルに三日の道のりを行かせ、主にいけにえを献げる許可を求めて、ファラオを試さなければならなかった。これは騙す意図があったからではなく、ファラオの意思を確認するための最低限のテストだったのである。また、そうすることによって、エジプト人にとって神聖な家畜が屠られるのをエジプト人が目撃するのを防ぐためでもあった。神はファラオが、神の力によって強制されない限り、譲歩するはずのないことをご存じであった。20節の不思議とは、神がエジプトに送り込まれた災厄のことである。この災いが終わる頃には、エジプト人たちは、ユダヤ人の女性たちが求めるものを、何でも喜んで与えるようになる。こうして蓄積された富は、エジプトの監督のもとで奴隷として働いたすべての労働に対する正当な対価に過ぎない。イスラエル人は、宝石や衣服を「借りた」のではなく、「求めた」。欺いたのではなく、正当な賃金を支払ってもらっただけだったのである。

B. モーセのためらい (4:1~17)

4:1~9 モーセはなおも民が自分を神の代弁者として受け入れてくれるだろうか、という不安を抱えていた。2:11~15で味わった幻滅が彼の魂を深く蝕んでいたのかもしれない。そこで神は、三つのしるし、すなわち奇跡をモーセに示し、神からの使命が託されたという確証をお与えになった。

(1) 杖を地面に投げると、それは蛇になった。尾をつかむと、蛇は再び杖になった。

(2) 手を懐に入れると、ツアラアトに冒

された。その手をもう一度懐に入
ると、もはやツアラアトは消えて
いた。

- (3) ナイル川から汲んだ水を地面に注ぐ
とその水は血となった。

以上のしるしは、モーセが神から遣わ
されたことをイスラエルの民に確信させるた
めのものであった。それらは、神の力が、
サタン（つまり蛇）と、罪（ツアラアトが
象徴）にまさること、そしてイスラエルが
その二つから血によって贖われることを物
語っている。

4:10～17 モーセはそれでもなお、こ
とばの人ではありませんと言って主に従う
ことを渋っていた。人に口をつけるのは主
である。それゆえ、主にとってモーセを雄
弁の人にするには何ら問題ではない、と
モーセを諭した後、神はモーセの兄アロン
がモーセに代わって民に語るように任命さ
れた。主のご命令には、それを遂行する力
も伴っていることを知り、モーセは単純に
頼って主に従えばよかったのである。神は、
私たちに力を与えないで置いて、何かを行
うようにお命じになることは決してない。
モーセは神の最善に満足しなかったため、
次善を選ぶほかはなくなった。つまりアロ
ンを自分の代弁者として受け入れなければ
ならなくなったのである。アロンならきつ
と役立つ、とモーセは思ったが、後にアロ
ンは金の子牛礼拝に民を導き、かえって妨
げとなったのである（32章）。

C. モーセのエジプトへの帰還（4:18～ 31）

4:18～23 ミディアンに逃れてから四
十年後、モーセは神からの命令とイテロの
祝福を受けて、エジプトに戻った。妻と子
どもたちとは、ツィボラとゲルショム、そ

してエリエゼル（18:2～4）のことである。
2節では杖に過ぎなかったものが、20節
では神の杖になっている。主はありふれた
ものを用いて、驚くべきことをされる。そ
れは、その力が神から出たものであること
がはっきりと分かるためである。神がモー
セに命じてファラオの前で行わせた不思議
とは、この後に起こった災厄のことである。
神はファラオの心を頑なにされたが、それ
はこの暴君が、自分の心を頑なにした後
のことである。「長子」とは、出生順を意味
することもあるが、ここでは、相続権を持
つ長男が通常持つ、誉れある立場を意味し
ている。ファラオは、もし従わなければ、
神がファラオの長子を殺す、と前もって警
告しておられるのである。

4:24～26 しかし、モーセはそのメッ
セージを伝える前に、自分自身が従順を学
ばなければならなかった。モーセは自分の
息子（ゲルショム、またはエリエゼル）の
割礼を施していなかったが、それはおそら
くツィボラが反対したためであろう。神が、
おそらくは重病でモーセを殺そうとされた
時、ツィボラは怒って息子に割礼を施し、
夫を無事に解放した。ツィボラはモーセを
血の花婿と呼んだ。この出来事に加え、ツ
ィボラの主に対する信仰の欠如が明らか
になったことが、モーセがツィボラを二人
の息子とともに父親のもとに帰した理由であ
ろう（18:2,3）。

4:27～31 モーセがエジプトに戻ると、
アロンが出迎えた。二人はともにイスラエ
ルの民の前に立ち、主のメッセージを伝え、
主が与えられた三つのしるしによって、そ
のメッセージが本物であることを確証した。
そこで、民は信じ、ひざまずいて礼拝した。

IV. モーセとファラオの対決 (5:1～7:13)

A. 最初の対決 (5:1～7:6)

5:1 3:18で、神はモーセに、ファラオの前に出る時は、長老たちを連れていくように命じておられた。その間に、主はアロンをモーセの代弁者として任命された(4:14～16)。そこで、アロンが長老たちの代わりにモーセに同行したのである。主のメッセージは明確であった。「わたしの民を去らせ(よ)」と。

5:2～14 モーセとアロンが最初の最後通告をした時、ファラオは彼らが民の仕事の邪魔をしていると非難した。そればかりか、ファラオは、今後は、自分で藁を集めてれんがを作らなければならない、しかもこれまでどおりの量を作らなければならない、と仕事の分量を変えた。まるでナチスの強制収容所におけるユダヤ人の扱いを思い起こさせるような耐え難い状況に、ファラオはユダヤ人を追い込んだのである。民はエジプト全土に散って、藁の代わりに刈り株を集めた。ヘブル語の文章は、抑圧された人々が侮蔑的に扱われていることを表している。コール (R. Alan Cole) が指摘する通り、刈り株は目が粗い上、均質ではなく、とても藁の代用として使える代物ではない。^{*(7)}

5:15～23 今までは、イスラエル人のために藁が用意されていた。それはれんがを補強し、れんがを作る型に貼り付くのを防ぐ役割をしていた。ユダヤ人のかしらたちは打ちたたかれた時にファラオに抗議したが、何の配慮もしてもらえなかった。そこで、彼らはモーセとアロンを責め、モーセは主を責めた。神の民の内部からの反対は、外部からの迫害よりも耐えがたい場合

が多いものである。

6:1～12 主はモーセの小言に対して穏やかに答え、ファラオはやがて神の強い御手に強いられて、イスラエル人を行かせるようになる、とモーセに保証された。次に、神は父祖たちに対して、ご自身を、契約を守るヤハウエという固有の御名ではなく、エル・シャダイ、すなわち全能の神として啓示されたことをモーセに思い出させた。それは、主が今、新たな方法で、つまり、民を解放するための新しい力を用いて、ご自身が主であることを示す、という意味のようである。神はすでに契約を結ばれ、今やイスラエルの民をエジプトから解放し、約束の地に導き入れて、それを実現しようとしておられた。6～8節に、(英訳では)“I will” (「わたしは…しよう」) という表現が7回も出てくことに注意しよう。「ヤハウエ」(あるいは「主」という御名は以前にも使われたことがあった。しかし、それは今、新しい意味を帯びたものとなった。(英訳では) 25回にわたって神が人称代名詞を使い、かつて神がなさったこと、なさろうとしていること、そしてなさるであろうことを強調している点に注目しよう。モーセは相変わらず自分の至らなさで頭がいっぱいなために、この点を見落としたようである。しかし、さらなる確信を得て、モーセはついに主のみことばに従った(7章)。12,30節の「割礼のない唇」とは、たどたどしい話し方を意味している。モーセは自分が演説に秀でているとは思っていなかったのである。

6:13～30 14節から25節までの系図は、ヤコブに生まれた最初の三人の息子であるルベン、シメオン、そしてレビに限定されている。著者は完全な系図を示すのではなく、モーセとアロンに至る系図をたどることができればよかったのである。その

ため、ルベンとシメオンの部分はあっさり
と通過して、祭司の部族（レビ）に至っ
ている。

7:1～5 6章の終わりで、モーセは強大
な権力を持つファラオがはたして自分のよ
うに口下手な者に耳を傾けてくれることが
あるのか、といぶかっていた。（それに対
して）主は、モーセをファラオの前に立た
せるのは、神の代理人としてである、とお
答えになった。モーセはアロンに話す。す
ると、アロンはそのメッセージをファラオ
に伝える。ファラオは聞き入れないが、そ
んなことに関係なく、神はご自分の民を連
れ出してください、というのである！

7:6 モーセとアロンは、民を解放する、
という大きな任務が始まった時、それぞれ
八十歳、八十三歳であった。今日でさえ、
「高齢者」と呼ばれる年代である。しかし、
神は男女を問わず、ご自分の栄光のために
用いることができるのである。

B. 二度目の対決（7:7～13）

ファラオはこれから起こる問題について
警告を受けていた。アロンが自分の杖を下
に投げ、それが蛇になると、ファラオの知
恵のある者と呪術者も、悪魔による力でそ
の奇跡とそっくりのことをやってのけた。
Ⅱテモテ3:8を見ると、このエジプトの魔
術師たちとはヤンネとヤンブレであったこ
とが分かる。二人は、モーセとアロンの真
似をしてモーセに立ちはだかったのである
が、アロンの杖は彼らの杖を呑み込んでし
まった。神がファラオの心を頑なにされた
のは、恣意的なことではなく、ファラオの
強情さに対する応答であった。これで、い
よいよ第一の災いが始まることになった。

V. 最初の九つの災い（7:14～ 10:29）

A. 最初の災い——ナイル川の水、血に 変わる（7:14～25）

7:14～18 主はモーセに、ファラオが
水辺に出て来たら、ファラオと対峙するよ
うに命じられた。（おそらくファラオは「聖
なる」ナイル川で沐浴していたのであろ
う。）モーセの役割は、モーセが手に持っ
ている杖でナイル川の水を打てば、ナイル
川の魚は死に、ナイル川は臭くなり…エジ
プト人はナイル川の水を飲むのに耐えられ
なくなる、とファラオに警告することであ
った。

7:19～25 モーセとアロンは神が命じ
られた通りにした。二人はエジプトの水の
上に杖を伸ばした。するとナイル川の水お
よびエジプト全土の水はすべて血に変わっ
た。ナイル川の魚は死に、ナイル川は臭く
なった。呪法師たちもこの奇跡をナイル川
以外の場所で汲んで来た水で再現した。こ
れによって、おそらくファラオは勇気づけ
られ、民を去らせよ、というモーセの要求
をはねのけた。ナイル川の汚染が始まって
から七日間、人々は井戸を掘って水を手に
入れた。

B. 第二の災い——蛙（8:1～15）

エジプトの地をおおった蛙の災いがあま
りにも悲惨だったので、ファラオは気弱に
なったかのように見えた。ファラオがモー
セに、災いを取り去ってくれるように頼む
と、モーセは「蛙があなたとあなたの家か
ら断たれ、ナイル川だけに残るようにする
ため、私が、あなたと、あなたの家臣と民
のために祈るので、いつがよいかを指示し
てください」と答えた。呪法師たちも同じ

ように蛙を生み出すことができた。まるで蛙の数がまだ不足しているかのように！呪法師たちがそうできたのは、おそらく悪魔的な力によるものであろう。しかし、さすがの彼らも蛙を殺す勇氣はなかった。蛙は多産の神として崇拝されていたからである！翌日、蛙が死ぬと、その死骸から恐るべき悪臭が発生した。ファラオはまたしても心を硬くした。

C. 第三の災い——ブヨ (8:16~19)

8:16~19 三番目の災いでは、地のちりがブヨに変わった。今度という今度は、呪法師たちにもブヨを生じさせることができなかった。そこで、自分たちには太刀打ちできない大きな力が背後で働いています、とファラオに警鐘を鳴らしたが、王の頑なさには変わらなかった。ファラオが自分の心を頑なにするのに比例して、その心は一層、神によっても頑なにされていったのである。

D. 第四の災い——アブ (8:20~32)

8:20~24 そこで神は第四の災いを送り込まれた。それがアブの群れである。ヘブル語の直訳は(昆虫の)群れ(または「混合したもの」)であり、特定の昆虫(日本語訳では「アブ」)とは翻訳者が補ったものである。ことによると、群れとは多様な種類(の昆虫)が混ざり合ったものかもしれない。災いの大半、あるいはすべてがエジプトの偽の神々(エジプトではナイル川を始め、ほぼすべての生き物が神格化されていた！)に向けられたものであるが、ここではコガネムシを指している可能性がある。そうだとすると、神聖甲虫(スカラベ)の神、ケブリに対する攻撃が、ここでなされていることになる。^{*(8)}

8:25~32 ファラオはついに譲歩するが、それはイスラエルの民がエジプトの地

で神にいけにえを献げることを認める程度であった。しかし、それでは解決にならない。イスラエル人はエジプト人が崇拝する家畜をいけにえにするので、暴動が起きる可能性があった。ファラオはさらに譲歩した。ユダヤ人が荒野に行っていけにえを献げるのは認めるが、ただ、決して遠くへ行つてはならないというのである。これもまた解決には程遠いものであった。神はすでに、三日の道のりを行くように命じておられたからである。エジプトが災いから一息つくくと、ファラオは気が変わり、民が去ることを禁じた。

E. 第五の災い——家畜の疫病 (9:1~7)

ファラオが警告を受けた後、神は疫病を送り込まれた。おそらくは炭疽(たんそ)病であろう。そのため、エジプト人の野にいるすべての家畜は死んでしまった。(しかし)イスラエル人が所有する家畜は何の害も受けなかった。つまり、自然現象ということでは説明がつかない選別的なさびきであった。これらの災いを自然現象として説明しようとする試みは、ことごとく失敗に終わる。(ただ)19節にあるように、エジプト人の家畜がすべて滅ぼされたわけではなく、過越の夜に打たれた家畜もあった(12:29)。あるものは家の中に逃げ込んだ(20節)。したがって、6節でことごとくというのは、「野にいたもののすべて」あるいは「すべての種類の」というほどの意味である。雄羊、やぎ、そして雄牛は、エジプトでは神聖な動物とされていた。それらの腐敗した死骸が、今や、環境を汚染していたのである。

F. 第六の災い——腫れもの (9:8~12)

ファラオがさらに態度を硬化させると、神はエジプトの人や動物の上にすすを降ら

せて、腫れものになるようにされた。呪法師たちでさえその影響を受けた。ファラオが心を頑なにすればするほど、そのさばきとして、神はその心を一層頑なにされたのである。

G. 第七の災い——雹と火 (9:13~35)

「わたしのすべての災害」とはおそらく神の災いの全容を示しているであろう。主はファラオに、先の疫病でファラオとエジプト人を滅ぼすことができたのに、ファラオを生かしておいたのは、神がその御力を示し、ご自身の名を知らしめるためであったことをファラオに思い出させておられる。16節には、ファラオが初めからさばかれるように定められていた、という意味合いは全くない。「永遠の定罪（※神から救済を拒否されること）」とは聖書が教える教義ではない。主は、神の力に徹底的に逆らう者がどうなるかを示す例証としてファラオを使われたのである（ローマ9:16, 17参照）。

次の災いは、雹と、稲妻と火が一体となり、雷を伴ったものだった。そのために、人も獣も、収穫を目前にしていた亜麻と大麦も壊滅状態になった。しかし、小麦と裸麦は打ち倒されていなかった。これらは実るのが遅いからである（31, 32節）。イスラエルの民はゴシェンに住んでいたため、無傷であった。ファラオの嘆願に応じて、モーセが祈ると、災いは終息した。しかし、モーセが予想した通り、ファラオは輪をかけて強硬になり、ヘブル人を去らせようとはしなかった。

H. 第八の災い——いなご (10:1~20)

モーセとアロンは、差し迫ったいなごの災いをファラオに警告した。しかし、ファラオが同意したのは、男子だけを主への祭

りに行かせる程度にとどまった。女子や子どもはあとに残らなければならない、というのである。しかし、神は家族がエジプトに残ったまま、男子が荒野に出て行くことを許してはおられない。この災いは前代未聞の厳しさで、いなごが大地を覆いつくし、およそ食べられるものはすべて食い尽くしてしまうのである。これは、セラピス神が、（エジプト人を）いなごから守る力のないことを示すものであった。ファラオは譲歩するかと思われたが、イスラエルの子らを行かせようとはしなかった。

I. 第九の災い——三日間の暗闇 (10:21~29)

10:21~28 第九の災いはさわれるほどの三日間の暗闇だった。イスラエルの子らの住まいだけに光があったのは、奇跡としか言いようがない。エジプトの太陽神ラーが無力であることが白日のもとにさらされた。ファラオはモーセに、女たちと子どもたちを伴って荒野に行ってもよいが、家畜の群れは置いていくように命じた。そうしておけば、彼らが戻ってくる保証になると考えたのである。（ファラオ自身に、自分の家畜の群れが減少してしまう分を補充したい、という意図があったかもしれない。）しかし、そうなると、そもそもいけにえを献げることこそエジプトを出国する理由であるのに、ヤハウエに献げるいけにえが何もないということになってしまう。妥協を提示したにも関わらず、モーセがそれを受け入れなかったため、ファラオはモーセを自分の前から永久に追放するように命じた。

10:29 「けっこうです。私はもう二度とあなたのお顔を見ることはありません」というモーセの激しい言い方は、「モーセは怒りに燃えてファラオのところから出て

行った」と書かれている11:8と、一見、矛盾しているように思われる。マシュー・ヘンリー (Matthew Henry) は「二度と」とファラオが言ったのは、「今後は」という意味であって、11:8は同じ時のファラオとの会見に含まれているのではないか、という考えを示し、以下のように記している。

そのため、この会見以降、モーセは呼ばれない限り、ファラオの前に出て来ることはなかった。人が神のことばを払いのければ、神が彼らの迷妄を許すのは当然であり、偶像の多さに従ってお答えになることに注意すべきである (※エゼキエル14:4参照)。ゲラサ人たちが、ここから立ち去ってください、とキリストに願うと、主はすぐに彼らのもとを去って行かれたのと同様である。^{*(9)}

VI. 過越と長子の死 (11:1～12:30)

11:1～10 モーセはまだファラオの前を離れていなかった。4～8節で、モーセはまだ支配者 (ファラオ) と話をしている。最初の3節は挿入と考えることができる。最後となる十番目の災いを予期して、神はイスラエル人にエジプト人から銀の飾りや金の飾りを求めるように命じられた。モーセはファラオに、エジプトの地の長子が、定められた日 (12:6を参照) の真夜中ごろにみな死ぬが、イスラエル人はその殺戮 (きつりく) を免れ、ファラオの家臣たちはみなひれ伏し、一刻も早くヘブル人を退去させるように懇願するようになる、と警告した。そしてモーセは怒りに燃えて権力者のもとを去った。警告が聞き入れられなかつ

たので、主はさらにファラオの心を頑なにされた。

12:1～10 主はモーセとアロンに、最初の過越の準備をどのようにするか、更に詳しい指示を与えられた。子羊とは、言うまでもなく、主イエス・キリストを示す型である (I コリント5:7)。それは傷のないものでなければならなかったが、そのことはキリストが罪のない御方であることを物語る。一歳の雄羊というのは、おそらく、主が人生の最盛期において断ち切られることを暗示しているのであろう。この月の十四日までそれをよく見守るというのは、ナザレで過ごした三十年間の私生活の中で神から試され、さらに三年間、人間の厳しい目に徹底的にさらされたことを指している。イスラエルの会衆の集会全体によって屠 (ほふ) られたように、キリストは悪しき者たちの手に捕らえられて殺された (使徒2:23)。夕暮れというのは第9時から第11時のことで、イエスが第9時に死なれた (マタイ27:45～50) のと同じである。その血は門柱と鴨居に塗られなければならなかった (7節)。それによって滅ぼす者から救われるためである。それはちょうど、キリストの血が、信仰によって適用されるとき、罪と自我、そしてサタンからの救いをもたらすのと同様である。

その肉は火で焼かれたが、それは私たちの罪に対する神の怒りに耐えるキリストを表している。その肉は、種なしパンと苦菜を添えて食べなければならなかったが、それはキリストが、ご自身の民の糧であることを象徴している。私たちは、悪意や邪悪さというパン種を排除し、真の悔い改めをもって、キリストが受けた苦しみを忘れることなく、誠実で真実な生活を過ごすべきなのである。羊の骨は一本も折ってはならない (46節) という規定は、私たちの主

において文字通り成就した（ヨハネ 19:36）。

12:11～20 最初の過越の祭りは、旅支度の整った民によって行われた。これは、長旅に出る巡礼者は、身軽でなければならぬことを私たちに気づかせるものである。過越は、血が塗られた家々を、主が過ぎ越されたので、そのように名づけられた。「過ぎ越す」という表現は「通り過ぎる」という意味ではない。コール（R. Alan Cole）は次のように説明している。

語源的に見て正しいか、それとも語呂合わせであるかは別にして、「ベサハ」という（ヘブル）語は、イスラエルにとって、「過ぎ越し」または「跳び越え」を意味し、イスラエルが免除された、神の歴史上の御わざに適用されるものである。

＊(10)

過越の祭りは、イスラエル人の宗教暦の十四日にあたる（2節）。過越と密接な関係にあるのが、種なしパンの祭りである。最初の過越の夜、民は生地にはパン種を入れる暇もないほど急いでエジプトを脱した（34, 39節）。その後、七日間祭りを守ることで、出エジプトがいかに慌ただしかったかを思い知らされる。しかし、パン種は罪の象徴でもあるので、血によって贖われた者は、罪と世（エジプト）を捨て去らなければならないことにも気づかされるのである。すべてパン種の入ったものを食べる者は、断ち切られる——とは、宿営から放逐され、特権から除外されることを意味している。文脈によっては、「断ち切られる」という表現は死の宣告を意味することもある。

12:21～27 次に、モーセが民の長老たちに指示を与える様子が描かれている。

そして、門柱にどのように血を振りかけるのかについて、さらに詳しく説明がされている。ヒソプは、キリストの血を自分自身に適用する信仰を意味しているのであろう。過越の祭りは、後世の人々がその儀式の意味を問う時に、贖いの物語を教えるきっかけとなるのである。

12:28～30 真夜中になったとき、ついに警告されていた通り、鉄槌が下った。そして、エジプトには激しく泣き叫ぶ声が起こった。それは死者のいない家がなかったからである。イスラエルの民はついに出国を許された。

VII. エジプトからの脱出 (12:31～15:21)

A. 海に向かっての逃走 (12:31～13:22)

12:31～37 31節は必ずしもモーセがファラオに面と向かいあった、という意味ではない（10:29を参照）。しもべの言動は、しばしばその主人の言動とされるからである。モーセは、やがてファラオのしもべたちがイスラエル人に国を出て行かせるように懇願することを予告していた（11:8）。

イスラエル人はスコテに向かって旅立った。このスコテとはエジプトのある地域のことであって、パレスチナのスコテという町と混同してはならない（創世記33:17）。エジプト人は、惜しみなくイスラエル人に財宝を与え、厄介払いできることを非常に喜んだ。ヘブル人にとっては、ファラオのために働いた労役に対する正当な報酬に過ぎなかった。それによって彼らは旅の装備を調達し、神に仕えるために必要な物資を手に入れることができた。女と子どもたちに加え、六十万の男子がエジプトを後にした。男子の正確な数は603,550人

(38:26)、イスラエル人の総数は約二百万人であった。

12:38, 39 出エジプトの時期については喧(かまびす)しい議論がなされている。一般的に受け入れられている保守的な年代は紀元前1440年頃であるが、紀元前1290年とする学者、または、それ以降とする学者もいる(序論を参照)。入り混じって来た多くの異国人も、イスラエル人に付きしたがってエジプトを出た。彼らは「烏合(うごう)の衆」(民数記11:4、NASB)と呼ばれていて、主に良くしていただいたにも関わらず、主に不満を訴える様子が描かれている。

12:40~42 40節の年代表記については、創世記15:13, 14の注解を参照。ここで言及されている四百三十年とは、イスラエル人がエジプトで過ごした年月の総計である。それは、ちょうどその日に、とあるように、正確な数字であった。大切なのは、それより数百年も前にされた約束の主は忘れておられないことである。民を連れ出された主は、ご自分のみことばを実現しておられたのである。主は、私たちの贖いの約束に関しても、遅らせておられるのではない(Ⅱペテロ3:9)。やがて来るべき日に、モーセが予表する主イエスが、ご自分の民をこの世から連れ出し、永遠の約束の地に導いてくださるのである。

12:43~51 過越に関する永遠の掟によれば、外国人、隣人、または使用人であるかに関係なく、割礼を受けた男子だけがそれにあずかることができる。異国人はこれを食べてはならず、居留者と雇い人は、これにあずかってはならない、とされた。

13:1~15 神はエジプトでの死から、イスラエル人の長子を救われた。それゆえに、人間と家畜の初子は、神に属するものとして、神に奉獻されることになった。長

子は神の祭司となり、その後、レビ族がこの奉仕のために分離されるまでそれが続いた。きよい動物の初子は、生まれて一年以内に神に献げられることになっていた。きよくない動物の初子、たとえば、ろばの子は主に献げることはできなかった。そのため、子羊の死によって贖われなければならなかった。つまり、子羊が身代わりに死ななければならなかったのである。もし、ろばが贖われない場合は、その首が折られなければならなかった。それはまさに、贖われるか、滅びるかの選択であった。後に、ろばを金銭で贖うための措置が講じられた(レビ記27:27、民数記18:15)。罪をもって生まれる(人間の)長子も贖いを受ける必要があり、その代価は銀5シェケルであった(民数記18:16)。これは、人が神の前で道徳的に汚れた状態にあることを厳粛に思い起こさせるものである。

長子の聖別が神への献身を示すように、種なしパンの祭りは、贖われた民に求められる道徳的純潔を意味した。七日間、人々は種なしパンを食べるが、家の中にパン種があつてはならなかった。長子の聖別と、種なしパンの祭りは、どちらも主がどのようにしてご自分の民をエジプトから解放されたかを後世に伝えるための実物教訓となった。

13:16 後にユダヤ人たちは、9, 16節を文字通りに守り、経札、つまり神のみことばの一部を記したものを革製の小箱に入れて、額や手首に巻いた。しかし、(本来の)霊的な意味とは、私たちのすべての行い(手)と、すべての願い(目)が、神のことばと一致していなければならない、ということである。

13:17~20 エジプトからカナンへの最短の近道は、ペリシテの国を通り「ホルス(鷹)の道」として知られた海岸沿いの

道を行く、約二週間の旅であった。しかし、それは往来が多い街道である上、エジプト軍が常に監視の目を光らせていた。民が攻撃にさらされ、その結果、意気阻喪してしまわないように、**神**は、シナイ半島を横断する南寄りのルートに導かれた。イスラエルの子らは編隊を組み、出発した。彼らはまた、先祖たちの厳粛な誓いに従い、ヨセフの遺骸を生まれ故郷のカナンに運ぼうとした。ファイファー (C. F. Pfeiffer) は次のように記す。

イスラエル人の目の前で分かれた海のことを、聖書は「ヤム・スーフ」(Yam Suph)と呼んでいる。直訳すれば「葦の海」である(出エジプト記13:18)。今日、ビター湖(Bitter Lakes)という名で知られている一帯は、古代、紅海とつながっていた可能性がある。そうだとすると、伝統的に「葦の海」を「紅海」と訳してきたことの説明がつく。横断の場所が正確にどこだったのかについては数多くの説があるが、無条件に受け入れられているものはまだひとつもない。^{*⁽¹¹⁾}

13:21, 22 主が民とともにおられることは、**昼は雲の柱、夜は火の柱**が示していた。マシュー・ヘンリー(Matthew Henry)が言うように、それは「絶え間ない奇跡」であった。^{*⁽¹²⁾} この栄光の雲は、〈シェキナ〉として知られているもので、ヘブル語の「宿る」を語源としている。柱(または「円柱」とは、民に対する神の導きと、敵からの保護を表している(出エジプト記14:19, 20)。どちらの点でも、それは主イエス・キリストを見事に描いている。

B. 紅海横断 (14章)

14:1~9 第14章は聖書全体を通じ、最も劇的な章の一つである。主はイスラエルの子らに命じて、紅海の西側にある、**ピ・ハヒロテ**に南下させた。こうすることで逃げ道はなくなったように思われたが、かえってその後の奇跡が一層目覚ましいものとなった。ファラオは彼らが畏にかかったと思い、**選り抜きの戦車六百とエジプトの全戦車を、それぞれに補佐官をつけて追跡した**。ファラオが追いついてみると、明らかに孤立無援のイスラエル人二百万人が**海辺に宿営**していた。このように、二つのものの間にはさまれて、にっちもさっちもいかない状態を(英語の慣用表現では)“between the devil and the blue sea”(「悪魔と紺碧の海にはさまれて」と言うが、その起源はおそらくここであろう(もちろん、この場合、「悪魔」とはファラオを指し、「紺碧の海」とは「紅(!)海」のことである)。

14:10~14 イスラエルの子らが目を上げて、エジプト軍が彼らの後に迫っているのを見たとき、恐怖で立ちすくんだのも無理はない。しかし、彼らが主に向かって**叫んだのは賢明**であった。ところが、その舌の根も乾かぬうちに、主が立てられた指導者モーセに向かって以前と同様に不平をぶちまけ(5:21)、「この荒野で死ぬよりは、**エジプトに仕えるほうがよかったのだ**」と言った。これは彼らの不信仰以外の何ものでもなかったが、決してこれが最後というわけでもなかった。モーセは、もはや臆することなく、彼らに言った。「**主があなたをたのために戦われるのだ。あなたがたは、ただ黙っていなさい。**」

14:15~18 歴史上、最も偉大な奇跡の一つが起ころうとしていた。

主はモーセに言われた。「…イスラエルの子らに、前進するように言え。あなたは、あなたの杖を上げ、あなたの手を海の上に伸ばし、海を分けなさい。そうすれば、イスラエルの子らは海の真ん中の乾いた地面を行くことができる。」

神がエジプト人の心を頑なにし、ファラオとその全軍勢にまさる栄光を現されたことについて、マシュー・ヘンリー (Matthew Henry) は次のように記す。

神の恵みの影響に長い間抵抗してきた者は神の怒りの下にある、という印象を与えたとしても、神のなさることは間違っていない。それが、この頑固で尊大な反逆者に対して意気揚々と語られている。^{*(13)}

14:19~28 神の使い(キリストのこと。士師記6章の考察を参照)は雲の柱となつてイスラエル人の軍勢のうしろに立ち、エジプト人から彼らを守った。雲の柱はイスラエル人には光を与え、エジプト人を暗闇で覆った。モーセの命令一下、紅海は分かち、両側に水の壁ができ、その間に乾いた地面が出現した。イスラエル人は無事に通過したが、ファラオの軍勢が後に続こうとすると、主は・・・エジプトの陣営を混乱に陥れ、戦車の車輪を外してその動きを阻んだ。退却もままならないうちに、モーセが命じるやいなや、海は元の状態に戻った。残った者は一人もいなかった。私たちが神の御心にしがたつて前進するなら、紅海を開いたのと同じ信仰が不可能を可能にするのである。

14:29~31 紅海横断は旧約聖書中、神の力が最大級に発揮された場面として描

かれているが、史上最大の力は、キリストを死者の中からよみがえらせた力である。

C. モーセの歌 (15:1~21)

過越が〈血〉による贖いを語るように、紅海は〈御力〉による贖いを語っている。モーセの歌は後者を祝うものである。ウッドリング博士 (Dr. H.C. Woodring) はその概要を次のように説明する。^{*(14)}

前奏 (1節) — ヤハウェの勝利

第1連 (2,3節) — 主はどのような方か：力、ほめ歌、救い

第2連 (4~13節) — 主がなさったこと：過去の敵に対する勝利、エジプトからの民の解放

第3連 (14~18節) — 主がなさること：将来の敵に対する勝利、民を相続地に導くこと

後奏 (19節) — エジプトの敗北とイスラエルの解放の対比

交唱による応答 (20,21節) — ミリアムとすべての女たち

三百年ほど前に、英国の注解者マシュー・ヘンリー (Matthew Henry) は、この偉大な霊的頌歌に対する評価と理解を、次のように表現している。

この歌について、以下のことを知ることができる。

- (1) 古代の歌であり、私たちが知る限り、最古のものである。
- (2) 構成が非常に見事で、文体は高貴で壮大、イメージは生き生きとして適切であり、全体は非常に感動的である。
- (3) 聖なる歌で、神の栄誉に捧げられ、神の名を高揚し、その賛美を祝うも

のであり、人間を称えるためのものではない。

- (4) 予型的な歌である。敵が敗北したことによる福音の教会の勝利を、モーセの歌と子羊の歌が一つになって表現している。モーセの歌が紅海のほとりで歌われたように、子羊の歌はガラスの海のほとりで歌われることになる（黙示録15:2,3）。*⁽¹⁵⁾

VIII. シナイへの旅 (15:22～18:27)

A. シュルの荒野 (15:22～27)

22節から始まるのは葦の海（紅海）からシナイ山に至るまでの旅の記録である。その足跡の一つ一つに、いつの時代にも信仰を持つ者にとっての霊的な教訓が詰まっている。たとえば、「苦い」という意味のマラは、人生の苦い経験を物語る。一本の木は、人生の苦い経験を甘美なものに変えるカルバリの十字架を暗示している。マラで主は「わたしは主、あなたを癒やす者（ヤハウェ・ロフェカ）」としてご自身を啓示された。エジプト人を悩ませた、いろいろな病気からイスラエルを救い出す、と約束されたのである。十二の水の泉と七十本のなつめ椰子の木があるエリムは、十字架に到達した後を得られる心の安らぎと活力の回復を暗示している。

B. シンの荒野 (16章)

16:1～19 南東に向かって旅を続けた民はやがてシンの荒野にやって来た。*⁽¹⁶⁾ その場所で、彼らは、食物がないことにひどく腹を立て、エジプトの食物が恋しくなった。まるでエジプトの食べ物に伴う悲惨な奴隷生活を忘れてしまったかのように。

神はこれに応え、恵み深くも、夜には大量のうずらを、朝にはマナをふんだんに与えられた。うずらが与えられたのはこの箇所と、民数記11:31の二回だけであるが、マナは途切れることなく与えられた。「マナ」とは「これは何だろう」という意味である。それは神によって備えられた奇跡の食物であった。これを自然現象としてどんな説明を試みても、うまくいくことはない。マナは小さく、丸いもので、白く、甘い味がした（31節）。それは、身を低くされ（「小さく」）、完全で（「丸く」）、清らかで（「白く」）優しい（「甘い」）神のパンであるキリストを表している（ヨハネ6:48～51）。マナが届くのは朝露と何らかの関係があり、私たちのたましいにキリストを与えるのは聖霊であることに気づかせてくれる。イスラエル人は一人あたり一オメル（2.3リットル）ずつ集めることが許された。一オメルに近づけるために、どれだけ集めても、どれだけ減らしても、集まったものは常に十分で、決して多すぎることはなかった。ここに、民のあらゆる必要を満たすキリストの充足性と、クリスチャンが貧しい人々に分かち与えることの結果が暗示されている（Ⅱコリント8:15）。マナを集めるのは早朝でなければならなかった。日が高くなると、溶けてしまうからである。それと同様に、私たちも一日を始めるにあたって、人生の重圧がかかる前に、キリストを食さなければならぬ。マナは毎日集めなければならなかった。それは、私たちが毎日、主を糧としなければならぬのと全く同様である。集めるのは一週間のうち、最初の六日間だけで、七日目にマナが備えられることはなかった。

16:20～31 六日目に、民は安息日を無事に乗り切るために、他の日の二倍の量を集めるように命じられた。もし他の日に

その一部を残すと、マナには虫がわき、悪臭を放った。マナはコエンドロの種のように、白く、その味は蜜を入れた薄焼きパンのようであった。焼いても、煮てもよかった。モーセは、安息日にもマナを集めようとして出かけて行った者たちを叱責した。

16:32~34 マナの一部分は金の壺に入れて記念として保存され、後に契約の箱の中に納められた（ヘブル9:4）。神は創造の第七日目に休まれたが（創世記2:2）、まだその時点では、人間にそうするように命じてはおられなかった。しかし、今度は、安息日の律法をイスラエルの民に与え、後にそれは十戒の一つとなった（20:9~11）。それは、シナイ山でイスラエルと結ばれた契約のしるしであり（31:13）、エジプトでの奴隷生活から解放されたことを、週ごとに思い起こさせてくれるものであった（申命記5:15）。異邦人が安息日を守るように命じられたことは一度もない。十戒のうちの九戒までは、教会に対する正しい教えとして、新約聖書の中でも繰り返されている。繰り返されていないのは、安息日の律法だけである。とはいえ、七日のうち一日は、全人類の休息日であるという原則が示されている。クリスチャンにとって、その日とは週の初めの日、すなわち主の日である。それは法的な義務ではなく、世俗的な活動から解放されて、主への礼拝と奉仕に専念できる恵みと特権の日なのである。

「さとしの板」とは契約の箱のことであるが、まだ（契約の箱が）存在もしていないうちに、言及がなされている。これは、物事が起きる前に言及する、という（聖書の）原則の一例である。「さとし」とは、文脈によっては、十戒を意味する場合もある。

16:35, 36 四十年の間マナを食べる、というのは、イスラエルの民の荒野での放

浪の期間を予見している。マナは、カナン
の地の境のすぐ内側にあるギルガルに、彼らが到着した時にやんだ（ヨシュア5:12）。

C. レフィディム（17章）

17:1~7 レフィディムで民はモーセと争った。水が足りなかったからである。主はモーセに、ホレブ（「荒れ果てた場所」の意）として知られていた場所に行き、その杖で岩を打て、と命じられた。モーセがその通りにすると、岩から水が流れ出た。これはキリストがカルバリで打たれた結果、五旬節（ペンテコステ）の日に与えられた聖霊を表している。マサ（「誘惑」または「試練」の意）は、民が神を試した場所である。メリバ（「叱責」または「争い」の意）は、民がモーセと争ったところである。

17:8~16 ヨシュア（ヘブル語で「ヤハウエは救い」の意）はここで初めて登場する。モーセの従者であったヨシュアは、レフィディムでアマレクを相手に戦った。モーセが手を上げ、神に頼って執り成している間は、イスラエルが何とか優勢を保った。しかし、モーセの手が垂れ下がってくると、アマレクが勢いを取り戻した。アマレクはエサウの子孫にあたり、「肉」、すなわち人間の邪悪で墮落したアダムの性質を表している。「肉」とアマレクとの間には以下のような類似点があることに注意しよう。

- (1) 人が回心して聖霊が与えられると、「肉」は御霊に反抗しようと姿を現す。
- (2) 主は世々にわたって「肉」と戦われる。
- (3) 死、または教会の携挙の時までは「肉」が信仰者から根絶されることは決してない。
- (4) 「肉」に勝利するための二つの方法が示唆されている。祈りとみことば

である。

古代のユダヤ人歴史家ヨセフスによれば、フルはモーセの姉、ミリアムの夫である。このフルが後に、モーセがシナイ山に登っていた間、アロンと共に民を監督したのである(24:14)。

主の御座の上にある手(※英訳は「主はわが旗」)(ヘブル語で「ヤハウエ・ニシ」とは、ヤハウエの複合名である。

D. モーセとイテロ(18章)

18:1~12 18章は、出エジプト記において明確な区切りとなっている。これまで、マナが降ったこと、岩が打たれたこと、そして水が流れ出たことを見てきた。それらは、キリストの受肉、キリストの死、そして聖霊の降臨を指している。ここからは、将来におけるキリストの栄光の輝きを予見しているようである。モーセは地上を治めるキリストの予型である。息子たちはユダヤ人を表し、イテロは異邦人を予表している。そして、モーセの異邦人の妻、ツイボラは教会を象徴している。それら全員が、千年王国の祝福を喜び楽しみ、ユダヤ人と異邦人は千年王国の臣民となり、教会はキリストとともに地上を治めるのである。

ここに記されている出来事は時系列に沿ったものではない。5節を見ると、イテロがシナイ山にいるモーセに会いに来た、と書かれているが、イスラエルがシナイ山に到着したのは19:2である。注解者の一人は、このような順序にしたのは、主との会見、および律法の付与、という出来事を、滞りなく説明するためではないだろうか、と言う。おそらくモーセは妻と二人の息子をミディアンに残して、エジプトに戻ったのであろう。そして今、イテロはツイボラ、ゲルショムとエリエゼル(「神はわが助け」の意)をモーセの前に連れ出し、一同は喜

びの再会を果たす。イテロは回心して、唯一の真の神を信じる者となったようである。しかし、イテロはもともとヤハウエの礼拝者であった、と考える学者もいる。

18:13~27 民のもめごとをさばく、という、気の遠くなるような任務がモーセ一人にのしかかっているのを見たイテロは、娘婿モーセに対し、民全体の中から神を恐れ、真実で、不正の利を憎む高潔な人々を選び、補佐させてはどうか、と助言した。イテロの提案の中には、千人の長、百人の長、五十人の長、十人の長が含まれていた。こうすることによってモーセの負担を軽くし、仕事を迅速に処理できるようになった。イテロの助言は神の導きによるもので、賢明な権限委譲を促すものだった、と考える人もいるが、その一方、神が任務を課されるからには、恵みの備えがあるはずである、と指摘する人もいる。この時まで、神は人がその友と話すようにモーセと語り、仲介者を立てることもなかった。その点からすると、神が新たな取り決めをされるまでは、今まで通りに事を運ぶべきだったのである。

IX. 律法の授与(19~24章)

A. 啓示のための準備(19章)

19:1~9 イスラエルの子らは、ついにシナイ山に到着した。出エジプト記の残りの部分、レビ記全体、および民数記の1~9章は、このシナイ山で起きた出来事を記録している。

アダムからこの時まで、神から直接与えられた律法はなく、民への主のお取り扱いの大部分は恵みによるものであった。しかし今、条件付きの律法の契約が彼らに提示された。もしあなたがたが確かにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るなら、あなたがたはあらゆる民族の中であって、

わたしの宝となる。・・・あなたがたは、わたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる。もし聞き従うなら、神は祝福してくださる、と。民は、自らの罪深さと無力さを悟らずに、すぐさまこれに同意した。ムーディー (D.L. Moody) はこう述べている。

「私たちは主の言われたことをすべて行います。」何と大胆で、自信に満ちたことばであろう。(しかし) 金の子牛、(十戒の) 砕かれた石板、無視された律法、石打ちにされた(神からの) 使者、拒まれ、磔刑にされたキリストは、人間の誓いがどれほど不名誉なものであるかを示す圧倒的な証拠である。*⁽¹⁷⁾

ディスペンセーション

神が人類に関わる歴史の中で、この箇所は大きな分岐点となっている。ことに神の選民であるイスラエルに関してそうである。ここでも、他の箇所でも、人間の問題に対する神の関わり方に変化があったことは、〈ディスペンセーション〉、つまり神のご支配という点において、一定の変化があったことを示している。

アウグスティヌスはかつて、「時代を区別すれば、聖書は調和する」と言った。「神は(御子)によって、それぞれの時代をお造りになった」(ヘブル1:2。RV欄外注)。これらの時代は長いかもしれないし、短いかもしれないが、それを区別するのは、期間の長さではなく、その時代における神の人間に対するお取り扱いの方法である。

神ご自身は決して変わらないが、その方法は変わる。神はその時々に応じてお働き

になるのである。神が特定の時代に、人間と関わる方式を〈ディスペンセーション〉と呼ぶ。厳密に言えば、ディスペンセーションとは、ひとつの時代区分、というより、むしろ、行政、管理、秩序、あるいは摂理(economy。ギリシア語でoikonomia。「家」を意味する oikos と、「法律・法則」を意味する nomos を合成したもの)を意味する。しかし、時間を考慮に入れずにディスペンセーションを考えるのは難しい。

一例を挙げると、アメリカ合衆国政府は、いくつかの政権の時代に区分される。私たちはケネディー政権とか、ブッシュ政権と呼ぶ。もちろん、それは、大統領たちが在職していたとき、政府がどのような施策を行っていたか、ということの意味しているのである。大事なのは実施された政策の方であるが、その諸政策は必然的に、その特定の期間と結びついているのである。

したがって、ディスペンセーションとは、歴史のどの時代であっても、神が人々とどう関わったか、という様態として私たちは考えるのである。神がディスペンセーション的に(人間を)扱われる、ということ、家庭経営に例えてみるができるであろう。家庭がまだ夫と妻だけのときは、それなりの生活の仕方がなされる。しかし、小さい子どもが何人かいるとなると、それまでとは全く異なる一連の対応が始まることになる。(しかし) 子どもたちが大人になるにつれ、家庭のさまざまな事柄は、まともや違った対処がなされていく。これと同じパターンが、神が人類をお取り扱いになる際にも見ることができる(ガラテヤ4:1～5)。

たとえば、弟アベルを殺したカインに、神はひとつのしるしを与えて、だれかがカインを見つけて殺すことのないようにされた(創世記4:15)。ところが、大洪水後、

神は死刑を制定し、「人の血を流す者は、人によって血を流される」と宣言しておられる（創世記9:6）。この違いはディスペンセーションが変わったためである。

もう一つの例は詩篇137:8,9において、詩篇作者はバビロンの上に厳しいさばきが下るようにこう祈っている。「娘バビロンよ 荒らされるべき者よ。幸いなことよ おまえが私たちにしたことよ 仕返すする人は。幸いなことよ おまえの幼子たちを捕らえ 岩に打ちつける人は」。

（ところが）それよりずっと後になって、主はご自分の弟子たちにこう教えられた。「あなたがたの敵を愛しなさい。あなたがたを憎む者たちに善を行いなさい。あなたがたを呪う者たちを祝福しなさい。あなたがたを侮辱する者たちのために祈りなさい」（ルカ6:27,28）と。

律法の下で生きていた詩篇作者にとって はふさわしかったことばでも、恵みの下で生きるクリスチャンにとっては、もはやふさわしいものと言えないことは明白ではないだろう。

レビ記11章では、ある種の食物は汚れたものと名指しされている。しかし、マルコ7:19で、イエスはすべての食物はきよい、と宣言された。

エズラ記10:3でユダヤ人は異国人の妻とその子どもたちをみな追い出すように、と命じられた。（しかし）新約聖書では、信者は離縁しないように、と教えられている（I コリント7:12～16）。

律法の下では、神の御前に出ることが許されたのは大祭司ただ一人であった（ヘブル9:7）。（しかし）恵みの下では、すべての信者が至聖所に入ることができる（ヘブル10:19～22）。

これらの違いがはつきり示しているのは、ディスペンセーションに変化があったとい

うことである。

ディスペンセーションの数や、それぞれにつけられた名称に、すべてのクリスチャンが賛同しているわけではない。それどころか、すべてのクリスチャンがディスペンセーションを受け入れているわけでは全くないのである。

しかし、ディスペンセーションが存在することは次のようにして立証することができる。第一に、少なくとも、律法と恵みという二つのディスペンセーションがある。「律法はモーセによって与えられ、恵みとまことはイエス・キリストによって実現したからである」（ヨハネ1:17）。私たちが手にする聖書が旧約と新約に分けられている、という事実そのものが、私たちに支配を及ぼすものに変化が起きたことを示している。それに加え、新約の時代の信者には動物のいけにえを献げることが求められていない、ということが証拠となる。これもまた、神が新しい秩序を導入されたことを示している。新旧両約の間に起きたこの大きな転換に気がつかないクリスチャンはほとんどいないのではないだろうか。

しかし、もし二つのディスペンセーションがあることに同意するなら、三つ（のディスペンセーションが）あると考えざるを得ない。なぜなら、〈律法のディスペンセーション〉が導入されたのはここ、出エジプト記19章が最初であって、それは天地創造から何百年（何千年）と経った後のことだからである。したがって、律法以前に少なくとも一つのディスペンセーションがあったことになる（ローマ5:14参照）。これで三つとなった。

その次に、四つ目のディスペンセーションにも同意できるのでなければおかしいことになる。なぜなら、聖書は「来たるべき世」（ヘブル6:5）について語っているから

である。これは主イエスが戻って来られ、地上を支配される時のこと、つまり千年王国という名称で知られている時のことである。

パウロもまた、今の世と来たるべき世の区別をしている。第一に、パウロは福音と教会に関する真理に関連して、自分に委ねられたディスペンセーションについて語っている（Ⅰコリント9:17、エペソ3:2、コロサイ1:25）。それが現在の時代のことである。ところがパウロは同時に、未来の時代をも指し示している。それは「時が満ちたディスペンセーション」（エペソ1:10英訳）のことである。パウロが詳細に述べているところから明らかになるのは、その時がまだ到来していない、ということである。

したがって、私たちは世界歴史の最後の時代に生きているわけではないことが分かる。

スコフィールド博士(Dr. C. I. Scofield)は以下のように七つのディスペンセーションを挙げている。

1. 無垢（の時代）（創世記1:28）：アダムの創造から堕落まで。
2. 良心または道徳的責任（の時代）（創世記3:7）：堕落から大洪水の終わりまで。
3. 人間による統治（の時代）（創世記8:15）：大洪水の終わりからアブラハムの召命まで。
4. 約束（の時代）（創世記12:1）：アブラハムの召命から律法の授与まで。
5. 律法（の時代）（出エジプト記19:1）：律法の授与から五旬節の日まで。
6. 教会（の時代）（使徒2:1）：五旬節の日から携挙まで。
7. 御国（の時代）（黙示録20:4）：キ

リストによる千年間の統治。^{*(18)}

詳細な点まで厳密に同意するかどうかはあまり重要でないにしても、異なったディスペンセーションがあることを理解することは非常に有益である。律法と恵みの区別はことに重要である。さもなければ、他の時代に適用されている聖書の箇所を自分たちに当てはめてしまうことになる。確かに、聖書はすべて私たちにとって有益であるが（Ⅱテモテ3:16）、すべてが直接私たちに向けて書かれたわけではない。他の時代を扱った箇所も私たちに適用できる場所があるが、第一義的には、そもそもそれらが書かれた時代に即して解釈されなければならない。レビ記11章の食事制限についてはすでに見た通りである。ここで禁止されていることは、今日のクリスチャンを拘束するものではないが（マルコ7:18, 19）、その根本的な原則は、私たちが道徳的、霊的な汚れを避けるべきだということに変わりはないのである。

神はイスラエルの民に、もし神に聞き従うなら、物質的な繁栄を与える、と約束された（申命記28:1～6）。そこでは、地上における物質的な祝福という点が強調されていた。しかし、今日にそれは当てはまらない。神は私たちの従順に、金銭的な繁栄で報いてくださる、とは約束しておられない。むしろ、この時代の祝福とは、天上における霊的祝福なのである（エペソ1:3）。

さまざまな時代にはいろいろな違いが存在するものの、決して変わることはないものがひとつある。それが福音である。救いは常に、今までも、現在も、そしてこれからも、主を信じる信仰によるのである。そして、どの時代であれ、救いの土台は、十字架上で完了したキリストの御わざである。

^{*(19)} 旧約時代の人々が救われたのは、主

から与えられた啓示がどのようなものであれ、それを信じたからであった。たとえば、アブラハムが救われたのは、父祖である自分から出る子孫の数が空の星のように多くなる、と神が言われたのを信じたからである（創世記15:5,6）。アブラハムはおそらく、それから何世紀も経てカルバリで起こることについて、ほとんど何も知らなかったことだろう。しかし、主はご存じであった。そして、アブラハムが神を信じたとき、将来、カルバリでなされるキリストの御わざの価値のすべてがアブラハムのものとなるようにしてくださったのである。

ある人が言ったように、旧約の聖徒たちは「信用取引」で救われた。つまり、彼らは多くの年月の後、主イエスが支払うであろう代価に基づいて救われたのである（これがローマ3:25の意味に他ならない）。私たちは、二千年前にキリストが成し遂げられた御わざに基づいて救われたのである。しかし、どちらの場合も、救いは主を信じる信仰による。

律法の時代にいた人々が救われたのは、律法を守ったから、あるいは、動物のいけにえを献げたから、という考えには警戒しなければならない。律法にできるのは罪に定めることだけで、救うことはできない（ローマ3:20）。そして雄牛と雄やぎの血をもってしても、たった一つの罪ですら取り除くことはできないのである（ヘブル10:4）。それは不可能である。神による救いの方法は信仰によるものであり、信仰以外のものにはよらないのである（ローマ5:1参照）！

もう一つ覚えておきたい点がある。それは、現在の〈教会時代〉を〈恵みの時代〉と言ったとしても、神が過去のさまざまな時代において、恵み深くなかったという意味ではない、ということである。それは単

に、神は今、律法の下ではなく、恵みの下で人間を試しておられる、という意味に過ぎない。

また、それぞれの時代が一秒の狂いもなく終焉するわけではない、と知っておくことも重要である。多くの場合、時代が重なっていたり、移行期間があつたりする。たとえば、使徒の働きにその例がある。誕生したばかりの教会が、それに先立つデイスペンセーションの「装飾品」を脱ぎ捨てるには時間がかかった。したがって、携挙と患難時代との間に一定の期間があつて、その期間中に〈不法の人〉が現れ、エルサレムに神殿が建てられる、ということもあり得るのである。

最後に一言。あらゆる良いことと同様に、デイスペンセーションの学びも乱用される可能性がある。あるクリスチャンは、デイスペンセーションを極端に解釈するあまり、何と、パウロの獄中書簡以外は現代の教会に適用することができない、とまで主張する！その結果、彼らはバプテスマも主の晩餐も受け入れない。^{*(20)} そのどちらも獄中書簡にはないからである。彼らはまた、ペテロの福音のメッセージはパウロのものと異なる、と教えている（これに対する反論についてはガラテヤ1:8,9を参照）。このような人々は、時として、超デイスペンセーション主義者、またはプリンジャー主義者（E. W. Bullingerという教師の名にちなんで）と呼ばれている。デイスペンセーションに対する彼らの極端な見解は否定されなければならない。

19:10～20 神からの啓示に備えるため、人々は自分たちの衣服を洗い、また性行為を慎むように命じられた。神の御前に身を置くときには、清浄であることが欠か

せないことを教えるためであった。シナイ山は人を寄せ付けないところであった。人間であれ、動物であれ、シナイ山に触れるなら、死の刑罰を覚悟しなければならなかった。それに違反する者は、離れたところから矢で刺し殺されるか、または石で打ち殺されなければならない、そのような者に従(つ)いて山に登るようなことがあってはならなかった。登ることを許されたのは、モーセとアロンだけであった(24節)。しかも、それは雄牛の角笛が鳴り響く時のみであった。山は厚い雲に包まれ、雷鳴と稲妻、火と煙があり、山全体が激しく震えていた。これらのことはみな、神にお会いする時、特に律法を守ることによって神にお会いしようとする時に経験する恐怖を物語っている。

19:21~25 民が山に手を触れるようなことがあってはならない、と主は再度、モーセに警告された。モーセは最初、改めて民に確認する必要はない、と思っていたが、考え直して、警告に従った。22節および24節の祭司たちとは、おそらく長子たちのことであろう。

B. 十戒(20章)

主イエスは十戒を二つの部分に分けられた。一つは神を愛することに関わる部分であり、もう一つは隣人を愛することに関わるものである(マタイ22:37~40)。第一戒から第四戒は神への愛を教えるものであるとする説と、第五戒をそこに加える説がある。「あなたの神、主」という表現があるのは、前半の五つの戒めの中だけである。

第一戒

20:1~3 ほかの神があつてはならない。：これは多数の神々への礼拝(多神教)、あるいは、ヤハウェ以外の神への礼拝を禁じるものである。

第二戒

20:4~6 偶像を造ってはならない。：偶像を拝むことにとどまらず、偶像を造ることも禁じられている。この(戒めの)中に、礼拝で用いる絵、(肖)像、彫像が含まれる。ただし、あらゆる絵や彫像が含まれるわけではない。幕屋の中には彫刻を施されたケルビムが置かれていたからである。また、神はモーセに青銅の蛇を作るように命じられた(民数記21:8)。この戒めが、神を絵、または彫像で表すことを指すのは間違いない。神は**ねたみの神**である。つまり、民の礼拝と愛(の対象)に嫉妬されるのである。神は、父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼす。子孫は、先祖から受け継ぐ弱さ、貧困、病、短命に見舞われる。しかし、神の恵みは、神を愛し、神の命令を守る者には、千代にまで及ぶ。

第三戒

20:7 主の名をみだりに口にしてはならない。：これは、偽りの発言をしておきながら、それが真実である、と神の御名によって誓う、という意味である。また冒涇、悪態、曖昧な誓約、約束を守ると誓ったのに、結局はそれを果たさないことも含まれる。

第四戒

20:8~11 安息日を覚えよ。：創世記2:1~3に最初の言及があり、マナを集めることに関連して命じられた安息日(出エジプト記16章)は、今や、厳格に守るべきものとして、正式にイスラエル民族に与えられた。これは、キリストを信じる者が、今、受けている安息と、贖われた被造物全体が千年王国において受ける安息を描いている。安息日とは週の七日目であって、金曜日の日没から土曜日の日没までを言う。(しかし)新約聖書のどこにも、クリスチャンが安息日を守るように命じられている

ところはない。

第五戒

20:12 あなたの父と母を敬え。: ここで言う〈敬う〉とは、従うという意味である。両親に従う生き方は、一般的に長寿を保証するものである、とこの聖句は教えている。(それに対して)不従順と罪の生活は、しばしば早死に至らせる。これは約束を伴った最初の戒めであり(エペソ6:2)、権威を尊ぶべきことを教えるものである。

第六戒

20:13 殺してはならない。: これは具体的には(意図的な)殺人のことであって、死刑や過失致死のことを言っているのではない。この戒めは、人間の命が尊ばれるべきものであることを教えている。

第七戒

20:14 姦淫してはならない。: この禁令は、結婚を尊ぶことを教え、他人の身体を利己的な目的で利用することを戒めている。あらゆる類(たぐい)の背徳的な性行為をも含む可能性がある。

第八戒

20:15 盗んではならない。: これは他人の所有物を不当に奪うあらゆる行為を指し、私有財産を尊ぶべきことを教えている。

第九戒

20:16 偽りの証言をしてはならない。: この戒めは、事実と異なることを述べて、他人の人格を傷つけることを禁じている。その結果、その人が罰せられ、場合によっては死刑にされることもないとは言えない。この戒めは、他の人の名誉を重んじることを教えているのである。

第十戒

20:17 隣人の家を欲しがってはならない。: 第十戒は、行為から思考に移り、神が意図しておられないものを欲しがることが罪であることを示している。パウロは、

この戒めによって、自分の人生に、罪に対する深い自覚が生まれた、と述懐している(ローマ7:7)。

20:18~21 十戒が授与された後、民は神のご臨在を示す現象によって恐れおののいた。もし神が直接お語りになろうものなら死んでしまう、と彼らは思ったのである。そこでモーセが彼らの仲介者となった。

20:22~26 モーセの律法の目的は、民に自らの罪深さを悟らせることにあった。次に、神は血が流されてこそ、罪ある者が神に近づけることを思い起こさせるために、慈悲深くも、祭壇を造る上での指示をお与えになった。祭壇は、神に近づく道であるキリストを示している。人間はキリストの完全さに何一つ加えることはできない。自分自身の努力、という「道具」によっても、人間の功績、という「階段」によってもできないのである。

祭司が、ゆるやかな長い衣をまといて階段を登っていけば、うっかり自分の体を露出させ、厳粛な場にふさわしくない事態になる恐れがあった。

C. 種々の律法 (21~24章)

1. 奴隷に関する律法 (21:1~11)

21:1~6 十戒に続き、神はイスラエルの民の行動に関するさまざまな律法をお与えになった。ヘブル人であっても、借金返済や盗みの償いのため、あるいは、ヘブル人奴隷の子として生まれたために、奴隷となる場合があった。ヘブル人の男奴隷を買う場合、六年間の労働を要求できたが、七年目には自由にしなければならなかった。もし奴隷になったときに妻があったなら、その妻は彼とともに解放された。しかし、奴隷となっている間に結婚した場合、妻とその子どもたちは、主人のものとなった。その際、戸口の柱に耳をつけ、錐(きり)で

耳を刺し通してもらい、自発的に自分自身を主人の家の一部と認めることによって、奴隷にとどまる選択もできた。それ以降、奴隷には、いわば耳標がついたわけである。これは、私たちを愛するがゆえに、自由になる道を選ぼうとせず、カルバリの十字架に向かっていかれた完全な〈しもべ〉であるキリストを見事に示すものである。救い主が私たちのためにしてくださったことに鑑（かんが）みれば、私たちは喜んで奴隷となり、モール監督（Bishop Moule）に倣って、こう言うべきである。

わが主よ、我を戸口まで導きたまえ。
 今や従順となりしこの耳を
 刺し通したまえ、もう一度。
 汝の縄目こそ、わが自由なれ。
 我を汝のもとにとどまらせ
 労させ忍ばせ従わせたまえ。*⁽²¹⁾

21:7～11 女奴隷の場合は、七年目になっても自由になれない場合があった。それは、主人に妻、または内縁の妻として迎えられ、彼女に（夫としての）責任を果たそうとした場合である。しかし、もし主人にその気がない場合には、贖い出されるようにしなければならず、異国の民に売らないようにしなければならなかった。主人が彼女を自分の息子の嫁にしたい場合は、嫁にふさわしい扱いをする義務があった。もし主人が妻をもう一人娶（めと）った場合でも、女奴隷の生活の面倒を見る義務は依然として残っているし、夫婦の務めを果たす責任もそのままであった。ここで言う夫婦の務めとは、おそらく、生活の便宜を図る、ということ以上ではないと思われる。そのような対応がなされない場合、彼女は、金を払わないで無償で出て行くことができた。

神が奴隷制度についての法を定められた、といっても、それを是認されたということではない。神は、奴隷とされた人々の人権を保護しておられただけである。

2. 人身事故に関する律法

(21:12～36)

21:12～14 12節は、他人を殺した犯罪者は殺されなければならない、という一般原則を述べている。ただし、過失致死の場合は例外規定が設けられた。つまり、その死が故意ではない場合、殺人者は神の祭壇に、後には、特別な逃れの町々に逃れることができた。しかし、故意の殺人の場合は、神の祭壇に逃れても、殺人者の安全は保証されなかった。

21:15～17 親は特に保護され、父や母を殴った場合は、死刑になるほどであった。誘拐や、自分の親をののしることも、死罪にあたる罪とされた。

21:18, 19 口論をしている最中に、相手に怪我をさせた場合には、その人が休んだ分を弁償し、治療費も払わなければならなかった。

21:20, 21 主人は奴隷を罰することはできたが、殺す権限はなかった。もし、奴隷が殴られた直後に死亡した場合には、主人が罪に問われた。しかし、奴隷が一日か二日生き延びた場合には、主人は罰せられない。自分の財産と同じ価値のある奴隷を殺す意志がないことは明白だからである。

21:22 妊婦が二人の男の喧嘩に巻きこまれて早産した場合、重症でなくとも、夫が罰金の額を申告し、法廷が仲裁に入った。

21:23～25 人身事故については、いのちにはいのちを、目には目を、歯には歯を、が原則であった。処罰は犯罪に見合ったものでなければならず、過度に手ぬるか

ったり、過度に厳しかったりする事態は避けなければならなかった。実際には、殺人以外のすべての事件は罰金の支払いによって解決することができた（民数記35:31参照）。

21:26～36 もし奴隷の目や歯を傷つけた場合、その奴隷は自由の身になることが許された。もし、牛が不意に人を殺した場合、その牛は石で殺さなければならず、その肉を食べてはならなかった。もし、その牛が凶暴であることを持ち主が知っていて、その危険性を認識していた場合には、持ち主も殺されなければならなかった。しかし、所有者が自分のいのちの代わりに償い金を払う、という道も残された。その償い金は、息子の場合も、娘の場合も同じであった。奴隷が死んだ場合、賠償金は銀貨三十シケルであり、牛は石で打ち殺されることになっていた。

注目したいのは、ユダがイエスを裏切った対価が、牛に殺された奴隷と同じことである。つまり、イエスを、死んだ奴隷と同額に値踏みしたのである。

もし人が水溜めを掘ってそこにふたをせずにいた場合、そこに落ちた家畜によって生じた責任を負わされた。もし、ある人の牛が、隣人の牛を殺した場合、その二頭を売った代金は平等に分配された。もし攻撃を仕掛けた牛の所有者が、以前からその危険な習性に気づいていた場合、殺された牛の弁償をしなければならなかった。しかし、死んだ牛を引き取ることは可能であった。

3. 盗難と物的損害に関する律法（22:1～6）

盗人は、盗んだ物を完全に返済しなければならず、その額は窃盗の内容次第であった。もし盗人が、夜中に侵入しようとしている時に殺された場合、彼を殺した者が罪

に問われることはなかった。侵入しようとした動機が窃盗なのか殺人なのか、知る由もないからである。しかし、日中に盗人を殺すと、殺した者は罪を負うことになった。1節の盗人は、もし賠償が出来なければ、奴隷として売られることになる。もし盗まれた家畜が死なずに見つかったなら、盗んだ者はそれを二倍にして償わなければならなかった。もし、家畜が他人の穀物畑に迷い込むのを黙認した場合、その農夫は自分の畑の最良の物と、ぶどう畑の最良の物から、家畜が食べたのに匹敵する分量を弁済しなければならなかった。不注意から火災を発生させ、作物を台なしにした人は、それを償わなければならなかった。

4. 不正直に関する律法（22:7～15）

22:7～13 7～9節は、他の人を信用して預けたお金や財産が奪われた場合への対処を扱っている。盗人はそれを二倍にして償わなければならなかった。もし盗人が見つからない場合は、お金を預かっていた者が法廷に出頭し、その人自身が有罪かどうか調べを受けた。背任があった場合は、告発者と被疑者のどちらに非があるかを判定した上で、倍額の賠償が要求された。家畜を受託者に預け、預けている間に家畜が死んだり、怪我をしたり、持ち去られたりした場合、受託者が主の前で、その出来事は自分の力では防げなかった、たとえば、賠償は不要であった。もし受託者の不注意で家畜が盗まれたのなら、補償をしなければならなかった。家畜が野獣にかみ裂かれた場合、証拠としてそれを持って行けば、償いをする必要はなかった。

22:14, 15 借りた家畜が負傷したり、死んだりした場合は、借りた者は必ず償わなければならなかった。しかし、その時、持ち主と一緒におり、その気になれば家畜

を保護できたのであれば、償いは不要であった。貸借りの家畜の場合、償いは必要なのである。損失のリスクは初めから借り賃に含まれていたからである。

5. 誘惑に関する律法 (22:16, 17)

男が、まだ婚約していない処女を誘惑して、二人で罪を犯した場合、男はその娘と結婚し、正規の花嫁料を支払う義務があった。たとえ父親が娘を結婚させるのを拒んだとしても、男は父親に花嫁料を支払わなければならなかった。その娘がこれから結婚する可能性はかなり低くなったからである。

6. 民事的、宗教的義務に関する律法 (22:18~23:19)

22:18~20 殺人に加えて死刑に相当する重罪とされたのは、呪術、すなわち魔術と、動物との性行為、偶像礼拝の三つであった。

22:21~24 ユダヤ人はその土地に住む寄留者に同情の思いを持つのは当然であった。なぜなら、自分たちも、かつては異国において寄留の民であったからである。やもめや父親のいない子どもに対しても、人道的な扱いがなされなければならなかった。この戒めが実行されるように、主は自らにその責務を課された。他のほとんどの違反は人が罰することになっていたが、この場合に限っては、神が直接、罰を下すのである。神の弱者に対する姿勢は、今も変わっていない。神は今もなお、やもめや孤児を大切にされる。それゆえに、信徒である私たちも同じようにすべきである。

22:25~27 イスラエル人に貸した金には利息をつけてはならないが、異邦人には利息を課すことができた（申命記 23:20）。質に取った衣服は日没までに返

さなければならなかった。外套は毛布の役割をしていたからである。

22:28~31 神をののしったり、民の族長を呪ったりすることは禁じられた（使徒 23:5 参照）。主は、作物であれ、息子であれ、家畜であれ、ご自身の取り分を受け取るものとされた。家畜の初子は、八日目には献げるようになっていた。獣にかみ裂かれたものの肉を食べることは禁じられた。そのような場合、血が（死後）すぐに抜かれることはまずあり得ず、また血を食べることは神の律法に違反するからである（レビ記 17 章）。また、動物を介して広がる種々の病気（狂犬病など）に感染する危険もあった。神はそうしたことから民を守っておられたのである。

23:1~12 司法の問題では、虚偽の報告を流布したり、悪人と共謀して犯罪者を弁護したり、悪人の味方をしたり、（また逆に）貧しい人々を依怙蟲屑（えこひいき）したりすることが禁じられた。敵の家畜に意地悪いことをしてはならなかった。迷子になっていたら持ち主のところに返し、重い荷の下敷きになっているのを見たら、立ち上がるのを助けなければならなかった。貧しい者にも正義が示されなければならず、罪のない正しい人が、法的策略によって罰せられてはならなかった。賄賂を受け取ることや、寄留者を虐げることも禁じられた。七年目は安息の年であり、その間、土地は休ませなければならなかった。貧しい人々は、その（安息の）年に、自然に生えたものを取り取ることが許された。また七日目は、主人にも、奴隷にも、家畜にも休息が与えられる日としなければならなかった。不信仰な現代の批評家がいくら非難しようとも、旧約聖書の神はあわれみ深く、公正な御方であることに留意しなければならない。

23:13~17 ユダヤ人は、預言者たち

のように、他の神々（偶像）を非難する場合を除き、神々の名を口にしてはならなかった。ヤハウェに対しては、三つの大祝祭が行われることになった。

(1) 〈種なしパンの祭り〉は、一年の初め、過越の祭りの直後に行われた。この祭りは、私たちの生活から、悪意や不正を一掃することの大切さを示している。

(2) 〈刈り入れの祭り〉は、またの名を五旬節、七週の祭りとも言う。五旬節の日に聖霊が降臨され、教会が形成されることを表している。

(3) 〈収穫祭〉、またの名を仮庵の祭りとも言い、イスラエルが千年王国の時代、その国土で安全に暮らすことを予告している。成人男子がこれらの祭りに出ることは義務であったが、それ以外の人々は自由意志に任せられた。新約聖書では、ヨセフはもちろんのこと、マリアと少年イエスも、過越の祭りのため、毎年エルサレムに上って行ったことが分かる（ルカ2:41）。

23:18, 19 種入りのパン（パン種は罪の象徴）は、神へのいけにえの血、すなわち〈過越〉に添えて献げてはならなかった。いけにえの脂肪は主のものとされた。それは最上の部分を意味していたからである。脂肪を朝まで残しておいてはならなかったのも、おそらく火で焼かれたものと思われる。初穂の中で最上のものは、主の家に持って行くこととされた。家畜を、その母の乳で料理をしてはならなかった。これはおそらく、偶像を礼拝する者たちが慣習としていた、豊穡の儀式を封じる意味があったものと思われる。厳格なユダヤ教徒は今日も、同じ鍋で肉料理と乳製品の料理をすることを控える。それに加え、肉をクリーム・ソースなどにつけて食べることも控える。* (22)

7. 征服に関する律法 (23:20～33)

神はここで、イスラエルの民の前に〈御使い〉（主ご自身）を遣わして彼らを約束の地に導き、異教の住民を追い出す、と約束された。もしユダヤ人が偶像礼拝を避け、主に従うなら、主は彼らのために偉大なことをしてくださる、というのである。不従順に対する警告、という点に関して、マシュー・ヘンリー（Matthew Henry）は次のように記している。

私たちを保護し、恩恵を施してください方を挑発しないように気をつけたいものである。なぜなら私たちから守りが取り去られ、主の恵みの流れが途絶えるなら、私たちは破滅してしまうからである。

* (23)

彼らの領土は、紅海からペリシテ人の海（地中海）、また、荒野（カナン南ネゲブ）からユーフラテス川に広がるものであった。

その地の住民を追い出せ、という命令に注意しよう。（イスラエルは）契約も、偶像礼拝も、交わりもしてはならないのである。神はすでに、悪に染まったカナン人を滅ぼすと約束されたが、イスラエルはそれに協力しなければならなかった。ここに重要な霊的原則が明示されている。つまり、神は私たちの敵（この世と肉と悪魔）に対して勝利を与えてくださるが、私たちが信仰の戦いを立派に戦うことを期待しておられるのである。

33節はⅡコリント6:14～18に対応している。世から分離することは、ご自身の民に対する神の変わらないみこころである。イスラエルはこの命令に従わなかったために、滅亡に至った。「悪い交際は良い習慣を損なう」（Ⅰコリント15:33）というの

は今も真実である。

8. 契約の批准 (24:1~8)

24:1, 2 モーセがシナイ山に立つと、神は出エジプト記20~23章に収められた律法と定めをモーセに語られた。モーセが山頂を降りる前に、神はアロンとその二人の息子であるナダブとアビフ、それに長老七十人を連れて戻って来るように命じられた。しかし、モーセだけが主に近づき、他の者は一定の距離をおいて離れていなければならなかった。律法の下にあっては、罪人と神との間に距離を置かなければならない。(しかし)恵みの下では、「イエスの血によって大胆に聖所に入ることができ(る)」(ヘブル10:19)のである。律法は言う、「ほかの者は近づいてはならない」と。(しかし)恵みは言う、「真心から神に近づこうではありませんか」(ヘブル10:22)と。

24:3~8 その後、モーセは民のところに下っていき、律法を告げ知らせた。彼らは即座に、律法を守ります、と同意したが、それを行う力が自分にはないことにほとんど気づいていなかった。モーセは神とイスラエルとの間に、条件付きの契約を結ぶために、まず祭壇を築き、イスラエルの十二部族のため十二の石の柱を立てた。次にモーセはいけにえの血を取って、(契約における神の側を代表して)その半分を祭壇に振りかけ、(契約における自分たちの分を履行する決意の証しとして)半分を民に振りかけた。

9. 神の栄光の啓示 (24:9~18)

24:9~11 これに続いて、モーセたちは、1,2節で示されたように、再びシナイ山に登って行った。その場所で彼らは栄光に包まれた神を仰ぎ見た。普通であるなら、神を見ただけで人は死んでしまう。ところ

が、この場合はそうではなかった。彼らは滅ぼされなかったばかりか、神を見て、食べたり飲んだりしたのである。言い換えれば、彼らは神を見たにとどまらず、交わりのいけにえまで食したのである。

聖書には、神を見ることについて、一見矛盾するような記述がある。一方では、神を見ること自体が不可能であることを示すいくつかの節(出エジプト記33:20、ヨハネ1:18、Iヨハネ4:12)があるかと思えば、他方では、創世記32:30、出エジプト記24:10、33:23のように、人間が神を見た、と記されている箇所もあるからである。それは次のように説明ができる。神の栄光に全く覆いがかけられていない状態で神を見るなら、それはまさに焼き尽くす火のようなもので、神を見た者は、たちどころに消し去られるほかはない。しかし、神は人間、御使い、あるいは栄光の雲という形で、ご自分を示される場合がある。その場合、人は神を見ても、死なないでいることができるのである(申命記5:24)。

24:12~18 ここに記されているのは、シナイ山に登った別の時のことのようなのである。この時、ヨシュアは途中までモーセに同行していた。モーセは自分がいけない間、アロンとフルを民のさばき人に任命した。モーセは六日間、シナイ山の山腹で待機していたが、山の頂上は栄光の雲で覆われていた。それからモーセは神に召されて山頂に行き、雲の中に入った。その場所に四十日四十夜、モーセは留まることになった。四十という数は、試練、または審査を表す。ここで試されているのは、モーセというよりは民である。民はその試験に失敗した。自ら罪の中に飛び込んで行ったからである。このように、主は、人の心の中にあるものを、律法を用いて明らかにされたのである。この期間にモーセが受けた数々の命令は

31:18まで記録されている。

X. 幕屋と祭司職 (25～40章)

次の七つの章は、幕屋の建設、祭司職の確立、および関連する諸法令の説明である。聖書では、合計50章が幕屋に費やされ、神の目から見た幕屋の重要性を示している。

幕屋とは天幕のような構造で、神が民の間に住まわれる場所となるものであった。幕屋の各部分は、キリストのご人格 (Person) と働き (Work)、そして神に近づく方法 (Way) についての霊的な教訓を私たちに教えてくれる。祭司制度は、罪が神と人間との間に作り出した隔たりを民に気づかせ、神の任命を受け、それにふさわしくされた代行者を通してのみ、神に近づくことができることを民に覚えさせるものである。

A. 幕屋の建設の指示 (25～27章)

1. 材料の収集 (25:1～9)

モーセは、幕屋（聖所）を建てるのに必要な材料を奉納物として、民から受け取るように命じられた。貴金属、上質の織物、皮革類、油、香料、宝石などは、イスラエルの民がエジプトを去る時、労働の報酬としてエジプト人から受け取ったものであることは間違いない。民は、奴隷として働いてこれらのものを手に入れたのである。今や、民はそれを奉納しようとしていた。神は、幕屋が細部に至るまで、神が示された型通りに造らなければならない、と主張された。もしこれが形ある建物に当てはまるなら、新約聖書で教えられている型にしたがってキリストの集会を建て上げることは、どれほど重要なことだろうか！

2. 契約の箱 (25:10～16)

契約の箱は木製の収納箱で、内側も外側

も純金で覆われていた。箱の両側には金の環があり、そこに棒を通して運べるようにされていた。箱にはさとしの板——すなわち、律法の二枚の石板（16節）が入れられたが、後になってアロンの杖とマナの壺（つぼ）もそこに入れられることになった（ヘブル9:4）。

3. 宥めの蓋 (25:17～22)

契約の箱の蓋は宥めの蓋（※英訳「あわれみの座」）と名づけられた。それは純金の台座で、二人の御使いの像を支えていた。これらのケルビム^{*(24)}は互いに向き合い、両翼を上の方に広げ、その先端が互いに触れ合っていた。神は、二つのケルビムの間と、宥めの蓋の上の栄光の雲の中にご自身を現された。ケルビムは、少なくとも聖書の13の書物に登場する。ケルビムは、何よりもまず、ヤハウェの聖性と義に関連しており、神の王座と関連して言及されることが多い。ケルビムは、エゼキエル1章と10章で詳細に描かれている。

4. 臨在のパンの机 (25:23～30)

臨在のパンの机は、純金で覆われた木製の台であった。その上部の周りには金の飾り縁が施され、またその周辺に一手幅の枠、つまり、別の金の飾り縁が作られた。契約の箱と同様に、机も環に取り付けられた棒に載せて運ばれた。環は四本の脚の下の四隅に取り付けられた。机の上にはイスラエル十二部族のための十二のパンが置かれていた（30節）。その他、さまざまな皿、ひしゃく、瓶、水差しがあった。

5. 純金の燭台とその付属品 (25:31～40)

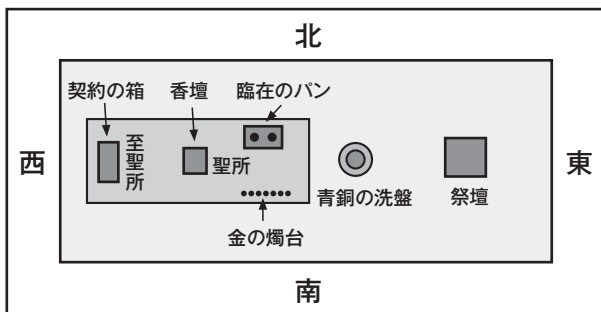
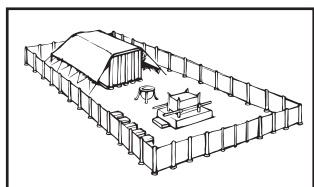
25:31～39 燭台は純金で出来ていた。燭台の上部には七つの枝、すなわち腕木があり、それぞれに、油を燃やすための芯の

ついた回転式の小さなともしびがついていた。また燭台と関連して、芯切りばさみや、切り落とした芯を入れるための芯取り皿があった（38,39節）。

25:40 これらの物を作る上での唯一の要件は、神が山で示された型どおりに作ることであった。人間のとっさの思いつきが入る余地は全くなかった。霊的な事柄はすべてそうである。私たちは神の指示に従わなければならない、主が知恵をもって示してくださった型から逸脱してはならないのである。

幕屋の調度品のすべては、栄光のキリストを表していた。たとえば、契約の箱は、キリストの神性（黄金）と人間性（木材）

を象徴している。宥めの蓋は、キリストが私たちの宥めのささげ物であることを示している（ローマ3:25）。臨在のパンの机は、いのちのパンであるキリストを表している。燭台は、世の光であるキリストを描いている。青銅の祭壇（27章）は、神のために完全に焼き尽くされた、全焼のささげ物としてのキリストの型である。香壇、すなわち金の祭壇（30章）は、神に向かって立ち上るキリストの芳香を表している。洗盤（30章）は、みことばにより、水の洗いをもち、ご自分の民を洗ってくださるキリストを象徴している（テトス3:5、ヨハネ13:10、エペソ5:26）。



幕屋の平面図

幕屋は、神が民の中に住まわれるための場所であった。幕屋ということばは、刺繍が施された幕で覆われた聖所と至聖所を含む天幕を指すこともあるが、天幕が立ち、幕で仕切られた中庭を含む施設全体を指している場合もある。

6. 幕屋本体（26章）

26:1～6 26章は幕屋そのものについて述べている。その長さは約13.7メートル、幅は4.6メートル、そして高さも4.6メートルであった（※1キュビトを約46センチと仮定）。両側面と背面は直立した板を

台座にはめ込み、接合して作られた。残りの側面（入り口）には柱が立てられた。

最初の覆いは、ここで幕屋と呼ばれているもので、撚り糸で織った亜麻布に青、紫、緋色の撚り糸でケルビムが意匠を凝らして織り出された。それは、五枚の幕が二組、互いにつなが合わされていた。この二組の幕は金の留め金で結ばれ、五十個の青いひもの輪に取り付けられたようである。覆い全体の大きさは、12.6メートル×18メートルであった。これが天井部分を形成し、地面から46センチの範囲までの側面を覆っていた。

26:7～13 次の覆いは天幕と呼ばれ、やぎの毛を素材としていた。一組の幕五枚と一組の幕六枚を青銅の留め金でつなぎ、それを五十個の輪に結んだ。天幕の大きさは13.5メートル×20メートルで、幕屋のすべての面を覆っていた。ただし前面は例外で、一部が折り返されていた。

26:14 第三の覆いは雄羊の皮で作られ、第四の覆いはじゅごんの皮（あざらし、または、いるかの皮、とも訳される）で作られた。^{*(25)} 寸法は記されていない。これらの覆いは、おそらくやぎの毛の覆いと同じ大きさであったと思われる。

26:15～30 三方の側面を形成するまっすぐな立板のことが15～25節に記述されている。それぞれの板は、4.5メートル×68センチであった。板はアカシヤ材に金を貼ったもので、底に二つのほぞがあり、台座にはめ込むことができた。板は左右に二十枚ずつ、裏側には六枚の板が立てられた。背面の角には、二枚の特別な板が作られた。板は、金を被（かぶ）せた横木が、板の上の金の環を通過して固定されていた。中央横木は、継ぎ目のない一本のものであった。長さの違う短い横木をつなぎ合わせて、上部で一本の横木とし、別の二本の横

木をつなぎ合わせて、下部で一本の横木としたようである。これらの板は、格子状の枠であるという説もある。

26:31～37 幕屋の本体は二つの部屋に分けられていた。一つは聖所であり、9メートル×4.5メートルの大きさであった。もう一つは、4.5メートル×4.5メートルの至聖所である。この二つの部屋は、撚り糸で織った亜麻布にケルビムが織り込まれた刺繍の垂れ幕で仕切られていた。垂れ幕は、四本の柱に掛けられていた。契約の箱とあわれみの座（宥めの蓋）は至聖所に置かれ、臨在のパンの机と純金の燭台は聖所に置かれなければならなかった。聖所には、香を焚くための祭壇（30章）を除いて、他の調度品は見当たらない。香壇は垂れ幕の前に置かれた。燭台は聖所の南側に、机は北側に置かれた。幕屋の入り口は、垂れ幕に似た、撚り糸で織った幕がアカシヤ材の柱五本に掛けられ、それぞれの柱は青銅の台座の上に立っていて、金で覆われていた。

7. 全焼のささげ物の青銅の祭壇（27:1～8）

青銅の祭壇とも呼ばれる全焼のささげ物の祭壇は、アカシヤ材で作られ、その表面は青銅で覆われており、2.2メートル四方、高さ1.3メートルであった。四隅には角が突き出ていた。運搬の際は、下部の両脇に取り付けた棒に載せて運ぶ。

8. 幕屋の外庭、柱、掛け幕（27:9～19）

幕屋の周囲には、庭と呼ばれる広い空間があった。その周囲は、青銅の柱の間に、撚り糸で織った亜麻布の掛け幕が張られていた。この囲いは長さ45メートル、幅22.5メートル、高さ2.3メートルである。東側の入り口の幅は9メートルであった。

その幕は刺繍を施した亜麻布で作られており、幕屋の幕と似たものであった。特に指定がない限り、幕屋の奉仕に用いる用具はすべて青銅製であった。

9. 燭台の油 (27:20, 21)

燭台に使う油は、オリーブから搾った純粋な油でなければならなかった。これは聖霊の象徴である。この燭台は、毎晩、「夕方から朝まで」絶えず灯されなければならなかった。「会見の天幕」という表現は、この場合、神が住まわれる場所を意味するが、33:7では、モーセが建てた仮の天幕のことを指している。

B. 祭司職 (28、29章)

1. 祭司の装束 (28章)

28:1, 2 28章は、大祭司とその子らの装束について述べている。これらの装束、その色、宝石等はみな、私たち的大祭司であるキリストのさまざまな栄光を物語っている。アロンの家系とは祭司の家系であった。

28:3~29 大祭司には二組の装束があった。(1) 豊かな色彩と巧みな刺繍が施された栄光と美の装束、(2) 無地の白い亜麻布の装束、の二つである。ここで説明されているのは前者である (2~4節)。エポデ (6~7節) はエプロンに似たもので、前と後ろの二つの部分が肩でつながり、両脇は開いているのが特徴である。あや織りの帯 (8節) は、エポデの縁のすぐ上で、腰に巻く帯である。細工 (13節) とは、金線細工によるもので、宝石を固定するために使用された。両肩にはそれぞれ、イスラエルの六部族の名が刻まれた縞めのうが取り付けられた (9~12節)。エポデの上には胸当てがあり、胸当てにはめ込まれた12の宝石には、それぞれ部族の名前が刻

まれていた。胸当ては金の鎖でエポデに固定された (13~28節)。このようにして、大祭司はイスラエルの諸部族を肩 (力の宿る場所。12節) に載せ、胸 (愛情の宿る場所。29節) に担って神の前に出たのである。

28:30 胸当てが、さばきの胸当てと呼ばれたのは (15, 29, 30節)、ウリムとトンミムがその中にあって、主の御心を判断するのに用いられたからであろう (民数記 27:21)。「ウリムとトンミム」という表現は、〈光〉と〈完全〉を意味する。これらがどのようなものであったか正確に知ることはできない。しかし、すでに説明した通り、胸当てと関係があり、主からの導きを受けるために用いられたことは明らかである (I サムエル 28:6)。

28:31~35 エポデの下に着る服は、膝丈の青い衣であった。縁には小さな鈴とぎくろがつけられたが、それは証しと実りを意味している。アロンが聖所を出入りする時は、その鈴の音が聞こえるようにしなければならなかった。

28:36~38 大祭司は「主の聖なるもの」と刻まれた純金の札をかぶり物 (ターバン) につけ、常にそれが額の上にくるようにしなければならなかった。これは、すべての聖なる献上物に関わる咎を負い、私たちの最も神聖な行為でさえも罪に染まっていることを忘れないためであった。「私は罪が全く入らないような祈りはできない。・・・私の悔い改めには悔い改めが必要であり、私の涙は私の贖い主の血で洗われる必要がある」*⁽²⁶⁾ と、かつてベヴァリッジ大司教 (Archbishop Beveridge) が言った通りである。

28:39~43 市松模様の長服は、大祭司が青い衣の内側に着る亜麻布の上着で、刺繍した飾り帯がついていた。アロンの子

たちは、無地の白い長服、飾り帯、そして栄光と美を表すターバンを身につけた（40節）。下着は亜麻布のももひきで、頭から足首まで覆われているが、足を覆うものは何もなかった。その理由は、彼らが主に仕える時に立つ場所が聖なところだからである（3:5）。「聖別する」と訳されている語（41節）は、直訳すれば、（ささげ物で）手を満たすという意味である。

2. 祭司の聖別（29章）

29:1～9 神はアロンとその子らを最初の祭司に任命された。それ以来、祭司になるための唯一の条件は、祭司の部族とその家系に生まれることであった。教会で祭司となるには、新生だけが条件である（黙示録1:5,6）。人間が祭司を任命するというのは、人間の単なる思い上がりである。

ここに書かれている儀式は、レビ記8章で行われているものである。祭司の聖別は、ツァラアトに冒された者のきよめ（レビ記14章）といくらか似ている。どちらも、犠牲の血がその人に塗られることで、罪ある人間が神に近づくためには贖罪が必要であることを教えているのである。

1～3節にささげ物の材料が示されており、その用途は後で詳しく説明されている。祭司の聖別は、まずアロンとその子らを会見の天幕の入り口に近づかせ、水で洗うことから始まった（4節）。次に、アロンに前章で説明された装束を着せた（5,6節）。そしてアロンに油を注いだ（7節）。その後で、アロンの子らに祭司の長服が着せられた（8,9節）。

29:10～21 続いて三つのいけにえが献げられた。罪のきよめのささげ物としての雄牛（10～14節）、全焼のささげ物のための雄羊（15～18節）、そして聖別のためのもう一匹の雄羊（19～21節）である。

いけにえの頭に手を置くことは、自分といけにえとの同一性を示し、その動物が献げる者の代わりに死ぬことを意味する（10節）。血は、言うまでもなく、罪の赦しのために流されたキリストの血の象徴である。脂肪は動物の最上の部分と考えられていたので、主に献げられた（13節）。最初の雄羊は祭壇の上で焼き尽くされた（15～18節）。これはキリストの神に対する完全な献身と、キリストが完全に神に献げられたことを意味している。第二の雄羊の血（任職の雄羊）は、アロンの右の耳たぶと、その子らの右の耳たぶ、また右手の親指と右足の親指に塗り（20節）、その装束に振りかけなければならなかった（21節）。これは、人間の生活のあらゆる領域で罪からきよめられる必要があることを示している。耳は神のみことばに従うことを、手は行動や奉仕を、そして足は歩み、つまり態度や振舞いを指している。祭司の美しい装束に血を振りかけるのは奇異に思えるかもしれない。贖いの血は人間の目に魅力的に思えないかもしれない。しかし、神の目からは絶対に必要なものなのである。

29:22～34 次にモーセは、祭司たちの手のひらにいけにえに必要な材料を載せて、いけにえを献げる権限を与えるように命じられた（22～28節）。最初のいけにえ（22～25節）は、主の前で揺り動かされ、全焼のささげ物の祭壇の上で焼かれることになっていた。雄羊の胸肉は主の前で、おそらく水平に揺さぶられ、ものの肉（※英訳は「肩肉」）は、主の前で上下に動かされたことは間違いない。この二つの部位は、その後、祭司たちの食べ物として与えられた（26～28節）。揺り動かされた胸は、私たちに対する神の愛を示し、持ち上げられた肩（※英訳）は私たちに差し伸べられた神の力を象徴している。アロンの装束は、

彼の跡を継ぐ子らのものとなった。祭司の職は父から子へと受け継がれたからである(29,30節)。祭司の食事と、それがどのように準備されたかは、31～34節に記されている。

29:35～46 任職式は七日間続き、それに伴って毎日いけにえが献げられ、祭壇は血できよめられ、油が注がれた(35～37節)。それ以後、祭司は全焼のささげ物の祭壇で、一歳の雄の子羊二匹を献げることが義務付けられた。毎日、一匹は朝に、もう一匹は夕暮れに献げられた(38～42節)。そして、神は、ご自分の天幕で民に会い、彼らの間に住み、彼らの神となることを約束された(43～46節)。

C. 幕屋に関する追加の指示 (30,31章)

1. 香をたくための祭壇 (30:1～10)

香をたくための祭壇は木製の祭壇に金を被(かぶ)せたもので、聖所に置かれた。大きさは45センチ四方、高さは90センチほどである。金の祭壇と呼ばれることもある。この祭壇では、朝と夕暮れに香が焚かれ、キリストが私たちのために執り成しをしてくださることを表している。香壇は聖所に置かれたが、至聖所と密接な関係があったため、ヘブル人への手紙の著者は、第二の垂れ幕の後ろにあったと述べている(ヘブル9:3,4。ただしこの語はNIVのように「香炉」と訳すことも可能である)。^{*(27)} 香壇は、左右の飾り縁の下にある金の環に棒を通し、担いで運んだ。

2. 償い金 (30:11～16)

二十歳またはそれ以上のイスラエル人男子は皆、半シェケルを支払い、自分自身を贖わなければならない、と神は命じられた。この支払いは、富む人も貧しい人も同額で、

人口調査があるたびに納め、会見の天幕の用に充てられた。それはわざわざいから身を守るための保証であった(12節)。当初は、幕屋の板を支える銀の台座を作るために用いられた。銀は贖いを表し、贖いこそは私たちの信仰の土台である。贖いはすべての人に必要であり、だれもが同じ条件で自分のものとするができるものである。

3. 洗盤 (30:17～21)

青銅の洗盤の位置は、会見の天幕の入り口と祭壇の中間である。これは祭司たちが手足を洗うための水盤であった。材料は、女たちが奉獻した青銅の鏡である(38:8)。その大きさは明らかにされていない。もし祭司が手と足を洗わずに聖なるものを扱った場合は、死刑に処せられた。これは、私たちがどのような奉仕をするにしても、その前に霊的・道徳的にも清くなければならないことを教える厳粛な戒めである(ヘブル10:22参照)。

4. 注ぎの油 (30:22～33)

聖なる注ぎの油は、会見の天幕、調度品、祭司自身にかけるために用いられた。それ以外の用途に使ってはならなかった。聖書において油といえば、聖霊を示す型である場合が少なくない。祭司たちに油が注がれたということは、神への奉仕には常に聖霊の附与(ふよ)が必要であることを示している。

5. 香料 (30:34～38)

香料とは、種々の香味料(スパイス)を材料に作られた香で、金の香壇で朝に夕に焚かれた。油の場合と同様に、模造品を作ったり、他の場所ですったりしてはならなかった。

6. 熟練した職人たち (31:1～11)

神は、熟練した職人であるベツアルエル^{*(28)}とオホリアブを指名された。幕屋を建造し、すべての調度品を制作するためである。二人は、この聖なる任務にあたる他の職人たちを監督し、指導した (6節)。この段落で「わたし」という語が繰り返されているのは、神のご命令には、それを可能にする力が伴うことを示している。主は働き人を任命し、彼らに能力と才能を与え、神の栄光のための仕事を与えられる (2,3,6節)。すべての仕事は主のものであるが、主は人を用いてそれを完成させ、主の仕事を引き受けた者に報いをお与えになるのである。

7. 安息日のしるし (31:12～18)

31:12～17 安息日を守ることは、すなわち神とイスラエルとの間のしるしとされた。七日目には一切の仕事をしてはならず、幕屋を建てることですら、してはならなかった。これに従わない場合は、死刑になってもやむを得なかった。

31:18 この時点で、主はモーセに、神の律法、すなわち、十戒 (申命記10:4参照) が刻字された二枚の石の板を授けられた。

幕屋：神によって描かれたキリスト

基本的に、幕屋とは、肉体をとって「幕屋を張り」(ヨハネ1:14の直訳)、私たちの間に住まわれた〈ことば〉であるキリストを指している。^{*(29)} それに加え、幕屋は、神が取られる救いの道と、その後の信徒の生活と奉仕を描くものとしても用いられる。

しかし、確かに救いの道を描いてはいる

が、幕屋はすでに神との契約関係を結んだ民に与えられたものである。(したがって)幕屋は、救いの道を示すというよりも、むしろ、神の民が外的、儀式的な汚れからきよめられ、それによって神に近づき礼拝する方法を示していると見た方がよい。

幕屋とそれに関連するさまざまな務めは、天にあるものの写しである (ヘブル8:5,9:23,24)。これは、もし天に行けば、同じような構造物や建物があるはずだという意味ではなく、幕屋が天の霊の実体を描いているという意味である。以下の類似点に注目してみよう。

地上の聖所 (ヘブル9:1～5)	天の聖所 (ヘブル8:2,9:11～15)
至聖所 (ヘブル9:3)	まことの聖所、神の御前 (ヘブル10:19)
垂れ幕 (ヘブル9:3)	垂れ幕、キリストの肉体 (ヘブル10:20)
動物の血 (ヘブル9:13)	キリストの御血 (ヘブル9:14)
祭壇 (ヘブル7:13, 出エジプト記27:1～8)	私たちの祭壇である キリスト (ヘブル13:10)
大祭司 (ヘブル5:1～4)	私たちの偉大な大祭司 キリスト (ヘブル4:14, 15, 5:5～10, 7:20～28, 8:1, 10:12)
いけにえのささげ物 (ヘブル10:1～4, 11)	私たちのためのいけにえであるキリスト (ヘブル9:23～28, 10:12)
契約の箱 (ヘブル9:4)	恵みの御座 (ヘブル4:16)
香壇 (ヘブル9:4)	天の香壇 (黙示録8:3)

外庭を囲む亜麻布の幕 (45メートル×22.5メートル)

幕の素材は白の、撚り糸で織った亜麻布で、神の完全な義を象徴している。高さは2.3メートルで、人が覗き込むことができ

紫	マタイの福音書	王（マタイ2:2）
緋色	マルコの福音書	罪（イザヤ1:18で、緋色に例えられる）の苦しみをその身に受ける、低きしもべ
白	ルカの福音書	完全無欠な人（ルカ3:22）
青	ヨハネの福音書	天から来られた方（ヨハネ3:13）

ないようにするための障壁の役割をしていた。

これは、人間が神の義の基準に到達できず（ローマ3:23）、罪人は神に関するものを見たり理解したりすることができない（Ⅰコリント2:14）ことを意味している。幕は、青銅の台座に据え付けられた56本の柱と、銀の鉤とひもの輪によって、垂直に固定されていた。

入り口

庭に入るには、門、つまり入り口を通らなければならない。入り口は一つしかない。それはキリストが神への唯一の道であることを表している（ヨハネ14:6、使徒4:12）。入り口は9メートルの幅があり、キリストが全人類を受け入れるのに十分であることを示している（ヨハネ6:37、ヘブル7:25）。

入り口は、白い亜麻布の幕で出来ており、青と紫と緋色の刺繍が施されていた。これは四つの福音書が示す、以下のようなキリストの特徴である。

全焼のささげ物のための青銅の祭壇 (2.3メートル×1.4メートル)

内庭に入るとまず目に入るのが祭壇である。ここでいけにえが献げられる。祭壇はカルバリのキリストの十字架を表している（ヘブル9:14, 22）。もし罪人が神に近づこうとするなら、ここから始めなければならない。祭壇は青銅とアカシヤ材で作られていた。アカシヤとは荒野に自生する木で、

腐食することはない。青銅はさばきを表し、アカシヤの木は、罪のない、また朽ちることのないキリストの人間性を表している。罪を知らない方が、私たちの罪のために神のさばきを受けてくださったのである（Ⅱコリント5:21）。

祭壇は中が空洞で、中間の位置には網細工の格子が取り付けられていた。その上に動物が置かれたのである。四隅には青銅で表面を覆われた四本の角があった（出エジプト記27:2）。おそらく、この角にいけにえが縛られたのであろう（詩篇118:27）。（しかし）私たちの救い主を十字架に縛りつけたのは、紐でも釘でもなく、私たちに對する主の永遠の愛だったのである。

全焼のささげ物を連れて来ると、イスラエル人は手を犠牲の頭の上に置いて自分とその犠牲が一体であることを示し、その動物が自分の代わりに死ぬことを表現した。そしてその動物は身代わりのいけにえとなる。動物は屠（ほふ）られ、血は注ぎ出されたが、それは、やがて来られるキリストが流される血を予め表していた。それなくしては、罪の赦しはあり得ないのである（ヘブル9:22）。

皮以外のすべては祭壇の上で焼かれた。よくあることだが、ここでも予型は綻（ほころ）びを来たしている。なぜなら、キリストはカルバリにおいて、御父のみことろにご自身のすべてを献げたからである。

これは芳しい香りのささげ物で、神がキリストの御わざに完全に満足されたことを

思わずにはいられない。それによって、いけにえを献げた者の贖いがなされたのである。

洗盤

洗盤は、女たちの青銅製の鏡を材料として作られた（出エジプト記38:8）。ブラウン(J. H. Brown)は次のように述べる。「女たちは自分の満足のために使ったもの、つまり程度の差こそあれ、肉的な性質を満足させるのに使ったものを献げた。」礼拝の前には自己吟味がなければならない（1コリント11:28,31）。

洗盤は祭司たちに必要なものであった。これは彼らが務めを果たすには、清くなければならないことを示している（イザヤ52:11）。祭司はその職務を果たすために、一度だけ沐浴をした（レビ記8:6）。その後は、定期的に手と足を洗うことが求められた。沐浴は一回であるが、きよめは繰り返されたのである。今日、すべての信者は祭司である（1ペテロ2:5,9）。新生の洗いが必要なのはただ一度だけである（ヨハネ

3:5、13:10、テトス3:5）。しかし、（奉仕のための）手と（敬虔な歩みのための）足は常に洗う必要がある（ヨハネ13:10）。そのためには、みことばの水が必要なのである（詩篇119:9～11、ヨハネ15:3、エペソ5:26）。

洗盤には、手を洗うための水盤が上部に、足を洗うための水盤が下部にあったと思われるが、聖書には洗盤の正確な形状や寸法は記されていない。

幕屋本体(4.5メートル×13.5メートル)

建造物自体は、外見は地味なものであったが、内部は美しかった。内部はすべて金で覆われているか、または刺繍が施されていた。そこには、私たちの間に「幕屋を張られた」キリストが暗示されている（ヨハネ1:14）。キリストには、私たちが慕うような見栄えは何もなかった（イザヤ53:2）。しかし、その内側を見れば、すべてが美しい（※雅歌5:16英訳）のである。

その上に四重の覆いが掛けられたが、内側から外側への順序は次の通りである。

刺繍を施した上質の亜麻布 やぎの毛皮	キリストの義と美しさ 私たちのために贖罪のやぎとなられたキリストの贖い（レビ記16章参照）
赤くなめした雄羊の皮	キリストの聖別と任職（任職の雄羊、出エジプト記29:19～22参照）
じゅごんの皮	いるかの皮、または海牛の皮とも訳されているもので、幕屋を厳しい気象条件から守った。これは、キリストが外部から来る悪よりご自分の民を守ってくださることを暗示している。

板材

これは無垢の板ではなく、格子状の木枠であった、という説もある。いずれにせよ、それは御霊によって神の住まいを形成する信徒たちを描くものである（エペソ2:22）。その板はアカシヤ材で作られ、金が被^か

せられた。それは私たちの人間としての性質と、キリストにある私たちの立場を表している。神はキリストにある私たちを見ておられるのである。板は高さ4.5メートルで、表面が金で覆われた五本の横木で接合されていた（出エジプト記26:26～

28)。中央の横木は、板の列を端から端まで通してあり、聖霊を示す型なのであろう。それぞれの板は、二つの銀の台座にほぞを付けられて固定されていた。銀は贖いを表す（出エジプト記30:15参照。シェケル銀貨は贖いの支払いとして用いられた）。信仰者の土台となるのは、キリストの贖いの御わざなのである（Ⅰペテロ1:18,19）。

聖所

聖所に通じる幕は、キリストが私たちと神との交わりへの道であることを暗示している（エペソ2:18、3:12）。聖所には椅子がなかった。祭司の務めは終わることがないからである。これと対照的に、キリストの御わざは、一回にして永遠に有効である（ヘブル10:12）。

臨在のパンの机（長さ91センチ、幅46センチ、高さ69センチ。北側に配置）

机はアカシヤ材で作られ、金で覆われていたが、それは私たちの主の人間性と神性を表している。机の上に置かれた十二枚の種なしパンは、キリストとともに神の前に出る神の民を象徴している。パンは金の王冠（※英訳。日本語訳は「飾り縁」）で囲まれていた。それは栄化されたキリストが私たちを保護しておられることを表すかのようである。

燭台（重さ34キロ。寸法は不明。南側に配置）

燭台は純金製で、槌で打って作られたものである。その台座から支柱が上に伸び、そこからさらに七枝が立ち上がっていた。そして、その枝の先にはともしびがあった。これが幕屋の唯一の光源であった。これは、キリストに栄光を帰す働きをしている聖霊（ヨハネ16:14）、あるいは天の光としての

キリスト（黙示録21:23）また、すべての霊的な光の源としてのキリスト（ヨハネ8:12）を表しているのかもしれない。純金は神性を意味する。

ともしびは、夕方から朝まで灯された（出エジプト記27:21、Ⅰサムエル記3:3）。

香をたくための祭壇（46センチ角、高さ91センチ。中央の垂れ幕の前に配置）

これはアカシヤ材と金でできており、キリストの人間性と神性を象徴している。それは、栄光を受けたキリストが、ご自分の民のために執り成すことを表している（ヘブル7:24～26、黙示録8:3,4）。香は、キリストのご人格とその働きの香りを示している。火は、全焼のささげ物の祭壇から取り出さなければならなかった。全焼のささげ物は、汚れなきご自身を神に献げたキリストの芳香である。

香料は、ナタフ香、シェヘレテ香、ヘルベナ香と乳香で作られ、それらのすべては一つの香り、すなわちキリストの香りを作るために結合された（エペソ5:2）。

至聖所

至聖所に通じる幕は、キリストの体を指し示すもので（ヘブル10:19～22）、キリストがカルバリで死なれた時、幕は二つに裂けた（ルカ23:45）。聖所には祭司しか入れず、至聖所にいたっては、大祭司が年に一度しか入れなかったが、今や信仰者はいつでも、どんな時でも神の前に出ることができる（ヘブル10:19～22）。

契約の箱（長さ114センチ、幅・高さ69センチ）

これは、表面が金で覆われたアカシヤ材の箱で、神の玉座を表している。その中身についての考え方は二通りある。一つは人

間中心でどちらかというと否定的なもの、もう一つはキリスト中心で非常に肯定的なものである。

第一の見方として、そこには、反逆の三つの記念物（マナ [出エジプト記16:2,3]、律法の石板 [出エジプト記32:19]、アロンの杖 [民数記17:1~13]）が入っていたので、私たちの反逆による呪いを背負うキリストを描いているのかもしれない。

あるいは、（第二の見方として）マナは神のパンとしてのキリストを、律法は主が明示し、輝かせた神の聖さを、そしてアロンの杖は、神ご自身が選ばれた祭司である、復活されたキリストを表しているのかもしれない。

宥めの蓋（あわれみの座）

あわれみの座（宥めの蓋）は、契約の箱の蓋のことである。その上には、金を打ち延ばして作った二つのケルビムがあった。ケルビムとは神の玉座を守り、神の義を擁護する者たちのことである。ケルビムは契約の箱の前に位置し、宥めの蓋に振りかけられた血を見おろすように配置されていた。キリストの血によって神の義は充足され、私たちの咎のすべてが、視界から隠されるのである。こうして、さばきの座はあわれみの座となる。キリストは私たちにとってのあわれみの座（Ⅰヨハネ2:2「宥めのささげ物」と同じ語）である。神はキリストにおいて、罪人と出会ってくださるのである。

栄光の雲

幕屋が完成した時、主は、栄光の雲に包まれたあわれみの座（宥めの蓋）の上にご自身を現された。栄光の雲は〈シェキナ〉とも呼ばれ、「住まう」というヘブル語に由来する。これは神の栄光を目に見える形

で表したものである。

D. 偶像礼拝の発生（32、33章）

1. 金の子牛（32:1~10）

モーセが山から一向に下りて来ないので、しびれを切らした民は、偶像を造ってほしい、とアロンに頼んだ。アロンは、おとなしくそれに応じ、民の金の耳輪を鑄造して子牛を造ったが、これは明白に禁じられていた行為であった（出エジプト記20:4）。それから民は、乱痴気騒ぎを始め、偶像を拝み、飲み食いし、ふしだらな遊びにふけた。自分たちは主を礼拝しているのであり（5節）、その手段が子牛であるに過ぎない、と言ってはばからなかった。神はかつて、エジプトを出て行く民に黄金を与えて祝福された（12:35,36）が、その祝福が呪いになってしまった。民の心が罪深かったからである。神は、山のふもとで起きていることをモーセに告げられた（7,8節）。そして、この民を滅ぼすことも厭わない、と仰せられた（9,10節）。

2. モーセの執り成しと怒り（32:11~35）

32:11~13 神への応答の仕方ゆえに、モーセは聖書の中で偉大な執り成し手の一人として際立っている。モーセが用いた説得力のある論証に注目してみよう。民は主の民であった（11,12節）。神は民をあわれみ、エジプトから救い出された（11節）。もし、（ヘブル人を滅ぼすという）エジプト人ができなかったことを神が民にされたなら、エジプト人がほくそ笑みだけである（12節）。神は、父祖たちと結ばれた契約に忠実でなければならない（13節）。

32:14 すると主は、その民に下すと言ったわざわいを思い直された（14節）。

わざわいという語は、この文脈では罰を意味する。モーセの執り成しに応じて、主は民に与えるべき罰を考え直してくださったのである。

32:15~20 モーセは、山から下りた。彼の手には二枚のさとしの板があった。その途中ヨシュアに会い、民のところに来てみると、彼らは偶像を拝み、肉欲にまかせて饗宴にふけていた。正義の怒りにかられたモーセは、民がすでに行ったことの証人として、律法が刻まれた石板を砕いた。次にモーセは、金の子牛を粉々に砕いて水の上にまき散らし、人々に飲ませた（20節）。これは、私たちが犯す罪が、やがて苦い水となって返って来ることを暗示していると思われる。

32:21~24 モーセがアロンに、民は何をしたのかと尋ねると、アロンは事の経過を説明した。実に不思議なことに、金の子牛が火の中から出て来た、というのである（24節）。主がアロンの命を取り去らなかったのは、ひとえにモーセの執り成しのゆえであった（申命記9:19,20）。

32:25~29 民の一部はまだみだらな行為に耽（ふけ）り、歯止めがきかない有様だった。忠誠を尽くして従う者はだれか、とモーセが呼びかけると、レビ族がこれに応え、もはや手がつけれなくなった者たちを剣で倒した。身内の者ですら容赦しなかったのである（25~29節）。律法を破った結果、三千人に死がもたらされた。（しかし）五旬節の日には、恵みの福音によって、三千人に救いがもたらされた。レビ人の英雄的な忠誠心が（いかになく発揮されたことが）理由で、レビ族が祭司の部族に選ばれたと考えてよいだろう（29節参照）。

32:30~35 モーセは、主にお会いするために山に戻って行った。民の罪を贖うことができるかもしれないと思ったからで

ある（30~32節）。主のお答えは二重であった。第一に、子牛を作った民を罰すること（疫病が送り込まれ、それは現実となった。35節）。第二に、モーセが民を約束の地に導く時に、モーセを先導する御使いを遣わす、ということであった。

32節ではモーセの人格が輝きを放っている。モーセは民のために死ぬことも厭（いと）わなかったのである。「**あなたがお書きになった書物から私の名を消し去ってください**」というのは、「私の人生を終わらせてください」という比喩的表現である。^{*}
⁽³⁰⁾ 神はモーセの命を救われたが、愛する御子の命は救われなかった。正しいのに正しくない者のために死なれた私たちの主に、モーセは何と似ていることだろう。

3. 民の悔い改め（33:1~6）

主は罪深いイスラエルの民がカナンに向かう旅に同行することを拒まれた。途中で彼らを滅ぼさずにはすまない事態を避けるためである。その代わりに、御使いを代理として遣わすことになった。この悪い知らせを聞いた民は嘆き悲しみ、金の子牛を作るのに使ったような装飾品を剥ぎ取り、ホレブの山以後、決して身につけることはなかった。

4. モーセの会見の天幕（33:7~11）

7節の天幕とは、まだ建てられていない幕屋のことではなく、モーセが張った仮の天幕で、ここでは「会見の天幕」と呼ばれている。主に伺いを立てたい者は、宿営の外にあるその天幕に行くことができた。宿営地は民の罪によって汚れていたのも、天幕はその外に置かれていた。モーセがその天幕に入ると、雲の柱が降りて来て、神がおられることを示した。11節は、モーセが神の本来のお姿を見た、という意味では

ありえない。単に、神と直接、顔と顔とを合わせるように、何の妨げもなく交わりをもったという意味である。注目すべきは、当時まだ若者であったヨシュアが天幕から離れないでいたことである。おそらくこれが、ヨシュアの後の霊的勝利の秘訣であったのだろう。

5. モーセの祈り (33:12~23)

33:12~17 モーセは、神の民をカナンに導くために神がともにいてくださるように、と願った。すると主は、恵み深くも、主のご臨在が彼らとともに行く、と約束された。それがモーセの願う最低条件であったのである。ノアと同じようにモーセは主の目にかなっていたので、その願いが聞き入れられた。まさに「安全とは、危険がないこと (absence) ではなく、神がともにいてくださること (presence)」なのである。

33:18~23 次にモーセは、神の栄光を一目見たい、と願った。神はそれに応え、恵みとあわれみの神としてご自身を現す、と約束された (出エジプト記34:6,7)。モーセといえども神の御顔を見てなお生きていることはできない。しかし、神の栄光が通り過ぎるときには、岩の上に立ち、神の御姿を背後から見る事が許されたのである。もちろんこれは比喩的な表現である。なぜなら神が肉体をもっておられるわけではないからである (ヨハネ4:24)。ハイウェル・ジョーンズ (Hywel Jones) が言うように、「モーセが見ようとしていたのは残照である。しかし、残照は、最高の輝きを知る、確実な手がかり」なのである。^{*}

(31)

だれも神の顔を見て、なお生きていることはできない (20節)。これは、覆いがかけられない限り、だれも神の栄光を (直接) 見ることはできない、という意味であ

る。神は「近づくこともできない光の中に住まれ、人間がだれ一人見たことがなく、見ることもできない方」(1テモテ6:16)なのである。その意味では、いまだかつて神を見た者はいない (1ヨハネ4:12)。では、人間が神を見ながらも、死ななかった、という聖書のいくつもの記述をどのように説明したらいいのだろうか。たとえば、ハガル (創世記16:13)、ヤコブ (創世記32:30)、モーセ、アロン、ナダブ、アビフ、それにイスラエルの長老七十人 (出エジプト記24:9~11)、ギデオン (士師記6:22,23)、マノアとその妻 (士師記13:22)、イザヤ (イザヤ6:1)、エゼキエル (エゼキエル1:26、10:20比較)、ヨハネ (黙示録1:17) 等である。

これらの人々が見たのは、神を示す御方としての主イエス・キリストであった、というのがその答えである。キリストは、時には主の使いとして現れ (この教理についての考察は士師記6章を参照)、時には人として、また一度は御声として現れた (出エジプト記24:9~11、申命記4:12参照)。父のふところにおられるひとり子の神が、神を完全に説き明かされた (ヨハネ1:18)。キリストは神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現れである (ヘブル1:3)。だからこそ、「わたしを見た人は、父を見たのです」と言うことができたのである (ヨハネ14:9)。

E. 契約の更新 (34:1~35:3)

34:1~9 再びモーセだけがシナイ山に呼び出された。今度はモーセ自身が用意した二枚の石の板を携えて、である。主はそこで、ご自身をあわれみ深く、情け深い神であり、怒るのに遅く、恵みとまことに富む神として啓示された (6,7節)。

7節では、不正行為を示す、三種類の異

なった語が使われている。咎とは、主の道を踏み外すことである。背きとは、神に対する反逆のことである。罪とは、直訳すれば「違反」であり、第一義的には、神が定められた的を外すことである。これらはすべて、神の栄光に及ばない、という概念を伝えている（ローマ3:23）。神の律法を破ったイスラエル人たちはみな、死に値した。しかし、神はあわれみのゆえにそうされなかった。モーセは主を礼拝し、民が不適格であるからこそ、神がともにいてくださり、恵みを与えて下さるようにと懇願した（8,9節）。

34:10~17 その後、神は契約を更新し、カナンの住民を追い出すにあたって、イスラエルのために驚くべき御わざを行う、と約束された。そして異教徒と混ざり合い、偶像礼拝の習慣を取り入れることを戒めた。アシェラ像とは卑猥な彫像、つまり男根をかたどった偶像で、豊穡の象徴である。神がご自分の民と契約を結ばれたからには、その地の住民と契約を結んではならないのは当然であった。神と偶像の両方に同時に結ばれるというのは、あり得ないことである（Iコリント10:21参照）。

34:18~27 次に神は、種なしパンの祭り（18節）、初子の奉獻（19,20節）、安息日（21節）、七週の祭りと収穫祭（22節）に関する定めを繰り返された。すべての男子は、23:14~17に言及されている年に三度の祭りに参加し、主の前に出なければならぬ、とされた。24節では、神がカナン人の意志を支配し、ユダヤ人が年に三度、主の前に出るためにエルサレムに上っている隙を狙って彼らの地を奪うことのないようにする、と約束された。主は他の規定（25,26節）を繰り返した後、先ほど11~26節で語られたことばを書き記すようにモーセに命じられた（27節）。そして、主

ご自身が石の板に十戒を書き記された（28節。1節および申命記10:1~4参照）。

34:28~35 四十日四十夜を山で過ごした後、モーセはこの二枚の石板を持って下りて来た（28,29節）。主のご臨在の中にいたため、モーセは自分の顔が輝きを放っているのに気づいていなかった（29,30節）。民は恐れて、彼に近づくことができなかった。イスラエルに主のご命令を伝えてから、モーセは顔に覆いを掛けた（31~33節）。モーセが顔を隠したのは、律法、すなわち律法のデイスペンセーション（の時代）の栄光が消えゆくのを民に見えないようにするためであった、とパウロはIIコリント3:13で説明している。

35:1~3 モーセはイスラエルの全会衆を集めて、安息日に関わる律法を民に繰り返した。

F. 幕屋の調度品の準備（35:4~38:31）

1. 民の贈り物と賜物のある人々（35:4~36:7）

35:4~20 モーセは、幕屋を造るために必要な、主に進んで献げる奉納物としての材料（4~9節）について指示を与えた。また、（幕屋の）さまざまな部品を作る、熟練した職人を呼び集めた（10~19節）。神は、礼拝を目的とした二つの建物を用意された。幕屋と神殿である。この二つの建物は、前もって費用が支払われていた。神が民の心を動かして、必要を満たして下さったからである（5,21,22,26,29節）。私たちの献金や奉仕も同様に、自発的で惜しみないものでなければならない。

35:21~36:1 民の多くは、エジプトから持ってきた宝物で気前よく応えた（21~29節）。子牛のために金（きん）を献げた者たちは、それをすべて失ってしまった。（しかし）幕屋に投資した人々は、それが

ヤハウエの栄光のために使われるのを見る喜びを経験したのである。

モーセは、あらゆる芸術的な細工の職人として、神がベツアルエルとオホリアブを任命されたことを公にした。彼らには、人を教える力も備わっていた (35:30～36:1)。

36:2～7 熟練した職人たちは聖所の建設にとりかかったが、民は朝ごとに、多くの資材を持って来たので、モーセはそれ以上持ってこないように制止しなければならないほどであった。

36章8節から39章の終わりまで、幕屋とその調度品の製作に関する詳細な記述がある。これほどの詳細な記述の繰り返により、神が愛する御子について語るのに倦むことはない、と気づかされる。

2. 幕屋を覆う幕 (36:8～19)

然り糸で織られた内幕は、幕屋と呼ばれた (8節)。その上には、やぎの毛でできた幕 (14節) が掛かっていた。雄羊の皮とじゅごんの皮 (あるいは、アザラシやイルカの皮) でできた幕は覆いと呼ばれた (19節)。

3. 三方の側面の板 (36:20～30)

この板はアカシヤ材でできていた。アカシヤは幕屋に使われた唯一の木である。アカシヤの木は、乾燥した場所に生え、非常に美しく、また非常に割れにくい木であった。同じように、主イエスは砂漠から出た根であり (イザヤ53:2)、道徳的に非の打ち所がなく、永遠に存在する方である。

4. 板を固定するための横木 (36:31～34)

横木のうちの四本は見えるが、一本は板の中心を通るため見えない。この見えない

横木は、聖霊をよく表している。信徒を束ね「主にある聖なる宮」(エペソ2:21) とするからである。他の四本の横木は、神の民に共通するいのち、愛、立場、そして告白を暗示しているようである。

5. 至聖所に通じる垂れ幕 (36:35, 36)

この垂れ幕は、私たちが神に近づく道を開くために、カルバリで裂かれた主の体を表している (ヘブル10:20)。垂れ幕に織り出されたケルビムは、神の義なる御座を守る者を表すと考えられている。

6. 聖所に通じる幕 (36:37, 38)

この幕は、庭の入り口や、上記の幕と同じ素材でできており、神への道としてのキリストを描いている。

7. 契約の箱 (37:1～5)

契約の箱はアカシヤ材でできた箱で、その内側も外側も純金で覆われていた。それは、私たちの主の人間性と神性を示している。その中には、律法の石板、マナの入った金の壺、そして芽を出したアロンの杖が入っていた。キリストに適用すれば、それぞれ、「あなたのみおしえ (※英訳は「律法」は私の心のうちにあります) (詩篇40:8) と言われたキリスト、天から下って来た神のパンとしてのキリスト (ヨハネ6:33)、神に選ばれ、死者の中からよみがえった祭司としてのキリスト (ヘブル7:24～26) を表している。(しかし) イスラエルの民に適用すれば、それらはすべて、彼らの失敗と反逆の記念物でしかない。

8. 宥めの蓋 (37:6～9)

宥めの蓋 (英訳は「あわれみの座」とは、神の玉座であり、地上における神の御住まいであった。金のケルビムがそれを見おろ

しても、(イスラエルが破った) 律法の板や、(イスラエルの反逆を暗示する) マナの壺とアロンの杖は見えなかった。ケルビムに見えたのは、振りかけられた血であった。この血のゆえに、神は反抗的な罪人にあわれみを示すことができるのである。宥めの蓋は、「宥めのささげ物」として、神が公に示された(ローマ3:25) 御方としてのキリストの型である。^{*(32)}「あわれみの座」は、契約の箱の蓋として機能した。

9. 臨在のパンの机 (37:10~16)

臨在のパンの机には、十二のパンが置かれた。「キリストが(神に) 受け入れられたゆえに神の前に出ることができるイスラエルの型である。キリストは今もなお、真のアロンとして、神の前でイスラエルを保っておられる」。^{*(33)} これらのパンは、十二部族それぞれの必要を神が満たしてくださることを表しているのかもしれない。

10. 金の燭台とその付属品 (37:17~24)

純金の燭台は、世のまことの光(ヨハネ8:12) であるキリストの型と見る人もいれば、キリストに栄光をもたらす使命を持つ聖霊を表す、と考える人もいる。これは、燭台が聖所内のキリストの表象すべてを照らすからである。さらに、キリストと信徒の結合を表すとする考え方もある。中央の支柱は他に類がない。そこから左右に三本ずつ、計六本の枝が伸びているが、すべて一塊の金で作られているからである。

11. 香の祭壇 (37:25~28)

香の祭壇は、神への永遠の芳香であるキリストを表している。また、主イエスが天で私たちのために執り成す現在の働きも暗示している。

12. 注ぎの油と香 (37:29)

油は聖霊の象徴であり、香は私たちの主が、御父に喜びをもたらす、常に芳(かぐわ)しく完全な方であることを表している。

13. 全焼のささげ物の祭壇 (38:1~7)

全焼のささげ物の祭壇は、主イエスが完全な犠牲としてご自身を神に献げた十字架を表している。その犠牲の死なくして、神に近づくことは不可能である。

14. 洗盤 (38:8)

洗盤は、現在におけるキリストの働きを表している。それは、みことばの水の洗いでご自分の民をきよめる、という働きである(エペソ5:26)。祭司は、その務めを果たす前に、手と足を洗うことが求められた。それと同じように、主への力強い奉仕を行うためには、まず私たちの行動と歩みが清くなければならない。洗盤の材料は、もともと(幕屋で) 仕える女性たちが使っていた青銅の鏡であった。(彼女たちは) 自分に栄光を帰すことをやめ、神に仕えるようになったのである。

15. 幕屋の外庭、柱、掛け幕 (38:9~31)

38:9~20 幕屋の周囲の庭は、白い亜麻布の掛け幕、青銅の台座と銀の鉤(かぎ)がついた五十六本の柱、入り口の刺繍が施された門で構成されていた。白い亜麻布は、不信仰な罪人が神に近づくことを拒む義を表し、また内部の信徒を分離し保護するものである。庭への唯一の入り口は、青色、紫色、緋色で刺繍された撚り糸で作られた門であった。これは、神への唯一の道であるキリスト(「わたしは門です」ヨハネ10:9) を暗示している。亜麻布は、キリ

ストの汚れのない純潔を、青はキリストが天から来られたことを、紫は王たる栄光を、そして緋色は（私たちの）罪のために受けた苦しみを表している。

38:21～23 熟練した職人たちの名前が繰り返されている。神は、なすべき仕事があれば、必ずそのために人を起こされる。幕屋の建設では、ベツアルエルとオホリアブを召され、必要な能力を与えられた。神殿の建設では、ヒラムを用いて資材を供給された。教会を建て上げるためには、ペテロとパウロを、選ばれた働き人としておおいになったのである。

38:24～31 幕屋を建てるために使われた材料は、入念に算出された。現在の貨幣価値に換算すると、数億円にもなるであろう。私たちも、主の働きのために自分の所有物を差し出して、次のように言うことができる。「わが持てる銀と金をすべて、主よ、受け取りたまえ。一円たりとも、われ拒まじ」と。^{*(34)}

G. 祭司の装束の準備 (39章)

39:1～7 さて、次は祭司の式服の準備についてである。いきなり、四つの色が繰り返されていることに驚かされる。この四色は、四つの福音書に見られるキリストの栄光のさまざまな輝きを表しているという見方がある。すなわちマタイは紫で王を、マルコは緋色で苦難のしもべを、ルカは白で罪なき人を、ヨハネは青で天から降りて来られた神の御子を表す、と。エポデに使われる金糸は、キリストの神性を表す（3節）。エポデの両肩の肩当てには、イスラエルの六部族の名が刻まれた縞めのうが付けられていた。

39:8～21 胸当てには十二部族に一つずつ割り当てられた十二の宝石があった（10～14節）。私たちの偉大な大祭司も同

じである。伝道者のペル（Peter Pell）がそれを見事に表現している。「このようにして、たくましい両肩と愛の心に担われた神の民の名前が、神の御前に出るのである」と。

39:22～26 エポデの下に着るのは青服であった。その裾には純金の鈴と、青、紫、緋色の撚り糸で撚ったざくろがあった。これらは、私たちの偉大な大祭司に見られるだけでなく、私たちの中に再生されるべき霊的な実りと証しを表している。

39:27～29 亜麻布の長服は、祭司たちが最初に着るものであった（レビ記8:7）。その後で、栄光の衣を着るのである。神はまず、悔い改めた罪人にご自分の義を着せ（Ⅱコリント5:21）、主イエスが戻られる時、ご自分の民に栄光の衣を着せてくださる（ピリピ3:20,21）。義は栄化に先行しなければならないのである。

39:30, 31 大祭司のターバンにつけられた純金の札には、「主の聖なるもの」という文字が、印章を彫るように刻まれていた。これは大祭司が、聖なるささげ物に関しての咎を負うためであった（出エジプト記28:38）。私たちのすることにはすべて罪の汚れがあるが、私たちの礼拝と奉仕は、それが御父に届く前に、偉大な大祭司によって、すべての不完全さからきよめられるのである。

39:32～43 民が奉仕を終えて、幕屋の部品を持って来ると、モーセはそれを点検して、すべての仕事は、神が示された基準に沿って作られていることを確認したので、モーセは彼らを祝福した。

H. 幕屋の建設 (40章)

40:1～8 神は、幕屋をその年の初めの日に建てるように命じられた（1,2節）。これは出エジプトから約一年後、イスラエ

ルがシナイに到着してから八か月半後のことである。また次に、それぞれの調度品がどこに置かれるべきかを示された。

40:9~17 9~15節では、幕屋とその用具、大祭司とその子らへの油注ぎのための指示が繰り返されている。それらの指示は、彼らがエジプトを去ってから間もなく一年となる第一の月の一日に実行された(16, 17節)。

40:18~33 そのようにしてモーセは幕屋を設営した。この段落では、律法の偉大な授与者(モーセ)が、主に命じられたとおり、個々の調度品はもちろん、幕屋そのものの各部分についてどう実行したかが記されている。

最後に、モーセは幕屋の周りに庭を設けた。そして、重要な任務を無事にやり遂げたことを示す完了のことばがその後続く。「モーセはその仕事を終えた」と。

40:34~38 栄光の雲が幕屋の上に降り、幕屋に満ちたので、モーセは中に入ることができなかった。この雲は、やがて民の旅に同行することになる。民は、雲が動くときだけ動いた。雲が止まると、民も止まった(34~38節)。自分自身もレビ族の一員であったモーセは、おそらく、アロンとその子たちが祭司としての責任を負うまでは、祭司としての任務を与えられたようである(レビ記8章)。

これまで見てきたように、出エジプト記は、神の民がエジプトから解放され、シナイ山のふもとに幕屋が建てられるまでの一年間の歴史である。この書は、キリストと、その道徳的完全性を表す美しいもので満ちている。この栄光のキリストを礼拝し、その聖なる光の中で生きることは私たちの責務である。

後 注

- (2:9, 10) ヘブル語の「マシャー」は「引き出す」という意味であるが、実は二つの言語のことば遊びなのかもしれない。ヘブル人は、子どもに名前をつける、という重大な場面でも、洒落を使う(たとえば、創世記29, 30章にあるヤコブの息子たちへの命名など)。
- (2:9, 10) C. H. Mackintosh, *Genesis to Deuteronomy*, p. 144.
- (3:1-4) いみじくも、(17世紀の)スコットランド盟約派の人々は燃える柴を自らの紋章とし、そこに“Nec consummaretur”(「しかしそれは燃え尽きなかった」)とのラテン語の標語を添えた。
- (3:6) R. Alan Cole, *Exodus: An Introduction and Commentary*, p. 66.
- (3:7-12) J. Oswald Sanders, *On to Maturity*, p. 56.
- (3:13, 14) 聖書によってはモファット訳(the Moffatt Version)のように、御名を「永遠者」(the Eternal)とするものもある。(Louis Segondによるフランス語訳もl'éternelと訳している)
- (5:2-14) Cole, *Exodus*, p. 82. 著者は、民の監督たちの侮蔑的な態度を“stub themselves stubble”「刈り株を刈り取る」(12節)という訳で再現しようとしている。
- (8:20-24) エジプトで翻訳された七十人訳は現地の知識やユダヤの伝承を反映してか、嘲まれると痛いアブ(kynomua)と訳している。詳しくは Cole, *Exodus*, pp. 93, 94を参照。
- (10:29) Matthew Henry, “Exodus,” in *Matthew Henry's Commentary on the Whole Bible*, I: 314.
- (12:11-20) Cole, *Exodus*, p. 108.

11. (13:17-20) C. F. Pfeiffer, *Baker's Bible Atlas*, pp. 73, 74.
12. (13:21, 22) Henry, "Exodus," I: 328.
13. (14:15-18) *Ibid*, I: 332.
14. (15:1-21) Dr. H. C. Woodring, unpublished notes, Emmaus Bible School.
15. (15:1-21) Henry, "Exodus," I: 335, 336.
16. (16:1-19) この地名は、英語のsinとは無関係である。
17. (19:1-9) D. L. Moody, *Notes From My Bible*, pp. 33, 34.
18. (補説) *The New Scofield Study Bible*, New King James Version, p. 4.
19. (補説) ディスベンション主義者が「救われるには7つの方法がある」と信じているという古くからの非難は完全に誤りである。
20. (補説) 二つの礼典(聖餐式、バプテスマ)のうちの一つを受け入れている場合も確かに存在する。
21. (21:1-6) これはHandley C. G. Moule監督による賛美歌、"My Glorious Victor, Prince Divine," *Hymns of Truth and Praise*, #535. の2番の歌詞である。
22. (23:18, 19) 正統派ユダヤ人は、一揃いの陶磁器を二種類持っている。一つは肉製品用であり、もう一つは乳製品用である。イスラエルのカフェテリアの中には、ユダヤ人が、肉料理と乳製品を1回の食事で食べるのを防ぐため、再度列に並ばなければならないシステムになっているところもある。(本書の編集者が訪れたエルサレムのあるカフェテリアの場合、驚いたことに、肉料理と乳製品を使った料理は別のフロアで提供されていた!)
23. (23:20-33) Henry, "Exodus," I: 376.
24. (25:17-22) 〈ケルブ〉(ケルビムの単数形)は「祝福」、「賛美」、「崇拜」を意味するセム語の語根から来ている可能性はあるが、ヘブル語のkarav(近づく)から来ていると考えるのが一般的である。したがって、ケルビムは「覆うもの」、つまり擁護者として近づく者のことである。
25. (26:14) さまざまな訳があるのは、ヘブライ語のことがどの動物の皮を指しているのかがはっきりわからないからである。
26. (28:36-38) Archbishop Beveridge, これ以上の詳細は不明。
27. (30:1-10) ギリシア語のthumiatiērionは、文字通り「香をたく場所(物)」を意味する。従って、これは香壇を意味することもあれば、宥めの日に垂れ幕の後ろに運ばれ、祭壇からの香で満たされる香炉を意味することもある。
28. (31:1-11) 現代イスラエルの国立芸術学院がベツアルエルの名を冠しているのは、特筆すべきことである。
29. (補説) 幕屋の予型論は福音派の信徒の間で広く受け入れられているが、すべての詳細について完全な同意があるわけではないのは明らかである。クリスチャンによっては、新約聖書(主にヘブル人への手紙)で具体的に言及されている予型だけを受け入れている。予型論については、創世記42章を参照。
30. (32:30-35) 15世紀後のパウロのように、モーセは同胞のイスラエル人を救うためなら、呪われ、失われることも厭わなかったと考える人もいる。
31. (33:18-23) Hywel R. Jones, これ以上の詳細は不明。
32. (37:6-9) 同じギリシア語のhilastērionは、宥め(犠牲による満足)と宥めの場所(すなわち、あわれみの座)の両方を意味する。
33. (37:10-16) G. Morrish, *New and Concise Bible Dictionary*, p. 754.
34. (38:24-31) ハヴァガル(Francis Ridley Haver-gal) の"Take My Life and Let It Be"とい

う偉大な賛美歌のこの一節を歌うのは、それを実践するより、はるかに容易である。

Sanders, J. Oswald. *On to Maturity*. Chicago: Moody Press, 1962.

参考文献

- Borland, James A. "Exodus." In *Liberty Bible Commentary*. Lynchburg, VA: The Old-Time Gospel Hour, 1982.
- Cole, R. Alan. *Exodus: An Introduction and Commentary*. The Tyndale Old Testament Commentaries. Downers Grove, IL: InterVarsity Press, 1973.
- Dennett, Edward. *Typical Teachings of Exodus*. Reprint. Denver: Wilson Foundation, n.d.
- Henry, Matthew. "Exodus." In *Matthew Henry's Commentary on the Whole Bible*. Vol. 1. Genesis to Deuteronomy. McLean, VA: MacDonald Publishing Company, n.d.
- Keil, C. F., and Delitzsch, F. "Exodus." In *Biblical Commentary on the Old Testament*. Vols. 1, 2. Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Publishing Co., 1971.
- Lange, John Peter. "Exodus." In *Commentary on the Holy Scriptures, Critical, Doctrinal and Homiletical*. Vol. 2. Reprint (24 vols. in 12) . Grand Rapids: Zondervan Publishing House, 1980.
- Pell, Peter, Jr. *The Tabernacle* (Correspondence Course) . Oak Park, IL: Emmaus Bible School, 1957.
- Ridout, Samuel. *Lectures on the Tabernacle*. New York: Loizeaux Brothers, Inc., 1973.
- Rosen, Moishe, and Ceil Rosen. *Christ in the Passover*. Chicago: Moody Press, n.d.

レビ記

序 論

「聖霊が私たちに与えてくださった、神の靈感によるこの書物（聖書）全体の中で、レビ記ほど神のことばそのものが含まれているものはない。ほとんどすべてのページで、直接語っておられるのは神ご自身であり、その恵み深いことばが、発せられたままの形で記録されているのである。このように考えると、私たちはこの書物の学びに特別な関心と注意を向けずにいることはできない。」

アンドリュー・ボナー（Andrew Bonar）

I. 正典における独自性

かつてJ・N・ダービー（John Nelson Darby）は、もし、信徒が聖潔（holiness）に飽きたら悲惨な結果になる、と警告していた。レビ記は聖潔が主要なテーマであり、多くのクリスチャンにとって、最も読みにくい書物であることは確かである。もちろん、古代ユダヤ人のいけにえの儀式的詳細や、日常生活で聖潔を保ち、異教徒から分離するための律法としてだけ受け取るなら、その祝福は限定的であろう。しかし、ひとたび、いけにえの細部に至るまで、キリストのご人格とその働きの完全性が描かれていることに合点がいくと、黙想すべきことは多い。レビ記を、それに対応する新約聖書のヘブル人への手紙と関係づけると、さらに多くの祝福を得ることができる。

II. 著者問題

レビ記を読むと、27章のうち20章と35の段落が、「主はモーセに告げて仰せられた」、またはそれに相当する表現で始まっている。近代に至るまで、ユダヤ教徒やキリスト教徒を自任する人々の大多数は、これらのことばを額面通りに受け入れていた。主ご自身も、ツアラアトに冒された人に、自分を祭司に見せ、いけにえを献げよ、というレビ記13:49を指して、「モーセが命じた物をもって、あなたのきよめのささげ物をしなさい」（マルコ1:44）と言われた。しかし、今日、レビ記はもとより、モーセ五書全体の著者がモーセであることを真つ向から否定する、あるいは少なくとも疑問視することが、多くの分野で流行している。

筆者は（モーセが著者である、という）

伝統的見解が真実であるばかりでなく、重要であると信じるので、「モーセ五書への序論」でこの問題を詳しく取り上げた。それを注意深く読んでいただければ、と思う。

III. 執筆年代

モーセをレビ記の著者とし、モーセ五書に存在する証拠を受け入れると、この書がモーセに啓示されたのは、幕屋を建てた後の五十日間（出エジプト記40:17）、またイスラエルの民がシナイを離れる前（民数記10:11）であると思われる。正確な執筆年代は不明であるが、紀元前1450年から1410年の間であることが示唆されている。

IV. 背景と主題

レビ記の内容を簡単に覚えるには、その名称から「レビ人」または「祭司」を連想し、レビ記を祭司たちの手引書として理解することである。出エジプト記は、荒野に幕屋を建て上げるところで終わった。今度は、祭司とレビ人が、幕屋に関連して、いけにえをどのように献げたらよいのか、その他の儀式（たとえば、「ツアラアト」に冒された家のきよめ）をどのように行ったらよいのかの指示を必要としていた。

出エジプト記では、イスラエルがエジプトから解放され、神の特別な所有物として分離されたことを見た。レビ記では、彼らがどのようにしたら罪と汚れから分離され、聖所で神に近づくことができるのかを見る。聖であることが宿営地の必須の条件となったのである。旧約でも新約でも、神はご自分の民に聖さを要求される。神ご自身が聖なる存在であるからである。これは重大な問題を提起している。人間は生来の性質として、また実践において聖なる者ではない

からである。その解決策は、血による贖いにある（レビ記17:11）。旧約聖書では、神の子羊が一回で完全ないけにえとなつてくださることを想定して動物の犠牲が献げられた。新約聖書、特にヘブル人への手紙で明らかにされている通りである。

構 成

I. ささげ物の種類（1:1～6:7）

- A. 全焼のささげ物（1章）
- B. 穀物のささげ物（2章）
- C. 交わりのいけにえ（3章）
- D. 罪のきよめのささげ物（4:1～5:13）
- E. 代償のささげ物（5:14～6:7）

II. ささげ物のおしえ（6:8～7:38）

III. 祭司たちの聖別（8～10章）

- A. モーセによる祭司たちの叙任（8章）
- B. アロンによるささげ物（9章）
- C. ナダブとアビフの冒瀆（10章）

IV. きよいものと汚れたもの（11～15章）

- A. きよい食物と汚れた食物（11章）
- B. 出産後のきよめ（12章）
- C. ツアラアトの診断（13章）
- D. ツアラアトのきよめ（14章）
- E. 漏出を病んだ後のきよめ（15章）

V. 宥めの日（16章）

VI. ささげ物に関する律法（17章）

VII. 個人の行動に関する律法（18～22章）

- A. 性的純潔に関する律法（18章）
- B. 日常生活に関する律法（19章）
- C. 重大な違反に対する処罰（20

章)

D. 祭司の行動 (21章、22章)

VIII. 主の例祭 (23章)

A. 安息日 (23:1～3)

B. 過越 (23:4, 5)

C. 種なしパンの祭り (23:6～8)

D. 初穂の束のささげ物 (23:9～14)

E. 七週の祭り (23:15～22)

F. 角笛の祭り (23:23～25)

G. 宥めの日 (23:26～32)

H. 仮庵の祭り (23:33～44)

IX. 儀式、および道徳に関する律法 (24章)

X. 安息の年とヨベルの年 (25章)

XI. 祝福と呪い (26章)

A. 神に従うことに伴う祝福 (26:1～13)

B. 神に聞き従わないことによる呪い (26:14～39)

C. 告白と悔い改めによる回復 (26:40～46)

XII. 誓願と十分の一のささげ物 (27章)

注 解

I. ささげ物の種類 (1:1～6:7)

A. 全焼のささげ物 (1章)

レビ記は、主が会見の天幕からモーセを呼び出して、彼に語りかけるところから始まる。ボナー (Andrew Bonar) が冒頭の引用で述べたように、「レビ記ほど神のことばそのものが多く含まれているものはない」ゆえに、「特別な関心と注意を」もってこの書を学ぶ必要がある。冒頭で主は、五つのささげ物を規定された。すなわち、全焼、穀物、和解、罪、そして代償のささげ物である。最初の三つは、芳しい香りの

いけにえとして、そして最後の二つは罪のきよめのささげ物として知られている。最初の三つは自発的なもので、最後の二つは義務的なものであった。

神がイスラエルの子らに与えた最初のメッセージは、家畜の中から、牛か羊をそのささげ物として献げなければならない、というものであった。

第1章では、全焼のささげ物 (ヘブル語で「オラー」^{* (1)}) が取り上げられている。ささげ物をする人の経済力に応じて、三つの等級に分けられた。すなわち家畜の中からの、傷のない雄牛 (3節。5節と比較)、羊の群れからの、傷のない雄の羊またはやぎ (10節)、そして山鳩、または家鳩 (14節) である。どれもみな平和的な動物であり、野生の動物はいかなるものも主の祭壇に献げられることはなかった。

ピーター・ペル (Peter Pell) は次のような意味を提唱する。雄牛は忍耐強く、疲れを知らない〈労働者〉としての主、常に御父の御心を行い、完全な奉仕の人生を送り、完全な犠牲の死を遂げた主を表し、羊は、神の御心に抵抗することなく身を委ね、心優しく、へりくだった主を表し、やぎは、私たちの〈身代わり〉としてのキリストを表し、山鳩は、〈天から来られた〉と同時に〈悲しみの人〉 (ナゲキバト。イザヤ 38:14参照) である主を表している、と。

^{* (2)}

見よ、汚れなき〈犠牲者〉、私の〈保証人〉が
十字架の上で死なれるのを！
〈神の子羊〉が〈究極のいけにえ〉として
ご自身を献げてくださったのだ、
この私のために！

(作者不詳)

ささげ物をする者の義務：ささげ物を会見の天幕の入り口、つまり青銅の祭壇の近くに連れて来て（3節）、ささげ物の頭に手を置く（4節）、（あるいは「寄りかかるように手に重心をかける」）。そして若い牛（5節）または羊かやぎ（11節）を屠（ほふ）り、その動物の皮を剥ぎ、各部に切り分け（6, 12節）、内臓と足は水で洗う（9, 13節）。

祭司の任務：祭司は動物の血を祭壇の側面に振りかける（5, 11節）。次に祭壇の上に火と薪（たきぎ）を置く（7節）。そして動物の切り分けた部分を、薪（たきぎ）の上に順番に置いていった（8, 12節）。皮以外はすべて祭壇で焼かれた（13節、7:8）。鳥の場合、祭司はその頭をひねり、その血は祭壇の側面に絞り出し、餌袋はその中身とともに取り除き、祭壇の東側に投げ捨て、鳥のからだは細かく切り分けずに切り開いてから祭壇の上で焼いて煙にした。「焼く」という語は、香を焚（た）く、という場合に用いるものであり、罪のきよめのささげ物に関しては別の語が使われる。

ささげ物の分配：祭壇の上で焼かれたものはすべて神のものであり、皮は祭司に与えられた（7:8）。このささげ物に限っては、献げた人の取り分は何もなかった。

全焼のささげ物を携えて来る人は、主への完全な明け渡しと献身を、表明していたのである。他の箇所を見ると、このいけにえは、さまざまな機会に献げられていたことが分かる（詳細は聖書辞典を参照）。

予型論的に見ると、全焼のささげ物は、汚れなきキリストが神に献げられたことを描いている。カルバリという祭壇で、神の子羊は神の正義の炎によって完全に焼き尽くされたのである。

アメリカ・ハル（Amelia M. Hull）の

讃美歌は、その本質を見事に捉えている。

私は祭壇に行ってきた。

そして〈子羊〉を目撃した、
焼き尽くされて灰となるのを。

そしてじっと見た。その芳しい香りが高く立ち上り、

ああ、御父よ、

あなたに受け入れられたのを。

B. 穀物のささげ物（2章）

穀物のささげ物（ヘブル語で「ミンハ一」）とは、小麦粉や穀物のことである。

*⁽³⁾

ささげ物本体：穀物のささげ物には次のようにさまざまな種類があった。小麦粉に油と乳香を注いだもの（1節）。これは調理せず、そのひとつかみを祭壇の上で焼いて煙とした（2節）。パン、または薄焼きパンには三種類あった。（1）かまどで焼いたもの（4節）、（2）平鍋の上で焼いたもの（5節）、（3）（蓋付きの）鍋で調理したもの（7節）。KJVやRSVのように、「フライパン」と訳しているものもあるが、このささげ物は、湯で茹（ゆ）でた団子のようなものだと考える人もいる）。また、初穂による穀物を表す穀粒もあったが、それは火であぶられることになっていた（14節）。12節は、特別な穀物のささげ物を指しているが（23:15～21）、パン種を含んでいたもので、祭壇に献げてはならなかった。

上記の穀物のささげ物は、パン種や蜂蜜を含んではならなかった（11節）。パン種は発酵を、蜂蜜は自然な甘さを意味する。しかし、神とイスラエルとの契約のしるしとして加えなければならないのは塩であった。それは**契約の塩**（13節）と呼ばれ、契約が破られないものであることを意味す

る。「契約の塩」については、参照箇所として民数記18:19、Ⅱ歴代誌13:5、エゼキエル43:24がある。

献げる人の務め：献げる物を用意し、祭司のところへ持って行った（2,8節）。

祭司の務め：祭司は祭壇でそのささげ物を献げる（6:14）。それからささげ物をひとつつかみ取り出し、それを覚えの分として、祭壇の上で焼く（2,9節）。

ささげ物の分配：乳香と一緒に祭壇の上で焼かれた「覚えの分のひとつかみ」は、主のものとなった。祭司は残りのささげ物をすべて、食物として取ることが許された（3,10節）。職務にあたる祭司は、かまどで焼いたもの、鍋や平鍋で調理したものをすべてを受ける権利があった（7:9）。また、油を混ぜたもの、乾燥したものはすべて、他の祭司たちのものとなった（7:10）。献げた人自身は、ささげ物から受ける分は何もなかった。

穀物のささげ物をした人は、自分の人生にさまざまな良いものを与えてくださる神の豊かな恵みに感謝したいのである。これらの良いものの代表が小麦粉、乳香、油（注ぎの供え物の場合はぶどう酒）なのである。

象徴的に見ると、このささげ物は、私たちの救い主の道徳的に非の打ちどころのないご生涯（上質の小麦粉）、悪に染まらない生き方（パン種がない）、神に対する香（かぐわ）しさ（乳香）、聖霊の満たし（油）を意味している。讃美歌作者はそれを美しく表現している。

〈いのち〉、香り高く、聖い愛のいのちは
注ぎ出されたり

〈いのち〉、地の卑しいいばらの中にあり
て汚れなく甘美なり

〈いのち〉、そこより、神の、栄光とへり
くだりの愛の御顔輝けば、

われら、御足のもとにひれ伏すほかなし

F・アラベン (F. Allaben)

C. 交わりのいけにえ（3章）

3:1～15 和解または交わりのいけにえ（ヘブル語で「シェレム*⁽⁴⁾」）は、贖いの血の効力に基づいて成立した、神との平和を祝うものである。それは、喜びと愛と交わりの祝宴であった。

ささげ物本体：このささげ物にも三つの等級があった。すなわち、群れの中から取り出した雄または雌の牛（1～5節）、または群れの中から取り出した雄または雌の羊（6～11節）、あるいは群れの中から取り出した雄または雌のやぎ（12～16節）である。

献げる人の務め：ささげ物の動物を、会見の天幕の入り口で主の前に差し出す（1,2,7,12節）。ささげ物の頭に手を置く（2,8,13節）。会見の天幕の入り口で屠（ほふ）る（2,8,13節）。動物のある部分、すなわち脂肪、腎臓、腰のあたりの脂肪全部と肝臓の上の小葉を取り除き、祭壇の上で焼く（3,4,9,10,14,15節）。

祭司の務め：その血を祭壇の側面に振りかける（2,8,13節）。主に献げる部分（脂肪など）を全焼のささげ物の上に載せて焼く（5節）。

ささげ物の分配：主に献げる部分は食物のささげ物と呼ばれるもので（11節）、脂肪、腎臓、小葉と、腰のあたりの脂肪であ

った。レビ記7:32,33によると、職務にあたる祭司は、右のもも肉を最初に主への奉納物として献げた後、それを受け取ったことが分かる。その他の祭司たちは、動物の胸肉を受け取った (7:31)。これはまず主への奉納物として献げられ、その残りはすべて、献げた本人のものとなった (7:15~21)。このように、献げた者がささげ物の一部を受け取る、というのは、このささげ物の場合だけである。おそらく献げた者は祝宴を催し、それは家族や友人たちと交わる食事会として行われたのであろう。その結果、このささげ物は (神との) 契約の中にあるイスラエル人相互の平和な関係を促進したのである。

このささげ物を持って来た人は、ヤハウエとの交わりによる平安を喜び、感謝する気持ちを表していたのである。中には、主に対して立てた誓願、あるいは特別な恵みに対する感謝の思いから交わりのいけにえを献げた人がいたかもしれない。

交わりのいけにえの予型的 (象徴的) な意味については、ピーター・ペル (Peter Pell) がこのように述べている。

キリストが信者との関係において完了された御わざは、交わりのいけにえの中に見ることができる。主イエスは私たちの平和であり (エペソ2:14)、その十字架の血によって平和をもたらされた (コロサイ1:20)。主はこの平和を、遠くにいた者にも、近くにいた者にも伝えられた (エペソ2:17)。その結果、ユダヤ人と異邦人との隔ての壁は取り払われた。キリストにあって、神と罪人は平和のうちにまみえる。私たちの側にあった敵意はあとかたもない。神の怒りは鎮められ、罪人は和解を受け、両者は等しくキリス

トご自身とその御わざに満ち足りるのである。^{*(5)}

セシル卿 (Lord Adalbert Cecil) による讃美歌は、キリストが私たちのために成してくださったことへの歓喜を表現している。

ああ、神が御子を思う御思いに発し
永遠に流れ出る平安よ。
ああ、ただ十字架の上で
すべてが成し遂げられたと知る平安よ。
神との平和！ 天にある血潮は語る
私が赦された者であることを。
神との平和！ 主はよみがえられた！
その義により、私は自由の身となったのだ。

3:16, 17 イスラエルの民は、脂肪または血を食べることを禁じられていた。そのどちらも主に属するものと考えられていたからである。(しかし) 脂肪に関する規定は、象徴的な意味だけでなく、初期の予防医学という一面もあった。今日、医師たちは高血圧、心臓病、脳卒中、糖尿病、肺病などの発生率を下げるために、脂肪の摂取量を控えるように勧めている。

最初の三つのささげ物、すなわち全焼、穀物、そして交わりのいけにえは民の公的礼拝の中で一定の位置を占めていたが、個人として、いつでも、自発的に、主の前に持って来ることもできた。この後に続く二つのささげ物は、罪を犯した時に献げるように命じられた。このように、ささげ物には、自発的な礼拝と義務としての贖罪、という二つの概念が込められていたのである。

D. 罪のきよめのささげ物 (4:1~5:13)

4章 贖われた民のために、罪のきよめのささげ物 (ヘブル語で「ハッタート」*⁽⁶⁾) をすべきことが定められた。このささげ物は、罪人が救いを得るために主のもとに来るのではなく、主との契約関係にあるイスラエル人が赦しを求めて来ることを意味している。それは無意識に、または、意図せずに犯した罪に関係するものである。

ささげ物本体：ささげ物には、罪を犯した人によってさまざまな等級があった。油注がれた祭司、つまり大祭司が罪を犯して、民に罪を負わせた場合 (3節) は傷のない若い雄牛を、全会衆 (13節) も若い雄牛を、族長 (22節) は傷のない雄やぎを、民衆 (27節) は傷のない雌やぎ (28節)、または雌の羊を連れて来た (32節) (ここでのヘブル語は、成長した動物を意味している)。

献げる人の務め：一般に、動物を献げる人は、それを幕屋の中庭の入り口に連れて行って主に差し出し、その頭の上に手を置いて屠 (ほふ) り、脂肪と腎臓と肝臓の上の小葉とを取り除いた。長老たちは会衆のためにこれを代行した (15節)。いけにえの死は、象徴的な意味で、罪人の死と見なされたのである。

祭司の務め：大祭司は、自分のため、また会衆のために、いけにえの血を携えて、幕屋の聖所に入り、それを垂れ幕の前と (5, 6, 16, 17節)、香を焚 (た) く金の祭壇の角に (7, 18節) 七度振りかけた。そして、残りの血を全焼のささげ物の祭壇の土台に注いだ (7, 18節)。族長のため、また民衆のために、祭司は全焼のささげ物を献げる祭壇の角に血を振りかけ、残りの血は祭壇の土台に注いだ (25, 30, 34節)。すべての

社会階層のために、祭司は脂肪、腎臓、肝臓の上の小葉、そしてあぶら尾を全焼のささげ物の祭壇の上で焼いた (8~10, 19, 26, 31節)。大祭司、または全会衆のために献げる場合、動物の残りの部分はすべて宿営の外に運ばれて焼かれた (11, 12, 21節)。

ささげ物の分配：主の分は、祭壇の上で焼かれたもの、すなわち脂肪、腎臓、肝臓の上の小葉などである。祭司は、族長や一般人が献げたいけにえの肉を食べることが許された。これらのいけにえの血は、大祭司や全会衆のささげ物の場合 (4:5, 6, 16, 17) とは異なり、聖所に持ち込まれることがなかったからである (7:30)。祭司は、また、同じ理由で、5:6, 7, 11に記されているささげ物を食することもできた。上記のささげ物のどの部分も、献げる人のために取っておかれることはなかった。

罪のきよめのささげ物で、その血が聖所の中に持ち込まれたものの死体は宿営の外で焼かれた。私たちの主も、エルサレムの町の外で苦難を受けた後、ご自分の血によって、ただ一度、まことの聖所に入られた (ヘブル9:12)。私たちもまた「キリストの辱 (はずかし) めを身に負い、宿営の外に出て、みもとに行こうではありませんか」(ヘブル13:13) と勧告されている。

[注] 「気づかずに陥った罪」という表現には、それが罪であることを知らなかったということ以上の意味があるようである。おそらく、その罪が故意のものではなく、意図的でもなく、不従順や反抗からなされたものではない、という意味であろう。故意に犯した罪のきよめのささげ物はどこにもなく、死刑が適用されるしかなかった (民数記15:30)。

罪のきよめのささげ物を持って来る者は、自分が弱さや不注意のために意図せずに罪を犯したことを認めていた。そこで、罪の赦しと儀式によるきよめを求めたのである。

罪のきよめのささげ物は、象徴的な意味でキリストを指し示している。キリストは罪を知らない方であつたにも関わらず、私たちのために「罪とされ(た)」(※Ⅱコリント5:21)。それは、私たちが、この方にあつて、神の義となるためであつた。罪のきよめのささげ物とは、私たちの今の状態を取り扱ってくださるキリストを表し、罪のための償いとは、私たちがすでにしまったことに対処してくださるキリストを描く、と指摘する人もいる。

罪を知らない聖なる方を

神は罪ある者とされた、私たちのために。

救い主は死なれた、私たちのたましいを勝ちとるため、

あの恥辱の十字架の上で。

主の尊い血潮だけが有効だった、

私たちの罪を洗い流すのに。

弱さを通して、主は地獄に打ち勝ち、

死を通して、主は勝利を収められた。

ハンナ・K・バーリングガム

(Hannah K. Burlingham)

5:1~13 第5章の1~13節は、代償のささげ物について書かれているように見えるものの(6節参照)、さらに二つの等級の罪のきよめのささげ物に関するものというのが一般的な見解である。代償のささげ物と一緒に扱わないのは、罪のきよめのささげ物の重要な部分である償いについて言及されていないからである(ただし、1~13節が、罪のきよめのささげ物と代償のささげ物の両方に密接に関係していること

は言うまでもない)。

これらのささげ物は、さまざまな階層の人々にではなく、さまざまな種類の罪に対処するものである。1節は、ある犯罪について知りながら、大祭司やさばき人から誓いのことばを聞いても証言を拒否する人のことを説明している。律法の下に生きるユダヤ人として、イエスは祭司の宣誓を受けて、証言された(マタイ26:63,64)。2節は、ユダヤ人が死体に触れて、たとえその時は気づかなくても汚れる、と述べている。3節は、ツアアトや、ただれなどに罹患している人に触れたことによる汚れについて記している。4節は、人が軽はずみな誓いや約束をして、後でそれが果たせない、と分かった場合のことを述べている。

ささげ物本体：これらの罪のためのささげ物は、献げる人の経済力によって、三種類に分けられた。罪のきよめのささげ物として、雌の子羊またはやぎ一匹(6節)、山鳩二羽あるいは家鳩のひな二羽——一羽は罪のきよめのささげ物とし、他の一羽は全焼のささげ物として(7節)、また油を加えたり、乳香を添えたりしていない十分の一エバの小麦粉(11節)である。こうすることで、罪のきよめのささげ物は、どんなに貧しい人でも手の届くものになった。同じように、キリストによる赦しから除外される人は一人もいない。11~13節を読むと、「血を流すことがなければ、罪の赦しは(ない)」(ヘブル9:22)と分かっているのに、どうして穀物のささげ物が罪のきよめのささげ物として罪を贖うことができるのか、という疑問が生じる。その答えは、それが置かれる場所が、祭壇の上で焼かれるささげ物(もちろん血が含まれている)の上なので、穀物のささげ物であっても、血のいけにえの価値が加わっている、

というわけである。

献げる人の務め：まず自分の罪を告白し(5節)、それから罪のきよめのささげ物を祭司のもとに持って来る(8節)。

祭司の務め：雌の子羊またはやぎの場合、4章の罪のきよめのささげ物の指示にしたがって献げる。ささげ物が二羽の鳥である場合は、まず一羽の首をひねり裂いて**罪のきよめのささげ物**として献げ、血を祭壇の側面に少し振りかけ、残りの血を**祭壇の土台**に絞り出す(8,9節)。そして次の鳥を**全焼のささげ物**として青銅の祭壇で焼き尽くす(10節)。ささげ物が小麦粉の場合、祭司はそのひとつかみを取り、全焼のささげ物の祭壇の上で焼く。それを焼くのは、血が流された他のいけにえの上なので、(小麦粉であっても)罪のきよめのささげ物としての性質を帯びるようになった(12節)。

ささげ物の分配：祭壇で焼かれたものはすべて主のものとなる。祭司は残ったものをすべて受け取ることができた(13節)。

E. 代償のささげ物(5:14～6:7)

代償のささげ物(ヘブル語で「アシャーム」^{* (7)})のことが、5:14～6:7で取り上げられている。このささげ物の特徴は、ささげ物をする前に犯した罪の償いがなされなければならないことである(5:16)。

ささげ物をしなければならない罪にはいくつかの種類があった。

神に対する罪過：主に正当に帰属するものを留保すること——十分の一のささげ物、初穂や初子を聖別することなどがそれに含まれる(5:15)。主が禁じておられる何らかの行為を無意識に行うこと(5:17)——

おそらくは償いが必要な行為。「相手が不利益を被ったかどうか知ることができない場合でも、敬虔なイスラエル人は律儀に代償のささげ物を献げた」(“*Daily Notes of the Scripture Union*”)。

人に対する罪過：預かり物や担保の物、あるいはかすめた物について、隣人を欺くこと(6:2)。落とし物を見つけながらそれについて嘘の誓いをすること(6:3)。婚約中の奴隷の娘との不品行(19:20～22)、ツアラウトに冒された人のきよめ(14:10～14)、ナジル人が汚れを受けた場合(民数記6:6～12)にも代償のささげ物が必要とされた。

ささげ物本体：傷のない雄羊一匹(5:15, 18, 6:6)、または、ツアラウトに冒された人(14:12)やナジル人(民数記6:12)の場合には、傷のない雄の子羊。

献げる人の務め：神に対する違反行為があった場合、その人はまず、**五分の一**を加えた償いを祭司のもとに持って来た。それから、(いけにえの)動物を、幕屋の中庭の入り口にいる祭司のところに連れて行き、動物を主に差し出し、その頭の上に手を置いて屠(ほふ)った。また脂肪、あぶら尾、そして肝臓の上の小葉を取り除いた。隣人に対する不法行為の場合も手順は同じであった。どちらの場合も、献げる人は五分の一の罰金を払わなければならない、罪が割に合わないものであり、高い代償が伴うことを思い知らせるものであった。

祭司の務め：青銅の祭壇の周囲に血を振りかけ(7:2)、次に、脂肪とあぶら尾、腎臓、肝臓の上の小葉を祭壇の上で焼く(7:3～5)。

ささげ物の分配：祭壇の上で焼かれたものが主の取り分となった (7:5)。司式をする祭司は、雄羊の皮を受け取った (7:8)。祭司たちは全員、(いけにえの) 動物の肉を食事として分け合った (7:6)。献げた人は、罪のきよめや代償のささげ物には、全く関与できなかった。

すでに述べたように、代償のささげ物を持って来る人は、自分がとった何らかの行為によって他の人が被った損害や被害を償おうとしていたのである。

象徴的に言えば、代償のささげ物は、盗まなかった物を償ったキリストの御わぎの側面を指している (詩篇69:4)。人間の罪によって、神は奉仕、礼拝、従順、そして栄光を奪われた。そして人間自身も、いのち、平安、喜び、そして神との交わりを奪われたのである。私たちの代償のささげ物として、主イエスは、人間の罪によって盗まれたものを回復されただけでなく、それ以上のものを加えてくださった。なぜなら、神はキリストが成し遂げた御わぎのゆえに、罪がこの世に全く入らなかった場合にまさる栄光をお受けになったからである。そして私たちは、アダムが墮落しなかった場合に比べても、はるかに恵まれているのである。

(主は) その神々しい衣を脇に投げ捨て、
神たるご本性を土くれの衣で覆い隠し、
その姿で驚くべき愛を豊かに示し、
ご自分が盗った覚えのないものを返して
くださった。

(作者不詳)

II. ささげ物のおしえ (6:8～7:38)

6:8から7:38に至るこの部分では「ささげ物のおしえ」が紹介されている。多くの

点で、これまでのものと非常に似ている。しかし、それまでの指示はイスラエルの子らに対するものであったのに対し (1:2)、この箇所は祭司に対するものである。

6:8～13 全焼のささげ物のおしえ：
ここでは、祭司が着る衣、また、全焼のささげ物の灰の処理方法、祭壇の火が決して消えることのないようにするための注意について、さらに詳しく述べられている。灰はまず祭壇の東側に置かれ、その後宿営の外のきよい所に運ばれた。

6:14～17 穀物のささげ物のおしえ：
ここでは、祭司自身の分となるささげ物を、会見の天幕の庭で食べなければならないこと、また、それが主への最も聖なるものであるゆえに、パン種を加えてはならない、ということを知る。

6:18 アロンの子らのうち、男子はだれでも、穀物のささげ物を食べることができたが、彼らは聖なる者、すなわち儀式的にきよい者でなければならなかった。これらの祭司は、ささげ物に触れたことにより聖くなったわけではない。触れることによって聖さにあずかることはないが、汚れの場合は、さわるだけで汚れたのである (ハガイ2:11～13)。*⁽⁸⁾

6:19～23 これらの節では、大祭司が朝と夕方、途切れることなく献げなければならない、特別な穀物のささげ物について述べられている。それはすべて、火で焼かれなければならない。

6:24～30 罪のきよめのささげ物についてのおしえ：すでに説明したように、祭司は、罪のきよめのささげ物によっては、その一定部分を食べることが許されていた (レビ記4:22～5:13に記述されている、血が聖所に持ち込まれないもの)。そのささげ物は、会見の天幕の庭で食べなければならない。このささげ物は最も聖なるも

のであったことに注意が必要である。もし一般の民がささげ物の肉に触れた場合は、聖なる者でなければならず、祭司と同じように、儀式上の汚れから自分を清めなければならなかったが、祭司の職務を行うことはできなかった。もしその血が少しでも衣にはねかかったときには、その衣を洗わなければならない。それは衣服が汚れたためではなく、この上なく聖なる血が、聖所から日常生活の場に運び出され、汚されることのないためである。罪のきよめのささげ物の肉を調理する土の器は砕かなければならなかった。土器は多孔質であるため、血を吸収してしまい、後に世俗的な用途に用いられる可能性を防ぐためである。青銅の器は、磨き、水ですすがなければならなかった。それは最も聖い、罪のためのささげ物の一部が、日常のもの、または汚れたものと接触することのないためであった。罪のきよめのささげ物は、代償のささげ物と同様、全焼のささげ物が屠(ほふ)られる場所で屠られなければならなかった。これは祭壇の北側にあたり(1:11)、陰になる場所である。

7:1~7 7章の1~7節は、代償のささげ物についてのおしえの復習であり、その大半は5:14~6:7においてすでに扱われている。

7:8 8節は全焼のささげ物のことで、司式をする祭司には動物の皮を受け取る権利がある、と規定している。

7:9, 10 9節は、穀物のささげ物のうち、司式をする祭司に渡される分を示し、10節はその他の祭司に渡される分を示している。

7:11~18 交わりのいけにえについてのおしえは、7:11~21に記されている。交わりのいけにえには、その動機や目的によって、三つの類型があった。(第一は)

感謝(12節)で、特別な祝福に対して神を賛美するため、(第二は)誓願(すなわち、奉納物)(16節)で、「祈りの中で特別な願いをし、それがかなえられたことに対して、神に対する約束、または誓いを果たす場合。たとえば、危険な旅が守られたことなど」。^{* (9)} (第三に)自発的、すなわち進んで献げるもの(16節)で、「ご自身がどのような御方であるのか、神が示してくださったことに感謝して、自発的に神を賛美するものと思われる」。^{* (10)} 交わりのいけにえ自体はいけにえの動物であったが(3章)、ここを読むと、ある種のパンまたは薄焼きパンが添えられたことが分かる。感謝のいけにえに必要なパンのことは12, 13節に書かれている。ささげ物をする人はそれぞれささげ物の一つずつを取って、主への奉納物として献げるようになっており、司式をする祭司に与えられた(14節)。感謝のための交わりのいけにえの肉は、その日のうちに食べなければならなかった(15節)。それに対して、誓願あるいは進んで献げるもの場合には、最初の日でもその翌日に食しても構わなかった(16節)。二日が過ぎて残ったものはすべて火で焼かなければならず(17節)、そのような肉を食べた場合は、そのために「断ち切られ」た。それは、追放される、またはイスラエルの民としての特権から除外される、という意味である。「このことは、神との交わりは新鮮でなければならず、祭壇の務めから離れ過ぎてはならないことを示している」、とジョン・リード(John Reid)は記す。^{* (11)}

7:19~21 もし肉が、何であれ汚れたものに触れたなら食べてはならず、火で焼かれなければならなかった。儀式的にきよい者だけが、きよい肉を食べることができた。儀式的に汚れた者はだれであろうと、交わりのいけにえからの肉を食べるなら、

民から断ち切られた。

交わりのいけにえのいろいろな部分が、主、あるいは祭司たち、または献げる人に指定されていることから、それが交わりの時であったと分かる。しかし、神は罪や汚れと全く相容れない御方であるため、この祝いの食事にあずかる者はきよくなければならないのである。

7:22~27 最良の部分とされていた**脂肪**は、主のものであった。それは主のために祭壇で焼かれ、食べてはならないものであった(22~25節)。同様に、肉のいのちである血も神のものであり、食べてはならなかった(26,27節)。今日でも多くのユダヤ人がこの食事規定を守ろうとしている。肉が食用に適する、つまり「コーシャー(適正)」であるためには、血が取り除かれなければならない。脂肪の摂取を避けるために、多くのユダヤ人の家庭では動物性脂肪を含む石鹸を使用しない。食器洗いに使うだけでも、皿が非コーシャーになる、と考えているのである。脂肪を食べないという霊的な理由のほかに、マクミレン博士(Dr. S. I. McMillen)が指摘するように、医学的な理由もある。

ここ数年(※本書の初版は1980年)、医学は動物性脂肪の摂取が動脈硬化の重要な原因であることに目覚めている。この脂肪が、動脈の壁の内側に小さな、脂肪分の多いコレステロールの腫瘍を形成し、血液の流れを妨げるのである。この十年間、雑誌、ラジオ、テレビは、動物性脂肪の摂取を減らすことによって、人類にとって最大の死亡原因による被害を減らすことができる、という朗報を伝えていた。医学がそこまで解明したことは喜ばしいが、最先端の研究が、書物の中の書

物(聖書)に、およそ3500年の遅れを取っていることを知れば私たちは驚くのではないだろうか。^{*(12)}

7:28~34 献げる者が、交わりのいけにえの胸の肉を主の前で揺り動かすと、それが祭司たちの受ける分となった。いけにえの右のもも肉は、主の前に(うやうやしく)持ち上げてから、司式をした祭司とその家族に食物として与えられた。

7:35, 36 これらの節は、神が最初にあるアロンとその子らに祭司として油注がれた日以来、胸と右のもも肉は彼らの受ける分であることを繰り返している。前述したように、胸は神の愛情を、ももは神の力を表している。

7:37, 38 この段落は、6:8から始まったささげ物に関するおしえの締めくくりである。神がみことばの中で、ささげ物とその定めについて多くのスペースを割いておられるのは、それらが神にとって重要なものだからである。ここではあざやかなイメージで、御子のご人格と御わざが詳細に描かれている。まるでダイヤモンドのさまざまな切小面のように、これらの予型はどれも、「傷のないご自分を、とこしえの御霊によって神にお献げになった」方(ヘブル9:14)の輝かしい栄光を反映するものとなっている。

ウィグラム女史(Miss F. T. Wigram)は賛美の思いを賛美歌でこう表現している。

あらゆる恵みを宿すキリストは
一度生命を絶たれしも、よみがえりたり。
われら天にて賛美するほかなし。

III. 祭司たちの聖別 (8～10章)

A. モーセによる祭司たちの叙任 (8章)

8:1～5 出エジプト記28、29章において、神はモーセに、アロンとその子らを祭司に聖別するための詳細な指示を与えられた。それを受け、レビ記8～10章では、この指示をモーセがどのように実行したかが書かれている。モーセは、会見の天幕の入り口に全会衆、つまり祭司と民を集めた。それは極めて公的な任命式であった。

8:6～9 モーセはアロンとその子らを近づかせ、彼らを水で洗った。次に、モーセはアロンに、大祭司の盛装をさせた。長服、飾り帯、青服、エポデ、胸当て、ウリムとトンミム、頭にかぶり物、そして聖なる記章を身に付けさせたのである。それは非常に印象的な光景であったに違いない。

8:10～13 ついで、モーセは、注ぎの油を取って、幕屋とその中にあるすべてのものに油注ぎを行った。モーセがアロンの頭に注いだ、というのは、私たちの偉大な大祭司、主イエスの上に、聖霊が無限に注がれる様子のうるわしい描写である。

次に、モーセはアロンの子らに長服を着せ、飾り帯を締め、ターバンを巻いた。

8:14～17 アロンとその子らは、その罪のきよめのささげ物である雄牛の頭に手を置いた。そしてそれは屠(ほふ)られた。(当時も今も) 宗教の最高指導者であっても、共同体の最も目立たない一員と同じく、神の贖いの犠牲を必要とする罪人に過ぎないのである。

8:18～21 モーセは同じように、アロンとその子らのために、全焼のささげ物の雄羊を連れ出し、定められた儀式を執行した。

8:22～29 アロンとその子らのための任職のささげ物は任職のための雄羊(あるいは、もっと文字通りに「(欠けを) 満た

すささげ物」と呼ばれた。それは、血を塗るのに用いる点(23,24節)、また普通は食べるはずの右のもも肉、輪形パン、そして薄焼きパンを焼くという点において、通常の交わりのいけにえとは異なっていた。モーセは式を司(つかさど)ったので、自分の分として胸肉を受けた。

アロンとその子らの耳たぶや、手、そして足に血が塗られたことは、キリストの血が、私たちの〈従順〉や〈奉仕〉、そして〈歩み〉に影響を与えるべきであることを思い起こさせてくれる。

8:30～36 モーセはアロンとその子らに、いけにえの血と、注ぎの油の一部を振りかけた。祭司たちは、交わりのいけにえの肉をパンと一緒に食べるように指示された。

上記の任職の儀式は七日間繰り返され、その間、彼らは会見の天幕の入り口から出てはならなかった。

この章を解説するマシュー・ヘンリー(Matthew Henry)は、一つのものが欠けていることに注目する。

しかし、彼らの叙任のために行われた儀式のすべてがなされても、キリストの祭司職の栄誉と確立のために批准が留保されている点が一つあった。彼らの場合は誓いなしに祭司となったが、キリストの場合には誓いがなされた(ヘブル7:21)という点である。なぜなら、彼らのような祭司や祭司職は永続しないのに対し、キリストの祭司職は永久に不変だからである。^{*(13)}

B. アロンによるささげ物 (9章)

9:1～4 アロンとその子らは、八日目に公務を開始した。まず彼らは自分たちの

ために、若い雄牛を罪のきよめのささげ物として、そして雄羊を全焼のささげ物として献げるようになった。次に彼らは民のために、罪のきよめのささげ物として雄やぎ、全焼のささげ物として一歳の子牛と子羊、交わりのいけにえのための雄牛と雄羊、そして穀物のささげ物を献げなければならなかった。

9:5~23 全会衆は天幕の前の主の御前に近づいた。アロンは、罪のきよめのささげ物、全焼のささげ物、民のささげ物、穀物のささげ物、交わりのいけにえ、そして奉獻物として主に向かって揺り動かすささげ物に関するモーセの指示（5~21節）をすべて果たすと、民に向かって両手を上げ、彼らを祝福した（22,23節）。

9:24 すると、天幕の至聖所から火が出て来て、青銅で作った祭壇の上の全焼のささげ物を焼き尽くした。これは神がそのささげ物を受け入れたことを示している。この主の火は全焼のささげ物の祭壇の上で、絶え間なく燃やされなければならなかった。

C. ナダブとアビフの冒瀆（10章）

10:1~3 アロンの子ナダブとアビフは、異なる火（※英訳「不浄な火」）、おそらくは青銅の祭壇から取ったのではない火で香を焚いた。祭壇はカルバリを表していることから、あたかもキリストの贖いの御わざによらない方法で神に近づこうとしたに等しい。至聖所から火が出て、聖所の金の祭壇のそばに立っていた彼らを焼き尽くした。モーセがアロンに警告したのは、どんな不平も、結局は神の正しい取り決めに対する反逆行為になる、ということである。

10:4~7 ミシャエルとエルツァファンが二人の遺体を幕屋の前から宿営の外の場所に運び出してから、モーセは、アロンと、後に残された二人の息子たちに、イス

ラエルの全家族が神の怒りが燃え上がったことを泣き悲しんでいる間は、嘆かずに幕屋の中にとどまっていなければならない、と言った。

10:8~11 幕屋の中でぶどう酒や強い酒を飲んではならない、という命令があることから、異なった火を献げたとき、ナダブとアビフは酩酊していたのではないかと推測する人もいる。

10:12~18 モーセは、アロンと、生き残った息子のエルアザルとイタマルに、穀物のささげ物（12,13節）と、奉獻物の胸肉と奉納物のもも肉（14,15節）を食べるように命じた。モーセが民の罪のきよめのささげ物の雄やぎを捜した際、アロンの子のエルアザルとイタマルが、聖なる所で食べることをせず、それらがすでに焼かれてしまっていたことを知った（ことによれば、彼らは自分の兄弟たちに降りかかった神の怒りを恐れたのかもしれない）。もし罪のいけにえの血が聖所の中に携え入れられたなら、そのいけにえは焼かれなければならないが（6:30）、そうでない場合は食べるようになっていた（6:26）。この場合は、血が聖所の中に携え入れられたわけではないので、彼らはその肉を食べるべきだったことを、モーセは彼らに気づかせたのである（16~18節）。

10:19, 20 モーセの叱責に対してアロンはこう説明した。彼ら（二人）は罪のきよめのささげ物と全焼のささげ物を、決められていたとおりに行ったが、ナダブとアビフの上に、主の厳しい懲罰が下ったことを考えると、自分が罪のきよめのささげ物を食べていたら主の御心になかったのでしょうか、と。モーセはその弁解を受け入れた。

第10章で、祭司職に関する部分は終わりとなる。

IV. きよいものと汚れたもの (11~15章)

次の五つの章は、儀式上のきよさと汚れに関する問題を扱っている。ユダヤ人にとっては、たとえ道徳的に間違っていないくても、ユダヤ教の儀式から締め出される行為があった。汚れを受けた者は、きよめられるまで、儀式上不適格とされた。聖なる民は、生活のあらゆる領域で聖くなければならない。神は食物さえも用いて、きよいものと汚れたものの違いを例示されたのである。

A. きよい食物と汚れた食物 (11章)

11:1~8 きよい動物とは、完全にひづめが割れていて、反芻するものであった。「ひづめが分かれ、ひづめが割れているもの」(※英訳)という表現は、同じことを二通りに言っているだけ、という印象を受ける。しかし、この表現は、ひづめが完全に割れていなければならないことを意味している。きよい動物とは(去勢された)雄牛、畜牛、羊、やぎ、鹿などである。汚れた動物とは、豚、らくだ、岩だぬき、野うさぎなどである。これを霊的に適用すると、キリスト者は神のこばを熟考(反芻)し、(世と)分離した歩み(割れたひづめ)をしなければならないということである。

しかし、それと同時に、冷蔵の方法がないに等しい時代、また畜産で抗生物質を使うこともなかった時代に、病気を媒介する可能性のある肉を禁止することによって、神はご自分の民の健康を守っておられたのである。

11:9~12 きよい魚とは、ひれと鱗(うろこ)の両方がある魚のことである。鯖(さば)、鰻(うなぎ)、そして貝などは汚れたものだった。鱗は、敵対する世からキリスト者を守

る鎧(よろい)を、ひれは、キリスト者が世に打ち負かさねずに進めるようにする神からの力を象徴する、と解釈されることが多い。

11:13~19 他の生き物を捕食する鳥は汚れたものである。たとえば、鷲(わし)、鷹(たか)、禿鷹(はげたか)、禿鷲(はげわし)、こうもり、などである(こうもりは鳥ではないが、「鳥」と訳されているヘブル語は英語より意味が広く、「飛ぶもの」という意味である)。

11:20~23 20節から23節では、ある種の、羽があって飛ぶ昆虫が扱われている。足のほかに跳ね足を持っているもの、すなわち、いなご、毛のないいなご、コオロギ、バッタの類だけがきよいものであった。

11:24~28 上記の汚れた生き物の死骸に触れた場合は、夕方まで汚れた者となる。特筆されているのは、足の裏のふくらみで歩く動物で、猫、犬、虎、熊などが含まれる。

11:29~38 次に、這う生き物として、もぐら、跳びねずみ、大トカゲ、ヤモリ、ワニ、トカゲ、砂トカゲ、カメレオンが挙げられている。これらの死骸に触れた場合は、夕方まで不浄となった。もしこれらの生き物の死骸が器の上に落ちたなら、その器は水で洗わなければならない、夕方まで不浄となった。ただし土製の容器は砕かなければならなかった。土の器の中に入った食べ物汚れたものとなり食べてはならない。(しかし)二つの例外があった。すなわち、水が流れ出る泉は、たとえ、これらの動物の死骸と接触があっても汚れたものとはならない。また、蒔かれる種も、水に浸されない限り、汚れることにはならなかった。

11:39~40 屠殺された場合を除き、きよい動物が死んで、その死骸に触れたり、知らずにそのような肉を食べたりした場合、

その人は夕方まで汚れた者となった。その衣服は洗う必要があった。

11:41~47 41~43節は、這う虫、蛇、げっ歯類（※ねずみやりすの類）、そして昆虫のことである。それらを食べた者は儀式上汚れた者となった。きよい生き物と汚れた生き物に関する律法を与えることによって、神はご自身の聖さと同時に、聖なる者となる必要があることを民に教えておられたのである（44~47節）。

マルコ7:18, 19で、主イエスは、すべての食物は儀式上きよい、と宣言された。またパウロも、食物はみな感謝して受けるなら、拒むべき物は何一つない、と教えている（I テモテ4:1~5）。とはいえ、汚染されたもの、文化的に受け入れがたいもの、そして消化器官的に好ましくないものまで含まれる、ということではない。

B. 出産後のきよめ（12章）

12:1~4 12章は、出産に伴う汚れについて扱っている。男子を出産した女性は、月経による不浄の期間と同じく、七日の間汚れた状態になった。八日目に、男子は割礼を受けた（3節）。八日目は、血液の凝固という点から見ると最も安全な日である。今日、血液凝固の問題は、ビタミンKを注射することによって解決されている。その後、彼女はさらに三十三日間、家の中にこもり、聖なるものに触れたり、聖所、すなわち幕屋を囲む中庭に入ったりしてはならなかった。

12:5 赤子が女の子だった場合、母親は二週間汚れた者とされ、その後さらに六十六日間家から出てはならなかった。

12:6~8 きよめの期間が終わると、母親は、全焼のささげ物として一歳の子羊一匹と、罪のきよめのささげ物として、家鳩のひなか山鳩を一羽、持って来るように

命じられた。もし貧しくて、羊を買う余裕がなければ、二羽の山鳩か、二羽の家鳩のひなを、一羽は全焼のささげ物、もう一羽は罪のきよめのささげ物として持って来ることができた。主の母が、二羽の鳥を携えて来た（ルカ2:22~24）のは、イエスが貧しさの中にお生まれになったことを示している。

赤子の誕生が不浄と関係するのは不思議に思えるかもしれない。なぜなら、結婚が制定されたのは罪が世界に入る前のことであり、また、聖書は結婚が聖なるものであると教え、さらに、神は人間に、子孫を増やすように命じておられるからである。この汚れというのは、おそらく、主を例外として、私たちがみな、咎ある者として生まれ、罪ある者として母の胎に宿ったことを想起させるためであろう（詩篇51:5）。赤子が女兒の場合、不浄の期間が長引いたのは、男が女より先に創造され、女は男のために造られ、女は男に対して服従の立場（本来的に劣っている、ということではない）が与えられ、最初に罪を犯したのは女である、ということを思い出させる意図があったためではないかと思われる。

ウィリアムズ（George Williams）は、このような制定がなされたのは、体力が落ち、感染の危険が最も高い時に、母親を訪問者から守ろうとする神の優しいご配慮と見ている。^{* (14)}

C. ツアラアトの診断（13章）

13章はツアラアトの診断に関する章で、14章はそのきよめに関わる章である。そもそも聖書の言うツアラアトが何であるかについては、見解が分かれるところである。聖書に登場するツアラアトに冒された人々は、通常、自分で移動でき、奇形でもなく、ツアラアトが全身に及ぶと無害となり、時

には治癒することもあったとされている。

ある意味で、祭司は医者のような役割を果たしていた。これは、精神と肉体の密接な関係をさりげなく思い起こさせる意味があったのかもしれない。人間は三つの部分（※霊とたましいとからだ。Ⅰテサロニケ 5:23）から構成されており、ある部分が影響を受けると、全体も影響を受けるのである。

13章は、だれもが認めるように、難しい部分である。なぜなら、ツアラアトと非ツアラアトの病気、家屋や衣服のツアラアトについて、専門的な説明がなされているからである。ヘブル語の学者であると同時に、医学も学んだR・K・ハリソン博士（Dr. R. K. Harrison）は、「このヘブル語が示すすべての条件を網羅する訳語はどこにもない。しかし、私たちがハンセン病と呼んでいる病気が含まれるような意味の広がりがあることは確かである」と述べている。^{* (15)}

ハリソン博士は、このヘブル語とそのギリシア語訳（英語のleprosy, leper, leprousの語源）について、すでに知られている事実を次のようにまとめている。

ヘブル語の「ツアラアト」は、「皮膚の病変」を意味する語根に由来し、特定のものを描写するというより、むしろ包括的なものである。旧約聖書の用法では、建物の壁に生じた鉱物性のこぶや、場合によっては、建物の骨組みに発生する乾いた腐れ、布に生じるかびや白かびを含む意味に拡張されている。七十人訳（※旧約聖書のギリシア語訳）で、ヘブル語をギリシア語のレプラ（lepra）に訳したのは、その語自体の性質も意味もかなり曖昧だったようである。ギリシア医学の

著述家たちはこのことばを、皮膚の表面がはがれやすく、うるこ状になる病気を表すことばとして使っていたが、それに対しヘロドトス（Herodotus）はレプラをレウケ（leuke）と呼ばれる重篤な病気に関連して言及している。レウケとは、皮膚の発疹の一種で、象皮病（ギリシア語でelephantiasis）と同じであった、と思われる。このことから、現代の臨床医学で言うハンセン病と共通点が多いことが分かる。^{*(16)}

13:1~3 最初の段落では、祭司が、聖書にあるツアラアトの症状が出ているかどうかを確認する様子が詳しく説明されている。

13:4~8 次に、ツアラアトが疑われる場合に取るべき適切な措置が詳細に述べられている。その人は七日間隔離されなければならない。七日目にもし患部が広がっていないなら、さらに七日間隔離される。病気が止まったようであれば、祭司は彼をきよいと宣言する。（しかし）二度目に調べた後で、皮膚の吹き出物が広がっているなら、祭司は彼を汚れていると宣言する。

13:9~11 ツアラアトが古いものであったり、または慢性的であったりする場合、祭司は彼を汚れていると宣言する。

13:12, 13 不思議なことに、皮膚全体が白くなっている場合は、病気の活動が終わったとして、祭司は患者をきよいと宣言した。

13:14, 15 生肉が現れたとき、祭司はその人を汚れていると宣言した。それはツアラアトであった。

13:16, 17 ツアラアトの場合でも、生肉が癒されて白く変わっているなら、その場合も、患者はきよいと宣言される。

13:18~23 腫物の場合に下される診断には、三つの可能性があり、それらが、次に示されている。祭司が調べて、もしその腫物が皮膚よりも低く見え、その毛が白く変わっていることが明らかであれば、祭司は患者が汚れていると宣言しなければならない（18~20節）。七日間、試験的に隔離されている間に、腫れが広がっていれば、それはツアラアトであった（21,22節）。それが広がっていなければ、患者はきよいと宣言された（23節）。

13:24~28 火傷（やけど）が原因と思われるツアラアトの場合について詳しく説明されている。その症状から見てツアラアトの患部であることが明白な場合、祭司はその人を汚れていると宣言する（24,25節）。七日間の精査の結果、その症状が広範囲に及んでいることが明らかであれば、それはツアラアトである。それが単なる火傷（やけど）による腫れ物であれば、ツアラアトではない（28節）。

13:29~37 頭か、ひげに疾患がある場合のことが、次に考察されている。男あるいは女で、その症状からツアラアトであることが明白な場合、その人は汚れているとの宣言を受けなければならない（29,30節）。はっきりしない場合は（31~37節）、七日間隔離された。もしその状態が広がっていなければ、毛をそり落として、さらに七日間待った。もしその疥癬（かいせん）が広がっていれば、その人は汚れている。疥癬（かいせん）の進行が止まっていれば、彼はきよい。

13:38, 39 男も女も、体の皮膚に白く光る斑点があるなら、儀式上はきよいと宣言される。ハリソン（Harrison）は、幾分専門的に、「皮膚に生じたモットリング（まだら状の模様）」と訳している。^{* (17)}

13:40~44 普通のはげ（脱毛症）は、

ツアラアトによるものとは区別される。

13:45~46 ツアラアトに冒された者は悲惨である。彼は、イスラエルの宿営の外に追いやられ、自分の衣服を引き裂き、その髪の毛を乱していなければならなかった。人が近づいて来るときには、唇または口ひげをおおって、「汚れている、汚れている」と叫ばなければならなかった。ここに、初期の予防医学の一例を見ることができる。隔離する、というのは、感染の拡大を防ぐための医療行為として、だれもが認めるものである。

13:47~59 衣服に生じたツアラアトとは、おそらく、一種のかび、または白かびが羊毛、または亜麻の布、または革製の衣服に発生したものことであろう。ハリソン（Harrison）は、そのように汚れてしまった衣服を処分する賢明さを次のように説明している。

かびとは、死んだり、腐敗が始まった
りした動物や植物から発生する菌類のこ
とで、さまざまな陰影のある斑点として
現れる。^{* (18)}

さらに、ハリソンはそれに霊的な適用を
施している。

かびの発生により、その個体全体が影
響を受ける。それは、原罪の汚点と同じ
で、人間の人格のすべての領域に及ぶ。

^{* (19)}

ヤハウエの民は、内側だけでなく、外側
も清く、汚れのない者でなければならない。

ああ、私は願う、

わが神をほめ称える心を。
 私のために、惜しげもなく流された
 御血に頼る心を。
 そして、謙虚で、慎ましく、悔いた心を。
 信じることをやめない、真実できよい心
 を。
 その心があれば死も生も引き離すことは
 できない、
 その心に住まわれる主から私を。

チャールズ・ウェスレー
 (Charles Wesley)

D. ツアラアトのきよめ (14章)

14:1~7 ここでは、ツアラアトに冒された者が癒された後のきよめの儀式が紹介されている。まず、彼は宿営の外で祭司の検査を受ける。治っていれば、二羽の生きているきよい小鳥と、杉の枝と緋色の撚り糸とヒソプを献げた。(ヒマラヤ) 杉とヒソプは、非常に高い木と、見栄えのしない草であることから、世界のすべての人間とすべてのもの、最も高いものから最も低いものの上に臨む神のさばきを表している。緋色はいざや1:18を見ると罪を連想させるので、罪に対する神のさばきを暗示しているのかもしれない。小鳥のうちの一羽は、湧き水の上で屠(ほふ)られ、もう一羽は、杉の枝と緋色の撚り糸とヒソプとともに、殺された小鳥の血の中に浸された。ツアラアトからきよめられる者は、その血を七度浴びて、きよいと宣言された。その後で、生きている小鳥は野に放たれた。

多くの点で、ツアラアトは罪を表す型である。ツアラアトは、人を汚れた者とし、神の宿営や神の民から締め出し、患者を惨めにするからである。それゆえに、ツアラアトからきよめられるには血(キリストの血)と湧き水(聖霊による新生)を自分に

用いることが必要だった。今日、罪人が悔い改めと信仰をもって主に立ち返るなら、キリストの死と復活(二羽の小鳥がそれを表す)は、その人のためであつたと見なされる。御霊の力によって血が振りかけられたので、神の目から見て、その人は清くされているのである。

千歳(ちとせ)の岩よ わが身を囲め。

裂(さ)かれし脇の 血潮と水に
 罪も汚れも 洗いきよめよ。

オーガスタス・トブラディー
 (Augustus M. Toplady)

14:8~20 きよめられたツアラアトの患者は、自分の衣服を洗い、その毛をみな剃り落とし、水を浴びる(8節)。そうして後、彼は宿営に入ることができるが、七日間は自分の天幕に入ることはできない。七日後に彼は再び自分を洗い、毛を剃り落とし、きよいと宣言される(9節)。八日目に彼は、主にささげ物を持って来る(10, 11節)。代償のささげ物(12~18節)、罪のきよめのささげ物(19節)、全焼のささげ物(20節)である。祭司は、ツアラアト患者の耳、手、そして足に血を塗る(14節)。これは、神のみことばを〈聞く〉こと、神の御心を〈行う〉こと、そして、神の道に〈歩む〉ことを表している。

14:21~32 もし、きよめられたツアラアト患者が貧しくて、要求された動物をすべて持って来ることができない場合は、山鳩二羽か家鳩のひな二羽を、一羽は罪のきよめのささげ物、他の一羽は全焼のささげ物にすることが認められたが、その場合でも、雄の子羊一匹を代償のささげ物として持って来なければならなかった。

代償のささげ物、罪のきよめのささげ物、

そして全焼のささげ物のいずれの場合にも穀物のささげ物が添えられた。

14:33～53 最後に、家に生じるツアラアトを見分けるための律法が示されている。これらの律法は、民がついにカナンに到達し、天幕というよりは、定住する家で暮らす時に適用されるものである。家の中の「ツアラアトに冒された箇所」とは、おそらく、ある種のかび、または白かび、あるいは、乾燥した腐れのことであろう。主は、祭司がその家に入る前に、その家を空けるよう命じられた。これはすべて家にあるものが汚れることのないため、または七日間その家を閉ざしておかないで済むためである(36,38節)。最初は、家の中の冒された箇所がある石だけが取り除かれた。しかし、ツアラアトが相変わらず発生するようであれば、その家は取り壊された(39～45節)。もしツアラアトの進行が止まれば、祭司はツアラアトの患者のきよめと同様の手順で儀式を執り行った(48～53節)。

14:54～57 この段落は13章と14章の要約である。

E. 漏出を病んだ後のきよめ (15章)

15:1～18 15章は、自然のものか、病気によるものかを問わず、人体からの漏出による汚れを扱っている。1～12節は、淋病のような病気に起因する、男性の体からの漏出を指していると思われる。13～15節には、きよめの儀式が書かれている。16～18節は、意図せず(16,17節)、または意図的に(18節)、精を漏らした場合を指している。

15:19～33 19～24節は、女性の、通常の月経周期について論じている。この場合、ささげ物は何も必要なかった。25～30節は、女性に血の漏出があるが、月経とは関係なく、したがって、異常である場

合について述べている。31～33節は本章のまとめである。

V. 宥めの日 (16章)

ユダヤ暦で最も重要な日と言えば、宥めの日(ヘブル語で「ヨム・キップール」)である。それは、大祭司がいけにえの血を持って至聖所に入り、自分と民の贖いをする日であった。この日は第七の月の十日、つまり仮庵の祭りの五日前に当たる。宥めの日とは、通常、ヤハウエの祭り(feasts)の一つに挙げられるが、実際は断食(fasting)の時であり、厳粛な時だった(23:27～32)。

この章では、至聖所が聖所とよばれ、聖所が会見の天幕と呼ばれていることを覚えておくといよい。

16:1～3 アロンの二人の息子、ナダブとアビフの冒瀆(ほうとく)が、この指示の背景にある。もし大祭司が宥めの日ではない日に至聖所に入ったなら、彼らと同じような運命をたどることになる。その日には、罪のきよめのささげ物として若い雄牛の血を、また全焼のささげ物として雄羊の血を携えて入らなければならない。

16:4～10 その順序は簡単ではないが、儀式の大まかな流れは次の通りである。

まず、大祭司は水を浴び、白い亜麻布の装束(4節)を身に着けた。その前段階として彼は、雄牛と雄羊とを幕屋に携えて来た。これらを自分と自分の家族のために献げるが、雄牛は罪のきよめのささげ物として、雄羊は全焼のささげ物として、である(3節)。彼はまた、民のために献げる雄やぎ二匹と雄羊一匹を連れて来る。やぎは罪のきよめのささげ物となり、雄羊は全焼のささげ物となる(5節)。二匹のやぎを会見の天幕の入り口に立たせ、くじを引く。一つのくじは主のため、もう一つのくじは

アザゼルのやぎのためである(7,8節)。「アザゼルのやぎ」とは、「放たれたやぎ」という意味である。

16:11~22 それから罪のきよめのささげ物である雄牛を、自分と自分の家族のために屠(ほふ)る(11節)。次に、火皿いっぱいの炭火と、両手いっばいに、粉にした香り高い香とを取り、至聖所の中に持って入る。そこで香を火にくべ、香から出る雲が、あかしの箱の上の「宥めの蓋」を覆うようにする(12,13節)。彼は全焼のささげ物の祭壇に戻り、雄牛の血を取り、至聖所に持って入り、七度その血を「宥めの蓋」の上とその前に振りまく(14節)。彼は雄牛の血にしたように、罪のきよめのささげ物として選ばれたやぎ(8節)を屠り、その血を「宥めの蓋」の上とその前にかける(9,15節)。これは、イスラエル人の汚れと、その背き、すなわちそのすべての罪のために、至聖所のための宥めとなった(16節)。血を振りまくことによって、会見の天幕と、全焼のささげ物のための祭壇の宥めを行う(18,19節)。ただし、このあたりの詳細は明らかではない。宥めは至聖所から始まり、それから外へと広がって聖所に至り、最後には青銅の祭壇に達する(15~19節)。アザゼルのやぎ(8節)の頭に両手を置き、民の罪を告白した後(10,20,21節)、係りの者がやぎを荒野に放つ(21,22節)。二匹のやぎは、贖いの二つの側面をそれぞれ象徴している。すなわち「神のご性質と聖さにかなうものと、罪人が罪を取り除かれるという必要を満たすもの」である。^{*(20)}

生きているやぎの頭にアロンが両手を置く、というのは、イスラエルの罪(および私たちの罪)がキリストの上に置かれ、永遠に取り除かれる様子を示している(21節)。

讃美歌作者はそれを次のように表現した。

わが罪はイエスの上に置かれた、
汚れなき神の子羊の上に。
イエスはそのすべてを担い、わたしを解放された、
その忌まわしい罪の重荷から。
わが過ちはイエスが担い、
限りなく尊いその血潮により、
深紅の汚点は洗いきよめられた。
だから、今はもう
ひとつのしみすらどこにもない。

ホレイシャス・ボナー
(Horatius Bonar)

16:23~33 大祭司は聖所、おそらくは洗盤で水を浴びてから、栄光と美に輝く衣服を着た(23,24節)。ユダヤの伝承によれば、白い亜麻布の装束は二度と着られることはなかったという。次に大祭司は、二匹の雄羊を、一匹は自分のため、そしてもう一匹は民のために全焼のささげ物として献げた(24節)。二匹の罪のきよめのささげ物の脂肪を祭壇の上で焼き、その皮と肉と汚物は宿営の外で焼く(25,27節)。普通なら祭司のものになる全焼のささげ物の皮でさえ(7:8)、焼かれなければならなかった。ユダヤ教のタルムードによれば、大祭司は夕方はいけにえを献げてから、香炉を持ち出すために至聖所に入ったという。贖いの儀式において、民は自分の罪を告白し、仕事をするを差し控えた(29節)。上記のことから分かるように、大祭司は少なくとも四回至聖所に入ったことになる。しかしこれは、ヘブル9:7~12と矛盾してはいない。その箇所で言わんとしているのは、大祭司が入ることができたのは、一年のうちの日だけであった、ということだ

からである。

16:34 この日にどれだけ厳粛な儀式を行っても、罪に十分な対処をするに至らなかったことは、「年に一度」ということばから明らかである。「雄牛とやぎの血は罪を除くことができ（ない）」（ヘブル10:4）からである。それと鮮やかな対照をなすのがキリストの御わざである。それによって人の罪は、たった一年間覆われるというのではなく、跡形もなく取り除かれるのである。

アイザック・ウォッツ（Isaac Watts）はそれをこのように表現した。

ユダヤの祭壇で屠られた動物のすべての血も
良心の咎めに安らぎをもたらすことはできず
その汚れを洗い流すこともできない。

しかし、天からの子羊キリストは
私たちすべての罪を取り除いてくださった。
いけにえの名は高貴さにおいてまさり
血潮は豊かさにおいてまさる。

VI. ささげ物に関する律法（17章）

17:1～9 注解者たちは、1～9節に関して異なる見解を持っている。

- (1) これらの節は、たとえ食用の動物であっても、幕屋に供えずに屠ることを禁じている。
- (2) 野外やその他の、幕屋以外の場所では、いけにえの動物を献げることは禁じられている。
- (3) 民が荒野にいる間は、いけにえの動物を食用に屠ることは禁じられた。これは、民が約束の地に到達した時

に変更された（申命記12:15）。

キャンベル・モルガン（G. Campbell Morgan）はこのように説明している。

「やぎの偶像」と訳されたヘブル語は、直訳すれば「毛むくじらのもの」という意味である。欽定訳（KJV）は、イザヤ13:21および34:14は、「サテュロス（※酒神バックスに従う森の神）」という訳語を充て、米国標準訳（ASV）は、「野やぎ」としている。サテュロスは想像上の存在で、半身がやぎ、半身が人間で、悪魔のような性質がある。エジプトでは、半身がやぎのパーン（Pan）が礼拝されていた。この語が使われているということは、イスラエルの民が、エジプトで、この偽りの神を礼拝していたという事実を認めているかのようである。^{*(21)}

17:10～14 血を食べることも同様に禁じられた。血は贖いのためであり、栄養をとるためのものではないからである。「肉のいのちは血の中にある」（11節）。贖いの背後には、いのちにはいのち、という原則がある。罪の報酬は死であり、死の象徴は血を流すことであるから、「血を流すことがなければ、罪の赦しは（ない）」とされているのである。赦しがもたらされるのは、罪に対する処罰が免除されたからではなく、それが、いけにえに転移されたからであり、そのいのちの血が注ぎ出されたからである。11節はレビ記の鍵となる節の一つで、暗記しておく必要がある。動物が屠（ほふ）られると、その血は直ちに抜かれた。事故で死んだ動物でも、その血がすぐ抜かれなければ、汚れたものとなった。

17:15, 16 これは、血が抜かれていない動物の肉を、知らずに食べてしまった

人のことを指している。そのような場合に備えて、きよめの規定が用意されていた。しかし、もしこの規定を拒むなら、罰せられなければならないかった。

VII. 個人の行動に関する律法 (18～22章)

A. 性的純潔に関する律法 (18章)

18:1～5 18章が扱うのは、イスラエル人がエジプトですっかり馴染んでいた、種々の不道徳な結婚のあり方についてである。それらはカナン¹の地において、完全に破棄すべきものであった。

18:6～18 ここで「裸をあらわにする」という表現は、性的関係を持つことを意味している。6節では一般的な原則が述べられている。近親者との結婚は禁じられた。母 (7節)、継母 (8節)、姉妹または異父・異母姉妹 (9節)、孫娘 (10節)、継母の娘 (11節)、おば (12, 13節)、おじ (14節) などとの結婚である。現代医学が確証している通り、血族同士が結婚すると、親の持つ身体的、精神的な弱さが、子どもに一層大きく現れる場合がある。しかし、ここでの禁止は、血縁によらない親類の関係、つまり、姻戚関係によって親族となった者にまで及ぶ (14～16節)。この後者の規準の根拠として時々挙げられるのは、創世記2:24の「一体」ということばである。それは、緊密で永久的な家族関係を示すものであるゆえに、姻戚関係上、親族となった者との結婚も近親相姦とみなされるのである。人は (息子の) 嫁や義理の孫にあたる娘と結婚してはならないし (17節)、ハンナとペニンナの場合のように (I サムエル1:1～8) 女性をめとり、その姉妹と張り合わせてはならない (18節) (※あるいは、ラケルとレアのことか。創世記29:31～30:24)。16節はのちに、申命記25:5で修

正されている。子どもを残さず死んだ人の場合は、その兄弟が、やもめとなったその女と結婚することが義務づけられた。これはレビレート婚として知られているものである。

18:19～21 月経期間中の女との性交は禁じられた。隣人の妻との姦淫も固く禁じられた。そのほかに禁じられたのは偶像モレクの礼拝に時々関係する恐るべき儀式、すなわち生まれたばかりの赤子に火の中をくぐらせる (II 列王記23:10、エレミヤ32:35) 儀式である。モレクはアンモン人の神であり、その神像はベン・ヒノムの谷にあった。フランシス・シェーファー (Frances Schaeffer) はその儀式の様子を以下のように述べている。

一つの言い伝えによれば、真鍮でできた神像の後ろに開口部があり、内側に火がつけられると、親は一人ずつ前に進み出て、自らの手で自分の長子を、白熱状態になったモレクの両腕に置いたという。この伝承によると、親が感情を表すことは許されず、モレクの腕の中で死んでいく赤子の叫び声が聞こえないように、太鼓が鳴らされたとのことである。*(22)

18:22, 23 男色や同性愛は禁じられた。動物との性交ももちろん禁じられた。神が、同性愛を禁じられたのは、現代のエイズの流行を予見し、そこから人々を救い出そうとされたからかもしれない。

18:24～30 1～23節は、民に何をしてはならないかを教えているのに対し、24～30節はなぜそのようなことをしてはならないかを教えている。不道徳と偶像礼拝が、同じ章で一緒に扱われているのは偶然ではない (20章も参照)。人の道徳心と

は、その人の神学や、神概念の産物である。カナン人とは、偶像礼拝が生み出す退廃を絵にしたようなものであった (24~27節)。イスラエルの民は、その地を占有した際、ヤハウエの命令のもと、これらの人々を何千となく殺した。24~30節に詳述されているようなカナン人の道徳的退廃を考えるなら、神がなぜ彼らをそのような厳しい目に遭わされたのか理解できないことはない。

B. 日常生活に関する律法 (19章)

19:1~25 すべての聖さの土台は「あなたがたの神、主であるわたしが聖だからである」(2節)、ということばの中にある。民が行動する上でのさまざまな律法がここに定められている。

母と父は敬われなければならない (3節)。——第五戒

神の安息日は守られなければならない。——第四戒

偶像礼拝をしてはならない (4節)。——第二戒

交わりのいけにえのささげ物を決して三日目に食べてはならない (5~8節)。

畑を収穫する際、所有者は貧しい人と在留異国人のために落ち穂を残しておかなければならない (9,10節)。畑の作物やぶどうは例として挙げたのであって、この二種類がすべてではない。

窃盗、詐欺、虚言をしてはならない (11節) ——第八戒

神の御名によって誓っておきながら、偽りを言うてはならない (12節)。——第三戒

だまし取ったり、力づくで奪ったり、賃金を払わずに手元においたりしてはならない (13節)。

耳の聞こえない人を軽んじたり、目の見

えない人をつまずかせたりする者は罰を免れない (14節)。民はお互いを尊重して、ヤハウエへの敬愛を示すべきである (25:17)。障がい者 (14節)、老人 (32節)、貧しい人 (25:26, 43) はみな、神を畏れる者から、親切に扱われるべきである。

裁判において (一方を) ひいきするようなことがあってはならない (15節)。

隣人を誹謗中傷したり、隣人のいのちを危険にさらしたりすることがあってはならない (16節)。

決して兄弟を憎んではならない。同胞をよく戒めなければならない。そうすれば、彼のゆえに罪責を負うことはない (17節)。問題があれば、隠し立てをせず、率直に対処するべきである。さもないとそれが心の中で敵意となり、罪となって外に現れかねないからである。

復讐心や恨みを抱いてはならない (18節)。18節後半の、あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい、というのは、律法全体の要約である (ガラテヤ5:14)。イエスは、それが二番目に大切な戒めである、と言われた (マルコ12:31)。最大の戒めは申命記6:4,5に記されている。

19節は、一般に、ラバが生まれるような家畜の交配を禁じている、と理解されている。ここで言う家畜とは、動物一般のことである。

また、畑に異なった種類の種を蒔くことや、麻と羊毛の混じった衣を着ることも禁じられた。神は分離の神であり、このような具体的な例を用いて、罪と汚れから自分を分離することを民に教えておられるのである。

もし男が、別の男と婚約している女奴隷と不義の関係を結んだ場合は、二人とも罰せられ、男は主への代償のささげ物を持って来なければならなかった (20~22節)。

カナンの地に定住しても、イスラエル人は三年の間は、果樹から実を取ってはならないことになった。四年目にその実は主へのささげ物となり、五年目にはその実を食べることができた(23～25節)。四年目の実はレビ人たちのものとなったか、ある注解者が示唆するように、第二の十分の一のささげ物として主の前で食されたとも考えられる。

19:26～37 その他に禁じられた行為としては以下のものがある。血抜きをしない肉を食べること(26節)、占いをすること(26節)、偶像礼拝の慣習に則って髪を剃ること(27節)、死者を悼むために、体に傷をつけること(28節)、異教徒のように、入れ墨をすること(28節)、異教の礼拝でよく行われているように、自分の娘を売春婦にすること(29節)、安息日を破ること(30節)、霊媒や口寄せに伺いを立てること(31節)である。

老人には敬意を示すべきである(32節)。見知らぬ人は親切にもてなすべきである(33,34節)。そして、誠実な商売をすることが命じられている(35～37節)。

C. 重大な違反に対する処罰(20章)

この章には、18章と19章に列举されているいくつかの違反行為に対する処罰が述べられている。モレクへの供え物として、子どもに火をくぐらせた者は、石で打ち殺されなければならない(1～3節)。もし民が彼を殺さないなら、神がその人とその家族を滅ぼされる(4,5節)。また、霊媒や口寄せに伺いを立てた者(6節)、自分の父や母を呪う者(9節)、姦淫した男や女(10節)、父の妻と近親相姦を行った者(11節)、あるいは息子の妻と寝た者(12節)、男色を行った者(13節)にも死刑が宣告された(このような、不道徳な性的関係が

あった場合は、両者ともに殺されなければならない)。人がもし女だけでなく、その娘とも不道徳な性的関係を持った場合は、違反した三人とも火で焼かれなければならない(14節)。人と動物との間の性的倒錯は死に値する罪であり、人も動物も殺されなければならない(15,16節)。死刑(または、追放という見方もある)が宣告されるのは、自分の姉妹または腹違いの姉妹(17節)、または月のさわりのある女と性的関係を持った者(18節)である。おぼと性的関係があった場合、罪責を負う、というさばきが下されるが、その詳細は明らかではない。それは、20節にあるように、子を残さずに死ななければならないことを意味する、という見方もある。20節では、おじの妻と性的関係を持つことに言及されているのに対し、21節では、義姉または義妹を巻き込む違反行為が問題にされている。

21節が適用されるのは、兄弟が生きている間のことである。もし彼が死に、その名を継ぐ息子がいない場合は、その兄弟がやめとなった妻をめとり、長男に故人の名をつけるように命じられた(申命記25:5)。このような結婚はレビレート婚として知られている。

神が望んでおられたのは、異邦の民の忌まわしい慣習から切り離され、約束の地の祝福を喜び楽しむ聖なる民を持つことであった(22～26節)。霊媒や口寄せは、石で打ち殺されなければならなかった(27節)。

D. 祭司の行動(21、22章)

21章と22章は、16章と17章と並んで、アロンとその子らに宛てられたものである。

21:1～4 祭司は、近親者の場合を除き、死人に触れて自分の身を汚してはならなかった。死者の天幕に入るだけで、人は

七日間汚れた（民数記19:14）。そうすると、祭司はその間、主に仕えることができなくなるので、近親者以外によって自分を汚すことを禁じられたのである。4節はおそらく、（祭司は）高い地位にいるのだから、2節と3節に挙げられている以外の理由で、自分の身を汚してはならないという意味であろう。

21:5～9 自分のからだを傷つけたり、汚したりして死者を悼む、という異教の慣習は固く禁じられた。祭司が、売春をして汚れた女や離婚された女と結婚することは許されなかった。しかし、やめめとなら結婚することができた。娼婦となった祭司の娘は焼き殺されなければならなかった。

21:10～15 大祭司は、慣例に従った方法で喪に服したり、死者に敬意を表そうとして聖所を離れたりすることは許されなかった。結婚すべき相手はイスラエル人の処女であり、その結婚生活は非難されることのないものでなければならなかった。

21:16～24 身体的欠陥のある者は祭司職から外された——盲目、跛行、顔の奇形、手足の変形、足や手の怪我、曲がった背、小人症、目の欠陥、かゆみの病気、かさぶた、生殖器の怪我などである。アロンの子孫のうち、だれでもこのような欠陥のある者は、祭司の食物にあずかることはできても、主の前で祭司として積極的に仕えることはできなかった（22,23節）。聖なるものとは、交わりのいけにえの中から祭司に与えられる部分のことである。最も聖なるものとは、その他のささげ物の中の祭司の取り分のことである。いけにえを献げる祭司は身に欠陥のない者でなければならなかった。なぜなら、祭司は汚れや傷の一切ない大祭司であるキリストを表していたからである。

22:1～9 祭司が、ツアラアトや漏出、

死体で汚されたものに触れたり、血抜きがされていない肉を食べたり、その他、何らかの理由で儀式上汚れた状態になった場合は、祭司の食事にあずかつてはならなかった。それが、「（彼らは）わたしのために聖別したものである」ということの意味である（2節）。もし祭司にツアラアトや膿の出る腫物があつた場合には、祭司の資格喪失期間は長引いたことであろう。それ以外の場合には、以下の儀式を受ければよかった。まず、水を浴び、それから夕方まで待つ。そうすれば再びきよくなったのである。

22:10～13 一般的に、異国人、居留者、そして雇い人は聖なるものを食べてはならなかった。しかし、祭司に金で買われた者と、その奴隷の子どもたちは、それを食べることができた。祭司の娘が一般の者と結婚したなら、聖なる奉納物を食べてはならなかった。しかし、夫に先立たれた場合、あるいは、離縁された上に子どもがいない場合は、父の家に戻っているなら、祭司の食物にあずかることができた。

22:14～16 だれかが誤って聖なるものを食べるなら、それを取り替えた上で五分の一を加えれば弁済することができた。それは代償のささげ物の場合と同様である。

22:17～30 主へのささげ物は、全焼のささげ物（18～20節）であれ交わりのいけにえ（21節）であれ、傷のないものでなければならなかった（19節）。病気の動物、体の不自由な動物、醜い動物を献げることは禁じられた（22節）。牛や羊で、足が伸びすぎているか、または萎え縮んだものは、進んで献げるものとすることはできるが、誓願のささげ物としては受け入れられない（23節）。去勢された動物や、生殖器に損傷のある動物は受け入れられない（24節）。イスラエル人は、異国人から、上記のような欠陥のある動物をささげ物と

して受け入れてはならない (25節)。いけにえのささげ物の動物は、少なくとも生後八日目以後でなければ献げることはいけにえの肉は、献げたその日に食べなければならない (29,30節)、とされた。

22:31~33 最後の段落では、イスラエル人がなぜこれらの主の戒めをすべて守り、実行しなければならないかが説明されている。それは、彼らをエジプトの地から連れ出した神が聖なる方であるからである。この短い部分には、レビ記全体のメッセージを強調する表現がいくつかある。「汚してはならない」、「聖なる名」、「わたしは聖であることが示されなければならない」、「わたしはあなたがたを聖別する主である」。

VIII. 主の例祭 (23章)

A. 安息日 (23:1~3)

次の主題は、神がお定めになったイスラエルの宗教暦である。主はモーセを通してイスラエルの子らに、主の例祭を聖なる会合と宣言するように命じられた。

六日間の労働の後の七日目、すなわち安息日は、労働を休む日としなければならないことになった。これが毎週唯一の聖日であった。

B. 過越 (23:4,5)

主の過越の祭りが行われるのは第一の月の十四日 (ニサン、またはアビブ) である。これはイスラエルがエジプトの奴隷状態から贖われたことを記念する日であった。過越の子羊とは、神の子羊であり、私たちの過越であるキリストを表す予型である (I コリント5:7)。その血が流されたのは、私たちが罪の奴隷という立場から贖うためであった。キリストが死なれたのは、天地創

造の時ではなく、時が満ちてからのことであった (ガラテヤ4:4~6)。

C. 種なしパンの祭り (23:6~8)

種なしパンの祭りは、過越の祭りに関連して行われた。祭りは過越の祭りの翌日から七日間、すなわちニサンの十五日に始まり、二十一日まで続いた。この二つの祭りの名は、同義に使われることが珍しくない。この期間中、ユダヤ人は家からすべてのパン種を取り除かなければならなかった。聖書では、パン種は罪を象徴している。この祭りは、敵意や悪意というパン種を取り除いた生活、「誠実と真実の種なしパン」 (I コリント5:8) を特徴とする生活を描いている。過越 (私たちの贖い) から種なしパンの祭り (聖なる歩みをする責務) までの移行の時間差はない。今日でも、ユダヤ人はこの祭りの期間は種なしパンを食べる。そのパンはマッツォと呼ばれている。マッツォの下ごしらえの段階で、パンは突き刺され、焼き上げる過程で縞模様ははいる。この種なしパンは、罪のないメシアをはっきり連想させるものである。彼は私たちのために刺し通され、彼の打ち傷によって、私たちは癒されたのである。

D. 初穂の束のささげ物 (23:9~14)

大麦の束を揺り動かす儀式は、種なしパンの祭りの二日目 (安息日の翌日、すなわち、週の初めの日) に執り行われた。これは初穂の祭りとして知られている。この日は、その年の最初の穀物である大麦の収穫が始まりを示した。大麦の束は、収穫に対する感謝を込めて主の前で揺り動かされた。また、全焼のささげ物、および穀物のささげ物も献げられた。この最初の収穫は、やがて起こる大収穫の約束と見なされた。これは「眠った者の初穂」 (I コリント

15:20) である復活のキリストを示すものである。キリストの復活は、とりもなおさず、キリストに信頼するすべての者もまた、やがて復活し不死にあずかることの保証なのである。

E. 七週の祭り (23:15~22)

23:15~22 七週の祭り (ヘブル語で「シャブオット」) または (五旬節とも言われる) ペンテコステ (ギリシア語で「五十」を意味する) は、過越の安息日から五十日後に行われた。それは、小麦の収穫が始まったことを神に感謝する**収穫祭**であった。この時、小麦の初穂は、**全焼のささげ物、穀物のささげ物、注ぎのささげ物**、そして交わりのいけにえとともに献げられた。ユダヤ教の伝承によれば、モーセはこの年のこの日に律法を授かったという。この祭りは、五旬節の日に聖霊が降臨され、教会が誕生したことを象徴している。奉獻物の中身は、刈り取られたばかりの上質の小麦粉で作られた二つのパンである。(これはパン種を入れて焼かれた唯一のささげ物であった。) このパンは予型として「(キリストにあつて) 新しい一人の人に造り上げ (られた)」(エペソ2:15) ユダヤ人と異邦人を表している。

五旬節の後、次の祭りが行われるまでに、約4か月の隔たりがあった。この期間は、私たちが救い主のご来臨を熱心に待つ現在の教会時代を表しているのかもしれない。

F. 角笛の祭り (23:23~25)

角笛の祭りは、第七の月の一日に行われた。角笛が吹かれると、イスラエルの子らが、厳粛で聖なる会合に集められるのである。この時、宥めの日に向けて、十日間の自己点検と悔い改めの期間が設けられた。これは、イスラエルが、国全体の悔い改め

に先立って、再びこの土地に集められる時を象徴している。この日は、常用年の第一日にあたり、今日、ロシュ・ハシャナー (ヘブル語で「年の初め」の意) と呼ばれている。中には、この祭りがもう一つ別の召集、すなわち、携挙の時に、空中で主に会うために聖徒が集められることを表しているとの見方もある。

G. 宥めの日 (23:26~32)

宥めの日 (ヘブル語で「ヨム・キップール」) は第七の月の十日に行われるもので、その内容は16章で詳述されている。この日は、イスラエルの国民的な悔い改めを表し、信じた残りの者がメシアのもとに立ち返り、その罪が赦される日である (ゼカリヤ12:10、13:1)。宥めの日に関わるほとんどすべての節において、神は、**いかなる仕事もしてはならない**、という命令を繰り返しておられる。この日に活動するのは、大祭司だけであった。主は、違反する者は、だれであっても**滅ぼす**と仰せになり、その命令をいっそう厳格なものにされた。その理由は、私たちの大祭司が私たちのために獲得してくださった救いが、「私たちが行った義のわざに」よらない (テトス3:5) からである。私たちの罪を取り除くことに關しては、いかなる人間のわざも入る余地はないのである。キリストの御わざ以外には何一つ、永遠の救いの源となるものはない。「**自らを戒め (る)**」(27,29節) とは断食をする、という意味である。今日でも、信心深いユダヤ人は、この日を断食と祈りの日として守っている。宥めの日にはヤハウエの祝祭の中に数えられているものの、実際は祝宴 (feasting)、というより、断食 (fasting) の時だったのである。しかし、一旦、罪の問題が解決されれば、仮庵の祭りという喜びの時が訪れた。

H. 仮庵の祭り (23:33~44)

仮庵の祭り（ヘブル語で〈スコテ〉「仮小屋」の意）は、第七の月の十五日に始まった。七日間にわたって、イスラエル人は仮庵に住む（42節）。これは、最終的な安息と最後の収穫を描いており、その時が来れば、イスラエルは千年王国の期間、その地で安全に暮らすことができるのである。この祭りは「収穫祭」とも呼ばれている（出エジプト記23:16）。収穫に関係しているからである。実際、この章で言及されている祭りのいくつかは、収穫と関わりがある。二つの全き休みの日（39節）とは、千年王国と永遠の安息を表しているのかもしれない。モイシェ・ローゼンとセイル・ローゼン（Moishe and Ceil Rosen）は、その伝統を（共著の中で）このように説明している。

ユダヤ人は、仮設の小屋のようなものを建て、この祭りの期間中はその中で暮らした。それは、イスラエル人が荒野にいたときの住まいが一時的のぎのものであったことを忘れないためである。今日でも、多くのユダヤ人は、この祭りのために、開閉式の屋根と三面張りの小屋を建てる。その小屋を木の枝や秋の果物で飾り、収穫を思い起こすのである。

毎年、この収穫祭には、できる限り多くの人々がエルサレムに集まって来た。この祝日の神殿礼拝では、シロアムの池から汲んで来た水を注ぎ出す儀式が行われ、冬の雨を祈る象徴とされた。イエスが大声で「だれでも渴いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい」（ヨハネ7:37,38）と言われたのは、実に、この時のことであった。

イスラエルにとって最終的な宥めの日

が終わると、仮庵の祭りがもう一度エルサレムで祝われることになる（ゼカリヤ14:16）。*⁽²³⁾

主がさまざまな例祭を通して民に教えようとされたことの一つは、人生の霊的な面と肉体的な面の密接な関係であった。豊作や祝福の時は、主の前で喜ぶべき時であった。主は、日ごとの必要を満たしてくださる方として民の目に映った。このような主の恵みに対する国民の応答が、収穫に関わる祭りに表現されたのである。

このように厳かな祭りの日には、イスラエル人はいかなる労働もしてはならない、という命令が繰り返されていることに注意しよう（3,7,8,21,25,28,30,31,35,36節）。

ヤハウェの例祭には、明確な時系列的順序が見て取れる。安息日は、私たちを天地創造後の神の安息に連れ戻し、過越の祭りと種なしパンの祭りは、カルバリの御わざを語っている。次に来るのは初穂の祭りで、キリストの復活を指し示している。五旬節は聖霊の降臨を象徴し、未来に目をやれば、角笛の祭りがあり、イスラエルが再び集められる様子が表されている。宥めの日は、イスラエルの残りの者が、悔い改めてイエスをメシアとして認める時を予表している。最後に、仮庵の祭りには、イスラエルが、キリストによる千年王国の統治を喜び楽しむ様子が描かれている。

IX. 儀式、および道德に関する律法（24章）

23章では、毎年の祝祭日に取り上げられた。今度は、主の前で毎日、また毎週行われる務めが主題である。

24:1~9 質の良い純粋なオリーブ油が、純金の燭台の上で絶えず主の前で燃や

されなければならない。十二個のパンは、机の上に二列、または二つの山にして置き、安息日ごとに取り替えられることになっていた。7節の乳香は、主のものであった。それは、古いパンが下げられて祭司の食物となった時に、ヤハウェに献げられたものである。

24:10~23 次に、イスラエル人を母とし、エジプト人を父とする者が、神の御名をのしったとして石打ちの刑に処される様子が唐突に描かれている（10~16, 23節）。この事件は、生粋のユダヤ人であろうとなかろうと、イスラエルの宿営に住む者すべてにとって律法は同じであること（22節）、また神への冒瀆は、殺人と同じように、死をもって罰せられることを示している（14, 16, 17, 23節）。（16節はおそらく、ユダヤ人たちが、「私たちには律法があります。その律法によれば、この人は死に当たります。自分を神の子としたのですから」〔ヨハネ19:7〕と言った時に参照した、冒瀆に対する律法であろう。）その他の犯罪の中には、補償ができる場合もあったことが示されている（18, 21節）。最後に、この出来事は次のことを示している。

報復は法の基本原理であり、過ちは正されなければならない。軟弱さが法律の不評を招いたのである。報復の法は、今日、欧米諸国では嘲笑の的となっている。しかし、思慮深い人はそれを一笑に付したりはしない。

(a) 古代社会では、罰が、行われた悪事と比例しないことがたびたびであった。その意味で、応報刑は、真の正義に向けた大きな一歩であった。

(b) さらに、最もよく提唱されてい

る代替案の更生的処罰は、主観主義という欠陥を抱えている。社会復帰の時期はだれが決めるのだろうか。今日は条件が甘いかもしれないが、明日はどうだろうか。真の正義とは、目には目を、なのである（ただし、それ以上ではない）（*"Daily Notes of the Scripture Union"*）。

1~9節は、神が本来意図されたイスラエルを描いている。10~16節の、御名を冒瀆し、呪った男が、実際にそうなったイスラエルを描いている（※「その人の血は私たちや私たちの子どもらの上に」マタイ27:25）。

X. 安息の年とヨベルの年（25章）

25章から27章の法令は、シナイ山でモーセに授与されたものであり、幕屋の中から語られたものではない（25:1、26:46、27:34）。

25:1~7 七年目ごとに、その年を安息として守るものとされた。地の全き休みの安息であって、畑を休ませなければならないのである。人々の食物に充てられるのは、落ち穂から生えたものである。（畑の）所有者はそれを刈り入れてはならず、民が自由に用いることができるように残しておくなければならない、とされた。

25:8~17 五十年目もまた安息（の年）であり、ヨベルの年として知られている。それは、安息の年を七回（四十九年）経た後の宥めの日である。奴隷は自由の身にされ、地は休耕させ、元の所有者に戻さなければならない。ヨベルの年が近づくに従い、奴隷や土地の買い値も減少するので（15~17節）、すべての商取引はその事実を考慮に入れることになっていた。「国中のすべての住民に解放を宣言（せよ）」

(10節)、ということばは、アメリカ合衆国の(独立を告げた)自由の鐘に刻まれている。今日の信仰者であるなら、ヨベルの年を主のご来臨に比すところであろう。主の再臨が近づくにつれ、私たちが所有する物質的な富の価値は減少するのである。主が来られた瞬間、私たちの金銭、不動産、そして投資は無価値となる。ここから学ぶことは何か。これらのものを、主のために用いるのは、今日においてほかにない、ということである！

25:18~22 安息の年に関しては、その年、およびその翌年に食べる分が十分にあるのだろうか、と民は心配したかもしれない。神は、もし民がその通りにするなら、六年目には三年分の収穫を生じさせる、と約束された。

五十年に一回は、二年連続で、種蒔きも収穫もない年が続いた。つまり、通常の安息年のあとにヨベルの年が続いたのである。おそらく、主は四十八年目になると、四年分の収穫をお与えになったのであろう。

ある学者は、包括的に数えれば、五十年目とは、実際には四十九年目のことであると考え。ともかく、これは、古代における優れた環境保全の実例であることには変わりがない。土地を休ませることを義務づけて、その肥沃度を維持したわけである。現代になり、人間はようやく(地球という)この惑星の資源の保護に気を使うようになった。しばしばそうであるように、神のことばは、何世紀も時代を先取りしているのである。

25:23~28 土地は売ることもできたが、永遠に手放すことはできなかった。なぜなら所有者はヤハウェだからである。土地を「買い戻す」(つまり、元の所有者であるユダヤ人の手に復帰させる)方法は三つあった。

- (1) 近親者が、売り手(元の所有者)のために買い戻すことができた(25節)。
- (2) 売り手が、支払い能力を回復したなら、買い戻すことができた。その際、ヨベルの年までの残存年数分を買い手に支払う(26,27節)。
- (3) さもなければ、ヨベルの年に、土地は自動的に元の所有者に戻った(28節)。

25:29~34 城壁を巡らした町の中の住居の場合、満一年の間は、買い戻しに足りなければならなかった。しかし、その期間が過ぎると、代々にわたってそれを買収した人のものとなった。その周りに城壁のない村々の家は土地と見なされたので、ヨベルの年には元の所有者の手に戻った。レビ人に割り当てられた特定の町々でレビ人が所有する家々の場合は、いつでも買い戻しに応じてもらうことができた。レビ人の放牧用の畑(※英訳「共有地」)は売ってはならなかった。

25:35~38 イスラエル人のだれかが落ちぶれて、借金をした場合、ユダヤ人である債権者は彼を虐げてはならない。(つまり)貸した金に利息を課したり、貸した食物に追加分を請求したりしてはならなかった。

25:39~46 貧困に陥ったイスラエル人が、債務不履行のためにユダヤ人債権者に自分を身売りしても、奴隷としてではなく、住み込みの使用人として扱われ、六年間の奉公が終了する前にヨベルの年が来た場合には解放しなければならなかった。ユダヤ人が異国の奴隷を持つことは認められ、それは子孫に残すことのできる、個人の資産と見なされた。しかし、ユダヤ人は自ら奴隷となってはならなかった。

25:47~54 もしユダヤ人が、たまた

ま国内に住んでいる異国人に身を売ったとしても、いつでも買い戻されて自由になることができた。その買い戻しの身代金は、ヨベルの年まで残っている年数にしたがって決定される。ユダヤ人を買戻した近親者は、彼を住み込みの雇い人としてヨベルの年まで使用することができたが、もし買い戻す近親者がいない場合でも、自動的にヨベルの年には自由の身となった。

25:55 この節によってはっきりと気づかせるのは、イスラエル人も、その地（23節）も、主のものであり、主が正当な所有者として認められなければならない、ということである。（したがって）神の民も、神の土地も、永久に売り渡されることはないのである。

XI. 祝福と呪い（26章）

A. 神に従うことに伴う祝福（26:1～13）

この章では、祝福の二倍のスペースが警告に費やされている。不従順がもたらす逆境は、神が復讐のためではなく、民を悔い改めに導くために用いられる道具である（40～42節）。国民への懲らしめは、民がその罪を告白するまで次第に厳しさを増す。その進度が14, 18, 21, 24, 28節に記されていることに注目しよう。

主は、**偶像礼拝**（1節）、**安息日**を破ること、**不遜な態度**（2節）に対して警告された後、もし彼らが主の**命令**を守るなら、次のような祝福が臨む、と約束された。**雨**、**豊穡**（4節）、**豊作**、**安全**（5節）、**平和**、**平穏**（6節）、**敵**に対する**勝利**（7, 8節）、**子孫繁栄**、そして主のご臨在（9～13節）である。ノックス（Knox）訳による13節は、特に生き生きとしている。「わたしではなかったか。・・・あなたがたの首の鎖を打ち砕き、自由人にふさわしい真つ直ぐな歩

き方を教えたのは」。

B. 神に聞き従わないことによる呪い（26:14～39）

26:14～33 不従順の行き着く先は、**恐怖**、**病気**、**敵**による**征服**、**干ばつ**、**不毛**、**野の獣**、**疫病**、**侵略**、そして**捕囚**である。

26節には飢饉の状態が書かれている。パンは、通常一家族分を焼く大きさの一つのかまどで**十人の女が焼く**ことができるほど不足する。29節では、さらに深刻な飢饉が描かれている。人肉を食することが横行する、というのである（この警告が歴史上現実となったことについてはⅡ列王記6:29と哀歌4:10を参照）。

26:34～39 イスラエルが頑なに不従順のままでいると、やがて外国勢力に捕らわれる結果になる。イスラエルの**地**は、民が無視してきた**安息年**の数に等しい期間、**休み**を享受することになる。バビロン捕囚がまさにそうであった。サウルから捕囚までの年月、民は安息年を守るのを怠った。そのため、彼らは七十年を捕囚として過ごし、地は安息を得たのである（Ⅱ歴代誌36:20, 21）。

C. 告白と悔い改めによる回復（26:40～46）

26章の最後の区分では、不従順な国民に対して、告白と悔い改めによる回復の道が示された。神はご自分の民を完全に見捨てることをせず、彼らの先祖との**契約**を思い起こしてくださるのである。

XII. 誓願と十分の一のささげ物（27章）

レビ記の最後の章が扱うのは、自発的な主への誓願である。何かの祝福を受けた場合、主への感謝のしるしとして、人（自分自身または家族の一員）、動物、家、また

は畑を献げる、という誓願を立てることができたようである。「聖絶の物」(※英訳「誓願の物」)は祭司たちに与えられた(民数記18:14)。これらのささげ物は必ずしも祭司たちが利用するものとは限らなかった。誓願を立てる者は、誓願のものの代わりに一定の金額を祭司に納める方法も用意された。

27:1, 2 聖別のための誓願は非常に特別なものであった。

27:3~7 人が主に対して誓願を立てる場合、祭司に納める買い戻しの代価は次のように決まっていた。

二十歳から六十歳までの男子	50シェケル
二十歳から六十歳までの女子	30シェケル
五歳から二十歳までの男子	20シェケル
五歳から二十歳までの女子	10シェケル
一か月から五歳までの男子	5シェケル
一か月から五歳までの女子	3シェケル
六十歳以上の男子	15シェケル
六十歳以上の女子	10シェケル

27:8 もし人が貧しくて、この表の通りに買い戻しの誓願を立てることができないなら、祭司がその人の能力に応じて評価を決定した。

27:9~13 誓願のささげ物が家畜の場合は、以下の規定が適用された。

- いけにえにふさわしい、きよい家畜を買い戻すことはできない(9節)。それは、祭壇の上で主に献げられるものである(民数記18:17)。
- ある家畜を他の家畜と交換しても何も得ることはできない。その場合は、両方とも主のものとなるからである(10, 33節)。
- 汚れた家畜は、祭司がつけた評価に五分の一を加えれば買い戻すことができ

る(11~13節)。

27:14, 15 自分の家を主に聖別した後に気が変わった場合、祭司が見積もった評価額に五分の一を加えて支払えば買い戻すことができた。

27:16~18 畑の価値の見積もりは、ヨベルの年には元の所有者に戻る、という事情により、複雑である。

それが元の所有者から献げられたもの、つまり、相続したものである場合は、16~21節の規定が適用された。畑の価値はそこに蒔かれた種の量が基準となった。たとえば、大麦の種一ホメルが蒔かれたなら、その評価は銀五十シェケルとなる。

もし畑がヨベルの年が迫る頃、またはその年に聖別されたなら、上記の値積りが有効とされた。しかし、ヨベルの年から何年か経って聖別された場合は、畑の評価もそれに応じて減少した。すなわち、もしヨベルの年から二十年後に聖別された場合には、畑の価値はわずか三十シェケルしかないことになる。

27:19~21 もし畑が買い戻されるのであれば、評価額にその五分の一を加えなければならなかった。

もし、土地を主に献げた後、所有者がヨベルの年が来るまでに買い戻さなかった場合は、あるいはひそかにそれを他人に売った場合は、もはやそれを買い戻すことはできず、ヨベルの年には祭司の所有地となった。そして、畑は聖なるものとなった。

27:22~25 もし畑を聖別するのが、元の所有者ではなく、それを購入した人である場合は、22~25節が適用された。祭司は、その土地に、ヨベルの年までに何回の収穫が見込めるかによって、価値を設定した。ヨベルの年が来ると、畑は元の所有者の手に戻った。

27:26, 27 いけにえの家畜の初子は

主に聖別できなかった。もともと主のもののだからである。汚れた家畜の初子の場合、祭司の評価額に五分の一を加えれば買い戻すことができた。そうでない場合は、祭司が売れることも可能であった。

27:28, 29 死または聖絶の宣告を受けているものは何であれ買い戻すことはできない。これが聖絶されたもの、すなわち禁じられたもの、という意味である。したがって、両親を呪った息子を贖うことはできず、必ず殺されなければならなかった。

この章においては「聖別」されたものと、「聖絶」されたものとの間に重要な区別があることに注意しなければならない。誓願によって聖別されたもの、とは神の御用のために選り分けられたもののことで、買い戻すことができた。(それに対し) 聖絶されたもの、とは完全に、また決定的に献げられたもののことで、買い戻すことはできなかった。

27:30, 31 十分の一、すなわち穀物と木の実の十分の一は、主のものである。献げる者がそれをとっておきたい場合は、その評価額に五分の一を加えたものを支払えばよかった。

27:32, 33 「杖の下を通る十番目ごとのもの」という表現は、羊ややぎを数える際、牧者の杖の下を通らせた慣習がもとになっている。レスリー・フリン (Leslie Flynn) は次のような注釈を施している。

牧者は杖を手にして、十番目ごとに通るものに触れる。どのように工夫したところで、優良な家畜が十番目に来ないように順番を変えることはできなかった。仮に、その順番を変えようとしたら、本来十番目のものも、またそれと入れ替えようとしたものも、ともに主のものとな

ってしまうのである。^{*(24)}

この最初の十分の一はレビ人のための十分の一と呼ばれた(民数記18:21～24)。(その名の通り) レビ人に支払われたからである。第二の十分の一は、どうやらそれとは異なるもののようで、申命記14:22～29に定められている。

27:34 主がシナイ山で、モーセに命じられた命令、とレビ記の最終節に書かれているのは、おそらくこの書(レビ記)全体のことを指しているのであろう。儀式の詳細や血のいけにえについて多くのことを学んだ私たちは、マシュー・ヘンリー(Matthew Henry)とともに、こう喜ぶことができる。

私たちは、律法の暗い影の下にいるのではなく、福音の明るい光を喜び楽しむ者である。・・・私たちは律法の重いくびきや、その現世的な規定の下にいるのではなく、・・・福音という、甘美で、和やかな規範の下にある。福音は、御父を御霊と真理によって礼拝する者、私たちの祭司、神殿、祭壇、いけにえ、きよめ、またすべてとなられたキリスト以外によらず、その御名によって御父を礼拝する者を真の礼拝者である、と宣言する。

それゆえ、きよめの儀式や例祭、奉納物という拘束がないことを理由に、少しばかり心を砕き、時間と金銭を差し出すことで、神に栄誉を帰することができる、などと考えるてはならない。逆に、むしろ、自由意志によるささげ物で主を褒め称え、心を広くしていただこう。聖なる愛と喜びで心を燃え立たせていただこう。考える時は真剣に、計画を立てる時は誠実であるようにひたすら努めよう。イエスの

血によって、まことの聖所に入る、という大胆さをもって近づいていこう。そして、偽りのない心と、信仰による全き確信により、一層の澆刺さと、控えめな自信に溢れて、なおも言い続けよう。イエス・キリストのゆえに神は誉むべきかなと。^{*(25)}

後 注

1. (1章)「オーラー、ōlāh」という語は「上」という意味の語根から来ている。つまり、動物がまるごと神の祭壇の上に運び上げられ、動物全体が贈り物として献げられるという意味である。
2. (1章) Peter Pell, *The Tabernacle*, pp. 102, 103.
3. (2章) KJVの“meat”は、1611年当時、液体と反対の固形の食物を意味し、今日、私たちが“meat”と呼ぶものは、17世紀には“flesh”と呼ばれていた。「ミンハー」を「導く」という語に由来すると考える学者もいるが、多くの学者はこのことばの起源は「贈り物」を意味するのではないかと考えている。
4. (3:1-15) この語はほとんどが複数形の「シェラミーム」で、よく知られているヘブル語の「シャローム」と関係がある。このヘブル語の概念は、単に敵意がないというだけでなく、神との平和はもとより、繁栄と健全さを含む、より広いものである。この語の第二の意味は、神の御前で交わるためのいけにえである。ここではそうではないが、通常、交わりのいけにえは順番として最後になる。これは、この語が持つ「完成する」という珍しい意味に由来する、と考える学者もいる。ロイド・カー (G. Lloyd Carr) が次のように適用するのは的を射ている。「もし、この意味が正しいなら、キリストが私たちの平和である (たとえばエペソ2:14) という言及は一層意義が深い。キリストは私たちにとって、究極の犠牲だからである (ヘブル9:26, 10:12参照)」。G. Lloyd Carr, “Shelem,” *Theological Word-book of the Old Testament*, III: 932.
5. (3:15) Pell, *Tabernacle*, p. 92.
6. (4章) 私たちにとっては実に不思議なことであるが、旧約聖書中300回近く使われている同じヘブル語が、ある場合には「罪」、またある場合には「罪のきよめのささげ物」のどちらかの意味を持つ。
7. (5:14-6:7) RSVとNEBは“guilt offering”と訳しているが伝統的な訳の方が好ましい。
8. (6:18) カイルとデリツチ (C. F. Keil, Franz Delitzsch) は、この節の後半部分を次のように解釈する。「これらの、最も聖なるものに触れた一般の民はだれでも、触れたことによって聖なる者となった。そのため、以後、聖別された祭司と同様、汚れから身を守らなければならない立場に置かれた」。C. F. Keil and Franz Delitzsch, “Leviticus,” in *Biblical Commentary on the Old Testament*, II: 319.
9. (7:11-18) A. G. Clarke, *Precious Seed Magazine*, No. 2, Vol. 11, March-April 1960, p. 49.
10. (7:11-18) Ibid.
11. (7:11-18) John Reid, *The Chief Meeting of the Church*, p. 58.
12. (7:22-27) Dr. S. I. McMillen, *None of These Diseases*, p. 84.
13. (8:30-36) Matthew Henry, *Matthew Henry's Commentary on the Whole Bible*, I: 474.
14. (12:6-8) George Williams, *The Student's Commentary on the Holy Scriptures*, p. 71.

15. (13章冒頭) Harrison, *Leviticus*, p. 137.
 注解書のAppendix A, p. 241には、第13
 章のやや専門的な翻訳が掲載されており、
 言及されている症状の医学的な側面に興味
 のある人には役立つと思われる。
 16. (13章冒頭) Ibid., pp. 136, 137.
 17. (13:38,39) Ibid., p. 245.
 18. (13:47-59) Ibid., p. 146.
 19. (13:47-59) Ibid.
 20. (16:11-22) G. Morrish, publisher, *New
 and Concise Bible Dictionary*, p. 91.
 21. (17:1-9) G. Campbell Morgan, *Search-
 lights from the Word*, p. 38.
 22. (18:19-21) Francis A. Schaeffer, *The
 Church at the End of the 20th Century*,
 p. 126.
 23. (23:33-44) Moishe and Ceil Rosen,
Christ in the Passover, pagination un-
 available.
 24. (27:32,33) Leslie B. Flynn, *Your God
 and Your Gold*, pp. 30, 31.
 25. (27:34) Henry, "Leviticus," I: 562.
- Henry, Matthew. "Leviticus." In Matthew
 Henry's Commentary on the Whole Bible.
 Vol. 1. McLean, VA: MacDonald Publish-
 ing Company, n.d.
- Jukes, Andrew. *The Law of the Offerings*.
 London: The Lamp Press, 1954.
- Keil, C. F., and Delitzsch, F. "Leviticus." In
*Biblical Commentary on the Old Testa-
 ment*. The Pentateuch, Vol. 4. Grand
 Rapids: Wm. B. Eerdmans Publishing
 Co., 1971.
- Lindsey, F. Duane. "Leviticus." In *The Bible
 Knowledge Commentary*. Wheaton, IL:
 Victor Books, 1985.
- Smith, Arthur E. *Leviticus for Lambs*. Pri-
 vately Printed, n.d.

定期刊行物

- Clarke, A. G. "The Levitical Offerings," Pre-
 cious Seed Magazine, 1960.

参考文献

- Bonar, Andrew. *A Commentary on the Book
 of Leviticus*. 1852. Reprint. Grand Rap-
 ids: Baker Book House, 1978.
- Borland, James A. "Leviticus." In Liberty
 Bible Commentary. Lynchburg, VA: The
 Old-Time Gospel Hour, 1982.
- Coleman, Robert O. "Leviticus." In *Wycliffe
 Bible Commentary*. Chicago: Moody
 Press, 1962.
- Harrison, R. K. *Leviticus: An Introduction
 and Commentary*. The Tyndale Old Tes-
 tament Commentaries. Downers Grove,
 IL: InterVarsity Press, 1980.

民数記

序 論

「民数記は、その歴史的な流れ全体を、クリスチャンの歩みに重ねて読むとき、クリスチャンの生活に対して特別な意味を持つ書である。ヘブル人への手紙の著者も、この重要な適用を示し、そのために二つの章（3章と4章）を割いている。」

アービング・L・ジェンセン (Irving L. Jensen)

I. 正典における独自性

モーセによる第四番目の書の英語名 (Numbers) は、七十人訳の Arithmoi という題名の翻訳であり、1章および26章で行われた人口調査や、その他多くの数値データからそう呼ばれているのは明らかである。

ヘブル語の『荒野にて』(Bemidbar) という題名は、この書物全体を、よりよく表している。荒野の四十年間は、カナンに遣わされた斥候、コラの反逆、芽を出したアロンの杖、青銅の蛇、バラムとそのろば、その他あまり知られていない出来事など、興味深く有名な話が満載である。

これを単なる「ヘブル人の歴史」と考えるのではない。すべてこれらのことが起こったのは、私たちの霊的成長のためだったのである。私たちは、イスラエルの子らの過ちから学ぶべきであって、繰り返すべきではない。その意味で民数記は非常に重要

な書物なのである。

II. 著者問題

ユダヤ教およびキリスト教の教えでは、民数記は、あの偉大な律法の授与者モーセによって書かれたとされている。この見解は、自由主義的立場に立つ人々の間では、一般的に低評価である。しかし、著者がモーセであるという簡潔な論証を知るには「モーセ五書への序論」を参照されたい。

III. 執筆年代

合理主義的な学者は、モーセ五書をユダヤ史のかなり後期に位置づけているが、紀元前1406年頃という年代は、保守的かつ信仰的な学問と両立する（詳細は「モーセ五書への序論」を参照）。

IV. 背景と主題

民数記の背景は、ヘブル語のタイトルが示すように、荒野である。シナイ山を出発してから、約束の地の向かい側にあるモアブの草原に到着するまでの、約38年に及ぶイスラエルの旅と彷徨が描かれている。この彷徨は不信仰によるものであったので、神はその旅程を記しておられない。スコロギー (Graham Scroggie) が言う通り、「神の御心に反する民の行動は、神のカレンダーに記録されない」*⁽¹⁾のである。

レビ記が礼拝と霊的な立場を強調しているように、民数記の主題は歩みと霊的進歩（あるいはその欠如！）である。クリスチャンは、この書物が無味乾燥なユダヤ人の歴史書であると考えてはいけない。現代のクリスチャンの経験にも当てはまる内容ばかりである。

すべての（あるいはほとんどの）クリスチャンが、救われた後、速やかに前進し、神が約束された勝利に完全にあずかると考えるのは、何と心地よいことだろう。しかし、私たち自身が、不平不満、信仰の後退、不信仰への転落など、いかに古代イスラエル人に似ているかを、観察と経験が物語っている。

幸いなことに、人生の霊的な旅路において、私たちはイスラエルのような彷徨を繰り返す必要はない。なぜなら、神は私たちが信仰によって霊的な成功を収めるために必要なものを十分に備えてくださったからである（本書の新約の部、特にローマ人への手紙6～8章を参照）。

構 成

I. シナイでの最後の日々

(1:1～10:10)

- A. 人口調査と部族の配置(1,2章)
- B. レビ人の人数とその任務 (3, 4章)
- C. 聖潔と告白 (5:1～10)
- D. 嫉妬についての律法 (5:11～31)
- E. ナジル人に関する律法 (6章)
- F. 族長たちのささげ物 (7章)
- G. 幕屋での奉仕 (8章)
- H. 過越のいけにえ、雲、銀のラッパ (9:1～10:10)

II. シナイからモアブの草原へ

(10:11～22:1)

- A. シナイの荒野からの旅立ち (10:11～36)
- B. 宿営内の反逆 (11章)
- C. アロンとミリアムの反逆 (12章)
- D. 約束の地の偵察 (13, 14章)
- E. さまざまな法令 (15章)
- F. コラの反逆 (16, 17章)
- G. レビ人への指示 (18, 19章)
- H. モーセの罪 (20:1～13)
- I. アロンの死 (20:14～29)
- J. 青銅の蛇 (21:1～22:1)

III. モアブの草原での出来事

(22:2～36:13)

- A. 預言者バラム (22:2～25:18)
 - 1. バラクに呼び出されたバラム (22:2～40)
 - 2. バラムの託宣 (22:41～)

24:25)

3. イスラエルを墮落させるバラム (25章)
- B. 二回目の人口調査 (26章)
- C. 娘たちの相続権 (27:1～11)
- D. モーセの後継者ヨシュア (27:12～23)
- E. ささげ物と誓願 (28～30章)
- F. ミディアン人の滅亡 (31章)
- G. ルベン族、ガド族、そしてマナセの半部族の相続地 (32章)
- H. イスラエル人の宿営地のまとめ (33章)
- I. 約束の地の境界 (34章)
- J. レビ人の町々 (35:1～5)
- K. 逃れの町と死刑 (35:6～34)
- L. 結婚する娘たちの相続権 (36章)

注 解

I. シナイでの最後の日々 (1:1～10:10)

A 人口調査と部族の配置 (1、2章)

1:1 民数記は、イスラエルの民がエジプトを出てから1年1か月後、幕屋が建てられて1か月後に始まる (出エジプト記40:17)。すでに述べたように、この書が民数記と名づけられたのは、民を二度にわたって数えたためである (1章と26章)。ここで言及されている人口調査は、出エジプト記30:11～16と同一ではない。行われた時期も目的も異なっている。二回目の人口調査 (民数記1章) は、おそらく先の調査に基づいて行われたので、総人数はほぼ一致している。

1:2, 3 イスラエルの民は、間もなく

シナイ山から約束の地に出発するところであった。そのため、秩序ある軍団として組織することが不可欠であり、そのために神は人口調査を行うように命じられたのである。この人口調査は二十歳以上で戦に出ることができる者すべてを含むものであった。

1:4～17 人口調査に関して、モーセを補佐する者が部族ごとに一人ずつ任命された。その名前は5～16節に記されている。17節には、「(さて) モーセとアロンは、これら指名された者たちを伴い」と記されている。

1:18～46 人口調査の結果は次の通りであった。

部族	参照箇所	人数
ルベン	20, 21節	46,500
シメオン	22, 23節	59,300
ガド	24, 25節	45,650
ユダ	26, 27節	74,600
イッサカル	28, 29節	54,400
ゼブルン	30, 31節	57,400
エフライム	32, 33節	40,500
マナセ	34, 35節	32,200
ベニヤミン	36, 37節	35,400
ダン	38, 39節	62,700
アシェル	40, 41節	41,500
ナフタリ	42, 43節	53,400
合計		603,550

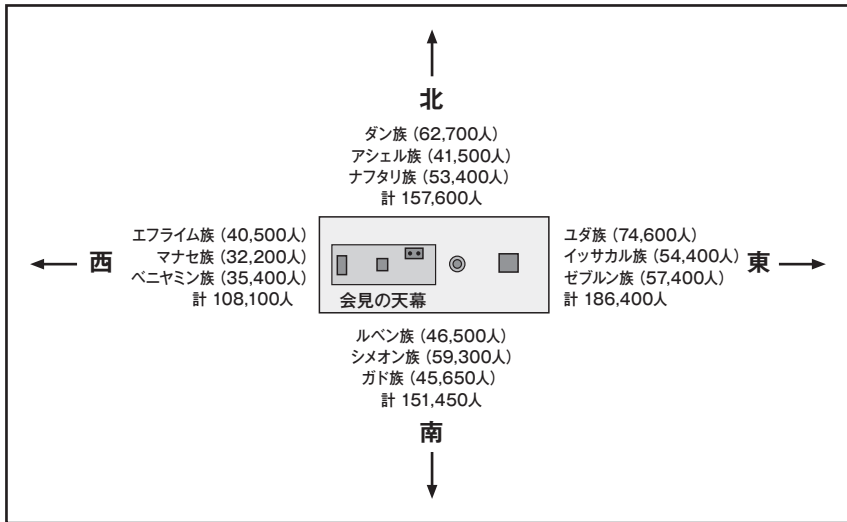
エフライムがマナセより大きいことに注目しよう。これは創世記48:19でヤコブが与えた祝福にかなっている。諸部族は、まず長子ルベンとその宿営 (南) から始まり、次にユダとその宿営 (東)、それからダンとその宿営 (北)、そして最後にエフライムとその宿営 (西) となっている。

1:47～54 レビ人は、イスラエルで兵役につくことのできる者の中に登録される

ことはなかった（47節）。彼らは幕屋を取り外し、組み立て、すべてそれに関連する務めを担っていた。レビ人を幕屋の周りに位置することによって、幕屋を冒瀆から守り、その結果、民を罰から守ったのである

（53節）。

2:1, 2 イスラエルの部族は、自分の天幕を会見の天幕の周りに張るように命じられた。それぞれの側に三部族ずつである。



イスラエルの宿営における部族の配置図

2:3～16 東側には、ユダの旗のもとに、ユダ、イッサカル、そしてゼブルンが宿営した（3～9節）。部族にはそれぞれ軍団の族長がいた。これらの部族の合計は十八万六千四百人であった。南側は、ルベンの旗のもとにルベン、シメオン、そしてガドが宿営した（10～16節）。ルベンの軍団の総数は十五万一千四百五十人であった。

2:17～31 西側は、エフライムの旗のもとにエフライム、マナセ、そしてベニヤミンが宿営した（18～24節）。この軍団の総数は十万八千百人であった。北側は、ダンの旗のもとにダン、アシェル、そしてナ

フタリがいた（25～31節）。これらの合計は十五万七千六百人であった。各部族は、決められた順序で行進し、ユダの宿営が先となった。レビ人はガドの後方、そしてエフライムの前方を進んだ（17節）。

2:32～34 兵役に就くことのできる男子の総数は、六十万三千五百五十人であった（32節）。総人数は、レビ人を含めれば（3:39）、六十二万五千五百五十人となる。この男子の数を民の三分の一と仮定すると、総人口は百八十七万六千六百五十人を下らなかったであろう。戦士の数は、会衆席に座る人の数よりも教会の強さを示す指標と

なるのである。

B. レビ人の人数とその任務 (3、4章)

3章と4章は、1章と2章の人口調査には含まれなかったレビ人の奉仕に関係している。レビ族は、聖所での奉仕のために神に選別された部族である。本来、神は長子を選んでご自分のものとされたのであるが、後にレビ族をその代わりに選び、神への奉仕に当たらせたのである (3:12, 13)。レビには、ゲルション、ケハテ、メラリという三人の息子がいた。彼らの子孫は、幕屋とその調度品の管理が任された。

3:1～10前半 アロンの家 (ケハテの子孫) は祭司の家系であった (9節)。他のレビ人はすべて幕屋に関わる奉仕を行ったが、祭司ではなかった (モーセ五書の後半に登場する「レビ人の祭司たち」[英訳]という表現は、レビ族の祭司を意味している。レビ人はすべて祭司であるという意味ではなく、すべての祭司はレビの子孫である、という意味である)。祭司の家族のことが1～4節に詳述されている。ナダブと

アビフがその冒瀆のために命を絶たれた後、アロンに残されたのは二人の息子、エルアザルとイタマルであった。レビ人とは祭司のしもべであった (5～9節)。アロンとその子らを除いては、だれも祭司の職に就くことはできなかった (10節前半)。

3:10後半～13 旧約の祭司による執り成しでは、個々の罪人を神との親密な交わりへと導くことはできなかった。聖なるものから命がけで遠ざからなければならなかったのである (10節後半)。しかし、今では、私たちの偉大な大祭司、主イエス・キリストの執り成しによって、神に近づくことができるだけでなく、大胆に神の御前に進み出ることができる (ヘブル4:16)。この劇的な変化は、民数記とヘブル人への手紙の間に起きた偉大な出来事、すなわち、カルバリの奇跡に端を発している。

3:14～39 レビ人も登録されたが、戦士としてではなく、礼拝者としてであった (15節)。レビの息子はそれぞれ幕屋の所定の部分の責任を負った。

部族	任務	参照箇所	人数
ゲルション	幕屋とその覆い、天幕と庭の垂れ幕のすべて。ただし、契約の箱を包む覆いは除く。	18～26節	7,500
ケハテ	最も聖なるもの——契約の箱、供えのパンの机、用具、垂れ幕、祭壇、金の燭台、など。	27～32節	8,600
メラリ	幕屋の板、横木、柱と台座、その杭とひも。	33～37節	6,200

レビ人は、幕屋の囲いのすぐ外に天幕を張り、西側にゲルション人諸氏族 (23節)、南側にケハテ人諸氏族 (29節)、そして北側にメラリ人諸氏族 (35節) が宿営することになっていた。モーセとアロンまたその子らは東側に宿営することになった。すなわち会見の天幕の入り口である (38節)。

(見取り図参照)

レビはイスラエルで最小の部族であった。生後一か月以上のレビ人の総数は二万二千人であった (39節)。しかし、22, 28節および34節に記録されている数字の合計は二万二千三百人である。この食い違いについてはさまざまな説明がなされてきた。ウィ

リアムズ (George Willams) は、増加分の300人とは、出エジプト以降に生まれた長子で、レビ人が他の部族の長子に代わって選ばれた時に、当然省かれていたであろう、と指摘している。^{* (2)}

3:40~51 この箇所の意味は次の通りである。すべての長子の代わりとしてレビ人が神ご自身のものになるように選ばれた。レビ人が二万二千人いたのに対し、長子は二万二千二百七十三人であった (39, 43節)。したがって、本来の計画で、(神に) 仕えるはずのイスラエルの長子全員を補うには、レビ人の数が不足した。主は、追加された二百七十三人の長子は、一人当たり五シェケルの代金を支払うことによって、贖い (買い戻し) ができるようにせよ、と命じられた。この贖いの代金 ($273 \times 5 = 1,365$ シェケル) は、アロンとその子らに支払われた (51節)。なお43節で言及されている長子には、出エジプト後に生まれた者だけが含まれている可能性がある。

4:1~3 4章で人口調査が行われたのは、会見の天幕に関わる任務を積極的にできるレビ人の数を割り出すためであった。この人々は三十歳以上五十歳までの者であった。

4:4~20 出エジプト記25:15には、「棒は箱の環に差し込んだままにする。外してはならない」と記されている。しかし、6節を見ると、祭司たちは「担ぎ棒を通す」と書かれている。カイルとデリッチ (Keil and Delitzsch) の注解書では、その解決策として、6節を「担ぎ棒を調整する」と訳すことができる可能性を示唆している。

^{* (3)}

ケハテ族の任務が最初に取り上げられる (4~20節)。アロンとその子らは、天幕と聖なる器具の荷造りをするように指名された (5~13節)。あかしの箱 (5, 6節)、常

供のパンの机 (7, 8節)、金の燭台 (9, 10節)、金の祭壇 (11節)、用具 (12節)、青銅の祭壇 (13, 14節) は、じゅごんの皮の覆いで覆われなければならなかった。その次に、他のケハテの子らが、覆われた用具の数々を運ぶように任命された (洗盤のことはここで言及されていないが、それも運んだはずである)。彼らは、それらが覆われていない時に、触れることも、眺めることも禁じられた。死なないためである (15, 17~20節)。アロンの子エルアザルは幕屋全体とその聖なる用具を管理する責任を持つことになった (16節)。

至聖所と聖所の間には仕切りの垂れ幕があったため、あかしの箱は常に視界から隠されていた (5節)。イスラエルが移動している時でさえ、箱は同じ幕で覆われていた。その幕とは主イエス・キリストの御からだを表している。カルバリの御わざによって幕が永遠に二つに裂かれるまで、大祭司以外には、あかしの箱の上にある神の御座を見ることができなかったのである。

4:21~28 ゲルシオン族は、幕屋の幕、会見の天幕、庭の掛け幕と他の幕を担ぐことになった。アロンの子イタマルがゲルシオン族の監督に任じられた。

4:29~33 メラリの子らの家系は、幕屋の板、その横木、柱、台座、杭とひもを運ぶように任命された。

4:34~49 人口調査の結果は以下の通りである。

ケハテ族	2,750
ゲルシオン族	2,630
メラリ族	3,200
30歳以上50歳までのレビ人 合計	8,580

C. 聖潔と告白 (5:1~10)

この箇所では、宿営が汚されないために

イスラエル人がとるべき予防策が講じられている。3節の命令の根拠は、申命記23:14にあるように、神が宿営の真ん中を歩まれるからである。

5:1～4 ツアラアトに冒された者、漏出を病む者、死体に触れた者はすべて宿営から追い出されなければならなかった。宿営とは、幕屋の領域と、その周囲にあるイスラエルの天幕が占める領域から成り立っていた。

5:5～10 男にせよ、女にせよ、他人に何か一つでも罪を犯したなら、自分が行った罪を告白し、罪過の奉納物を献げ、その五分の一を加えて賠償することが要求された。被害者が死んでいたり、所在が不明であったり、受け取る資格のある親類がいなければ、祭司に償わなければならなかった。

D. 嫉妬についての律法 (5:11～31)

5:11～15 この箇所では、ねたみの裁判と呼ばれる、嘘を見破る儀式について書かれている。この儀式の目的は、夫に不貞を働いたと疑われた女性が有罪か無罪かを判定することであった。その女性は、幕屋の床にある土のちりを混ぜた水を飲まされた。もし有罪なら、それは彼女にとってのろいとなり、腹は膨らみ、ももは痩せ衰えるはずであった。もし彼女が無罪であれば、何の影響もないはずである。12～14節から明らかなように、夫は自分の妻が不貞を働いたかどうかを知らないのである。夫はまず、穀物のささげ物を携えて妻を祭司のところに連れて来ることが要求された。

5:16～31 祭司は、土の器にちりと水を混ぜたものを用意した。祭司は彼女を祭壇、すなわち主の前に連れて行き、その髪の毛をほどき、その手に穀物のささげ物を持たせた。それから祭司は彼女に誓いをさ

せ、もし有罪であればのろいを受けることに同意させた。そしてのろいを書き物に書き、それを苦みの水の中に洗い落とすと、祭司は穀物のささげ物を主に向かって揺り動かし、そのひとつかみを取って祭壇で焼き、その後、女にその水を飲ませた。24節の、「女に水を飲ませ (た)」という語句は、26節でも繰り返されている。彼女が飲んだのは一回だけである。もし有罪であれば、不妊症を含め、警告されていたさばきが彼女に下った。もし潔白であれば、彼女はきよいと宣言され、罰を受けることなく、通常の結婚生活を送り、子を宿すこともできた。29～31節は、ねたみの裁判をまとめたものである。

ねたみは、正当な理由のあるなしに関わらず、結婚生活を破綻させかねないものである。この儀式は、この問題の決定的な解決方法を提供するものであった。有罪であれば神のさばきが下り、無実であれば相手の疑惑から解放されるのである。

聖書を学ぶ人の中には、この箇所には特別な意味があると考える人もいる。イスラエル民族がヤハウェに対して不実であった、という理由でさばかれる日が来ようとしている、と。

E. ナジル人に関する律法 (6章)

6:1～8 「ナジル人」という語は、「分離する」という意味の語根に由来する。ナジル人の誓願は、男でも女でも、ある一定の期間、自発的にできる誓いであった。ミシュナでは、ナジル人の誓願は100日間とされているが、通常は30日間である。まれに生涯ナジル人であり続ける人もいた。サムエル、サムソン、バプテスマのヨハネがその例である。誓願には三つの条件があった。

(1) ぶどうの木から取れるものを食べた

り飲んだりしないこと。これには酢、強い酒、ぶどう汁、ぶどうの実の生のももの、干したものも含まれる(2～4節)。

(2) 自分の髪の毛を切らないこと(5節)。

(3) 死体に近づかないこと(6～8節)。

ぶどう酒は人の喜びを表している。長い髪は男にとって恥であり、屈辱のしるしである。死体は汚れのもとである。

このように、ナジル人は昔も今も、この世の子らには不可解な存在である。喜びを得るために、喜びから身を引き、強くなるために弱くなり、家族を愛するために、家族を「憎んだ」のである(ルカ14:26)。*⁽⁴⁾

6:9～12 この段落は、不用意に死体に接触して誓願を破った場合の手順が述べられている。まず、民数記19章に記されている七日間のきよめの過程を経なければならない。七日目に頭を剃り、翌日には山鳩二羽か家鳩のひな二羽を献げなければならない。一羽は罪のきよめのささげ物、もう一羽は全焼のささげ物とするためである。また、一歳の雄の子羊を、代償のささげ物として連れて来た。これらすべてのいけにえを献げても、聖別が汚されたので、それ以前の日数は無効になり、初めからやり直さなければならなかった。つまり、汚れたナジル人は再び聖別することはできても、汚れた日々は失われたのである。このことは、不信仰に逆戻りした信者であっても回復は可能であるが、神との交わりから遠ざかっていた期間は無駄になってしまうことを意味している。

6:13～21 ここには、誓願の期間を終える時に必要な儀式的ことが記されている。

四つのささげ物が運ばれた。全焼のささげ物、罪のきよめのささげ物、交わりのいけにえ、そして穀物のささげ物である(14,15節)。ナジル人は頭を剃り、その髪の毛を取って、交わりのいけにえの下にある火にくべた(18節)。この儀式を執り行う祭司の役割は、16,17,19,20節に記されている。21節にはナジル人が、誓願を完了した際に自発的に献げるささげ物のことが書かれている。

6:22～27 6章の結びとして、アロンとその子らが民を祝福する際の、美しくも親しみのあることが記されている。かの偉大な伝道者、D・L・ムーディー(Dwight Lyman Moody)はそれを次のように高く評価している。

これは、世界中どこへでも届けることができ、しかも、いくら与えても尽きることはない祝福である。すべての心がこれを口にすることができる。これは神ご自身のことばである。すべての手紙はこの祝福で結ぶことができ、すべての日はこれによって始めることができ、すべての夜はこれによって聖められる。ここには、祝福があり、守りがあり、光があり、天の喜ばしい朝のすべてが、私たちの貧しい人生の上に差し注がれている。これは、主ご自身が、天の限りない賛歌の中から取り出して、私たちにもたらしけてくださる一節の音楽なのである。*⁽⁵⁾

F. 族長たちのささげ物(7章)

7:1～9 この章は、幕屋が建てられた出エジプト記40:17にさかのぼる。イスラエルの族長たちとは一族のかしらたちのことである。彼らの名前は、民数記1:5～16および民数記2章にすでに記されている。

彼らはまず、覆いのある台車六台と雄牛十二頭のささげ物を持って来た（3節）。モーセは、台車二台と雄牛四頭をゲルション族に、そして台車四台と雄牛八頭をメラリ族に分配し、彼らの分の幕屋の備品を運ぶのに使用させた。ケハテ族には車も雄牛も

与えられなかった。聖なる器という貴重な荷物を肩に背負ったからである。

7:10～83 族長たちは、祭壇奉獻のために、十二日間続けてささげ物を持って来た。そのささげ物は、次のように詳しく記述されている。

日	族長の名	部族	参照箇所
1	ナフション	ユダ	12～17節
2	ネタンエル	イッサカル	18～23節
3	エリアブ	ゼブルン	24～29節
4	エリツル	ルベン	30～35節
5	シェルミエル	シメオン	36～41節
6	エルヤサフ	ガド	42～47節
7	エリシャマ	エフライム	48～53節
8	ガムリエル	マナセ	54～59節
9	アビダン	ベニヤミン	60～65節
10	アヒエゼル	ダン	66～71節
11	パグイエル	アシエル	72～77節
12	アヒラ	ナフタリ	78～83節

7:84～89 ささげ物の総計が84～88節に記されている。神はご自身のためになされた奉仕をお忘れにならない。注意深く記録してくださるのである。奉納が終わろうとするとき、モーセは至聖所に入り、あかしの箱の上から語られる神の御声を聞いた。おそらく族長たちのささげ物に対する満足の表明だったのではないだろうか（89節）。モーセはレビ族に属しながら、祭司ではなかった。しかし、神は彼を例外とし、至聖所に入ることを許されたばかりか、そうするように命じられたのである（出エジプト記25:21,22）。

G. 幕屋での奉仕（8章）

8:1～4 アロンは、金の燭台に載せら

れたともしび皿が、燭台の前を照らすようにせよ、と指示された。光が聖霊の証しを、そして燭台がキリストを表しているとすれば、御霊の役割はキリストに栄光を帰すことにある、と再認識させられる。

8:5～13 次に、レビ人の聖別について記されている。彼らはまず、罪のきよめの水を振りかけられ（民数記19章参照）、全身にかみそりを当て、その衣服と自分の身を洗ってきよめられた（7節）。会衆の代表者たちは幕屋の入り口で、レビ人たちの頭に手を置き、アロンはレビ人を、奉獻物として主の前に献げた。これはローマ12:1,2を思い起こさせるものである。今日の信徒は、自分のからだを、生きたささげ物として神に献げるのである。モーセは

その後、全焼のささげ物と罪のきよめのささげ物を献げた。

8:14~22 神は出エジプト後にご自分のものとされた長子の代わりに、レビ人をご自分のものとされたことを改めて説明された。レビ人は祭司に仕えるために任命された。レビ人の聖別は、命令通りに執り行われ、彼らは会見の天幕に関わる奉仕に就いた。

8:23~26 レビ人は、二十五歳から五十歳まで仕えることになっていた(24節)。民数記4:3では、その開始年齢が30歳とされているが、4章での言及は、荒野で幕屋を運んだ人々に適用する、という見方もある。また、8章にある、より低い年齢は、約束の地に幕屋が設置された後、幕屋で奉仕することを指していると理解する見方がある一方、この追加された五年間は、一種の見習い期間である、と理解する見方もある。五十歳で引退する人は、もはや力仕事はできないが、監督的な立場で続けることが許された(25,26節)。この諸節では「奉仕」と「務めを果たす」ということが区別されている。前者は力仕事を指し、後者は監督することを指す。ある人が指摘する通り、レビ人はクリスチャンの姿を描いている。贖われ、きよめられ、聖別されて主に仕え、地上には一切の相続財産を持たないからである。

H. 過越のいけにえ、雲、銀のラッパ (9:1~10:10)

9:1~14 過越の祭りをを行うように、という神の指示(1,2節)は、1章での出来事に先立つものであった。民数記の出来事はすべてが時系列で書かれているわけではない。過越の祭りは、第一の月の十四日に行われた。人の死体に触れたり、旅に出たりして、儀式上(おそらくは意図せず

に)汚れた者は、一か月後の第二の月の十四日(6~12節)に、過越の祭りを守ることができるように、特別な規定が設けられた。しかし、それ以外の者で過越の祭りを守れなかった者は民から断ち切られなければならない(13節)。また寄留者は、希望すれば、ユダヤ人と同じ条件で過越のいけにえを主に献げることが許された(14節)。

9:15~23 次の数節は、次章の先取りをしている。ここでは幕屋をおおった栄光の雲、すなわち昼は雲、そして夜は火のように見えた雲のことが述べられている。雲が天幕から上るときには、イスラエルの子らは天幕をたたんで旅立った。雲がとどまると、民はそこで宿営するのである。雲は、言うまでもなくご自分の民を導かれる神の象徴であった。今日、主がそのような目に見える方法で導かれることはないにせよ(私たちは見えるところによってではなく、信仰によって歩んでいる)、その原則自体は今なお有効である。私たちは主が動くときに動くのであって、主に先んじてはならない。なぜなら「進む先が暗闇であれば、留まることは光」だからである。

10:1~10 モーセは、銀のラッパを二本作るようにと命じられた。これらは次のように使われた。

- (a) 全会衆を会見の天幕の入り口に集めるため(3,7節)
- (b) 進軍の合図をするため
- (c) 族長たちを集めるため(これには一つのラッパだけが使われた)(4節)
- (d) 戦いの際に、警報を発するため(9節)
- (e) 例祭のような特別な日を知らせるため(10節)

このように目的に応じてラッパの鳴らし方は使い分けられていた。5節のように、

短く吹き鳴らせば、**出発**を意味する。最初に出発したのは、幕屋の**東側**の諸部族である。二度目に短く吹き鳴らすと、**南側**にいる者たちが出発する合図となった。おそらく、西側と北側の部族もその順序で続いたと思われる。ラッパは、荒野の行軍のためだけではなく、自分たちの土地でも用いられるはずであった（9節）。「**あなたがたの地**」ということばに注意しよう。神はアブラハムと結んだ約束を成就しようとしておられた。アブラハムの子孫は土地を与えられるが、彼らの不従順と不誠実のために、その地に入るのは四十年遅れることになる。

II. シナイからモアブの草原へ (10:11～22:1)

A. シナイの荒野からの旅立ち（10:11～36）

10:11 11節は、この書の明確な区分を示している。この時点まで、民はシナイ山のふもとに宿営していた。11節から22:1までは、シナイ山からモアブの草原までの旅の記録であり、約束の地までは目と鼻の先である。この旅は四十年近くに及んだ。民は二十日になるまで旅立たなかった。二度目の過越を祝うためである（民数記9:10, 11参照）。

10:12, 13 旅の最初の区間は、シナイ山から**パランの荒野**までだった。しかし、その荒野に到達する前に、三つの休止点があった。——**タブエラ**、**キプロテ・ハ・タアワ**、そして**ハツエロテ**である。民が実際にパランの荒野に着いたのは民数記12:16の時点である。

10:14～28 次に、各部族の行軍の順序が記されている。各部族の軍団長はその先頭に立った。その順序は一つの例外を除いて、2章と同じである。2:17ではレビ族

はガドの後ろ、そしてエフライムの前を進んだようである。10:17では、ゲルション族とメラリ族はゼブルンの後に、そしてケハテ族はガド部族の後に名が記されている。それは聖なる器類を運ぶケハテ族が宿営地に到着する前に、ゲルション族とメラリ族が、一切を建て終えているためであったと思われる。

10:29～32 ホバブはモーセの義兄弟である。**レウエル**（イテロと同一人物）はホバブの父親であり、したがって、モーセのしゅうとであった。ミディアン人であったホバブは、おそらく**荒野**を知り尽くしていたであろう。だからこそ、モーセはイスラエルの民への同行を呼びかけたと思われる。「**私たちにとっては目なのですから**」。多くの聖書解釈者は、この招待はモーセの信仰の欠如を表していると考える。神はすでに導くと約束しておられたからである。

クルツ (Johann Heinrich Kurtz) は別の見方をし、次のように提案する。

雲の柱は、行くべき大まかな道筋、宿営の場所、それぞれの場所での滞在期間を決定したが、水、牧草地、避難場所、燃料の供給などの状況を最も有利に組み合わせるように宿営を整えることに関して、人間の思慮深さは決して排除されてはいない。これらすべての具体的な点において、ホバブの経験や荒野に関する知識は、雲による導きを補う極めて有用なものだった。^{*(6)}

10:33, 34 主の契約の箱は、至聖所と聖所を隔てる仕切りの幕に包まれ（民数記4:5）、ケハテ族が先頭に立ってそれを運んだ。シナイからカデシュ・バルネアまでは三日を要した。栄光の雲が民を覆った。

主が民の休息の場所を探しておられたのである。

10:35, 36 ホバブが実際にイスラエル人に同行したかどうかは不明である。しかし士師記1:16と4:11で彼の子孫がイスラエル人の中に見出されることから、同行したように思われる。朝になって契約の箱が出発するときには、モーセは勝利を主に祈り願った。そして、夕方になってそれがとどまるときには、イスラエルの民のもとにお帰りください、と主に祈った。

B. 宿営内の反逆 (11章)

11:1~3 読者を驚かせるのは、神がここまでのすべてのことをしてくださったのに、民が平気で神に不平を言うことである。この不平を理解する手がかりは、1節の「主の火が・・・宿営の端（※英訳「中心から遠く離れたところ」）をなめ尽くした」にある。つまり、不平を言う者たちは契約の箱から離れていたのである。神からの火は宿営の端までなめ尽くし、その場所の名はタブエラ（「燃える」の意）と呼ばれた。KJV（欽定訳）、NKJV（新欽定訳）は、火が不満分子の一部を焼き尽くした、と記すが、ASV（米国標準訳）は、火が宿営の端を焼き尽くした、と書くにとどめている。いずれにせよ、それは厳しいさばきが下ることを、民全体に前もって知らせる、あわれみに満ちた警告であった。

11:4~9 二度目の不満の声が上がったのは、まさに宿営の真ん中であつたが、今度はその原因が、混じって来ていた者たち、あるいは、烏合の衆という表現の中にある。一部の不信仰な者たちはイスラエル人と一緒にエジプトを脱出していて、この混じって来ていた者たちは、絶えずイスラエルの民を悲しませていたのである。彼らの不満が広がった結果、イスラエル人もエ

ジプトの食物を渴望し、マナを嫌悪するようになった。この出来事を神がどのようにご覧になったかについては、詩篇78:17~33を参照のこと。

何と奇妙なことか

イエスに天からのマナで養われながら

悪しき行いでイエスを悲しませ

その愛に対して罪を犯すとは。

しかし、それよりも驚くべきは

ご自身から迷い出た者たちの反抗心に耐え

その罪をことごとく洗い流してくださること。

11:10~15 モーセはまず、このような民を一人で世話することができない自分自身の無力さを主に訴え、次に、これほどの大群衆に肉を提供することが全く不可能であることを述べた。そして、そのような問題から逃れるために、死を願った。

11:16, 17 主の最初の答えは、七十人の長老たちを任命し、民の重荷をモーセと分担させることだった。聖書研究者の多くは、これがモーセにとって神の最善の答えであつたのか疑問視する。彼らの考え方からすると、神がおおじになったことなら何でも行う力を神が与えてくださるのだから、モーセの責任が減少すれば、神の力の付与も減少する、というのである。^{* (7)} それ以前にも、モーセは義父の助言にしたがつて、行政上の権限を持つ人々を任命している（出エジプト記18:25、申命記1:9~15）。おそらく、ここで選ばれた七十人は、霊的な重荷を負うのを助けるためだったのであろう。この二つの異なる任命を混同してはならない。

11:18～23 民については、神は、彼らが食べるのに十分な肉がある、と言われた。民がうんざりするほど、肉を送ってくださる、というのである。民は一か月間それを食べるようになる。そんなことがあり得るだろうか、とモーセは疑問に思ったが、主は、それを実現する、と約束された。シナイ山に向かう途中、神は奇跡的にご自分の子らに肉を与えてくださった（出エジプト記16:13）。モーセはそのことを思い出すべきであり、主の能力を疑うべきではなかった。状況が切迫してくると、私たちはいかに早く、主の過去のあわれみを忘れてしまうことだろうか。

11:24～30 七十人の長老が正式に任命されると、主の霊が彼らの上にとどまって、**彼らは預言した**。つまり、神からの直接的な啓示を語ったのである。宿営に残った二人の者も預言した。ヨシュアは、この奇跡がモーセの指導者としての地位を脅かすと考えたようで、彼らを制止しようとした。しかし、モーセは、29節のように高貴な答えをし、その度量の大きさを示したのである。

11:31～35 約束の肉は、うずらの大群となってやって来た。31節は、うずらが地上から二キュビトの高さを飛んだということであろうか、または**地面から二キュビトの高さに積まれた**ということであろうか。後者は不可能ではない。渡りの途中、力尽きたうずらが大量に舞い降りて船を沈めたこともある。^{*(8)} 人々は外に出て思う存分食べたが、やがて多くの人が恐ろしい疫病に襲われた。その場所は**キプロテ・ハ・タアワ**（「欲望の墓」の意）と呼ばれた。なぜなら、民の欲望が自らを墓に導いたからである。**ハツェロテ**は、次の宿营地として挙げられている（35節）。

C. アロンとミリアムの反逆（12章）

12:1, 2 イスラエルの歴史における次の悲しい出来事は、民の二人の指導者、ミリアムとアロンに関わるものである。彼らはモーセの姉、そして兄でありながら、モーセが**クシュ人の女と結婚した**ことを非難した。少なくともそれが二人の口実であった。しかし、本当の理由は2節にあるように、モーセの指導力を快く思わず、自分も同じ立場になりたい、という嫉妬心からであった。この当時、クシュ人との結婚を禁じる律法は一つもなかった。イスラエル人が非ユダヤ人との結婚を禁じられたのは、約束の地に来てからのことである。

12:3 モーセは自分を正当化しようとして、自分を指導者の立場に置かれた神に信頼した。モーセの家族（12章）、また指導者たち（16章）、そして最後には、会衆全体までもが（16:41, 42）モーセの権威に異議を唱えた。それにも関わらず、神のさばきが敵の上に下された時も、モーセは溜飲を下げerのではなく、彼らのために執り成しをした。モーセはまさしく、**地の上のだれにもまさって柔和**であった。モーセが自分でこう書いたといっても、モーセの謙遜さを否定することにはならないどころか、むしろ、Ⅱペテロ1:21を例証しているとさえ言える。つまり、モーセは聖霊に動かされて記したのである。^{*(9)}

12:4～8 神は、**モーセとアロンとミリアム**を会見の天幕の入り口に呼び寄せてアロンとミリアムを叱責し、**モーセが神との関係において占めている位置は、いまだかつてどの預言者にもないほど近いものである**ことを思い起こさせた。他の者の場合には幻や夢によって間接的に語ったとしても、モーセとは顔と顔を合わせて（※英訳）語られたのである（8節の明らかにというのは、「直接的に」、すなわち、仲介者

なしで、という意味である)。主の姿とは、何らかの顕現、または目に見える形で現れたもののことである。ミリアム自身も預言者であったが(出エジプト記15:20)、主とモーセとの関係は、主と他の預言者たちとの関係とは異なることを明確にされた。この出来事の後、ミリアムについて記録されているのは、その死だけである(民数記20:1)。

12:9, 10 主は二人に対して怒りを発し、去って行かれた。反逆行為の罰として、ミリアムはツァラアトで打たれた。(しかし)アロンは罰せられていないことから、首謀者はミリアムであったのではないか、という見方もあり、1節の動詞が女性の単数形である点に着目する。他方、自分の姉がツァラアトに冒されるのを目撃することがアロンの罰であった、という見方もある。アロンは大祭司であったため、自分がツァラアトに冒されたら民への務めが果たせなくなる。アロンはその立場のおかげで、ミリアムが受けた辱めを受けずに済んだのであろう。

12:11~16 アロンは自分の罪をモーセに告白し、ミリアムが、その肉が半ば腐って母の胎から出て来る死産の子のようにしないでください、と願った。^{*(10)} モーセの執り成しに応じて、神はミリアムのツァラアトを癒やされたものの、そのきよめに必要な、通常の七日間は隔離するように求められた。神はモーセに、父が、彼女の顔に唾した場合ですら、彼女は宿営から締め出されなければならないことを気づかせた。

D. 約束の地の偵察 (13、14章)

13:1~20 この章では、斥候を派遣することが主によって命じられている。(しかし)申命記1:19~22によれば、それを提案したのは民である。たとえ民の態度が

不信仰であったとしても、神のご指示は民の求めに応じるものであったことは間違いない。十二人の斥候の名前が4~15節に記されている。特にカレブ(6節)とホセア(8節)に注目しよう。モーセはホセアをヨシュアと名づけた(16節)。モーセは十二人の斥候に、その土地と住民に関する完全な報告を持ち帰るように求めた(17~20節)。彼らはまず南のネゲブに行き、次に中央部の丘陵地帯を探ることになった。

13:21~29 斥候は、南のツィンの荒野から北のレホブに至るまで、その地を探った(21節)。22~24節には、ネゲブでの偵察の様子が描かれている。彼らはヘブロンで、アナクの子孫三人を見た。申命記2:10, 11によれば、巨人である。ヘブロンの近くで、彼らはぶどう畑が広がる低地にやって来た。彼らはぶどうの大きな一房を切り取り、それを二人がかりで棒につるして宿営に持ち帰った。ざくろやいちじくも一緒であった。その場所は、エシュコルの谷と呼ばれた。「房」という意味である。斥候の報告の大部分は、土地は美しいが危険な住民がいる、というものだった。(神がその住民を追い出してくださる、と約束されているにも関わらず)イスラエルの力では、その住民を征服することはできない、と考えたのである。

13:30~32 ネフィリム(33節)への言及は、これらの巨人たちが大洪水を生き延びた、という意味ではない。大洪水以前にいたネフィリムの話を聞いていたイスラエル人たちは、これらの巨人たちが彼らと同一だと思ったのである。カレブは(ヨシュアと自分を代表して)、イスラエルは勝利できるという確信を表明した。しかし、他の者たちはそれを真っ向から否定した。「そこに住む者を食い尽くす地」という表現は、現在の住民が、そこに定住しようと

する者はだれであれ滅ぼそうとする、という意味である。

13:33 斥候のうちの十人は、間違っただけの見方をしていた。彼らはカナンの住民の視点から自分たちを見ていたのである(「バツタのように見える」)。ヨシュアとカレブはイスラエルを神の視点から見て、その地を征服することが十分可能だと考えた。十人の不信仰の斥候にとって、**背の高い者たちの問題は乗り越えられないものだった**。二人の信仰ある斥候にとっては、巨人の存在は取るに足らないものであった。

14:1~10 全会衆は、一斉に、モーセとアロンに非難の声を挙げ、主がエジプトから自分たちを解放したのは、約束の地で殺されるように企んでいるからだ、と言って神を非難し、自分たちをエジプトに連れ戻す新しいかしらを立てよう、と呼びかけた(1~4節)。ヨシュアとカレブが、必ず敵に勝てる、と民を説得しようすると、イスラエル人は二人を石で打ち殺そうと結託した(6~10節)。

3節と4節は、不信仰の愚かしさを端的に示している。エジプトに帰るとはどういうことだろうか。彼らの神によって荒廃させられた土地に戻る、ということである。長男を失い、その死を嘆いている土地に戻る、ということである。出エジプトの前夜に、彼らが財産を持ち出した土地に戻るということである。追ってきたエジプト軍が溺死した紅海を渡って戻る、ということである。それに、ファラオが彼らをどのように迎えてくれるというのだろうか。ところが、この選択肢は、カナンで神が勝利に導いてくださると信じるより安全に思われたのである。ヤハウェはエジプトを打ち破り、海を分け、天からのパンで彼らを養い、荒野を安全に導かれた。それにも関わらず彼らはまだ、神が少数の巨人を倒してくださ

るとは信じられなかった。彼らが取った行動は、彼らが神についてどう考えているのかを明らかにするものであった。彼らは神の力を疑った。主が本当に巨人に対抗できるのだろうか、と。彼らは、この一年間で、ヤハウェがどのような御方で、どのようなことをなさるのかを理解できなかった。神に対する理解が低いと、個人も、国全体も破滅に至ることがある。その痛ましい実例がここに記されている。

14:11~19 主は、ユダヤ人を見捨てて、モーセの子孫から新しい国民を起こすことも辞さない、と言われた(11,12節)。しかし、モーセは彼らのために執り成し、そのようなことになれば、異邦の国々は、主はこの民を約束の地に導き入れることができなかった(13~19節)と言うに違いありません、と言った。今や、神の栄誉がかかる事態となっていることを、モーセは全身で訴えたのである。出エジプト記34:6,7で、主はモーセにご自分を現されたことがあった。18節でモーセは、神がご自身について述べたことを、ほとんどそのまま繰り返して、自分の祈りの根拠としている。モーセの神学と民衆の神学の何たる違いであろうか。モーセの神学は神の啓示に基づいていたが、民衆の神学は、人間の想像に基づくものに過ぎなかったのである。

14:20~35 民を滅ぼすことはしない、と神はお答えになったものの、エジプトから出て来た二十歳以上の戦うことのできるすべての男子(民数記26:64,65、申命記2:14)のうち、約束の地に入るのは、ヨシュアとカレブに限定された。民は荒野で四十年の間、不信仰の世代が死に絶えるまで、さまようことになる。息子たちは、父たちの背信の責任を負わなければならなかった(33節)。しかし、四十年後には約束

の地に入ることが許される。四十年と定められたのは、斥候が偵察のためにあの地で四十日を過ごしたからである（34節）。ここでいう四十年とは概数であって、実際は約三十八年である。イスラエルがエジプトを去ってカナンに着くまでは四十年であった。民は、主が与えようとされた善を拒んだために、代わりに選んだ悪に苦しまなくてはならなかった。しかし、その土地に入れなかったからといって、永遠に失われた存在になったわけではない。彼らの多くは、主への信仰によって救われていた。ただ、不従順のゆえに、この世においては、神のご支配による罰を受けなければならなかったのである。

荒野をさまよったイスラエルの民がたどった正確な経路については不明な点が極めて多い。また、それぞれの場所に、どのくらいの期間とどまっていたのかも不確かである。たとえば、カデシュでの生活は37年以上におよび、紅海の海岸（現在のアカバ湾）へ南進する旅に残りの一年がかかった、とする説もある。シナイとモアブの草原を結ぶ経路の地名の多くは、もはや確認することができない。

21節の主の栄光とは、義なる審判者として、イスラエルの不従順な民をさばく神の栄光のことである。イスラエル人は、十度も神を試みた（22節）。彼らは以下のところで神を試みた。紅海（出エジプト記14:11,12）、マラ（出エジプト記15:23）、シンの荒野（出エジプト記16:2）、マナをめぐる二度の反逆（出エジプト記16:20,27）、レフィディム（出エジプト記17:1）、ホレブ（出エジプト記32:7）、タブエラ（民数記11:1）、キプロテ・ハ・タアワ（民数記11:4～6）、カデシュにおいて（斥候たちがもたらした報告に対するつぶやき〔民数記14章〕）である。

エジプトを出た603,550人の戦士のうち、約束の地に入ったのは、わずかにヨシュアとカレブだけであった（29,30節、申命記2:14）。

14:36～38 その地を悪く言いふらした十人の不信仰な者たちは、疫病で死んだが、ヨシュアとカレブはそれを免れた。

14:39～45 自分たちに宣告された運命を聞いた民は、神に従い、その地に入る、とモーセに告げた。それは、カデシュ・バルネアから真北へ向かうことを意味していたと思われる（40節）。しかし、モーセは、もう手遅れであり、主は彼らから離れてしまわれたので、そのようなことをしても打ち負かされてしまうだけである、と彼らに告げた。モーセの助言を無視して、彼らは山地の峰に攻め上ったが、その土地の異教徒の攻撃を受け、敗走した（45節）。

E. さまざまな法令（15章）

15:1, 2 14章から15章の間にどれほどの時間が経過したのかは分らないが、「だれ一人、（その地を）見ることはない」（14:23）、と「あなたがたがその地に入るとき」（15:2）という対比は鮮明である。神のご目的は、罪による妨げを受けたとしても、決して阻止されることはない。神は、カナンの地をアブラハムに与える、と約束された。それゆえに、子孫の一世代が不信仰のためにそれを受け継げなかったなら、次の世代にそれを与えてくださるのである。

15:3～29 本章の1～29節には、約束の地に定住した際、イスラエル人が持参すべきささげ物のことが書かれている。これらのささげ物の大半については、すでに詳しく述べられている。ここでは、会衆（22～26節）、または個人（27～29節）が意図せずに犯した罪が特に強調されている。24節では会衆のための二つのささげ物で

ある雄牛とやぎが挙げられている。レビ記4章では、会衆が連れて来るのは、雄牛だけでよい、と書かれていた。しかし、レビ記4章には、指導者が罪を犯したときは、雄やぎを連れて来なければならない、と書かれている。おそらく民数記では、これらのささげ物が一緒に記されているのに対し、レビ記では別々に述べられているためであろう。20節と21節には、聖書で頻繁に繰り返される命令が書かれている。「初物は主に献げなければならない」。初子であれ、初物であれ、主は、あらゆるものの最良の部分は主のものである、とされたのである。これはまた、自分たちの所有するものはすべてヤハウェから来たものであり、究極的にはヤハウェのものであることを民が忘れないようにするためでもあった。

15:30～36 故意に犯す罪、つまり、主のことばに対する故意の、また挑戦的な反抗のためのささげ物はどこにもなかった。そのような罪を犯した者はみな、断ち切られなければならない（30,31節）。故意に犯した罪の一例が32～36節に書かれている。安息日に薪を集めている男が見つかった。これは明らかに律法に違反することだった。彼（のような者）が殺されなければならない、ということまでは周知の事実であったが（出エジプト記31:15）、処刑の方法は一度も言及されてはいなかった。ここで主は、「宿営の外で、石で打ち殺さなければならない」と宣言された。

15:37～41 ユダヤ人は、衣服の裾の四隅に房を作り、その隅の房に青いひもを付けるように命じられた。青は天を表す色であることから、神の子どもにふさわしい聖さと従順を自覚させるためであった。

F. コラの反逆（16、17章）

16:1～3 アロンの従兄弟であるコラ

（出エジプト記6:18～21）はレビ人であったが、祭司ではなかった。彼は、アロンの家系が祭司職の権利を独占していることに憤慨していたようである。ルベンの部族に属するダタン、アビラム、そしてオンは、自分たちの上にモーセという指導者がいることをいまいましく思っていた。オンという人物は、1節以降は言及されていないことから、他の者たちと同じ運命をたどったのかどうか知ることはできない。二百五十人の名のある者たち、すなわちイスラエルの指導者たちも、その反逆に加担し、（アロンの）祭司職、また（モーセの）民事権に対する反乱に加わった（2節）。彼らは、全会衆が残らず聖なる者である以上、いけにえを献げることから除外されるべきではない、と主張した（3節）。

16:4～11 この問題に決着をつけるために、モーセはコラと、（コラに同調する）反逆者たちに、翌日、火皿を持って出頭するように告げた（6,7節）。香をたくのは祭司の務めである。その彼らを祭司として認めないなら、神は不興をお示しになるはずであった。

16:12～15 ダタンとアビラムはモーセが呼び出しても天幕を出ようとせず、むしろ、モーセの指導を非難するありさまだった。二人が問題にしていたのは、神が「乳と蜜が流れる地」に導くという先の約束（出エジプト記3:8）のことである。ここでは（皮肉混じりに）モーセが乳と蜜の流れる地（エジプト）から彼らを連れ出しておきながら、乳と蜜が流れることのない地（荒野）へ連れて来た、と不満を述べていたのである。

14節の（民の）思惑は、自らの約束を果たせなかったモーセが、今度は自分の失敗や本心を民に悟られまいとしているのではないか、ということであろう。モーセは、

支配者が通常するように民から貢ぎ物を取り立てたことは一度もありません、と主に訴えた。

16:16~22 翌日、コラ、アロン、および、二百五十人の反逆者たちは、火皿を持って幕屋の前に姿を現した。イスラエルの会衆も、コラに同調して集まって来た。そのとき、主の栄光が全会衆に現れた。そして主はモーセとアロンに、会衆を滅ぼす前に会衆から離れよ、と言われた。さばきが下されなかったのは、ひとえにモーセとアロンが執り成しをしたことによる。

16:23~35 場面はコラとダタンとアピラムが住んでいた天幕(24節)に変わる。モーセは残りの民に向かって、彼らの天幕の付近から離れよ、と警告した。そして、もし彼らが普通の死を遂げるなら、つまりすべての人と同じ運命をたどるのであれば、モーセ自身は信用されるに値しない、と明言した。しかし、もし主が奇跡を起こし、大地が口を開けて彼らを呑み込んでしまうとすれば、彼らが反逆の罪を犯していたことが分かる(30節)、と。モーセがこう言い終わるやいなや、地は口を開けて、ダタン、アピラム、そしてその反逆に関わったと思われる家族を呑み込んでしまった(32,33節)。コラがいつ死んだかについては多くの疑問が残っている。コラは、ダタンやアピラムとともに地に呑み込まれた、という見方がある一方(32,33節)、二百五十人の反逆者たちの命を奪ったのと同じ火で死んだのではないか(35節)という推測もある。民数記26:10によれば、コラはダタンやアピラムとともに呑み込まれたのであろう。同章の11節によると、コラの息子たちは滅びを免れたことが分かる。イスラエルに出現した次の偉大な預言者サムエルは、コラの子孫であった(Ⅰ歴代誌6:22,23,28)。30節のシェオルは墓を意

味するが、肉体を離脱した状態を意味している場合もある。

神は、歴史上、ある種の罪に対し、即座にさばきを下して、非常な不快感を示される場合がある。神はソドムとゴモラ(創世記19:24,25)、ナダブとアビフ(レビ記10:1,2)、ミリアム(民数記12:10)、コラ、ダタン、アピラム、および会衆の上に立つ二百五十人(本章)、アナニヤとサツピラ(使徒5:5,10)をさばかれた。このような罪が犯される度にそうしておられるわけではないことは明らかである。しかし、限定的とはいえ、後の時代への警告として、神が突然歴史に介入される場合があるのは確かである。

コラに属するすべての者(32節)とは、彼のしもべたち、または彼に従った者たちのことであろう。

16:36~40 罪を犯した者たちが用いた聖なる火皿は、打ちたたいて延べ板に変えられ、全焼のささげ物の祭壇を覆うものとなった。これらは、アロンの子孫だけが祭司の特権を持つことを記憶にとどめさせるためであった。

16:41~50 これらの厳粛な出来事があつた翌日、民はモーセとアロンが神の民を殺したと言って責め立てた。怒られた主は、彼らを絶ち滅ぼすことも辞さない、と言われたが、モーセとアロンは会見の天幕の前に進み出た。民の執り成しのためだったことは明らかである。すると、神は民を恐るべき疫病で打たれた。アロンが火皿を取って集会のただ中に走って行き、そこで香をたいて、民のために宥めをした時に、やっと主の罰は終わったのである。しかし、その時すでに、一万四千七百人が死んでいた。会衆と同じく、指導者たちも、アロンが祭司であることに反対していたが、そのアロンが祭司として執り成したからこそ、

疫病が止められたのである。モーセとアロンは神の民を殺したのではなく、むしろ彼らを救ったのである。

17:1～9 祭司職がアロンの家系だけに任じられたことをはっきりさせるため、神は、イスラエルの各部族が杖を一本ずつ天幕の中に一晚置くように命じられた。レビの杖にはアロンの名が書かれていた。祭司職の権限は、芽を出した杖（の部族）に託されることになったのである。翌朝、杖を調べると、アロンの杖が芽を出し、つぼみをつけ、花を咲かせて、アーモンドの実を結んでいた。アロンの杖は、神が選ばれた祭司なる復活のキリストを表している。春になるとアーモンドの木が真っ先に花をつけるように、キリストは復活の初穂とされた（1コリント15:20,23）。聖所の金の燭台には、アーモンドの花の形をした節と花卉がついていた（出エジプト記25:33,34）。日毎に燭台に心を配るのは祭司の務めである。アロンの杖は、形状といい、実といい、燭台にふさわしかった。それゆえに、アロンの家族が祭司の務めをすべく、神に選ばれたことが明らかになったのである。

17:10～13 それ以降、アロンの杖は、逆らう者たちへの戒めのため、あかしの箱の中に保管された。この後、民は恐怖のあまり、幕屋の近くに足を踏み入れることさえできなくなった。

G. レビ人への指示（18、19章）

18:1～7 18章は前章の最後の二節と密接に関連している。民の不安を和らげるために、主は幕屋での奉仕に関する指示を繰り返された。その指示に従いさえすれば、神の怒りを恐れる必要はないのである。1節は二つの部分に分かれている。「あなたと、あなたとともにいるあなたの子たちと、あ

なたの父の家の者たち」とは、祭司を含むすべてのレビ人のことである。「あなたと、あなたとともにいるあなたの子たち」とは、祭司だけを指している。前者は、聖所に関わる咎を負わなければならなかった。後者は、祭司職に関わる咎を負わなければならなかった。「咎を負う」とは、聖なる任務を怠り、それを果たせなかった場合に、その責任を負う、ということである。レビ人は祭司の補佐役であったが、祭司の奉仕の間は幕屋に入ってはならなかった。これは死ぬことのないようにするためであった。

18:8～20 祭司は、その報酬として、さまざまなささげ物の中からある部分を受け取ることが許された（8～11節）。また、新しい油、新しいぶどう酒、穀物、そして初なり（12,13節）、聖絶の物（14節）、初子に対する権利も与えられた。人の長子と汚れた家畜の場合は、祭司が息子や家畜の代わりに贖いの代価を受け取った。いけにえの動物の場合、初子は主に献げられ、祭司たちはその分を受け取った（17～19節）。塩の契約（19節）とは、侵すことのできない永久的なもの、という意味である。祭司たちは相続地を受けなかった。なぜなら、主が彼らの割り当てであり、ゆずりとなれるからである（20節）。

18:21～32 レビ族は民から十分の一を受け取ったが、その代わり十分の一を祭司に与える責任を負った。この十分の一は、主への奉納物として献げられた。

19:1～10 19章では、旧約聖書の中で、最も強力なきよめの象徴の一つである赤い雌牛の灰の使い方が扱われている。このささげ物は、特に死者との接触によって生じる汚れの除去に関係するものであった。イスラエルの子らがカデシュで主に背いてからまだ日が浅かった。今や彼らは不信仰のゆえに荒野に送り出されて死のうとして

いた。38年間で60万人以上、つまり一日に40人以上が死ぬことになる。赤い雌牛の灰が必要であることはだれの目にも明らかである。そのような旅を続けながら、死との接触を避けることはだれにもできないからである。

雌牛は宿営の外に連れ出され、屠られた(3節)。祭司エルアザルは、会見の天幕の前でその血を七度振りまき、雌牛は皮ごと、杉の木とヒソブと緋色の撚り糸とともに焼かれた。これらの材料は、ツアラアトに冒された人をきよめるためにも用いられた(レビ記14:4,6)。祭司と、雌牛を焼いた者は、夕方まで汚れを受けた。それから身のきよい人が注意深くその灰を集め、将来の使用のために宿営の外に保管した(9節)。そしてその人も夕方まで汚れた者となった。

19:11~19 この段落では、その灰がどのように使われるべきかが示されている。もし死人に触れたり、または死人が出た天幕の中にいたりして、儀式的に汚れを受けてしまった場合、身のきよい人が、その灰を取り、それに新鮮な水を加えた。身のきよい人は、その水を三日目と七日目に、ヒソブで、汚れた人、あるいは物に振りかけた。七日目に、汚れた人は、衣服を洗い、水を浴びて、夕方にはきよくなった(19節)。

ウィリアムズ(George Williams)は、赤い雌牛がキリストを象徴している、と考える。外面的に汚れなく、内面的には欠点がない。罪の束縛とは無縁で、赤土(アダム)という人間性をまとった方である。^{*}
⁽¹¹⁾しかし、この「型」を適用するにあたっては、行き過ぎた解釈をしないように注意しなければならない。

赤い雌牛の灰が使われたという歴史的な記録は、民数記31章に一度だけある。マ

ントル(J・G・Mantle)はこう記している。

その灰は、罪のいけにえの本質的な特徴を凝縮したものと見なされ、比較的手間をかけず、また時間を無駄にすることなく、いつでも使うことができた。一頭の赤い雌牛の灰は、何百年も利用可能であった。ユダヤ民族の歴史のすべてに対し、たった六頭しか必要とされなかった、と言われている。ほんの僅かの灰があれば、きれいな湧き水と同じ浄化作用が得られたからである。^{*(12)}

ヘブル人への手紙の著者は、赤い雌牛の灰は、人を外面的、儀式的汚れから引き離す以上のことができなかったのに対し、キリストの血は、良心を内側からきよめて、死んだ行いから離れさせる無限の力がある、と論じる(ヘブル9:13,14)。名前は不明であるが、ある著者はこのように述べている。

赤い雌牛とは、私たちの周辺にある霊的な死との避けられない接触に対する神の備えである。それはおそらく、メシアに関わるイスラエルの流血の罪に特別に関係している。これは代償のささげ物に類似してはいるが、それに取って代わるものではない。

水、時には流水で洗うという旧約聖書の規則(レビ記15:13)は、現在では消毒のための医療技術として受け入れられている。

19:20~22 汚れを除く水を使って汚れを落とさなかった者は罰を免れなかった。また神は、その水に触れた者、あるいは振りかけた者は夕方まで汚れ、その者に接触

した者も夕方まで汚れるものとする、と定められた。

H. モーセの罪 (20:1~13)

20:1 この章が始まるのは、イスラエルの民がエジプトを出てから40年、そしてカナンの地に斥候を送り出してから38年経った時のことである。38年間さまよった後、民は今、ツィンの荒野にあるカデシュに戻って来た。そこはまさしく、かつて斥候たちを送り出した場所であった。彼らは38年前の時から少しも近づいていなかったのである！ ミリアムはここで死んで葬られた。19章と20章の間で空費された年月の間に、60万人以上の人々が死んだ。不信仰の苦い実は、一世代にわたって静かに刈り取られたのであった。

20:2~9 モーセとアロンに水がないことを訴えた民は新しい世代であったが、彼らの行動は父親たちと変わらなかった(2~5節)。主はモーセに、岩に向かって語りかけよ、そうすれば水が出る、と言われた。モーセは、幕屋に置かれていたアロンの杖を手取るようになっていたが(9節、17:10を参照)、11節では「彼の杖」となっている。アロンの杖は祭司職の杖であり、モーセの杖は、さばきと権力の杖であった。

20:10~13 以前、マサ(とメリバ)と呼ばれる場所で、民は水を求めて不平を言ったことがあった。その時は、主はモーセに岩を打つように命じられた(出エジプト記17:1~7)。ところが、モーセの忍耐はもはや限界に達していた。第一に、モーセは不用意にも、自分の唇で民を反逆者呼ばわりした(10節)。第二に、モーセはその岩に話しかけるのではなく、杖で二度打った。出エジプト記17章で打たれた岩は、カルバリで打たれたキリストの型であった。

しかし、キリストが打たれなければならないのはただ一度だけである。キリストの死後、聖霊が与えられるが、11節の水はその型である。この件に関するモーセとアロンの罪のため、神は彼らが約束の地に入れないようにされた。神はその場所をメリバと呼ばれたが、出エジプト記17章のメリバとは異なる。これは、メリバ・カデシュと呼ばれることもある。

キャンベル・モルガン(G. Campbell Morgan)は次のように述べている。

彼がこのように怒りを露わにしたことは、すでに述べたように無理からぬこととはいえ、神のしもべが神について間違った印象を民に伝えてしまったことになる。モーセが失敗したのは、ほんの一瞬、信仰が最高度に発揮されなかったからである。モーセが神とその御力を信じていたことには変わりはない。しかし、民の前に、神ご自身を聖なるお方として示すところまでは信じていなかったのである。この教訓は、大いに心探られるものである。正しいことをしても、やり方が間違っているために、悪い結果になる場合があるのである。次の讃美歌は、私たちの思慮が足りなければ、その深い意味を見落としかねない。

主よ、私に語りかけてください。

私が、あなたの御声を生き生きと反映して
語ることができるように。

これは、主のメッセージを伝えることができるように、という祈りをはるかに超えるものである。むしろ、主の口調、

主のご性質をもってそうすることができるよう、ということである。モーセはそこで失敗を犯し、そのために、約束の地から締め出されたのであった。^{*(13)}

I. アロンの死 (20:14~29)

20:14~21 約束の地に入る計画とは、荒野から直接北上するのではなく、まずエドム人の領土を東に進み、死海の東岸に沿って北上する、というものだった。その後、民はヨルダン川を渡ることになる。しかし、エドムの王は、イスラエルの子らが安全に通過するのを拒絶した。ユダヤ人たちがエドムの蓄えを何一つ食べたり、飲んだり、損害を与えたりすることは決してない、と何度も確約したが、無駄であった。その後の歴史で、サウルに率いられたイスラエルはエドム人、すなわちヤコブの兄エサウの子孫と戦いを交え、これを打ち破っている。

20:22~29 民がカデシュから旅立ち、エドムの国境に近いホル山に着くと、アロンは死に、その子エルアザルが後を継いだ(22~29節)。マシュー・ヘンリー (Matthew Henry) はこのように書いている。

アロンは、その咎のゆえに死んだとはいえ、悪人として死んだのではなく、疫病や天からの火によって死んだのでもなく、安らかに、また栄誉のうちに死んだ。アロンは、神の正義の御手が下されて死んだときに通常使われる表現のように、民から断ち切られたのではなく、神の恵みの腕の中で死んだ者として、自分の民に加えられた。モーセはその手で最初にアロンに祭司の衣を着せたが、ここではそれを脱がせている。祭司職を尊ぶなら、アロンがそれを着たまふ死ぬのはふさわ

しくないからである。^{*(14)}

J. 青銅の蛇 (21:1~22:1)

21:1~3 アラドの王は約束の地の南部に住んでいた。王は、イスラエル人が荒野に宿営し、その地に侵攻しようとしていることを聞いて、彼らに攻撃をしかけてきたが、ホルマで敗れた(1~3節)。

21:4~9 葦の海(4節)とは、イスラエル人がエジプトから逃れるときに渡った湾のことではなく、現在アカバ湾として知られている紅海の一部を指している。しかし、葦の海の道とは街道の名前かもしれない。イスラエル人はこの時、アカバ湾までは行かなかった可能性もある。

人々はまたもや、その生活環境について不満を漏らしたので、神は民の中に燃える蛇を送られた。多くの者が死に、さらに多くの者が死にかけていた。神は、モーセの執り成しに応え、青銅の蛇を作り、それを旗ざおの上に掲げるように命じ、その青銅の蛇を仰ぎ見る者はだれでも、蛇に噛まれた傷が癒やされる、と約束された。この出来事は、主イエスがニコデモを教えるために用いられた。すなわち、キリストはさお(十字架)の上に上げられなければならない。それは、信仰によってキリストを仰ぎ見る罪人が、永遠のいのちを持つためである(ヨハネ3:1~16)と。

この青銅の蛇は、後になって国全体の躓きとなったため、ヒゼキヤの時代について破壊された(Ⅱ列王記18:4)。

21:10~20 ホル山からモアブの草原に至るイスラエル人の旅路は、もはや正確にたどることはできない。しかし、途中で宿営した場所は、民数記21:10~22:1に記されている。「主の戦いの書」(14節)とはおそらく、イスラエル初期の戦争の記録

であろうが、もはや手に入れることはできない。ペエルで（16～18節）、主は奇跡的に水を与えられた。それはつかさたたちが杖をもって乾燥した荒野を掘り下げたときのことであった。

21:21～26 アモリ人の国に近づいたイスラエルは通行許可を求めたが、拒絶されてしまった。それどころか、アモリ人の王シホンはイスラエルに戦争を挑むほどであったが、完全に敗北した。このアモリ人の王は、かつてのファラオのように主に心を頑なにされ、彼も、その民も、イスラエルと戦って敗れるようにされたのである（申命記2:30）。「アモリ人の咎」（創世記15:16）は満ち、イスラエルはヤハウェによるさばきの手段となった。

21:27～30 27～30節にある格言風の歌の意味は次のようなものと思われる。「ヘシュボンはモアブ人からアモリ人に奪い取られたばかりである。ところが今ヘシュボンはイスラエルの民の手に落ちた。モアブの町を征服した者たち自身が征服されたのであれば、モアブは三流国と言わざるを得ない」。さらに、この格言が引用されているのは、おそらく、その土地が、完全にアモリ人の王シホンの支配下にあり、もはやモアブの領土ではなくなっていたことの証拠という意味もあったと思われる。この事実を押さえておくことは重要であった。なぜなら、イスラエルはモアブから土地を奪ってはならない、と固く禁じられていたからである（申命記2:9）。

21:31～22:1 イスラエル人が通った経路を正確に復元するのは困難である。おそらく基本的には、ホル山から東に進み、エドムの西の境界の外側を北上し、ゼレデ川に至ったのではないかと、言われている。ゼレデ川に沿って、エドムとモアブの間を東に向かい、モアブの東の境界線に沿って

アルノン川まで北上し、西に向かい、王の道に至った。イスラエルはアモリ人の王シホンを倒し、その後北上して、オグの王国バシヤンを征服した。バシヤンは、ヨルダン東岸に広がる肥沃な牧草地で、やがてイスラエルがヨルダンを渡河して約束の地に入る地点の北に位置する。バシヤンを制圧したイスラエル人は、モアブの草原に戻り、エリコの対岸に宿営した（1節）。この草原は、アモリ人がモアブから奪ったものであったが（民数記21:26）、モアブという名はその後に残ったのである。

III. モアブの草原での出来事 (22:2～36:13)

A. 預言者バラム（22:2～25:18）

1. バラクに呼び出されたバラム（22:2～40）

22:2～14 南のモアブ人は、アモリ人が征服されたと聞き、（不必要に）恐れをなした（申命記2:9参照）。そこで、王バラクは、イスラエルを呪うために預言者バラムを雇おうとした。バラムは異教徒の預言者であったが、真の神について多少なりとも知っていたようである。主はバラムを使って、イスラエルが分離された民、義とされた民、美と栄光にあずかる民である、との御心を明らかにしようとした。バラムに呪いをかけさせようという最初の試みが7～14節に記されている。バラクの使者が占いの報酬を携えてやって来た。つまり首尾よくイスラエルに呪いをかけることに成功したら、彼に報酬を与えるというものであった。しかし、神は「その民をのろってはいけない、主がすでに祝福しておられるのだから」と言われた。バラクは「浪費家」という意味であり、バラムは「民を飲み込む者」または「民を惑わす者」という意味

である。

22:15～21 バラムの二度目の試みが次に記されている。バラムは神の御心を知っていながら、あえて主の先を行こうとした。おそらく、御心が変わることを期待していたのであろう。主はバラムに、バラクの使者たちとともに行くように、ただし、主が告げることをだけをするようにと言われた。バラムが出かけた理由は、Ⅱペテロ2:15,16にはっきりと指摘されている。バラムは「不義の報酬を愛して」行動に出たのである。バラムは、神からいただいた能力を金のために売る「雇われ預言者」の典型である。

22:22～27 主の使い(22節)とは、受肉前のキリストのことである。主の使いは三度もバラムとそのろばの前に立ちふさがった。バラムの動機をご存じだったからである。ろばは主の使いを初めて見たので、回り道をして畑の中に入った。そのため、ろばは、哀れにもバラムに打たれることになった。二度目に、主の使いは、両側に石垣のある、ぶどう畑の間の狭い道に立った。ろばは怯えてバラムの足を石垣に押しつけたので、またもや虐待を受けた。三度目に、主の使いは、右にも左にもよける余地のない場所で彼らに立ちふさがった。ろばは、どうしようもなくなり、地にうずくまってしまったので、バラムに殴打された。これで三度目である。頑迷の象徴であるろばでさえ自分の引き際を知っていたのに、強情で身勝手な預言者はそうではなかったのである。

22:28～40 話す能力を与えられたろばは、自分が受けた扱いは酷いではありませんか、とバラムをなじったが(28～30節)、そのとき、バラムに、主の使いが抜き身の剣を手持っているのが見えた。バラムが不従順とならないため、主の使いが

来られた、との説明をバラムは聞く(31～35節)。その後、主の使いは、バラクのところへ行っても構わないが、神が告げられることだけを語るように、と預言者(バラム)に念を押された(35節)。バラクはバラムと会った後、自分の神にいけにえを献げた。

2. バラムの託宣(22:41～24:25)

22:41～23:12 翌日、バラクはバラムを伴って高い山(ピスガ)に登った。ここからは眼下に広がるイスラエルの天幕群を見ることができた。モーセは後に、この同じ山から約束の地を、たった一望しただけで世を去ることになる(申命記34:1,5)。本章と次章には、イスラエルに関わる、バラムの四つの注目すべき発言が記録されている。最初の三つの発言に先立って七頭の雄牛と七匹の雄羊が、全焼のささげ物として献げられた。最初の託宣は、神が呪っておられない民を呪うことができないバラムの無力さを表している。この託宣は、イスラエルが異邦人国家と隔絶した生活を送り、無数の子孫を残すことを預言したものである。それは、イスラエルが正義の国となり、その最終的な天命が羨望的となることを描いている(7～10節)。バラクがこの祝福に対していくら抗議しても無駄であった。預言者は、主が告げられることを告げなければならなかったからである。

23:13～15 バラクは次に、見晴らしの良い別の場所にバラムを連れて行った。預言者(バラム)がイスラエルの民を見て好ましくない印象を持つように期待してのことであった(13,14節)。

23:16～26 二番目の託宣は、神のイスラエルに対する本来の祝福が不変であることをバラクに確認させるものであった(18～20節)。21節の前半は、民の立場を

述べたものであって、実際の行動のことではない。民は、信仰によって義とみなされたのである。それと同様に、今日、信仰者は、神の愛する御子の完全さのゆえに神の前に立っている。主はイスラエルとともにおられ、民は主を称えることができた。それは主が民の中で王として君臨されたからである（21節後半）。主は彼らをエジプトから救い出し、力を与えられた。彼らにどのような悪の宣告がなされようと、それが実現することはない。むしろイスラエルはやがて勝利し、「神は何という（すばらしい）ことをなさったのか！」（22～24節）と言うようになるのである。バラムが民に呪いをかけることを拒否したため、バラクは彼らを祝福することもしないように命じた（25節）。しかし預言者バラムは、主が告げられること以外は何もできない、と反論した。

23:27～30 三度目にバラクはバラムの口から何とか呪いのことばを絞り出そうとした。今回はペオル山の頂上からであった。

24:1, 2 神がイスラエルを祝福しようとしておられるのを知ったバラムは、もはや呪いの宣告を得ようとはしなかった。バラムがただイスラエルの宿営を眺めていると、神の霊が彼に臨んだ。その結果、バラムは自分の知恵や意志を超えたことを語った。

24:3～9 第三の託宣は、イスラエルの天幕の美しさを語り、比類なき豊穰、限りない繁栄、栄光の王国、そしてすべての敵に打ち勝つ力を預言するものであった。アガグ（7節）とはアマレク人によくあった名前であろう。このうずくまる獅子（イスラエル）をあえて起こす者はだれもない（9節）。イスラエルを祝福する者は祝福されるが、呪いは呪いをもたらすだけで

ある。バラムのこの預言は、「わたしは、あなたを祝福する者を祝福し、あなたを呪う者をのろう」（創世記12:3）という、アブラハムに与えられた契約に呼応する。

24:10～14 期待をすっかり裏切られたバラクは、結局協力しなかったバラムを責めた。しかし預言者バラムは、初めから、自分には主のことばを告げることしかできないと言ったことを思い出させた。バラクを残して帰る前に、バラムは、イスラエルが将来モアブ人に何をするか教えよう、と申し出た。

24:15～19 第四の託宣は、「星」あるいは「杖」が示す）王がイスラエルから現れ、モアブと、すべての騒ぎ立つ者（※17節英訳。エレミヤ48:45参照）を征服する、というものである。エドムもまた、この支配者に従属する。この預言はダビデ王によって部分的に成就したが、それが完全に成就するのは、キリストの再臨のときである。

24:20～25 バラムはモアブと同様の破滅を、アマレク人、ケニ人、アッシェル（アッシリア）、そしてエベル人に対しても語っている（20～24節）。アマレク人はやがて絶滅する。ケニ人は次第に人口が減り、ついにはアッシリア人の捕虜となる。アッシリア人ですらも、キプロス（ヘブル語で「キティム」。一般にキプロスを意味するが、ここではおそらくギリシア、およびアレクサンドロス大王の軍隊を指していると思われる）から来た軍勢に捕らえられることになる。エベルとは、おそらく大洪水後、エベルを父祖とした、非ユダヤ人の子孫のことであろう。

バラムはバラクのもとを去る前に、25章の悲劇的な出来事の原因を作った。

3. イスラエルを墮落させるバラム (25章)

25:1~3 確かにバラムという名前はこの章に出てはこないが、民数記31:16を見ると、ここに書かれているような、イスラエルの民の恐ろしい墮落の原因を作ったのはバラムであったことが分かる。バラクがいくらバラムに報酬を提示してもイスラエルを呪わせることはできなかったが、結局、報酬に目がくらんだバラムは、民の一部をモアブの娘たちとの姦淫や偶像礼拝に溺れさせ、イスラエルを墮落させた。サタンは、直接的な攻撃が失敗すると、間接的な攻撃で成功することが多い。

バラムの隠された本性がここに浮き彫りにされている。ここまでは、バラムは神を敬う預言者であり、神のみことばに忠実であるとともに、神の民をも尊んでいる、と思えるかもしれない。しかし、民数記31:16、Ⅱペテロ2:15,16から、バラムは不義の報酬を愛する、邪悪な背教者であったことが分かる。バラムはバラクに、イスラエル人をつまずかせる方法を助言した。「偶像に献げたいけにえをイスラエルの子らが食べ、淫らなことを行うように、彼らの前につまずきを置かせた」(黙示録2:14)のである。バラムの助言は取り入れられた。その結果、バアル・ペオルの宮でおどましい偶像礼拝が行われるようになった。

25:4~8前半 神は罪を犯した民のかしらたちをみな、白日の下にさらし者にせよ、と命じられた。刑が執行される前に、シメオン族の長は、ひとりのミディアン人の女をイスラエルの宿営に連れて来て、テントの奥の部屋に入った(8,14節)。祭司(エルアザル)の子ピネハスは、男も女も槍で殺した。リッドアウト(Samuel Ridout)はこのように解説している。

ピネハス(「真鍮の口」という名は彼のためにあるようなものである。ピネハスの神に対する忠誠心は揺らぎなく、罪を容赦なくさばいたことによって、自らも、またその家系にも、永続的な祭司としての務めを確保することになった。*

(15)

25:8後半~13 神はイスラエルの宿営に疫病を送り、そのために不義を犯した者、合計二万四千人が命を落とした(一日で二万三千人—Ⅰコリント10:8)。疫病を止めたのは、ピネハスの英雄的な行動であった。ピネハスの神に対する熱心さのゆえに、主は、永遠にわたる祭司職がピネハスとその子孫に受け継がれるように定められた。

25:14, 15 かしらたちがジムリにさばきを下すのを思いとどまったのは、ジムリがその部族の中で高い地位に就いており、ミディアン人の女がかしらの娘であったからかもしれない。しかしピネハスはそうではなかった。ピネハスはヤハウェのねたみを、自分のねたみとしたのである。

25:16~18 主は、ミディアン人(この頃にはモアブ人と混じりあっていた)に対して戦うようにモーセに命じられた。この命令は31章で実行される。

B. 二回目の人口調査 (26章)

26:1~51 再度、モーセは、イスラエル人の人口調査に当たるように命じられた。イスラエルはまもなく約束の地に入り、先住民と戦い、割り当ての相続地を受けようとしていたからである。以下の数字に見られるように、最初の人口調査から千八百二十人の減少である。

部族	人口調査 (1章)	人口調査 (26章)
ルベン (5～11節)	46,500	43,730
シメオン (12～14節)	59,300	22,200
ガド (15～18節)	45,650	40,500
ユダ (19～22節)	74,600	76,500
イッサカル (23～25節)	54,400	64,300
ゼブルン (26, 27節)	57,400	60,500
ヨセフ (28～37節)		
ーマナセ (34節)	32,200	52,700
ーエフライム (37節)	40,500	32,500
ベニヤミン (38～41節)	35,400	45,600
ダン (42, 43節)	62,700	64,400
アシェル (44～47節)	41,500	53,400
ナフタリ (48～50節)	53,400	45,400
合計	603,550	601,730

一章では603,550人であった人口が長い期間を経て601,730人にまで減少した点にムーディー (D. L. Moody) は目を留め、このような感想を述べている。

イスラエルの成長は四十年間停止した。私たちも、教会として、あるいはその他のことにおいて不信仰を続ければ、それと同様にならないとも限らない。^{*(16)}

最も顕著な減少はシメオン族の場合で、37,000人近く減っている。シメオン族は、前章のペオルの事件に大きく関わっていた(ジムリは部族の長の一人であった)。殺された者の大半は、おそらくシメオン族であったのであろう。11節は、コラの子たちは父親とともに死ぬことは免れたことを伝えている。

26:52～56 土地は各部族の人々の数

にしたがって、しかもくじで割り当てられることになった。これは、部族の領土の大きさは部族の人数によって決まるが、土地の位置は、くじ引きによって決まるという意味にほかならない。

26:57～65 それとは別に、レビ人はその数が二万三千人であった。二度の人口調査に含まれていたのはヨシュアとカレブだけである。この二人を除けば、最初の人口調査で名簿に載り、兵役に就いていた者はすべて、この時までには荒野で死に絶えていた。64, 65節は、兵役に就くことのできた者を指している。レビ人と女性は除外されているが、38年の放浪の間に死んだ者がいたことはもちろんである。

C. 娘たちの相続権 (27:1～11)

マナセ族のツェロフハデの五人の娘たちはモーセのところに来て、土地の分配にあたり、自分たちには、イスラエルの中でカ

ナンの土地を分割されるべき男子がいないにも関わらず、**所有地**を願い求めた(26:53)。彼女たちの父はすでに死んでいたが、罪を犯した**コラの仲間**には加担していなかった。主は、彼女たちに、**相続の所有地を与えよ**、と言われた。一般的に、土地は、息子、次に娘、兄弟、おじ、または近親者に受け継がれることが神の御心であった。このようにして、土地は永久に家族の中に保たれるのである(1～11節)。

D. モーセの後継者ヨシュア(27:12～23)

27:12～14 神はモーセに、死ぬ日が近い、と予告され、**アバリム山**(実際には死海の東に連なる山々)に登るように命じられた。モーセが死んだネボ山はこの連山の一部である。

27:15～23 モーセは無私の心で、民を導く後継者を考え、彼に代わる者として**ヌンの子ヨシュア**が指名された。イスラエルにおける祭司職、後には王権も、通常は同じ家系の中で代々受け継がれるものであった。しかし、モーセの後継者は彼の息子ではなく、彼の従者であった(出エジプト記24:13)。

E. ささげ物と誓願(28～30章)

28章と29章では、民がその地で守るべきささげ物と祭りが再確認されている。

〈毎日のささげ物〉

全焼のささげ物は、朝と夕に絶えることなく行ふ。穀物のささげ物と注ぎのささげ物がこのささげ物に含まれる(28:3～8)。

聖所が建っている限り、毎日、朝と夕暮れに以下のいけにえを献げなければならない(28:3～8)。

毎日、朝と夕に、傷のない一歳の雄の子

羊が全焼のささげ物として献げられた。それとともに穀物のささげ物があった。その内訳は、小麦粉十分の一エパに、上質のオリブ油四分の一ヒンを混ぜたものである。さらに、注ぎのささげ物があったが、その内訳は四分の一ヒンのぶどう酒であった。

朝には、これらのささげ物の前に、また夕方にはその後に香の供え物があった。ユダヤ教の聖所が存在した時から、そして聖所が存在していた間、このいけにえの日課は続いたのである。それは祭司たちによる、果てしないいけにえの作業であった。モファット(James Moffatt)は、「レビ人の徒労」と述べているが、まさに彼らは明けても暮れてもこれらのいけにえを献げ続けたのである。この一連の過程に終わりはなく、結局、人は自分の罪と、神からの疎外を意識したままであった。

〈週ごとのささげ物〉

毎週の全焼のささげ物はそれぞれの安息日に献げられ、それに穀物のささげ物と、注ぎのささげ物を加える(28:9, 10)。

〈月ごとのささげ物〉

毎月の第一日に、全焼のささげ物を主に献げ、これに穀物のささげ物と注ぎのささげ物を加える(28:11～14)。

罪のきよめのささげ物(28:15)。

〈ヤハウェの例祭〉

過越：第一の月の十四日(28:16)。

種なしパンの祭り：第一の月の十五日から二十一日まで(28:17～25)。

七週の祭り(28:26～31)。

付記：初穂の白(26節)は、初穂の祭りと混同してはならない(レビ記23:9～14)。

角笛が吹き鳴らされる祭り：第七の月の

第一日 (29:1～6)。

自らを戒める日 (宥めの日)：第七の月の十日 (29:7～11)。

仮庵の祭り：第七の月の十五日から二十一日まで (29:12～34)。

八日目には特別に安息日を守った (29:35～39)。

30:1～5 30章には、誓願に関する特別な指示が書かれている。主に誓願を立てた者は、それを必ず実行しなければならない。まだ父親のもとにいる若い女性が誓願を立てても、それを聞いた父が、最初の日にその誓願に反対を表明し、(つまり禁じたなら)、その誓願は無効である。もし一日が経過しても、父親が何も言わなければ、その誓願は有効であり、実行されなければならない。

30:6～16 6～8節は、結婚前の女性が立てた誓願のここのようである。もちろん、夫がその誓願が立てられた日に誓願を聞いていないのは当然であるが、初めてそれを聞いた日であれば、それを覆すことができた。やもめや離縁された女の誓願には拘束力があつた (9節)。既婚女性の誓願は、夫が、それを初めて聞いた日であるなら取り消すことができた (10～15節)。こうして夫の権威は保たれた。もし夫が最初に聞いた日以降に誓願を取り消すなら、夫が彼女の咎を負わなければならなかった。つまり、必要ないけにえを持って来るか、さもなければ主によって罰せられるかである (15節)。

F. ミディアン人の滅亡 (31章)

31:1～11 神は、バアル・ペオルで、姦淫と偶像礼拝によって神の民を墮落させたミディアン人を滅ぼすようにモーセに命じられた。イスラエル人一万二千人が敵に

進撃し、その男子をすべて殺した。戦いに赴いたのは、大祭司である父ではなく、ピネハスであつた (6節)。おそらく、ジムリとミディアン人の女を殺し、ヤハウエの怒りをそらすことができたのがピネハスだったからであろう (25章)。ピネハスに課せられた使命は、生ける神の軍勢を率いて、主のさばきを完遂することであつた。「男子をすべて」(7節) というのは、ミディアン人の兵士全員という意味であつて、生きているミディアン人全員ということではない。なぜなら、ギデオンの時代、ミディアン人は再びイスラエルの脅威となつたからである (士師記6章)。ツル (8節) とはおそらくイスラエルの宿営で殺されたミディアン人の女、コズビの父親と思われる (25:15) (バラムは自分の家までたどりつけなかったか、または、何かの理由でミディアンに戻っていた。バラムも殺されたからである)。

31:12～18 ミディアンの兵士はことごとく殺されたが、イスラエル人たちは、女たちと子どもたちを生かし、大量の分捕り物を携えて、意気揚々と宿営に連れ帰つた。モーセは怒つた。ほかでもない、イスラエルを罪に引き込んだ者たちを生かしておいたからである。モーセは男の子、および男と寝た女を一人残らず殺すように命じた。若い娘たちは殺されずにすんだ。おそらく家事労働を担わせるためだつたと思われる。この罰は正しいものであつただけでなく、イスラエルのさらなる墮落を防ぐために必要な措置であつた。

31:19～54 戦士や捕虜は、慣例として七日間のきよめを受けなければならなかった (19節)。また、戦利品も、火をくぐらせたり、水で洗ったりして、きよめられなければならなかった (21～24節)。分捕つたものは、戦士たちと全会衆との間で分

配された（25～47節）。軍団の指揮官たちは、部下の戦士たちが一人も死なずにすんだことを感謝し、主の前に大きなさげ物を持って来た（48～54節）。

G. ルベン族、ガド族、そしてマナセの半部族の相続地（32章）

32:1～15 ルベン族とガド族は、ヨルダン川の東の豊かな牧草地を見て、そこに永住することを願い出た（1～5節）。モーセはこれを聞いて、彼らがヨルダン川を渡って、同胞とともに、カナンに住む異教の住民と戦うつもりがないことを意味すると考えた（6～15節）。彼らの父たちも、カデシュ・バルネアにいた時、イスラエル人の意気をくじいて、カナンの地に入るのを思いとどまらせたのである。

32:16～42 しかし、ルベン族とガド族は、ヨルダン川西岸の土地を得るために戦うつもりである、と三度にわたってモーセに確約したので（16～32節）、モーセは許可を与えた。ガド族と、ルベン族と、ヨセフの子マナセの半部族に、アモリ人の王シホンの王国とバシヤンの王オグの王国とが与えられた。彼らは城壁のある町々を、または羊の囲い場を建て直し、また村々や村落を攻め取った（33～42節）。

ルベンとガドは浅はかな選択をした、と感じる人は多い。その土地は確かに肥沃であったが、敵の攻撃にさらされる地域だったからである。ヨルダン川を防壁とすることは（地理的に）無理であった。後年、ルベン族とガド族（およびそこに加わったマナセの半部族）が真っ先に征服され、捕囚として連れ去られた。その一方、もし、イスラエルの中でだれも定住しなかったなら、ヨルダン川の東岸の土地はどうすべきだったのだろうか。神はすでに彼らにその地を与え、そこを占領するように命じておられ

たのである（申命記2:24,31、3:2）。

H. イスラエル人の宿営地のまとめ（33章）

33:1～49 エジプトの地から出て来たイスラエルの子らのモアブの草原までの旅程が、この章に要約されている。上述したように、今日、そのすべての町々を正確に特定することは不可能である。この章は次のように分けて考えることができる。

- （1）エジプトからシナイ山まで（5～15節）
- （2）シナイ山からカデシュ・バルネアまで（16～36節）
- （3）カデシュ・バルネアからホル山まで（37～40節）
- （4）ホル山からモアブの草原まで（41～49節）

このリストは、たとえば21章にあるような、他の宿営地点と比べると完全なものではないことが分かる。

33:50～56 神が侵略軍に命じたのは、カナンの住民を絶滅させることであった。これは現代人には残酷なことに思えるかもしれないが、実のところ、彼らは世界が知る限り、最も腐敗し、不道徳で墮落した人々であった。神は400年以上もの間、辛抱強く関わってこられたが、彼らには何の変化もなかった。もし神の民が彼らを殺さなければ、イスラエルが彼らの不道徳と偶像礼拝に染まってしまうことを神はご存じであった。イスラエル人はその人々を殺すだけではなく、偶像礼拝の痕跡をすべて粉砕しなければならなかったのである（52節）。

I. 約束の地の境界（34章）

34:1～15 神がイスラエルに約束された地の境界は1～15節に記されている。お

およそ、南の境界線は**塩の海**（死海）南端からエジプト川を経て地中海に至る（3～5節）。西の境界線は**大海**（地中海）（6節）である。北の境界線は地中海からホル山（これはイスラエルの旅に登場するホル山ではない）を経てレボ・ハマテに延び、ハツアル・エナンに至る（7～9節）。東の境界線はハツアル・エナンから延びてキネレテの海^{*（17）}（ガリラヤ湖）を経てヨルダン川を下り、塩の海（死海）に至る（10～12節）。九部族と半部族は上記の土地を受け継ぐことになった。なぜなら、二部族と半部族は、すでにヨルダンの東の地が約束されていたからである（13～15節）。

34:16～29 この地を彼らの相続地とする人々の名前が、16～29節に挙げられている。

J. レビ人の町々（35:1～5）

レビ族は他の諸部族と一緒に相続しなかったので、神はレビ人たちのために四十八の町々を取り分けるように命じられた。4節と5節にある計測方法を理解するのは難しいが、少なくとも、その町々が、家畜を放牧するための共有地に囲まれていたことは明らかである（おそらく5節の二千キュビトは、4節で述べた一千キュビトを含んでいると思われる）。

K. 逃れの町と死刑（35:6～34）

35:6～8 レビ人の町々のうち、六つが、**逃れの町**に指定された。誤って人を殺した者は、これらの町々の一つに**逃れ**、安全に裁判を受けることができた。領土の広い部族は、それにふさわしい数の町々を**レビ人**に提供することが求められ、領土の狭い部族もまた、相応の数の町々を提供することが求められた。

35:9～21 ヨルダン川の両側に、それ

ぞれ三つの逃れの町が設けられることになった。殺人者は、殺された者の近親者である仇（かたき）に追われることになるが、逃れの町にたどり着けば、裁判が始まるまでは安全であった（12節）。逃れの町は、（故意の）殺人者に避難所を提供するものではなかった（16～19節）。悪意や敵意をもって罪を犯した者は殺されなければならなかった（20, 21節）。

35:22～28 殺人者が過失致死と思われる場合、その人をさばくのは会衆である（22～24節）。もし無罪となった場合、殺人者は、**逃れの町に大祭司が死ぬまで**住まなければならない、その後、自分の家に帰ることが許された（28節）。もし大祭司が死ぬ前に、殺人者が**逃れの町の境界**からあえて出れば、**血の復讐をする者が彼を殺しても罪には問われなかった**（26～28節）。

大祭司の死は、逃れの町に逃げて来た人々に解放をもたらした。もはや血の復讐をする者から彼らが危害を受けることはない。私たちの偉大な大祭司の死によって、私たちは律法が求める断罪から解放されたのである。この規定の中にある、私たちの主が十字架でなされた御わざの象徴を見落としたら、この規定自体が何と愚かしいものとなることであろうか。

アンガー（Merrill F. Unger）は伝承による詳細の一端を次のように紹介している。

ラビたちによると、逃亡者を助けるために、逃れの町に通じる道を可能な限り整備しておくことがサンヘドリン（ユダヤ人最高評議会）に課せられた義務であった。起伏のあるところは平らにされ、川という川には橋がかけられ、道路自体には少なくとも三十二キュビトの幅がなければならなかった。分岐点にはひとつ

残らず「逃れの町」という標示が掲げられたばかりか、逃亡者に随行するために二人の律法学者が任命された。それは万が一、血の復讐をする者が逃亡者に追いついた場合、なだめることができるようにするためであった。^{*(18)}

この教えを象徴的に見るなら、イスラエルの民は、メシアを死に至らしめた殺人犯である。しかし、それを行ったのは無知が原因であった(使徒3:17)。主イエスは「彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです」と祈られた(ルカ23:34)。殺人者が自分の家を追われて、逃れの町に住まなければならないように、イスラエルもそれ以来、流浪の生活を送ってきた。イスラエル国家が完全に所有地を回復するのは、偉大な大祭司が死ぬ時ではなく(もはや死ぬことはあり得ないため)、この世を治めるために来られる時である。

35:29～34 殺人犯には死刑が定められ、逃れることも、償うこともできなかった(30,31節)。殺人犯は**逃れの町**から金を支払って自由の身になることもできなかった(32節)。殺人で**流された血は土地を汚し**、その血は殺人者の死を要求した(33,34節)。このことを、キリストの死と結びつけて考えてみよう。

L. 結婚する娘たちの相続権(36章)

ヨルダンの東のギルアドに定住したマナセの半部族の代表者たちが、モーセのところに問題を持ち込んで来た(民数記27:1～11参照)。もしツェロフハデの娘たちが他の部族の男性と結婚すれば、彼女たちの土地が相手の部族に移り、ヨベルの年が来れば、他の部族への移譲が確定してしまう、というのである(4節)。その解決策は、土

地を相続した女性たちが、自分の部族の中で結婚することであった。そうすれば土地が一つの部族から別の部族に移ることはない(5～11節)。ツェロフハデの娘たちはそれに従い、マナセ族の中で結婚した(10～12節)。13節は26章からここまでの要約である。

民数記で際立つのは、次の三点である。

1. 一貫して邪悪であり、不信仰である人間の心。
2. 慈悲によって和らぐヤハウェの聖性。
3. 罪深い民と聖なる神の間に、仲介者、執り成し手として立つ神の人(モーセ)。

人間の心は民数記が書かれた当時から変わっていない。しかし、神の聖さと慈しみもまた変わっていないのである。しかし、モーセは、その対型である主イエス・キリストに取って代わられた。キリストにあって、私たちはイスラエルの特徴であったもろもろの罪を避け、その結果、イスラエルが被った神の不興を避ける力を持っているのである。これまで学んできたことを生かすためには、「これらのことが彼らに起こったのは、戒めのためであり、それが書かれたのは…私たちへの教訓とするため」(I コリント10:11)であることを理解しなければならない。

後 注

1. (序論) W. Graham Scroggie, *Know Your Bible*, Vol. 1, The Old Testament, p. 35.
2. (3:14-39) George Williams, *The Student's Commentary on the Holy Scriptures*, p. 80.
3. (4:4-20) C. F. Keil and F. Delitzsch,

- “Numbers,” in *Biblical Commentary on the Old Testament*, III: 25.
4. (6:1–8) Williams, *Student’s Commentary*, p. 82.
 5. (6:22–27) D. L. Moody, *Notes from My Bible*, p. 41.
 6. (10:29–32) Quoted by John W. Haley, *Alleged Discrepancies of the Bible*, p. 431.
 7. (11:16, 17) モーセの弁護の中で注目すべき点は (1) 神はモーセを叱責しておられない。(2) むしろモーセを励まし、70人が御霊を受けた後、モーセの重荷とともに担う、と約束しておられる。(3) 神ご自身がモーセの必要に応じておられる。(4) モーセは、不平でいっぱい、霊的ではない200万人の民を導いていた。(5) 17節は、モーセが御霊から受ける力が減少したというより、同じ御霊が70人に分与されたことを示している。
 8. (11:31–35) *International Standard Bible Encyclopedia* のIV: 2512 “Quails,”の項参照。
 9. (12:3) 後になって、ヨシュアのような、靈感を受けた編集者が、後からこのことばを付け加えた可能性は常にある。
 10. (12:11–16) Keil and Delitzsch, “Numbers,” III: 81.
 11. (19:11–19) Williams, *Student’s Commentary*, p. 88.
 12. (19:11–19) J. G. Mantle, *Better Things*, p. 109.
 13. (20:10–13) G. Campbell Morgan, *Searchlights from the Word*, pp. 47–48.
 14. (20:22–29) Matthew Henry, “Numbers,” in *Matthew Henry’s Commentary on the Whole Bible*, I: 662.
 15. (25:4–8前半) Samuel Ridout, *The Pentateuch*, p. 253.
 16. (26:1–51) Moody, *Notes*, p. 43.
 17. (34:1–15) 「キンネレテ」はヘブル語で「竖琴」のこと。ガリラヤ湖の形から名付けられた。
 18. (35:22–28) Merrill F. Unger, *Unger’s Bible Dictionary*, p. 208.

参考文献

- Harrison, R. K. “Numbers.” In *The Introduction to the Old Testament*. Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Publishing Co., 1969.
- Henry, Matthew. “Numbers.” In *Matthew Henry’s Commentary on the Whole Bible*. Vol. I. McLean, VA: MacDonald Publishing Company, n.d.
- Jensen, Irving L. *Numbers*. Chicago: Moody Press, 1964.
- Keil, C. F., and Delitzsch, F. “Numbers.” In *Biblical Commentary on the Old Testament*. The Pentateuch. Vol. 3. Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Publishing Co., 1971.
- Lange, John Peter. “Numbers.” In *Commentary on the Holy Scriptures, Critical, Doctrinal and Homiletical*. Vol. 3. Translated by Philip Schaff. Reprint. Grand Rapids: Zondervan Publishing House, 1980.
- Merrill, Eugene H. “Numbers.” In *the Bible Knowledge Commentary*. Wheaton: Victor Books, 1985.
- Ridout, Samuel. *The Pentateuch*. New York: Bible Truth Library, n.d.
- Wenham, Gordon J. *Numbers: An Introduction and Commentary*. Downers Grove, IL: InterVarsity Press, 1981.

申命記

序 論

「申命記は、旧約聖書の中でも最も偉大な書物の一つである。あらゆる時代の家庭や個人の信仰に与えたその影響は、聖書中、他のどの書物よりも大きい。新約聖書には八十回以上引用されており、初期のクリスチャンたちが頻繁に参照した旧約の四書（創世記、申命記、詩篇、イザヤ書）からなる小グループを形成している。」

J・A・トンプソン (J. A. Thompson)

I. 正典における独自性

私たちの主イエス・キリストは、荒野で四十日四十夜、サタンから誘惑を受けられた。その誘惑のうち、特に三つが選ばれて、私たちの霊的な益のため、福音書に詳述されている。キリストは三回にわたって「御霊の剣」を用いられたが、その都度、「刃」の同じ部分をお使いになった。その箇所こそ申命記にほかならない！ 申命記はイエスが愛された書卷の一つであったようである。ゆえに、私たちにとってもそうであるのが当然である。悲しむべきことに、申命記は多くの場面でないがしろにされてきた。おそらく、ギリシア語の七十人訳に由来する英語の表題 (Deuteronomy) がやや不適切であったためであろう。それは「第二の律法」という意味であるため、出エジプト記から民数記までに既出の内容の要約、

という間違った印象を与えてしまったのである。神は決して単に繰り返しのための繰り返しはされない。必ず、強調点が違うか、または詳しい内容が新たに述べられている。申命記も同様であって、じっくりと学ぶに値する、すばらしい書物なのである。

II. 著者問題

申命記は全体としてモーセが書いたものであるが、主が靈感を受けた編集者を用いて、細部を再掲し、更新したのかもしれない。モーセの死を記録した最終章は、モーセが預言的に書いたものかもしれないし、ヨシュアか他のだれかが書き加えたものかもしれない。

自由主義的な批評家たちは、申命記こそ、ヨシヤ王の時代（紀元前620年頃）に発見された「律法の書」である、と自信満々に

主張する。実際には、エルサレム神殿を中心としたユダヤ教の礼拝を統一するために、当時のモーセが書いたかのように装った「敬虔な欺瞞」に過ぎない、と彼らは主張するのである。

実際には、「敬虔な欺瞞」というカテゴリーは存在しない。もしそれが欺瞞であるなら、それは敬虔なものではありえないし、敬虔であるなら、それは欺瞞ではありえない。

さらに、列王記第二の22章にある「律法の書」がモーセ五書全体を指してはいない、と示すものは何もない。ヨシヤの前任者であるマナセとアモンは、いずれも邪悪な王であった。彼らは、あろうことかヤハウエの神殿において、偶像礼拝を常態化させたのである。その神殿のどこかに、神を畏れる一人、または複数の人が、モーセの律法を隠した、と思われるのである。

神のみことばを再発見し、それに従うことは、あの偉大な宗教改革さながら、常に、信仰覚醒と回復をもたらす。

モーセを著者と見なす立場の弁明については、「モーセ五書への序論」を参照されたい。

III. 執筆年代

申命記は紀元前1406年までに大部分が書かれたが、同じように靈感を受けた資料が、前述のように、モーセの死後に追加された可能性がある。

執筆時期に関する、より詳しい考察については、「モーセ五書への序論」を参照のこと。

IV. 背景と主題

申命記は、荒野の旅で生まれた新しい世

代のための律法の再提示であって、単なる繰り返しではない。彼らは、今や、約束の地に入ろうとしていた。その地で神の祝福を受けるためには律法を知り、それに従わなければならないのである。

本書は、シナイ以後のイスラエルの歴史を霊的に解釈することから始まる（1～3章）。そこには、歴史から学ぼうとしない者は、その歴史を繰り返すことを免れない、という考え方が示されている。本編では、神の民に対する神の律法の重要な特徴を確認する（4～26章）。次に、イスラエルの入植からメシアの再臨までの、神の恵みと統治の目的が預言されている（27～33章）。そして、モーセの死と後継者ヨシュアの任命をもって本書は完結する（34章）。

使徒パウロは、本書が、イスラエルはもちろんのこと、私たちに対する使信でもあることを思い起こさせている。申命記25:4について説明する中で、「そうです。私たちのために書かれているのです」（1コリント9:10）と記しているからである。

申命記は励ましに満ちている。それを申命記5:1の動詞を使えば、「聞き、学び、守り、行え」と要約することができるであろう。

構 成

I. モーセによる第一の説教——約束の地を前にして（1～4章）

- A. 序論（1:1～5）
- B. ホレブからカデシュまで（1:6～46）
- C. カデシュからヘシュボンまで（2章）
- D. ヨルダン川東岸の制圧（3章）
- E. 従順の勧め（4章）

II. モーセによる第二の説教——約束の地でのきよい生活 (5～28章)

- A. シナイ契約の再確認 (5章)
- B. 不従順への警告 (6章)
- C. 偶像礼拝を行う諸民族への対処 (7章)
- D. 過去からの教訓 (8:1～11:7)
- E. 従順に対する報い (11:8～32)
- F. 礼拝のための諸規定 (12章)
- G. 偽預言者と偶像礼拝者への処罰 (13章)
- H. きよい食べ物と汚れた食べ物 (14:1～21)
- I. 十分の一のささげ物 (14:22～29)
- J. 債務者と奴隷の扱い (15章)
- K. 三つの例祭 (16章)
- L. さばき人と王 (17章)
- M. 祭司、レビ人、預言者 (18章)
- N. 刑法 (19章)
- O. 戦争法 (20章)
- P. 諸法規 (21～25章)
 - 1. 未解決の殺人の償い (21:1～9)
 - 2. 女性の戦争捕虜 (21:10～14)
 - 3. 長子の権利 (21:15～17)
 - 4. 強情で逆らう子 (21:18～21)
 - 5. 木にかけられた犯罪者の死体 (21:22～23)
 - 6. 行動に関する九つの律法 (22:1～12)
 - 7. 純潔に対する違反 (22:13～30)
 - 8. 集会に加わることを禁じられた人々 (23:1～8)
 - 9. 陣営内の衛生 (23:9～14)
 - 10. 社会的、宗教的律法

(23:15～25)

- 11. 離婚と再婚 (24:1～4)
- 12. 社会生活に関わるさまざまな律法 (24:5～25:4)
- 13. 兄弟の死に際しての結婚の律法 (25:5～10)
- 14. 三つの特徴的な律法 (25:11～19)

Q. 儀式と批准 (26章)

- 1. 初物のための儀式 (26:1～11)
- 2. 第三年目の十分の一の儀式 (26:12～15)
- 3. 契約の批准 (26:16～19)

R. 呪いと祝福 (27、28章)

III. モーセによる第三の説教——約束の地のための契約 (29、30章)

- A. モアブで結ばれた契約 (29:1～21)
- B. 契約に違反した場合の罰 (29:22～29)
- C. 契約に戻るための回復 (30章)

IV. モーセ最後の日々——約束の地の外での死 (31～34章)

- A. モーセの後任 (31章)
- B. モーセの歌 (32章)
- C. モーセの祝福 (33章)
- D. モーセの死 (34章)

注 解

I. モーセによる第一の説教——約束の地を前にして (1～4章)

A. 序論 (1:1～5)

1:1, 2 申命記の冒頭、イスラエルの

民は民数記22:1の時点で到達していたモアブの草原に宿営している。申命記1:1では、その場所はスフに面した荒野と書かれている。つまり、モアブの草原の延長線上にある荒野の、(今日)アカバ湾として知られている紅海の一部まで南下していたことになる。ホレブ(シナイ)からセイル山を経て、カナンの入りにあるカデシュ・バルネアまでの旅は、わずか十一日間であったが、イスラエルの民が約束の地に入る準備が整うまでに、何と三十八年の歳月が過ぎていた。

1:3～5 モーセは、イスラエルの子らがエジプトを出てから第四十年に、カナンに入る準備として、この後に続く説教をした。それはアモリ人の王シホンとバシヤンの王オグがともに討たれた後のことであった(民数記21章)。

B. ホレブからカデシュまで(1:6～46)

申命記1:6～3:28より、シナイ山からモアブの草原に至る期間を振り返ることができる。その大半は、すでに民数記で取り上げたので、ここではそれを要約するにとどめる。

約束の地にまで進み、それを所有せよ、との神の命令(6～8節)

民事の諸問題を処理するさばき人の選任(9～18節)

シナイからカデシュ・バルネアまでの旅(19～21節)

斥候たちの派遣とその後の反逆(22～46節)

ヨシュアとカレブを除き、エジプトを出て来た兵士で、約束の地に入ることを許された者は一人もいなかった(34～38節)

C. カデシュからヘシュボンまで(2章)

2:1～23 カデシュ・バルネアからエ

ドムの国境までの旅(1～7節)では、エドム人との衝突を避けた。エドムの国境からゼレデの谷に至る旅(8～15節)では、モアブ人との衝突を避けた。主はイスラエル人たちに、アンモン人に戦いを仕掛けてはならないと命じられた。主はこの地をロトの子孫に所有地として与えたからである(16～19節)。神はすでに、アンモン人がザムズミム人と呼んでいた巨人たち⁽¹⁾を滅ぼしておられた。それは主がエサウの子孫のために、フリ人とアビム人とカフトル人を根絶やしにされたのと同じであった(20～23節)。

2:24～37 第2章の残りの部分は、ヘシュボンの王アモリ人シホンの壊滅的な敗北を詳述している。29節によると、エサウの子孫であるエドム人は、イスラエル人がエドムの国の周辺を通る時、食料と水を売ったようである。しかし、民数記20:14～22の記録は、エドムの王が全く非協力的であった、と示唆している。彼はイスラエルに手を貸すことを頑なに拒んだが、現実ではないにしても、民の中にはユダヤ人に食料と水を売った者がいたらしい。10～12節と20～23節は、モーセより後の時代の人によって付加されたと思われるが、それでも神の靈感を受けたことばであることには変わりがない。

D. ヨルダン川東岸の制圧(3章)

3:1～11 バシヤンの王オグは、六十の町々を持っていたが、そのすべてが高い城壁と門とかんぬきのある要害の町であった。これらに加えて、田舎にも非常に多くの町を持っていた(※英訳)。神である主は、これらの敵もご自分の民の手に渡された。オグは、長さ九キュビト、幅四キュビト(約4m×1.8m)という巨大な鉄の寝台を使った巨人として記憶されている。トンブ

ソン (J. A. Thompson) は、この「寝台」が、普通のベッドを指すのではなく、最後の休憩場所を意味する、と言う。

オグは死んで巨大な石棺（直訳すると「寝台」「休息所」）に葬られた。その石棺は玄武岩でできており、その色が鉄に似ていることから、ここでは「鉄」と呼ばれているのである。…この箇所記録されたところによると、申命記が書かれた当時、石棺はラバ・アモン（今日のアンマン）で見ることができた。^{*(2)}

3:12～20 ヨルダン東岸の占領地は、ルベン人、ガド人、そしてマナセの半部族に分割された（12～17節）。モーセは、すべての勇士たちがみな武装して、先頭に立って渡って行くように命じた。同胞のイスラエル人を助け、ヨルダンの西岸の領土を征服するためである。そうすれば、彼らは自分の所有地、妻と子どもと家畜のいるところ、そして占拠した町々に帰ることができるのである。

3:21～29 モーセはまたヨシュアに、過去の数々の勝利を思い起こし、将来の勝利のために神に信頼するように命じた（21, 22節）。

しかし主は、イスラエルの子らに対してモーセが不従順であったことを怒り、ヨルダン川を渡らせなかった。とはいえ、主はモーセがピスガの山頂から約束の地を四方八方から見ることは許された（23～29節）。

E. 従順の勧め（4章）

四章から、モーセによる律法の詳細な解説に入る。ここでは特に、唯一の真の神への礼拝と、偶像礼拝に転じた場合の罰則を取り上げている。

4:1～24 イスラエルはカナンに入ったら、主なる神の教える掟と定めとを守るように命じられた（1節）。彼らはそれにつけ加えても、また減らしてもならなかった（2節）。バアル・ペオルでの偶像礼拝に対する神の罰は絶えざる警告となるべきであった（3, 4節）（偶像礼拝に対する神の怒りがここで特に言及されているのは、少し前の出来事であり、彼らの記憶に新しいからであろう）。律法を守ることによって、イスラエルは異邦人から偉大な国民として賞賛されるようになる（5～8節）。イスラエルは、過去の経験から、主に従うことの祝福を思い出すべきである（8節）。特に、シナイ山（ホレブ）で与えられた十のことは授かったことを思い出すように命じられた（9～13節）。その時、彼らは神の形を見てはいない。つまり、神の顕現は見たとしても、画像、または偶像として再現できるような具体的な御姿を見たわけではなかったのである。彼らは神を表すいかなる画像、彫像を造ることも、また太陽、月、星など天の万象を拝むことも禁じられた（14～19節）。イスラエル人は、エジプトからの解放、モーセの不従順とその結果としてのさばき、そして偶像礼拝に対する神の怒りを思い起こした（20～24節）。「ただ、あなたはよく気をつけ、十分に用心し、…それらがあなたの心から離れることのないように」（9節）、「あなたがたは自分自身に十分に気をつけなさい。・・・墮落して自分たちのために、どのような形の彫像も造らないようにしなさい」（15, 16節）、「気をつけて…忘れることのないように」（23節）。モーセは、人間の心が生まれつき持っている傾向を痛いほど知っていたゆえに、民が細心の注意を払うべきことを切々と説いたのである。

4:25～40 もし後年、民が偶像礼拝に

頼るなら、捕囚となって国を失うことになる(25～28節)。しかし、そのような時でも、もし民が悔い改めて、心を尽くして主に立ち返るなら、主は彼らを回復させてくださる(29～31節)。イスラエルほど多くの特権を享受した国はどこにもない。特にエジプトからの解放に伴う奇跡はそうである(32～38節)。だからこそ、彼らは主に聞き従い、主の祝福を受け続けるべきなのである(39,40節)。ユダヤ人の歴史の中で、ヤハウエの警告を真摯に受け止めなかったために、民族が捕囚という粛清を受けたのは悲しい事実である。神の警告は無意味なことではない。いかなる人も、いかなる国家も、それを無視して罰を受けないでいることはできないのである。

4:41～43 モーセは、三つの町を逃れの町として、ヨルダンの川向こう、すなわち東の方に、バツェル、ギルアデのラモテ、そしてゴランを取り分けた(41～43節)。

4:44～49 ここから、モーセによる第二の説教が始まる。それはヨルダンの川向こうの地、モアブの草原で語られたものであった。48節は、ヘルモン山がシーオン山と呼ばれている唯一の例である。^{*(3)}

II. モーセによる第二の説教——約束の地でのきよい生活(5～28章)

A. シナイ契約の再確認(5章)

5:1～6 5章は、シナイ山(ホレブ)で十戒が与えられたことを振り返っている。3節は「先祖と」を「先祖とだけ」と、ことばを補ってみるとよい。確かに契約は、先祖たちと結ばれたが、将来の世代のイスラエル人たちのためでもあったのである。

5:7～21 十戒

1. ほかの神を拝んではならない(7節)。
2. 偶像を造ったり、拝んだりしてはな

らない(8～10節)。この戒めは、最初の戒めの繰り返しではない。人間は偶像を用いなくても、神話上の存在や、太陽と月などを拝むかもしれない。このように神を憎む子たちは、父たちと同じ罰を受けることになる(9節)。

3. 主の名をみだりに口にしてはならない(11節)。

4. 安息日は、聖なる日として守らなければならない(12～15節)。ここでは、安息日を守るべき理由として、出エジプト記20:8～11(天地創造における神の安息)とは別の理由が挙げられている。自分たちがエジプトで奴隷であったことを忘れないためであった(15節)。この二つの理由は矛盾するものではなく、補完し合うものである。

5. 両親を敬うべきこと(16節)。

6. 殺人は禁止された(17節)。

7. 姦淫は禁止された(18節)。

8. 盗みは禁止された(19節)。

9. 隣人に対する偽りの証言は禁止された(20節)。

10. 貪欲は禁止された(21節)。

5:22 トンプソン(J. A. Thompson)は、この節について、次のように解説している。

「ほかのことは言われなかった」という表現は珍しく、これらの戒めが、契約の基本要件を完全に要約しているので、もはや他の律法を加える必要がなかったことを示しているのであろう。他の律法はすべて、これらの基本的原則の解釈と拡張に過ぎないのである。あるいは、この表現は、主がこの十戒を正確に宣言された特別な機会のことを指しているのかもしれない。その場合、他のもろもろの律

法は、別の機会に与えられたことになる。
イスラエルで知られ、神から発せられた
律法は、相当な分量にのぼるからである。

* (4)

5:23～33 律法が与えられた時、民は神のご臨在の現れに恐れおののき、命の危険を感じた。(そこで) 彼らはモーセを送り出して主に向かって語らせ、主が言われることは何でもします、と固く誓った(自らの罪深さも無力さもわからないまま、そのように性急な誓いをしたのである)。その結果、残りの律法と規定は、仲介者であるモーセを通して与えられることになった。十のことば、すなわち十戒は、シナイ山にいた民全体に、口頭で語られたものである(30,31節)。

28節で、主は、民が律法を守ると約束したことではなく、恐れと畏敬の念を表したことを評価された(18:16～18と比較)。主の命令を守るといふ心が彼らにはないことを主は知っておられたが、民がそれを守る心を持ち、豊かに祝福されることを願われたのである(28～33節)。

B. 不従順への警告(6章)

6:1～9 民がやがて約束の地に入るとき、神は彼らが正しい道徳的状態にあることを望まれた。主が意図された通りにその地を楽しむためには、従順な民でなければならないからである。そこでモーセは、カナンでの生活に適した、実践的な指導を行った(1,2節)。イスラエル人は、神が唯一の真の神である、という真理を証ししなければならない(3,4節)。そして心から主を愛し、そのことばを守らなければならない(5,6節)。主の戒めは子どもたちによく教え込み、生活のすべての領域で彼らを導く役割を持つものであった。

多くのクリスチャンの親は、子どもたちをヒューマニズム(人間主義)的な学校に行かせるのではなく、むしろ、信仰はもちろんのこと、その他の一般科目も教えるべきことがここで命じられていると受け止めている。

キリストの時代、ユダヤ人たちは実際に律法の一部を手に巻きつけたり、記章として額の上に置いたりしていた(8節)。しかし、主が意図しておられたのは、行動(手)や願望(目)が、律法に制御されるべきである、という意味であったことに疑いの余地はない。

4～9節は、「シェマー」(ヘブル語で「聞け」の意)として有名なところで、11:13～21、および民数記15:37～41とともに、敬虔なユダヤ人が信条のひとつとして、日毎に唱えたものである。

4節の「唯一」というヘブル語は、新約聖書という、より完全な啓示に照らし合わせてみると、重要な意味を持っている。このことばは絶対的な単一性ではなく、複合的な単一性を意味し、この節で使われている神の両方の御名と一致している。ヤハウェ(主)は神の一体性を強調しているのに対して、エロヒーム(神)は、三つの位格を強調している。これと同じく、三位一体をほのめかす不思議なヒントが、聖書の最初の節(※創世記1:1)に登場する。そこでは「エロヒーム」(複数形)の後に、単数を示す動詞「創造された」が続き、創世記1:26では、複数形の代名詞「われわれ」と「われわれの」の後に「かたち」「似姿」という単数形の名詞が続くのである(“Daily Notes of the Scripture Union”)

6:10~15 やがて約束の地に入り、大きな繁栄を手にとると、民は律法を与えてくださった主を忘れ、周りにいる諸国の民の神々を追い求める危険性があった。律法への服従は、ヤハウェの保護を得るためではなく、ヤハウェへの愛を表現する手段であった。聖書という愛とは、ほのぼのした感情ではなく、明示された神の御心に従う周到な行動様式のことである。愛は飾り物ではなく、幸福に不可欠なものである。もし神との契約を破って不従順になれば、神のねたま（ご自身の栄光を願う熱意）のゆえに、民は地の面から根絶やしにされることになる。

6:16 主イエスは、マタイ4:7とルカ4:12でこの箇所を引用し、神殿の頂から身を投げてみよ、という誘惑者の誘いにお答えになった。マサでは、飲むべき水が十分なく、民はヤハウェがともにおられることを疑った（出エジプト記17章）。神のご配慮と善意を疑うことは、神を試みることに等しい。

6:17~25 従順は、イスラエルの敵に対して勝利をもたらす（17~19節）。後の世代の人々は、神がエジプトから民を救い出し、神が彼らの幸せと祝福のために律法を与えてくださったことを教えられる必要があった（20~25節）。25節をローマ3:21,22と比べてみよう。律法が、「御前でこのすべての命令を守り行うなら」と言うのに対し、恵みは、「信じるすべての人に与えられる」と言う。今日、信仰者は律法の土台となる義、すなわち神の義を身にまとっている（Ⅱコリント5:21）。これは行いによらず、信仰によるのである（ローマ4:5）。

C. 偶像礼拝を行う諸民族への対処(7章)

7:1~5 イスラエルの民は、当時カナ

ンに住んでいた異教の偶像礼拝の国々と交わらないように、という強い警告を受けた。神は、ヒッタイト人、ギルガシ人、アモリ人、カナン人、ペリジ人、ヒビ人、およびエブス人という七つの異邦の民を、その言いようのない罪のゆえに罰し、イスラエルを汚れから守るために聖絶し、偶像礼拝の痕跡をすべて消し去るように命じられた。3節は、ユダヤ人が2節の命令に従わないことを見越しているのであろう。なぜなら、その地の住民をすべて滅ぼせば、異民族間の結婚の恐れがなくなるのは明白だからである。

7:6~11 神はイスラエルをご自分のために分離された民として選ばれた。神はイスラエルが他の国々と同じようになることを望まれなかった。神が彼らを選ばれたのは、彼らがどの民よりも数が多かったからではない（彼らはあらゆる民のうちで最も数が少なかった）。神が選ばれたのは、ただ彼ら愛されたからであり、すべてにおいてご自分に従うことを望まれたからである。千代とは永遠を意味する。主がカナンの諸民族を憎まれたのは、その悪行のゆえである。主がイスラエルの民を愛されたのは、何か良いところがあったからではなく、ただ彼らを愛し、その先祖たちに誓った誓いを守られたからである。主権者である神の選びの恵みを、だれが理解できるだろうか。

7:12~26 もし神の民がその地で神に忠実であるなら、神は彼らに多くの子ども、豊かな収穫、家畜の大きな群れ、健康、そして敵に対する勝利を与えて祝福される（12~16節）。もし敵に恐れを抱くようなことがあれば、過去の神による力強い解放、特にエジプトからの解放を思い出すべきである（17~19節）。神は再び彼らのために、スズメバチを送って敵を滅ぼされる。スズ

メバチは、文字通りの意味かもしれないが、破竹の勢いで攻め来る軍隊の比喻かもしれない（20～24節）。主は敵を一挙に滅ぼすことはなさない。その地が野の獣で溢れかえらないためである（22節）（人の住まない地域は野生動物の繁殖地となるが、都市部は野生動物の数を抑制する役割を果たす）。勝利がすぐにやって来ないもう一つの理由は、士師記2:21～23に見られるように、神が、残った異教徒を用いて、イスラエルを試されるからである。偶像はすべて完全に破壊しなければならなかった。偶像がイスラエルにとって誘惑とならないためである（25, 26節）。イスラエルにとって、もっとも深刻な脅威とは、カナンの人々ではなく、彼らの偶像と、それに付随する不道德な行為であった。彼らが最も備えるべき戦いは、目に見えるものではなく、霊的なものだったのである。

D. 過去からの教訓（8:1～11:7）

8章と9章について、トンプソン（J. A. Thompson）が簡潔に指摘している。

ここでは、過去の重要な教訓が二つ取り上げられている。第一に、イスラエルの民が自力でどうすることもできなかった荒野の時代における神の配慮の経験は、主の摂理による懲らしめを通して、彼らに謙遜の教訓を教えたことである。その体験の記憶が、新天地の安全と繁栄の中で、自分たちの功績に慢心しないように彼らを守ることになった（8:1～20）。第二に、これから始まる征服の成功は、神が彼らの正しさを認めたと解釈してはならない、ということである（9:1～6）。実際、金の子牛事件（9:7～21）や他の多くの事件でも（9:22～29）、イスラエ

ルは頑迷で反抗的であることを自ら証明したのである。^{* (5)}

8:1～5 モーセは民が、神の愛と守りに促されて神に従うように訴えた。主が民の人生に試練が訪れるのを許されたのは、彼らを謙遜にし、真価を試し、主への従順を確かめるためであった。しかし、それと同時に、荒野をさまよう40年の間、主は天からのマナで彼らを養い、すり切れることのない衣服と、足が腫れない履き物を用意してくださったのである。

神は、民の心のうちにあるものをご存じであった。神が荒野でイスラエルを試したのは、それによって何かを知ろうとされたのではなく（2節）、民の反抗的な性質を民自身に明らかにし、民が神のあわれみと恵みをより深く理解できるようにするためであった。その放浪を通して民が学ぶべきもう一つの教訓は、主を恐れることであった。

8:6～20 モーセの主張の根拠は、神がすでになさったことだけでなく、まもなくなさろうとしていることの中にもあった（6, 7節）。カナンの良い地の祝福が詳しく描写されている（7～9節）。しかし、繁栄はやがて忘却につながり、忘却はやがて不従順につながるの、そのような危険への警戒が必要だった（10～20節）。神の真実さに対し、イスラエルもそれに見合う真実さが求められた。神は、父祖たちとの契約を守られた（18節）。今度は民が主に約束したことを守る番であった（出エジプト記19:8）。もし民が、自分たちのためになされた神の力あるわざを忘れ、自分の富は自分の力で築き上げたのだ、と考えるなら、カナンの異邦の国々が滅ぼされたように彼らもヤハウェに滅ぼされてしまうことになる。

9:1~3 9章は、イスラエルがこれから戦う国々についての記述から始まる。イスラエルは、40年前のように恐れる必要はなかった。なぜなら、神が彼らのために戦ってくださるからである。「主ご自身が…彼らを根絶やしにされ…あなたは…彼らをただちに追い払って滅ぼすのだ」。神の絶対的主権と人間の主体性が相補的に働いていることに注目しよう。約束の地を確保するためには、その両方が不可欠だったのである。

9:4~7 神がカナンに住民をその地で打ち破られた後も、イスラエルは勝ち誇ってはならなかった。三度にわたって、民は、成功が自分の正しさによるものだ、と思いつがることのないように、警告を受けている(4~6節)。神が彼らにその地を与えようとしておられるのは、今の住民の邪悪さのゆえ(4節)であり、アブラハム、イサク、ヤコブに誓われた神の誓いを果たすため(5節)であって、彼らに何か功績があったためではない。それどころか、彼らは挑戦的であり、また主に逆らい続けてきたことはもちろん(7節)、うなじを固くする民(6節)であったというのが事実である。

9:8~23 モーセはホレブ山(シナイ山)での民の振舞いを例として挙げ(8~21節)、22節と23節では、民が罪を犯した他の場所について触れている。タブエラ(民数記11:3)、マサ(出エジプト記17:7)、キプロテ・ハ・タアワ(民数記11:34)、カデシュ・バルネア(民数記13:31~33)。なお、金の子牛はもはや復元できないように破壊されたことに注目しよう(21節)。

9:24~29 シナイ山で、ヤハウェの怒りが民に下されずに済んだのは、ひとえにモーセの執り成しがあったからである。モーセは、民の正しさを根拠に嘆願したのではなく(民には一片の正しさもないことが

一層明らかになった)、むしろ、「あなたのゆずりの民」(26節)とあるように、神の所有であること、また「あなたのしもべ、アブラハム、イサク、ヤコブを思い起こしてください」(27節)とあるように、神の約束がその根拠であり、そして、「あなたがそこから私たちを導き出されたあの国では、…『主は、約束した地に彼らを導き入れることができなかった…』と言うでしょう」(28節)とあるように、御力(神の力がエジプト人に嘲られないように)が根拠であった。

10章1節では、話がシナイ山での出来事に戻っているので、9章29節につながっていることが分かる。聖書は常に時系列で書かれているとは限らない。出来事の順序は、単なる時系列ではなく、それよりも重要な霊的、または道徳的な順序にしたがっているのである。章の区分^{*(6)}としては、11節の後が適切であろう。なぜなら、1~11節までは、シナイ山での出来事(10:8で取り上げられている主題)を扱っているが、12節以後は、神の豊かなあわれみに基づく従順への勧めであるからである。

10:1~5 この段落では、二度目の律法の授受と、二枚の石の板が契約の箱の中に納められたことが記録されている。3節は、モーセが自ら箱を作った、という意味ではなく、それを作らせた、という意味に過ぎない。(他の人に)命じてなさせたことを、その人がした、と言うのはよくあることである。

10:6~9 6節と7節は、この時点で唐突な変化のように思われるが、実は挿入部分であって、後日起きた出来事を記している。しかし、そのおかげで、読者はアロンの死までたどることができる。

モセラとは、おそらく、ホル山のあった地域のことであろう。そこはアロンが死ん

だ山だからである（民数記20:25～28）。モセラの正確な位置は今日では不明である。おそらく、アロンの死に言及したことがきっかけとなって、モーセは祭司職や、レビが祭司の部族として選ばれたという原点を回想したのかもしれない（8,9節）。祭司職の三重の役割が8節に書かれている。それは（1）契約の箱を運び、（2）主の前に立って仕え、（3）御名によって祝福することである。祭司職について教えておくことは重要であった。この世代がまもなくカナンに入ろうとしていたからである。

10:10, 11 モーセは、四十日四十夜、再びシナイ山に留まり、民のために執り成したことをもう一度民に思い出させた。神は祈りを聞かれ、さばきは保留にされ、彼らは約束の地に入り、その地を占領せよ、との命令を受けたのであった。

10:12～22 ヤハウェが民に求めておられたことは、「恐れ、歩み、愛し、仕え、守る」（12,13節）ということばに集約される。主の命令はすべて彼らの幸せのために考えられたものであった（13節）。モーセは、神が偉大であり（14節）、ご自身の特別な民としてイスラエルを選ばれ（15節）、正義にして公正であり（17～20節）、イスラエル民族に対して恩恵を施してきてくださったのだから（21,22節）、神に従うように、と民を励ました。心の包皮に割礼を施した者、とは神に従う人のことを言う（16節）。

11:1～7 モーセはもう一度、イスラエルの過去の歴史を振り返って、そこから霊的な教訓を引き出そうとしている。2節で、モーセは荒野で生まれた者たちではなく、古い世代で生き残った人々に語っている。エジプトを出た時に二十歳以上であった兵士たちはカナンに入れなかった（2:14、ヨシュア記5:6）。神はご自分の民

をエジプトから解放し、荒野の中を導かれたが、ダタンとアビラムの反逆を容認されなかった。偶像礼拝を行うエジプト人たちと、イスラエル民族自体の中にいる反逆者を神が徹底的にさばかれたことは、神の不興を招くことがいかに愚かなことであるかの教訓としなければならない。

E. 従順に対する報い（11:8～32）

11:8～17 逆に、その地で長生きする方法は（9節）、主が命じるすべての命令を守ることであった（8節）。従順であれば享受できる土地の様子が、10～12節に書かれている。「自分の力（足）で水をやっていて」という表現は、水を汲み上げるための踏板、または足で開く水門のことを指しているのであろう。エジプトは、もともと不毛の地であったが、灌漑によって肥沃な土地になった。しかし、約束の地は、自然を支配する神から特別な恩恵を受けた土地であった（11,12節）。豊富な雨と豊かな収穫は、従順の報酬であるが（13～15節）、神を忘れ、偶像礼拝にふけるなら、干ばつと不毛に悩まされることになる。

11:18～21 神のことばは、家庭の会話の主題となり、大切にされ、実践されなければならない。みことばを実践することの報いは、彼らの日数が、天が地の上にある日数のように多くなる（21節）ことであった。

後代のユダヤ人は、18節を文字通りに解釈し、聖書の一部を革製の小袋に入れて額につけたり、家の側柱につけたりした（今もそうしている人々がいる）。しかし、19節を見ると、その真意が暗示されている。みことばを手に結び付けるとは、手抜きやずさんな仕事に手を貸さないこと

であり、額の記章とする、というのは、視界に入るもの、つまり目を向ける場所、欲しいものを神に制御していただくことである。門柱のみことばとは、神に対する責任、特に、私たちに託された子どもたちに対する責任のもとにある家庭と家族の生活を指している（“*Daily Notes of the Scripture Union*”）。

11:22～25 主の道を歩む者は、異教のカナン人たちを追い払い、彼らが足の裏で踏むすべての場所を所有することになる。所有の原則が24節に述べられている。すべての土地は、約束の上では彼らのものであったが、実際にそこに入って自分のものとする必要があった。それは、私たちが神の約束を自分に当てはめなければならないのと同じである。24節に示されている境界線が、歴史上、イスラエルに実現したことはまだ一度もない。確かに、ソロモンの王国は、大河（ユーフラテス）からエジプトとの国境にまで及んだが（Ⅰ列王記4:21）、イスラエル人がその地域をすべて領有していたわけではなく、ソロモンに貢ぎ物を献げながらも、内政上の独立を保つ国々が含まれていた。24節は、他の多くの節と同様に、主イエス・キリストの千年王国において成就することになる。

11:26～32 こうして、祝福かのろいのいずれかがイスラエルを待ち受けることになった。従えば祝福、従わなければのろいである。カナンの二つの山はこの真理を表していた。ゲリジム山は祝福を、エバル山はのろいである。シェケムに近いこれらの二つの山は、狭い平地を隔てて向かい合っていた。諸部族の半分は、ゲリジム山に立ち、祭司たちは従順の報いとしての祝福を宣言した。残りの六部族はエバル山に立

ち、祭司たちは不従順に伴う呪いを宣言した。そのいずれの場合も、民はみな、「アーメン」と言わなければならなかった。これら二つの山がもつ意味を詳しく知るには、申命記27:11～26を参照のこと。

モレの樫の木（テレビンの木）とは、おそらく創世記35:1～4に記されているものであろう。そこは数世紀前、ヤコブが自分の家から偶像礼拝を一掃した場所であった。この点にわざわざ言及しているのは、地理的な導きだけではなく、霊的な導きを加える意図があったからであろう。

F. 礼拝のための諸規定（12章）

12:1～3 神の民は、この地に入るに当たって、すべての偶像と偶像の祭壇、そして偽りの礼拝が行われていた場所を破壊しなければならなかった。木製の彫像（ヘブル語で「アシェリーム」）とは、女神の象徴であり、柱は、男神バアルの象徴であった。

12:4～14 神は、礼拝のためにいけにえやささげ物を持って来る場所を定めておられた。この場所は、当初は幕屋が建てられた場所（シロ。ヨシュア記18:1）であったが、後には神殿が建てられた場所（エルサレム）である。これらの指定された場所でのみ、礼拝が許された。クリスチャンにとっての礼拝の中心は人なる御方、目に見えない神が目に見える姿をとられた主イエス・キリストである。神はカナンの地で行ってはならない、荒野での一種の変則的な行いを見過ごしにされた（8,9節）。

12:15～28 レビ記17:3,4において、神は、牛、羊、やぎなどのいけにえの動物が屠られたら、それらを幕屋に持って来なければならない、と命じておられた。しかし、民がカナンに定住しようとしている今、その律法は変えられなければならない。こ

れからは、ユダヤ人が、いけにえに用いる動物を屠り、食べることができるようになった。**かもしかや鹿**（いけにえには使われないきよい動物）の場合と同じように食べることができるようになった。この許可は、儀式上汚れた人も、きよい人にも与えられた。しかし、**血を食べてはならない**という警告が何度も繰り返された。なぜなら**血はいのちだから**であり、いのちは神のものだからである。

12:29～32 イスラエルの人々は、異教徒が行っている偶像礼拝の慣習を調べることすらはならない、と厳しく警告された。それは、**真の神の礼拝**にそのような悪い習慣を持ち込む誘惑に陥らないためである。31節は、モレクやとケモシュの礼拝に関わる恐ろしい慣習について言及している。新約聖書でパウロは、偶像礼拝の背後にある力は悪魔的なものである、と教えている（Ⅰコリント10:20）。偶像礼拝の本性を知ったとき、その残虐性や卑劣さは驚くに値しない。人間の心が、真の神からの光を求めるのではなく、このような暗黒にやすやすと引き込まれてしまうことは、申命記が宛てられたイスラエルの民が例証している。イスラエルの第三代目の王ソロモンは、主が御名を置かれた都エルサレムに、実際にケモシュとモレクのための祭壇を築いたのである（Ⅰ列王記11:7）。

G. 偽預言者と偶像礼拝者への処罰（13章）

神の民を偶像礼拝に誘惑しようとした者は、個人であれ、集団であれ、**石で打ち殺されなければならなかった**。**預言者**（1～5節）、**親族**（6～11節）、**共同体の一員**（12～18節）であるかどうかは関係なかった。人々を偶像礼拝に駆り立てる預言者は、たとえ預言通りの奇跡が起こったとしても従

ってはならないのである。そのような人は偽預言者であり、**殺されなければならなかった**。近親者であっても、家族を偶像礼拝に誘った者は殺されなければならなかった。

13節の**よこしまな者たち**とは、卑しい輩、すなわち「無益な子ら」（ヘブル語で「ベリヤアル」）である。**町の住民**を神から遠ざけ、偶像へ導いた者は、**その町の住民とともに殺され、その町は焼かれることになった**。

カナン人の町々に下ったのと同じさばきだが、偶像礼拝を行うイスラエル人の**町**にも下った。つまり、完全な破壊がなされることになった。神は不公平な方ではない。たとえ、選ばれた民の間に起こった罪であっても、厳しく対処される。しかし、その動機には違いがあった。ユダヤ人の町々の場合は、ちょうど父親が子どもを懲らしめるように、国全体を正すことが目的だったのである。

H. きよい食べ物と汚れた食べ物（14:1～21）

14:1, 2 この二つの節は、死者を悼むために自分の身を傷つける、という偶像礼拝の慣習を禁じている。ユダヤ人は神の創造物である肉体を異邦人以上に尊重していた。

14:3～21前半 この段落では、**動物**（4～8節）、**魚類**（9,10節）、**羽がある昆虫**（19節）、または**鳥**（11～18,20節）のどれであるかに関わらず、**きよい食べ物と汚れた食べ物**についての再確認がなされている（19節の例外としては、レビ記11:21,22を参照）。レビ記11章にも同様のリストが示されている。この二つのリストはあらゆる細部まで同じというわけではないし、また、そのような意図で作られたわけでもない。ある**動物**は衛生的な理由で、またある

動物は、偶像礼拝の儀式に使われたり、異教徒に崇拝されたりしたために、汚れたものと見なされた。

食べ物に関する新約聖書の原則は、マルコ7:15、ローマ14:14、I テモテ4:3～5に記されている。異邦人は自然に死んだ動物の肉を食べることが許されたが、ユダヤ人は許されなかった(21節)。そのようなことをすると、申命記12:23に違反することになる。動物から血が正しく抜かれていないからである。

14:21後半 子やぎはその母の乳と、同じ鍋で煮てはならなかった(21節)(これはカナン人の習わしだったらしく、モーセ五書では、三度禁止されている)。普通に考えれば、この規定は、クリームと混ぜた肉料理が腐るときによく起こる中毒を防いでくれるはずである。そればかりか、両者を一緒に食べると、カルシウムの値が相殺されるという証拠もある。このような制約から、肉料理と乳製品は別々の食器に盛りつけるという、ラビの複雑なルールが生まれたのである。

I. 十分の一のささげ物(14:22～29)

14:22～27 22～29節は、十分の一のささげ物という主題を扱っている。ある注解者は、この部分は、神のみに属し、レビ人に与えられ、イスラエル人が食べてはならないとされた最初の十分の一(レビ記27:30～33)を指してはいない、と考えている。むしろそれは、祭りの十分の一と呼ばれる、副次的な十分の一のささげ物で、献げる本人もその一部を食することができたものと思われる。一般に、この副次的な十分の一のささげ物は、神が礼拝の中心として定めた場所に持って行くことになっていた。しかし、ささげ物をする人が、神の御名が置かれた場所から遠く離れていて、

自分の十分の一を持って行くことができない場合は、作物をお金に換え、そのお金を聖所に持参し、そこで食べ物や飲み物を買ひ、主の前で喜び楽しむことができた。26節にあるように、聖書は完全な禁酒を説いていない点に注意すべきである。とはいえ、節度を守り、自制し、中毒にならないようにすること、また他の人を不快にさせるようなことは慎むように教えている。ぶどう酒と強い酒の違いは、ぶどう酒が(言うまでもなく)ぶどうから作られるのに対して、強い酒は、穀物や果物、または蜂蜜から作られる点にある。ささげ物をする者は、二年間にわたり、十分の一、またはそれに相当する金銭をもって来ることが求められた。

14:28, 29 三年目には、家にある十分の一を、レビ人や、寄留者、孤児や、やもめを養うために使った。このように、主にとっては、貧しい者や困窮している者の優先度が高いことが分かる。「貧しい者に施しをするのは、主に貸すこと。主がその行いに報いてくださる」(箴言19:17)。

J. 債務者と奴隷の扱い(15章)

15:1～3 七年の終わりごとに、イスラエルの子らの負債はすべて帳消しにされることになっていた。七年目は、おそらく安息年と重なったのであろう。外国人がユダヤ人に負う債務を帳消しにする必要はなく、この律法は、ユダヤ人の間で生じた負債にのみ適用された。マシュー・ヘンリー(Matthew Henry)は以下のような説明を加えている。

七年目は毎回、解放の年となった。土地は耕作を免れて休み、使用人たちはその義務を免除された。他にもいろいろ恩

恵のわざはあるにしても、これは、金を借りたが返せずにいた者が免責される年でもあった。しかも、返済できるようになってから、良心のゆえに返済しないではいられない思いになったとしても、債権者が法令に基づいて取り立てることは決して許されないのである。^{*(7)}

聖書で七という数字は、満ち足りた状態、または完全な状態を表している。時が満ちると、神は御子を遣わし、御子による罪の赦免を宣言された。その「免除の年」とは、ユダヤ人だけでなく（3節）、すべての人のためのものである。

15:4~6 4節は、一見、11節と矛盾しているように思われる。4節は、彼らの地には**貧しい人がいなくなる**という時の到来を示唆しているのに、11節では、貧しい人が国のうちから絶えることはない、と書かれているからである。プリンジャー(E.W. Bullinger)の注はこの点で助けになる。4節は、「あなたのうちに貧しい人がなくなるため」という意味ではないか、と言うのである。^{*(8)} 言い換えれば、同胞の負債を免除すべき理由は、継続的に貧困に陥る人がいなくなるように、という意味である、と。債権者が痛手を被ることにはならない。なぜなら、神が豊かに**祝福**してくださるからである。11節は、貧しい人が絶えることはないのは、罰という面もあるが、分かち合いの思いやりを教えるためでもある、という趣旨である。

15:7~11 七年目には一切の負債が帳消しにされるという事実により、**免除の年**が近づくにつれ、**貧しいイスラエル人**にお金を貸し渋ってはならなかった。貸し渋りは、9節でいうよこしまな考え、または卑しいことにほかならない。これに関連して、

ユダヤ人が歴史上、自国民を大切にすることで有名であったのはもっともなことである。パウロは、モーセが10節で言っているのと同じことをⅡコリント9:7で言っている。「神は、喜んで与える人を愛してくださるのです」。この節は単に命令であるにとどまらず、約束でもある。神は、だれに対しても返済の義務を負っておられないからである。「おおらかな人は豊かにされ、他人を潤す人は自分も潤される」(箴言11:25)。

15:12~15 ヘブル人の奴隷もまた、七年目の間に自由の身にしてやらなければならなかった(12~18節)。しかし、まず必要なものを十分にあてがってでなければ去らせてはならなかった。神はご自分の民をエジプトの奴隷状態から解放された時、必要なものを豊かに備えてくださった(出エジプト記12:35,36)。それゆえ、自由にされた奴隷は、**何も持たずに去らせては**ならなかったのである。主が民に願っておられるのは、ご自身の模範に倣うことである。黄金律(※「人からしてもらいたいことは何でも、あなたがたも同じように人にしなさい」マタイ7:12)を言い換えれば、「主があなたにしてくださったように、あなたの兄弟にしてあげなさい」ということになる。

15:16~18 その一方、奴隷は自由を拒否して「愛による終身奴隷」となる道を選ぶこともできた。その選択を示すためには、主人の家の戸口にきりで耳を刺し通すことが必要であった。奴隷の価値は雇い人の二倍であった。

15:19~23 19節から16:17にかけては、ヤハウェが御名を置かれた場所で行うべき役目についての規定が書かれている。

1. 動物の初子をより分けること(15:19

- ～23)。
2. 過越の祭り(16:1～8)。
 3. 七週の祭り、すなわち五旬節 (16:9～12)。
 4. 仮庵の祭り (16:13～17)。

きよい動物の**初子**は、主に献げられることになっており、民はそれを食べることが許されたが、**血**は口にしてはならなかった。動物は傷や欠陥がないものでなければならず、最良のものだけが神に献げられることになっていた。

K. 三つの例祭 (16章)

16:1～8 16章では、イスラエルの男子が毎年、中心的な聖所に行くことになる三つの例祭が再確認されている。その目的について、ムーディー (D.L. Moody) はこう書いている。

聖なる祭りは次のような目的と効用のために (一般的に) 定められたものである。

1. 神の民を、他の諸民族から区別するため。
2. すでに受けた恩恵の数々をこれからも忘れないため。
3. キリストによって、さらに与えられる恩恵の型や象徴となるため。
4. 神の民を、聖なる礼拝によって一つにするため。
5. 神が定めた聖なる礼拝によってきよさを保つため。^{*(9)}

過越と種なしパンの祭りは切っても切れない関係にあった。**過越**については、1, 2, 5～7節に、**種なしパンの祭り**については3, 4, 8節で説明されている。これらの祭りは、

神の民が、自分たちのためになされた贖いの御わざを思い出すためのものであった。主の晩餐 (聖餐式) は、新約の信徒にとって、週ごとに、私たちの過越であるキリストが犠牲になられたことを記念するものである。**種なしパンの祭り**は、贖われた者たちの生き方を示すものである。それは「あなたの神、主が与えてくださった祝福に応じて」(17節) 賛美に満ち、「悪意と邪悪」のないもの (I コリント5:8) でなければならない。

ここに記された過越に関する詳細は、出エジプト記12、13章で記されている内容とはいくつかの点で異なっている。たとえば、何を献げるか、どこで献げるかは、それぞれの箇所に相違がある。

16:9～12 七週の祭り (五旬節) は小麦の初穂の収穫から始まったが、それは聖霊が与えられることの象徴であった。種なしパンの祭りの二日目の (大麦の) 初穂の祭りと混同してはならない。**進んで献げるささげ物**とは、II コリント 8、9章の場合と同様、個人の努力に対する主の祝福 (この場合は作物) に応じて献げるものであった。

16:13～15 仮庵の祭りは、収穫期の終わりに行われ、イスラエルがキリストの支配する地に再び集められることを予表するものである。

16:16, 17 年に三度イスラエル人の男子は**みな**、それぞれの力に応じて、ささげ物を持って主の前に出るものとされた。ムーディー (D. L. Moody) は、彼らが参加しなければならない三つの祭りが持つ霊的な意味を示唆する。

過越の祭り、五旬節、そして仮庵の祭りは、完成された贖いを象徴している。

1. 十字架の受難が示す苦しみ
 2. 聖霊の降臨が示す恵み
 3. 来るべき王の最終的勝利が示す栄光*
- (10)

16:18~20 さばき人たちと、つかさたちは正直で、正しく、公平でなければならない。また、賄賂を受け取ってはならない。賄賂を受け取ると、人は公正なさばきができなくなるからである。

16:21, 22 木でできたアシェラ像とは、木製の柱で、異教の女神を表していた。やがて主の祭壇はエルサレムの神殿に置かれることになるが、元来、そこに木を植えることは容易ではなかったにもかかわらず、偶像礼拝の象徴を植え、ついには偶像を建てたのであった（Ⅱ列王記23:6）。

L. さばき人と王（17章）

17:1 いけにえの動物に欠陥があってはならなかった。それらは、傷もなく汚れもない神の子羊の象徴だからである。

17:2~7 偶像礼拝の疑いのある者は、裁判にかけられなければならなかった。二人の証人または三人の証人の証言が必要とされた。もし有罪となれば、石打ちの刑に処されることになっていた。

17:8~13 町の長老たちでは手に負えないような法律上の問題が起こった場合、その事案はさばき人のもとに送られることになっていた。17:9を17:12および19:17と比較すると、このように困難な事案を審理する祭司の集団と裁判官の集団があったようである。大祭司とさばき人の長が、それぞれの座長であったことが、12節で用いられている定冠詞によって暗示されている。この裁判は、神の聖所がある場所で開かれた。この法廷が下した判決は最終的なものであった。いわば、イスラエルの最高

裁判所だったのである。もし告発された人が祭司やさばき人に聞き従わなければ、その者は死ななければならなかった（12, 13節）。

17:14~20 神は、およそ400年も前の時点で、民が王を求めるようになることを見越し、君主の資格を次のように述べられた。

- (1) 神が選ばれた人物でなければならない（15節）。
- (2) イスラエル人でなければならない——あなたの同胞の中から（15節）。
- (3) 馬を増やしてはならない、つまり、敵に勝つために、そのような自然の手段に頼ってはならない（16節）。その信頼は主に置くべきである。
- (4) 民をエジプトに戻らせ、そこで手に入る馬で救われると考えてはならない（16節）。
- (5) 多くの妻を持つてはならない（17節）。これは一夫多妻制の禁止と、偶像礼拝に誘う妻たちの危険に対する警告であり、政治的同盟を結ぶための結婚を禁じるものでもあった（17節）。
- (6) 銀や金を過剰に持つてはならない。それにより、いつのまにか主に頼らなくなるかもしれないからである（17節）。
- (7) 主の律法を書き、読み、そして守り行わなければならない（18~20節）。高慢になったり自分勝手になったりするものがないためである。絶えず（主の）律法と時間をかけて向き合うことにより、王自身が民の模範となるべきである。
- (8) 思い上がって高ぶってはならない（20節）。

黄金時代のイスラエルを治めたソロモンは、この戒めのほとんどすべてを破った。その結果、自分自身を破滅させ、その王国を滅亡させるに至ったのである（Ⅰ列王記10:14～11:10）。

M. 祭司、レビ人、預言者（18章）

18:1～8 ここでも、祭司たちとレビ部族に対する神の配慮を見ることができる。彼らには部族としての相続地の割り当てがないため、民によって支えられることになった。ささげ物の中から彼らが受ける部位は、肩と両頬（あご骨）と胃、および穀物、ぶどう酒、油、そして羊の毛の初物であった。6～8節には、レビ人が自分の家を売って、神の御名が置かれた場所に移り住み、神に仕えることが記されている。彼は他のレビ人とささげ物を分かち合うことになっており、これは相続財産を売った分に加えられた（レビ人は、部族としての財産を相続しなかったが、自分の財産は所有することができた）。

18:9～14 イスラエル人は、目に見えない世界と交信できると主張する者との接触が一切禁じられた。霊の世界と交信するための八つの手段が挙げられている。それらを神は忌み嫌うべき慣わしと呼ばれた。そこに含まれるのは、占いをする者（魔法を使う男女）、卜者（予言者、偽預言者）、まじない師（手相占い師、易者、占星術師）、呪術者（祈祷師）、呪文を唱える者（魔術師）、霊媒をする者（巫女）、口寄せ（降神術の主導者）、死者に伺いを立てる者（降霊術者）である。これらの「職業」には重複しているものもある。

悲劇的なことに、この約3400年前の禁止令は、大昔と同様に、「啓蒙された」現代にも必要である。ヘンリー・ボッシュ（Henry G. Bosch）はこのように述べて

いる。

悪魔崇拝、悪霊、およびオカルトは、悪ふざけなどではなく、不気味な現実である。私たちがこの時代の終わりに近づいているしるしの一つは、魔法、占星術、その他さまざまな形のオカルトに広く関心が集まっていることである。…数えきれないほど多くの人が、毎日、星占いに頼り、交霊会に出席し、今は亡き愛する者と交信しようとしている。また、悪魔崇拝や悪霊にも大きな関心を寄せている。聖書は、このような行為に対して繰り返し警告を発している（レビ記19:31、20:27、Ⅱ歴代誌33:6、エレミヤ10:2、ガラテヤ5:19,20）。聖書が警告する内容は、何と切迫した、現代的なものである。命取りとなりかねないものと戯れることは慎もうではないか。^{*(11)}

以上のような、禁じられた「交信」に関して全き者である（13節）、というのは、神の御声だけに耳を傾けるという意味にほかならない。

18:15～19 オカルトの指導者たちが行うさまざまな悪とは著しく対照的に、15節にあるのは、神の真の預言者であるキリストに関する、すばらしい預言である（使徒3:22,23）。15,18,19節の描写に注目しよう。

- (1) 預言者——すなわち、神のことばを語る者。
- (2) あなたのうちから——すなわち、真の人間。
- (3) あなたの同胞の中から——すなわち、イスラエル人。
- (4) 私のような——すなわち、神に立てられた、という意味で、モーセのよ

うな者。

- (5) わたしは彼の口にわたしのことばを授ける——靈感の完全性。
- (6) 彼はわたしが命じることすべてを彼らに告げる——啓示の完全性。
- (7) すべての人は、彼に聞き従う責任を負う。

この箇所はまた、この預言者が神と人との仲介者となってくださることを教えている。シナイ山で恐れをなした人々は、神が二度と自分たちに直接語りかけてこないように、そして火を見て死ぬことがないように願った。その願いに対して、神は仲介者としてのキリストを約束されたのである。この箇所がユダヤ人にとってメシアへの希望を抱かせるものになったことは、福音書でも明確に認められる（ヨハネ6:14、7:40）。

18:20～22 偽預言者は、さまざまな方法で見抜くことができる。すでに学んだように、もし彼らが人々を真の神への礼拝から遠ざけようとするなら、彼らは偽者である（13:1～5）。さらにもう一つの見分け方がある。もし予告していたことが実現しなければ、その預言者は死刑にされるべきであり、だれもそのような者が口にするかもしれない呪いを恐れる必要はないのである。

N. 刑法（19章）

19:1～10 ヨルダン川の東側には、すでに三つの逃れの町が設けられていた。殺人者が血の復讐をする者から逃れることができるように、モーセは人々に三つの町を（ヨルダン川の）向こう岸にも設置するように指示した（1～7節）。もし民が約束の地を完全に所有するようになったら、さらに三つの逃れの町を設けるという規定が加えられた（8～10節）。この三つの追加の

町については、それ以上の言及はされていない。イスラエルが創世記15:18で約束された地をすべて占領することはなかったからである。ヨルダンの西の三つの町とはケデシュ、ヘブロン、それにシェケムである（ヨシュア20:7）。

19:11～13 逃れの町とはいえ、殺人者に安全を提供するものではなかった。たとえこれらの町の一つに逃れたとしても、長老たちは、証拠を吟味し、有罪であれば、**血の復讐をする者の手に渡さなければなら**なかったのである。

19:14 地境とは、自分の土地の境界線を示すために畑に置かれた石のことである。このような石を、夜中にこっそり動かして自分の農地を広げると同時に、隣人を欺くことも可能であった。この一節がなぜ正義の実践、すなわち逃れの町や、真の証人と偽の証人を扱う箇所のちょうど真ん中に置かれているのかは説明が難しい。しかし、その場所によって教えが曖昧になることはない。

19:15～21 訴訟事件では、一人の証言では不十分であった。二人または三人の証人が必要だったのである。不正な証言をした証人は、祭司たちとさばき人たちにさばかれ（17:8,9）、被告を訴えた罪に応じて罰せられることになっていた（16～21節）。

「目には目を」と「歯には歯を」という原則は、西洋文化でLex talionis（ラテン語で「同害の刑法」の意）と呼ばれるものである。これは一般に、復讐を許可するものであるかのように誤解されているが、そうではない。この律法は、残酷な行為を許可するものではなく、それを制限するものである。この文脈では、偽証者にどのような罰を与えることができるかを指している。

O. 戦争法 (20章)

20:1~8 20章は、神の民のための、戦争に関する手引書である。祭司は、敵と戦う民を励ます役割を担っていた。兵役を免除される者の立場は多岐にわたる。

- (1) 新しい家建てたばかりの者
- (2) ぶどう畑を作って、まだその実を食べたことのない者
- (3) 結婚はしたが、まだ夫婦関係を持っていない者
- (4) 恐れて弱気になっている者

この、(戦線から) 戻る自由とは、自分たちが始めた戦争にのみ許され、アマレクとカナン人に対する神の命令によって行われた戦争のように、すべての人が戦うことを義務づけられた戦争の場合には許されない、というのがユダヤ人学者の一致した意見である。^{* (12)}

20:9 優れた軍隊には組織と階級が必要であるため、つかさたちは、**民の指揮を執る軍の長たち**を任命した。

20:10~20 イスラエルは他の国々と異なり、ヤハウエの指揮のもとで戦う、という違いを明確にしなければならなかった。その違いがあつてこそ、イスラエルが、愛なる神のもとにある聖なる国民であることが、より鮮明になるのである。戦争は避けられない。しかし、主は戦争が引き起こす害悪を制御される。他の国々、たとえば、アッシリアの残酷な習慣^{* (13)}を調べさえすれば、これらの指針の正しさが分かる。戦争がどのように行われるべきかについての指示が与えられている。以下の区別に注意しよう。

1. 近くの、または遠くの町(10~18節)
カナンの地の町々は (イスラエルにとつ

て) 差し迫る危険であり、完全に墮落しており、破滅がふさわしかった。相続地の外にあり、アブラハムに約束された残りの地域にある町々には、まず和平の条件を提示しなければならなかった。もし拒否すれば、男たちだけが殺され、女、子どもは助命されなければならなかった。これらの町々は、イスラエルの国境の中にある町々ほどイスラエルを (道徳的に) 汚染する大きな脅威ではなかったからである。

2. 実のなる木と、実のならない木 (19, 20節)

この行動原則とは、イスラエルが「焦土作戦」を行ってはならない、というものである。

有用なものは残すべきであり、土地を見境なく破壊してはならないのである。

P. 諸法規 (21~25章)

1. 未解決の殺人の償い (21:1~9)

もし、その土地で、刺し殺された者が見つかり、犯人が特定できない場合、そこに**最も近い町の長老たち**が贖いをするのが要求された。彼らは**雌の子牛を絶えず流れる谷川へ連れて下り**、そこで子牛を殺した。彼らは雌の子牛の上で手を洗い、自分たちはその犯罪に関して潔白である、と申し立てをし、流血の罪が自分たちに及ばないように願った。個人の罪は確定できなくても、集団として対処すべき罪は残っており、土地は**血の汚れ**からきよめられる必要があった。これは、**最も近い町**の責任となった。

ある人は1~9節を「御子の死に関わる神の重大な審問」と呼んだ。イスラエルには、キリストの死に関連して、血の罪があり、それは、正しい方法できよめられなければならない。

2. 女性の戦争捕虜 (21:10~14)

イスラエル人は、戦争で捕虜として捕らえられた姿の美しい女と、きよめの儀式と別居の期間を経て結婚することが認められた（ただし、この箇所は、カナンの住民である女性には適用されなかった）。その結婚は仮のものであり、その後、彼女を気に入らなくなったら別れてもよかった。しかし、決して彼女を金で売ってはならなかったし、乱暴に扱ってはならなかった（※英訳）。

3. 長子の権利 (21:15~17)

嫌われている妻の息子であっても、もし長子であるなら、相続権を奪われることはなかった。この数節は、神が一夫多妻を認めていたことを証明するものではなく、たとえ、一夫多妻の場合であっても、神は長子の権利を守っておられることを示すものである。時には、ヤコブとエサウ、エフライムとマナセのように、神がご自身の主権によって、家族の長子を除外し、年下の者を祝福される場合がある。しかし、これは神の選択による例外であり、ここに述べられているような一般原則ではない。

4. 強情で逆らう子 (21:18~21)

反抗的な息子は、町の長老たちに有罪とされれば、石打ちの刑に処されなければならなかった。これは、ルカ15章に登場する、悔い改めた放蕩息子への待遇と比較されるべきである。

5. 木にかけられた犯罪者の死体 (21:22~23)

この箇所がキリストを指し示していることは明らかである。ご自身は無実であるのに、キリストは木にかけられた。本来、私たちが受けるべき呪いを背負っておられた

のである。その死体は翌日まで十字架上に残してはならなかった（ヨハネ19:31参照）。

ご自身のたましいを代価として、私たちのたましいを得ようと
十字架の上で苦しまれた方に
祝福と賛美と栄光があるように。
子羊こそそれにふさわしい方。屠られて
くださったゆえに。

天と地の権威あるものすべては宣言する。
御子としての権利により王位に就いた方に
栄誉と威光と力があるように、と。
子羊こそそれにふさわしい方。屠られて
くださったゆえに。

ジェイムズ・モンゴメリー
(James Montgomery)

6. 行動に関する九つの律法 (22:1~12)

22:1~3 22章は、レビ記19:18の内容を展開し、「あなたの隣人を愛しなさい」という、一般的な命令が具体的にはどういうことかを説明している。たとえば敵であっても、隣人としての配慮をもって接することが求められた（出エジプト記23:4,5）。イスラエル人は、隣人（同族の者）が失ったものを見て見ぬふりをすることは許されなかった。それが家畜であれ、衣であれ、何であれ、自分の家に持ち帰って、持ち主が取りに来るまでそれを保管する義務があったのである。

22:4 イスラエル人はまた、隣人の動物が倒れていたら、それを助ける義務があった。

22:5 男は女の衣服を着てはならないし、その逆もまた然りであった。服装倒錯

(異性の服を着て性的な楽しみを得ること)は神にとって忌むべきことである。

22:6~7 鳥の巢からひなを取ってもよいが、母鳥は放してやらなければならない。おそらく、繁殖を続けさせるためであろう。

22:8 家の屋上の平らな部分の周りには、人が落ちないように、欄干や手すりをつけなければならなかった。屋上は交わり場であった。交わりを守ることは大切であり、若くて不注意な人の場合はなおさらのことであった。

22:9~11 ユダヤ人は以下のことが禁じられた。

- (1) ぶどう畑に二種類の種を蒔くこと。
- (2) 牛(きよい動物)とろば(汚れた動物)を組にして耕すこと。
- (3) 羊毛と亜麻糸を混ぜて織った着物を着ること。

最初の禁止事項は、神のことばの純粹な教えに何かを加えることを暗示している。第二は、奉仕におけるつり合わないくびきを描いている。第三は、信徒の実際的な生活に、義と不義が混在していることを表している。

22:12 ユダヤ人は、衣服の四隅に房をつけることになっていた。その房を見て、主に従うことを常に思い出すためであった(民数記15:37~41)。

7. 純潔に対する違反 (22:13~30)

22:13~21 この段落は、女性と結婚した後、彼女が処女であることを疑った男性のことを扱っている。処女のしるしとは、おそらく、女性が初めて性体験をした後、ベッドのシーツに残った跡のことだと思われる。⁽¹⁴⁾ もしその娘の父と母が、その娘の処女のしるしを提出することができれば、猜疑心のとりこになった夫は厳しい

罰を受けた上に、銀百シェケルの罰金を科せられ、彼女と共に暮らすことを義務づけられた。しかし、もしその娘が結婚前に不道德なことをしていたなら、石打ちの刑に処せられなければならなかった。

22:22~30 この章の残りの節では、さまざまな種類の性的不道德が扱われている。

- (1) 男女とも、姦淫の行為で見つかった者は、死刑に処せられる。
- (2) もし男が町の中で、婚約中の処女を強姦し、彼女が助けを求めて叫ばなかったら、二人とも姦淫の罪のために死ななければならない。
- (3) もし男が、野で、婚約中の娘を強姦し、彼女が助けを叫び求めてもだれにも聞こえなかったら、その男だけが死ななければならず、娘は無罪である。
- (4) 処女と性的関係を持った男は、その父に銀五十シェケルを支払った上、彼女と結婚しなければならない。
- (5) 30節は近親相姦、つまり、家族の一員と性的関係を持つことを禁じている。

8. 集会に加わることを禁じられた人々 (23:1~8)

さまざまな人々が、主の集会に加わることを禁じられた。つまり、公民、そして礼拝者としての権利が認められなかったのである。

- (1) 生殖器に障害や欠損のある男性。
- (2) 不倫の子、すなわち婚外子。⁽¹⁵⁾
- (3) アンモン人またはモアブ人。
- (4) エドム人またはエジプト人。

4節によると、モアブは「パンと水をもってイスラエル人を迎えることをせず」とあるが、申命記2:29には、あるモアブ人

たちが、ユダヤ人に食料を売っていたことが暗示されている。「パンと水とをもって迎える」というのは、丁重にもてなすことを意味する慣用句である。モアブ人はそうしなかったのである。

去勢された男性は、集会から排除された。不倫の子であるアンモン人とモアブ人も、十代目まで集会から排除された。エドム人とエジプト人は、三代目以降に加わることができた。しかし、このような一般的な規則には例外があった。それはヤハウェを求めた個人の場合である。ダビデの勇士の中には、アンモン人もいればモアブ人もいた（Ⅰ歴代誌11:39, 46）。上記の除外規定は男性にのみ適用されるので、たとえば（女性である）ルツには適用されない、という考え方もある。また「十代目の子孫」というのは、無期限を意味する慣用句である、という見方もある。

9. 陣営内の衛生 (23:9~14)

9節は、兵役のために家を離れている男性が直面する誘惑に対する警告である（あるいは、10節から14節の前文の役割をしている、とも言える）。

夢精に関する律法は、生殖の神聖さを示している。

兵士は各々、武器とともにシャベルの携行が義務づけられた。それは陣営の衛生のためである。排泄物はすべて、すぐに土で覆われなければならなかった。もし歴史上のすべての軍隊が、この単純な決まりを守っていたら、何度も疫病の蔓延を免れたことだろう。

10. 社会的、宗教的律法 (23:15~25)

23:15, 16 自由を求めて逃げて来た外国人奴隷を、その主人に引き渡してはならなかった。このように、イスラエルは虐

げられた人々の避難場所となるべきであった。

23:17, 18 男女を問わず、この地での売春は禁止され、そのような不道徳な行為から得た収益を、決して誓願のために主の家に持って来てはならなかった。「犬」とは男娼のことである。

23:19, 20 ユダヤ人は、別のユダヤ人に貸した物に対して利息を取ってはならなかった（ただし、外国人に対しては利息をとることは許されていた）。これは、貧しい者から法外に高い利子を取ることを禁じた出エジプト記22:25の原則をさらに拡大したものである。

23:21~23 誓願は自発的なものであった。主に誓願をする、しないは自由であったが、一旦誓願を立てたら、その支払いをする義務があった。

23:24, 25 旅人が（他人の）ぶどう畑に入り、当面の必要を満たすために食べることは許されていたが、それを容器に入れてはならなかった。同様に、畑から穀物を取ることは許されていたが、手で摘み取るだけで、鎌を使うことはできなかった。主の時代に、十二弟子はこの特権を利用したのである（マルコ2:23）。

11. 離婚と再婚 (24:1~4)

夫は、妻に恥ずべきことがあったなら、離縁状を書いて渡し、離縁することができた。その後、彼女が他の人と結婚することは自由であった。しかし、二番目の夫が死んだ場合、もしくは彼女を離縁した場合でも、最初の夫が彼女と再婚することは許されなかった。ヤハウェはイスラエルに離縁状を渡された（エレミヤ3:1~8）。しかし、将来のある日にはその不貞からイスラエルをきよめ、もう一度、迎え入れてくださうとしている。ああ、神の愛は、何と底知

れず深いことだろう！ 愛されるに値しない者を愛するために、神はどれほど身を低くしておられることだろう！

12. 社会生活に関わるさまざまな律法 (24:5～25:4)

24:5 新婚の男性の場合、一年目は戦(いくさ)に出ることが免除された。それは、結婚の絆を育み、家庭を築く時間を与えるためである。もし男性が戦争に行かざるを得なくなり、戦死した場合、買い戻しの権利をもつ親族が、その子孫を起こさない限り、その名前はイスラエルから消えてしまう。この「買い戻しの権利のある親族」*⁽¹⁶⁾とは、彼の未亡人との結婚が可能で、それを望む人のことである。このようにして結ばれた夫婦の間に生まれた最初の男の子が、最初の夫の跡継ぎとなる。このようにして、家名は存続し、家、土地は他人の手に渡さずに済んだのである。

24:6 ひき白は、生活を支える手段だったので、商取引で質に取ってはならなかった。ひき白であれ上石であれ、それを質に取ることは、穀物を挽く手段を奪うことになるからである。

24:7 誘拐犯や奴隷商人は、死刑にされなければならないかった。

24:8, 9 ツアラアトが発生した場合には、レビ人たちに与えられた以前の指示に従い、特別な注意が必要であった。ミリアムの例が警告として挙げられている。

24:10～13 人の家に侵入して、その人から担保を取ってはならない。貧しさのあまり自分の服を担保に差し出した場合は、自分の上着を着て眠ることができるように、毎晩、返さなければならないかった。

24:14, 15 雇い人の賃金は、速やかに支払われなければならない。

24:16 何人(なんびと)も、他人の罪のた

めに殺されてはならない。

24:17～22 寄留者、孤児、やもめには、正義が示されなければならない。畑の作物は完全に刈り取ってはならない。落ち穂は、貧しい者や弱者のために残しておくなければならない。これはオリーブやぶどうについても同様である。ロナルド・サイダー(Ronald Sider)は次のように説明している。

エジプトで自ら経験した貧困と抑圧を思い出せば、貧しい寄留者、やもめ、そして父親のいない子どもに、惜しみなく落ち穂を残そうとするはずである。*⁽¹⁷⁾

ジョン・ニュートン(John Newton)は新生したときに、22節を大書し、それを暖炉の上に掲げて、常に思い出すようにした。

25:1～3 犯罪者の有罪が確定し、むち打ちの刑に処せられた場合でも、四十回以上のむち打ちはしてはならなかった。ユダヤ人は、慣例的に39回の殴打、あるいはむち打ちを与えていた。これは、彼らが数え間違えて、この規定に違反しないようにするためであった(Ⅱコリント11:24参照)。

25:4 脱穀をしている牛に口籠をはめてはならないどころか、むしろ穀物の一部を食べることが許されなければならない。パウロは、Ⅰコリント9:9～11で、この節を用い、霊的なことに労している人は、物質的なことにおいて配慮されるべきである、と教えている。このようにパウロは、律法には霊的な側面があることを教えているのである。これは、文字通りの意味を矮小化するというのではなく、多くの場合、表面の下には霊的な教えが潜んでいることを

示すに過ぎない。勤勉な学び手なら、この重要な霊的教訓を探し出し、それに耳を傾けるはずである。

13. 兄弟の死に際しての結婚の律法 (25:5～10)

もしイスラエル人が死んで、妻に息子を残さなかった場合、その名は消滅し、その財産は一族から無くなる危険があった。そこで、故人の兄弟が故人の妻と結婚することになった。この「レビレート婚」という慣習は、古代の多くの国で行われていた。もしその兄弟がこれに同意しない場合、死んだ者の妻は町の長老たちのところに行って、この事実を告げた。彼は長老たちの前に呼び出され、自分にその意志がないことを確認する機会を与えられた。もしあくまでも拒否する場合には、彼女は彼の履き物の片方を脱がせ、その顔に唾(つば)した。それ以降、彼は不名誉な名前と呼ばれることになった。自分の兄弟の家を永続させる意志がなかったからである。

レビ記20:21では、男が兄弟の妻と結婚することが禁じられていたが、ここでは結婚するように命じられている。レビ記の箇所では、明らかに夫がまだ生きている時に適用されたのに対し、申命記では、夫が死んで跡継ぎの男子がいない場合のことを指している。

14. 三つの特徴的な律法 (25:11～19)

25:11, 12 夫が争いに巻き込まれ、妻が夫を助けようと相手の男の急所を掴む、という不謹慎な行動をとった場合、問題を起こしたその手は切り落とされなければならなかった。彼女のとった行動は、相手の男が跡継ぎを残すことを危うくするものであった。そのために、これほどの厳罰が課されたのである。

25:13～16 公正な重り石と升を備えておかなければならなかった。買う時のための秤と売る時のための秤を別にする人が珍しくなかったからである。これは主が忌み嫌われることであった。

25:17～19 アマレクの子孫は、その卑劣さと残酷さのゆえ、完全に滅ぼされなければならなかった(出エジプト記17:8～16)。イスラエルは、アマレク人を滅ぼすべきことを忘れてはならない、と命じられていたのに、どうも忘れてしまったようである。サウルは主に背き、自分の時代にアマレクを滅ぼさなかった(1サムエル15章)。実際、「アマレクの逃れて残っていた者」を討つことができたのは、ヒゼキヤの時代になってからのことだった(1歴代誌4:43)。

Q. 儀式と批准 (26章)

1. 初物のための儀式 (26:1～11)

民は土地に定住した後、神の聖所に行って、神が成してくださったことに感謝して喜び、すべての実りの初物の一部を祭司に献げることになっていた。そして、「さすらいのアラム人」であった先祖ヤコブから始まって、エジプトでの奴隷の生活、神の力強い解放へと進み、そして乳と蜜の流れる地を所有とするまでを回想するのである。フィリップ・ケラー (Phillip Keller) は生彩に富んだこの表現を次のように説明している。

聖書に描かれている約束の地は、神が苦勞してイスラエルをエジプトから導き出した土地、すなわち「乳と蜜の流れる地」である。これは比喩的な表現であるだけでなく、本来は科学的な用語である。農業用語で、「乳の流れ」(milk flow)「蜜

の流れ」(honey flow)という言い方を
するが、それは春から夏にかけての、牧
草地の最盛期を意味する。その牧草を食
べる家畜や、花々を訪れる蜜蜂は、それ
に応じた乳や蜜の「流れ」を生み出す。
つまり乳と蜜の流れる地とは、肥沃で、
緑豊かな牧草地のことである。そして、
神がイスラエルのためにそのような土地
について語られたとき、御民の喜びと勝
利と満足に満ちた豊かな生活を予見され
たのである(『羊飼いが見た詩篇23篇』
より)。^{* (18)}

2. 第三年目の十分の一の儀式 (26:12 ～15)

上記の初物に加えて、ユダヤ人は祭りの
十分の一と呼ばれる第二の十分の一を献げ
ることになっていた。これは三年目ごとに、
レビ人、寄留者、孤児、やもめに分け与え
なければならなかった。この十分の一は、
自分たちの町の貧しい人々に配られること
になっていた。それが完了すると、民は主
の前で、十分の一に関する命令すべてに聞
き従ったことを証ししなければならなかつ
た。

3. 契約の批准 (26:16～19)

民が主の道を歩むことに同意したからこ
そ、主は彼らをご自分の特別な民として認
め、他のすべての国々の上に高く上げる、
と約束された。彼らが聖なる民であるのは、
神が他の国々と区別されたからであって、
元から備わった功績があったからではない。
ヤハウエの特別な宝物となった彼らは、地
上のどの国民とも異なっていた。このよう
な栄誉に対する彼らの反応は、主の命令に
従うこと以外にない。

R. 呪いと祝福 (27、28章)

27:1～8 ヨルダン川を渡って約束の
地に入った後、イスラエル人は大きな石の
記念碑を立て、それに石灰を塗り、その上
にみおしえのことばをはっきりと書き記す
ことになった。この記念碑はエバル山に、
切石ではなく自然の石で造られた祭壇とと
もに建てられることになった。

27:9, 10 ユダヤ人はこれまで、神の
選びによって神の民となっていたが、約束
の地を前にして、特別な意味で主の民とな
った。神が示しておられた恩恵は、彼らの、
愛に基づく従順を求めるものであった。

27:11～13 ゲリジム山に立ち、祝福
のことばに「アーメン」と応答する六部族
が任命された。この六部族は、レアとラケ
ルの子孫であった。他の部族はエバル山に
立ち、呪い(の条件)を確認することにな
った。エフライムとマナセが別々に扱われ
ず、代わりにヨセフ族が挙げられているこ
とに注目しよう。イスラエルの長子で生得
権を失ったルベンとレアの末子ゼブルンは、
女奴隷の子らとともにエバル山に立った。
寵愛を受けた部族はゲリジム山に立った。

27:14～26 レビ人(9節を参照)は、
二つの山に挟まれた平地に立つことになっ
た。彼らが呪いや祝福を宣言すると、民は
「アーメン」と答えることになっていた。
15～26節にその呪いのことばが記されて
いる。偶像礼拝、両親を軽んじること(16
節)、地境を移す、という不正行為(17節)、
目の見えない人を道に迷わせること(18節)、
貧しく無力な人々を利用すること(19節)、
さまざまな形の近親相姦(20, 22, 23節)、
獣姦(21節)、ひそかに隣人を殺害するこ
と(24節)、また賄賂と引き換えに咎のな
い者を殺害すること(25節)、そして神の
みおしえのことばに背くこと(26節)で
ある。歴史的に、この儀式がどのように行

われたか、という記録がヨシュア記8:30以下に書かれている。ヨシュアがモーセの指示に忠実に従ったことに注目しよう。

27章で、呪いだけが書かれているのは重要である。パウロが私たちに想起させているように、「律法の行いによる人々はみな、のろいのもとに」ある（ガラテヤ3:10）ので、そうせざるを得なかったのである。イスラエル人はいずれ律法を犯すことになる、というだけでなく、原理として、律法の下にあったのである。

28:1～14 1節は、26章の末尾にある「(主は) すべての国々の上にあなたを高く上げ(る)」ということばを指している。そのため、27章は挿入的な観がある。多くの聖書研究者は3～6節で宣言された祝福は、ゲリジム山の六部族に向けられたものではなく、この章全体が、イスラエルの子らの前途を示すモーセのことばであると感じている。最初の14節では、従順に伴う祝福が語られ、54節にわたる後半部分は、民が主を捨てた場合に降りかかる呪いが語られている。約束された祝福の中には、国々の中での優位性、物質的な繁栄、実り、豊穡、作物の豊かさ、戦いで勝利、国際貿易での成功が含まれる。

28:15～37 呪いの中には、欠乏、不毛、凶作、疫病、疾病、病害、干ばつ、戦いの敗北、狂気、恐怖、不運、災難、無力などが含まれていた(15～32節)。33～37節は、異国の地での捕囚を預言しているが、それは、アッシリアとバビロンによる捕囚によって成就した。

イスラエルはあらゆる民の間で、恐怖のもと、物笑いの種、なぶりものとなるのである。

28:38～46 ユダヤ人は、畑、ぶどう畑、そしてオリーブの木からの収穫が途絶えるという呪いに見舞われる。彼らの子ど

もたちは捕らわれて行き、害虫が、木も産物もみな食べ尽くしてしまう。寄留者は、彼らの上にますます高く上って行き、イスラエル人はますます低く下って行く。12節と44節の間に矛盾はない。(神に)従順であれば、ユダヤ人は他国に貸す立場になるが、不従順であれば、異国人から借り入れなければならなくなるのである。

28:47～57 外国の侵略軍による包囲の惨状は、49～57節に描かれているように、人々がお互いを食べ合うほどに激しい。これはエルサレムがバビロンに包囲された時、そしてその後ローマに包囲された時に現実となった。どちらの時にも、人肉食が至るところで行われた。普段は上品で繊細な人々が、敵対し、人肉を食べるようになったのである。

28:58～68 疫病や悪性の病気でイスラエルの人口は激減する。生き残った人々は地の果てから地の果てまで散らされ、常に迫害の恐怖に怯えて暮らす。神はご自分の民を、船で再びエジプトに戻そうとさえされる。(歴史家) ヨセフス (Josephus) によれば、イスラエルが再びエジプトに行くという預言は、(ユダヤ戦争を指揮した) テイトゥスの時代、ユダヤ人たちがエジプトへ船で輸送され、そこで奴隷として売られたことにより、部分的に成就した。しかし、ここでいう「エジプト」は、奴隷状態全般を意味しているのかもしれない。神は過去において、イスラエルを文字通り、エジプトの奴隷状態から解放されたが、もしイスラエルが神を愛することを拒み、神がイスラエルの従順を求める権利をお持ちであることを認めず、神の妻として貞操を守らず、神の特別な宝の民であることを受け入れず、むしろ他の国々のようになる道を選ぶなら、再び奴隷として売られることになる。しかし、その時には、イスラエルが

あまりにも落ちぶれているため、奴隷として買おうと思う者すらいない。

「多く与えられた者はみな、多くを求められ、多く任された者は、さらに多くを要求され(る)」(ルカ12:48)のである。イスラエルは、他のすべての国々にまさる特権を与えられていた。それゆえにその責任は一層大きく、その罰はより厳しい。

これらの呪いを考えると、ヤハウェの怒りの噴出に呆然となるばかりである。控えめな表現は一切なく、細部にいたるまで想像の入り込む余地がない。モーセは、大胆に、しかも徹底したリアリズムでその状況を描いている。イスラエルは、不従順の結末がどんなものになるかを知らなければならなかった。それは、この栄光に満ちた恐るべき御名、あなたの神、主を恐れることを学ぶためである。

III. モーセによる第三の説教——約束の地のための契約 (29、30章)

A. モアブで結ばれた契約 (29:1~21)

29:1 29章の最初の節は、ヘブル語聖書のように、論理的には前章に属するかもしれない。しかし、カイル (C. F. Keil) とデリッチ (F. Delitzsch) はそれが、29章、30章の説話の、いわば「表題」であると見る。^{* (19)}

29:2~9 民は神が彼らとシナイ山で結ばれた契約を破った。そこでモーセは、申命記にある契約を批准するように、民に呼びかけた。民がこの地に入る直前にモアブの草原で交わされた契約である。民は主についても、彼らに対する御計画についても理解していなかった。ヤハウェは、何とかして彼らに悟る心と見る目と聞く耳を与えようとされたが、彼らは相変わず不信仰と不従順を続け、自らを、それらにふさわしくない者にしてしまった。(かつて)

イスラエルは天からのマナと岩からの水を喜び、自分の生存のために作り出したもの(たとえば、パン、ぶどう酒、強い酒)には頼らなかった。これは、イスラエルが自分の神、主を、その誠実さと愛のすべての面において知るようになるためであった。

この契約を守るための発奮材料として、モーセはもう一度、イスラエルに対する神の恵みを振り返った。エジプトでの奇跡、大いなる解放、荒野での四十年、シホンとオグの討伐、そしてヨルダン東岸の地をルベン、ガド、そしてマナセの半部族に与えられたことなどである。

29:10~21 モーセは民のすべてに対し、主の契約の誓いに入るように呼びかけるとともに (10~13節)、その契約が、彼らの子孫にも及ぶことを思い起こさせた (14, 15節)。この契約を守らなければ、厳しい罰が待つのみである。反抗する者は、異邦の民の神々に仕える誘惑や、たとえそうしても神の怒りから逃れることができると考えてしまう誘惑に注意しなければならない (16~21節)。

B. 契約に違反した場合の罰 (29:22~29)

29:22~28 後世の人々や外国の国々は、イスラエルの荒廃に驚き、なぜその地が、あの平地の町々——ソドム、ゴモラ、アデマ、ツェボイム——のように扱われなければならなかったのか、と問うであろう。その答えは次のようなものである。「それは彼らが、彼らの父祖の神、主が彼らをエジプトの地から導き出したときに結ばれた契約を捨て、…ほかの神々のもとに行って仕え、それらを拝んだからだ」。

29:29 主に属する秘密の事柄、特に主のさばきについて隠されていることがある一方で、モーセは民に、彼らの責任は明

確に示されていることを思い起こさせた。つまり、啓示には責任が伴うということである。人は主のことばをさばくのではなく、それに従う責任があるのである。この原則は、新約聖書にも、何度も登場する。「なすべき良いことを知っていながら（啓示）行わないなら（責任）、それはその人には罪です」（ヤコブ4:17）。

C. 契約に戻るための回復（30章）

30:1～10 30章は、民が契約を破り、捕虜として連れ去られることを想定している。まさにその通りのことが起きたことは言うまでもない。たとえそのような時が来ても、民が悔い改めて主に立ち返るなら、神はあわれみをもって回復してくださる。そして彼らをその地に連れ戻してくださる。このような目に見える回復には、霊的な刷新が伴う（「あなたの神、主は、あなたの心と、あなたの子孫の心に割礼を施(す)」[6節]）。その時、人々は喜び、従順の祝福を受けるが、敵は呪われる。至高者の計画は、たとえその計画の対象者が失敗しても、失敗することはないのである。神は、父祖たちへの約束を果たし、その子孫に、永遠にその地をお与えになる。神は、避けられないと分かっていた捕囚の後、彼らを回復し、再び変えようとされた。これこそは、偉大で愛に満ちた御方による、無条件の愛のわざである。6節は、数百年後に預言者たちによって展開された主題、すなわち、新しい契約に触れている（エレミヤ32:39～41、エゼキエル36:24～26）。この契約は旧約聖書で明らかにされてはいたが、キリストが死なれるまで効力を発揮しなかった。キリストの血が新しい契約の血だからである（ルカ22:20）。

30:11～14 モーセは、この契約が彼らにとって理解できないほど難しい（神秘

的な）ものではなく、遠くかけ離れた（手の届かない）ものでもないことを民に理解させようとしている。それを見つけるために、不可能なことが要求されているわけではない。主がそれをもたらしにくださったのであり、彼らの責任はそれに従うことであつた。パウロはローマ10:5～8でこれらの節を使い、キリストと福音の關係に適用している。この契約を守ることは容易ではなかったが、神は失敗した場合の備えを用意されていた。民は悔い改め、定められたいけにえを持って来ることが求められた。いけにえはキリストを表す型なので、罪を犯した者は悔い改めて主イエス・キリストに信仰を置くべきである、という教えである。

30:15～20 民は、いのちと幸いか、それとも死とわざわいか、どちらかを選ぶように求められた。従順ならいのち、不従順なら死である。モーセは、民がいのちと祝福を選ぶように強く訴えた。望ましい応答をすれば、長寿と豊かな霊的いのちという良い結果がもたらされる。それが「主にすがら」ということばの意味である。それ以外の選択肢は、のろいしかない。

IV. モーセ最後の日々——約束の地の外での死（31～34章）

A. モーセの後任（31章）

31:1～8 モーセは今や百二十歳になっていた。民とともにヨルダン川を渡ることはできないという神の定めをモーセはわきまえていた。しかし、主がともに進んでくださり、ヨシュアが民の先頭に立ち、そして敵に対する勝利が確約されていることを民に告げた。次にモーセはヨシュアに与えられた新しい任務に関して、民の前でヨシュアを励まし、主がともにいてくださることを確約するのであつた（7,8節）。

31:9~13 書き記されたみおしえはレビ人に託された。それを保管する場所は契約の箱の傍らとされた。十戒の二つの石板は契約の箱の中に置かれた（出エジプト記25:16、ヘブル9:4）が、この律法の写しは箱の傍らに置かれたのである。七年の終わりに、イスラエル全体の前で、このみおしえを読んで聞かせることになった。

聖書を読むということは、今日、悲しむべきことに、保守的な教義を支持する人々の間ですら、軽んじられている。マッキントッシュ（C. H. Mackintosh）の次のことばは、長くとも貴重なものである。それは、残念なことに、100年以上前に書かれた当時より、今日の状況を言い当てている。

神のことばは、私的にも公的にも、愛されもしなければ、深く学ばれることもない。陰では低俗な読み物がむさぼり読まれ、表では音楽、儀式的な礼拝、そして荘厳な式典が人気を博している。数しれぬ人々が音楽を聞くために群れをなし、入場料を払う。しかし、聖書を読む集まりに心を向ける人は何と少ないことか。以上のことは事実である。そして事実ほど説得力のあるものはない。事実は無視できない。宗教的な興奮に対する渇きは強くなる一方であるが、落ち着いて聖書を学び、クリスチャンの集会で霊的訓練を受けることを嫌がる傾向も強まるばかりである。それを否定してみても始まらない。見て見ぬふりもできない。どちらを向いてもその証拠が目に飛び込んで来るからである。

感謝すべきことに、数は少なくとも、そこかしこに、神のことばを心から愛し、集会に集って聖なる交わりに加わることを喜び、神のことばの尊い真理の数々を

学ぶ人々がいる。主が「旅路の日々が終わるまで」そのような人々を増やし、祝してくださることを願わずにはいられない。^{*(20)}

31:14~18 モーセの死が近づくと、神はモーセとヨシュアを会見の天幕に呼び寄せ、雲の柱の中にご自身を現された。神はまず、モーセに、イスラエルの民がほとんど偶像礼拝に身を委ね、神の怒りを被ろうとしていることを明らかにされた。

31:19~22 それから神はモーセに、歌を書き記してイスラエルの子らに教え、来るべき日に対する証しとするように命じられた。

31:23 神は、約束の地に民を導くために、自らヨシュアを任命し、強くあれ、雄々しくあれ、と励まされた。ヨシュアはヤハウエからのことばによって力づけられたに違いない。ヨシュアは国民的な背教が起ころうとしている、と聞いたばかりであった（16節）。だからこそ、落胆するのではなく、任務を前にして、確信を新たにされる必要があったのである。

31:24~27 レビ人に託されたみおしえのことば、すなわち申命記は、イスラエル人が主を捨てた時に、彼らを責める証しとしての役割を持つこととなる。

31:28~30 それからモーセは、神が命じられた通り、部族の長老たちと、つかさたちに次の歌を聞かせた。

B. モーセの歌（32章）

32:1~3 この歌は次のように要約してよいだろう。

全宇宙は主のことばを聞くために召される。それは、雨のように、また露のように、新鮮で滋養に富む。3節（この歌の題名ともなり得る）で、モーセは、栄光を私たち

の神に帰せよ、と言っている。この歌は、神が歴史を通じてご自分の民をどのように扱ってこられたかという観点から、神の偉大さを明らかにするものである。

32:4～9 神の偉大さ、正義、誠実さ、神聖さにも関わらず、イスラエルの民は神を捨て、神に罪を犯した。ヤハウェのご性質の栄光は、イスラエルの反逆と悪事という暗い背景の中で輝いている。神は彼らの父であり、創造主でありながら、受けたのはささやかな感謝だけだった。いと高き方が、国々に相続地を持たせた時にも、神は真っ先に民の必要を満たされた。神の愛と配慮はそれほどのものだったのである。

32:10～14 10節にはイスラエル民族の誕生と幼年期が描かれている。エジプトからの脱出後、神は母鷲のような愛で民を抱き、世話をし、守られた(11節)。イスラエルが守られるために、異国の神は何の役割も果たしていない。それなのになぜ彼らは偶像礼拝に走り、ヤハウェの恵みを他者に帰するのだろうか。13節からの歌は預言的である。神は彼らを約束の地の祝福に導かれた。

32:15～20 しかし、エシュルン(イスラエルの民の詩的な名前で「直き民」を意味する)は、偶像に頼り、ヤハウェに反逆した。彼らは悪霊どもにいけにえを献げることを選び、何度も自分の子どもたちを献げた。そればかりか、新しい神々を拝むという愚かな行為にまで身を落とした。こうして彼らは、自分たちの真の岩をないがしろにし、真の父を忘れてしまったのである。その結果、主は彼らから御顔を隠された。この御顔を隠されたことは、捕囚として売られることによって成就した。

32:21～33 イスラエルを退けた後、神は異邦人に恵みをもって臨まれた。(現在の教会時代と同様に)イスラエルのねた

みを引き起こすためである。その間に、イスラエルは散らされ、迫害されることになる。しかし、民が完全に滅ぼされることはない。ヤハウェがイスラエルの敵に、国家滅亡の理由を誤解させないためである。敵の岩の方が強かったからではなく、イスラエルの岩である主が、彼らの悪事のために、彼らを虐殺に引き渡されたからである。

32:34～43 この箇所は、イスラエルを罰するために用いられた国々に対する神の復讐に関係するものである。復讐(35節)も、報復(35節)も、主の専決事項である。主はその敵に立ち向かう、とご自身によって誓われた(主以上の存在は他にないからである)。このさばきがどれほど徹底的に遂行されるかに注目しよう(41,42節)。その結果、神の民も、すべての国々の民も喜び歌うようになる。神がご自分の仇に復讐をし、ご自分の民とその地のために宥めを行われるからである。

32:44～47 このように、モーセの歌はイスラエルという国家の歴史的、預言的な概観を示している。この歌を詠じ終えたモーセは、民が主に従うように厳かに呼びかけた。「これは、あなたがたにとって空虚なことばではなく、あなたがたのいのちであるからだ」。

32:48～52 次に主はモーセをネボ山の頂上に呼び寄せた。そこでモーセは(約束の)地を見ることが許された。モーセはメリバテ・カデシュでの罪のため、カナンに入ることは許されず、ネボ山で死に、モアブの谷に葬られることになる(34:6参照)。

C. モーセの祝福(33章)

この章のヘブル語表現は、不明瞭な箇所が少なくない。そのため、さまざまな注釈者が、いろいろな見解や解釈を提示してい

る。本注解は、ヘブル語の解釈の可能性を詳しく論じることを意図したものではない。そこで、それぞれの祝福について、預言的見方を簡潔に紹介するにとどめる。

33:1~5 神の人モーセは、最後の公的行爲として、イスラエルの諸部族に祝福のことばを宣べ伝えた。2~5節は、御民に対する神の愛に満ちた配慮を称えている。神はシナイ山で律法を授けられた。セイルとパランは、シナイからカナンへ向かう途中にあった。モーセは、詩的な表現で、主を、御民を勝利に導くエシュルンの王として描いている。その後、個々の祝福が続く。

33:6 ルベン：ヨルダン川の東、しかもモアブの北に位置するルベンは、攻撃を受けやすかった。そのため、この部族が消滅することなく、むしろ人口が増すように、という祈りとなった。

シメオンについては言及がない。ユダとの関係が深いため、ユダへの祝福の中に含まれているのかもしれない。

33:7 ユダ：カナン征服の主役となる。戦士を助け、無事に民のもとに帰還させてくださるよう、主への願いがなされている。

33:8~11 レビ：神のトンミムとウリムはレビに属し、マサとメリバの水のほとりで民から非難された部族である。レビはまた、民が金の子牛を拝んだとき、民に反対して神の側についた部族でもある。レビは、民を教え、いけにえを献げるための部族として立てられた。モーセは、主が彼の財産を祝福し、その奉仕を受け入れ、彼を憎む者たちを壊滅してくださるように祈る。

33:12 ベニヤミン：地上での神の御住まいである神殿は、やがてベニヤミンの領地に置かれ、それを担う肩のように丘々が周囲を囲む。そのため、ベニヤミンは、主との親しい交わりを楽しむ、主に愛され

た部族として描かれている。

33:13~17 ヨセフ：ヨセフの子孫の領土は、天からの露と下からの泉とで潤される。ヨセフの結ぶ実是非常に豊かになり、燃える柴の中にご自身を現された方の好意を満喫するようになる。ヨセフの二人の息子たちは、威厳と力に満ちて、国々を征服するようになる。エフライムは長子の権を受けたので、幾万もの民が割り当てられ、マナセは幾千の民だけが与えられる。

33:18, 19 ゼブルンとイッサカル：国内でも国外でも成功をおさめ、諸国の民を、主の山、エルサレムでの礼拝に導く。この両部族とも、海の富と地の富を享受する。彼らが国々を礼拝に導いた、という記録はなく、また両部族とも陸地に囲まれていたことから、この祝福は、千年王国を予見するものに違いない。

33:20, 21 ガド：神はこの部族に、ヨルダン川東岸の広大な領土を与えられた。ガドはその地を手に入れ、それを保持するために雌獅子のように戦った。それは、ガドが自分のために選んだ、選りすぐりの牧草地、いわば指導者の分であった。しかし、ガドはまた、民の指導者たちとも力を合わせて、ヨルダン川西岸の土地も征服し、主の正義の御心を実行に移した。

33:22 ダンは、獐猛で強く、待ち伏せして急に襲いかかる獅子の子に例えられている。ダンの本来の領地はカナンの南西にあったが、ダン人は北東に移動し、バシヤンに隣接する土地を押さえたのである。

33:23 ナフタリは、カナンの北東に位置し、南はガリラヤ湖まで延びていた。この部族は、主の祝福と恵みを受けて栄えた。

33:24, 25 アシエルは、多くの子孫と、他の部族との良好な関係と、オリーブ油の流れる土地とに祝福されることになっ

た。鉄と青銅は、履き物（※英訳による。新改訳は「かんぬき」）の材料としては奇妙なものに思われる。カイル（C.F. Keil）は、それを「要塞」と訳している。

グラント（F. W. Grant）は25節後半の訳として、興味深い別訳を提案している。

近代の訳は、古代の訳とは違い、「力」を「安らぎ（安息）」と読む傾向にある。この二つには、彼らの変わらぬ安全が二重に表現されている。私たちは、「あなたの日々に応じて、あなたに力が加えられる」（英訳）という長く慣れ親しんだ訳を手放すことは気が進まないとしても、「あなたの日々に応じて、あなたに安息が加えられる」という読み方も、このすばらしい祝福の締めくくりとして不適当とは言えない。^{*(21)}

33:26～29 最後の数節は、民のために行動される神の偉大さを称えている。エシュレンの神は、天において唯一、助けることのできる方である。27節のみことばによって数えきれないほどの人々が力づけられてきた。「いにしえよりの神は、住まう家。下には永遠の腕がある。」

神が、将来、イスラエルのもろもろの敵を滅ぼし、安全と平和、繁栄と勝利を与えてくださる、という約束をもって、モーセの歌は閉じられる。

D. モーセの死（34章）

34:1～8 たとえモーセの死を記録したのが、モーセ以外の人物であったとしても、この部分を除いたモーセ五書の著者がモーセである、という事実になんら影響はない。^{*(22)} モーセは、（約束の）地を見た後、ネボ山で死に、だれも知らない墓に主

によって葬られた。（墓の場所が）秘められたのは、律法の授与者であるモーセの墓が聖地とされ、モーセが礼拝されるのを防止するためであったのは明らかである。モーセが死んだときは百二十歳であったが、体力も気力も衰えをしらず、頭脳は明晰なままであった。この説明が、31:2と矛盾しているわけではない。モーセがもはや民の先頭に立つことができなくなったのは、健康上の理由ではなく、霊的な理由であった。モーセはその罪のゆえに民をカナンに導いてはならない、と神は告げておられたが（31:2）、健康上はそうすることが可能だったのである。

34:9 そのため、ヨシュアが総指揮を執ることになった。モーセは民数記27:18～23の主のみことばに従い、ヨシュアを自分の後継者として承認した。このように、従者がモーセの後継者となったことは、モーセの謙遜さを示すもうひとつの証拠である。

34:10～12 モーセに帰されたような賞賛を受けることができる者はごくまれである。もちろん、この結びの諸節が記された時には、メシアはまだ来ておられなかった。10節が当てはまるのはキリストの初臨までのことである。

「モーセは、神の家全体の中でしもべとして忠実でした。」（ヘブル3:5）。モーセは自分の罪のため死に、その墓の場所はだれも知らない。しかし、モーセの対型である主イエスは、「御子として神の家を治めることに忠実でした」（ヘブル3:6）。御子が死なれたのは、この私たちの罪のためであった。御子の埋葬場所に遺体はない。天の御父の右に昇られたからである。「ですから、天の召しにあずかっている聖なる兄弟たち。私たちが告白する、使徒であり大祭司であるイエスのことを考えなさい。…家よりも、

家を建てる人が大いなる榮譽を持つのと同じように、イエスはモーセよりも大いなる栄光を受けるにふさわしいとされました」（ヘブル3:1,3）。

後 注

1. (2:1-23) 「巨人」（音訳は「レファイム」）とは、オグの先祖である古代の巨人の種族であった。レファイムという語は、その後、巨体の人々を意味するようになっていった。
2. (3:1-11) J. A. Thompson, *Deuteronomy: An Introduction and Commentary*, p. 93.
3. (4:44-49) シリア語版では「シリオン」と書かれている。
4. (5:22) Thompson, *Deuteronomy*, p. 119.
5. (8章冒頭) *Ibid.*, p. 134.
6. (9:24-29) 聖書の章と切の区分が作られたのは、原典が書かれてから何世紀も後のことである。
7. (15:1-3) Matthew Henry, “Deuteronomy,” *Matthew Henry’s Commentary on the Whole Bible*, I: 786.
8. (15:4-6) E. W. Bullinger, *The Companion Bible*, p. 259.
9. (16:1-8) D. L. Moody, *Notes from My Bible*, pp. 44, 45.
10. (16:16, 17) *Ibid.*, p. 45.
11. (18:9-14) Henry G. Bosch, *Our Daily Bread*, Grand Rapids: Radio Bible Class, June-July-August 1989, August 31.
12. (20:1-8) Henry, “Deuteronomy,” I: 806.
13. (20:10-20) 詳細についてはヨナ書の序論を参照のこと。
14. (22:13-21) もうひとつの説明として「処女のしるし」を「思春期のしるし」、つまり、その未婚女性の生理が順調であったことを示すものと訳すことも不可能ではない。このような女性をめとった男性としては、結婚後、すぐに妻が妊娠しない限りは、結婚後にその証拠を得ることを期待したであろう。必要なのは、結婚した時点でその女性が妊娠しておらず、月経があったという証拠である。もし、婚約後に性的な不品行があれば、結婚前の妊娠はいずれ明らかになり、9か月が経過する前に子どもが生まれることになる。したがって、13～21節までの律法は、結婚前の婚約期間中の花嫁の行為に関わるものであり、「思春期のしるし」というのは、一種の妊娠検査であった可能性がある。（Thompson, *Deuteronomy*, p. 235, p. 236の考察も参照。）
15. (23:1-8) この区分は、特にユダヤ人の近親相姦による子孫、あるいは異教徒との混血の子孫を指し示しているかもしれない。
16. (24:5) KJV では“Kinsman redeemer”.
17. (24:17-22) Ronald Sider, *Rich Christians in an Age of Hunger*, p. 92.
18. (26:1-11) Phillip Keller, *A Shepherd Looks at Psalm 23*, pp. 46, 47.
19. (29:1) C. F. Keil and F. Delitzsch, “Deuteronomy.” In *Biblical Commentary on the Old Testament*, III: 446.
20. (31:9-13) C. H. Mackintosh, “Deuteronomy,” in *Notes on the Pentateuch*, p. 895.
21. (33:24, 25) F. W. Grant, “Deuteronomy,” in *The Numerical Bible*, I: 622.
22. (34:1-8) 著者問題については「モーセ五書への序論」を参照のこと。

参考文献

Grant, F. W. “Deuteronomy.” In *The Numerical Bible*. Vol. I. Neptune, NJ: Loizeaux

- Brothers, 1977.
- Henry, Matthew. "Deuteronomy." In *Matthew Henry's Commentary on the Whole Bible*. Vol. I. MacLean, VA: MacDonald Publishing Company, n.d.
- Keil, C. F., and Delitzsch, F. "Deuteronomy." In *Biblical Commentary on the Old Testament*. The Pentateuch, Vol. III. Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Publishing Co., 1971.
- Kline, Meredith G. "Deuteronomy." In *The Wycliffe Bible Commentary*. Chicago: Moody Press, 1962.
- Mackintosh, C. H. "Deuteronomy." In *Notes on the Pentateuch*. Neptune, NJ: Loizeaux Brothers, 1972.
- Shultz, Samuel J. *Deuteronomy: The Gospel of Love*. Everyman's Bible Commentary. Chicago: Moody Press, 1971.
- Thompson, J. A. *Deuteronomy: An Introduction and Commentary*. The Tyndale Old Testament Commentaries. Downers Grove, IL: InterVarsity Press, 1974.
- Towns, Elmer L. "Deuteronomy." In the *Liberty Bible Commentary*. Lynchburg, VA: The Old-Time Gospel Hour, 1982.

歴史書序論

すぐれた物語、とりわけ実際にあった物語を愛する何百万もの人々にとって、旧約聖書の第二区分は、特別な魅力がある。それは、申命記が終わったところから始まり、旧約聖書の歴史が終わるまでの一千年に及ぶ神の民の物語である。(詩歌、預言書もこの同じ枠組みの中に収まるが、それによって物語が進展するわけではない。)

「歴史」が苦手な人(生まれつき、あるいは退屈な歴史教師に教わる羽目になって)には、この歴史書は他に類がないとしか言いようがない。第一に、聖書の歴史(history)は、古い言い方をするなら、まさに「彼(=神)の物語」(His story)である。それはヘブル民族の歴史を網羅した、というものではなく、神が選ばれた連続的な物語なのである。第二に、それは、単に私たちを教えたり楽しませたりするためではなく、私たちをより良い信仰者にするという目的を持った歴史である。新約聖書の使徒パウロのことばを借りるなら、「私たちを教えるために書かれ(た)」(ローマ15:4)のである。

これらの出来事はすべて実際に起こったことであるが、神の靈感のもとに、人間という立場で著者が選び、表現したのは、思慮深い読者が、たとえばダビデの生涯から、または王国の分裂から、あるいは捕囚後の残りのユダヤ人の帰還から神の意図する教

訓を見いだしやすいようにするためであった。

I. 年代

歴史書は紀元前1400年から紀元前400年頃まで、すなわち、ヘブル人の歴史の一千年分にも及ぶ。この長い期間は自然と三つの主要な時代に分けられる。神政時代(紀元前1405～1043年)、王政時代(紀元前1043～586年、サウルからエルサレム滅亡まで)、そして復興の時代(紀元前536～420年)である。

II. 神政時代の書巻

デモクラシー(ギリシア語で「人民統治」の意)が、本来、人民によって運営される政治形態であると同様に、セオクラシー(神政政治)とは本来、神によって統治される政治形態である。ヨシュアからサウルまでの古代イスラエル(紀元前1405～1043年)とは、そのような、神による統治の時代であった。^{*(1)}

この神政政治の時代を扱っている三つの書巻はヨシュア記、士師記、ルツ記である。

A. ヨシュア記

本書はモーセの死と、軍事的指導者であ

りながら霊的指導者でもあったヨシュアがモーセに代わるところから始まる。ヨシュアはイスラエルの民に、パレスチナを征服するだけでなく、主に従うように呼びかける。この書の前半は約束の地の征服について、後半はその地をイスラエルの12部族に分割することについて詳述している。

B. 士師記

イスラエル人は神の命令に従わず、パレスチナのいたるところに異教徒が住む地域を残したため、合わせて七人の異邦人による圧政を次々に経験した。

士師記には、神のみことばに従わないとどうなるかという、かなり残酷な話に加え、おどましい物語が一つ、または二つ含まれている。

C. ルツ記

この気品のある小編は、士師記の時代の後ではなく、その霊的に暗い時代を舞台としている。たとえ霊的に大きく衰退した時代であっても、敬虔な残りの民は、美しく神に喜ばれる方法で神に仕えることが可能であることを示している。

III. 王政時代の書巻

王政期（紀元前1043～586年）を扱う書も三巻あるが、すべての現代版では便宜上、六巻に分割されている。

A. サムエル記

サムエル記第一、第二は、サムエル、サウル、そしてダビデという三つの名前で要約することができる。サムエル記は、イスラエル初代の王サウルと、その後継者ダビデに油を注いだ預言者サムエルにちなんで命名されたもので、ダビデの試練と成功が

詳しく記されている。

B. 列王記

ダビデの子ソロモンは、賢明で立派な統治者であったが、多くの異教徒の女性と結婚したことで霊的な力を失った。ソロモンの子レハブアムは、王国を南のユダ（良い統治者と悪い統治者がいた）と北のイスラエル（悪い統治者しかいなかった）に分裂させた。紀元前722年、北王国は捕囚となり、紀元前605年から586年にかけて、南王国も捕囚となった。

C. 歴代誌

ヘブル語聖書では最後の書であり、アダムから（系図だけであるが）南王国滅亡までのユダヤ人の歴史を詳述している。歴代誌はヘブル民族の歴史を霊的に語るものであるため、肯定的な要素を強調している（ダビデの大きな罪は省略され、反抗的な北王国は完全に無視されている）。

IV. 復興の時代の書巻

バビロンにおける70年の捕囚後、かつて神政国家であり、その後、王政国家であったこの国は、最初にペルシア、次にギリシア、そしてローマという、世界の異邦人列強の単なる属州となった。この期間は紀元前536年から420年である。

A. エズラ記

紀元前536年、キュロス王は、ユダヤ人の祖国帰還を許可する勅令を出した。ゼルバベルのもと、およそ5万人（全体のごく一部）が、神殿を再建するために帰還した。祭司エズラは、紀元前458年に約2千人のユダヤ人を連れて戻った。

B. ネヘミヤ記

紀元前444年、ネヘミヤはペルシアの王から、再建された神殿の周囲にエルサレムの城壁を再建する許可を得た。城壁が完成すると、エズラ、ネヘミヤは、ユダヤ国家の改革と再生を主導した。

C. エステル記

本書は、年代順で言えば、復興の時代の三つの書物の最後ではない。ここに書かれている出来事はエズラ記の6章と7章の間にペルシアで起こったことだからである。おそらくこの書が最後に置かれたのは、聖地に戻ることができたのにもかかわらず、あえて戻らなかった民の生活が記されているからであろう。エステル記は、反ユダヤ的迫害、さらには大量虐殺から、神が舞台裏でこの古代の民を守っておられたことを描いている（ただし、神の名は一度も出てこない）。神が用いられた器は、美しく勇気のあるユダヤ人王妃と、知恵に優れた従兄弟のモルデカイであった。

後 注

1. カルヴァンのジュネーヴ（1500年代）および、清教徒のニューイングランド（1600年代）は、基本的には、神政政治を目指した改革派プロテスタントによる試みであった。

ヨシュア記

序 論

「ここで聖なる正典は、歴史と芸術性を備えた歴史叙述の一書を私たちに提示している。私たちの世代は、歴史に関する著作は豊富だが、歴史的な感覚や認識に乏しいため、このような本を切実に必要としているのだ。」

パウルス・カッセル (Paulus Cassel)

I. 正典における独自性

ヨシュア記は、モーセ五書とカナンの地におけるイスラエルの歴史との間に欠くことのできない架け橋である。ヘブル語の書順でも、現代キリスト教の書順でも、ヨシュア記は旧約聖書の6番目の書である。キリスト教徒にとっては、12冊の「歴史書」(ヨシュア記からエステル記まで)の最初の書であり、ユダヤ教徒にとっては、「前預言書」(ヨシュア記からエズラ記、ネヘミヤ記まで。ルツ記と歴代誌はヘブル語聖書の最後の「諸書」に含まれる)と呼ばれるものの最初の書である。ジェンセン (Irving L. Jensen) はヨシュア記の重要性を次のように強調している。

真の意味で、ヨシュア記はイスラエルにとって新しい経験の始まりであり、進歩

的な歴史の頂点でもある。したがって、ヨシュア記はその歴史的関連性のゆえに旧約聖書の中で極めて重要な位置を占めている。^{*(1)}

II. 著者問題

本書は著者不詳であるが、その大半はヨシュア自身によるものであり、ヨシュアの死後、大祭司エルアザルとその子ピネハスが完成した、という古くからの伝承は傾聴に値する。ヨシュア記には、著者が目撃者であったことを示唆する生き生きとした記述がある。それだけではなく、5:1,6など第一人称(「私たち」※英訳)を使っている箇所もある。また、ヨシュア記ははっきりと、ヨシュアがいくつかの文書を書かせたとも記している(18:8、24:26)。ヨシュア記が編纂されていた時に、ラハブがまだ

生きていた (6:25) という事実は、ヨシュアが主要な著者であったということと符号する。

III. 執筆年代

ヨシュア記の執筆年代は、出エジプトの時期 (紀元前15世紀か、それとも13世紀か) に一部左右される。事実からすると、紀元前1400年代半ばという、より保守的な年代に一致する。ヨシュア記の年代が紀元前1400年から1350年の間であると考えられるのは、次のような理由からである。

ヨシュア記はソロモンより时期的に早く (16:10とⅠ列王記9:16を参照)、ソロモンの父ダビデより前でなければならない (15:63とⅡサムエル5:5～9参照)。ヨシュア13:4～6では、フェニキア人を「シドン人」と呼んでいることから、ツロがシドンを征服した紀元前1100年以前でなければならない。また紀元前1200年よりも前でなければならない。なぜなら、ペリシテ人がパレスチナに侵入したのはその後であるのに、ヨシュアの時代には、ペリシテ人は問題となっていないからである。

IV. 背景と主題

出エジプト記が、神がその民をエジプトから導き出す物語であったように、ヨシュア記は神がその民を約束の地に導く物語である。神は民の不信仰にもかかわらず、始められた良いわざを完成しようとされる。これから見ていくように、民が変わることはなく、不信仰は相変わらずであった。しかしそれでも、主のことばは成就に向かい、アブラハムの子孫は契約の地に植えられ (創世記15:13～16)、根を張り、成長することになる。

本書の出来事は、申命記の最後の章に記されている出来事のあとに続く。イスラエルの民はヨルダン川の東、モアブの草原に宿営していた。モーセはすでに死に、ヨシュアが最高司令官となっていた。ヨシュアは民を導いてヨルダンを渡河し、今や約束の地に入ろうとしていた。モーセに代表される律法によっては、神の民をその嗣業に導くことはできない。それができるのは、ヨシュアが描いた復活のキリストだけである。

ヨシュアについて、いくつかの重要な事実をおさらいしておこう。モーセは彼の名前をホセアからヨシュアへと変えていた (民数記13:16)。ヨシュアはエフライム人であり (民数記13:8)、モーセの個人的なしもべであった (ヨシュア1:1)。彼は主の戦いに従事した人物であった。彼はイスラエル人を率いてアマレク人との最初の戦いに臨み (出エジプト記17章)、エジプトを出て以来、イスラエル人が知る唯一の将軍であった。しかし、ヨシュアがモーセに代わって国のトップに立つことができたのは、その武勇ではなく、霊的な活力と信仰にあった。若い頃、彼は常に主の天幕に通っていた (出エジプト記33:11)。モーセとともにシナイ山に立ったこともあった (出エジプト記32:17)。38年前、民がカデシュ・バルネアにいたとき、信仰の目で約束の地を見たのは、ヨシュアとカレブだけであった (民数記14:6～10)。モーセによって訓練された彼は、90歳を過ぎていたが、今やヤハウエから任命されるまでになったのである。

構 成

I. 約束の地の占領 (1～12章)

- A. ヨルダン川を渡る準備 (1章)
- B. エリコの斥候 (2章)
- C. ヨルダン渡河 (3:1～5:1)
- D. ギルガルにおける儀式 (5:2～12)
- E. エリコの征服 (5:13～6:27)
- F. アイでの軍事作戦 (7:1～8:29)
- G. シェケムでの契約の確認 (8:30～35)
- H. ギブオン人との盟約 (9章)
- I. 南方作戦 (10章)
- J. 北方作戦 (11章)
- K. 征服の総括 (12章)

II. 約束の地への定住 (13～24章)

- A. まだ占領されていない土地 (13:1～7)
- B. 土地の割り当て (13:8～19:51)
 - 1. ルベン、ガド、マナセの半部族への割り当て (13:8～33)
 - 2. ユダへの割り当て (14、15章)
 - 3. ヨセフへの割り当て (16、17章)
 - 4. 残りの部族への割り当て (18、19章)
- C. 逃れの町 (20章)
- D. レビ族の町 (21章)
- E. ヨルダン川東岸の祭壇 (22章)
- F. イスラエルの指導者に対するヨシュアの告別の辞 (23章)
- G. イスラエルの民に対するヨシュアの告別の辞 (24:1～15)

H シェケムにおける契約の更新
(24:16～28)

I. ヨシュアの死 (24:29～33)

注 解

I. 約束の地の占領 (1～12章)

A. ヨルダン川を渡る準備 (1章)

1:1～9 主は最初にヌンの子ヨシュアに、彼を待ち受ける任務について厳粛な命令を下された。領土はイスラエルに約束されていたが、彼らは南のネゲブから北のレバノンまで、また西は地中海から、東は大河ユーフラテスまでそれを所有しなければならなかった (3,4節)。そしてヨシュアは強く、雄々しく、また従順でなければならなかった。今も当時と同じように、私たちの心と思いを神のみことばで満たし、それに従うなら、栄えることが約束されている (8節)。

三度にわたってヨシュアは主から強く、また雄々しくあれと命じられている (6,7,9節)。このとき、前途の任務の大きさとそれに要する期間、これほどにも頑迷な民を率いる重圧、そしてモーセという霊的な師の不在は、ヨシュアの心に重くのしかかっていたことであろう。しかし主は、ヨシュアに力を与えずに彼を召されたのではなかった。ヨシュアが強くあるための十分な理由があった。神の約束 (5,6節) は確実な勝利であり、神のことば (7,8節) は安全な手引書であり、神の御臨在 (9節) は力強い支えであった。

スパークス (T. Austin Sparks) はこのように書いている。

本当の信仰の戦いはここに始まる。私たちが何者かではなく、主がどういう御方か、また、私たちがどう感じるかではなく、主から見た事実は何か、ということが重要なのである。^{*(2)}

1:10~18 民はカナンの地へ旅立つための食糧の準備をしなければならなかった。ヨルダン東岸に定住しようとしていた二部族と半部族については、ヨシュアは、土地の征服に協力しなければならないこと、そうすれば家族のもとに帰ることができること(12~15節)を確認した。彼らはこれを快諾した(16~18節)。引き返す者は死刑となる。

讚美歌の中には、ヨルダン川を渡ることを死にたとえ、カナンの地を天国にたとえたものがある。しかし、カナンの地には争いがあったが、天国には争いはない。実は、カナンの地は私たちの現在の霊的相続分を表している。そのすべては私たちのものである。しかし、私たちはみことばに従い、約束を主張し、信仰の戦いを立派に戦ってそれを所有しなければならない。

B. エリコの斥候 (2章)

2:1前半 侵攻に備えて、ヌンの子ヨシュアは、シティムからエリコに二人の者を偵察として遣わした。これはヨシュアの信仰の欠如を示すものではなく、軍事戦略の問題であった。彼らは、数十年前の時のように全土を偵察するのではなく、一度に一步步ずつ先を見るだけであった。

2:1後半~24 斥候はラハブという名の遊女の家身に身を寄せた。カイルとデリッチ(Keil and Delitzsch)が指摘するように、「このような人の家なら彼らが入ってもそれほど怪しまれない」^{*(3)}ためであった。こ

の叙述から、主がユダヤの民に与えられた輝かしい勝利について、ラハブが聞いていたことは明らかである(8~11節)。ラハブは、彼らの神こそが真の神に違いがない、と確信し、主に信頼して真の回心者となった。ラハブは、たとえ自分の国を裏切ることになったとしても、斥候を守ることによって、その信仰が本物であることを証明したのである。

斥候たちは、ラハブがその家の窓に赤いひもを結び、エリコに対する攻撃の間、一族が屋内に留まるなら、ラハブとその一族を殺さないと約束した(6~21節)。赤いひもは、最初の過越(出エジプト記12章)の時、血によって家が守られたことを私たちに思い起こさせずにはおかない。

エリコの王からの使者が、斥候の居場所を尋ねると、彼らはすでに町を出て行きました、とラハブは答えた(5節)。エリコの人々がその人たちを追ってヨルダン川の道で彼らを捜している間、ラハブは斥候たちを、西の山地の方へ逃した。そこで三日間身を隠した後、斥候たちはヨルダン川を渡って逃れ、ヨシュアに自信あふれる報告をしたのであった(22~24節)。

ラハブが義と認められたのは、「ことば」によってではなく、「行い」によってであった(ヤコブ2:25)。

聖書はラハブの欺き(4,5節)ではなく、その信仰を称賛しているのは確かである(ヘブル11:31)。ヤコブはまた、ラハブのしたことを信仰の行いと呼んでいる(ヤコブ2:25)。彼女が自分のいのちを危険にさらしてまでも斥候のいのちを救おうとしたのは、彼らの神の力と主権を信じたからである。

同じように、私たちの主の時代にも、主の栄光を目撃した人々にまさる信仰を示した人々がイスラエルの共同体の外にいた

(ルカ7:2～9)。偉大な信仰は、それがどこで見出されようとも、必ず報われる(6章参照)。それは神に喜ばれるものだからである(ヘブル11:6)。

C. ヨルダン渡河(3:1～5:1)

3:1～13 ヨルダン川を渡る時が到来していた。時あたかもヨルダン川は洪水位を迎えていた。祭司たちは契約の箱を担いで前進するよう指示を受けた。(民数記4:1～15にあるように、通常はケハテ族が契約の箱を運んだが、この特別な場合にあっては祭司たちが運ばなければならなかった。)民は、常に箱が視野に入るようにしながら、ある程度の距離を空けて契約の箱について行くように命じられた。契約の箱はキリストを表している。私たちは、不遜にも人間の頭脳には深すぎるキリストの人性の謎を解こうとするのではなく、敬意をもって距離を保つべきである。キリスト教史上最悪の異端のいくつかは、それを解き明かそうとする厚かましい試みから始まった。しかし、私たちは常にキリストを視界に入れていなければならない。それによって私たちに勝利が保証されるのである。

3:14～17 祭司たちの足がヨルダン川の水際の水に触れたとき、奇跡が起きた。川は、何キロか北にあるアダムアダムの町でせき止められた。水はそこに山のようにたまり、その地点より下方の川底に残っていた水はことごとく塩塩の海(死海)に流れ込んだ。

ヨルダン川がせき止められる、という同様な出来事が、アダムという町があったと思われる地点で起こった。1267年には10時間、1927年には21時間、川がせき止められた。いずれも原因は地震だった。^{*(4)}しかし、キャンベル(D. K. Campbell)は、ここには完璧なタイミングだけでなく、特別な奇跡であったことを示唆するものが数

多くある、と論じている。

数多くの超自然的要素がここで組み合わせられている。

- (1) この出来事は予告されていた通りに起きた(3:13, 15)。
- (2) タイミングは絶妙であった(15節)。
- (3) この出来事は、川が洪水位に達した時に起きた(15節)。
- (4) 水の壁は何時間も、場合によっては丸一日、その場にとどまった(16節)。
- (5) 柔らかく、濡れた川底が一瞬のうちに乾いた(17節)。
- (6) 民が渡り終わり、祭司たちが川から上がるやいなや水がもとに戻った(4:18)。

それから数百年後、預言者エリヤとエリシャは同じ川の乾いた土の上を東に渡った(Ⅱ列王記2:8)。その後すぐに、エリシャは乾いた地面の上を歩いて再び川を渡った。イスラエルの民がヨシュアのもとで渡河したことを説明するのに自然現象が必要だとすれば、エリヤとエリシャのために、2回の地震が立て続けに起きた、と結論せざるを得ないが、これはややうがった解釈のように思われる。^{*(5)}

契約の箱に象徴される神は、ヨルダン川の西岸で民を勝利に導くのと同じように、民をヨルダン川の中へと導かれた。イスラエルの前から水を退かせたご自身の存在こそ、民の勝利の希望であり、民自身の力によらないことを、神は示しておられたのである。

祭司たちは川底の真ん中まで歩き、イスラエル全体が乾いた地を渡っている間、そ

こにしっかりと立ち止まった。

4:1～24 主はヨルダン川の西岸にイスラエルが最初に宿営したことを記念して、部族ごとに一人ずつヨルダンの川底から石を取り、記念の標石を立てるように命じられた。その通りに、記念碑はギルガルに建てられた。それは、神が奇跡的にヨルダン川を止め、イスラエルが乾いた地面上を歩いて渡れるようにしてくださったことを、後世の人々に末永く思い出させるためのものだった。

ヨルダン川東岸に相続地を得た部族——ルベン人とガド人と、マナセの半部族——は武装した兵士を送り込んだ。同胞がカナンの地を占領するのを助けるためである。二部族半の兵力を合わせると十万人以上であったが（民数記26章参照）、ヨルダン川を渡ったのは、わずか四万人であった。おそらく残りの民は自分の土地を確保し、家族を守るために残ったのであろう。

二部族半の者を含むすべての民が渡り終え、ヨルダン川から十二の石を取り出した後、ヨシュアはヨルダン川の真中で、祭司たちが立っていた場所の下にあった十二の石を積み上げた。それから祭司たちが契約の箱を担いで西岸に進むやいなや、ヨルダン川は再び洪水のようになって下流に流れ落ちた。

川底の石は、死においてキリストと同一であることを示し、西岸にある石は、復活のキリストと同一であることを示している。

ヨルダン川の水を遮断することによって、主は全イスラエルの目の前で、ヨシュアを大いなる者とされた。それはかつて主がモーセを高められたのと同様である。これまでヨシュアは、モーセの陰で謙遜に仕え、神がどのように事をなさるかを学ぶしもべであった。そして今、ヨシュアが高められる時が到来した。「だれでも自分を高くす

る者は低くされ、自分を低くする者は高くされる」からである（ルカ14:11）。

民は第一の月の十日にヨルダン川を渡った。エジプトを出てから丸四十年まであと五日を残すのみで、過越の祭りの準備に間に合う時期であった（出エジプト記12:2,3参照）。

5:1 カナンに住む異邦の住民は、イスラエル軍の奇跡的なヨルダン渡河を聞いてパニックに襲われた。

D. ギルガルにおける儀式（5:2～12）

5:2～9 本章は、イスラエルがカナンで最初に陣を敷いたギルガルで起こった出来事について述べている。男子はそこで割礼を受け（2～9節）、過越の祭りもそこで行われたが、それはカナンで最初のものであった（10節）。そこでマナは止み（11,12節）、そこでヨシュアは主の軍の将であるイエス・キリストに出会った（13～15節）。

主はこの時、割礼の儀式をもう一度行うようにヨシュアに指示された。エジプトから出てきた男たちはすべて割礼を受けていたが、これまでの間に戦士たちはすべて死んでしまった（申命記2:16）。四十年間、割礼は行われなかった。その放浪の間に新しい世代が生まれ、契約の祝福を完全に享受できる立場に回復したことのしるしとして、この儀式を受ける必要があったのである。荒野をさまよっている間、彼らはエジプト人から、約束の地を所有できないでいることを嘲笑されていた。しかし、彼らがその地に着いた今、その恥辱は取り除かれた（9節）。「もう一度」（2節）というのは、イスラエルが国として行った二度目の割礼を意味する。

5:10 過越の祭りは、ヨルダン渡河から四日後、つまりその月の十四日に行われた。ヨシュアの信仰に注目しよう。彼は敵

地にいたにもかかわらず、兵士たちに割礼を施し、過越の祭りを守ることによって神に従った。これらの行為は「最も非軍事的な行動」と称されている。

割礼と過越を通して、主はご自分の民を主との関係の基本に呼び戻そうとしておられたのである。

この二つの儀式は荒野でなおざりにされていたのであった。

割礼は、神とアブラハムとの契約のしるしであり、神はその真実さのゆえに、彼らにその土地を与えることによって、ご自身の無条件の約束を守っておられたのである（創世記15:18～21）。割礼はまた、勝利のために不可欠な、自己吟味と肉の汚れを取り去ることの象徴でもあった。過越は彼らが贖われたことを思い起こさせるものであった。ヤハウェは彼らを買取り、エジプトの奴隷状態から解放してくださったのである。過越の祭りを守ることで、ユダヤ人たちは最初の過越が行われた四十年前に、モーセを通して与えられた主のことばに従っていたのである（出エジプト記13:5）。主がご自分の民を呼び寄せ、連れ出された動機は恵みであった。彼らを（約束の地に）導き入れることを保証するのは主の誠実さであった。

5:11, 12 マナは、受肉されたキリスト、すなわち荒野を旅する私たちの必要を満たすものとして天から降って来たパンを表している。その地の産物とはカナンの祝福に入ったあとの、復活のキリストを示している。私たちはその両者によって養われている。彼らが初めて炒り麦を食べたその翌日以降、マナを得ることはもうなかった。「神とは何とすばらしい〈時の管理者〉にして〈供給者〉であられることか！」

E. エリコの征服 (5:13～6:27)

5:13, 14前半 13節にある「人」とはヤハウェの使い、すなわち、主イエスの受肉前の姿の一つである。主はご自身を主の軍の将と名乗られた。主は単に私たちを助けるためにではなく、ましてや危害を加えるために来られるのではない。私たちを完全に支配するために来られるのである。

5:14後半, 15 自分が神の御前にいることをヨシュアが知っていた決定的な証拠がここにある。単なる御使いであれば、決して礼拝を受け入れることはないが、ここでは主の使いが礼拝を命じ、それによってその神性を証明している。ヨシュアは、かつてモーセがその働きの初めに学ばなければならなかったこと（出エジプト記3章）、すなわち主の神聖さと権威を、身をもって学ばなければならなかったのである。

6:1～21 カナンの征服は、中部、南部、北部の三次にわたる軍事作戦によって成し遂げられた。中央の作戦は、分断と攻略を目的とし、一つはエリコ、もう一つはアイでの二つの主要な戦闘から成っていた。

エリコは城塞都市であったが、その城壁も城門も、結局は住民をさばきのために中に閉じ込めておくためのものであって、イスラエルを締め出すことはできなかった。エリコは地形的にも（海拔マイナス240m以下）、道徳的にも低い町であった。エリコは破滅する運命にあった。それが建っていたのは神の土地であり、正当な居住者がその所有権を主張しに来たからである。私たちの人生にも、エリコのように立ちはだかり、所有物を手に入れる前進を妨げるものがたくさんある。私たちは、試練のあまりの大きさに落胆してきたかもしれない。しかし、主が与えてくださる勝利を主張し、信仰によって前進し、成功を求めて神から目を離さないでいるなら、私たちが奇跡を

見ることができるであろう。

ユダヤ人に対する恐れから、エリコには侵略者が到着する前に障壁が築かれていた。六日間、イスラエル人は町の周囲を一周し、夜になるとギルガルに戻った。七日目には、七回、町の周りを回り、祭司たちが角笛を吹き鳴らすと、イスラエルの民はときの声あげた。町の城壁は崩れ落ち、神の民は町に入ることができた。

聖書研究者の中には、城壁がエレベーターのように地面の中に沈んでいったため、イスラエル人が城壁の上を歩いて町の中に入ることができたのではないかと考える人もいる。それがどのようにして起こったにせよ、それは神の民の信仰の結果であった（ヘブル11:30）。6～12節の間で「契約の箱」が七回も言及されていることに注意しよう。

町にあるすべてのものは「のろわれたもの」、すなわちカナン初物として聖絶するように主に定められていた。住民（ラハブとその家族を除く）と家畜は聖絶され、金や銀、および青銅や鉄の器は主の宝物倉に納めるものとされた。だれひとり、いかなるものをも私有してはならなかった。

カナン人の道徳的な倒錯を知ると、神が、エリコの生きとし生けるものを完全に滅ぼすように命じられた理由が容易に分かる。私たちは、主が邪悪な人々に当然のさばきを下したことを批判するよりも、ラハブとその家族を同じ目に遭わせなかった主の恵みに驚嘆すべきである。

6:22～27 城壁を崩壊させた信仰は（ヘブル11:30）、ラハブとその親族をも救い出した（ヘブル11:31）。神の恵みは、ラハブの安全を確保しただけでなく、ダビデ、ひいては主イエス・キリストの先祖という地位にまでラハブを引き上げたのである（マタイ1:5,6）。恵みは私たちを滅びから救う

だけでなく、私たちが高揚されることをも保証する（ローマ8:29,30）。信仰とは、恵みをつかむ手である。

ラハブとその家族が無事に連れ出された後、町は焼かれた。ヨシュアは、要塞としてエリコの再建を試みる者に呪いを宣告し、その人の長子は、礎が据えられると死に、末の子は、門が建てられるときに死ぬであろう、と預言した。この呪いがどのように成就したかはI列王記16:34を参照のこと。

F. アイでの軍事作戦（7:1～8:29）

第7章はカナンにおける罪の問題を扱っている。民はすでにヨルダン川を渡っていたが、彼らはまだ罪に陥りがちであった。ここにあるのは、イスラエルのアイでの敗北と、アコルでの罪に対する勝利の物語である。

7:1～5 ヨシュアがアイに斥候を送ると、彼らは帰って来て、その町の防御は手薄であるから、二、三千人以上の兵を送る必要はないと思われる、と自信をもって報告した。しかし、およそ三千人の軍隊が進軍したものの、彼らは勝利どころか敗北を喫した。

7:6～10 勝利の後に敗北が訪れることはよくある。しかも、それは、まさかというとき、また自分自身が最も強いと感じるときである。民はアイに攻め入る前に祈らず、主も、エリコ攻略を命じられたときのように、出撃を命じてはおられなかった。その結果、彼らはすべてが順調ではないこと、また何かが変わってしまっていたことを痛感した。カナン人が以前より強くなったわけではなく、イスラエル人が弱くなったのである。しかもその理由は、罪が陣営に入り込んでしまったからである。たった一人の過ちであったにもかかわらず、国全体が罪に問われ（11節）、三十六人が死ん

だ(5節)。主はヨシュアに、今は祈りの時ではなく、行動の時であると告げられた(10節)。

7:11～26 ヨシュアは敗北の原因が陣営の中の罪にあることを知った。エリコ征服の際、何者かが主に背き、略奪を働いたのである。その犯人を見つけるためにどのような手段が取られたのかは書かれていない。くじを引く、という方法であったかもしれない(※日本語訳の「くじ」は原文を補ったもの)。いずれにせよ、範囲はまず部族にしぼられ、次に氏族、そして家族へと狭められ、ついにその男、アカンに行き着いた。アカンはシンアル(バビロンのこと)の外套、銀二百シェケルおよび金の延べ棒を盗んだことを自白した。また、それらを天幕の中の地面の下に隠したことも認めた。

「(それらを)見て欲しくなり、それらを取りました」(21節)。アカンの物語はヤコブ1:14, 15の生き生きとした例証となっている。「人が誘惑にあうのは、それぞれ自分の欲に引かれ、誘われるからです。そして、欲がはらんで罪を生み、罪が熟して死を生みます。」

アカンは聖絶の物の一部を取ったことにより、自らも呪われた者となった(申命記7:26)。アカンの家族全員が彼と運命をとものにしたのは厳しすぎるように思えるかもしれないが、罪とはそもそも深刻な問題なのである。ラハブの信仰はラハブの家族全員を救ったが、アカンは罪を犯したことで、一族が断罪された。しかも、家族の者たちもアカンが何をしていたか気づいていたふしがある。というのも、盗品は彼らの天幕の下に埋められていたからである。ことによるとアカンの子どもたちがその罪に加担した可能性すらある。神が、ご自分の民に教えておられた教訓は明白である。罪は宿

営全体を汚すものであり、罪が表面化すれば、そのたびに根絶されなければならない。

その犯罪に対する刑罰として、アカンとその家族は石で打ち殺され、その後、火で焼かれた。盗品だけでなく、彼の所有物もすべて焼かれた。ブレア(H. J. Blair)はこのようにコメントしている。

アカンの死によって、冒瀆行為は償われた。悲劇の舞台であったアコルの谷は、民が再び前進に顔を向ける望みの門(ホセア2:15)となった。^{*(6)}

8:1～29 二度目の挑戦で、ヨシュアとその軍勢は待ち伏せによってアイを攻略した。待ち伏せの詳細をはっきり理解することは難しいが、大まかな作戦は次のようなものであったと思われる。

- イスラエル人の一隊が闇に紛れてアイを通り越し、町の西側に隠れた。
- 朝になると、残りの兵士が北側から町を攻撃した。
- アイの人々が反撃すると、ヨシュアとその兵士たちはわざと退却し、住民を町の外へおびき出した。
- するとヨシュアは投げ槍を差し伸べた。それが合図となって、待ち伏せをしている者たちは町に火を放った。
- 自分たちの町が燃えているのを見て、アイの人々はパニックに陥った。

こうなると、イスラエルが両側からアイの兵士を挟み撃ちにし、壊滅させるのは容易であった。

3節によれば、三万人の兵士が待ち伏せするために送られたが、12節には五千人とある。待ち伏せが二度あったのかもしれない。しかし、三万人というのは待ち伏せの数としては不必要に多いように思われる。

ヘブル語の「千」は長とも訳せるので、三万人は三十人の隊長と読むべきだという説もある。また三万人というのは、五千人の写し間違いだという説もある。五千人（12節）とは、万一アイの西方3キロメートルにあるベテルの人々からの攻撃があった場合に備えて送り込まれていたのかもしれない。

ユダヤ人はこの交戦に限って、分捕り物と家畜だけは戦利品として取ることが許された。もしアカンが待ってさえいれば、命を落とすことなく戦利品を得ることができたかもしれない。

イスラエルは最初の戦闘で三十六人を失ったが、聖書の記録を見る限り、今回は一人も失ってはいない。汚れを清めた彼らは、戦いの中で再び安全を得たのである。クリスチャン生活における勝利とは、争いが^{ない}ことではなく、争いの^{ただ}中^{にあ}って、神のご臨在と守りがあることなのである。

G. シェケムでの契約の確認(8:30～35)

8:30～35 神のみことばに従い（申命記27:2～6）、ヨシュアはエバル山に一つの祭壇を築いた。そしてモーセがイスラエルの子らの前で書いた律法の写しを、石の上に書いた。全部族は、その半分がゲリジム山の前に、もう半分はエバル山の前に集まった。ヨシュアはその間の低地に立って、モーセの律法の書に記されている祝福と^のろいを読むか、あるいはレビ人に読むように指示した（申命記27:14）。「聖書においては、人が単に命じただけのことを、その人が実際に行ったと記されることが多い。」

* (7)

H. ギブオン人との盟約（9章）

9:1～27 イスラエルの軍事的成功が知らされると、カナンの王たちはみな、ヨシ

ユアおよびイスラエルに対して団結した（1,2節）。しかし、ギブオン^の住民たち、ケフィラ、ベエロテ、およびキルヤテ・エアリムという他の三つの町々の住民（3,17節）は、侵略者に対抗するのは無駄であると判断した。イスラエルはその地の異教の全住民を根絶やしにするように命じられていることを彼らは知っていたのである。しかし、彼らはまた、カナン以外の国々に関してはそのような命令が出されていないことも知っていた（申命記20:10,15）。もしヨシュアとその軍隊に、自分たちは遠い国からはるばるやって来たと思わせることができれば、殺されることはないだろうと考えたのである。

そこで彼らはぼろぼろの古びた上着と繕った古い履き物で変装した。それだけでなく、乾いてかびの生えたパンと、破れた皮袋も持参した。彼らはヨシュアに私たちは遠い国から参りました、と言った。彼らのすべてがそのことばを裏付けているように思われた。

イスラエル人はこの件に関して主の指示を求めなかったばかりか、ギブオン人と盟約を結んだ。三日後、陰謀は暴かれ、ユダヤ人たちの間では、この詐欺師たちを殺せ、という騒ぎが起こった。しかし、族長たちは盟約を尊重し、ギブオン人を生かすことにした。ただし、彼らは今後、主の祭壇の奉仕に関連して、薪を割る者、水を汲む者として会衆に仕えることになった。

ヨシュアと族長たちは、この件で欺かれたとはいえ、誓いを守ったことは賢明であった。後に、サウルはギブオン人の絶滅を図り、そのことで罰を受けた（IIサムエル21章）。

I. 南方作戦（10章）

10:1～6 10章は南方作戦の記録であ

る。カナンの五つの都市の王たちは、ギブオン人がイスラエル人に寝返ったことを聞き、これによって中央の丘陵地帯が脆弱になったことに気づき、ギブオンを攻撃することにした。ギブオン人はヨシュアのところに人を遣わして軍事援助を嘆願した。

10:7, 8 ヨシュアは再び主の口から「彼らを恐れてはならない」という励ましのことばを聞いた。ヨシュアはエリコでの勝利の前、またアイでの待ち伏せ作戦が成功する前にもそのことばを聞いた。それは、敵の規模がどうであろうと、勝利を保証するものであった。

10:9~11 主によって勝利を確信したヨシュアは、ギブオンで敵軍と交戦し、彼らを敗走させた。敵を滅ぼす際に二つの奇跡が起きた。一つ目は、雹を伴うすさまじい嵐であり、イスラエルの子らが剣で殺した者よりも、それによって死んだ者のほうが多かった。しかし、この雹が無差別ではなかったことに注意しなければならない。雹によって死んだのは敵だけだったのである。

10:12~15 それから、ヨシュアの求めに応じて、太陽と月は静止し（あるいは「滞留し」）、敵が城壁に囲まれた安全な町々に逃げ込む前に、イスラエル人が敵を追い続け、滅ぼすことのできる時間が延長された。太陽と月が静止した（英訳「立ち止まった」）というのは、出来事を文字通りに描写した言い方である。太陽が「昇る」、とか「沈む」、というときも、私たちはこのような言い方をする。この時、実際にどういうことが起こったのか、ということについては、さまざまな自然現象による説明がなされてきた。^{*(8)} しかし、それが戦いのための一日が延長された奇跡であったことを知っていれば十分である。スポルジョン (C. H. Spurgeon) はこう言っている。

神がどのようにしてそうなさったかは、私たちにとっての問題ではない。…私たちの役割は、奇跡を合理的に説明しようとするのではなく、奇跡をなされた神に栄光を帰すことである。^{*(9)}

ヤシャルの書（13節）とは「正しき者の書」という意味かもしれないが、今日、そのような名称で特定できる文献は一つもないし、それが神の靈感を受けたものでないことも確かである。

この戦いはイスラエルに大きな負担を強いるものであった。彼らは夜を徹して行軍し、歴史上最も長い一日を戦い抜いたのである。彼らは通常の限界を超えて努力したが、それでもなお勝利は主のものであった（10, 11節）。マシュー・ヘンリー (Matthew Henry) は、いつもの洞察力でこう述べている。

しかし、なぜヨシュアは自分のみか、部下にまで、これほどの負担を強いる必要があったのだろうか。神はヨシュアに、必ず敵をあなたの手に渡す、と約束されたのではなかったか。確かに神はそう約束された。しかし、神の約束には、急けてもよいとか、努力しなくてもよい、という意図はなく、私たちの努力を促し、励ます意図があるのである。^{*(10)}

10:16~27 五人の王たちはマケダの洞穴に閉じ込められ、その後、殺されて五本の木にかけられ、最後に洞穴の中に葬られた。

10:28~39 この後、ヨシュアはマケダ（28節）、リブナ（29, 30節）、ラキシユ（31, 32節）、ゲゼル（33節）、エグロン

(34,35節)、ヘブロン (36,37節)、そしてデビル (38,39節) を征服した。37節のヘブロン¹の王とは、26節で殺された王の後継者である。

10:40~43 この段落は南方作戦を要約したものである。

この章で言及されている絶滅とは、ヘイリー (John Haley) が指摘している通り、大まかに捉えられなければならない。

ヨシュアはこの地域を急速に制圧したため、完全に住民を追い出すには至らなかった。…追撃した相手はすべて滅ぼしたが、攻撃を中断して、敵が隠れた可能性のある場所をくまなく捜したわけではない。これは、各部族がそれぞれの相続地で行うよう任された。^{*(11)}

J. 北方作戦 (11章)

11:1~9 イスラエルのとどまるところを知らない勝利によって、北方の王たちは同盟関係を結ばざるを得なくなった。彼らはガリラヤ湖の北に位置するメロムの水のほとりとともに陣を敷いた。ヨシュアとその軍隊は彼らに襲いかかり彼らを打ち破った。それから、主に従い、ヨシュアは彼らの馬の足の筋を切り、彼らの戦車を火で焼いた。筋を切るとは、脚の腱を切って、馬を無力にすることである。

11:10~15 首都ハツォルは火で焼かれた。ただし丘の上に立っている町々は破壊されたが、焼かれることはなかった。おそらくヨシュアは、丘の上に立つ町々が、やがて定住するイスラエル人にとって利用価値があると考えたのであろう。すべての町々の住民は殺され、すべての分捕り物がイスラエルの子らに奪われた。完全な服従は完全な勝利をもたらす (15節)。

11:16~20 これらの節は、南はエドム (セイル) から北東はヘルモン山、そして北西はレバノンの谷にいたるまでの地をヨシュアが征服したことを振り返っている。ギブオンは破滅を免れた。エルサレムはダビデの時代まで征服されずに残った。(16節のゴシェンとはエジプトのゴシェンではなく、パレスチナの南の地域である。)

11:21~23 アナク人がガザ、ガテ、アシュドデを除くすべての町々で滅ぼされた、という事実が特別に言及されている。その地に戦争はやんだ (23節) というのは、主要な戦いが終わった、という意味であり、まだ多くの「掃討作戦」が残っていた。

K. 征服の総括 (12章)

12:1~6 最初の6節は、アモリ人の王シホン、バシャンの王オグに対して神がモーセに与えられた勝利に話を戻す。これらの勝利も征服全体の一部とみなされている。その領地はヨルダン川東岸の二部族半によって占領されていたからである。

12:7~24 神は以前、イスラエルがヨルダン川を渡る前に、次のような約束をしておられた。「また、彼らの王たちをあなたの手に渡される。あなたは彼らの名を天の下から消し去る。だれ一人としてあなたの前に立ちはだかる者はなく、ついに、あなたは彼らを根絶やしにする」(申命記 7:24)。ここには神が真実であることを示す三十一の事例がある (7~24節)。ヨシュアはヨルダン川西岸において三十一人の王を打ち破ったのである。

II. 約束の地への定住 (13~24章)

A. まだ占領されていない土地 (13:1~7)

13:1~6 ヨシュアは年を重ねて老人になったが、イスラエルの民に約束された地

のすべてはまだ占領されていなかった。2～6節は、まだ異教徒が住んでいた南西地域および北東の部分が記されている。そればかりではなく、ユーフラテスに至る東方の地域もユダヤ人に約束されていたが、未だ占領されていない。^{*(12)}

13:7 主はヨシュアに、すでに征服した土地を**九部族**と**マナセの半部族**に割り当てるように命じられた。

B. 土地の割り当て (13:8～19:51)

1. ルベン、ガド、マナセの半部族への割り当て (13:8～33)

二部族半には、すでに**ヨルダン川**の東に土地が割り当てられていた。それは、二部族半が占領した全領土 (8～13節)、**ルベン** (15～23節)、**ガド** (24～28節)、そして**マナセの半部族** (29～31節) と記述されている。

レビは部族としては**相続地**が割り当てられなかった (14節)。それはレビが祭司の部族であり、主が特別な意味において**彼らへのゆずり**であったからである (33節)。

全部族からレビを除くと、11部族だけが残る。しかし、ヨセフの二人の息子、エフライムとマナセがヨセフの代わりに含まれるので、再び12部族となる。ヨセフの子たちが含まれている理由は、ヤコブが死ぬ前に、実子として養子縁組されていたからである (創世記48:5)。

ヨルダン川東岸で殺された者の中に**バラム**がいたことが特別に言及されている (22節)。主はこの邪悪な預言者が民に及ぼした恐ろしい災厄を忘れてはおられなかった (民数記23～25章)。「あなたがたは…自分たちの身に降りかかる罪の罰を思い知ることになる (英訳「あなたの罪は必ずあなたを見つけ出すであろう」) (民数記32:23)」。

25節で興味深い問題が生じる。**ガド部**

族は申命記2:19で禁じられていた**アンモン人の地**の一部を所有した。しかし、この土地はすでにアモリ人の王シホンによってアンモン人から奪われ、その王国の一部となっていた。したがって、イスラエルがその地をシホンから奪った時点では、もはやアンモン人のものではなかったのである。

26節で言及されている**デビル**は前章で言及のある町と同じではない。この町はヨルダン川の東にあったが、ヨシュアが征服した町はヨルダン川の西にあった。

2. ユダへの割り当て (14、15章)

14:1～5 本章は、ヨルダン川西側の土地を**九部族**と**半部族**に分配することから始まる。主は**モーセ**に、その割り当てはくじによって行うように命じておられた。これはおそらく、部族の割り当ての大まかな位置はくじによって決定されたが、領土の広さは部族の人口に応じて決められた、という意味であろう (民数記26:53～56)。

14:6～15 部族のリストの最初は**ユダ**である (14:6～15:63)。**ユダ**の人々はイスラエルの軍隊を率い (民数記10:14)、七万六千人以上の戦士を誇る、最大かつ最強の部族であった。

領土の境界線を決定する前に、神の霊は**カレブ**が**ヘブロン**の町を望んだ、という高貴な願いを記録している。カレブは当時八十五歳であったが、彼の信仰と勇氣と力は衰えていなかった。カレブはさらなる霊的前進を切望し、**ヘブロン**を**相続地**として受け取った。

ヘブロンとは町そのものだけではなく、その周辺の地域をも意味していた (12節)。町そのものはすでにヨシュアによって征服されていた (10:36, 37)。後にこの町は祭司たちに与えられたが、**カレブ**はその周辺の地域を自分の**相続地**として確保した。

カレブは四十五年前に、不信仰な斥候たちのいのちを奪った疫病から免れていた(民数記14:34~38)。荒野を放浪する期間も、神に守られていた。カナンでの数年にわたる戦争も生き延びた。彼は自分を生きながらえさせ、信仰に対する報いを約束された神が、自分をアナク人に引き渡されるはずはない、と分かっていた。彼らが巨人であったとしても、どうだというのか。彼らはカレブの土地に居座っているのだから、神の力によって追い払うまでである。カレブは、それまでと変わりなく、外見ではなく、信仰の目を通して物事を見ていたのである。これこそ、カレブの変わらぬ強さと、目覚ましい成功の秘訣であった。カレブは(八十五歳になっていたが)、自分の所有物を手に入れるまで隠居するつもりはなかった。

15:1~12 ユダ族の境界線が1~12節に明記されている。現在となつては、それを正確にたどることはほとんど不可能である。そのため、なぜ聖書にこのようなことが詳細に書かれているのかと不思議に思う人がいるかもしれない。その答えは、もちろん、これらの詳細が神の目から見て重要だからである。それらは神の靈感を受けており、有益であり、豊かな霊的教訓に満ちている。

15:13~20 カレブのヘブロン征服は14節に記録されている。カレブはキルヤテ・セフェル(デビル)を征服した者に、娘、アクサを与える、と申し出た(16節)。カレブの甥のオテニエルが町を取ったので、花嫁を射止めた(17節)。後に彼はイスラエル初の士師となった(士師記3:9)。アクサはオテニエルが父に畑を求めるようにしきりに促した(18節)。「ネゲブの地を私に下さったのですから」(19節の英訳)というアクサのことばは、オテニエルが実際に

求めて畑を手に入れたことを暗示している。そして、アクサはその土地を潤すための上の泉と下の泉を求めた。

デビルやヘブロンのように、カナン人のゲリラ戦術のために、一度の攻撃では攻略できなかった町もある(10章の注を参照)。また同じ名前の町が複数あったことにも注意すべきである([例]デビル)。

15:21~63 ユダ部族の領土の町々が21~63節に列挙されている。族長について学んだ私たちにとって、これらの町々のいくつかは馴染み深いものである。ヘブロン(54節)(別名キルヤテ・アルバ、またマムレ)はアブラハム、イサク、ヤコブ(創世記13:18、35:27)にとって身近な場所であり、彼らは皆そこに葬られた(創世記23:17~20)。おそらくこのことが、霊的な識別力のあったカレブにとって、ヘブロンがとりわけ大切な場所であった理由であろう。ベエル・シェバ(28節)は「誓いの井戸」を意味し、族長たちはそこで多くの時間を過ごした。ベエル・シェバは、刷新、元気回復、休息の場所であった(創世記21:31、26:33、46:1)。エルサレム(63節)はエブス人によって支配されていた。彼らが最終的にエルサレムから追い出されたのはダビデの時代になってからであった(IIサムエル5:6,7)。

これらの町々はユダにとって豊かな遺産となり、信仰を強める何よりの発奮材料となった。アブラハム、イサク、ヤコブの神は彼らの子孫の中心におられ、古くからの約束を果たされたのである。

21~32節の町々を数えると三十八(※日本語訳によると三十六)あることがわかるが、32節では二十九しか記されていない。このうち九つの町はシメオンに属するが、その相続地はユダの境界内にあった(19:1~9)。つまり、二十九の町はユダに属する

ことになる。33～36節においても、数に関する同様の問題がある。十五の町々が列挙されているが、おそらく、ゲデラとゲデロタイムというのは同じ町の違う呼び名であろう。そうすると、36節のとおり、総数は十四の町となる。^{* (13)}

特に最後の節に注目しよう。町の上部、つまりシオンの山はダビデの時代になってようやく攻め落とされた。下の町、エルサレムを占領したのはユダであったが（士師記1:8）、その後エブス人によって奪還された（士師記1:21）。エルサレムはベニヤミンの所領として記されているが（18:28）、ユダの所領でもあった。この二部族の境界に位置していたためである。

3. ヨセフへの割り当て（16、17章）

16:1～4 次に取り上げられているのはヨセフ族である。ヨセフには、ルベンが剥奪された長子の特権（創世記49:4）、すなわち二倍の分け前（Ⅰ歴代誌5:1）が与えられていた。ヨセフの領土のおおよその境界線は1～4節に記されている。これはもちろん、エフライムとヨルダン川西岸に定住したマナセの半部族の間で分割された。

16:5～10 エフライムの境界線は5～10節に記されている。特に10節に注目しよう。カナン人を追い払わなかったことは、イスラエル人の後の歴史に嘆きをもたらした。

17:1～13 マナセの相続地は、一部がヨルダン川東岸のギルアデとバシャン（1節）にあり、一部がヨルダン川の西側にあった（7～11節）。ヨルダン川西岸の領土は、北側を六つのカナンの要塞、すなわちベテ・シェアン、イブレアム、ドル、エン・ドル、タアナク、メギドに囲まれていた（11, 12節）。

エフライムの町のいくつかはマナセの領

土にあり、マナセの町のいくつかはアシェルとイッサカルの領土にあった（7～12節）。

ツェロフハデの娘たちは、神がモーセに命じられたとおりに（3, 4節）、マナセの子とともに相続地を受け継いだ（民数記27:1～7）。これは、男子の相続人がいなくても、ツェロフハデの家に相続分があるようにするためであった。娘たちは、マナセの所有地が他の部族との婚姻によって吸収されないように、自分の部族内で結婚しなければならなかった（民数記36:1～13）。

17:14～18 エフライムとマナセは、ヨルダン川西岸で隣接する割り当て地を受けた後、ただ一つの割り当て地しか与えられなかったこと（14節）、また北辺は要塞に阻まれていることを不服に思った（16節）。ヨシュアは、彼らの言い分をすべて逆手に取った。彼らが、自分たちは数の多い民であるから、もっと土地が必要だ、と主張すると（14節）、ヨシュアは、自らの人手を使ってその領土の森を切り開き、そこに定住するようと言った（15節）。また、領土内には鉄の戦車を持つカナン人がいると訴えると（16節）、彼らがカナン人を追い払う力はカナン人に優っている、と断言した（18節）。14節のただ一つのくじによる相続地とは、ヨルダン川西岸の、エフライムとマナセの領地を合わせたものを意味している。ヨシュアが「あなたには、くじによる割り当て地が一つだけではいけない」（17節後半）と言ったのは、追加の土地を得る、という意味ではなく、与えられた土地をすべて占領しなければならない、という意味である。

4. 残りの部族への割り当て（18、19章）

18:1 イスラエルの宿营地はギルガルからシロに移った。ここに幕屋が建てられ、それはサムエルの時代まで残った。土地の

分割はここでも続く。

18:2~10 ユダとヨセフはくじ引きによって相続地を受けていたが、ヨルダン川西岸には、まだ相続地を割り当てられていない七つの部族があった。そこで、ヨシュアは部族ごとに三人の者を送り出し、残りの七部族をくじ引きによって調査させた。

18:11~28 ベニヤミンの境界線は11~20節に、その町々は21~28節に記されている。ベニヤミンの領土は狭かったが、えり抜きの土地であった。ベニヤミンはその地の中心を占め、その境界内には、カナンでイスラエルが労苦して得た最初の実りがあった。

ギルガルはベニヤミンの領土内にあり、ヨルダン川西岸で最初の宿营地であった。奇跡的なヨルダン渡河の証しとして、記念の石がそこに置かれていた。そこで民はカナンで最初の過越を祝い、その地の産物を食べるようになった。そこで民は再び割礼を受け、エジプトのそしりは取り除かれた。カナンの中でこれほど歴史的に重要な場所は他にない。これほど多くの霊的教訓を教えてくれた場所は他にないに等しいからである。

ベニヤミンの地には、エリコの廃墟がまだ残っていた。かつて無敵と思われていた城壁も、今や崩れ落ちていた。ラハブの家に属する部分は、信仰に常に応える神の恵みの証しとして残っていた。ベニヤミン人は、戦いが主のものであることを新たに思い起こす必要があるときは、いつでもここを訪れることができた。

ベテル（「神の家」）は、ベニヤミン人に父祖たちの信仰とイスラエルの救い主である神の真実を思い出させた（創世記28:18~22、35:1~15）。

エルサレムはやがて首都となるように定められていたが、エブス人をその城砦から

追い払うには、エッサイの子ダビデの登場を待たなければならなかった。

ベニヤミンの土地には、過去、現在、未来の祝福の証拠としての数多く含まれていた。ヤコブの末子には何と恵まれた土地が与えられたことだろう。

19:1~9 シメオンの相続地はユダ族の相続地の中にあった。ユダ族の土地は広すぎて、占有しきれなかったため、その一部がシメオンに割り当てられたようである。これは、「私はヤコブの中で彼らを引き裂き、イスラエルの中に散らそう」（創世記49:7）という、シメオンに関するヤコブの預言の成就である。

ベエル・シェバとシェバ（2節）はおそらく同じ場所のことであろう。そのために6節で言及されている町は全部で十三しかない。一部の町々は、個々の割り当て分の境界を明示するために、領土の中に入っていないにもかかわらず列挙されている。その結果、聖書本文に述べられている数と町々の数が一致しない場合がある（例えば15, 30, 38節）。

19:10~39 次に残りの六部族の境界が記されている。ゼブルン（10~16節）、イッサカル（17~23節）、アシェル（24~31節）、ナフタリ（32~39節）、そしてダン（40~48節）である。ダンはユダの町々の一部を譲り受けている（41節と15:33を比較）。

19:40~48 当初ダんに割り当てられた領地は、地中海に面した南西部で、ヤッファやエクロンといった町々が含まれていた（40~46節）。後に、この領地が狭すぎるとわかると、部族の一部は北西部のレシエムに移住し、その町をダンと改名したのである（47, 48節。士師記18章参照）。

19:49~51 51節で国の分割は終了した。逃れの町々を選定し（20章）、レビ人

の町々を指定しなければならなかったが(21章)、ヨシュアの事はあらかじめ終了した。ヨシュアは主のことばにしたがってティムナテ・セラフを受け取った(50節)。

C. 逃れの町(20章)

次の段階は、ヨルダン川の両側に三つずつ、殺人者が血の復讐をする者から逃げ込むことのできる、合計六つの逃れの町を設けることであった。ここで言う殺人者とは、誤って人を殺した人のことである。血の復讐をする者とは、通常、殺された人の近親者で、死者の敵(かたき)を討とうとする人のことである。もし、殺人者が逃れの町に逃げ込むことができれば、その時の大祭司が死ぬまでそこに避難することができた。その後、殺人者は安全に生まれ故郷に帰ることができた。

逃れの町

逃れの町は、興味深いものであり、神学的にも重要である。マクリーア(MacLear)はこのような町々に関する伝統的な詳細を述べている。

ユダヤ人の注釈者によれば、後世、意図しない殺人を犯した者に提供される避難場所が、より安全なものとなるように

- (a) 逃れの町に至る道路は常に徹底的に修復がなされ、約32キュビト(約14.4メートル)の幅が必要とされた。
- (b) 急いで逃げる者の足を止めたり、速度を鈍らせたりする障害物はすべて撤去された。
- (c) 小さな丘も、橋の架かっていない川も経路にあってはならなかった。

- (d) すべての曲がり角には、不運な殺人者の逃走を導くため、「避難所」の文字が書かれた標識が立てられた。
- (e) 一旦、逃れの町に落ち着くと、殺人者には便利な住居があてがわれ、自活していけるように、町の住民が職業技術を教えることになっていた。^{*(14)}

これらの町々は、メシアを殺害するイスラエル国家とその罪を暗示している。キリストこそ、悔い改めたイスラエルが逃げ込むことのできる逃れの町なのである。ムーディー(Dwight L. Moody)は「逃れの町はキリストを表す型であり、町につけられた名前も、その点で特筆に値する」と述べている。^{*(15)}

逃れの町と、その名前の意味は次の通りである。

〈ヨルダン川西岸〉

ケデシュ — 「聖さ」
 シェケム — 「力」
 キルヤテ・アルバ、またはヘブロン — 「交わり」

〈ヨルダン川東岸〉

ラモテ・ギルアデ — 「高揚」
 グラン — 「幸福」
 ベツェル — 「安全」

このように、キリストはこれらの町々の名前が示唆するあらゆる祝福を与えてくださるのである。地図を見れば逃れの町は戦略的に配置され、その地のどの地点からでも50キロメートル以上離れていないことがわかる。ムーディーはこのような適用をしている。

逃れの町が、イスラエルのどの場所から

でもすぐに行ける場所に位置していたように、キリストは助けを必要とする罪人がたやすく近づける御方なのである（1ヨハネ2:1,2）。*⁽¹⁶⁾

殺人者に逃れの町で提供された一時的な救いと、罪人にキリストにあって提供された永遠の救いと類似点に注目してみよう。逃れの町に至る道は、救いの道と同じように明確で、はっきりと標示されていた。だれ一人、間違つて、いのちを失うことのないためである。逃れの町はイスラエル全土に広く存在しており、すべての人が容易に行くことができた。だれでもキリストにたやすく行くことができるのと同様である。危機に追い立てられて人々は逃れの町に逃げ込んだが、人々が主イエスに逃れるためにも危機を要する場合が多い。罪を犯した者にとって中立的な立場はなかった。逃れの町で安全を得るか、さもなければ、血の復讐をする者の怒りにさらされるかのどちらかであった。私たちも、キリストにあつて安全であるか、さもなければ神のさばきのもとに置かれるかのどちらかしかない（ヨハネ3:36）。

D. レビ族の町（21章）

21:1～42 主が命じられたように（民数記35:2～8）、逃れの町を含む四十八の町とその放牧地（41節）がレビ人に割り当てられた。

ケハテ族：

- (a) アロンの子ら（すなわち祭司）にはユダ部族、シメオン部族、ベニヤミン部族から、十三の町
- (b) 残りのケハテ族にはエフライム部族、ダン部族、マナセの半部族から、

十の町

ゲルシオン族：

イッサカル部族の諸氏族、アシェル部族、ナフタリ部族、マナセの半部族から、十三の町

メラリ人の諸氏族：

ルベン部族、ガド部族、ゼブルン部族から、十二の町

ユダとシメオンが九つの町を、またナフタリが三つの町を提供したのを除けば、どの部族も四つの町を提供した。

逃れの町は、レビ人の町であつたが（13,21,27,32,36,38節）、ヤコブの預言（創世記49:5～7）を成就するため、またレビ人の国民を教える働きをより円滑にするために、イスラエルの全部族に散らされた。

21:43 この節は、他の聖書箇所と照らし合わせて読まなければならない。**地をすべて**というのは、イスラエルがエジプトの川からユーフラテス川までの領域を占領した、という意味ではなく、ヨシュアが分割した**地**は、彼らの足の裏で踏む場所はすべて与える（1:3）、と言われた神の約束が成就した、という意味である。

21:44 同様に、44節も慎重に解釈しなければならない。その**地**には依然として敵がおり、カナン人のすべてが滅ぼされたわけではなかった。しかし、それは神の責任ではない。神はイスラエルが戦ったすべての敵を打ち破り、約束を果たされたのである。まだ無敗の敵と抵抗勢力が残っていたとすれば、それはイスラエルが神の約束を主張しなかったからである。

21:45 45節に注意しよう。主は約束をことごとく果たされた。一つもたがわず、すべて実現した。神の真実に対する何という賛辞であろう。しかし、イスラエルはすべての約束を自分のものにしたわけではな

かったのである。

E. ヨルダン川東岸の祭壇 (22章)

22:1～9 ヨルダン川西岸の土地の分割が完了すると、ヨシュアは、当初の合意に従い、ルベン人、ガド人、およびマナセの半部族がヨルダン川東岸にある自分たちの領土に戻ることを許可した。ヨシュアはまた、彼らが戦いで得た戦利品の分け前を持って帰るようにと彼らに告げた。

彼らが愛する家族を残してカナン人と戦ってから、すでに七年以上が経過していた。彼らは土地が確保されるまで、戦いの苦難に耐えた。私たちもまた、私たちの「司令官」から、地上で神の御国を前進させるために、苦難に耐え、信仰の戦いを立派に戦うように召されている（Ⅰテモテ6:12、Ⅱテモテ2:3）。このような犠牲を払うことは容易ではないが、神に喜ばれる人生を送るためには不可欠な要素である。今日の戦場では、燃えるような熱意を持った人々が必要なのである。

心地よい花の寝台に横たわって
私は天上へ運ばれるべきだろうか。
他の人々は栄冠を得るために戦い、
血の海を渡って行ったというのに。

私が世を治めるつもりなら戦う以外に道はない。

主よ、私の勇気を増したまえ。
私は労苦に耐え、苦痛を忍びます、
あなたのみことばを支えとして。

アイザック・ウォッツ (Isaac Watts)

22:10, 11 帰途、これらの人々はヨルダン川のほとりに祭壇を築くことにした。それを聞いた他の九部族と半部族は非常に

憤慨した。彼らはそれがシロにある祭壇に対抗する祭壇であることを恐れた。彼らはまた、それがやがて偶像礼拝の祭壇になり、そのために神が国全体を罰せられることをも恐れたのである。

22:12～20 イスラエルの人々はヨルダン川東岸の部族に宣戦布告をする前に、代表団を送って聞き取り調査を行い、もし、自分たちの**所有地が汚れている**（19節）と考えるなら、ヨルダン川西岸の土地を提供しよう、と申し出た。祭壇を築いた人々とのやり取りの中で、**ピネハス**とその他の者たちは、イスラエルがペオルで犯した咎（17節。民数記25章参照）、および**アカン**の不法行為（20節。7章参照）によってイスラエルがいかに苦しんだかを思い起こしていた。

彼らの目には、この祭壇が自分たちの安泰を脅かす新たな脅威に映ったのである。激しい反応が起きたのはそのためであった。一つの民族として見た場合に、罪が宿営全体を汚すこと、そして個々人の行動であっても神は民全体の責任を問われることを彼らは学んでいたのである。

22:21～29 すると、ルベン族、ガド族、およびマナセの半部族は、これはいけにえのための祭壇などでは決してない、と説明した。それは単なる記念の祭壇であって、ヨルダン川東岸の部族もイスラエル民族の一部であることを後世に証しするためのものであった。

22:30～34 他の部族はこの説明を聞いて満足し、戦争は回避された。東の諸部族はその祭壇を「証人」（英訳）と名づけた。それはヨルダン川兩岸の諸部族の間で、主が真の神であることの証人である、という意味であった。

F. イスラエルの指導者に対するヨシュアの告別の辞 (23章)

これはヨシュアによる二つの告別の辞のうちの最初のものである。ここでヨシュアはイスラエルの指導者に語りかけた。

勇敢で律法の書に忠実であるようにというヨシュアの命令(6節)は、数年前に主が彼に語られたことば(1:7)に呼応している。彼はそれ以降、人生の坩堝(るつぼ)の中で主のことばの真実性を立証し、自信を持ってそれらを次の世代に伝えることができるようになったのである。

ヨシュアは彼らに、その土地とそこに住む異教徒に関する神の約束が忠実に実行されていることを思い出させた。神はこれからも敵を追い出されるであろうが、民は神に従順でなければならない。とりわけ、諸国の偶像礼拝やカナン人との婚姻を避けなければならない。そうでなければ、これらの異教徒は、絶えずイスラエルの悩みの種になる。

神のことばは一つもたがわなかった(14節)。これはすべての土地がユダヤ人の手中にある、という意味ではない。というのは、主ご自身が、住民を一度に追い出すのではなく、徐々に追い出すと言われたからである(申命記7:22)。主の約束のどれ一つとして果たされなかったものはないという事実こそ、ヨシュアが始めた任務を最後までやり遂げるようにという指導者たちへの強い励ましであった。この励ましには、もし彼らが契約を忘れて偶像に頼るなら、ヤハウェはカナン人を滅ぼされたときと同じように、彼らを良い土地から間違いなく滅ぼされるであろう、という警告(5, 16節)が添えられていた。

新約聖書で、この章と並行しているのはⅡコリント6:14~18である。神に仕える人にとって分離ほど大事なものはない。私た

ちは主にすがりながら、主の敵に結びつくことはできないのである。

G. イスラエルの民に対するヨシュアの告別の辞 (24:1~15)

24:1~14 二度目の告別の辞は、民を対象として、シェケムで語られた。

ヨシュアは、テラから始まり、アブラハム、イサクそしてヤコブに至る神の民の歴史を振り返った。ヨシュアは、エジプトからの目覚ましい解放、荒野の放浪、そしてヨルダン川東岸でのモアブ人に対する勝利を民に思い出させた。そして、約束の地への到達、エリコでの勝利、カナンの王たちの滅亡(2~13節)を回顧した。7節の暗闇は、出エジプト記14:19, 20で、雲がイスラエル人に光を、エジプト人に暗闇をもたらしたことを指している。

この、創世記からヨシュア記に至る歴史の簡潔な要約の中で、ひとつの際立った事実が明らかである。それは神の主権である。神がどのように語っておられるかに注意してみよう。

わたしは…連れて来て(3節)、わたしは…与え(4節)、わたしは…遣わし(5節)、わたしは…導き出し(6節)、わたしは…導き入れた(8節)、わたしは…耳を傾けようとしなかった(10節)、わたしは…あなたがたの手に渡し(11節)、わたしは…送った(12節)、わたしは…与えた(13節)。ヤハウェはご自身の永遠の目的にしたがって働かれる。誰がその御手を押しとどめることができようか。そのような神こそは恐れられ、また仕えられるべきである(14節)。

24:15 ここでの選択は、主と偶像のどちらか、というものではなかった。ヨシュアは民が、神に仕えないことに決めている、と見なしたのである。そこで、ヨシュアは、

先祖がメソポタミアで仕えた神々か、それともカナンで見つけたアモリ人の神々にするのか選ぶがよい、と彼らに挑んだ。ヨシュアが自分自身と自分の家族のために下した崇高な決断は、後世の信仰者を奮い立たせるものとなった。「ただし、私と私の家は主に仕える」。

H. シェケムにおける契約の更新 (24:16～28)

24:16～28 民がヤハウェに仕えることを約束すると、ヨシュアは「あなたがたは主に仕えることはできない」(19節)と言った。これは、民がヤハウェに仕えながら、偶像を拝むことはできないという意味である。民がやがて偶像礼拝に陥ることを、ヨシュアが理解していたのは間違いない。その時でさえ、彼らはすでに天幕に異国の神々を置いていたからである(23節)。民は自分たちの神に忠誠を誓い続けたので、ヨシュアはイスラエルが交わした契約の証しとして、目印となる大きな石を榎の木の下に立てた。(26節に言及されている主の聖所とは、シロにあった幕屋のことではなく、単に聖なる場所のことである。)

偶像の問題について、アーマーディング(Carl Armerding)はこう記している。

偶像礼拝は、常にイスラエルにつきまとう罪の一つであったようだ。彼らの始祖たちは、すでに見たように、他の神々に仕えていた(2節)。ヤコブとその家族がラバンのもとを去った時、父の神々を持ち去ったのは何とラケルであった(創世記31:30～34)。しかし、その地に到着すると、ヤコブは、家族全体に、「異国の神々」を取り除くように命じ、それらをシェケムの近くにある榎の木の下に埋

めた(創世記35:2,4)。まさにその同じ場所に、ヨシュアは同世代の人々に、先祖たちが仕えてきた神々を捨てるように促したのである(14節)。*⁽¹⁷⁾

I. ヨシュアの死 (24:29～33)

24:29～33 ヨシュアは百十歳で死に、その相続地の町に葬られた。イスラエルの人は、ヨシュアの世代の人々が生きている間は主に忠実に仕えた。ヨシュア記の最後の数節を書いたのは誰なのか、私たちにわからないし、そのような情報は必要ない。必要であれば、それが含まれたであろうことは間違いない。

ヨセフの遺骨は、ヨセフの願いによって、すでにエジプトから運ばれてきていたが、ついにシェケムの地に埋葬された(創世記50:24、出エジプト記13:19)。

そして最後に、アロンの子エルアザルは死に、エフライムの山地に葬られた。

本書の最後の五節には、三つの埋葬が記されている。ヨシュア(29～31節)、ヨセフ(32節)、そしてエルアザル(33節)の埋葬である。三人ともヨセフの領地に葬られた。三人とも神と祖国によく仕えた。ヨシュアとヨセフは、その生涯において偉大な解放者であり、エルアザルは死後も解放者であった。それは彼が大祭司であったため、その死によって逃れの町に逃げ込んでいた人々がすべて自由の身とされたからである(20:6)。創世記や申命記と同様に、ヨシュア記も、偉大で敬虔な人々の上に鳴り響く死の鐘で幕を閉じる。「神はご自身の働き人を葬られるが、その働きは続いていく。」

後 注

1. (序論) Irving L. Jensen, *Joshua, Rest-Land Won*, p. 14.
2. (1:1-9) T. Austin Sparks, *What Is Man?* p. 104.
3. (2:1) C. F. Keil and Franz Delitzsch, "Joshua," in *Biblical Commentary on the Old Testament*, VI:34.
4. (3:14-17) Donald K. Campbell, "Joshua," in *The Bible Knowledge Commentary*, I: 335.
5. (3:14-17) Ibid.
6. (7:11-26) Hugh J. Blair, "Joshua," *The New Bible Commentary*, p. 229.
7. (8:30-35) R. Jamieson, A. R. Fausset, and D. Brown, *Critical and Experimental Commentary*, II: 23.
8. (10:12-15) 特異な奇跡が起こったことを認め、本文を(弁解ではなく)説明する見解は以下の3つである。

1. 神は太陽がヨシュアの上にあった間、地球の自転を実際に抑制(または停止)し、自転を48時間持続させた。他の古代文化にも、「長い一日」という表現があり、これはヨシュアの長い一日であった可能性が高い。
2. 「止まる」(ヘブル語: dôm)を「やめる」または「止める」(Ⅱ列王記4:6; 哀歌2:18)と翻訳すると、これはヨシュアの軍隊を灼熱の太陽から守るための祈りであり、非常に長い雹の嵐はヨシュアの祈りに対する神の答えであったという解釈もある。
3. ヨシュアは早朝に攻撃したので、

太陽が「停滞し」、薄暗がりが続くことを祈っていたという見方もある。雹の嵐は祈りに対する神の答えであっただろう。

最初の見解は、「太陽は天の中間にとどまって、まる一日ほど、急いで沈むことはなかった」という本文に最も適しているように思われる(13節後半)。

9. (10:12-15) C. H. Spurgeon, *Spurgeon's Devotional Bible*, p. 168. 本文の科学的側面についての簡潔にして役に立つ説明については、*Difficulties in the Bible* by R. A. Torrey (Chicago: Moody Press, 1907) 第10章を参照のこと。
10. (10:12-15) Matthew Henry, *Matthew Henry's Commentary on the Whole Bible*, II: 59.
11. (10:40-43) John Haley, *Alleged Discrepancies of the Bible*, p. 324.
12. (13:1-6) ソロモンの治世下、王国は、朝貢地に関して言えば北西のユーフラテス川の一部まで達していたが、もしユーフラテス川全体が東の境界という意味であれば、それはまだ将来の出来事であるはずである。
13. (15:21-63) カイルとデリッチ (Keil and Delitzsch) は、旧約聖書におけるこれらの問題や類似の数的な問題については、単に書写者の誤りである、という立場をとっている("Joshua," pp.163~64)。一見矛盾に見える個所についてのより詳しい議論については歴代誌第二の注解を参照のこと。
14. (補説) MacLear, *The Cambridge Bible for Schools and Colleges*, The Book of Joshua, p. 183.
15. (補説) D.L. Moody, *Notes from My Bible*, pp. 48, 49.
16. (補説) Ibid., p. 49.

17. (24:16–28) Carl Armerding, *The Fight for Palestine*, p. 149.

参考文献

- Blair, Hugh J. “Joshua.” In *The New Bible Commentary*. Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Publishing Company, 1953.
- Campbell, Donald K. “Joshua.” In *The Bible Knowledge Commentary*. Wheaton, IL: Victor Books, 1985.
- Freedman, H. “Joshua.” In *Soncino Books of the Bible*, Vol.2. London: The Soncino Press, 1967.
- Grant, F. W. “Joshua.” In *The Numerical Bible*, Vol. 2. Neptune, NJ: Loizeaux Bros., 1977.
- Henry, Matthew. “Joshua.” In *Matthew Henry’s Commentary on the Whole Bible*. Vol.2. McLean, VA: MacDonald Publishing Company, n. d.
- Jensen, Irving L. Joshua: Rest-Land Won. *Everyman’s Bible Commentary*. Chicago: Moody Press, 1966.
- Keil, C. F., and Delitzsch, F. “Joshua.” In *Biblical Commentary on the Old Testament*. Vol.6. Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Publishing Company, 1971.
- Kroll, Woodrow Michael. “Joshua.” In *the Liberty Bible Commentary*. Old Testament. Lynchburg, VA: The Old Time Gospel Hour, 1982.
- MacLear, G. F. *The Cambridge Bible for Schools and Colleges, The Book of Joshua*. London: C. J. Clay and Sons, 1888.
- Pink, Arthur W. *Gleanings in Joshua*. Chicago: Moody Press, 1964.

士師記

序 論

「士師記には、読者の心を悲しませるものがたくさんある。聖書の中で、これほどはつきりと人間の弱さを証言している書はないだろう。しかし、そこには、神のあわれみと寛容の紛れもないしるしもある。…これらの不完全な救い主たちの生涯を考えると、現代には、もっと偉大な救い主、すなわち、汚れのない生涯を送り、今も、また永遠にわたって完全な救いをもたらすことのできる救い主の必要性が認識されるかもしれない。」

アーサー・カンドール (Arthur E. Cundall)

1. 正典における独自性

神が人間の弱さから強さを引き出される様子が、この魅力的な書の中で、他に類のない形で記録されている。ある意味で、士師記は実際、以下の三節の注解となっている。

「しかし神は、知恵ある者を恥じ入らせるために、この世の愚かな者を選び、強い者を恥じ入らせるために、この世の弱い者を選ばれました。有るものを無いものとするために、この世の取るに足りない者や見下されている者、すなわち無に等しい者を神は選ばれたのです。肉なる者がだれも神の御前で誇ることがないよ

うにするためです」(1 コリント1:27～29)。

たとえば、エフデは左利きのベニヤミン人であった(3:12～30)が、左手は右手に劣るとされていたのである。シャムガルは牛を追う棒、という見栄えのしない武器を使って六百人の敵を倒した(3:31)。デボラは(男性と比べて)「弱い」とされる女性であった(デボラ自身は決して弱くはなかったが!) (4:1～5:31)。バラクが率いる一万人の歩兵も、人間的に言えば、シセラが率いる九百台の鉄の戦車隊に敵わなかった(4:10, 13)。ヤエルもまた弱いとされる女性ではあったが、天幕を留める杭をシセラの頭蓋骨に打ち込んで、彼を殺した(4:21)。(しかも)ヤエルは杭を左手に持

っていた (5:26七十人訳)。ギデオンは、主が三万二千人から三百人に減らされた軍隊を率いて敵に向かった (7:1~8)。貧しい人々の食べ物である大麦のパンは、貧困と弱さを暗示している (7:13)。ギデオンの軍隊が手にしていたのは、土器のつば、たいまつ、そして角笛という型破りの武器であった (7:16)。その上、つばは粉々に砕かれなければならなかった (7:19)。アビメレクは女が投げたひき臼の上石によって倒された (9:53)。「トラ」という名前は「虫けら」という意味である (10:1)。サムソンの母は名も無い不妊の女性であった (13:2)。そしてサムソンが千人のペリシテ人を殺す際に用いたのは、ろばのあご骨だったのである (15:15)。

II. 著者問題

士師記の著者は不明であるが、ユダヤのタルムードおよび初期キリスト教の伝承によれば、士師記、ルツ記、そしてサムエル記はすべてサムエルによって書かれたとされている。この見解は、Iサムエル10:25で、預言者サムエルが著述家でもあったことを示していることが裏付けと言えるかもしれない。また少なくとも、文章の内容から推察される執筆時代は、サムエルの時代に適合している。

III. 執筆年代

士師記の執筆年代は、以下の理由から王政が始まった最初の半世紀 (紀元前1050~1000年) とするのが最も適切である。

第一に、「そのころ、イスラエルには王がなく」という繰り返しの表現 (17:6、18:1、19:1、21:25) は、執筆当時、王がいたことを示唆している。

第二に、1:21はエブス人がまだエルサレムにいたことを示していることから、ダビデがエルサレムを占領する前の年代でなければならない。

最後に、1:29に言及されているゲゼルは、後に、ソロモンの結婚祝いとしてファラオから贈られた場所であることから、それよりも前の時代であることを暗示している。したがって、サウルの治世か、ダビデの統治初期である可能性が高い。

IV. 背景と主題

士師記は、ヨシュアの世代が世を去った後のイスラエル民族の歴史を取り上げている。民はカナンの異教徒を完全に追い出すことができなかった。それどころか、異教徒と交わり、偶像礼拝を行っていた。その結果、神は繰り返し、ご自分の民を異邦の圧制者の手に引き渡された。この隷属が、ユダヤ人に悔い改めと悔恨をもたらした。彼らが主に救いを求めて叫ぶと、主はさばきつかさ (士師) を起こされた。これらの指導者たちが、この書物の名前の由来である。

この書に書かれている出来事は、オテニエルからサムソンまでの約325年に及ぶ。

士師とは、単なる法律家ではなく、軍事指導者であった。彼らは信仰の英雄的な行為によって神のさばきを実行し、あるいは圧制者を倒して、民に一定の平和と自由を取り返した。イスラエルを解放するために12人の士師が起こされた。その中には、士師記の中で、詳しく取り上げられている者もいれば、1節か2節しか言及されていない者もいる。彼らは9つの異なる部族の出身で、メソポタミア人、モアブ人、ペリシテ人、カナン人、ミディアン人、アンモン人の手から民を解放した。サムエルが現れる

まで、全国を治めた士師はいなかった。

士師記は、厳密に言えば年代順に書かれてはいない。最初の2章は導入部分として歴史的、預言的な内容が書かれている。士師たち自身の記録（3～16章）にしても必ずしも年代順ではない。士師たちの中には、同時に、しかし別の地域で敵を征服していた者もいたかもしれない。これは覚えておくべき重要なことである。というのは、士師記に言及されている年数を順に加算していくと、400年を超え、聖書がこの時代に割り当てている年数を上回るからである（使徒13:19, 20、I 列王記6:1）。

結びの数章（17～21章）には、士師の時代に起きた出来事が記録されているが、それが士師記の最後の部分に書かれているのは、この時代のイスラエルの宗教的、道徳的、また社会的な腐敗を描くためである。この時代の特徴は、鍵となる聖句（17:6）が適確に表現している。「そのころ、イスラエルには王がなく、それぞれが自分の目に良いと見えることを行っていた。」

神のみことばはどれも純粋であり、聖書はすべて有益である、と信じるなら、士師記には私たちにとって重要な霊的主題と教訓が含まれていることになる。その教訓の一部は、異邦の圧制者やイスラエルを救った士師たちの名前に隠されている。圧制者とは、神の民を隷属に引き込もうとするこの世のさまざまな力の象徴である。士師たちは、私たちが霊的な戦いに挑むための手段を象徴している。

以下の解説においては、古い古典的著作から引用した実践的な応用例をいくつか含めた。^{＊(1)}

型や比喩の研究を極端に重視するというのはいつの場合も危険である。この注解においては、こじつけや想像たぐしい解釈は極力避けるようにした。また、一部の名

前の意味は不確かであることも認めなければならぬ。代替の意味が可能な場合はそれを明示した。

構成

I. 回顧と予見（1:1～3:6）

- A. 過去の回想（1:1～2:10）
- B. 将来の予見（2:11～3:6）

II. 士師の時代（3:7～16:31）

- A. オテニエル（3:7～11）
- B. エフデ（3:12～30）
- C. シヤムガル（3:31）
- D. デボラとバラク（4、5章）
 - 1. 散文による物語（4章）
 - 2. 歌による物語（5章）
- E. ギデオン（6:1～8:32）
 - 1. ギデオンの召命（6章）
 - 2. ギデオンの三百人（7章）
 - 3. ギデオンのペリシテ人に対する勝利（8:1～32）
- F. アビメレクの篡奪（8:33～9:57）
- G. トラとヤイル（10:1～5）
- H. エフタ（10:6～12:7）
 - 1. イスラエルの惨状（10:6～18）
 - 2. エフタのイスラエル防衛（11:1～28）
 - 3. エフタの誓い（11:29～40）
 - 4. エフライム人を殺すエフタ（12:1～7）
- I. イブツァン、エロン、アブドン（12:8～15）
- J. サムソン（13～16章）
 - 1. サムソンの信仰の遺産（13章）
 - 2. サムソンの祝宴となぞかけ

- (14章)
 3. サムソンの報復 (15章)
 4. デリラに欺かれたサムソン (16章)

III. 宗教的・道徳的・政治的退廃 (17～21章)

- A. ミカによる宗教の確立 (17章)
 B. ミカとダン族 (18章)
 C. レビ人とその側女 (19章)
 D. ベニヤミンとの戦い (20、21章)

注 解

I. 回顧と予見 (1:1～3:6)

A. 過去の回想 (1:1～2:10)

1:1～3 ヨシュアの死後 (2:8参照)、ユダ族は、南方のカナン人との戦いで主導権を握った。勝利の約束が神から与えられていたにもかかわらず、ユダはシメオン族の援助を求めた。それは彼らの信仰が神のみことばに完全に頼るものではなかったことを示している。

1:4～7 彼らの最初の勝利は、ベゼクの住民に対するものであった。一万人を倒した後で、彼らは王の手足の親指を切り落とした。それは王がかつて敵に対してしたことと同じであった。彼は、主が命じられたように (申命記7:24)、死刑に処せられるべきであったが、身体に障害を負わされただけであった。その後、彼はエルサレムに連れて行かれ、そこで死んだ。この出来事は、その地の異民族の扱いにおけるイスラエルの不従順の前兆であった。つまり、イスラエル人は彼らを壊滅させたのではな

く、不自由にしただけだったのである。このような部分的服従は、不従順にほかならず、やがてこの後、ユダヤ人は高い代償を払うことになる。

1:8 ユダ族は、エルサレム攻略において一定の成功を収め、町に火を放った。しかし、ユダもベニヤミンもエブス人たちをその要塞から追い出すことはできなかった (ヨシュア15:21～63の注解参照)。これがようやくなされたのはダビデの時代であった (IIサムエル5:6, 7)。

1:9～15 ヘブロン攻略は、ここではユダの功績とされているが、ヨシュア記14、15章によると、ヘブロン町の征服はカレブの功績であったことがわかる。カレブはユダ族の出身なので、ここに矛盾はない。これらの節 (9, 10節) は、おそらくカレブによるこの町の征服 (20節参照) を指しているのであって、ヨシュアの死後の征討のことではないと思われる。それは、オテニエルによるキルヤテ・セフェルの攻略が、それ以前になされていたにもかかわらず (ヨシュア15:16～19)、11～15節で繰り返されているのと同様である。

1:16 ケニ人は、本当に回心することはついになかったものの、ユダ族と一緒に住み続けた。

1:17～21 ユダが他に征服したところとしては、ホルマ、ガザ、アシュケロン、そしてエクロンがある。しかし、その勝利は完全ではなかった。平地の住民は鉄の戦車を持っていたが、ユダには、その彼らに戦いをしかけるだけの信仰がなかった。ユダ族には、困難な状況を耐え抜く気構えがなかったのである。21節は、士師記が、ダビデのエルサレム占領以前に書かれたことを示している。

1:22～26 わずかにヨセフの二部族だけが、その他の勝利に貢献した。(これら

の聖句は、ヨシュアがまだ存命中、ベテルを征服したことを指している可能性がある[ヨシュア12:16]。それは、前出のヘbronとキルヤテ・セフェルに関する聖句が、偉大な將軍ヨシュアの時代にさかのぼるのと同様である。) 彼らは、かつてルズと呼ばれていたベテルという町を攻撃し、破壊した。しかし、彼らの過ちは、協力者に安全を約束したことであった。彼は時をおかずに、ヒッタイト人の地に行つてルズという名の町の建設を始めてしまった。さばかれなかった罪は生き残り、後で対処しなければならぬことになる。

1:27~36 この章の残りの部分においては、中央部と北部にいた7つの部族が、カナン人を、その領土から追い払うことができなかったとして名前が挙げられている。ベニヤミン (21節)、マナセ (27,28節)、エフライム (29節)、ゼブルン (30節)、アシェル (31,32節)、ナフタリ (33節)そしてダン (34~36節)である。

2:1~5 主の使い (主イエス) はボキム (「泣く者」) の人々の不従順を責められた。1節によると、主の使いはギルガル (「祝福の地」) からボキム (「泣くところ」) に上つて来られた。イスラエルは勝利の場所から嘆きの場所に行ってしまったのである。彼らはカナン人を追い出すことも、その偶像の祭壇を打ち壊すこともできなかった。それゆえ、主はこの地の住民を追い払うことを拒み、彼らがイスラエル人を悩ますことを容認された。このように、1~5節は、この後に続く抑圧の根本的な理由を示している。民が泣き、その場所をボキムと呼んだのも無理はない。

2:6~10 6~10節では、ヨシュアの生涯の終わりと、彼よりも長生きした世代を振り返っている。申命記6章で、主はご自分の民にいくつかの具体的な命令を与えて

おられたが、彼らがそれらに従わなかったために、10節に記されているような悲しい事態になったのである。そこでは、靈的リーダーシップの欠如が、神の民の従順さの欠如につながったことが示されている。前の世代は子どもたちに主を恐れ、その戒めを守るように教えてこなかった。父親たちの怠慢が、息子たちの背教を招いたのである。

B. 将来の予見 (2:11~3:6)

2:11~19 一方で、2章の残りの部分は、士師記の時代全体を予見し、その時代を特徴づけた四段階のサイクルをたどっている。

罪 (Sin 11~13節)

隷属 (Servitude 14,15節)

嘆願 (Supplication ここでは述べられていないが3:9,15、4:3等を参照)

救い (Salvation 16~18節)

こうした行動の定型的繰り返しは、以下のようにも表現されている。

反逆 (Rebellion)

懲罰 (Retribution)

悔い改め (Repentance)

安息 (Rest)

ジェンセン (Irving L. Jensen) が指摘するように、士師記 (11~19節) のこの要約は、本書全体を通して明らかな二つの相反する真実に焦点を当てている。

- (1) 忘恩、頑固さ、反抗心、愚かさに表れた、人間の心の絶望的な邪悪さ。
- (2) 神の寛容、忍耐、愛、あわれみ。

聖書の中で、イスラエルの完全な失敗とヤハウェの不変の恵みという二つの真理をこれほど鮮明に対比している書は他にない。^{*(2)}

2:20~23 イスラエルが不従順を続けたため、神はご自分の民への懲らしめとして、諸民族をその地にとどまらせることにされた（20~23節）。主がすべてのカナン人を追い出さなかった理由は、不従順に対する罰だけではなかった。主はイスラエルを試し（22節、3:4）、戦争に備えて後の世代を訓練するために彼らを残されたのである（3:1,2）。このことから、主が、なぜ信仰者に問題や試練を通らせるのか理解できる。主は彼らが「主の道を守って歩むかどうか」（22節）を知りたいのである。

3:1~4 イスラエルを試みるために、主が残しておかれた異邦の民が3節に列挙されている。ペリシテ人の五人の領主たち、すべてのカナン人、シドン人と、バアル・ヘルモン山からレボ・ハマテまでのレバノン山地に住んでいたヒビ人である。

（四段階の）最初のサイクルがここで始まる。罪（5~7節）、隷属（8節）、嘆願（9節）、そして救い（9~11節）である。

3:5, 6 イスラエル人が住んでいた七つの異教の国々のうち、六つの国が挙げられている。3節に列挙された国々にヒッタイト人、アモリ人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人がここで加えられている。七番目はギルガシュ人である（ヨシュア3:10、24:11）。

コーエン博士（Abraham Cohen）は、それぞれの下降サイクルの始まりを適確に指摘している。

イスラエル人はモーセの警告（申命記7:3,4）を無視して原住民と結婚し、その

結果、彼らの性的誘惑を伴う異教を取り入れることになった。^{*(3)}

II. 士師の時代（3:7~16:31）

A. オテニエル（3:7~11）

3:7, 8 民は異教の民と結婚し、その偶像を拝んで主の目の前に悪を行った。汚れと不道徳（6節）はやがて偶像礼拝（7節）に至る。神は早くから、カナンの住民と交わることがもたらす重大な結果について警告を発しておられた。彼らは聖なる民であり、神の祝福を知るためには、汚れから離れていなければならなかった（申命記7:3~6）。神はイスラエルを罰し、アラム・ナハライム（英訳「メソポタミア」）の王クシャン・リシュアタイムの手に八年の間売り渡された。王の名前は「クシュ、二重に邪悪な男」という意味である。

3:9~11 主は、民の悔恨の叫びに応えて、カレブの甥であるオテニエルを起こし、彼らを敵の手から解放し、四十年の平和をもたらされた。オテニエル（「神の獅子」）は、以前キルヤテ・セフェル（「書物の町」）を占領し、その名をデビル（「生ける神託」）に変えていた。信仰は神のことばを単なる文字から生きた神託に変えるものなのである。

B. エフデ（3:12~30）

3:12~14 第二のサイクルにおいてイスラエルは十八年の間、モアブの王エグロンの支配下に置かれた。

3:15~30 この時、神がイスラエルに遣わされた軍事的指導者は、ベニヤミン族に属する左利きのエフデであった。エフデはモアブの王エグロンに持っていく貢ぎ物を民から託された。それだけではなくエフ

デは一振りの両刃の剣を衣の下、右ももの上の帯に隠し持っていた。貢ぎ物が届けられると、王はユダヤ人の臣下の態度に胸をなでおろしたに違いない。するとエフデは秘密の知らせについて単独の謁見を求めた。王のそばに立っていた者たちがみな出て行ったのを見届けると、エフデは王を暗殺して逃走した。彼のしたことが発覚した頃には、エフデはすでにイスラエルの兵を集め終わっており、モアブに進軍し、退却する約一万人の兵士を亡き者にした。その後、イスラエルは八十年の間、穏やかな日々を満喫した。

〈思い巡らす〉(15節「ゲラ」)ことから〈賛美〉(「エフデ」)が生まれると、〈世の支配者〉(「エグロン」)は鋭い、両刃の〈剣〉(聖書)によって滅びに定められる。たとえ、みことばを用いる者が左利きであってもそれは問題ではない。

オテニエルは、イスラエルで最も強大な部族ユダの出身であった。エフデは、対照的に最も小さな部族、ベニヤミンの出身であった。神は偉大な者であっても、小さな者であっても、勝利を得るために用いることがおできになる。いずれにせよ、その力は神から来るものだからである。人は救済を代行する者に過ぎず、救済の主役ではない。

C. シャムガル (3:31)

3:31 このさばきつかさに対してはわずかに一節が費やされているのみである。彼は牛を追う棒(牛を小突くのに用いる鋭く尖った器具)でペリシテ人六百人を打ち殺した。これもまた、神が「弱いもの」を用いて偉大な勝利をもたらされた例の一つである。「神のみことば」(突き棒。伝道者の書12:11参照)を巧みに用いる「巡礼者」(シャムガル)は、神の民の中に入り込んだ「放

浪者」(ペリシテ人)を一掃することができるのである。

D. デボラとバラク (4、5章)

1. 散文による物語 (4章)

4:1~3 次の抑圧者はカナン要塞ハツォルの王ヤビンであった。ヤビンの軍の長はシセラであった。彼は自慢の戦車九百台を用いて、二十年の間、イスラエル人を支配下に置いた。

4:4~9 今回、神は男性をお立てにならなかった。神は(性別的には男性より弱い)女預言者デボラを起こされた。(女性が、このような霊的権威のある地位を占めるのは規範的ではないが、この時代はイスラエルの衰退期であった。デボラをもって、今日の教会における女性の役割の前例とするべきではない。彼女の場合は例外であって原則ではないからである。しかも、これはイスラエルに起きたことであって、教会ではない。) デボラはバラクに、北上してシセラの軍を攻撃するように命じたが、バラクはデボラが同行しない限り、行くことを拒んだ。バラクが指揮を執ることを渋ったため、シセラに対する勝利はバラクにではなく、一人の女性に与えられることになる、と告げられた。

4:10~16 デボラは先頭に立ち、バラクを呼び寄せ、主が命じられたとおりに、シセラに戦いを挑むよう命じた。しかし、ヘブル人への手紙11:32でその信仰を称賛されているのは、デボラではなくバラクである。最初はいくぶんためらいがあったものの、バラクは信仰によって主に従い、イスラエルを救ったのである。(NIVによれば、11節のホバブは、NKJVのように「義父」ではなく、「モーセの義兄弟」と記すべきである。)

バラクはタボル山の南斜面で1万の軍勢を公然と示した。シセラはこの「餌」に食らいついた。シセラとその戦車隊は枯れ川キシヨンの河床をハロシェテのすぐ南の浅瀬で横断した。彼らは古代の街道沿いにタアナクに向かい、南東へ突進した。イスラエル軍は、南から、またエフライムから谷に入り、バラクの軍勢および、北からの部隊と、キシヨンの南、タアナクの下谷で合流した。デボラは攻撃を呼びかけた(14節)。歩兵で戦車に立ち向かえ、というのである！この危急存亡の時に雨が降り始めたかと思うと、平原は泥沼と化し、戦車も馬も完全に混乱状態に陥った(5:4)。今や形勢は逆転し、歩兵隊が有利となった。バラクは攻撃の手を緩めなかった。シセラは部下たちとはぐれて逃走した。指揮官を失った上に、地面に立って戦うことに慣れていなかった部隊は、本陣に帰ろうと走った。ところが雨は一向に降りやまず、キシヨン川は増水して濁流となった。追っ手のイスラエル軍に殺されなかった者たちも、ハロシェテの浅瀬を渡ろうとしてキシヨン川の流れに押し流された(10～16節。5:20, 21参照)。

"Daily Notes of the Scripture Union"

4:17～24 ケニ人ヘベルの妻ヤエルの天幕に逃げ込んだシセラは、食事と寝所を提供された。シセラが眠っている間に、ヤエルは天幕の鉄のくいを取ると彼のこめかみに打ち込んだ。シセラを追って来たバラクが通りかかると、ヤエルはバラクを招き入れ、敵の亡骸を見せた。このようにして9節のデボラの預言は成就した。神は、たった一匹の「蜜蜂」(デボラ)を用いて、神の知識に対抗して高慢になった人間の

「理性」(ヤビン)を打ち倒されたのである。さばきは「稲妻」(バラク)のように敵に襲いかかった。ヤエル(「登る者」)は天幕のくい(巡礼生活の証し)を用いて、強者の虚勢を打ち砕いたのである。槌はみことばを表している(エレミヤ23:29)。

2. 歌による物語 (5章)

5:1～5 デボラとバラクの詩は、靈感を受けた文学の古典である。主をほめたたえよということばで始めたデボラは、イスラエルの民がエドムの国境を離れ、約束の地に向かって進んだときの主の勝利の行軍を回想した。反対勢力はことごとくイスラエルの神、主の威光の前に消え去ってしまった。

5:6, 7 次にデボラはシャムガルの時代の状況を描いた。危険が多かったため、街道はさびれ、旅人は盗賊の襲撃を避けようと脇道を通った。村人たちはあえて家から出ようとしなかったが、それはデボラが立ち上がるまでのことだった。

5:8 民が偶像に心を向けたので、この地は戦争と流血に明け暮れたが、イスラエルには戦う武器すらなかった。

5:9～15 しかし、神がデボラとバラクを起こされると、イスラエルの指導者たちや民のうちから進んで身を献げる者たちが現れた。エフライム、ベニヤミン、マキル(マナセの部族のこと)、ゼブルン、イッサカルの人々であった。

5:16, 17 そしてデボラは助けに来なかった者たちのことも思い出した。ルベンは大いに心を探られたが(※英訳)、羊の群れの中に留まった。ギルアデ(つまりガド)はヨルダン川を渡って戦いに加わらなかった。ダンは船に残り、アシェルは海辺で無為に過ごした。

聖書は、戦いに身を投じた者と、ヤハウ

エの大義のために危険を冒すことを望まず、傍観していた者とを注意深く記している。それは今日でも同じである。主は世と悪魔に積極的に立ち向かう者は誰か、また座って傍観するだけの者は誰かを知っておられる。報いを受ける時がやがて到来するが、それは損失を経験する時でもある（I コリント3:10～15）。

5:18～22 ゼブルンとナフタリの働きは傑出していた。彼らは何の見返りもないのに主のためにいのちを賭したのである（銀の分捕り品を取ることはなかった）。

彼らはカナンの王たちと必死に戦った。自然の猛威も彼らに味方した。彼らが主の側についていたからである。

5:23～27 主の手助けに來なかつたために、メロズは呪いの対象に選ばれた。メロズの町の人々は、敵との戦いに加勢が必要であつた時に中立を保つたからである。しかし、天幕で暮らしていたヤエルは、シセラを打ち殺した勇敢さと知恵のゆえに祝福されている。ヤエルを別にすれば、女の中で祝福された者、と具体的に言われたのは、主の母（マリア）しかいない（ルカ1:42）。

5:28～31 その間シセラの母は格子窓から見下ろし、勝利の分捕り物とともに息子が帰還するのを待ちわびていた。母にはなぜ息子が遅れているのかわからなかつた。知恵のある女官たちは彼女に、それは分捕り物を分けているからに違いない、と力を込めて言う。しかし、もはやシセラが戻ることはありえなかつた。そしてシセラがたどつた運命は、ヤハウェの敵がみなたどるものであれ、と歌われる。その一方、主を愛する者は昇る太陽のようであれ、と。

本章は、国は四十年の間、穏やかであつた（英訳：「安息を得た」）ということばをもつて閉じる。

E. ギデオン (6:1～8:32)

1. ギデオンの召命 (6章)

6:1～6 次のサイクルでは、イスラエルの民はミディアン人に虐げられている。彼らはベドウィンの一団で、イスラエルの農作物を荒らし、いなごの大群のようにやって来ては土地を荒廃させ、家畜を奪った。イスラエルの背信がもたらしたのは、貧困、隷属、恐怖であつた。かつてイスラエルが征服した相手が、今やイスラエルの主人となつていたのである。私たちクリスチャンも同じように、主から離れると、古い習慣の奴隷となり、貧しくなる。

6:7～16 イスラエルが主に助けを叫び求めると、まず一人の預言者が遣われ、彼らの偶像礼拝を思い起こさせられた。そして受肉前のキリストであると私たちが信じる主の使い（後出の補説参照）が、ギデオンというマナセ族の男に現れた。ギデオンは、ミディアン人から小麦を隠すために、ぶどうの踏み場で小麦を打っているところであつた。御使いはこの「力ある勇士」に、「神はあなたを用いてイスラエルをミディアン人の手から救おうとしておられる」と告げた。ギデオンの再三の拒絶にもかかわらず、御使いはこの重要な任務への召命を繰り返した。

主の使い

主（ヤハウェ）の使いとは、受肉前の主イエス・キリストのことである。主の使いが言及されている箇所を調べると、主の使いが神であり、三位一体の第二の位格であることが明らかになる。

まず、聖書は主の使いが神であることを示している。主の使いがハガルに現れた時、ハガルは自分が神の前にいることを認識し、

主の使いを「あなたはエル・ロイ（見ておられる神）」と呼んでいる（創世記16:13）。モリヤ山でアブラハムに語りかけた御使いは、ご自身を「主」（ヘブル語でヤハウエ、創世記22:16）と名乗られた。ヤコブは御使いが自らをベテルの神と名乗られたのを耳にした（創世記31:11～13）。イスラエル（ヤコブ）はヨセフを祝福した時、「神」という語と「御使い」という語を交互に使った（創世記48:15, 16）。あの燃える柴で現れたのは「主の使い」であった（出エジプト記3:6）。雲の柱の中でイスラエルの先を進まれた主（出エジプト記13:21）は「神の御使い」にほかならない（出エジプト記14:19）。ギデオンは自分が死ぬのではないかと恐れた。主の使いを見たギデオンは神を見たと思ったからである（士師記6:22, 23）。主の使いはマノアに対し、ご自身の名前が「不思議」である（士師記13:18）と告げられた。それは神の御名のひとつである（イザヤ9:6）。御使いと格闘したヤコブは、実は神と格闘していたのである（ホセア12:3, 4）。以上は、旧約聖書で主の使いへの言及は、神を指していることの説得力のある証拠である。

ジョン・ウォルヴォード（John F. Walvoord）はその裏付けとなる4つの論拠を挙げている（チェイファー、Lewis Sperry Chaferの引用による）。

- A. 第二の位格である方は新約聖書の、目に見える神のことである。
- B. キリストの受肉以降、旧約聖書のヤハウエの使いはもはや現れていない。
- C. ヤハウエの使いもキリストも、ともに御父から遣わされている。
- D. ヤハウエの使いは御父でもなければ聖霊でもない。^{*(4)}

この第四の証拠について、ウォルヴォードは、御父と御霊は人間の目には見えないこと、またどちらも非物質的な属性を持っている、と説明している。そして次のように結論づける。「ヤハウエの使いが第二の位格の神であることを否定する有効な理由は一つもないばかりか、既知の事実はすべて、主の使いが新約聖書のキリストと同一であることを示している。」

ヤハウエの使いであるキリストは他の御使いと明確に区別される。キリストは被造物ではないからである。新旧約の両方で「御使い」^{*(5)}と訳されている語は、「使者（メッセンジャー）」を意味する。すなわちヤハウエのメッセンジャーなのである。したがって、チェイファーが言うように、「使い」というのは、その任務においてのみ、「使い」なのである。^{*(6)}

6:17～24 自分が主と話していることを感じ取ったギデオンは、しるしを求めた。そこで、子やぎ一匹を調理し、種なしパンを作って、それらを差し出した。主の使いがその杖で触れると、それらはたちまち火で焼き尽くされた。ギデオンは自分が主の前にいると知り、死ぬのではないかと恐れた。しかし、主は「安心せよ」と彼の不安を取り除かれたので、ギデオンは祭壇を築き、その場所をアドナイ・シャロム（「主は平安」）と名づけた。

6:25～32 その夜ギデオンは主の命に従って、父がバアルのために建てた祭壇と、その傍らにあった木の像を破壊し、その代わりに、ヤハウエのための祭壇を新たに築いた。翌朝、町の人々は、この大胆不敵な行為をしたギデオンを殺そうとした。しかし、父ヨアシュが仲裁に入り、もしバアルが本当に神であるなら自分で自分を守る

はずだ、と言い、バアルを擁護する者は誰であろうと処刑される、と宣言した。こうしてギデオンはエルバアルというあだ名で呼ばれることになった。「バアルは自分で弁明せよ」という意味である。

ギデオンが恐れから夜に祭壇を壊したことを批判する人もいるかもしれない。しかし、ギデオンが主に従ったという事実を見失ってはならない。ギデオンは恐れを理由に従順を放棄することはなかった。誰にでも恐れはあるが、恐れ自体は必ずしも悪いことではない。しかし、それが主に従うことを妨げるなら、それは信仰の妨げとなり、罪となる。

6:33～35 この頃、ミディアン人、アマレク人、東方の人々は、イスラエルと戦うためにヨルダン川を渡って集結し、イズレエルの平野に陣を敷いた。

主の霊がギデオンに臨み、彼はマナセ、アシェル、ゼブルン、そしてナフタリからの軍隊を集めた。アビエゼル（34節）とは、ギデオンの先祖の一人である。その名前がここでは（ヘブル語本文では）、子孫の姓（アビエゼル人）として使われている。8:2も参照。

6:36～40 ギデオンは出陣する前に、神からの勝利の約束を求めた。最初の約束は、羊の毛だけに露が降りていて、その周辺の土全体が乾いていたときに与えられた。二回目の約束は、翌日の夜、羊の毛だけが乾いていて、土全体には露が降りたときに与えられた。

ギデオンと羊の毛のエピソードはクリスチャンがよく誤解するものである。私たちが心に留めておくべきことが二つある。一つは、ギデオンが羊の毛に求めていたものは導きではなく確証であった、という点である。神はすでにギデオンが何をなすべきかを告げておられた。ギデオンは、成功の

保証を求めていただけなのである。ある事柄における主のみこころを知るために「羊の毛を外に出す」という人はこの箇所の適用を間違えている。第二に、ギデオンは超自然的なしるしを求めたのであって、自然現象を求めたわけではなかった、という点である。言うまでもなく、ギデオンが求めたことは、神の直接的な介入がなければ起こり得ないことであった。今日、人々は神の介入なしに自然に起きることを「羊の毛」として用いている。これもまた、この物語の誤った使い方である。ここで私たちが目にするのは、神がへりくだって、信仰の弱い者に勝利を保証しておられる姿である。神は、祈りに応えて、今日でもこのような確約を与えることができるばかりか、実際にそうしてくださるのである。

2. ギデオンの三百人（7章）

7:1～3 ミディアンに対する勝利が神からのものであることがはっきり分かるように、主はまず、律法が命じるように（申命記20:8）、恐れおののく者をみな帰らせ、ギデオンの軍隊を三万二千人から一万人に減らされた。

7:4～8 軍隊をさらに縮小するために、神は兵士たちを川のほとりで試された。ひざまずいて、水を飲むのに時間がかかった者は排除された。一方、犬のように、舌で水をなめ、すばやく次の行動に移った者は軍隊に残された。その数は三百人であった。

7:9～14 次に主はギデオンに、夜になったらミディアン人の陣営の外れに行くように命じられた。ギデオンは従者プラをとって敵の陣営の最も外側に行った。ここで、ギデオンが耳にしたのは、ひとりのミディアン人が仲間にした夢の話だった。その夢の中で、大麦のパンの塊が一つ転がって来てミディアンの天幕を押しつぶした、

というのである。友人はその夢を、イスラエル人がミディアンを破るという意味だと理解した。大麦のパンは一般の農民の食べ物で、イスラエルを象徴していた。天幕はミディアンの軍隊を象徴していた。

7:15~20 自分の軍隊が減っていくことを思うと、ギデオンの恐れが再燃したのかもしれないが、それも無理からぬことであつた。神は、十三万五千の軍隊に、三百人の兵力で立ち向かうように求めておられたからである(8:10)！しかし、敵の口から出たこのことばはギデオンの信仰を強めた。それに応えて、ギデオンはまず主を礼拝し(15節)、その後、戦いに臨んだ。

こうして勝利を確信したギデオンは、イスラエルの陣営に戻り、兵を召集した。軍勢を百人ずつの三隊に分け、各人に角笛と、中にたいまつを入れた土器の壺を持たせて武装させた。彼らはミディアン人の陣営の端まで進軍し、決められた合図で、いっせいに角笛を吹き鳴らし、壺を打ち壊した。中のたいまつが現れるためである。それから「主のため、ギデオンのための剣！」と叫んだ。

この出来事の、神学的解釈がⅡコリント4:7に書かれている。土の器とは私たちのからだのことである。私たちがイエスのために絶えず死に渡されてこそ、イエス・キリストの御顔にある神の栄光を知る知識の光が他の人に向かって輝くのである。

7:21~25 混乱と恐怖に陥ったミディアン人たちは同士討ちを始め、その挙句に逃げた。最初のうちはナフタリ、アシェル、全マナセ部族の人々に追われたが、ついでエフライムのすべての者が召集され、ヨルダン川の浅瀬を占領し、川を渡って逃げようとする敵を撃破した。エフライム人たちはミディアン人の二人の首長オレブ(「烏」とゼエブ(「狼」)を捕らえ、殺すことに成功

した。

ギデオンの行動にはリーダーシップについて学ぶべき教訓がいくつもある。リーダーは、人を導く前に、自分のしていることについて揺るがない確信を持っていなければならない。また何はさておき、神が占めるべき正当な地位を認める礼拝者でなければならない(15節)。模範を示して導かなければならない(17節)。そして称賛が、まず神に、次に、神が選ばれた「器」に帰されるように注意を払わなければならない(18節)。

3. ギデオンのペリシテ人に対する勝利(8:1~32)

8:1~3 当初、エフライムの人々は助けの要請がもっと早い段階で来なかったことでギデオンに憤慨していた。しかし、彼らが二人の首長を捕らえたことは、自分が成し遂げたどんなことよりも輝かしいことである、と念を押すと、彼らの怒りは和らいだ。先に説明したように、アビエゼル(2節)とは、ギデオンとその部下たちを指している。

8:4~7 スコテのユダヤ人たちはギデオンと、腹を空かせたギデオンの三百人に食物を与えることを拒んだ。ギデオンが敗れた場合、ミディアン人たちから報復を受けることを恐れたためである。ギデオンは主がゼバフとツアルムナを渡されるとき、茨やとげで、彼らの肉を裂く(※ヘブル語で「脱穀する」)と脅した。

8:8, 9 ペヌエルの人々もギデオンの食糧の要求に否定的な返事をした。ギデオンは自分が無事に帰って来たら彼らのやぐらを打ち壊す、と脅した。

8:10~17 ギデオンは約束を守った。彼は二人のミディアンの王を捕らえ、全軍を敗走させたのである。一人の若い密告者

が書いた名簿を参考に、ギデオンはスコテの七十七人の長老たちを懲らしめた。

コーエン (A. Cohen) はこのように記す。

この処罰の仕方は、プラトンの『国家』に、最悪の犯罪者に科せられるものとして記されている。^{*(7)}

博識なラビであるキムチ (Kimchi) とラシ (Rashi) は、これを暴力的手段に訴えることを意味する慣用句と見なした。

ギデオンは、彼らを裸にして茨の茂みに投げ込み、穀物を打ち場で脱穀するように彼らを踏みつける、と脅迫した、という説明をする人もいる。^{*(8)}

ペヌエルについては、ギデオンはその塔を取り壊し、町の人々を殺した。「柔らかな答えは憤りを鎮め、激しいことばは怒りをあおる」(箴言15:1)。最初の真理は1～3節のエフライム人に対するギデオンの答えに示されている。第二の真理は、4～17節にある、スコテとペヌエルの人々のことばがそれを示している。

8:18～21 ゼバフとツアルムナは、タボルでギデオンの兄弟たちの一部を殺していたので、ギデオンは長男エテルに彼らを殺すように命じた。彼はまだ若かったので、それを恐れた。そこでギデオンが自らの手で始末をつけた。

8:22, 23 ギデオンの軍功に非常に感銘を受けたイスラエルの人々は、ギデオンが彼らの王になるように求めた。彼らは神にではなく、人間に栄光を帰したのである(7:2参照)。しかし、ギデオンは気高くも、自分自身と息子たちのためにそれを断り、彼らを治める権限があるのは主だけであると力説した。

8:24～27 ところが、ギデオンは一つの誘惑には抵抗したものの、もう一つの誘惑に陥った。ギデオンは、イスラエル人がミディアン人(別名イシュマエル人。出エジプト記32:1～6参照)から奪った金の耳輪を求めたのである。ギデオンは、それを使って、祭司の胸当てのような装身具であるエポデを作った。それがオフラに置かれると、やがてそれが偶像礼拝の対象、そして毘となる、シロとそこにある幕屋から人々を引き離すことになった。ギデオンは「王権は拒否したが、祭司職を望んだ」のである。

8:28～32 ミディアン人を征服後、イスラエルは四十年の間、平穏を享受した。

ギデオンには大勢の妻がいて、彼に七十人の息子を産んだことが特筆されている。また、彼はシェケムに側女がおり、彼女はアビメレクという名の息子を産んだ。

ギデオンの多面的な性格を示す、さらに二つの特徴がこの章で明らかにされている。ミディアン人に対するギデオンの容赦ない追撃は、命令を遂行する徹底さと完全さを遺憾なく表している。どれだけ疲れていても、またすでに多くのことを成し遂げていても、そして誰も助けてくれなくても、イシュマエル人を滅ぼし、王たちが自分の足元で死ぬまで彼は突き進んだ。使徒パウロにも同じような気概が備わっていたが、それは霊的な戦いにおいてのみ発揮された(ピリピ3:12～14)。

第二の特徴は否定的なものである。ギデオンはイシュマエル人を敗北させた報償として、戦利品の中から金の耳輪を求め、それを受け取った(24節)。そしてこれはギデオンとその一族、また国にとって毘となった。これを、創世記14:21～24におけるアブラハムの行動と対比してみよう。私たちは神のもとで、ギデオンの美德に倣うと

ともに、その悪徳は避けるよう努めなければならぬ。

F. アビメレクの篡奪 (8:33~9:57)

8:33~35 ギデオンが死ぬとすぐ、イスラエルはバアル礼拝に逸れてしまった。イスラエルの民はいかに早くギデオンの英雄的な国家的功績を忘れてしまったことだろう。ギデオンの子孫を虐げ、神による救済を忘れるほどに。しかし、私たちは主から、あるいは同胞から受けた祝福を彼らよりよく覚えているだろうか。恥ずべきことに、私たちはそれらを忘れがちなのである。

9:1~6 ギデオンの息子アビメレク（「私の父は王であった」の意）はイスラエルのさばきつかさではなく、正当な権限なしにイスラエルを支配しようとする篡奪者（さんだつしゃ）であった。自分の支配を脅かすものを排除するために、彼は末の子ヨタムを除く自分の兄弟を皆殺しにした。彼はシェケムにいた粗暴なならず者たちを使ってその地域の人々を説得し、自分を王として認めさせた。ギデオンには七十人の息子がいたが（2節）、全員が殺されたわけではないので、5節の七十人というのは概数であろう。

9:7~15 福音書には多くの譬え話、つまり背後に深い意味のある話が含まれている。以下にあるのは、旧約聖書に書かれた数少ない譬え話の一つである。ジェンセン（Irving L. Jensen）は次のように解説している。

アビメレクが即位したことを聞くと、ヨタムは民衆が下方の谷に集まる時に、ゲリジム山の頂上に急いで登った。その見晴らしの良い場所から、彼の声は谷の向こうまで聞こえ、人々は彼が語る不思議な譬え話に熱心に耳を傾けた。彼は、

王を選ぶ樹木の共和国という比喻を使って、イスラエルがしていることを表現した。彼は、ギデオンとその息子たちを木、すなわち、神に定められた役立つ場所を離れて他の木々の上に君臨することを賢明にも拒んだオリーブの木、いちじくの木、ぶどうの木にたとえた。しかしヨタムはアビメレクを茨、すなわち、その招きを喜んで受け入れたばかりか、もしレバノン杉が自分を王に選ばなければ焼き滅ぼす、と警告する茨にたとえた。^{*(9)}

9:16~21 それから、ヨタムは民に大胆に告げた。もしヨタムの兄弟たちを滅ぼしたことが正しかったなら、民はこの新しい支配者（の誕生）を喜んでいいだろう、しかしそうでなければ、シェケムの住民とアビメレクは内戦に巻き込まれ、互いに滅ぼし合うことになる、と。

9:22~33 まさにその通りのことが起こった。三年後、神は、アビメレクとシェケムの住民の間にわがわいの霊を送られた。神は悪を創出する方ではない。しかし、悪を容認し、神の目的を達成するために悪をお用いになる場合があるのは確かである（Ⅰサムエル16:14、Ⅰ列王記22:19~23）。シェケムの住民たちは、シェケム近郊の交易路を通り過ぎるすべての者から略奪した。そのようにして、アビメレクが通常徴収すべき税金を奪った（25節）。エベデの子ガアルは収穫祭を利用して、アビメレクに反乱を呼びかけ、こう言った。「アビメレクとは何者か。シェケムとは何者か。われわれが彼に仕えなければならないとは」。シェケムを治めていたゼブルはアビメレクの操り人形に過ぎなかったが、密かに使者を送って、陰謀の件をアビメレクに知らせ、朝早く町に襲いかかるように進言した。

9:34~40 ガアルが朝、町の門の入り口に立つと、兵が山々の頂から下りて来るのが見えたように思った。最初のうち、ゼブルはアビメレクのために時間を稼ごうと、山々の影が人のように見えるだけ、と偽った。やがてガアルは、それが実際には人々であり、別の方向から来るもう一隊がいることに気づいた。するとゼブルは彼に、出て行ってあなたが見くびっていた相手と戦いなさい、と挑発した。ガアルとその無法者の一団は敵と交戦したものの、多くの者が倒れ、ガアルもほどなく自分の町に追い返された。

9:41~44 アビメレクが近くのアルマに陣を敷いていたので、ゼブルは、ガアルとその身内の者たちをシェケムから追い払った。翌日、シェケムの人々は畑仕事のため、あるいは倒れた者たちから戦利品を集めるために野に出て行った。アビメレクがこれを耳にすると、自分の兵を三隊に分けて、野で待ち伏せた。二隊が彼らに襲いかかり、もう一隊は町への退路を断つ、という作戦である。この待ち伏せは成功した。

9:45 一日の戦いの後、町は陥落した。民は皆殺しにされ、町は破壊された上、塩がまかれた。(塩をまくと農地は不毛となる。ここでは、象徴的な行為として、この地を永遠に不毛の塩の荒地にする、というアビメレクの決意を表している。)

9:46~49 その近くにシェケムのやぐらが建っていたが、そこにはエル・バリテの神殿があった。シェケムのやぐらの住民たちはみな、神殿の広い部屋に身を隠していた。アビメレクとその家来たちは近くのツアルモン山の森から木の枝を切り、地下室の上に火をつけて大火事を起こし、その猛火の中で男女約千人が命を落とした。

9:50~57 アビメレクはテベツを攻略しようとして、ついにその命運が尽きた。

多くの人々が避難しているやぐらの攻撃にかかったとき、一人の女がアビメレクの頭にひき白の上石を投げつけたのである。重傷を負ったアビメレクは、女に殺されたと言われるよりはましである、と言って家来の一人に自分を殺すように頼んだ。このようにして、この「茨」はヨタムが予告したように滅ぼされた。

正義とは、罪に応じた罰の与え方をするものである。アビメレクは、自分の兄弟たちを石の上で殺した(5節)が、その高慢な頭を砕いたのも石だった。暴力によって生きようとする者は、同じく暴力で死ぬことになるのである。

G. トラとヤイル (10:1~5)

イッサカル族のトラは二十三年間イスラエルをさばいた。彼はエフライムの山地に住んでいた。

次のさばきつかさはギルアデ人ヤイルで、二十二年間、イスラエルをさばいた。彼には三十人の息子がいて三十の町を治めたことが付記されている。

H. エフタ (10:6~12:7)

1. イスラエルの惨状 (10:6~18)

10:6~9 またしてもイスラエルの子らが主を捨て偶像礼拝に走った、という嘆かわしい記述が続く。偶像に仕えた結果、イスラエルは偶像礼拝者の奴隷になり下がった。ペリシテ人とアンモン人は、ヨルダン川の東側にいたユダヤ人と戦い、アンモン人はヨルダン川を渡って、ユダ、ベニヤミン、およびエフライムと戦った。

イスラエルはペリシテ人やアンモン人の前に無力であった。それは、ヤハウエ礼拝を捨て、これら異教徒たちの神々に仕えたからである。

10:10~16 イスラエル人は主に叫ん

だが、初めのうち、主はその嘆願を拒まれた。主は過去の救出の例をいくつか挙げ、そのたびに彼らが主に背を向けたことを思い起こさせた（13節）。しかし、それでもイスラエル人が祈るのをやめず、偶像を捨て去ったので、神は彼らの叫びに耳を傾けられた。16節は、主の優しさに満ちた大きな心を垣間見させてくれる。父親がそうであるように、主は道を踏み外した子どもたちの苦境に心を動かされた。彼らの悲惨さが、主のあわれみを呼び起こしたのである。

10:17, 18 本章が閉じられる頃、アンモン人の軍勢はギルアデに陣を敷き、イスラエルはミツパに集結した。ギルアデの人々は、軍の指導者を求めている（17, 18節）。

2. エフタのイスラエル防衛（11:1～28）

11:1～3 今や、エフタは時の人であった。エフタはギルアデ人であり、武勇に優れ、遊女の子であったと記されている。同胞に拒絶された彼は、トブの地（おそらくアラム）に流れ着き、そこで、ならず者、つまり無法者の一団を率いるかしらとなったのである。

11:4～11 ギルアデの長老たちは今になってエフタに、イスラエルの軍隊を率いてアンモン人と戦ってくれるように頼み、もし敵を打ち破ればエフタを指導者として認める、と約束した。

いくつかの点で、エフタは主イエスを彷彿とさせる。彼の誕生には暗い影があり、兄弟から拒絶されたからである。彼らは奴隷状態に陥ると、エフタのことを思い出し、救済者として彼を呼び求めた。そしてギルアデの人々を助けることに同意したとき、彼らの救い主になることに同意したが、同時に彼らの主となることも主張したのであった。

11:12～28 エフタが最初にとった行動は、アンモンの王に使者を遣わし、その侵略について説明の機会を与えることだった。王は、イスラエルがエジプトからカナンへ進軍した際に、自分の土地が奪われたと訴えた。エフタは、そうではないことをはっきり説明した。主はあらかじめ、ご自分の民にエドム人（申命記2:4, 5）、モアブ人（申命記2:9）、またアンモン人（申命記2:19）に手出しをしてはならない、と命じておられた。これらはすべてユダヤ人の遠い親戚にあたる。そのため、イスラエル人はエドムの地とモアブの地を迂回したのである。しかし、彼らがアンモン人の領土にやって来たとき、そこはすでにシホン王とするアモリ人によって占領されていた。イスラエルはアモリ人を打ち破ってその地を占領した。

しかし、アンモン人の王がこの地に対する主張を撤回することを拒否したため、エフタは戦争の準備をした。

3. エフタの誓い（11:29～40）

戦いに赴く前に、エフタは、勝利して家に帰って来たら、自分の家の戸口から最初に迎えに出て来る者を主に献げる、という軽率な誓願を立てた。主はエフタにアンモン人に対する勝利を与えられた。エフタが自分の家に帰ると、なんと、自分の娘が彼を迎えに出て来た。そこでエフタは娘を主に献げた。

エフタが実際に娘に何をしたかについては、かなりの意見の相違がある。一つの見解は、彼が娘を殺し、主に全焼のささげ物として献げたというものである。人身御供という考えは忌まわしいものであり、神がそれをお認めになったことは一度もない（申命記18:9～14）が、おそらくこれが本文の最も明白な意味であろう。いけにえにされ

たのは家畜だけであり、人間の場合は献げられた後、金銭によって贖われた（出エジプト記13:12, 13、レビ記27:1～8）。

もう一つの一般的な見方は、エフタが娘を処女のまま、一生ヤハウエに仕える生活に入らせた、というものである。この見解に立つ人は、エフタの誓願とは、彼の家の戸口から迎えに出て来るものは、それが何であれ主のものとする、または全焼のささげ物として献げる、というものであった、と述べる（31節）。生涯にわたって処女のままでいた、という考えは、37, 38, 39節が強い裏付けとなっている。いずれにせよ、ここでの教訓は、軽率な誓いを立ててはならないということである。

4. エフライム人を殺すエフタ(12:1～7)

12:1～4 エフライム人はエフタの勝利を妬み、自分たちが勝利の恩恵に与れなかったことに不平を鳴らした。エフタは、かつて彼らに助けを呼び求めても無駄であったことを思い出させた。エフライム人はエフタの民、ギルアデ人を嘲り、彼らはエフライムからの逃亡者に過ぎない、と言った。（エフライム人たちはとかく問題を起こす人々であり、ギデオンがミディアン人たちを打ち破ったときに、ギデオンと言い争ったことがあった [8章]。今度は正当な理由もなくエフタと争った。）

12:5, 6 エフタとその部下は、エフライム人たちを攻め、ヨルダン川の渡し場で、逃げ道を絶った。誰もが、ヨルダン川を渡ることを許される前に、「シボレテ」（「流れゆく川」）という合言葉を言うように強いられた。エフライム人はこのことばを正しく発音することができず、「スイボレテ」と言うことで、正体を明かしてしまった。

*⁽¹⁰⁾ こうしてエフタはヨルダン川の渡し場で四万二千人のエフライム人を殺したので

ある。同胞に対する恐ろしい虐殺であった。

神の民の間でこのような内紛が起こる、というのは見るに忍びないものである。エフライム人の血は、こうしてアンモン人の血に混じることになった。士師記の明るい部分すら、災いで汚れている。リダウト (Samuel Ridout) は、次のような悲しい観察をしている。

異端に立ち向かい、それを打ち破った者たちが、その後、兄弟たちと剣を交え、真理の本質の問題ではないことをめぐって争ったというのは事実ではないだろうか。^{*(11)}

12:7 エフタはさばぎつかさとして六年間務め、その後死んで、ギルアデの町に葬られた。エフタは、ヘブル11:32で、ギデオン、バラク、サムソンとともに引用されている。これらの人々にはそれぞれ欠点があった。しかし彼らは皆、どこかの時点では、偉大な信仰を示している。

1. イブツァン、エロン、アブドン (12:8～15)

12:8～10 イブツァンはイスラエルを七年間さばいた。彼について分かっているのは、彼がベツレヘム出身で、三十人の息子がいたが、その息子たちは皆、よそから（つまり、彼の一族以外から）妻を迎えたということだけである。

12:11, 12 エロンはゼブルン族の出身であった。さばぎつかさとしての彼の働きは十年間続いた。彼はアヤロンに葬られた。

12:13～15 ヒレルの子アブドンはアマレク人の山地にあるエフライムの地のピルアトンという町の出であった。彼は八年間イスラエルをさばいた。彼には四十人の

息子と三十人の孫がいたことが特記されている。

J. サムソン (13～16章)

1. サムソンの信仰的遺産 (13章)

13:1～3 士師記の中で、「イスラエルの子らは、主の目に悪であることを重ねて行った」と書かれているのはこれで七回目である。このサイクルが再び始まる。今度はペリシテ人がイスラエルを四十年間奴隷とした。これはイスラエルがそれまでに経験した中で最も長い抑圧であった。イスラエル人がペリシテ人に虐げられている最中、主の使い（キリスト）がダンの氏族のマノアの妻に現れ、不妊であった彼女が息子を持つ母親となる、と告げた。不妊の子宮は、神の目的の出発点となることがよくある。神は死の中からのいのちを呼び出し、「無に等しい者」を用いて、「有るもの」を困惑させられる（※Ⅰコリント1:28参照）。

13:4～7 この息子は母親の胎内にいるときから死ぬ日まで、ナジル人となるはずであった。彼はぶどう酒を飲んだり、ぶどうや干しぶどうも食べたりしてはならず、髪の毛を切ってもならなかった。母親自身もぶどう酒やそれに類する飲み物、また汚れた物をいっさい食べてはならなかった。

ナジル人の誓願の聖書的背景については、民数記6:2を参照。通常、ナジル人となる誓願は、本人の意志によるものであった。しかし、サムソンの場合、ナジル人の誓願は、彼の誕生から死ぬまで続くものであった。

13:8～14 マノアは主の使いが再び訪れ、さらなる指示を与えてくださるよう祈った。神の使いは再び彼女に現れたので、彼女は急いで夫を連れ出し、この天からの訪問者を迎えに出た。しかし、この時、主の使いからそれ以上の指示が与えられるこ

とはなかった。

13:15～18 そこでマノアは主の使いがただの人間だと思い、食事の用意を申し出た。主の使いはマノアと対等の立場で食事することを拒んだ。その代わりに、子やぎを全焼のささげ物として主に献げることを提案した。マノアが主の使いの名前を尋ねると、不思議という名である、と告げられた。それは、イザヤ9:6で、主イエスにつけられた名前の一つである。

13:19～23 そこでマノアは、子やぎを主に献げた。主の使いは祭壇の炎の中を上って行き、これが主ご自身の現れであることをはっきりと示された。マノアとその妻はそれを見て、地にひれ伏したが、それは、もし御使いが神でなかったら、その行為は不適切であっただろう。二人は神を見たが、そのために死ぬことはなかった。神はすでに全焼のささげ物と穀物のささげ物をお受けになっていたからである。

13:24, 25 この出来事の後、男の子が生まれ、サムソン（「小さな太陽」）と名づけられた。間もなく、主の霊が彼の人生に力強く働いていることが明らかになった。

聖書の中で、これほど強さと弱さが対比を示す人物は珍しい。私たちがサムソンを思い浮かべるとき、普通はその〈強さ〉を思い浮かべる。彼は素手でライオンを殺した（14:6）。誰の助けも借りずに三十人のペリシテ人を殺した（14:19）。ユダの人々が彼を縛った綱を断ち切ったばかりか、ろばのあご骨で千人のペリシテ人を殺した（15:14～16）。ペリシテ人が仕掛けた罠から逃れるために、ガザの城門を担いで立ち去った（16:3）。デリラの裏切りも三度にわたって回避した。ある時は自分を縛り付けていた真新しい七本の弓の弦を断ち切り、またある時は、新しい綱を糸のように引きちぎった。そして彼の髪の毛を七ふさ織り

込んだ機^(はた)のおさも引き抜いてしまった(16:6~14)。最後に、ペリシテ人たちがサムソンをからかって楽しんでた建物の柱を引き倒し、その死により、生きていた時よりも多くの人々を死に追いやったのである(16:30)。

しかし、サムソンの〈弱さ〉はもっと明白であった。彼は女性に弱く、自分の気に入った女性を手に入れるためなら、神に背くこともいとわなかった(14:1~7)。また両親にも背いた(14:3)。嘘をついた(14:9、16:7, 11, 13)。神の民の敵である三十人のペリシテ人と親しくした(14:11~18)。彼は短気で執念深かった(14:19、15:4, 5)。彼は残忍な性質を持っていた(15:4, 5)。彼は遊女と交わった(16:1, 2)。彼は悪と戯れた(16:6~14)。彼は敵に自分の強さの秘密を明かした(16:17, 18)。自惚れが強く、自信過剰だった(16:20)。そして最後に、看過し得ない点として、彼はナジル人の誓いを破ったのである(14:9)。

2. サムソンの祝宴となぞかけ(14章)

14:1~4 サムソンのわがままは、イスラエルの敵の一人であるペリシテ人の娘との結婚を決めたことによりすぐに明らかになった。彼の父と母は、何とか思いとどまらせようとしたが、サムソンは譲らなかった。4節は、主がサムソンの不従順を認めた、という意味ではなく、主がそれを許し、イスラエルの幸福と敵の処罰のためにそれを覆そうと計画された、という意味である。

14:5~7 父と母とともに、ティムナというペリシテの町へ行く途中、サムソンに向かって一頭の若い獅子が向かって来たが、主の霊が激しく彼の上に下ったので、サムソンは難なく獅子を殺すことができた。おそらくこの時に結婚の取り決めがなされたのであろう。

14:8, 9 その後、サムソンが花嫁を迎えようとティムナに戻ったとき、彼は自分が殺した獅子のからだに蜜があるのを見つけたので、それを父母にも分けた。サムソンはその蜜が、死体との接触により汚れていたことは告げなかった(ナジル人であったサムソンは、死んだ動物に触れたことにより、誓いの一部を破ったのである)。

14:10~14 ティムナでは盛大な祝宴が催されたが、サムソンはそこで一つの謎かけをした。そして、もし三十人の招待客がそれを説明できれば、それぞれに衣装一式を進呈し、もし説明ができなければ、彼らがサムソンに亜麻布の衣服三十着と晴れ着三十着を差し出さなければならない、というのである。その謎とはこうであった。

食らうものから食べ物が出た。

強いものから甘い物が出た。

それはもちろん、サムソンが獅子を殺したことと、その死骸の中に蜂蜜があるのを見つけたことを指している。

14:15~18 男たちは答えを推測できなかったのも、サムソンの妻を脅迫して説得し、サムソンから答えを聞き出させようとした。彼女はその通りにし、三十人の若者たちに説明した。彼らはサムソンのもとに来て答えを告げ、衣服を要求した。その時になってやっとサムソンは、彼らが自分の妻と結託していたことに気がついたのである。

14:19, 20 男たちに支払う衣服を手に入れるために、サムソンは怒りに任せてアシュケロンに住民を三十人打ち殺し、その晴れ着を奪った。結婚が成立するはずの七日目に、彼は家に帰った。サムソンの妻は、彼に付き添った客の一人のものとなった。

3. サムソンの報復 (15章)

15:1~6 義父がサムソンに妻を娶らせるのを拒むと、サムソンは私的な報復として三百匹のジャッカルジャッカルの尾を対にして結び、それぞれの尾の間に火のついたたいまつを挟んで麦畑、ぶどう畑（※英訳）、オリーブ畑に放った。ペリシテ人はこの残忍で野蛮なしわざの原因を知ると、サムソンの妻とその父を焼き殺した。

15:7~13 サムソンの答えは大勢のペリシテ人を殺すことであった。それからサムソンはエタムの岩の裂け目に退いた。しかし、暴力はさらなる暴力の引き金となる。ペリシテ人がサムソンの行方を追って兵を進めると、ユダの人々は卑屈にも、ペリシテ人がわれわれの支配者であることを知らないのか、と説得するのであった。自分たちだけは助かろうと、彼らはサムソンをしっかりと縛って、敵の手に渡すことで意見が一致した。サムソンも、同胞が自分を殺そうとしないのであれば、それでよい、と言った。彼らはすっかり隷属意識に陥っていた。そのため、サムソンに協力して自分たちの鎖を解こうとするのではなく、むしろ、抑圧者に忠誠を尽くし、自らの同胞を見捨てる方を選んだのである。

15:14~17 次に続くのは、サムソンの生涯における栄光の瞬間のひとつである。彼が縛られた状態で連れ出されたとき、主の霊が彼に強く臨み、彼はろばのあご骨で千人のペリシテ人を打ち殺した。彼はその場所を、ラマテ・レヒ（「あご骨の高台」）と名づけた。16節には一種の語呂合わせがある。「ろばのあご骨で骨折り仕事をした」というように…。

主はなぜ、およそ武器とは言えない代物でこのような大勝利を与えられたのか、誰でも疑問に思うところである。サムソンは汚れたものには一切触れることを禁じられ

ていた。あご骨はまさに汚れたものであった。死んだ動物の一部だからである。しかし、この奇想天外な武器のおかげで、この時の勝利は、神が卑しいものを用いてくださった超自然的なものであることが一層明白になったのである。これは火急の時には、主が例外をお認めになることの一例である。

15:18~20 水を求めるサムソンの祈りに応えて、神は「あご骨の高台」の中から奇跡的に泉が湧き出るようにされた。そのために、この場所はエン・ハコレと呼ばれた。「呼ばれる者の泉」という意味である。

サムソンが二十年間イスラエルをさばいた、と神の御霊が記録されたのは、彼の生涯におけるこの輝かしい期間のことである。

4. デリラに欺かれたサムソン (16章)

16:1~3 自らが治める時代が終わりに近づいた頃、サムソンは抑えきれない欲望に駆られてペリシテ人の町ガザの遊女遊女の家を訪れた。町の人々は、ついに敵が畏にかかったと思った。しかしサムソンは真夜中に起き上がり、町の門の扉と二本の門柱をつかんで、かんぬきごと引き抜き、それを肩に担いで、ヘブロンに面する山の頂に運んで行った。これは約60キロメートルの距離である。

16:4~10 次にサムソンは名をデリラというペリシテの女と恋に落ちた。このことが知れると、ペリシテ人の領主たちは、もしサムソンを誘惑してその強い力の秘密を明かさせたら、彼女に多額の報酬を与えよう、と持ちかけた。

最初の試みで、サムソンは「もし七本の新しい弓の弦で私を縛るなら、私は弱くなるだろう」と言った。彼女はすぐさま七本の新しい弓の弦でサムソンを縛り上げ、「ペリシテ人があなたを襲って来ます」と言った。しかし、サムソンはまるで糸のように

弓の弦を断ち切った。

16:11～12 二度目の試みで、デリラはサムソンが言ったとおりに新しい綱で彼を縛り、ペリシテ人が彼を殺そうと迫っていると警告したが、またしてもサムソンは腕からその綱を、糸のように断ち切った。

16:13, 14 それでもサムソンは「火遊び」をやめることをせず、もしデリラが機（はた）の経糸（たていと）と一緒にサムソンの髪の毛七房を織り込み、機のおさで締めつけておくならば自分は無力になるだろう、と言った。デリラがサムソンを起こし、ペリシテ人があなたを襲って来ます、と言って警告すると、サムソンは機のおさと機の経糸を持ってその場を去ってしまった。

16:15～20 ついにサムソンは根負けし、デリラに自分の力の秘密を明かした。彼の長い髪自体が力の源であったわけではないが、それはサムソンがナジル人であること、つまり神に聖別された者であることの外面的なしるしであった。彼を強くしたのは彼の髪ではなく、神との関係であった。一旦その髪が切り落とされたなら、無力になるほかはない。デリラは、ついにサムソンの秘密を手に入れたと分かった。サムソンが自分の膝の上で眠っている間にデリラはペリシテ人を呼び入れた。そのうちの一人がサムソンの頭を剃ると、彼の力は彼を離れた。

マッキントッシュ(C. H. Mackintosh)はこの場面についてこう述べている。

結局、デリラのひざにサムソンの心は抗しきれなかった。そして、ペリシテ人が千人かかってでもできなかったことが、たった一人の女性の誘惑によって成し遂げられたのである。^{*(12)}

サムソンは眠りから目を覚ますと、主が

自分から離れられたことを知らず、力を奮い起こそうとした。

16:21, 22 ペリシテ人はサムソンの両目をえぐり出し、ガザに幽閉し、そこでサムソンに穀物を挽（ひ）かせた。この三重の屈辱をこう表現した人がいる。「罪は人を縛り上げ (bind)、盲目にし (blind)、痛めつける (grind)」と。しかし、サムソンの髪は剃り落とされてからまた伸び始めた。

16:23～31 ペリシテ人の領主たちがその神ダゴンを祝って盛大ないけにえを献げたとき、自分たちの神が自分たちのためにしてくれたことを示す見せ物としてサムソンを呼び出した。そればかりか、芸当を披露して自分たちを楽しませるように強要した。宴の最中、サムソンは神殿を支えている二本の中柱にしっかり手を当てたかと思うと、力を求めて主に呼ばわり、柱を押し倒して、その建物を破壊した。そこにいたすべての民が死んだ。サムソンが死ぬときに殺した者は、彼が生きている間に殺した者よりも多かったという、もの悲しい記録である。

サムソンは生涯を通じて何度もペリシテ人と交わり、ペリシテ人の女性の魅力に抗うことができなかったのも、死においても、ダゴン神殿の瓦礫の中でペリシテ人の死体と一緒に遺体が発見されることになった。もし、ペリシテ人たちと一線を画していたなら、もっと高貴な死を迎えていたことであろう。ここで私たちは厳粛な教訓を教えられる。それは決して軽んじてはならないものである。すなわち分離（聖別）を失うと、やがて力を失い、最終的には破滅に至るということである。罪に自分の肢体をゆだねることは、自滅を追い求めることに等しい。サムソンの遺体は身内の手でダンの領土に運ばれ、そこに葬られた。

Ⅲ. 宗教的・道徳的・政治的退廃 (17～21章)

士師記のこの最後の部分は、ほとんど本書の付録のようなものである。時間の経過に関する限り、17～21章は物語を進展させるものではない。むしろ、士師たちの時代にイスラエルが陥っていた宗教的、道徳的、政治的な低次元の状態を恐ろしいほどに垣間見せている。ルツ記という小編は当時の士師たちの歴史を時間的に進展させるものではないが、それとは対照的に、ヘブル民族の歴史の暗黒時代における敬虔な残りの民の魅力的な姿を垣間見せてくれている。

A. ミカによる宗教の確立 (17章)

17:1～4 最初の物語は、宗教的な腐敗に関するものである。エフライムの山地の出で、その名をミカという人が母親から千百シェケルの銀を盗んだ。彼女は、それが自分の息子であるとは知らず、その盗人を呪った。どうやら彼は呪いの結果を恐れたようで、銀を母親に返した。すると母親は呪いを解き、銀を返した息子を祝福したのである。こうして母親は銀を本来の目的のために使うことができるようになった。そこで母は銀二百シェケルを取り、その銀から二体の偶像を作らせた。一体は木を彫ってから銀をかぶせた彫像であり、もう一体の铸造された像はすべて銀で造られた。

17:5, 6 ミカはそれらの偶像を家の守り神であるテラフィムと一緒に神の宮に収めた。それと同時に、自分の家族のために祭司職を設けることを決め、エポデ(祭司が身につける衣服)を作り、息子の一人を祭司として任命した。もちろんこのような行為は神の律法に反するものであった。律法はエフライム人が祭司になることを禁じ

ていたからである。そもそも、この手続き全体がモーセの律法に反していた。

17:7～13 それからしばらくして、ユダの人々の中で、ベツレヘムに住む一人のレビ人が寄留する所を求めて、エフライムの山地にやって来た。(本来ならヤハウェへの奉仕に従事し、民の十分の一のささげ物でその生活が支えられるべきであった。しかし律法がないがしろにされていたため、自分の行き場を探すことを余儀なくされたのである。) ミカは彼に自分の家族の祭司の地位を提供した。この男はレビ人ではあったが、アロンの家系ではなかったため、祭司として仕える資格はなかった。しかし、ミカは彼に給料と衣食を提供し、レビ人は奉仕することに同意した。レビ人はミカに対し、このような取り決めはすべて神のご命令に反していることを突きつけるべきであった。ところがそうはせずに、彼は給与やその他の便宜を受け入れることで黙認し、自らの口を封じて神のみこころの全体を告げなかったのである。

この章の状況を表すことばは「混乱」である。盗んだ銀は偶像に使われ、主が盗人を祝福するように祈りが捧げられ(2節)、個々の神の宮が幕屋の礼拝に取って代わり、レビ人や一般人が祭司に任命され、ヤハウェを礼拝するのに偶像が用いられた。しかもミカは、これらすべてにおいて、主が祝福してくださると思ひ込んでいた(13節)！この混乱は人の心に起因している(6節)。もしこの時期にイスラエルにおいて神の律法が守られていたなら、このようなことは何一つ起こらなかったであろう。次章で見る通り、「人の目にはまっすぐに見えるが、その終わりが死となる道がある」(箴言14:12)のである。

B. ミカとダン族 (18章)

18:1~6 同じ頃、ダン部族の人々は、さらに住むべき領土を探すことにした。(1節で、ダン部族にはまだ相統地が割り当てられていなかった、というのは、カナンの地が最初に分割されたときに(ヨシュア 19:40~48) 土地が与えられなかった、ということではなく、十二部族で最小の彼らの取り分が彼らには小さ過ぎた、という意味である。) 彼らの斥候の一部がエフライムの山地にあるミカの家に来てみると、彼らはレビ人の若者の声に気づき、彼らの計画に神の祝福があることの確証を求めた。

18:7~13 ダン族の五人が北方の町ライシュを偵察したところ、住民は平穏で安心しきっていた。そのうえ、その町はだれとも交渉がない、つまり「近隣のどの民とも相互援助の契約を結んでいない」*⁽¹³⁾ 平和を愛する共同体だった。その無防備な状態を神からの贈り物と考え、完全武装したダンの氏族の者六百人はライシュに向けて出発した。

18:14~26 その後、ライシュを攻略するために北へ進軍していたダンの五人は、ミカの家に入り、すべての偶像を奪い取った。軽く抗議はしたものの、レビ人はミカの家だけでなく、祭司としてダン部族に仕えよ、という命令に喜んで従った。ミカとその町の何人かが、自分たちの神々が盗まれたことに抗議するためにダン人に会いに行ったが、彼は黙るように命じられ、手ぶらで帰された。

18:27~31 ダンの人々は平和な町ライシュの町を襲い、町の名をダンと変えた。彼らはそこに彫像を立て、モーゼの子ゲルシヨムの子ヨナタンとその子孫を祭司に任命した。

士師記では、「マナセ」(KJV、NASB)

は「モーセ」と読むべきであるとされているが、これは、モーゼの孫の偶像礼拝によってモーゼが名誉を傷つけられるのを防ぐためにユダヤ人の書写者によって意図的に変えられたものである。*⁽¹⁴⁾

おそらく、ヨナタンとは前述のレビ人の名前と思われる。ダンという町はこの時以来、偶像礼拝の町となった。後にヤロブアムが金の子牛の一つを設置したのはこの地であった。30節で言及されている捕囚が、この地域に対してペリシテ人が行ったものか(Ⅰサムエル4:11)、またはアッシリアによるものなのか(Ⅱ列王記15:29)は不明である。

ダン族のすべてがライシュに行ったわけでもなければ(11節)、偶像礼拝に陥ったわけでもない。ユダとエフライムの間の地に留まった人々もいたのである。この部族の中で最も有名なサムソンは、後者のダン族の出身である。

C. レビ人とその側女 (19章)

19:1~12 私たちは今、レビ人とその側女(そばめ)をめぐる、信じられないほどの道徳的墮落の物語を前にしている。このレビ人にはユダのベツレヘムから来た側女がいた。彼女は彼のところを去り、自分の父の家に帰り、遊女となって暮らしていた(※KJV他による)。彼は彼女を迎えにその父の家に行き、連日そこでもてなしを受けた。彼が側女を連れて帰ろうとするたびに、娘の父はもう少し長くいるように、と彼を説き伏せた。そして五日目の夕方、ついに彼は召使いと、鞍をつけたらば二頭、そして側女を連れて出発した。彼らがエブス(後のエルサレム)に着いたのは午後遅くであったが、その町にはまだ異教徒のエブ

ス人が住んでいたの、彼らは立ち寄りなかつた。ウィリアムズ (George Williams) はこう述べている。

レビ人にとっては、神の子を自称する者たちよりも、異教徒と共に夜を過ごす方がどれだけよかったことだろう。前者はすでに後者よりも墮落していたからである。*⁽¹⁵⁾

19:13~21 日が沈むころ、彼らはベニヤミンの領地にあるギブアに到着した。彼らの一行を迎えて泊めてくれる者はだれもいなかったの、レビ人は広場でしばらくの間休憩を取った。するとギブアに住むひとりの年老いたエフライム人が、一行を自分の家に招いてくれたので、その申し出を受けることにした。

19:22~24 その晩、性的倒錯者の一団が家を取り囲み、訪ねてきたレビ人を自分たちのところに引き出すように要求した。これほど墮落した行為が記録されているのは、ロトの時代 (創世記19章) だけである。この若い女性に不運だったのは、ソドムにいたような守護天使がギブアにはいなかったことである。どちらの事件も、犯罪者に厳しい結果をもたらした。主は同性愛を忌み嫌われるからである。人間の墮落も、これ以下にはなりえない。家の主人は、自分の処女の娘とレビ人の側女を差し出すことにより、これらの邪悪なベニヤミン人たちを満足させようとした。カンドール (Arthur Cundall) は彼らの行動を次のように評している。

もてなしの慣習にこだわるあまり、この老人は、現代の読者には、はるかに重要に思える規範、すなわち弱者や無力な

人々の世話と保護を破るのをいとわなかった。古代世界では女性であることは軽んじられていた。女性が現在の地位を享受できるようになったのは、ユダヤ教の教え、特にキリスト信仰の啓蒙によるところが大きい。この老人は、主賓に危害が及ばないように、処女である自分の娘とレビ人の側女を、家を取り囲む者たちの歪んだ情欲の犠牲にするのも仕方がないと思ったのである。*⁽¹⁶⁾

19:25~30 ついに、身の危険を感じた臆病なレビ人は、自分の側女を彼らのところへ出した。彼らの卑劣で恐ろしい虐待の結果、彼女は夜のうちに死んだ。ベニヤミン人たちを弁護するわけではないが、そもそも彼女が以前、淫行に身を委ねていなければ (2節※KJV等による)、淫婦として死なずに済んだことであろう。罪は、それに従う者に容赦なく報いる。レビ人は翌朝、戸口で彼女の遺体を見つけた。彼は、これほど忌まわしいことがイスラエルで行われていることに激怒し、彼女の遺体を十二に切り分け、出来事の詳細を記した上で、それぞれを十二部族に送った。イスラエルの民は衝撃を受けた！

D. ベニヤミンとの戦い (20、21章)

20:1~14 ベニヤミンを除くイスラエルの全部族から選ばれた戦士たちはミツパに集結し、レビ人が事の次第を語るのを聞いた。彼らはギブアと戦うことを決めたが、その前に、罪を犯したよこしまな者たちを引き渡して罰を受けさせる機会をベニヤミン人に与えた。しかしベニヤミン族は、聞こうとしなかったの、ここに内戦が勃発した。

20:15~48 この事件が起きたのは、

ヨシュアとその世代の死後間もない頃のことである。当時はピネハスが大祭司だったからである(28節)。ベニヤミン族の兵力は、他の諸部族からの四十万人(15～17節)に対し、わずか二万六千七百七百人であった。ところが、最初の戦いで、ベニヤミンは二万二千人を減ぼした(18～21節)。二回目の戦いでは、イスラエルの一万八千人が倒れた。イスラエルがこれほどの苦戦を強いられたのは、彼らの大義名分が正当であったにもかかわらず、彼ら自身が主に従う生活をしていなかったからである。18節、23節、26～28節を見ると、イスラエルが主の前に謙遜にならざるを得なくなり、やっと勝利が約束されたことがわかる。三度目の交戦において、イスラエルは伏兵を置くという戦術をとった。ベニヤミンの兵たちをギブアの町からおびき出し、町に火を放って、荒野へ逃げようとする、総勢二万五千百人を減ぼしたのである。それから、ベニヤミンのすべての町々を焼き払い、女や子どもたちも殺した(29～48節)。

三回の戦いでベニヤミンは二万六千百人を失った(15,47節)。(最初の二日間で千人を失ったと結論づけなければならない。)35節と44～46節の殺された者は、最後の戦いでの犠牲者だけを指している。生き残った六百人は、四か月間リンモンの岩に避難した。この生き残りの者がいなければ、ベニヤミン族は完全に減ぼされていたであろう。

21:1～15 イスラエルの十一部族は、ベニヤミン族がほとんど消滅してしまったことで悲しみに暮れた。この部族が絶滅することを望まなかったからである。しかし彼らはミツパで、自分たちの娘をベニヤミンの男たちには嫁がせない、と性急な誓いを立ててしまっていた。彼らの最初の解決策は、ヨルダン川東岸のヤベシュ・ギルア

デと戦うことだった。その住民がベニヤミンとの戦いに協力しなかったからである。若い処女四百人を除いてすべての住民が殺された。そして彼女たちは捕らえられ、ベニヤミンの男たちにあてがわれた。

21:16～24 しかし、ベニヤミン族が繁栄していくためには、さらに補充が必要であることは明白であった。イスラエルの人々はすでに自分の娘はベニヤミンに与えない、と誓っていたので、今さらその誓いを反故にする気持ちにはなれなかった。そこで彼らは、ベニヤミンの生き残りの者たちが、毎年、シロで行われる主の祭り(恐らくは仮庵の祭り)で踊る若い女たちの中から、自分のために妻を捕らえることを許可するという計画を思いついた。シロの人々が苦情を言うと、他の部族の者たちは、イスラエルの部族の一つが消滅するのを防ぐにはこうするしかない、と説明した。このようにして、ベニヤミンは自分たちの相続地に帰り、将来に向けて再建を始めたのである。

この最後の数章は、私たちに士師時代の初期のイスラエルの二つの部族の内幕を明らかにしている。他の部族において記録されていないことが何であったかは想像に難くない。そして、時間の経過とともに、状況は悪化していったことが分かる。これらの陰惨な話は、民が主からどれほど遠く離れてしまうかを示している。ここには私たちが嫌悪感を抱いても当然な背教の実がある。しかし、私たちがここを読んだことをきっかけとして、私たちの神である主を求め、生きている限り主に仕えるなら、その方が優っている。

21:25 士師記は、「そのころ、イスラエルには王がなく、それぞれが自分の目に良いと見えることを行っていた」という、私たちの耳に悲しく響く主題で幕を閉じる。

この暗黒の時代にも健全なエピソードが存在する。しかし、それは士師記の腐敗や墮落と一線を画すため、士師記とは切り離され、独立したものとして始まる。それでは、ルツ記の汚れなき物語に目を転じるとしよう。

後 注

1. (序論)これらの大部分は、Grant, Jennings, and Ridout (参考文献を参照のこと)からの引用である。
2. (2:11-19) Irving L. Jensen, *Judges/Ruth*, p. 12.
3. (3:5,6) A. Cohen, Joshua・Judges, pp. 176, 177.
4. (補説) Quoted by Lewis Sperry Chafer in *Systematic Theology*, V: 32.
5. (補説) In Hebrew mal'āk, in Greek *angelos* (whence our English word *angel*) .
6. (補説) Chafer, *Theology*, I:328.
7. (8:10-17) Cohen, “Joshua・Judges,” p. 227.
8. (8:10-17) *Ibid.*, p. 225.
9. (9:7-15) Jensen, *Judges/Ruth*, p. 49
10. (12:5,6) いくつかの言語(ギリシャ語やラテン語を含む)には「sh」の音がない。ヘブル語のある方言では、「sh」を発音できなかったか、少なくともこの単語では「s」と「sh」の区別がつかなかったようだ。第二次世界大戦中、南洋にいたアメリカ兵が“lalapalooza”をパスワードに選んだときにも似たような状況があった。日本人は「l」と「r」の区別がつかず、“raraparooza”と言いがらだった。
11. (12:5,6) Samuel Ridout, *Lectures on the Books of Judges and Ruth*, p. 177.
12. (16:15-20) C. H. Mackintosh, *Genesis*

to Deuteronomy, p. 465.

13. (18:7-13) Cohen, Joshua・Judges, p. 291.
14. (18:27-31) John Haley, *Alleged Discrepancies of the Bible*, p. 338.士師記の場合、KJVやNASBでは「マナセ」と訳されているところが「モーセ」と読むべきである、という点は一般的に認められている。それは、モーセの孫が偶像礼拝に関わったことによる「不名誉」がモーセに及ばないようにするために、写本を作る者たちがモーセの名を隠そうとしたためと思われる(ジョン・ヘイリー)。しかしヘブル語では「モーセ」と「マナセ」の子音はほとんど変わらないため(MshhとMnshh)、写本製作者の単純なミスであるかもしれない。
15. (19:1-12) George Williams, *The Student's Commentary on the Holy Scriptures*, p. 132.
16. (19:22-24) Arthur E. Cundall, *Judges and Ruth*, p. 197.

参考文献(士師記、ルツ記)

- Atkinson, David. *The Message of Ruth: The Wings of Refuge*. Downers Grove, IL:InterVarsity Press, 1983.
- Barber, Cyril J. *Ruth: An Expository Commentary*. Chicago: Moody Press, 1983.
- Campbell, Donald K. *No Time for Neutrality*. Wheaton, IL: Scripture Press Publications, Victor Books, 1981.
- Cohen, A. “Joshua・Judges.” *Soncino Books of the Bible*. London: The Soncino Press, 1967.
- Cundall, Arthur E., and Morris, Leon. *Judges and Ruth*. The Tyndale Old Testament Commentaries. Downers Grove,

- IL: InterVarsity Press, 1968.
- Fausset, A. R. *A Critical and Expository Commentary on the Book of Judges*. London: James Nisbet Co., 1885.
- Grant, F. W. "Judges" and "Ruth." In *The Numerical Bible*, Vol. 3, Joshua to 2 Samuel. Neptune, NJ: Loizeaux Brothers, 1977.
- Jennings, F. C. *Judges and Ruth*. New York: Gospel Publishing House, 1905.
- Jensen, Irving L. *Judges/Ruth*. Chicago: Moody Press, 1968.
- Macintosh, C. H. *Genesis to Deuteronomy*. Neptune, NJ: Loizeaux Brothers, 1989.
- McGee, J. Vernon. *Ruth and Esther: Women of Faith*. Nashville: Thomas Nelson Publishers, 1988.
- Ridout, Samuel. *Lectures on the Books of Judges and Ruth*. New York: Loizeaux Bros., 1958.

ルツ記

序 論

「ルツ記は、士師記の後に解説されることが多い小編で、わずか85節から成るに過ぎないが、芳香と神秘的な花卉に満ちた一つのバラ園を内包している。それは現代の旅人がヨルダン川兩岸のイスラエルとモアブの孤独な廃墟のまわりに、咲き誇り、絡みつくバラを見出すのと同様である。この短い物語の意義と美しさは、そこに込められた思想、歴史的価値、あるいは純粹で魅力的な表現形式のいずれを考慮しても、高く評価しすぎるということはない。」

パウルス・カッセル (Paulus Cassel)

1. 正典における独自性

聖書の中の二巻が女性の名を冠したものであることは注目に値する。その女性のひとは名高い異邦人（アハシュエロス）に嫁いだユダヤ人の娘（エステル）であり、もうひとは名高いヘブル人（ボアズ）に嫁いだ異邦人の女性（ルツ）である。この二人の女性に共通するもう一つの重要なことは、二人とも神の救済史の一部であったことである。神はご自身の民を滅亡から救うためにエステルを用い、メシアの系図の重要なつながりとしてルツを用いられた。この系図は、まずダビデにつながり、最終的にはご自身の民を罪から救うキリストにつながる。マタイ1:5には、ボアズが異邦人ラハブの子孫である、と書かれているが、

エリコのラハブであることはほぼ間違いない。そしてもう一人の異邦人であるルツはボアズの妻としてキリストの系譜に連なる。ラハブもルツも神の恵みを表している。二人ともその民族的出自ゆえにイスラエルの共同体から排除されてもおかしくなかったからである。

マギー (J. Vernon McGee) が指摘しているように、「ルツ記は本質的に女性の物語であり、神の図書館に収めることによって、神はその物語に承認の印を押された」*⁽¹⁾のである。

ルツ記の魅力と美しさは、アメリカの政治家で発明家でもあったベンジャミン・フランクリン (Benjamin Franklin) にまつわる出来事によく表れている。フランクリンがフランスの宮廷に仕えていた時のこと、

彼は一部の貴族が聖書をけなし、「読むに値しない」「文体が洗練されていない」などと言っているのを耳にした。自らは信仰者ではなかったものの、アメリカの植民地で若き日を過ごしたフランクリンは、文学としての聖書のすばらしさに触れていた。そこで、フランス人を相手に一芝居打ってみることにしたのである。彼はルツ記を手で書き写し、固有名詞はすべてフランスの名前に変え、出来上がった原稿を、フランスのエリートたちが集まったところで読み上げた。人々はみなこの感動的な物語の気高さと素朴さに感嘆の声を上げた。

「シャルマン（すばらしい）！　ところで、ムッシュ・フランクリン、あなたはどこでこの珠玉の作品を見つけたのですか。」

「あなたがたがあんなにも蔑んでいる書物、つまり聖書からです」とフランクリンは答えた。その夜、パリでは恥ずかしさのあまり赤面する人が何人もいた。聖書に関して無知な今日の私たち自身の文化においても、神のことはおろそかにしていることに対して、同じように恥ずべきである。

II. 著者問題

ユダヤの伝統ではサムエルがルツ記の著者であるとされているが、著者の名前は不明である。この書はダビデで終わっているため、ダビデの時代以前に書かれた、ということはある得ない。ダビデを王とするために油を注いだサムエルなら、新しい君主の家系を示すためにこの書を書いた可能性は十分にある。

III. 執筆年代

ダビデの名前が4:17, 22に出てくるのは、ルツ記の歴史が頂点に向かっている時であ

るため、ルツ記が書かれたのは彼の治世中（紀元前1011年頃～970年）、または直後、あるいは少なくともサムエルが彼を王とするために油を注いだ後と思われる。

ジェンセン（Irving L. Jensen）は次のように記す。

ルツ記が書かれたのは、ダビデの後継者であるソロモンが王位に就く前であったと思われる。そうでなければ、著者はソロモンの名前を系図に含めたことであろう。つまり、著者はダビデと同時代の人物ということになる。^{*(2)}

しかし、中にはそれよりも少し後とする説もある。その理由のひとつは、商取引の際に、履き物を脱ぐ慣習を説明する必要性を著者が感じたからである（4:7）。このことは、その慣習とルツ記の執筆との間に一定の時間の経過があったことを示唆している。

IV. 背景と主題

ルツ記の出来事が起きたのは、さばきつかの時代である（1:1）。イスラエルの国民のほとんどが主から迷い出ている時代に、ルツという名の異邦の乙女がいて、その信仰が輝きを放っていた。

この書の鍵となることばは「贖い」（※日本語訳では「買い戻し」）である。もう一つは「近親者」または「親類」（※日本語訳では「親類」）で、12回も出てくる。ボアズは、エリメレクの所有だった土地を買い戻し、家名を継ぐ子孫を起こす贖いの親族である。彼は、真の贖いの親族であるキリストの型である。一方、モアブの女ルツは、キリストの驚くべき恵みによって贖

われた、キリストの花嫁なる教会を描いている。

構 成

- I. モアブに住む (1:1～5)
- II. ベツレヘムへの帰還 (1:6～22)
- III. ボアズの畑にきたルツ (2章)
- IV. ルツを買い戻す親戚 (3章)
- V. ボアズによる買い戻し (4:1～12)
- VI. オベデに遡るダビデ王家の系図 (4:13～22)

注 解

I. モアブに住む (1:1～5)

1:1, 2 この書は、飢饉のためユダ(「賛美」)のベツレヘム(「パンの家」)を離れて、死海の南東のモアブの地に定住した、あるユダヤ人の家族から始まる。両親はエリメレク(「私の神は王」)とナオミ(「快い」)であった。息子たちの名はマフロ(「病弱な」)とキル(「やつれた」)であった。モアブに移住するより、神を信頼してその地にとどまっていた方がよかったに違いない。エフラテ人の語根、エフラテとはベツレヘムの古名であり、「実り豊かな」という意味である。

さばぎつかさの時代の特徴は道徳的退廃であった。したがって、国土が飢饉に見舞われても驚くにはあたらない。飢饉は不従順に対する神からの懲らしめとして明言されていたからである。エリメレクはそもそも約束の土地を離れるべきではなかった。

ましてやモアブに居を構えるのは論外であった。申命記23:3～6を読んだことが一度もなかったのだろうか。なぜヨルダン川東岸のユダヤ人の同胞と共に定住しなかったのか。彼は自分の家族を生ける者の地から、いわば死と不毛の地へ導いてしまったのである(マフロンもキルヨンも子どもを残さなかった)。

1:3～5 エリメレクが死んだ後、二人の息子はモアブの女を妻に迎えた。マフロンはルツと結婚し(4:10)、キルヨンはオルパを妻とした。実際、申命記7:1～3には、イスラエル人が結婚してはならない相手としてモアブ人は名指しされていないが、後の記述から、彼らがその律法の中に含まれていたことは明らかである(エズラ9:1, 2, ネヘミヤ13:23～25)。それだけでなく、律法は、モアブ人を十代目まで主の会衆に迎えてはならない、とも定めていた(申命記23:3)。後で見るように、ルツの場合は恵みによってそれが無効にされ、彼女の子孫であるダビデがイスラエルの王になることが許されたのである。

それから約十年が経ち、マフロンとキルヨンの二人もまた死んだ。こうしてナオミに残されたのは、二人の外国人の嫁、オルパとルツだけになった。

II. ベツレヘムへの帰還(1:6～22)

1:6～15 ナオミはユダには食糧が豊富にあると聞き、ユダに戻ろうと決心した。二人の嫁もナオミに同行しようとした。しかし、ナオミは、モアブにあるそれぞれの家に帰りなさい、と促し、自分には彼女たちの夫として与えられる息子はもういないと言って聞かせると、オルパは姑に別れの口づけをして戻って行った。

ここで、やもめになった三人の態度の違

いに注目してみよう。ナオミは神のさばきにより、夫や家族という地上の喜びを奪われた、悲しむ (grieving) やもめであった。オルバは、義母のことばを冷静に考え、一番簡単で都合の良い道を選び、結局は去り行く (leaving) やもめとなった。しかし、ルツは、ナオミがどれだけ反対しても、ナオミから離れない (cleaving) やもめであった。ルツがナオミとの新しい人生を選択したとき、それが生易しいものではないことは分かっていた。彼女たちを養ってくれる男性がいるわけではないので、厳しい労働と貧困が待ち受けていた。そればかりでなく、故郷や愛する人々との別れもあった。

1:16, 17 しかし、それでもルツはナオミから離れようとはしなかった。旧約聖書で、異邦人が発した最も気高いことばの一つがここにある。その中で、ルツはナオミに全面的な献身の姿勢を示した。ルツは行き先、住む場所、民、神だけでなく、埋葬地までもナオミと同じにすることを選んだのである。

1:18~22 神に起因する「偶然」により、ナオミとルツがベツレヘムに到着したのは、大麦の刈り入れが始まったころ、すなわち (キリストの復活を予表する) 初穂の季節であった。町中の人々がナオミとの再会に興奮し、ナオミの名前を呼んで心から歓迎した。

ナオミは彼女たちに言った。「私をナオミ (「快い」と呼ばないで、マラ (「苦い」と呼んでください)。彼女は満ち足りて (すなわち「夫や息子たちとともに」) 出て行ったものの、主は素手で (すなわち「子のいないやもめとして」) 帰されたから、と。それは私たちの場合も同様である。私たちは自ら信仰後退の道をたどることがあるが、主は私たちを手ぶらで、そして多くの場合、厳しい懲らしめを通して連れ戻してください

るのである。

III. ボアズの畑に來たルツ (2章)

2:1~3 律法の下では、イスラエルの民は収穫時に畑をきれいに刈り取ってはならなかった。むしろ穀物の一部を、貧しい人、寄留者、孤児、寡婦のための落ち穂として残さなければならなかった (レビ記 19:9, 23:22、申命記 24:19)。

ルツはこの律法を利用して、大麦畑に行き、これらの落ち穂を集めようと決意した。ルツが、亡くなった義父の裕福な親戚でボアズ (「彼には力がある」) の畑に行き着いたのは、幸運ではなく、神のお計らいによるものであった。

2:4~12 ボアズはベツレヘムから到着すると、その若い女性が誰なのか尋ねた。ボアズは、彼女がナオミの嫁であることを知ると、畑で落ち穂拾いを続けるように、また雇い人のために用意された水を分けてもらうように、親切に勧めた。ボアズは、ルツが取った忠実で無私の行動を称賛し、最後に彼女のために短い祈りを捧げた。「主があなたのしたことに報いてくださるよう。あなたがその翼の下に身を避けようとして來たイスラエルの神、主から、豊かな報いがあるように」と。

レオン・モリス (Leon Morris) は次のような解説をほどこしている。

その祈りは、やがてそれを口にしたボアズ本人を通して答えられた。ボアズは、ルツがヤハウエの御翼の下に身を避けた、と言って、国籍を変えた信仰姿勢を評価した。この比喩は、幼い鳥が母鳥の翼の下にもぐりこもうとする様子を表したものである。それは信頼と安心を生き生

きと描くものである。^{*(3)}

ルツは、ユダヤ人であるボアズが一人の異邦人にこれほどの分不相応な好意を示してくれたことに驚くばかりであった。しかしそれにはもっともな理由があった。ボアズは、ルツがナオミにした親切と、ユダヤ人の信仰に改宗していた経緯をすでに聞いていたのである。

2:13~16 ボアズはルツにひどく感心し、雇い人たちと同じ場所で食事をするように招き、刈る人たちには、ルツのために刈り取った穂をわざと抜き落としておくように指示した。

2:17 その日の終わりに、ルツが拾った落ち穂を打つと、大麦が一エパほどあった。あり余るほどの量である。私たちはみことばを学ぶ際にもこうしなければならない。つまり、理解した貴重な真理を自分のものとし、それを実践しなければならない。

ボアズにはキリストのすばらしさの多くが表れている。ボアズは大富豪であった(1節)。彼は、自分の好意を受ける権利のないよ者に同情した(8,9節)。ルツが彼に会う前からルツのことをすべて知っていた(11節)。それは、私たちが主を知る前から主が私たちのすべてをご存じであるのと同じである。ボアズはルツに親切を尽くし、その結果、ルツの必要はすべて満たされた(14節)。ボアズはルツに将来にわたる保護と豊かさを与えた(15,16節)。このような恵みの行為の中に、私たちを〈贖う親戚〉である御方の私たちに対するあわれみの予兆を見ることができる。

2:18~23 ルツがその穀物を家に持ち帰り、ナオミに一部始終を告げると、この賢明なユダヤの老婦人は、主のご計画が順調に展開されていることを知った。彼女はボアズが亡夫の近親者であることを知って

おり、主がルツ、また自分のためにすばらしい働きをされることを感じ取っていた。そこでナオミはボアズの畑で落ち穂拾いを続けるように励ました。

ナオミがボアズの畑にとどまるように勧めたのは賢明であった。ボアズが恵み深い人物であると分かった以上、ルツが他人の畑に行くようなことをして彼を侮辱したり、彼の保護を拒絶したりする必要がどこにあるだろうか。私たちも、主が約束された備えと保護から離れて、世俗的な楽しみの畑に迷い込むべきではない。

IV. ルツを買い戻す親戚(3章)

3:1~5 ナオミはルツが身の落ち着き所、つまり夫と家庭を見つけることを切に願っていた。そこで、彼女は自分の結婚と財産の権利を放棄し、代わりに、ある夜、ボアズが大麦をふるい分けているときにルツが打ち場の下って行くように勧めた。

ルツはイスラエルの慣習に疎かったので、どうやって近親者に保護とレビレート婚(※夫と死別した子がいない妻が、血筋を絶やさないため、夫の兄弟と結婚するという習慣)を求めるにはどうしたらよいか、詳しく教えてもらう必要があった(*"Daily Notes of the Scripture Union"*)。

3:6, 7 そこでボアズが仕事を終え、食べたり飲んだりして寝ると、ルツはボアズの足もとをまくり、そこに寝た。このようなことをするのは、私たちの文化では非常に思えるかもしれない。しかし、当時は一般的に受け入れられた慣習だった(エゼキエル16:8参照)。したがって、何ら不道徳や思わせぶりの意味はなかった。

3:8~11 夜中になって目を覚ましたボ

アズは、ルツが自分の足もとに寝ているのに気がついた。彼女はボアズに買い戻しの権利のある親類としての役割を求めたが、ボアズは叱責するどころか、彼女を祝福した。ここで覆いと訳されている同じ語の複数形が2:12では〈翼〉と訳されている。ボアズは、ヤハウエに避け所を求めてきたルツを称賛した。ヤハウエの律法に従って彼に避け所を求めた彼女をどうして拒むことができようか。その上、ルツはしっかりした女、つまり、その値打ちが宝石よりもはるかに価値のある（箴言31:10）女性のひとりだったのである。ボアズはルツの誠実さを称賛し、今回の誠実さ（ボアズに対するルツの個人的な献身）は、先の誠実さ（ナオミと一緒にいるために家と家族を捨てたこと）にまざっている、と言った。

モーセの律法は、男が子どもを残さずに死んだ場合、近親者がその寡婦と結婚することを義務づけていた（申命記25:5～10）。こうして家名を永続させ、土地を一族に残すのである。特に重要なのは、息子がいないまま男が亡くなった場合、誰かがその寡婦と結婚することであり、それによって息子が生まれ、家名が受け継がれることだった。

ルツにはもちろん子どもがいなかった。ボアズは（ルツの亡夫）エリメレクの親戚であったので、ルツと結婚することで買い戻しの権利のある親戚としての務めを果たす資格があった。しかもボアズは資格があっただけではなく、それを望んでいたのである。

3:12, 13 しかし、法的には面倒な問題が一つあった。ボアズよりもっと近い、買い戻しの権利のある親類がいて、そちらの方に優先権があったのである。もしこのもっと近い親類が買い戻しの権利のある親類としての務めを果たす気がなければ、ボ

アズがそうすることになる。この問題は朝には決着がつくはずであった。

3:14～18 ルツは朝まで彼の足もとで寝た。ボアズはルツの外套に大麦六杯を注いで満たした。これはルツに彼の深い愛を確信させ、ナオミに対しては、彼が滞りなくこの件をやり遂げるという証拠となった。

ルツは気高い女性であり、もとよりボアズの親切に値する女性であった。しかし私たちは主の親切に値しない罪人であった。ところが、主は私たちの上にその覆いを広げ、ありのままの私たちを受け入れてくださったのである。主は私たちに多くの祝福を与え、「結婚」の完結のために再び来られる、という希望の約束を与えてくださった。私たちの救いは確定し、みわぎは完了した。しかし、〈一体〉とされるという完全な至福に入るには〈花婿〉の帰還を待たなければならない。

これまでの一部始終を聞いたナオミは、ルツにじっとして、この複雑な一連の出来事の結果を待つように言った。

これは多くの場合、信仰の最も困難な部分である。もはや取るべき行動はなく、あとは神の御心が実現するのを辛抱強く待つことしかないからである。まさにそのようなときに疑念が生じ、不安が忍び寄る（“*Daily Notes of the Scripture Union*”）。

V. ボアズによる買い戻し（4:1～12）

4:1～6 朝になるとボアズは町の門のところへ上って行った。そこは長老たちが座し、法的な決裁がなされる場所である。すると、ちょうど——これもまた計画され

た「偶然」であったが——あの買い戻しの権利のある親類がその瞬間にそこを通りかかった。「友よ」(英訳)^{* (4)}と呼びかけ、しばらく立ち止まってくれるように頼むと、ボアズは長老十人を前にしてナオミとルツの話をした。それから買い戻しの権利のある親類に、エリメレクがモアブに行くときに抵当に入れたと思われるエリメレクの畑を買い戻す機会を与えた。名前が明らかにされないこの親戚は、この時点まで乗り気であった。しかし、ボアズが、その土地を買う者はモアブの女ルツも引き受けなければなりません、と告げると、それでは自分自身の相続地を損なうことになる、と言って引き下がった。

彼がルツの地所を守るためには時間と労力を割かなければならず、その結果、自分自身の地所をおるそかにすることになりかねない。最終的には、その地所は彼の相続人ではなく、ルツの相続人の手に渡ることになる。^{* (5)}

(ボアズより) 近い親戚の名前が割愛されていることに関して、マシュー・プール(Matthew Poole) はこう書いている。

ボアズが彼の名前を知っていて、その名で呼びかけたことは間違いない。しかし、その名は聖なる著者によって省かれた。それを知る必要がなかったからでもあるが、主な理由は、このような場合の常として、侮蔑的な意味があったため、また自分の兄弟の名を残そうとしない者は、自分の名を失うこともありうる、という、正当な罰の意味があったためである。^{* (6)}

この、(ボアズより) 近い親類は〈律法〉

を象徴している、と広く受け止められている。十人の証人(十戒)は、律法には罪人を贖う力がないことを追認している。「律法は、それが罪に定める者を贖うことができない。それは律法自身の目的に反するからである」。^{* (7)} 律法に贖う力がないのは、それが肉によって無力になっているためである(ローマ8:3)。

より近い親類が拒否したことによって、次の優先順位にあったボアズは、晴れてルツと結婚できることになった。

4:7, 8 当時、買い戻しや権利の譲渡をする場合、すべての取り引きは、一方が自分の履き物を脱いで、それを相手に渡すことによって認証された。律法では、寡婦が、買い戻しを拒んだ親戚の履き物を脱がせ、その顔に唾(つばき)する、ということまで具体的に定められていた(申命記25:9)。この場合は、近親者は自分の履き物を脱いでボアズに渡すだけで済んだ。

4:9~12 ボアズは、履き物を受け取るとすぐに、自分がエリメレクの地所を買取り、モアブの女ルツと結婚する、と宣言した。すると群衆はボアズを祝福し、ラケルとレアの場合のように、その子孫が多くなるように、と願った。ユダによるタマルの子、ペレツについての言及は、その物語の恥ずべき側面を無視し、イスラエル人と異国人とのレピレート婚のもう一つの事例であったという事実には焦点を当てている。

VI. オベデに遡るダビデ王家の系図 (4:13~22)

4:13~16 ボアズはルツと結婚し、彼女はオベデ(「しもべ」と名づけられた男の子を産んだ。ナオミはその子を自分の子とし、彼の乳母となった。

4:17~22 オベデは後にダビデの父エ

ッサイの先祖となった。こうして本書はダビデ（「愛されし者」）の短い系図で閉じられるが、それはもっと大きな系図、すなわちダビデの偉大な〈子〉、主イエス・キリストの系図の一部となる（マタイ1:1）。この系図は完全なものとして意図されてはいない。サルマは士師の時代の初めに生き、ダビデは王政の初めまで生まれていないからである。その期間はほぼ四百年に及ぶ。聖書では、名前が意図的に省略されることが多い。

この短い系図がダビデで終わることにより、読者は王政と、書順で次の書であるサムエル記第一、第二を学ぶ備えができる。

後 注

1. (序論) J. Vernon McGee, *Ruth and Esther: Women of Faith*, p. 15.
2. (序論) Irving L. Jensen, *Judges/Ruth*, p. 80.
3. (2:4-12) Leon Morris (with Arthur E. Cundall), *Judges and Ruth*, pp. 276, 277.
4. (4:1-6) ここのヘブル語は微妙な意味合いを含む。その男性の名前を言わずにすむように、聖書本文では「某氏」「誰それ」という言い方をしている。
5. (4:1-6) 出典不明
6. (4:1-6) Matthew Poole, *Matthew Poole's Commentary on the Holy Bible*, p. 511.
7. (4:1-6) 出典不明

参考文献

士師記の参考文献を参照のこと。

サムエル記第一

序 論

「サムエル記第一は、その面白さにおいて他の追隨を許さない。それは波乱に満ちた歴史を語るだけでなく、三人の個性的な人物、サムエル、サウル、ダビデの伝記が織り込まれた波乱の歴史であり、各章はこの三人を中心に構成されている。」

J. シドロー・バックスター (J. Sidlow Baxter)

I. 正典における独自性

サムエル記第一、第二がなければ、旧約聖書の正典に大きな空白が生じてしまう。もともと一巻の書物であったサムエル記は、七十人訳では便宜上二巻に分割された。それ以来、印刷されたヘブル語聖書を含む旧約聖書のあらゆる版本がこれに倣っている。

サムエル、ダビデとゴリヤテ、ダビデとヨナタン、ダビデのサウルからの逃亡、メフィボシェテへの親切、息子アブサロムの反乱と死に対する悲しみに、ユダヤ人であるかクリスチャンであるかは問わず、数え切れないほど多くの子どもたちが魅了され、啓発されてきた。

教義的なレベルでは、円熟した読者は、ダビデ契約のみならず、ダビデのバテ・シェバとの罪の恐るべき類似点が、その息子たちの間に生じていることを学んできた。

サムエル記第一、第二は、士師記からダ

ビデの王統が完全に確立されるまでの隔たりを埋めるものであり、イスラエルの歴史の中で特別な位置を占めている。

II. 著者問題

ユダヤ教の伝統では、サムエルが、今はサムエル記第一、第二に分かれている書物の著者とされているが、それはサムエルが存命中の出来事 (1:1～25:1) に限られる。

*⁽¹⁾ これらの書に書かれている内容の多くは、預言者サムエルの死後の出来事である。

サムエルに師事した若い預言者の一人が、師の著作を取り入れながら書いた可能性もある。もう一つの可能性は、綿密な記録をつけることに慣れていた祭司エブヤタルがこの書を編纂したということである。彼はダビデの経歴と密接な関係があり、ダビデと共に亡命生活を送ったこともある。

III. 執筆年代

サムエル記の年代を特定することは不可能である。初期の部分は紀元前1000年頃のものと考えられる。イスラエルの捕囚（紀元前722年）について何も言及されていないという事実から、それ以前の年代であることは間違いない。「イスラエル」と「ユダ」への言及は、王政がこの二つに分裂した紀元前931年以降でなければならないという説もある。しかし、このような用語は、政治的分裂以前にも使われていた可能性がある。アメリカの歴史において、「ヤンキース」と「サウスロン（南部人）」という用語が1861年の分離独立以前に使用されていたのと似ている。

IV. 背景と主題

サムエル記第一、第二は、紀元前12世紀から10世紀初頭までの、神のイスラエルに対するお取り扱いをたどっている。サムエル（預言者であり士師）、サウル（拒絶された王）、ダビデ（羊飼いの王）が、物語を構成する主要人物である。

サムエルは、士師の時代を終わらせ、王の時代を始めるために神によって起こされた。彼が生きた時代は、エリとその息子たちに代表される祭司職が廃れ、預言者の働きが始まった時代であった。サムエル自身は最後の士師であり、この時代の最初の預言者（聖書で最初の預言者ではない——創世記20:7）であり、イスラエルの最初の王に油を注いだ人物である。彼はレビ人であったが、アロンの家系ではなかった。しかし、神のご裁可を経て祭司として仕えたようである。彼の心は清く献身的であったが、エリの心は不純であり、不従順であった。

サムエル記のテーマは、イスラエルの真の王である神が、民の求めに応じて、まずサウルに、次にダビデとその血統に王権を委任されたことである。ユージン・メルリ（Eugene Merrill）は、この書物を聖書全体のテーマと次のように見事に結びつけている。

さらに、ダビデの王家を通して、ダビデにまさる御子であるイエス・キリストが、ついに受肉されるに至った。キリストはご自身の生涯においてその王権を完全に行使され、その死と復活において、信じる者すべてがキリストとともに、またキリストを通して統治するための土台を提供されたのである（Ⅱサムエル7:12～16、詩篇89:36～37、イザヤ9:7）。*⁽²⁾

構 成

I. サウルが油注がれるまでのサムエルの奉仕（1～9章）

- A. サムエルの誕生と幼年時代（1章）
- B. ハンナの歌（2:1～10）
- C. エリとその邪惡な息子たち（2:11～36）
- D. サムエルの召命（3章）
- E. 神の箱（4～7章）
 - 1. 奪われた神の箱（4章）
 - 2. 神の箱の力（5章）
 - 3. 取り戻された神の箱（6、7章）
- F. 求められ、選ばれた王（8、9章）

II. サウルの治世と拒絶（10～15章）

- A. 油注ぎと確認（10、11章）

- B. 民への叱責と告発 (12章)
- C. 不従順と拒絶 (13～15章)
 - 1. サウルの罪深いいけにえ (13章)
 - 2. サウルの軽率な誓い (14章)
 - 3. サウルの不徹底な従順 (15章)

III. サウルの死までのダビデの生涯 (16～30章)

- A. サムエルによる油注ぎ (16:1～13)
- B. サウルに仕える (16:14～23)
- C. ゴリヤテを倒す (17章)
- D. ミカルとの結婚 (18章)
- E. サウルからの逃走 (19～26章)
 - 1. ヨナタンの忠誠 (19, 20章)
 - 2. ダビデに対するアヒメレクの温情 (21章)
 - 3. ダビデの逃亡とサウルによる祭司たちの虐殺 (22章)
 - 4. ケイラの裏切り (23章)
 - 5. 死を免れたサウル (24章)
 - 6. ナバルの愚行 (25章)
 - 7. またもや死を免れたサウル (26章)
- F. ペリシテでの生活 (27～30章)
 - 1. ツィクラグの獲得 (27章)
 - 2. サウルの破滅の予告 (28章)
 - 3. アキシュに解任されたダビデ (29章)
 - 4. アマレク人の敗北 (30章)

IV. サウルの死 (31章)

注 解

I. サウルが油注がれるまでのサムエルの奉仕 (1～9章)

A. サムエルの誕生と幼年時代 (1章)

1:1～10 サムエル記第一の冒頭は、エルカナ、そして彼の二人の妻ハンナ（「恵み」とペニンナ（「真珠」）を紹介することから始まる。彼はエフライムのラマタイム出身のレビ人であった。そのため、1節ではエフライム人と呼ばれている（I 歴代誌6:22～28）。忠実な歴史記録として、聖書は一夫多妻制の慣行に言及しているが、決してそれを認めてはいない。レアとラケルがそうであったように、一人の妻は子宝に恵まれたが、もう一人の妻は不妊であった。ハンナには子どもがいなかったが、彼女の方が夫に愛されていたため、このことが家庭内での対立を引き起こした。家族が祭りの一つを祝うために、毎年シロに行くとき、ハンナは交わりのいけにえの二倍の分け前をもらっていた（3～5節）。しかし、このことがペニンナからの痛烈な嘲りを招いた。年を経るごとに、その辛辣なことは、ますます深く突き刺さった。ついにハンナは、絶望に打ちひしがれて、幕屋で主の御前にこの問題を訴えた。

1:11～18 ハンナは、もし神が男の子を与えて下さるなら、…その子を…主にお渡しします、と誓った。その子は生まれた時からナジル人となる。ホール司教 (Bishop Hall) はこう勧める。

どのような恩恵を得るにも、それを神に願う私たちが、神の栄光のために心の

中でそれを献げることだ。そうすることによって、神はそのしもべを喜ばせ、ご自身も栄光を受けるのである。^{*(3)}

老祭司エリは、ハンナの唇が動くのを見て、**酔っているのだ**と思った。しかし、ハンナが自分の行動を説明するや否や、彼は彼女の真剣さを感じ取り、彼女を祝福し、平安のうちに送り出した。ハンナは自分が**身体的に不妊である**ことを心配した。私たちは自分が**霊的に不妊である**ことを嘆くべきである。

1:19~28 祈りが聞き入れられたとき、ハンナはその赤子をサムエル（「神に聞かれた^{*(4)}」）と名づけた。それは主に求めた子だったからである。サムエルが乳離れすると、彼女は彼を主の家に連れて行き、決定的な献身の行為として、彼を**主におゆだね**した。少年は最初から祭司たちを手伝い、主の前で奉仕した。28節の最後の語句（「彼ら」）にはサムエルが含まれている。彼はすでに礼拝者であった。非常に幼かったが、主の奉仕に生涯を献げていたからである。

B. ハンナの歌 (2:1~10)

エルカナの妻と息子の献身は、エリの家族の墮落とは対照的である。息子を主に捧げた後、ハンナは感謝の気持ちを注ぎ出した。彼女のことばには、神、神のご性質、神のわざについての深い知識が表れている。この祈りは、ペニンナがハンナに言った多くの悪意あることばに対してペニンナを叱責しているように見えるが、預言的には、この家庭内の口論を越えて、イスラエルが敵に勝利し、最終的にキリストが支配されることにまで及んでいる。しばしばマニフィカトと呼ばれるマリアの歌（ルカ1:46~55）が、ハンナの歌の知識から影響を受けているのは明らかである。

C. エリとその邪悪な息子たち (2:11~36)

2:11~17 物語は、エリのよこしまな息子たちに移る。彼らは信仰によって救われていなかったという意味で、**主を知らなかった**。彼らには三つの罪が問われている。彼らは胸肉ともも肉だけでは満足せず、民から交わりのいけにえの取り分を奪った（レビ記7:28~34参照）。彼らは**脂肪**が神に献げられる前に**肉**を要求し、律法を無視した。最後に、肉を煮る代わりに焼こうとし、自分たちの肉欲を優先した。誰かが抗議しようとする、彼らは**力づくで肉を奪った**。彼らの罪は**非常に大きかった**。主へのささげ物を軽蔑的に扱ったからである。

2:18~21 彼らの邪悪さとは対照的に、幼子サムエルは献身的で、サムエルの両親は**毎年**の祭りに忠実であった。ハンナの胎の初穂は主に献げられたので、彼女は**三人の息子と二人の娘**に恵まれた。これは、「与えなさい。そうすれば与えられます」（ルカ6:38参照）という主の約束の良い例証である。

2:22~26 エリは不品行の報告を聞いて、ようやく息子たちを叱責した。しかし、その穏やかなことばによる叱責が効果を発揮するにはあまりにも遅すぎた。息子たちは心を頑なにしたので、さばきとしてさらに頑なにされた。昔のファラオのように、神は彼らを滅ぼそうと決められたからである。この間、サムエルは静かに成長し、その純粋さと善良さは、主にも人にも喜ばれた。これらの出来事が起きたのは士師の時代であることを思い起こせば、祭司職がその時代の道徳的退廃から逃れられなかったのも不思議ではない。

2:27~36 主がエリを叱責された厳しさは、エリが自分の息子たちを叱責した生ぬるさと好対照をなしていた。一人の名も

なき**神の**人が現れ、エリの祭司一家の滅亡を告げた。預言者はまず、神がアロンの家族を祭司として召されたこと、そして彼らの糧としていけにえの肉を惜しみなく与えられたことを振り返った。そして、神の要求よりも息子たちの食欲を第一にさせたエリを叱責した(29節)。祭司職を永続させるという主の以前の約束は、祭司たちが善良な人格者であることを前提としていた。しかし、エリとその家の悪行のゆえに、彼らはもはや祭司の務めを果たすことを許されず、彼の一族は誰も老齢に達することなく、シロの聖所は朽ち果て、エリの子孫は悲しみと恥辱にさらされる。さらに、ホフニとピネハスは、これらのさばきがすべて起こるしるしとして、**同じ日に死ぬ**。

エリの家破滅は、次のように実現した。サウルがアヒメレクとその息子たち(エブヤタルを除く)を殺害したこと(31節、22:16~20)、ソロモンがエブヤタルを祭司職から追放したこと(32,33節、I列王記2:27)、そしてホフニとピネハスの死である(34節、4:11)。エリはイタマルの家系の出身で、後にエブヤタルがソロモンによって解任されたとき、祭司職は最初からそうであるべきだったように、エルアザルの家系に回復された。エリの子ピネハスは、アロンの孫ピネハスと混同してはならない(民数記25:7,8)。

35節で約束されている**忠実な祭司**とは、ダビデとソロモンの時代に祭司を務めたエルアザル家のツアドクである。彼の祭司職は、キリストの千年王国時代も存続する(エゼキエル44:15)。しかし、エリの子孫は、主に仕えるためではなく、単に食べていくための手段として祭司職を望むことだろう(36節)。多くの人は、35節の忠実な祭司にメシア的な暗示を見るが、それは「**いつまでも**」ということばに基づくもの

でもある。

D. サムエルの召命(3章)

3:1~3 サムエルがシロの幕屋で主に仕えていた頃、主のことばはまれであった。つまり、主が幻の中で人に語られることは減多になかった。ウィリアムズ(George Williams)は最初の3節で、イスラエルの道徳的な状況を描いている。

夜が支配していた。神のともしびが神殿で消えようとしていた。大祭司の目はかすみ、はっきり見えず、彼もサムエルも眠っていた。^{*(5)}

神のともしびとは、日の出とともに消される燭台のことを指している。

3:4~9 ある夜、朝が来る少し前、サムエルは自分を呼ぶ声を聞いた。彼はエリだと思ったが、祭司は呼んでいなかった。サムエルは、これまで主から直接、個人的な啓示を受けたことがなかったという意味ではまだ主を知らなかった(7節)。サムエルがさらに二度その声を聞いた後、エリは主がサムエルを呼んでおられるということ**を悟った**。老祭司は少年に、再び声を聞いたら、「主よ、お話しください。しもべは聞いております」と答えるように言った。

3:10~14 主が四度目に呼ばれたとき、サムエルは、「お話しください。しもべは聞いております」と答えたが、「主」ということばが抜けてしまったようである。主のメッセージは、以前にエリとその家に対して語られたさばぎを確証するものであり、そのさばぎにはイスラエルの敗北と契約の箱が奪われることも含まれていたかもしれない。父親も息子たちと同じくらい責任があつた。息子たちを制止せず、罪から立ち返らせることもしなかったからである。彼

らはただ叱責されるだけではなく、冒瀆の罪で死刑に処せられるべきだった。いけにえで彼らの咎を償うことはできなかった。彼らの運命は定まり、二人の証人の口によってエリに確認された。神の人（2章）と少年預言者サムエル（14節）である。

3:15~18 サムエルは当初、主が言われたことをエリに伝えるのをためらったが、厳粛な誓いが立てられたことを受けて、迫り来るさばきを祭司に明かした。エリはその知らせを素直に受け入れた。彼はその宣告に神の正義が示されていることを理解した。アロンの子らをその不敬虔（レビ記10章）のゆえに罰した神が、ホフニとピネハスをさばかないままにされることがあるだろうか。

3:19~21 やがて、主がサムエルとともにおられることが、ダンからベエル・シェバに至るまで知られるようになり、全イスラエルはこの若者が主の真の預言者であることを認めた。

E. 神の箱（4~7章）

1. 奪われた神の箱（4章）

4:1~4 次の3章では、主の契約の箱が敵地に出入りする様子が描かれる。神はペリシテ人の間ではご自分の名誉を守られたが（5章）、イスラエル人の間では、彼らが神を敬わなくなったため、彼らを守ろうとはされなかった。彼らはエベン・エゼルでペリシテ人との戦いに出たものの、四千人の兵士を失った。長老たちは形勢を逆転させようと、契約の箱をシロから陣営に運び込ませた。

4:5~11 イスラエルの人々は契約の箱を見て大いに喜び、ヤハウェの御力を知っていたペリシテ人は大いに恐れた。しかし彼らは勇気を奮い起こし、再び戦いの場に戻った。驚いたことに、イスラエルは逃げ

去り、三万の歩兵は殺され、祭司ホフニとピネハスも殺され、神の箱そのものも奪われた。

4:12~22 一人の伝令がシロに戻り、神の箱が奪われたことをエリに告げたとき、老祭司はあおむけに倒れ、首を折って死んだ。この悪い知らせにより、ピネハスの妻は陣痛が始まり、出産中に死んだ。義父と夫の死を聞いても、契約の箱がペリシテ人の手に落ちたという知らせほどの動揺はなかったようだ。彼女は死に際に、「栄光がイスラエルから去った」と言って、息子をイ・カボデ（不名誉）と名づけた。

2. 神の箱の力（5章）

5:1~5 ペリシテ人は神の箱をエベン・エゼルからアシュドデに運び、ペリシテ人の国神であったダゴンの神殿に安置した。ダゴンは、聖書によく出てくるもう一つの偶像、バアルの父とされていた。神の箱をペリシテ人はダゴンの像と同等と考え、ダゴンの像のそばに置いた。しかし、朝になって彼らが神殿に戻ると、ダゴンは主によって箱の前に、地にうつぶせになって倒されていた。この出来事の意味を理解しないペリシテ人は、再びダゴンを神の箱のそばに据えた。しかし翌朝、どちらが強いかは疑いの余地がなかった。ダゴンの頭と両手が切り離されていたからである。ダゴンが本物の神であったなら、自分の身を守ることができたはずである。ダゴンの信奉者たちは事実を直視すべきだったが、そうせずに、彼らはダゴンの敷居を踏まない、という迷信的な規則を作ったのであった。ダゴンはイスラエルの神と対決したが結果は悲惨であった。サムソンはガザにあるダゴンの神殿を破壊した。神は、ペリシテの貴族の上に建物全体を引き倒す力をサムソンに与えられたのである（士師記16章）。こ

ここでは、ヤハウエご自身がダゴンの像を損なうことによって、偶像には知恵（頭）も力（手）もないことを示された。

5:6～9 偶像だけでなく、アシュドデの人々自身も主の不興を買い、混乱し、腫れ物や腫瘍に苦しみ、死に至った。絶望に駆られたペリシテ人は、**神の箱**を別の大都市**ガテ**に移すことにした。ここでもまた、人々は**腫物**に苦しんだ。

5:10～12 **神の箱**が**エクロン**に送られると、人々は非常に恐れたが、その恐れは正しいものだった。多くの人が**死の恐れ**によって命を落としたからである。死ななかった人々には**腫物**が発生した。彼らは、**神の箱**をイスラエルに送り返すように懇願した。

3. 取り戻された神の箱（6、7章）

6:1～6 わずか七か月の間に、ペリシテ人は、**神の箱**に対し正当な恐れを抱くようになった。彼らはそれをイスラエルに返したいと考えたが、それ以上のさばきを避けるために、正しい方法で返そうとした。そこで、彼らは異教の**祭司**や**占い師**に相談した。彼らは、**五つの金の腫物**、つまり**五匹の金のねずみの償い**のもので**神の箱**を返すことを提案した。これらの人々の間では、**神々**をなだめ、自分たちの間に**破滅**をもたらしたものを供えて償いをするのが一般的であった。ねずみに言及されていることから、聖書研究者たちは、町々を襲った疫病は、ねずみにつuitたノミが媒介する腺ペストではないかと考えている。祭司たちはさらにエジプトがヤハウエの手によってたどった運命を思い起こさせ、エジプト人やファラオのように**心を硬く**せず、**神の箱**を正しい場所に戻すためにあらゆる努力をするよう強く勧めた。

6:7～12 ペリシテの祭司たちは、彼ら

に起こったことが単なる偶然ではなく、ヤハウエのさばきであることを確認するために、**神の介入**を証明する詳細な計画で帰路の行程を手配した。荷車を引くための二頭の雌牛には子牛がいた。子牛を置き去りにするのは自然の本能に反する。牛はくびきを付けたことがなかったが、右にも左にもそれることなく、しっかりとくびきをつけて引張った。牛たちは誘導なしに、まっすぐユダの領土にある**ベテ・シェメシュ**に向かった。

6:13～18 **神の箱**が近づいたとき、**ベテ・シェメシュ**の人々は刈り入れをしていた。何という光景だろう。二頭の牛だけで、**神の箱**をイスラエルに運んできたのである。大歓喜が起こった。荷車は火を焚くために使われ、雌牛は全焼のささげ物として主に献げられた。**神の箱**と罪過のささげ物を入れた鞍袋は、大きな石の上に置かれた。

ベテ・シェメシュの牛の話には、**霊的な類似点**がある。宣教師も、家や家族を離れ、右にも左にも曲がらず、主が導かれるところに主のメッセージを運ぶ。不信者は主のことを聞いて喜ぶ。宣教師たちには奉仕と犠牲の覚悟ができています。

6:19～21 しかし、**ベテ・シェメシュ**の人々は**神の箱**を聖なるものとして扱わず、**神の箱の中**をのぞき込んだ。その結果、神は彼らのうち五万七百人を打たれた。神の箱が自分たちの中に残ることを恐れた人々は、**キルヤテ・エアリム**の人々に**使者**を送り、**神の箱**を持って行くように頼んだ（ベテ・シェメシュに五万七百人の男がいたかどうかは疑わしい。ヨセフス^{*⁽⁶⁾}、カイルとデリッチ^{*⁽⁷⁾}、その他多くの権威者は、五万人という数字は多くのヘブル語写本に欠けているので、本文は単に七十人と読むべきであると言っている）。

7:1～6 **神の箱**は**キルヤテ・エアリム**

のアビナダブの家に運ばれ、そこに二十年間置かれた。それからサムエルが進み出て、主に立ち返るよう民を促した。神がペリシテの圧制者から民を解放してくださるためである。偶像は投げ捨てられ、民はミツパのサムエルのもとに集まった。そこで彼らは断食し、ヤハウェの前で悔い改めた。彼らの悔い改めは、大地に水を注ぐことによって象徴された。

7:7～14 イスラエルの民がミツパにいると聞いて、反乱が起ころうとしていると思い込んだペリシテ人は攻撃してきた。戦争の備えをしていなかったヘブル人は恐怖におののいた。彼らはサムエルに執り成しを懇願し、サムエルは全焼のささげ物を献げ（レビ人でもできたこと。I 歴代誌23:26～31）、祈った。すると、神は奇跡的に大きな雷鳴で敵を敗走させ、イスラエルは勝利を収めた。サムエルは感謝して石碑を建て、「エベン・エゼル」（助けの石）と名づけた。13節は、この節の最後の部分と9章16節から明らかなように、一時的な勝利を指しているにすぎない。この時、一部の土地も回復され、イスラエルはしばらくの間、隣国との平和を享受した。

7:15～17 この後、サムエルは巡回裁判官となり、イスラエルの町々を巡回して、主の律法にしたがってさばきを行った。彼は父の家であるラマに住み、そこに祭壇を築いた。なぜ彼がノブにある主の祭壇に戻らなかったのか、なぜ神の箱をアビナダブの家に残すことを許したのか、その理由は語られていない。しかし、この時代は変則的な日々であり、神の本来のご計画に沿わないにもかかわらず、神が許されたことが数多く行われていたのである。

7章はリバイバルの考察である。神はまずサムエルという人物を起こされた。彼は民に悔い改めと告白ときよめを呼びかけた。

子羊の血（カルバリの子羊の型）によって執り成しがなされ、勝利がもたらされた。これらは、個人と国家のリバイバルへの諸段階である。

F. 求められ、選ばれた王（8、9章）

8:1～5 サムエルは年老いて、二人の息子たちをさばきつかさとして後を継がせようとした。しかし、彼らは邪悪な者たちで、賄賂を受け取り、正義を曲げていた。サムエルは先代のエリと同じく、息子たちを悪の道から立ち返らせなかったのも、その家系もまた拒絶された。イスラエルの長老たちはヨエルとアビヤを受け入れることを拒否し、他の国々のように王を望んだ。

8:6～18 もちろん、神はご自身がイスラエルの王となることを意図しておられた。神の民は聖なる民であり、地上の他のどの国とも異なるべきだった。しかし、彼らは他と異なることを望まず、世に順応したかったのである。サムエルはそのような願いを聞いて心を痛めたが、主は彼らの言うとおりにせよ、と言われた。結局、彼らは預言者を拒絶したのではなく、主を拒絶したのである。サムエルは彼らの願いを承諾する前に、厳かに抗議し、彼らが経験することになる王の振る舞いについて警告しなければならなかった。簡単に言えば、王は民を貧困に陥れて私腹を肥やし、若い男女を軍務や宮廷内の雑務に就かせ、事実上の奴隷にするというものだった。神が律法の中で王の統治のための規定を設けられたのは事実だが（申命記17:14～20）、神の完全なみこころは、神ご自身が彼らの王となることだった（8:7、12:12）。申命記のこれらの律法は、必ず起こる悪を抑制するためのものであった。

8:19～22 民が、警告にもかかわらず要求を続けたため、主は再びサムエルに、

彼らの要求に従って王を立てるように命じられた。そして預言者サムエルは民を家に帰らせた。まもなく彼らは自分たちの王を得ることになった。

9:1～14 ここで（ベニヤミン人）キシユの子サウルが登場する。父の雌ろばを捜していた彼とそのしもべは、近くの町にいる神の人に雌ろばの行方を尋ねることにした。手土産を持って町に近づくと、若い女性たちから、彼らが探している予見者がその日、宗教的な祭りに現れることを知った。急ぎ足で進むと、彼らは探していた人物に出会った。サウルは、預言者も自分を探していることを知る由もなかった！

9:15～21 前日、主はサムエルに、王となるべき人物のもとに導く、と約束された。そして今、サウルがその人であることが明らかになった。しかし預言者はサウルにすぐには告げなかった。まず、彼を宴会に招いた。高き所（すなわち、礼拝のために設けられた場所）は通常、偶像礼拝と結びついていたが、この場合はヤハウエの礼拝のための場所であった。それからサムエルは、背が高くハンサムなこのベニヤミン人に、**明日の朝、重要な知らせがある、と告げた。**どうやらサムエルは、サウルの用件について何も聞かされていなかったようだが、サムエルはろばは見つかったので心配の必要はない、と告げた。数頭のろばが何であろう。彼は間もなく、「**全イスラエルの思い**」を手に入れることになるのである。サウルはこのことばを謙虚に受け止めた。ベニヤミンは確かにイスラエルで最小の部族だった。過去には、彼らの悪行のゆえに、その数は600人にまで減らされていた（士師記20章）。

9:22～27 宴の席でサウルは上座に着かせられ、肉の最上の部分がふるまわれた。夜、サムエルは彼と長い話をした。翌日、

サムエルはサウルが町を出ようとしたところを呼び止め、神からの御告げを伝えた。

II. サウルの治世と拒絶 (10～15章)

A. 油注ぎと確認 (10、11章)

10:1～6 サムエルはひそかにサウルの頭に油を注ぎ、サウルをイスラエルの君主とした。祭司職は油注ぎによって開始された（レビ記8:12）。そして今、最初の王が同じように油を注がれた。公の儀式が後に続くはずである。そして、サウルに対する主のことばを確認するために、三つのしるしが与えられた。

- (1) 二人の人がラケルの墓のそばでサウルに会い、父の雌ろばが見つかったことを告げる。
- (2) 三人の人がベテルに向かう途中、タボルの榎の木でサウルに会い、二つのパンを与える。
- (3) サウルがギブア・エロヒム（「神の丘」）に来て預言者の一団に会うと主の霊が彼に臨み、彼は預言する。

10:7～9 これらのしるしがすべて起こった後、サウルはギルガルに行き、サムエルが来ていけにえを献げるのを七日間待つことになっていた。2～6節のしるしはすべてその日に起こり、ギルガルでの出来事がそれに続いた（13:7～15）。9節から、サウルが本当に回心したと結論づけるべきではない。実際、その後の出来事が明らかに示すように、彼は生まれながらの性質に従う（肉的な）人物であった。彼は、個人的に救いを受けた、という意味で神を知らなかったにもかかわらず、御霊により、神の民の支配者としての公的な立場にふさわしい資質を与えられていた。言い換えれば、

彼は真の信仰者ではなかったが、公的には神の人だったのである。^{*(8)}

10:10～16 預言者とは献身的で使命感に燃えた人々であったので、サウルが彼らの間で預言しているのを見て人々は驚いた。そのため、「サウルも預言者の一人なのか」ということわざが生まれた。このことわざは、その人が性格にそぐわない活動をすることに驚きを表す一般的な言い方になった。サウルのおじ（私たちが予想するように、父親ではなく）は、サムエルとの話し合いについてサウルに尋ねた。サウルはサムエルと会ったことは話したが、自分がひそかに王として油注がれたことは明かさなかった。

10:17～19 一方、サムエルは民をミツパに集め、王を任命したことを発表した。実際に発表する前に、サムエルは民に、王を求めることは、エジプトから約束の地へと導いてくださった神を拒むことであることを、もう一度彼らに思い起こさせた。サウルが選ばれたとき、彼は慎み深さか恐れ of どちらかの理由で隠れていた。マシュー・ヘンリー (Matthew Henry) は、サウルの恐れの原因になったかもしれない理由を4つ挙げている。

- (1) 自分がこのような大きな責任を果たすにふさわしくないことを自覚していたから。
- (2) 彼に悪意を持つ隣人たちのねたみにさらされるから。
- (3) サムエルのことばから、民が王を求めたのは罪であり、神が彼らの願いを許されたのは怒りであったことが分かったから。
- (4) 当時、イスラエルは不利な状況にあり、ペリシテ人は強く、アンモン人は脅

威であった。嵐の中で船出する者は、本当に大胆でなければならないから。

^{*(9)}

10:20～27 サウルは連れ出され、王として民に紹介された。イスラエル全土を見渡しても、これほど立派な体格の持ち主はいないと思われた。何人かの勇者たちがサウルに従い、ギブアにある彼の家まで同行したが、誰もが新しい君主を支持したわけではなかった。サウルは賢明にも、自分を軽蔑するよこしまな者たちの前では黙っていた。

11:1～5 ヤベシュ・ギルアデはヨルダン川の東側、ガドの領土にある町であった。南東の隣国アンモン人がこの町を包囲したとき、住民は降伏の条件を求めた。しかしナハシュは、彼らの右の目をえぐり取って行動を一生不自由にし、イスラエルの中で恥辱を負わせようとした。驚いたことに、アンモン人はヤベシュの長老たちが救援を求めることを許した。おそらくナハシュは十分に準備が整っていなかったか、イスラエルの他の民がヤベシュを助けるのを恐れていなかったのであろう。ギブアに使者が送られたが、そこではサウルがまだ畑仕事をしていた。イスラエルの新しい王として、自らを主張する絶好の時が到来した！

11:6～11 一くびきの牛を切り分ける、という生々しく脅迫的な実物を用いた方法で、サウルは民に武装を呼びかけた。主への恐れが民に臨んだ。イスラエルとユダは合わせて三十三万の兵力をベゼクに集結させ、夜を徹してヤベシュに進軍し、そこでアンモン人を徹底的に打ち破った。

11:12～15 勝利に酔いしれた民は、かつてサウルの支配を受け入れなかった人々を殺そうとした。しかし、サウルは賢明にもそれを止めた。主が勝利をもたらし

てくださったという事実だけで十分だったからである。その後、サムエルはギルガルで厳粛な集会を招集し、サウルの王国は全国的な規模で新たなスタートを切った。今回、反対はなかった。ギルガルは霊的な刷新を意味している（ヨシュア5:9）。

B. 民への叱責と告発（12章）

12:1～13 ギルガルでの王国更新の儀式の後、サムエルは全イスラエルに向かって語った。彼はまず、さばきつかさとしての自分の正しい統治を思い起こさせた。誰も彼を不正で訴えることはできなかった。しかし、イスラエルは王を求めることで、この統治と神の支配を拒絶したのである。主は過去において慈しみ深く、必要な時には解放者を起こしてくださった。11節の「ベダン」（英訳）とは、おそらくバラクのことであろう（NKJV 脚注、七十人訳とシリア語訳）。*⁽¹⁰⁾ サムエルは、モーセに始まる解放者の系譜に自らを位置づけた。しかし、イスラエルはこれらの過去のあわれみに感謝せず、王を求めて叫んだ。彼らは、主がさばきつかさを通して働かれることに満足しなかったので、主は彼らにサウルを与えられたのである。

12:14～18 王を要求することで、彼らは大きな罪を犯した。しかし今なお、もし彼らが主に従うなら、主は彼らを祝福されるであろう。もし従わなければ、彼らは主の怒りを経験することになる。その厳粛な証拠として、サムエルは祈りによって雷雨を降らせた。これは明らかな神からのしるしであった。そのような嵐は小麦の刈り入れ時には季節外れであり、偶然にしてはタイミングが良すぎたからである。

12:19～25 人々は極度の恐怖に襲われ、自分たちのために祈ってください、とサムエルに懇願した。サムエルの祈りはさ

ばきをもたらしたが、あわれみをもたらすこともできた。その懇願に応じて、サムエルは主に従うよう、もう一度訴えた。それがさばきを避ける道だったのである。彼としては、彼らのために祈るのをやめることはできなかった。そうすれば罪となったであろう。この重要な発言は、祈らないことが単なる不注意ではなく、罪であることを示している。

C. 不従順と拒絶（13～15章）

1. サウルの罪深いけにえ（13章）

13:1 異なる訳を読めばすぐにわかるように、1節には明らかな難点がある。KJVとNKJVは「サウルは一年治め、イスラエルを二年間治めた時」と訳している。ERVは「サウルは統治し始めたとき三十歳で、イスラエルを二年間統治した」と述べ、RSVは「サウルは治め始めた時 [] 歳であり、イスラエルを二年間治めた」とある。NASBは、「サウルは治め始めたとき四十歳で、イスラエルの上に三十二年間統治した」となっている。七十人訳の写本の中には、問題の節を完全に省略しているものもある！この混乱の最も有力な説明は、後世の不注意な書写者たちによって、ヘブル語本文から一部の文字が省かれてしまったというものである。*⁽¹¹⁾ サウルが権力を握ったとき、すでに成人していたことは確かである。なぜなら、その息子ヨナタンは戦争に行ける年齢になっていたからである。

13:2～5 サウルは三千人の常備軍を創設していた。ヨナタンは分遣隊を率いて、エルサレムの北、ゲバにあるペリシテ人の守備隊を攻撃することに成功した。これをきっかけにペリシテ人は全面戦争に備えて大軍を準備するようになった（シリア語訳や七十人訳の一部の写本に倣って、5節の戦車を三千台と読む訳もあるが、これは騎

兵六千人を乗せるには妥当な数である)。⁽¹²⁾

13:6~9 イスラエルの人々はこの挑発に怯え、ヨルダン川を渡って逃げ出す者もいた。彼らは長い間、くびきの下にあったため、自由になることはほとんど不可能に思えた。ペリシテ人はあらゆる点で優位に立っていたからである。サウルがギルガルでサムエルを待っている間 (10:8参照)、点呼のたびに行方不明者が増えていった。七日目が始まったが、それでもサムエルは現れなかった。兵力が減少し、戦争が間近に迫っていたため、サウルは、レビ人でない自分には何の権限もないにもかかわらず、急場しのぎで、自ら全焼のささげ物を献げることにした。サムエルが遅れたとしても、サウルが祭司職に割り込む正当な理由にはならなかった。

13:10~14 その直後に到着したサムエルは、サウルが何をしたかを理解した。正当な言い訳のように聞こえたとしても、サウルが神に背いたという事実は変わらなかった。そのために彼は王国を失うことになる。神はすでに、ご自分の心にかなう別の人物を見つけ出しておられた。これは、サウルの生涯におけるいくつかの罪のうちの最初のものであり、その結果、サウルはイスラエルの王位を失うことになった。他の罪とは、軽率な誓い (14章)、アマレク人との戦いでアガグと最良の戦利品を残したこと (15章)、アヒメレクと他の八十四人の祭司の殺害 (22章)、ダビデの命を何度も狙ったこと (18~26章)、エン・ドルで霊媒をする女に相談したこと (28章) である。

13:15~23 サウルは六百人の兵を率いて、ギブアでヨナタンと合流した。少し離れたミクマスに陣を敷いていたペリシテ人は、北、西、東に略奪隊を送り出し始めた。ペリシテ人は長い間完全な支配をして

いたので、鍛冶屋はイスラエルから一人残らず追い出されていた。ヘブル人は農具を研いでもらうために、彼らのところへ行かなければならなかった。剣を持っている者はわずかだった。状況は実に厳しいものに見えた。

2. サウルの軽率な誓い (14章)

14:1~15 父が何の行動も起こさないでいるのを見たヨナタンは、ペリシテ人を攻撃しようと、道具持ちを連れてこっそりと抜け出した。これは向こう見ずな行動でも、愚かな自殺行為でもなかった。ヨナタンは、神が大勝利を与えてくださることを信じていたのである。彼らが二人だけであったことも問題ではなかった。ヨナタンは、「多くの人によっても、少しの人によっても、主がお救いになるのを妨げるものは何もない」と確信していたからである。ヨナタンの信仰は報われることになる。神は、ペリシテ人が彼を脱走兵だと思って彼を呼び寄せるなら、彼の企ては成功する、と示された。ペリシテ人が「上って来い」と言うやいなや、ヨナタンはペリシテ人の陣地によじ登り、たちまち彼らのうちの二十人を地面に打ち倒した。生き残った者たちが逃げると、神は地震を起こされ、ペリシテ人の陣営は大混乱に陥った。神がペリシテ人に対処するためには、ヨナタン (6節) と彼の道具持ち (7節) が示した信仰があれば、十分だったのである。サウルの愚かさのせいで勝利の成果が不十分になってしまったのは残念なことであった。

14:16~23 サウルのために見張りをしていた者たちは混乱に気づき、彼に報告した。点呼すると、ヨナタンと道具持ちがいなかった。サウルは早速、主に尋ねることができるよう、祭司アヒヤに神の箱を持って来るように命じた (NKJVの脚注は、

七十人訳に従い、「箱」ではなく「エポデ」と読ませている。^{*(13)} 箱はまだキルヤテ・エアリムにあったと思われる)。しかしサウルは、敵の騒ぎが大きくなると、すぐに考えを変え、祭司に手を戻すように、つまり主の御心を求めるのをやめるように言った(19節)。主がペリシテ人を自分の手に渡そうとしておられることを知るのに、神の導きは必要ないと確信した彼は、軍を集結させた。他の人々も、神がイスラエルのために戦っておられることを悟った。以前離反したヘブル人たちさえも、ペリシテ人の主人に反旗を翻し、エフライムの山中に隠れていた者たちまでもが、戦いに加わる新たな勇気を見出した。勝利が目前に迫ると、誰もが戦いに加わりたがるものだが、最初に敵と対峙する「ヨナタン」はどこに

14:24～30 迅速な成功を確実にするために、サウルは軽率にも、戦いが終わる夕方まで兵士たちに何も口にしないように誓約させた。その命令に背く者に呪いをかけたのである。空腹は兵士たちの疲労を招き、彼らは不利な状況に陥った。父の命令を知らずにいたヨナタンは、体力を回復するために蜂蜜を口にした。彼は呪いのことを聞かされると、イスラエルの勝利がこのような愚かしい命令によって妨げられていることを嘆いた。

14:31～42 サウルが課した制限は、ヨナタンを怒らせただけでなく、民をも危険にさらした。戦いが終わると、彼らは戦利品に殺到し、家畜を殺し、血を抜かずに食べたが、これはレビ記17章10～14節、および申命記12章23～25節に違反していた。これを聞いたサウルは彼らを叱責し、家畜が連れて来られて適切に屠られるための大きな石を据えた。また、初めて祭壇を築いた。サウルは熱心のあまり、夜になっ

てもペリシテ人を追いかけたいと思ったので、そのことを神に尋ねようと再び祭司に話した。しかし、神が彼に答えられることはなかった。そのためサウルは、陣営に罪があるに違いないと考えた。このような場合によく行われるように、くじが引かれたが、サウルが驚いたことに、ヨナタンが選ばれた。つまり、くじの結果、有罪であると示されたのである。

14:43～46 ヨナタンは何が起こったかを説明したが、サウルは面目を保つため、彼を死刑にするよう命じた。しかし、民は王よりも分別があった。ヨナタンは、神と共にこの偉大な勝利をもたらしたのではなかったか。神は戦いでヨナタンを大いに用いられたのに、そのヨナタンを、サウルの呪いを破ったことで、神が不快に思われるだろうか。とんでもない。ヨナタンが死ぬようなことがあつてはならない。こうして英雄は、不当な死を免れた。しかし、サウルがこのような無駄なことで忙殺されている間に、ペリシテ人は逃げてしまった。知恵の欠如が原因でサウルの勝利が縮小したのは、これが二度目である。

14:47～52 47節と48節には、サウルの軍事的勝利の一部が要約されている。それに続く3節は彼の家族に関する詳細を述べている。最後の節は、王がイスラエルの勇敢な息子たちを徴兵するというサムエルの預言の成就である(Ⅰサムエル8:11)。

3. サウルの不徹底な従順(15章)

15:1～3 サウルは下り坂を滑り落ち、ど谷底に近づくにつれて加速していった。何をするように命じられても、彼が完全な服従に至ることはなかった。この章で、彼はアマレク人を滅ぼすように神から命じられている。アマレク人とは、ヘブル人がエジプトからカナンへ向かう途中、はぐれた

者たちを情け容赦なく奇襲した民族のことである（申命記25:17～19）。命令は非常に明確であった。息のあるものはすべて滅ぼし、神に**聖絶**することになっていた。神は長年アマレク人に対して忍耐強く接して来られたが、彼らに対する神のことばは変わってはいなかった（出エジプト記17:14～16、民数記24:20）。彼らはその罪の罰として消し去られるべきだったのである。

15:4～12 サウルは兵を呼び集め、アマレクの町まで南下した。彼は攻撃する前に、**ケニ人**たちに逃げるように警告した。これらの遊牧民であるミディアン人が、出エジプトのとき、イスラエルに親切を示してくれたからである。この行動は、サウルが単なる虐殺に関心があったのではなく、悪しき民に対する主の復讐を実行していたことを示している。彼はアマレク人を徹底的に打ち破り、王と戦利品の最良のものを除いて、すべてを剣にかけた（おそらく他の場所に住んでいた残党は生き延びたであろう（30:1～6、Ⅱサムエル8:12、1歴代誌4:43））。遠く離れた場所で、主はサウルの不従順をサムエルにお告げになった。サムエルは激しく動揺し、一晚中祈らずにはいらなかった。朝になると、彼がすべきことが明らかになった。

15:13～35 ギルガルに向かう途中、サウルは足を止めて記念碑を建て、自分の勝利を祝った。しかしサムエルの見方は違っており、従わなかったサウルを責めた。サウルは言い訳には事欠かなかったが、サウルの失敗を示す（家畜の）声が預言者（サムエル）の耳に届き、サウルの言い訳は宙に浮いてしまった。彼は退けられた！サウルは以前にもそのことばを聞いたことがあった（13:14）。そのことばはまたしても、圧倒的な力を持ってやって来た。サウルは絶えず主の命令を解釈し直し、神が最善と

言われたことよりも、自分にとって最善と思われることを行っていた。彼は悔い改めたように見せかけ、サムエルに自分を見捨てないように懇願した。預言者（サムエル）が去ろうとしたとき、彼は預言者の衣を引き裂いた。これもまた、王国がサウルから引き裂かれ、他の者に与えられるというしるしだった。

サムエルはサウルに同行して主を礼拝した後、**アガグ**を連れて来るように命じた。助かるかもしれないと思ったアガグは、恐る恐る（※日本語訳は「喜び勇んで」）サムエルのところに来て言った（※日本語訳は「思った」）、**「きっと、死の苦しみが去るだろう」**（32節）。ところがサムエルは剣で彼を**ずたずたに切った**。年老いたさばきつかさ（サムエル）は、サウルの失敗のために一生重荷を背負うことになった。ある意味では、神でさえ、サウルをイスラエルの王にしたことを悔いておられたのである。

私たちは22節を暗記すべきである。それは神のみことばを代表するものの一つである。最初に従順、最後に従順、そして常に従順。それは主に仕え、主を喜ばせようとする者の合言葉でもある。アードマン（Christian F. Erdmann）はこのように記している。

「聞き従うことは、いけにえにまさる」

ということばで、思考の転換が起こる。

それ自体で神に喜ばれることを別とすれば、従順な心のあり方だけが本質的に善であり、それが伴わないさざげ物は良いものではなく、道徳的価値もない。…不従順と、その結果生じる反抗と自己依存は、魔術、つまり「神に敵対する悪魔的な力に仕える占い」（カイル、C. F. Keil）や、偶像礼拝の外面的な邪悪さと本質的に似ており、同じ道徳的次元にある。^{*(14)}

29節と35節は互いに矛盾しているように見える。29節は、神はご自分の考えを変えたり、悔やんだりすることがないと言い、35節は、神はサウルを王としたことを悔やまれた、と言う。29節は、神の本質的な性質について述べている。神は不変であり、変わることができない存在である。35節は、もしサウルの行動が変われば、それに応じて神のご計画とご目的も変わることを暗示している。神の属性と一致するためには、神は従順を祝福し、不従順を罰しなければならないのである。

Ⅲ. サウルの死までのダビデの生涯 (16～30章)

A. サムエルによる油注ぎ (16:1～13)

16:1～3 サムエルがまだサウルのことで悲しんでいると、主は彼に、サウルは退けられたという事実を直視するように、はっきりと告げられた。神はご自分の民を治めるために別の人物をすでに選んでおられたのである。サムエルはベツレヘムに行き、エッサイの息子の一人に、王になるための油を注ぐこととなった。秘密裏に事を行う、ということと欺くことは同じではない。神はサムエルに、ベツレヘムで意図していることについて嘘をつくように言われたわけではない。サムエルは実際にそこでいけにえを献げているからである。しかし、新しい王の油注ぎは秘密裏に行われ、何年も公表されることはなかった。

16:4～13 サムエルがベツレヘムに着くと、長老たちは震え上がった。エッサイとその息子たちをいけにえの祝宴に招いた後、サムエルは次の王が目の前にいると確信しながら、彼ら一人一人を見回した。しかし、主に選ばれた者はいなかった。サムエルはサウルとの経験から、外なる人は、

内なる人ほど重要ではないことを学ぶべきであった (13:14)。神は心をご覧になる (7節)。7節の原則はいつの時代も真実である。すなわち、人は外見や服装、その他外面的なもので判断する。今日、マスメディアは広告やテレビ、印刷物に魅力的な人々を起用することで、この誤った見方を助長し、普通の容姿の人は本来あるべきほど満足のいくものではないように思わせている。サウルは背が高く、肌が褐色で、顔立ちが整っていた。実際、ダビデも美男子ではあったが (12節)、大きな任務を担うには若すぎるように見えた。残念なことに教会は、特にテレビで、霊性よりも表面的な魅力を強調することが多く、こうしたテレビのアイドルが不祥事を起こすと、結果は悲惨である。

ついにダビデを宴会に連れて来なければならないことになった。ダビデは父親の目には取るに足りない存在だったので、エッサイは預言者がダビデに興味を示さないだろうと決めつけていたのである。しかし主はこの羊飼いの少年に深い関心を抱き、サムエルは神の御声に従ってダビデに油を注いだ。その瞬間から、主の霊はダビデの上に力強く臨み、サウルから去った。ダビデがサウルの王冠をかぶるまでには何年もかかることになるが、この日から王国は確かにダビデのものとなったのである。

B. サウルに仕える (16:14～23)

この頃、サウルは悪霊による一種の精神障害に悩まされるようになった。この「主からの、わざわいの霊」という表現は、神が許されたことを、神がなされたこととして語られる、という事実によって説明されることが多い。レンドル・ショート博士 (Rendle Short) は、(1953年に出版された本の中で) この王の身に起きた問題を次

のように分析している。

サウル王は、現代であるなら躁うつ病の典型的な例と診断されるであろう。特に理由もなく時折起こる殺人的暴力を伴う極度の憂鬱な期間や、人々が自分に対して陰謀を企てているという妄想は紛れもないしるしである。^{*(15)}

サウルの家来たちは、王を落ち着かせるために音楽の才能のある人を探してはどうかと、王に提案した。ダビデの名前が提案され、サウルは彼を呼び寄せた。18節は、ダビデがゴリヤテと対決する前から、すでになんかの名声を博していたことを示している。そして今や、彼の音楽は王を憂鬱な気分から引き上げるように思われた。サウルはダビデをたいへん気に入り、ダビデを専属の道具持ちにした。

C. ゴリヤテを倒す (17章)

17:1~11 ペリシテ人は、エルサレムの南西、ガテからそう遠くないエラの谷の近くに、戦いのために陣を敷いた。サウルとその軍は、エラの谷を挟んでその近くに集結した。ペリシテ人の陣営からゴリヤテという名の戦士が四十日間毎日出て来て、イスラエル軍に自分にふさわしい対戦相手を送るように挑発した。志願する者はいなかった。この巨人は身長が約3メートルで、少なくとも80キログラムの鎧を着ていた。彼の鉄の槍の穂先だけで7キロほどの重さがあった。ゴリヤテの体重は270キロから340キログラム（体格によってはそれ以上）あったはずなので、重い武器も問題にはならなかった。そのため、彼には普通の人の何倍もの力があつた。

17:12~30 ある時、ダビデが戦場にいる三人の兄たちに物資を運んで行つたと

き、巨人の嘲りの声が聞こえ、ヘブル人の兵たちの顔に恐怖の色が浮かんでいるのを見た。ダビデは、この威張り散らす野獣を黙らせた者にはどんな処遇がなされるのか尋ねた。ダビデの長兄エリアブは、おそらく自分の臆病さを隠すためにダビデを叱責したが、ダビデは巨人を殺す者に与えられる褒美について繰り返し尋ねた。

17:31~40 まもなく、イスラエルのために戦う若者が見つかったという知らせがサウルのもとに届き、ダビデが彼の前に連れて来られた。ダビデを見たサウルは、当然ながらその若者の能力に疑問を抱いた。しかしダビデは、獅子や熊から羊の群れを守ったとき、彼を通して働く神の力を知っていた。彼は個人として神の力を経験していたので、今や公の場で神に頼ることができたのである。ダビデの勇氣と決意を見たサウルは、ダビデに自分の鎧を与えたが、ダビデはそれが邪魔になるとしてそれを脱いだ。その代わりに、彼は五つの滑らかな石、石投げ、杖、そして生ける神の力を武器として前に進み出た。

17:41~54 ゴリヤテは、このときおそらく20歳前後であったダビデを見て激怒した。彼の眼には子どもにしか見えない者を戦いに送り出して、イスラエルが自分を侮辱したと感じたのである。しかしダビデは巨人の呪いに恐れをなす様子もなく応じた。彼は、主が勝利を与えてくださると完全に信じていた。ゴリヤテが彼に向かって来ると、ダビデは最初の石を投げて、巨人の額に命中させた。巨人はうつぶせに地面に倒れた。それからダビデはこのペリシテ人の剣を使って彼を殺し、首をはねた。ペリシテ人たちはこれを見ると、イスラエルの猛追を受けて逃げ去った。

17:55~58 これらの節^{*(16)}は、ある問題を提起しているように思われる。サウ

ルが、すでに道具持ちに任命していたダビデを認識しなかった、というのは奇妙である (16:21)。しかし、サウルが、この若い英雄が誰であるか知らなかった、とは書かれていないことに注意すべきである。単に、彼は「これは誰の子か」と尋ねた、と書かれているだけである。サウルはダビデの家族の背景を忘れていただけという可能性がある。ウィリアムズ (George Williams) は次のようにコメントしている。

サウルは、勝利者の家族に税の免除を約束し、多額の持参金で自分の娘を嫁がせることを約束していたので、アブネルにダビデの父親とその社会的地位に関する情報を求めるのは当然であった。^{*(17)}

これは、後にダビデが王の婿になるのにふさわしくないと表明した事実によって裏付けられているように思われる (18:18)。グリフィス (Michael Griffiths) は、適切な適用をしている。

ヨナタン (14章) もダビデも、彼らがいた小さな前線で行動を開始したが、その行動が大きな勝利につながった。私たちも同様に、それぞれが置かれている場所から戦場に出なければならない。敵軍全体を相手に戦うことは期待できないが、そうする必要もない。あなたの「前線」には、イエスのための仕事を用意されている。私たちは大胆に、今いる場所で主導権を取るように求められている。私たちの行動の結果、戦いが全戦線に広がったとき、あとのことは神が引き受けてくださるであろう。^{*(18)}

D. ミカルとの結婚 (18章)

18:1~5 ヨナタンとダビデの間に、深く永続的な友情が芽生えた。彼らは似た者同士であり、それぞれが真の勇気という稀な資質を持っていた。ヨナタンは父の王位の正当な継承者であったが、自分の上着をダビデに与えることで、ダビデが王位に就くことを見るためであれば、自分の権利を放棄する用意があることを示した。

18:6~16 ダビデが戦いに次ぐ戦いに勝ち続けると、サウルはひどく嫉妬するようになった。自分よりダビデのほうが大きな功績を残した、と女たちが歌うのを聞いて、彼は怒りに震えた。神は時として悪を懲らしめるために悪をお用いになる。サウルがわざわざ霊に苦しめられるのを神が許されたのはそのためである (10節)。王は二度にわたってダビデを自らの手で殺そうとしたが、二度ともダビデは逃げ延びた。それからサウルは、ダビデを千人隊長に任命した。おそらくダビデがペリシテ人と戦っている間に殺されることを期待してのことであろう (彼は以前、もっと大きな部隊を指揮していたようである)。しかし、主はダビデと共におられ、彼の活躍はイスラエル中の注目を集めた。

18:17~30 ペリシテの巨人を倒す者には王の娘が与えられる、と約束されていたので、サウルの長女メラブがダビデに嫁ぐことになった。しかし、その前にもっと多くの勝利を収める必要があった。サウルはその過程でダビデが殺されることを願っていた。ダビデが王の婿となるには、社会的に不釣り合いであることを表明すると、メラブは別の男に嫁がせられた。それはおそらくダビデを辱めるサウルのやり方だったのであろう。しかし、サウルの末娘ミカルはダビデを愛していたので、サウルはダビデがペリシテ人の陽の皮百を「持参金」

として差し出すことを条件に、彼女をダビデに与えることに同意した。サウルは再び、ペリシテ人の手によってダビデを殺すことを望んだ。しかし、ダビデはそう簡単には抹殺されなかった。彼は二倍の風変わりな「持参金」を持って戻り、ミカルを妻として勝ち取った。軍事的な成功が続くことで、主がダビデと共におられることが明らかになり、サウルのダビデに対する憎しみと恐れはますます深まっていった。

E. サウルからの逃走 (19章～26章)

1. ヨナタンの忠誠 (19、20章)

19:1～7 ヨナタンは、父がダビデを殺すつもりであることを知り、自分が王をなだめている間に、野原に隠れるようダビデに忠告した。ダビデについてサウルを説得する際、ヨナタンはダビデの勇敢さ、忠誠心、イスラエルの敵に対する成功を思い出させた。彼は死に値するようなことは何もしていなかった。サウルは一時的に懐柔され、ダビデは王宮での地位を回復した。

19:8～10 しかし、再び戦いが起こると、ダビデはまたしても頭角を現し、サウルの嫉妬は再び燃え上がった。わざわざの霊が戻って来て、サウルはダビデを槍で壁に突き刺そうとした。サウルが失敗したのはこれで三度目だった。ダビデはかろうじて難を逃れた。

19:11～17 その同じ夜、サウル王は使者たちを遣わし、ダビデをその家で殺そうとした。ミカルはその陰謀を知って、ダビデの寝床に家の偶像を置いて逃走を助けた（ダビデは偶像礼拝者ではなかったので、その偶像はおそらく彼女のものであったのだろう）。サウルがダビデを捕らえるために兵を送ったとき、彼女の策略は見破られた。

19:18～23 しかし、すでにダビデは

逃げた後だった。彼はサムエルに会うためにラマに逃げた。神を信頼する者は、苦難の時に、神を信頼する他の人のところに行くものである。サウルの使者が三度もダビデを捕らえ損ねたのは、サムエルと一緒にいた預言者たちに近づくと、彼ら自身も神の霊に支配されて預言を始めたからである。後に、サウル自身もダビデの後を追ったとき、神の力に捕らえられた。しかし、このような神の圧倒的な支配は、回心とは異なるものであった。

19:24 人々はまたしても、サウルも預言者の一人である (10:11, 12) ということわざを繰り返した。彼の不安定な行動は、彼らには不可解であったに違いない。「裸」ということばは、完全に裸であるという意味ではない。それは単に、サウルが王族の象徴である上着を脱いだという意味である。神がその日一日中、そしてその夜もずっと、サウルを地面に平伏させていた間に、ダビデは逃げた (20:1)。24節は、「サムエルは死ぬ日まで、再びサウルを見ることはなかった」という15:35と矛盾しない。ここで預言者のもとに来たのはサウルの方であり、それも意図せず、しかもまったく予期せぬことであった。

20:1～3 ナヨテを去った後、ダビデはヨナタンのもとに来て、サウルがなぜ自分の命を奪おうと躍起になるのか、その理由を探ろうとした。どうやらヨナタンは父がダビデの命を狙っていたことを何も知らなかったようである。ダビデは、王がヨナタンとダビデとの間の友情のため、自分の計画をヨナタンに明かさないのだ、と説明した。

20:4～9 ダビデが危険にさらされているかどうかを明らかにするための試みが考え出された。月例の祝宴で、ダビデは王室の席に着かず欠席する。もしサウルがダビ

デの欠席の理由を問いただした場合、ヨナタンはダビデがベツレヘムで毎年行われるいけにえの儀式に出かけた、と説明する。(聖書にはそのような旅のことは記されていないが、事実だった可能性もある。もし嘘であったとしても、それは神に承認されていない事実として記録されているに過ぎない。)もしサウルがそれを問題にしなければ、ダビデは安全であることになる。しかし、ダビデが再び自分の手から逃れたということで王が怒ったなら、ヨナタンはダビデが重大な危険にさらされていることを知ることになる。

20:10~17 ヨナタンは、三日目に野原に行き、事前に決めた合図によって、ダビデに状況を伝えると約束した。おそらく、結末を予測していたのかヨナタンは、ダビデが権力を握ったとき、彼とその家族に主の忠実な愛を示すように頼んだ。14~17節から明らかなように、ヨナタンはダビデが王になると信じていた。彼は自分に与えられた王位継承権がダビデのものになることを認識していたにもかかわらず、ダビデに対する愛を再確認した。なんとという無私の献身であろう！

20:18~23 以下の節には、ダビデが王の態度を知るためのしるしが詳しく書かれている。ヨナタンは野原に来て、ダビデが隠れている岩の近くに矢を放つ。その矢を拾いに来た少年に呼びかける指示は、ダビデに命がけで逃げるか、安全に宮廷に戻るかを伝えるものであった。ヨナタンが後にダビデに直接話すことになるのに、なぜダビデと意志疎通を図るためにこのような芝居を仕組んだのか、私たちは不思議に思うかもしれない。しかしこの時点では、人に見られることなくダビデに接触できるとは知らなかったのかもしれない。

20:24~34 祝宴の最初の夜、サウル

はダビデがいらないことについては何も言わなかった。おそらくダビデは儀式上の汚れがあるのではないかと考えたのであろう。しかし二日目に、サウルはヨナタンにダビデの居場所を聞き、ダビデがベツレヘムに行ったことを知ると、激怒し、ヨナタンが自分と自分の母を辱めるような(身分の低い)男と親しくしている、と非難した。彼のダビデに対する憎しみは、一時的にヨナタンに向けられ、彼のことは荒々しく、その態度はそれ以上に粗暴になり、自分の息子を壁に追い詰めるほどだった。

20:35~42 三日目の朝、しかるべきしるしが与えられ、ダビデの恐れは確信に変わった。二人は抱き合って泣いた。彼らはもう互いの交わりを楽しむことはなく、別々の道を歩まなければならない。ダビデは身を隠したが、それは彼を王位に就かせるために必要な神の計画の一部であった。ヨナタンは王宮に戻り、父に忠誠を誓いながらも、自分がイスラエルの次の王になることはないとの底で分かっていた。彼はダビデと一緒にいくべきだったのだろうか。主がサウルを王として拒まれたにもかかわらず、父親への忠誠を貫いたことは正しかったのだろうか。

2. ダビデに対するアヒメレクの温情 (21章)

偉大な人物にも弱点はあるものである。ダビデも例外ではない。この悲しい章には、今はノブにある幕屋の前での彼の嘘(1~9節)と、ペリシテ人前で狂気のふりをしたこと(10~15節)が記録されている。

21:1~6 ダビデはサムエル(19章)とヨナタン(20章)のもとへ行き、今はサウルから逃れる途中で大祭司のもとにきた。アヒメレクはダビデを恐れ、なぜ彼が一人で旅をしているのか疑問に思った(もちろ

んダビデには、他の場所で待っている供の者たちがいた——2節、マタイ12:3)。ダビデは、王の密命を帯びていると言って嘘をついた。それからダビデはパンを求めた。しかし、あったのは供えのパン、つまり礼拝のために幕屋で使われる聖別されたパンだけだった。祭司はダビデの家来たちが過去数日間、性的関係によって儀式的に汚れていないことを条件に、ダビデにそれを提供した。ダビデは、部下たちが清いだけでなく、特別な任務のおかげで聖別されていると言った。シェイクスピア（※正確には、サー・ウォルター・スコット、Sir Walter Scott）の言ったことは正しかった。「ああ、私たちが初めて人を欺こうとすると、何と複雑な網を紡ぐことか！」聖所から取り下げられたばかりのパンがダビデに与えられた。

マタイ12:3,4で主イエスは、この供えのパンの不法な使用をお認めになったが、それはイスラエルに罪があり、ダビデが正義を代表していたからであろう。もしダビデが王位に就いていたなら、そもそもパンを乞う必要はなかったはずである。パンの世俗的な使用を禁じた律法は、このようなあわれみのわざまで禁じることを意図したものではない。

21:7~9 そのときサウルのしもべ、ドエグは、ノブで主の前に引き止められていた。彼はエドム人であったが、ヘブル人の宗教に改宗しており、誓願、汚れ、またはその他の儀式上の義務によって留め置かれていたのである。彼は当然のことながら、アヒメレクがダビデに協力していることに気づき、その報告をサウルに持ち帰った。一方、ダビデは二つ目の要請をした。今度は武器を求めたのである。彼はまたもや嘘をつき、王のために緊急の任務に就いていると言った。ゴリヤテの剣が差し出され、

ダビデは喜んでそれを受け取り、これにまさるものはない、と叫んだ。ダビデは巨人を倒すために主に信頼したが、今は自分が倒した敵の剣を信頼するようになってしまったのである。

21:10~15 こうしてダビデはイスラエルを離れ、ゴリヤテの故郷であるガテの町に逃げた。彼はイスラエルの油注がれた王でありながら、神の民の敵の中に身を隠したのである。ペリシテ人が彼を怪しむようになると、彼は自分の命を救うために狂人のふりをせざるを得なかった。デ・ロスチャイルド (De Rothschild) は、「狂人は神に打たれながらも神に守られている不可侵の存在である、とされていることをダビデはよく知っていた」と述べている。^{*(19)} このようにして、イスラエルを代表する詩篇作者は、門の扉に傷をつけたり、ひげによだれを垂らしたりしていた。神の民の冷淡さとダビデ自身の一時的な信仰の欠如のゆえに、彼はこのような恥ずべき行為に陥った。しかし、ダビデはこの厳しい試練を通して、いくつかの貴重な教訓を学んだ。次の章に進む前に、この頃にかかれた詩篇34篇を読んでみよう。この詩篇で、ダビデの性格について新たな洞察を得ることができる。彼には驚くべき回復力があり、失敗を重ねながらも、神についての知識を深めることができたのである。

3. ダビデの逃亡とサウルによる祭司たちの虐殺 (22章)

22:1, 2 ダビデはイスラエルに戻ると、ユダの領土、ベツレヘムの南西にあるアドラムの洞穴に避難した。この洞穴は、困窮している者、負債のある者、不満のある者たちすべてが集まる場所になった。ここでのダビデは、今は拒絶されながらも、落胆している人々を救いへと招くキリストの型

である。短期間で、約四百人の小さな軍勢がアドラムに集まり、後に六百人に増えることになる。これらの人々は、社会では不適合者であったが、ダビデのもとでは勇敢な戦士となった（Ⅱサムエル23章）。

22:3～5 ダビデの両親も彼に加わっていた。両親の安否を気遣ったダビデは、モアブに赴き、自分が隠れている間、両親が滞在できるよう手配した。ダビデはモアブの女ルツの末裔であったが（ルツ記4:17）、主の敵を信頼したのは間違いであった（伝承によれば、モアブ人は最終的にダビデの両親を殺したという）。ダビデが戻って間もなく、預言者ガドは彼にアドラムを離れるように告げたので、彼は同じユダの地にあるハレテの森へ行った。

22:6～8 ベニヤミンの地ギブアで、サウルはベニヤミン人とそのしもべたちに向かって、ダビデを非難し、怒鳴り散らしていた。彼は、自分ほどにダビデが彼らに手厚く報いるだろうか、と訊ねた。結局のところ、ダビデは彼らの部族の出身ではない。サウルは自分の命を狙う陰謀を彼らが隠している、と非難した。この時点で彼は完全に被害妄想的で非理性的な状態に陥っていた。彼は自分の息子さえも含めて、だれもが自分に敵対していると考えていたのである。

22:9～15 エドム人ドエグは、王に気に入られる機会を最大限に利用しようと考え、祭司アヒメレクがダビデに食べ物を与え、主に尋ねてダビデを助けたことをサウルに告げた。祭司とその家族はすぐに王の前に召喚され、反逆罪で告発された。これに対してアヒメレクは、ダビデが王に忠実であること、サウルに忠実だと信じていた人物を助けたことの無実を訴えた。彼は、ダビデのために主に祈願したのはこれが初めてではないと強調した。ダビデがサウル

に謀反を起こし、彼を待ち伏せしているというサウルの非難については、アヒメレクは何も知らないと言った。

22:16～19 サウルの行動は、彼がすでに正気を失っていたことを証明している。護衛たちが主の祭司たちを殺すことを拒否すると、真の意味で「犬」であった異邦人のドエグは、彼らが祭司であることなど意に介さず、彼らに襲いかかり、八十五人を殺害した。それだけでは十分ではないかのように、彼はアヒメレクの町ノブを攻撃し、住民と家畜を皆殺しにした。

22:20～23 エブヤタルだけが生き残り、ダビデのもとに逃げて、事の次第を告げた。そしてダビデのもとにとどまり、ソロモンによって正當にその職を解かれるまで大祭司として仕えた（Ⅰ列王記2:27）。祭司たちの死は、ある意味ではダビデの嘘とはかりごとの結果であった（22節）。別の意味では、エリの家に対する神のさばきであった（2:31～36、3:11～14）。しかし、虐殺を命じたのはサウル自身なので、サウル自身が虐殺の責任の大部分を負わなければならない。預言者（ガド）、祭司（エブヤタル）、そして王（ダビデ）がすべてともに追放されているこの状態は、今日のキリストを象徴している。敵がキリストの足台とされ、その王座が地上に据えられるときをキリストは待っておられる。

4. ケイラの裏切り（23章）

23:1～5 アドラムの南にある町ケイラがペリシテ人の攻撃を受けているという知らせがダビデに届いた。彼は主に導かれて敵と戦い、町を救い、多くの家畜を奪い返した。

23:6～12 ダビデがケイラにいと聞いたサウルは、ダビデをそこに封じ込めようと考えた。しかし、ダビデはその陰謀に

気づき、次の行動について主に導きを求めた。ケイラにいれば安全だろうか。住民は、彼が好意を示したにもかかわらず、サウルに彼を引き渡すだろうか。エブヤタルが持って来たエポデを通して、また特にウリムとトンミムを通して、神はサウルが来れば、恩知らずの民は間違いなくダビデを裏切ることを示された。

23:13~18 そこでダビデとその部下たちは、ヘブロンヘブロンの南東にあるジフジフの荒野に逃れた。しかし、そこでも彼らは執拗に追われた。ヨナタンはそこでダビデを見つけ、主にあって彼を力づけた。今日、何と必要な奉仕であろうか。もっと多くの励まし手がいれば、教会も大きな恩恵を受けることだろう。時宜にかなった励ましのことばの力を経験した人だけが、それがたましいにもたらす祝福を知っている。ヨナタンのダビデに対する愛は、自分の方からへりくだるものだった。ヨナタンは、たとえサウルが何をしようとも、神はダビデのためにご自身の目的を果たされる、と言ってダビデを安心させた。ヨナタンのような友を持つ人は幸運である。なぜ彼がダビデと一緒にいることができず、常に家に戻ったのかは謎である。^{*(20)}

23:19~29 ジフ人もまたダビデを裏切り、ダビデの居場所をサウルに知らせ、逃亡者を王の手に渡すと約束した。ダビデはサウルが来ると聞くと、サウルの激しい追跡を受けながらマオンマオンの荒野に逃げた。ダビデが包囲されると思われたその時、ペリシテ人がイスラエルを攻撃し、サウルは追跡を断念せざるを得なくなった。期せずして、イスラエルの敵が、イスラエルに拒絶された「王」の味方となったのである。その後、エッサイの子（ダビデ）は死海の西岸にあるエン・ゲディエン・ゲディに向かった。

5. 死を免れたサウル（24章）

24:1~7 ペリシテ人の脅威が取り除かれた後、サウルはダビデを捜しに戻った。彼はダビデをエン・ゲディエン・ゲディの岩だらけの断崖まで追跡した。そこにいた時のこと、王は休憩のために洞穴の一つに入った。サウルが選んだ洞穴は無人ではなかった。その奥では、非情なまでにサウルに追撃された人物が、王の命を奪おうとする部下を制止していたのである。彼らは神がサウルを彼らの手に渡されたと思った。しかしダビデは、力づくで王国を奪い取るように、という神の命令を受けてはいなかった。彼は神の時と方法を待つことに満足していたのである。王の上着の裾を切り取ったときさえ、彼の良心は痛んだ。彼は、サウルがイスラエルの王として油注がれたという事実を軽視してはいなかった。神がこの王を排除するべきであり、ダビデは、主がこの王を排除されるまでは、彼を敬う必要があった。

24:8~15 サウルが去った後、ダビデも洞穴から出て、サウルのうしろから呼びかけた。ダビデは王に礼をして、サウルが聞いた中傷の報告は事実ではないことを語った。その日、ダビデはサウルの命を奪うことができたのに、サウルは主に油注がれた者であったため、そうしなかったのである。ダビデの手の中にあった衣の切れ端は、彼の温情の証拠であった。悪人であれば復讐することを望んだかもしれないが、ダビデにそのような欲求はなかった。彼はサウルに、死んだ犬や蚤のように無害で取るに足らない者に対して、なぜこのような容赦ない作戦を行わなければならないのですかと尋ねた。

24:16~22 ダビデのことばに一時的に感動して涙を流したサウルは、ダビデの行動の正しさと自分の邪悪さを認めた。驚

いたことに、彼はダビデがいつかイスラエルの王になるだろうと認め、自分の家族に対する温情のある処遇をダビデに厳粛に誓わせた。そして、サウルは平和的に去った。しかし、ダビデが味わった休息は束の間だった。サウルはすぐにダビデの温情を忘れてしまった。ダビデがサウルに言ったことばの中で、彼は二度、主にさばき人となってくださるよう求めた。彼は、生来の人間が正しいと思うことをするよりも、神の御手に委ねることで満足したのである。ペテロが私たちの主について覚えていたことの一つは、「ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、脅すことをせず、正しくさばかれる方にお任せになった」(1ペテロ2:23) ことであった。願わくは神が、私たちが逆境に直面しても、同じ信頼の心を持ち、冷静でいられるようにしてくださるように！

6. ナバルの愚行 (25章)

25:1～9 サムエルの死によって、士師たちの時代は終わりを告げた。今や国は王政となった。ダビデの子孫がイスラエルの王位を永遠に占めることになり、キリストがその約束の成就者となる。サムエルが死んだ時に国中を覆った悲しみは、彼がいかに深く敬われていたかを示している。

預言者(サムエル)の死後、ダビデはユダの南部にあるパランの荒野に下って行ったが、おそらく、サウルと彼の殺人計画からさらに遠ざかるためだったと思われる。2節で言及されているカルメルとは、北部にあるカルメル山のことでなく、マオンの近くの町のことである。ナバルはそこで羊の毛を刈っていたので、ダビデは慣例にしたがって若者を何人か遣わし、ナバルの群れを保護した見返りとしての贈り物を求めた。

25:10～13 ところが、ナバルはダビデのしもべたちに、自分勝手に無礼な態度で答えたので、ダビデは激怒し、ナバルとその一家を懲らしめようと、四百人ほどの部下を率いてカルメルに向かった。

25:14～22 ナバルの美しく聡明な妻アビガイルは、夫の無分別な行動が自分たちにもたらした危険を知り、急いで大量の食料を準備し、ダビデを迎えるために出かけた。ダビデはカルメルに近づきながら、自分がナバルに示した善意と、ナバルが彼に示した軽蔑を心の中で思い返していた。

25:23～31 アビガイルはダビデに会うと、彼の足もとにひれ伏し、状況を踏まえた見事な弁明をした。彼女はまず、夫が自分の名前(ナバルは愚か者、育ちの悪い男を意味する)にふさわしいことを認めた。ダビデの部下が先に来たとき、彼女はそのことを知らなかった。彼女はダビデに赦しを請いながら、主がダビデを流血から引き止めてくださったこと、そして神はダビデの敵(ナバルさえも)を罰せられることをダビデに思い起こさせた。彼女は、ダビデが何者であるのか、すなわち主に油注がれた者であることを霊的に洞察していて、主の戦いを戦っていることを心から称賛した。彼が王になったとき、敵を主の復讐に委ねずに自らの手を伸ばして復讐したときのことを振り返らなくて済むなら、どれほど幸いであることか！

25:32～35 ダビデは、この機転に富んだことばに深い感銘を受け、ナバルを亡き者にせずに済んだことを彼女に感謝した。主は、私たちを導き、警告するに適した人々を私たちの人生に招き入れる方法をご存じである。私たちは、主がそうしてくださることを感謝すべきである。アビガイルの助言は効果的であり、彼女の惜しみない贈り物は受け入れられた。ダビデはナバル

を主に託した。神が行動を起こされるのに時間はかからなかった。アビガイルは夫に相談もしないで、夫の権威を奪い、神の秩序に違反したと主張する人もいるかもしれない。しかし聖書は彼女の行動が間違っていたとは示唆していない。それどころか、彼女はそのとっさの行動によって、ナバルとその家族を破滅から救ったと言えるであろう。

25:36~44 アビガイルが家に帰ると、ナバルはひどく酔っていた。彼女は翌日まで待って、彼に事情を話した。その知らせを聞いた彼は、おそらく麻痺か、脳卒中か、または心臓発作に見舞われたのであろう。十日後、彼は自分のために貪欲にため込んだ財産をすべて残して死んだ。ナバルの死を聞いたダビデは、すぐにアビガイルに結婚を申し入れ、彼女はそれを謙虚に受け入れた。ダビデは逃亡の身となってからアヒノアムという別の妻を得ていた。一方、最初の妻ミカルは別の男に与えられていた。この物語から、自分を高くする者は低くされ（ナバルは神によって殺された）、自分を低くする者は高くされる（アビガイルは王の妻となった）ということを改めて学ぶ（ルカ14:11）。

7. またもや死を免れたサウル（26章）

26:1~4 ジフ人はまたしてもダビデの居場所をサウルに告げた（23:19参照）。サウルはすぐにダビデの小さな部隊の五倍の兵力を集め、ジフの荒野に下って行った。何がサウルを再び怒らせたのかは、ここでは述べられていない。二人が最後に別れたとき、彼らはいくらか和解したように思えた（24章）。おそらく悪意のある者たちが王の憎しみを再びかき立てたのであろう（19節参照）。

26:5~12 ダビデはサウルの陣営を偵

察し、夕方に親族のアビシャイと共に陣営に侵入し、サウルが眠っている場所にまでたどり着いた。主による不自然なまどろみがこれを可能にした。アビシャイは素早い一撃で王を打ち殺そうとしたが、ダビデはそのような行為を禁じた。なぜなら、サウルは悪人ではあったが、主に油注がれた者であったからである。サウルに手を下すのは主の責任だった。ダビデはサウルの槍と水差しを取って立ち去った。

26:13~16 ダビデは安全に陣営の外に出ると、声を張り上げ、アブネルが王の警護を怠ったことをなじった。そのような怠慢は死に値する、と。ダビデが奪った槍と水差しは、サウルが二度も彼に殺されずに済んだことを物語っていた。

26:17~20 ダビデをなお困惑させたのは、ダビデがサウルに害を加えるつもりがないことを証明したにもかかわらず、なぜこれほど執拗にダビデを追い続けるのかということであった。もし主がサウルを奮い立たせてダビデに敵対させたのであれば、ダビデは犠牲のささげ物によって主を満足させることができたであろう。しかし、もし人々がサウルの敵意を煽ったのなら、彼らは呪われるべきである。なぜなら、ダビデが神を礼拝できる唯一の聖域から彼を追いつけようとしていたからである。「行って、ほかの神々に仕えよ」（19節）という表現は、この悪人たちが、ことばではないにせよ、行動によって言っていたことである。ダビデは、「主の御前から離れて」、すなわち異国の地で死ぬことがないように願った（※20節、NASBによる）。サウルは、山でしゃこ（英訳は「やまうずら」）を追うように、蚤を獲物として追っているも同然だった。

26:21~25 サウルは、ダビデがまたも自分の命を助けたことに気づき、悔い改めたようである。彼はダビデが自分よりも

正しいと認めた。ダビデは正当防衛のために王を殺すことができたにもかかわらず、彼の命を助けたからである。ダビデは自分の正しさに目を留めてくださるよう、主に最後の訴えをした。すると、サウルはダビデを祝福し、「息子ダビデ」の将来の偉大さを預言して応答した。^{*(21)} **ダビデ**は旅を続け、サウルは自分のところへ帰って行った。

F. ペリシテでの生活 (27～30章)

1. ツィクラグの獲得 (27章)

27:1～4 死と紙一重の状態、あちらこちらを逃げ回る重圧が、ついにダビデの限界に達した。主の奇跡的なご配慮にもかかわらず、ダビデの信仰は揺らいだ。ダビデは、自分がイスラエルの油注がれた王であるという事実を見失っていた。神はダビデを王に任命されたのに、彼が治める前に殺されるのを許されるのだろうか。神はダビデをゴリヤテの手から救い出したのに、結局はサウルの手に渡されるのだろうか。否である。しかし、状況というものは、人のものの見方を歪めてしまうものである。目の前の危険は、しばしば神の約束を覆い隠してしまう。ダビデは再びペリシテ人の地に逃れ、**ガテ**の王**アキシュ**に接触した。彼が最後にここに来てから長い時間が経過していたので、アキシュは彼が逃亡者であることを知っていたと思われる。この異教徒の王は、彼を勇敢な戦士、イスラエルに対抗する同盟者であると見て、彼を温かく歓迎した。これは必ずしもダビデが21:10で会ったアキシュと同一人物というわけではない。「アキシュ」はペリシテ人の間では王族の名前だったからである。^{*(22)} **サウル**はダビデが国外に逃げたと聞くと、彼を追うのをやめた。

27:5～7 ダビデが最後にガテにいたと

き (21章)、アキシュの家臣たちはダビデを疑い、彼を殺そうとした。ダビデはそのことを忘れておらず、謙遜を装って、都に住むことを拒み、自分の町を求めた。彼には、イスラエルの国境に近い、もともとユダに属していた町**ツィクラグ**が与えられた (ヨシュア15:31)。

27:8～12 ペリシテ人のもとで一年四か月住んでいた間、ダビデはゲシュル人、ゲゼル人、アマレク人を襲撃した。これらの人々はカナンの異教徒の住民であり、もともと神によって滅ぼされるべきことが命じられていた (出エジプト17:14、ヨシュア13:13、1サムエル15:2,3)。亡命中にも、ダビデは主の戦いを戦っていた。これは非常に矛盾している。イスラエルの敵に対する勝利のためには主が彼を守ってくださると信頼できても、サウルから守ってくださるとは信頼できなかったのである。

2. サウルの破滅の予告 (28章)

28:1, 2 さて、ダビデの立場は非常に難しいものになった。ペリシテ人はイスラエルと戦おうとしており、ダビデは王から彼らに加わるように命じられた。ダビデは一見これに同意したように見えるが、2節の彼のことは二通りにとることが可能である。一つは「あなたのしもべがどのようにあなたを助けるか、お分かりになるでしょう」であり、もう一つは「あなたのしもべがどのように寝返るか、お分かりになるでしょう」である。アキシュは最初の意味と受け取り、ダビデを自分の**護衛**の一員とした。

28:3～8 互いに敵対する軍隊はイスラエルの北西部、イズレエルの平原 (ハルマゲドンの谷) に集結した。ペリシテ軍はシュネムに、イスラエル軍はギルボアに陣を敷いた。サウルは、夢によっても、ウリム

によっても、預言者によっても、主から何の応答も得られなかったので霊媒を探し求めた。以前、彼は律法に従って、イスラエルのすべての霊媒を殺すか追放するよう命じていた。さて、近くのエン・ドルの町に霊媒が見つかったので、サウルは変装して身なりを変え、死者からの助言を求めるために彼女のところへ行った。

28:9, 10 霊媒が最初に心配したのは、自分の身の安全だった。彼女は訪問者に、霊媒や口寄せに対する王の布告を思い出させた。そのような者たちの死を宣告した主の名において、サウルがどのようにして保護を約束できたのか、あるいはその神に誓いを立てて霊媒の安全がどのようにして保証されたのかは謎である。

28:11~14 次に実際に何が起こったかについては、注解者の間でも意見が分かれている。悪霊がサムエルになりすましたと感じる人もいれば、思いがけなくも、神が降霊術の会を中断させ、本物のサムエルを出現させたと考える人もいる。後者の説が選ばれる傾向にあるのは、次のような理由からである。

- (1) 霊媒は、扱い慣れた霊の代わりにサムエルが突然現れたことに驚いた。
- (2) 聖書本文にはそれがサムエルであると明記されている。
- (3) その霊は翌日に起こることを正確に預言した。

28:15~19 サウルはサムエルに、なぜ死者の世界から彼を呼び出したかを話した。サムエルの叱責は王の胸に深く突き刺さったに違いない。サムエルが仕える神が沈黙しておられるのに、サムエルが自分を助けることができると思ったのだろうか。むしろ、サムエルはサウルの最も深い恐れを確かなものにした。王国は彼から取り上げられ、以前に告げられたようにダビデに

与えられる。翌日、ペリシテ人はイスラエルを打ち負かし、サウルと彼の息子たちは死んでサムエルに加わることになる。だからといって、彼らが同じ永遠の運命を共有したわけではない。彼らをその実によって判断するなら、サウルは不信者であったのに対し、ヨナタンは信仰の人であったように思われる。

28:20~25 サウルのすべての罪は、次の夜が来る前に、彼に襲いかかることになる。サウルはやつとのことで説得を受け入れ、帰途に就く前に何かを食べることにした。肥えた子牛は屠られたが、祝うためではなかった。死を宣告された男は、陰鬱な沈黙に包まれながら最後の食事を取り、夜の闇に消えて行った。

3. アキシュに解任されたダビデ (29章)

29:1~5 ペリシテ人が戦いのために集まったとき、ダビデとその部下は彼らに加わり、アキシュと共に行進して隊列の最後尾についた。ペリシテの首長たちの中には、賢明にもダビデの参加に反対する者がいた。彼らは、ダビデが戦いの最中に自分たちに矛先を向けるかもしれないことに気づいたのである。ダビデがサウル王と和解する方法として、ペリシテ人の首を並べるにまさることがあるだろうか。この男こそ、サウルより多くのペリシテ人を殺したと称賛されていたダビデではないのか。

29:6~11 彼らの言い分はもっともだったので、アキシュはダビデにツィクラグに戻るよう求めた。ダビデの答えは、神の人にふさわしくないように思われる。ダビデは、「わが君、王様の敵と戦うことを許されるべきだ」と抗議した。たとえその敵が自分の民であったとしても。ダビデは以前にもアキシュに嘘をついたことがあり(27章)、今回もペリシテ人を欺こうとした

のだろう。ありそうもないことだが、もし、ダビデが本当にイスラエルと戦うつもりであったなら、神はそれを阻止し、同胞のイスラエル人を殺してペリシテ人の力を強めるという不名誉から彼を救ってくださったことになる。ダビデが、ゴリヤテの剣をイスラエルに対して使うことが許されるはずはなかった。

4. アマレク人の敗北 (30章)

30:1～6 ダビデがアキシュの軍勢とともに北へ行軍していた際に、アマレク人がツイクラグを急襲し、女、子どもを捕虜にして連れ去った。こうしてダビデが戻ったとき、彼が目にしたのはくすぶった自分の町の廃墟だけだった。これは彼がペリシテ人に加担したことに対する神のさばきだったのだろうか。もしそうだとすれば、ダビデは神のご性質を深く理解していたことがわかる。なぜなら、あらゆるものとあらゆる人が彼に敵対し、自分自身が神のさばきを受けているのに、彼は慰めを求めて神のもとに行ったからである。ダビデは、このような絶体絶命の危機に際して、主以外に力を求めるべき方はおられないことを知っていた。主についてこう言われている。「…主は私たちを引き裂いたが、また、癒やし、私たちを打ったが、包んでくださるからだ」(ホセア6:1)。

30:7～15 主に伺いを立てた後、ダビデは成功を確信してアマレク人を追撃した。ダビデの部下のうち二百人(三分の一)は、ベソル川より先に進むことができなかった。直近の敗北で氣力を失っていた上に、ツイクラグへの三日間の行軍で肉体的にも疲れ切っていたからである。ダビデは彼らをそこに残し、残りの四百人の部下と共に南に向かい、疲れながらも追撃を続けた。しばらくして、彼らは野で、病んでいるエジブ

ト人を見つけた。彼はアマレク人の主人に置き去りにされ、死にかけていた。彼は食べ物と水が与えられ、まもなくある程度の体力を取り戻した。安全の約束と引き換えに、彼はダビデをアマレク人の野営地へと案内した。

30:16～25 酔ったアマレク人たちが全く予想していなかったのは、勝利の祝宴に招かれざる「来客」が出現したことであった。ダビデは豹のようにお祭り騒ぎの者たちに飛びかかり、自分たちよりはるかに大きな規模の軍勢を完全に制圧した。わずかに四百人の若者だけがらくだに乗って剣を逃れた。ヘブル人の捕虜は無傷で解放され、莫大な量の戦利品がもたらされたが、すべては24時間以内の出来事だった。ダビデはアマレク人から奪った羊と牛を自分の取り分として与えられたが、部下の中には戦利品をベソルに残った仲間と分けたがらない者もいた。ダビデは「荷物のそばにとどまった者たちも、戦いに下って行った者たちと等しく分け合うものとする」という掟を定めた(民数記31:27も参照)。

30:26～31 ダビデはその戦勝品をユダにいるさまざまな友人への贈り物に取り分けた。これらの贈り物は、彼がさまよい歩いたすべての場所に送られた。それらは、神が、敵ではなく彼を繁栄させてくださったことの証拠であった。ダビデはサウルがすでに死んでいることを知らずに、サウルとの戦いで支持を得るために友好関係を強固にしようとしていたのかもしれない。

IV. サウルの死 (31章)

31:1～6 ダビデが戦いに勝利を取めた一方で、サウルは敗北を喫した。イスラエル軍は押し戻され、王の三人の息子は殺された。サウル自身も射手たちのゆえにひど

い傷を負った。ギルボア山で瀕死の状態で横たわっていたサウルは、生きていところをペリシテ人に発見されて辱めを受けないうように、道具持ちに自分を刺し殺すように懇願した。しかし、道具持ちは王を殺すことを恐れたので、サウルは自らその剣の上に倒れ込んで命を絶った。その直後、道具持ちも同じことをした。

31:7~13 イスラエルはすっかり戦意を失い、侵略軍の前に退却した。ペリシテ人が殺された者たちからはぎ取ろうとしてやって来たとき、倒れた者の中にサウルとその三人の息子たちを見つけると、彼らはサウルの首を切り落とし、国中に知らせを送った。サウルの遺体と息子たちの遺体はベテ・シャンに運ばれ、町の城壁に吊るされた。これを聞いたヤベシュ・ギルアデの住民は、遺体を回収するために10マイル(約16キロ)の道のりを肅々と進んだ。遺体はヤベシュのタマリスクの木の下に丁重に葬られた。彼らは、サウルが王としての最初の大きな戦いで、アンモン人から自分たちを救ってくれたことを忘れてはいなかった(11章)。イスラエルでは一般に火葬は行われていなかった。おそらく、ここで火葬が行われたのは、遺体の損傷が激しかったためであろう。また、ペリシテ人が遺体をこれ以上辱める可能性を防ぐためでもあった。

サウルに対する神のさばきはこれで完了した(Ⅰ歴代誌10章の注を参照)。サウルは何度もダビデがペリシテ人に殺されるように仕向けたが、結局は、彼自身が彼らの前に倒れたのである。ダビデは神に定められた通り王位を受け継いだ。ダビデは何度となく彼(サウル)のことを主の正義に委ねたが、サウルはその通りに、自分の行いにふさわしい報いを受けた。

後 注

1. (序論) ユダヤ学者アバルバネル(Abarbanel)は、この伝承を次のように説明した。「ある意味では、両書の内容はすべてサムエルに関連していると言える。サウルとダビデの行為ですらそうである。なぜなら、両者ともサムエルによって油を注がれており、いわば彼の手による作品だったからである。」(Erdmannによる引用, *The Books of Samuel, Lange's Commentary on the Holy Scriptures*, p. 1).
2. (序論) Eugene H. Merrill, *I Samuel, The Bible Knowledge Commentary*, p. 432.
3. (1:11-18) Bishop Hall, quoted in *Spurgeon's Devotional Bible*, p. 222.
4. (1:19-28) ゲセニウス(Gesenius)や他のヘブル学者たちは、その名前は神の名前(シェム)を意味すると信じている。
5. (3:1-3) George Williams, *The Student's Commentary on the Holy Scriptures*, p. 140.
6. (6:19-21) Flavius Josephus, *The Works of Flavius Josephus* (Ant. vi 1:4), p. 178.
7. (6:19-21) C. F. Keil and F. Delitzsch, *The Books of Samuel, Biblical Commentary on the Old Testament*, VII:68.
8. (10:7-9) 福音派の学者の中には、サウルは信者ではあるが、ひどく信仰を失って精神的に異常をきたした人物であると考える者もいる。彼らは、神が回心していない人間を、選民の最初の王として選ぶことはありそうにないと主張する。
9. (10:17-19) Matthew Henr, *I Samuel, in Matthew Henry's Commentary on the Whole Bible*, II:334, 35.
10. (12:1-13) ベダン(Bedan)とバラク(Barak)という名前は、古代の文献ではよく似てい

る。ヘブル語の「d」(ダレット)と「r」(レシュ)は、書き写す際によく混同され、「n」(ヌン)と「k」(カフ)の末尾の形も同様である。

11. (13:1) 旧約聖書の写本の問題の大部分は、ヘブル語の数字体系に関係しており、これは簡単に誤ってコピーされてしまうものであった。これについての詳細は、歴代誌の注釈を参照のこと。
12. (13:2-5) 前の注記を参照。
13. (14:16-23) 1885年の古いERVには次のように書かれている。「エポデを持って来なさい。彼はその時イスラエルの前でエポデを着ていたからである。」
14. (15:13-35) Christian F. Erdmann, "The Books of Samuel," in *Lange's Commentary on the Holy Scriptures, Critical, Doctrinal and Homiletical*, III:209.
15. (16:14-23) Dr. Rendle Short, *The Bible and Modern Medicine*, p. 71.
16. (17:55-58) 七十人訳はこれらの節を省いている。
17. (17:55-58) Williams, *Student's Commentary*, p. 152.
18. (17:55-58) Michael Griffiths, *Take My Life*, p. 128.
19. (21:10-15) DeRothschild, 出典不明。
20. (23:13-18) おそらく彼は、自分が個人的に間違っていることを知っていたとしても、父親の立場に忠誠心を感じていたのであろう。
21. (26:21-25) これらは単なることばの問題だったかもしれない。一方、サウルが本気であったなら、その罪と偏執狂にもかかわらず、神を信じていたという議論になるかもしれない。
22. (27:1-4) カイルとデリッチ (Keil and Delitzsch) は、50年間の統治は「不可能ではない」と示唆し、同じアキシュが両方の本

文、および I 列王記2:39にも言及されていると考える ("Samuel," VII:255)。

参考文献 (サムエル記第一、第二)

- Blaikie, William Garden. *The First Book of Samuel*. In *The Expositor's Bible*. London: Hodder and Stoughton, 1909.
- . *The Second Book of Samuel*. In *The Expositor's Bible*. London: Hodder and Stoughton, 1909.
- Erdmann, Christian F. *The Books of Samuel*. In *Lange's Commentary on the Holy Scriptures, Critical, Doctrinal and Homiletical*. Vol. 3. Grand Rapids: Zondervan Publishing House, 1960.
- Grant, F. W. "Samuel." In *The Numerical Bible*. Vol. 2. New York: Loizeaux Brothers, 1904.
- Henry, Matthew. *The Books of Samuel*. In *Matthew Henry's Commentary on the Whole Bible*. Vol. 2, *Joshua to Esther*. McLean, VA: MacDonald Publishing Company, n.d.
- Jensen, Irving L. *I II Samuel*. Chicago: Moody Press, 1968.
- Keil, C. F., and Delitzsch, F. "The Books of Samuel." In *Biblical Commentary on the Old Testament*. Vol. 7. Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Publishing Co., 1971.
- Laney, J. Carl. *First and Second Samuel. Everyman's Bible Commentary*. Chicago: Moody Press, 1982.
- Merrill, Eugene H. 1 and 2 Samuel." In *The Bible Knowledge Commentary. Old Testament*. Wheaton, IL: Victor Books, 1985.
- Meyer, F. B. *Samuel*. Chicago: Fleming H.

Revell Co., n.d. Reprint. Fort Washington, PA: Christian Literature Crusade, 1978.

Short, Arthur Rendle. *The Bible and Modern Medicine*. Chicago: Moody Press, 1953.

サムエル記第二

「王なるダビデがこの書の中心的人物である。光の中を歩む彼は、王なるメシアの型を豊かに示している。本書の前半には、彼の信仰と闘いの生涯に伴う勝利が記録され、後半には、彼が繁栄によって信仰の道からいざなわれ、自己中心への扉を開いてしまったときに彼が被った敗北が記されている。」

ジョージ・ウィリアムズ (George Williams)

序論についてはサムエル記第一を参照のこと。

構成

I. ダビデの台頭 (1～10章)

- A. サウルとヨナタンを悼む (1章)
- B. ユダの王としての戴冠 (2:1～7)
- C. サウルの家との対立 (2:8～4:12)
- D. 全イスラエルの王としての戴冠 (5章)
- E. エルサレムに運ばれた契約の箱 (6章)
- F. 神のダビデとの契約 (7章)
- G. イスラエルの敵の敗北 (8章)
- H. メフィボシェテに示されたあわれみ (9章)
- I. さらなる征服 (10章)

II. ダビデの転落 (11、12章)

- A. パテ・シェバとウリヤに対する罪 (11章)
- B. 主への告白 (12章)

III. ダビデの苦悩 (13～20章)

- A. アムノンによるタマルへの凌辱 (13:1～19)
- B. アブサロムのアムノンへの復讐と逃亡 (13:20～39)
- C. アブサロムのエルサレムへの帰還 (14章)
- D. アブサロムの反乱とダビデの逃亡 (15:1～18)
- E. ダビデの友と敵 (15:19～16:14)
- F. アブサロムの助言者たち (16:15～17:23)
- G. アブサロムの死とダビデの嘆き (17:24～19:8)
- H. ダビデの亡命からの帰還 (19:9～43)

I. シェバの反乱と死 (20章)

IV. 付録 (21～24章)

- A. 飢饉とその終息 (21章)
- B. ダビデの感謝の詩篇 (22章)
- C. ダビデの勇士たち (23章)
- D. ダビデの人口調査とその結果 (24章)

注 解

I. ダビデの台頭 (1～10章)

A. サウルとヨナタンを悼む (1章)

1:1～16 サムエル記第一29章には、サウルとヨナタンの命を奪った戦いにダビデが巻き込まれないように、主がどうされたかが記されている。実際、彼はツィクラグを襲ったアマレク人との戦いに忙殺されていた (Iサムエル30章)。ダビデがツィクラグに戻った後、北からの使者がサウルの死の知らせをもってダビデのもとに来了。その使者は服喪のしるしとして衣を裂き、頭には土をかぶっていた。彼は、傷を負ったサウルが槍にもたれ、敵軍が押し迫る中、アマレク人である彼にとどめを刺すように頼んだので、王 (サウル) の求めに応じたのだと言った。サウルの死に関するこの説明は、サウルが自殺したとされるIサムエル記31章の記述と明らかに矛盾している。最も合理的な説明は、アマレク人の説明が嘘であった、ということである。彼は、ダビデがサウルを殺した人物に会えて喜び、惜しみなく褒美をくれるだろうと期待した。しかし実際には、ダビデはその日一日中深く悲しみ、夕方になってから、主に油注が

れた方を殺したという理由で、アマレク人の処刑を命じたのであった。

アマレク人はイスラエルの宿敵であった (出エジプト記17章)。サウルが王国を失った理由の一つは、アマレク人に対する主の怒りを徹底的に実行しなかったことであった (Iサムエル15章)。アマレク人の一部は、ツィクラグを略奪したためにダビデとその部下たちによって殺されたばかりだった。したがって、このアマレク人が陣営に到着し、サウルを殺したと告げたとき、彼が褒美 (reward) ではなく剣 (sword) を受けたのは当然のことであった。

1:17, 18 ダビデがサウルの死を喜ぶどころか激しく泣いたのは、ダビデの偉大さの証しであった。

ゲルラッハ (Otto von Gerlach) はここでダビデとキリストの類似点を見ている。

ヤベシュ人 (Iサムエル31:11) を除けば、サウルに対する唯一の深い哀悼は、サウルが死ぬまで長年憎み、迫害してきた人物からのものだった。それはまさに、ダビデの名を継ぐ方が、ご自身を滅ぼそうとしていたエルサレムの陥落を思って嘆かれたのと同じである。^{*(1)}

ダビデはまた、「弓の歌」と題する感動的な哀歌も作った。「ヤシャルの書」、つまり「直き者の書」は、おそらくイスラエル民族の偉人に関する詩を集めたものであろう (ヨシュア10:13も参照)。知られている限り、この書は現存しておらず、靈感を受けた聖書の一部ではないことは確かである。

1:19～27 ダビデの、心を揺さぶる頌歌は、イスラエルの精華と言うべきサウルとヨナタンの死を嘆いている。また、この威厳に満ちた詩は、王とその息子たちの死をペリシテの町々に知らせて喜ばせないよ

うに、と警告している。サウルが死んだギルボアの山々は、干ばつと不毛に見舞われるように、と命じられている。そこでは、サウルの盾に油も塗られなかった (21節)。つまり、それは捨てられ、もはや戦いのために油を塗られることはなくなった、という意味である。サウルとヨナタンの勇敢さ (22節) と、彼らの個人的な美德が称賛されている。彼らは生きていたときと同じように死んでも一緒であった (23節)。しかし、このことは彼らの永遠の行き先を含むものと解釈すべきではない。サウルの治世から恩恵を受けた人々は、泣くように呼びかけられている (24節)。この詩は、ダビデの親友ヨナタンへの愛情に満ちた追悼のことばで締めくくられている。「ああ、勇士たちは倒れた」 (How the mighty have fallen!) (19, 25, 27節) という繰り返しは、今では英語の一部となっている。

B. ユダの王としての戴冠 (2:1~7)

2:1~7 サウルが死に、イスラエルに王がいなくなったため、ダビデは主に導きを求め、ユダの町の一つであるヘブロンに行くように指示された。ヘブロンでユダの人々は、ダビデを王として油を注いだ。ヤベシュ・ギルアデの人々がサウルを丁重に葬ったことをダビデに伝え、ダビデはすぐに彼らに感謝のことばを送り、ユダの人々に倣って自分を王と認めるよう遠回しに促した。

C. サウル家との対立 (2:8~4:12)

2:8~11 しかし、イスラエルのすべての部族が、ダビデを君主として認めたいわけではなかった。亡きサウルの軍の長であり、叔父でもあったアブネルは、サウルのただ一人生き残った息子イシュ・ボシェテを連れて行き、彼を王と宣言したのである。

ダビデは七年六か月の間、ヘブロンを首都とし、ユダ部族のみを統治した。しかし、イシュ・ボシェテが他の十一部族を治めたのは、そのうちのわずか二年間に過ぎなかった。アブネルがベリシテ人をイスラエルから追い出し、イシュ・ボシェテを父の王位に就かせるのに五年かかったのかもしれない。ダビデは王位継承権を主張したことは一度もなかったし、今回は主張はしていない。むしろ、彼はこの問題を主の手に委ねることを選んだ。もしヤハウエがダビデを王として油を注がれたのなら、ヤハウエはやがてダビデの敵を征服し、ダビデをその王国の所有者とされるはずである。それと同じように、主イエスも、全世界を支配する御父の時が来るのを待っておられる。主の支配権は、今は人類全体の少数から認められているに過ぎないが、すべての者が膝をかがめ、すべての舌がイエス・キリストは主である、と告白する、定められた日が来るのである (ペリピ2:10, 11)。

2:12~17 時が経って、イスラエル (十一部族) の軍の長、ネルの子アブネルは、ギブオンでダビデの兵士の軍司令官であったツエルヤの子ヨアブと出会った。池の反対側に座った彼らは、どちらが戦 (いくさ) 上手であるかを決めるために、若い兵士たちに競わせることにした。アブネルが若者たちに、立ち上がって競技を行うように提案したとき、彼らが遊び半分ですそうと考えていたわけではない。それは戦闘そのものと変わらなかった。十二人のベニヤミン人が十二人のユダ人と戦い、彼らは互いに殺し合った。結果は決着がつかなかったため、残った者たちの間で非常に激しい戦いが起こり、その結果、アブネルの部下たちは打ち負かされ、混乱して逃げ去った。

2:18~23 ヨアブの兄弟の一人で足の速いアサエルは、アブネルを殺そうと追い

かけた。アブネルは最初、若者の一人を捕まえるだけで満足するようにアサエルを説得しようとした。アブネルは、アサエルを簡単に殺せるとわかっていたようだが、ヨアブの敵意をさらに煽ることになるので、そうしたくなかったのである。自分を追うことはやめよ、と二度も訴えたのに、アサエルが耳を貸そうとしなかったので、アブネルは自己防衛のためにアサエルに反撃し、**槍の石突きで彼を殺した。**

2:24~32 ヨアブともう一人の兄弟アビシャイは追跡を続け、ついに**アンマの丘**に着いた。そこでアブネルはヨアブに、この無益な仲間同士の戦いを止めるように懇願した。ヨアブの返答は二通りに解釈できる。第一に、もしアブネルが最初の挑発(14節)をしていなければ、若者たちは無事に家に帰ることができただろう、という意味である。あるいは、NIVのように、もしアブネルが停戦を求めなければ、若者たちは朝まで兄弟たちを追い続けただろう、という意味である。いずれにせよ、ヨアブは戦いをやめることに同意した。アブネルとその兵士たちはヨルダン川の東、イシュ・ボシェテが都を置いていた**マハナイン**に渡った。彼は**三百六十人**の兵を失った。ヨアブとその兵士たちは**ヘブロン**に戻ったが、わずか**十九人**を失っただけであった。

3:1~5 ダビデがヘブロンで過ごした七年半の間に、**ダビデの王国**は強大化し、イシュ・ボシェテの治める**サウルの家**は弱体化した。ダビデの家族も大きくなっていった。ヘブロンに来た当初、彼には**アヒノアム**と**アビガイル**という二人の妻がいた。神の御心に反して、彼はさらに**マアカ**、**ハギテ**、**アビタル**、**エグラ**の四人を妻とした。この六人の妻によって六人の息子をもうけたが、そのうち**アムノン**、**アブサロム**、**アドニヤ**の三人はやがて彼にとって悩みの種と

なった。(後に彼には他の息子も生まれた。)

3:6~11 アブネルは、イシュ・ボシェテに仕えていると公言しながら、実際には自分の政治的立場を強化していた。権力の中心がダビデに移っているのを見たからである。イシュ・ボシェテはアブネルがサウルの**側女リツパ**と関係を持ったと非難し、おそらくこれを十一部族の支配権を握ろうとしていることの表れだと解釈した。アブネルがこの件に関して有罪であったかどうかは分からないものの、彼は激しく、また侮蔑的にそれを否定し、自分とイスラエル諸部族の忠誠をダビデに移すと宣言した。イシュ・ボシェテには抵抗する力がなかった。「この私が**ユダの犬のかしら**だとしても言うのか(8節)」とは「これまでユダに忠実であった私が、無価値で卑劣な裏切り者なのか」という意味である。

3:12~16 アブネルはダビデのところに**使者**を遣わし、**全イスラエル**を引き渡すと申し出た。ダビデはアブネルの提案に同意する前に、**サウルの娘ミカル**を返すように要求した。それによってサウルの王国に対する自分の主張を強めようとしたのである。イシュ・ボシェテはおとなしく同意し、ミカルはダビデのもとに連れて来られたが、夫の**バルティエル**は大いに悲しんだ。ダビデの私生活はこうしてさらに複雑になり、彼の伝記にまたひとつ暗い章が加わった。

3:17~21 それからアブネルはベニヤミン族とイシュ・ボシェテに従った他の部族のところへ行き、**ダビデ**こそ彼らを**ペリシテ人**の圧制から救い出すために神が約束された救済者である、と彼らに告げた。彼らの反応が明らかに好意的であったので、彼はダビデのもとを訪れ、全イスラエルを結集して忠誠を誓う用意があることを表明した。

3:22~30 アブネルがこの計画を実行

しようとダビデのもとを去ろうとしていた時、ヨアブが王宮に戻り、その日の出来事を聞いた。ヨアブは、愚かにも偵察に来た者を歓待した王を叱責した後、密かに兵士たちを送り出してアブネルを連れ戻した。アブネルがヘブロンに戻るとすぐに、ヨアブは門の近くで個人的に話し合うことを望んでいるふりをしたが、本当の目的は復讐のためにアブネルを殺すことであつた。ヨアブはアブネルの下腹を刺して弟アサエルの死の復讐を果たし、軍の長の潜在的なライバルを排除した。ヨアブは、ヘブロンが逃れの町であり、アブネルには少なくとも裁判を受ける権利があつたことを気にもしていなかったようである（民数記35:22～25）。「糸巻きをつかむ者」（29節）は（英訳で）「杖に寄りかかる者」という表現で、障害者を意味しているのかもしれない。NASBでは「糸巻き棒を握る者」（つまり、「女々しい男」）と訳されている。RSVも同様に「糸紡ぎ車を持つ者」と訳しているが、これは戦争や重労働に適さない者を意味する。

3:31～39 ダビデはアブネルのために大喪の礼を布告したが、彼を殺害したヨアブに対しては何の行動も起こさなかった。アブネルの勇氣と力をもっと名誉ある死に値するのに、彼がこのように不名誉な死を遂げたことを王は悲しんだ。33節の背後にある思いは、「アブネルは、身を守る術を知らない、経験の浅い愚か者のように死んだのだろうか」ということであろう。そこに意図された答えは「いや、彼は欺瞞的で邪悪な陰謀の犠牲となつた」である。^{*(2)} 民は王の悲しみを目の当たりにして、ヨアブが独断で行動したことを知った。実際、ダビデはツェルヤの息子たち（ヨアブとアビシャイ）の残酷さに公然と不快感を表明し、彼らを罰してくださるよう主に求めた。

第3章では、神が人間の罪と陰謀を用いてダビデに統一王国を与えられたことを学んだ。神は人の怒りさえも神をほめたたえるようにされるのである（詩篇76:10参照）。

4:1～7 アブネルの死によって、イシュ・ボシェテの王国はさらに弱体化した。軍が強力な指導者を失うやいなや、二人の反逆者、バアナとレカブが立ち上がり、王を暗殺した。彼らは、イシュ・ボシェテが昼寝をしている隙に家に入るによりこれを実行することができたのである。彼らは小麦を取りに来たふりをした。RSVは七十人訳に従って6節をこう訳している。「すると見よ、家の門番は小麦から屑を取り除く作業をしていたが、彼女は眠気に襲われ、眠り込んでしまった。そこでレカブとその兄弟バアナが忍び込んだ。」こうしてサウルの王位継承者は、メフィボシェテという名の足の萎えた若者一人だけとなった。

4:8～12 レカブとバアナはダビデの好意を得ようと、イシュ・ボシェテの首をダビデのもとに持って来た。この悪人たちは、主が彼らの行動を促された、と示唆した。しかし、ダビデはすべてお見通しであつた！神が、ご自分の王を即位させるために、ご自身の律法を破るよう人を導かれることはない。神は殺人者の助けを借りなくても、ダビデとの約束を十分に果たすことができたのである。ダビデは、彼らに、サウルを殺したと主張する者よりも罪深いと告げ、直ちに処刑するように命じた。彼らの遺体は公衆の面前にさらされ、イシュ・ボシェテの首はアブネルの墓に丁重に葬られた。

D. 全イスラエルの王としての戴冠(5章)

5:1～5 忠誠と忠義のことばを述べ、イスラエルの十一部族はユダと共にダビデを正当な王として認めた。参加した人々は I 歴代誌12:23～40に列挙されている。こ

うして、33年間続く統一国家の治世が始まった。ダビデの治世は全部で四十年間続いた。

3節には、ダビデの三度目の油注ぎが記録されている。彼は最初に、預言者サムエルによって油を注がれた（Ⅰサムエル16:13）。次に、ヘブロンでユダの全家を治める王として油を注がれた（2:4）。そして今、彼はついに全国民によって正当な王として油を注がれたのである。

5:6～10 ダビデ王の最初の軍事行動の一つは、シオンの要害をエブス人から攻略することであった。これらの異教の戦士たちは、自分たちの町が難攻不落であると考え、足の不自由な者や目の見えない者でも守れると豪語していた。ダビデは町の給水システムの弱点を見つけ、エブス人が地下の泉から町に水を引くために使っていた地下道を登るよう部下に命じた。この作戦は成功し、エブスはダビデの都とも呼ばれるエルサレムとなり、イスラエル国家の首都となった。8節の後半は、6節のエブス人の嘲りを指しており、後に「目の見えない者や足の萎えた者は王宮に入ってはならない」という慣用句になった。ミロは古代都市の要塞の一部であった（Ⅰ歴代誌11章の並行記述では、ヨアブがこの都への攻撃を成功させ、ダビデ軍の司令官としての地位を確立したことを明らかにしている）。

5:11～16 ツロの異邦人王ヒラムは、エルサレムにダビデの王宮を建てるため、資材と職人を送った。ダビデはエルサレムにいる間、申命記17:17に違反して、さらに多くの側女たちや妻を迎え、より多くの息子たちや娘たちが生まれた。メシアの王統はソロモンを通してたどることができる。エルサレムでダビデに生まれた息子たちのリストが、他に2つある（Ⅰ歴代誌3:5～8、14:3～7）が、3つのリスト間では微妙な違

い（大半は綴り）がある。

5:17～21 イスラエルが統一され、強力な中央政府が樹立されたという知らせにペリシテ人は動揺し、攻撃を決意した。彼らはエルサレムの南、レファイムの谷間に兵を集めた。主によって勝利を約束されたダビデは、敵を攻撃し、打ち破った。ダビデはその地をバアル・ペラツィム（「バアルは破られた」NKJV注、または「破邪の主」NASB脚注）と呼んだ。主が敵の隊列に裂け目を入れられたのはその地であった。ペリシテ人が捨てた偶像はダビデに押収され（21節）、後世のつまずきにならないように焼き払われた（Ⅰ歴代誌14:12）。

5:22～25 その後しばらくして、ペリシテ人はこの同じレファイム谷に戻り、イスラエルを脅かした。今度は、主はダビデに、バルサム樹の向かい側で敵軍のうしろに回り込むように命じられた。バルサム樹の上で行進の音が聞こえたら、主がペリシテ人に対して進軍しておられることがダビデに分かったことであろう。その結果、ダビデはゲバからゲゼルまでの敵を滅ぼした。ゲバはおそらくギブオンと読むべきであろう（NKJ脚注、七十人訳、Ⅰ歴代誌14:16）。

*⁽³⁾ ダビデは、ある戦い（19節）に対する神の導きが、次の戦い（23節）でも同じであると想定していなかったことに注目しよう。私たちは何事においても、常に神の御心を求めなければならない。最初の戦いにおける神の戦略は、直接攻撃であったが、二度目の戦いは待ち伏せであった。

E. エルサレムに運ばれた契約の箱（6章）

第6章の出来事は、第5章に記録された出来事の直後に起きたものではない。サムエル記第二は、必ずしも厳密な時系列に従ってはいない。

6:1～7 神の箱について私たちが最後

に読んだのは、Ⅰサムエル7:1,2であった。箱はペリシテ人によって送り返され、キルヤテ・エアリムのアビナダブの家に置かれた。多くの年月が過ぎた。その後ダビデは、エルサレムが政治上だけでなく宗教上の首都となるように、箱をエルサレムに運ぶことにした。ダビデは、それを運び上げようと、イスラエルの精鋭三万を連れてユダのバアラ（キルヤテ・エアリムと同じ）に向かった。神は、契約の箱をケハテ族が（二本の）棒の上に載せ肩に担いで運ぶように指示しておられた（民数記7:9）。ところがダビデはそうせずに、新しい荷車を作り、喜び勇んで箱をナコン（Ⅰ歴代誌13:9ではキドン）の打ち場に運んだのである。そこで牛がよろめき、箱は荷車から落ちそうになった。とっさにアビナダブの子ウザが手で箱を支えた。祭司でさえ箱に触れることは禁じられていたので（民数記4:15）、ウザは即座に主に打たれて死んだ。ペリシテ人が何度も箱に触れても滅ぼされなかったのに、なぜ箱に触れたウザは神に打たれたのかという疑問がしばしば投げかけられてきた。その答えは、「人は神に近ければ近いほど、どんな悪に対しても、より厳粛に、そして速やかにさばかれる」ということのように思われる。さばきは神の家から始まらなければならない（Ⅰペテロ4:17参照）。

神がとられた行動は厳しすぎたのだろうか。私たちが神を自由に裁けると感じるのは、神の神聖さと威厳に対する感覚が欠けているからである。契約の箱は、イエスが来られるまでは、人が目にできる神の現れに最も近いものであった。ウザはこれを無視した。彼の死はイスラエルの民が神の栄光を真剣に受け止めるための永遠の教訓となった。私たちが「御

名があがめられますように」と祈るとき、私たちはことばと行動で、本気でそう願っているだろうか（*"Daily Notes of the Scripture Union"*）。

6:8～11 ダビデはこの厳粛なさばきに対して主に抗議し、契約の箱を都に運ぶ計画を一時的に断念した。その代案として、それを、エルサレム近郊にあったと思われるオベデ・エドムの家に置かせた。契約の箱が彼の家にとどまった三か月間、主はオベデ・エドムの家を大いに祝福された。

6:12～15 この祝福のことを聞いたダビデ王は、神の箱をエルサレムに運ぶことを決意した。Ⅰ歴代誌15:13～15には、この三か月間、ダビデは箱をどのように運ぶべきか、聖書を調べたことが記されている。新しい荷車は放棄され、レビ人が箱を肩に載せて運んだ。主がまだ怒っておられないかを確かめるために、主の箱を担ぐ者たちが慎重に六歩進んだ後、ダビデは牛と肥えた羊をいけにえとして献げた。そして、彼らが通りで踊っている間に、箱はダビデの町の仮設の天幕に運ばれた（詩篇68篇が書かれたのはこの時だと思われる）。王自身の喜びは一通りではなく、主の御前で力一杯踊った。ダビデはいつもの王服の代わりに、亜麻布のエポデを着ていた。

6:16～23 妻のミカルが窓から見下ろすと、ダビデがエポデを着て、彼女の目には王としてはしたなく見える振る舞いをしていた。ダビデが家に戻ると、ミカルはダビデが公衆の面前で卑猥な踊りをしていたという、的外れの非難をした（20節の「裸になる」は、14節に照らして理解されなければならない）。ダビデは、踊りは主に對する喜びの表現である、と答え、神に関わることへの熱心を隠すつもりはない、という思いを洩らした。また、自分は人々から

軽蔑され、自分の目にも卑しく思えるようになるだろうが、ミカルの言う「女奴隷たち」からは敬われるだろう、と。ミカルはその批判的な態度のために、子どもを産まない妻、という非難を、死ぬその日まで受けた。これは、批判的精神からは何も生まれないことに気づかせる出来事である。

F. 神のダビデとの契約（7章）

7:1～5 ダビデは、神の箱が天幕の中に置かれているのに、自分が立派な家に住んでいるのは不適切であると感じた。そこで彼は、神の箱のための家を建てるつもりであることを預言者ナタンに伝えた。ナタンは、最初同意したが、それは主に相談することなく行動したためのものである。その後、主のことが彼に臨み、ダビデがヤハウエのために神殿を建てることは許されないと告げられた。

7:6～11 主は出エジプトの時からずっと天幕に住んでおられたことをナタンに思い出させた。天幕はイスラエルの民が移動している間は適していたが、ついに、場所の定まった神殿を建てる時が来たのである。

7:12～15 次に、主はナタンに、ダビデと結ぶ無条件の契約を明らかにされた。この契約は、ダビデに息子（ソロモン）が生まれ、その息子が神殿を建てること、その息子の王位が永遠に確立されること、彼が罪を犯しても、神が彼を正し、神の慈しみが絶えることはないことを約束するものであった。

7:16, 17 さらに、ダビデの家、王国、王位は永遠に堅く立ち、ダビデ自身の子孫が王座に就くことが約束された。ダビデの王朝はバビロン捕囚以来中断されているが、ダビデの子孫であるキリストが全地を統治するために戻られるときに回復される。ジェンセン（Irving L. Jensen）は次のよう

に詳しく説明する。

ダビデは神のために神殿を建てることを望んでいたが、ソロモンにその特権が与えられた。言うまでもなく、ダビデの生涯をかけて行った神のための働きの本質は、建てることではなく、戦うことであった。しかし、この戦いによってさえも、ダビデは彼の心が切望した礼拝の家の基礎を築くために、他者に道を整えていたのである。戦いが終わると、ソロモンはダビデが用意した資材で神殿を建てた。ダビデは、強大な敵に対するキリストの苦難と勝利を表している。ソロモンは、苦しみと戦いが終わった後の栄光のキリストを表している。キリストを礎石とする神の真の神殿である教会は、終わりの日にその全貌を現す。教会が苦難と戦いの日々を送っている今、神のためのこの栄光の建物の資材が準備されているのである。^{*(4)}

7:18～29 神の恵みの契約に深く心を動かされたダビデは、仮設の天幕に入り、ここに記されている感謝の祈りをささげた。ブレイキー（William Garden Blaikie）は次のように言う。

ダビデはこの祈りの中で、家柄も人物も目立たない者を神が選ばれたという過去に対する驚き、そして「どうして私をここまで導いてくださったのですか」という現在に対する驚き、そしてさらに、未来において、彼の家が永続するように備えられていることへの驚きを表している。^{*(5)}

「神、主よ、これが人に対するみおしえなのでしょうか」(19節)とは、神が互いに示すように人に命じられたのと同じ愛と配慮をもって、ダビデを扱われたことを意味している。

G. イスラエルの敵の敗北 (8章)

8:1, 2 ダビデの王としての政策は、彼の統治に反抗する異教徒の住民を王国から一掃することであった。この政策の結果、イスラエルの領土は拡大した。例えば、彼はペリシテ人を破り、メテグ・ハ・アンマ、すなわちガテを占領した (I 歴代誌18:1)。彼はかつてガテで狂人のふりをしたが (I サムエル21:10～15)、今度はそこで王としての役割を果たすことになった。また、彼はモアブ人を征服し、測り縄を使ってその三分の二を選んで死刑にした。イスラエルに対してモアブの裏切り行為があったに違いない。

8:3～8 ダビデの次の勝利はアラム地域であった。彼はハマテとダマスコの間にあるツォバの王ハダドエゼルを破り、戦車千両 (※英訳)、騎兵七百 (※英訳)、歩兵二万を捕獲した。

ダビデはまた、戦車百両分の馬を除くすべての戦車の馬の足の筋を切った。^{*(6)} これは、馬が脚の腱を切られて、戦いに適さないようにしたことを意味する。ダマスコのアラム人がハダドエゼルを助けに来たとき、ダビデはそのうちの二万二千人を討ち、アラムを属国とした。それからダビデは、ハダドエゼルから奪った青銅と金の盾を持ってエルサレムに帰った。

8:9～12 隣のハマテの王トイは、ハダドエゼルに対するダビデの軍事的勝利を祝い、銀、金、青銅の贈り物を送った。これらの貴金属は、ダビデが戦いで獲得した他のすべての銀や金とともに、主に献げられ、

後に神殿で用いられた。

8:13 ここには明らかな矛盾がある。そこには、ダビデが塩の谷でアラム人一万八千人を殺したと書かれているが、I 歴代誌18:12では、アビシャイが塩の谷で一万八千人のエドム人を殺したと書かれている。確かに、いくつかのヘブル語写本や、古代の七十人訳やシリア語訳、そして、ここII サムエル8:13にも「エドム人」という表現が見られる。^{*(7)} しかし、サムエル記第二ではダビデがこの勝利で名を上げ、歴代誌第一ではアビシャイに栄光が帰されているのは異例である。歴代誌第一は通常、ダビデを非常に称賛している。おそらく、戦争ではよくあることだが、「軍の高官」、この場合はダビデが「総司令官」として勝利の功績を認められたのであろう。しかし、実際の戦闘の指揮はアビシャイが執り行い、ダビデの系譜を強調しようとする編者でさえ、聖霊に導かれて、戦場の指導者に注目させたのである。さらに事態を複雑にしているのは、詩篇60篇の表題に「ヨアブ (アビシャイの弟) が塩の谷でエドムを一万二千人打ち殺したときに」と記されていることである。^{*(8)} ユージン・メルリ (Eugene H. Merrill) は次のような可能性を指摘している。

おそらくこの違いは、この作戦全体がアビシャイの直接の指揮下にあり、ヨアブが (彼の配下の兵士たちとともに) エドム人の三分の二を殺した責任を負っていたことに注目することで説明がつくだろう。^{*(9)}

8:14 ダビデがエドム全土に守備隊を置き、すべてのエドム人を自分のしもべにしたという事実は、13節の「エドム人」というNKJV脚注の読み方、および歴代誌の

並行箇所すべての写本の確かさを裏付けているように思われる。

8:15~18 こうしてダビデの王国と権力は大いに拡大し、彼は正義と公正をもって統治した。16節から18節には、ダビデの側近の一部が列挙されている。

ヨアブ—軍団長、ヨシャファテ—史官、ツァドクとアヒメレク（おそらく書写者の間違いで、エブヤタル。下記参照）—祭司、セラヤ—書記または秘書官、ペナヤ—ダビデの護衛担当、ダビデの息子たち—主要ポストの大臣（英訳）。17節には本文上の問題がある。その箇所とⅠ歴代誌18:16と24:6では、アヒメレクはエブヤタルの子とされているが、Ⅰサムエル22:20では、エブヤタルは「アヒメレクの子」とされている。最も単純な解決法は、アヒメレクをエブヤタルの子として記載している箇所で、書写者が名前を入れ替えた可能性があるということである。

しかし、他のすべての世代が同じ名前を持つ、という旧約聖書の慣習に基づく別の可能性もある。つまり、孫は祖父の名前にちなんで名づけられたのである。したがって、どの時代でも、ツァドクの祭司の同僚は、エブヤタルかアヒメレクのどちらかであった。エブヤタルとアヒメレクは、主の時代にアンナスとカヤパがそうであったように、同僚の祭司として機能していた（ルカ3:2）。サウルがノブでアヒメレクとその息子たちを殺したとき、エブヤタルだけが生き残った。ダビデが王になったとき、彼はエブヤタルを大祭司に任命したが、ツァドクは解任しなかった。

H. メフィボシエテに示されたあわれみ（9章）

9:1~13 ダビデは、ヨナタンに親切を示すというヨナタンとの契約（Ⅰサムエル

20:14~17）を思い出し、それを果たす機会を求めていた。亡きサウル王のしもべツイバは、ヨナタンの足の不自由な息子がヨルダン川の東側にあるロ・デバルに住んでいると報告した。ダビデは彼をエルサレムに連れて来させ、家族の地所を彼に返すように命じ、王室の食卓で食事ができるように手配した。ツイバとその息子たちは、メフィボシエテに仕えるように任命された。メフィボシエテは、不毛の地（ロ・デバルは「牧草地がない」という意味かもしれない*⁽¹⁰⁾）に住み、罪の下に売られ（4節のマキルは「売られた」という意味）、まだ回心していないたましいを描いている。彼は没落したサウル家から見捨てられた者であった。彼は両足が不自由だったため、王のもとに慈悲を乞いに行くこともできなかった。しかし、恵み深い君主は、彼を祝福するために彼を探し出した。一旦メフィボシエテが見つかり、莫大な富と王の食卓での交わりの場を与えられた。救いと類似点は明らかである。メフィボシエテのように、私たちは無力で（神のもとに行くことができず）、絶望的な状態であった（墮落した人類の一人であった）。しかし、恵みによって、私たちは神の恩恵の対象となった。私たちは神の家族の一員に引き上げられ、キリストとの共同相続人となったのである。

かくも驚くべき、崇高な愛を前にしては
わが心、わが命、わがすべてを献げるほ
かなし

アイザック・ウォッツ（Isaac Watts）

I. さらなる征服（10章）

10:1~5 アンモン人の王ナハシュは、かつてダビデに好意を示したことがあったらしい。このナハシュは、サウルが治世の

初期に打ち負かしたナハシュと同一人物である（Ⅰサムエル11章）。ナハシュは逃亡中のダビデを助けたのかもしれない。サウルは一時期二人にとって共通の敵であったからである。ダビデはその忠誠に報いたいと思い、父の死後即位したナハシュの息子ハヌンに使者を遣わした。アンモン人の首長たちは、ダビデの部下がスパイではないかと疑ったので、ハヌンは彼ら一人ひとりを侮辱し、屈辱的な目に遭わせるように命じた。ダビデは辱めを受けた使者たちを見て激怒した。

10:6～8 アンモン人はこれを知るや否や、北からアラム人を雇ってイスラエルと

の戦争に備えた（Ⅰ歴代誌19章参照）。こうしてヨアブ率いるダビデの兵士たちは、アラム人とアンモン人という二つの軍勢に直面することになった。ジョン・ヘイリー（John Haley）は、6節とⅠ歴代誌19:6,7との間の明らかな矛盾について次のように説明している。

ベテ・レホブはメソポタミアの小王国の一つであり、アラムのマアカ、ツォバ、アラムのトブも同様であった。したがって、名前と数は次のように一致している。^{*(11)}

サムエル記第二

ベテ・レホブとツォバのアラム人	20,000人
トブのアラム人	12,000人
マアカのアラム人	1,000人
合計	33,000人

歴代誌第一

ツォバのアラム人など	32,000人
マアカのアラム人（数は記されていない）	[1,000]
合計	33,000人

10:9～14 ヨアブは部下を二つのグループに分けた。彼は自らイスラエルの精鋭を指揮し、アラム人に向かって進軍した。彼の兄弟アビシャイは、残りのイスラエル人を率いてアンモンに向かって進軍した。両將軍は、一方に危険が及んだ場合、互いに援軍を送ることに合意した。アラム人はヨアブとその部下たちが広野で攻撃すると逃げ出した。すると恐れをなしたアンモン人は彼らの町（おそらくラバ）に退却した。

10:15～19 それから間もなく、アラム人は軍を再編成し、他のアラム諸国に援

軍を要請した。彼らはヨルダンの東、ヘラム（正確な位置は不明）まで進軍したが、そこでダビデの軍隊と遭遇し、敗北した。イスラエル軍は戦車兵七百と騎兵四万を撃破した。Ⅰ歴代誌19:18では「戦車兵七千、歩兵四万」と記されている。ウィリアムズ（George Williams）は、七百両の軽戦車、四万の歩兵旅団と、七千両の重戦車から成る部隊が存在したと推測している。^{*(12)} この戦いでアラム人はダビデの力を思い知り、イスラエルと和を講じ、これ以上アンモン人を助けることを拒否した。

II. ダビデの転落（11、12章）

A. バテ・シェバとウリヤに対する罪（11章）

11:1～5 ダビデの悪名高い道徳的な過ちは、次の三つの要因によって引き起こされたと、高名な注解者マシュー・ヘンリー（Matthew Henry）は述べている。(1)「職責の怠慢」(2)「安楽を愛し、怠惰な気分」に甘んじる心(3)「さまよう視線」。^{*(13)}

その年の春、ダビデはアンモン人との戦いに出陣せずに、ヨアブを遣わして彼らと戦わせ、自分は家で怠惰に過ごした。怠惰な時は、しばしば最大の誘惑の時である。ある夕べ、彼が王宮の屋上から外を眺めると、美しい女性が沐浴しているのが見えた。調べてみると、彼女はダビデの勇士の一人、ウリヤの妻バテ・シェバであることが分かった。ダビデは、既に儀式的な汚れから身を清めていたバテ・シェバを呼び寄せ、彼女と姦淫を犯した。その後、彼女は自分の家に戻った。彼女は妊娠したことが分かったと、その知らせをダビデに送った。

11:6～13 それから王は自分の罪を隠す計画を立てた。まず、ウリヤを戦場から呼び戻し、ヨアブとその軍隊の進捗状況を知りたい、と偽った。ウリヤが質問に答えた後、ウリヤに家に帰るように命じ、バテ・シェバと交わることを期待した。そうすれば、赤ん坊が生まれたとき、ウリヤは自分の子だと思うはずだった。しかし、ウリヤはダビデの計画を狂わせた。彼は家に帰らず、王宮の門のあたりで寝た。彼は、国が戦争状態にある限り、家で快適な思いをすることはできないと感じていたのである。切羽詰まったダビデはウリヤを酔わせたが、忠実な兵士はそれでも家に帰ろうとしなかった。ウリヤの忠誠心と誠実さは、

王の裏切りと際立った対照をなしている。

11:14～17 その後、ダビデは、最も卑劣な行為に及んだ。彼はウリヤに、ヨアブへの手紙を届けるよう命じた。その手紙にはウリヤの死刑宣告が書かれていた。王はヨアブに命じて、ウリヤを激戦の真っ正面に出させ、死が避けられないようにした。そうすれば、ウリヤは生まれてくる赤ん坊が自分の子ではないと否定する機会を失う。ヨアブは、ウリヤが確実に殺されるように戦いを指揮した。彼は部隊に前進を命じ、次に両翼に撤退を命じた。ウリヤと彼の部下が中央で前進すると、城壁の上にいるアンモン人の格好の標的となった。軍事的にはばかげた作戦だったが、ウリヤを排除するという目的は達成された。しかしその代償として、ダビデの他の多くの忠実な部下たちの命をも奪うことになった。

11:18～21 ヨアブがダビデに報告を送れば、王がこの軍事的敗北を怒ることが彼には分かっていた。ダビデはこう言うだろう。「なぜそんなに近づいたのか。ギデオン（エルベシェテ）の子アビメレクが同じことをして殺されたのを覚えていないのか」と（士師記9:50～55参照）。そこでヨアブは使者に対し、王の怒りを和らげるため、「あなたの家来、ヒットイト人ウリヤも死にました」と付け加えるように命じた。そうすればダビデはその日の軍事的失敗を忘れるはずである、と。

11:22～27 使者は指示された通りにダビデに報告した。すると使者は「軍事上の不運は避けられないこと、そして戦場では剣が見境なく人を食い尽くすのだから、ウリヤの死を悲しんではならない」とヨアブに伝えるように命じられた。こうしてダビデは偽善的にも、「死は必然であり、気まぐれである」という宿命論的なコメントで自分の深い罪悪感を隠そうとした。慣例

の喪の期間が過ぎてから、ダビデはバテ・シェバを妻として迎えた。しばらくして、赤ん坊が生まれた。

聖書がダビデの生涯のこの出来事を伝えていることは、聖書の忠実さの指標である。聖書は、神の民のありのままの姿を、欠点も含めて赤裸々に伝えているからである（“*Daily Notes of the Scripture Union*”）。

B. 主への告白（12章）

12:1～9 一般に、11章と12章の間には約1年の時が流れたと考えられている。その間、主の御手はダビデの上に重くのしかかっていた。彼の霊的葛藤が詩篇32篇と51篇に描かれている。預言者ナタンは、次の譬え話を持ってダビデのもとを訪れ、この件に関する判断を求めた。「多くの羊を飼っている金持ちの男がいたが、訪問客があった時に、自分の羊を調理するのを惜しんだ。代わりに、彼は貧しい人の雌の子羊を奪い取り、それを屠った。」ダビデは、自分の罪よりも他人の罪をさばくことが容易にできた。彼は怒り、その男は四倍にして償いをすべきであり、その罪のために死に値すると宣言した。ナタンは臆することなくダビデに非難の矛先を向け、こう言った。「あなたがその男です。神はあなたに恵みを施し、あなたを王とし、あなたを豊かにし、あなたの心の望むものをすべて与えられた。ところが、あなたは、バテ・シェバをその夫から奪い、自分の罪を隠すために彼を殺したのです」と。

12:10～14 それから、王に対する厳粛な宣告が次のように言い渡された。彼の子どもたちは彼にとって悲しみとなる。彼の家族は血なまぐさい争いで引き裂かれる。彼の妻たちは彼から奪われ、公然と犯され

る（Ⅱサムエル16:22参照）。彼の罪深い行いは、世間一般に知れ渡ることになる、と。するとダビデは、悔い改めの場所に行き、自分の罪が主に対するものであることを告白した。モルガン（Campbell Morgan）は次のようにコメントしている。

13節の「…も」ということばに注目しよう。人は真心から罪を告白するときに、その罪を消し去る。それによって、神もその罪を消し去ることが可能になるのである。^{*(14)}

ナタンはすぐに、彼の罪の罰は免除され、彼は死なないと保証した。しかし、彼の罪の結果は彼につきまとう。実際、彼自身がこの譬え話の金持ちについて述べたように、四倍にして償わなければならなかった（出エジプト記22:1）。赤ん坊は死に、アムノンは殺され（13章）、アブサロムも殺され（18章）、アドニヤは処刑される（Ⅰ列王記2章）ことになる。

12:15～23 その子が病気になると、ダビデはひれ伏して祈り、断食した。彼は深く悲しんだ。しかし、その子が死んだことを知ると、彼は起き上がって食事をし、あの子はもう戻って来ないが、いつの日か自分は死んであの子のもとに行く、と説明した。23節は、乳飲み子や幼い子どもを失った、信仰を持つ両親にとって、大きな慰めとなっている。マシュー・ヘンリー（Matthew Henry）は次のように述べている。

信仰を持つ親であるなら、幼くして死んだ子どもたちについて、彼らのたましいがあので安らかであることを望んでよい確かな理由がある。なぜなら、その

約束は私たちと私たちの子孫に与えられており、幼児のように、自分の心の扉を閉じない人々に果たされるからである。^{*(15)}

私たちは、責任能力のある年齢に達する前に死んだ子どもたちが天国に行くことを確信することができる。なぜならイエスが「天の御国はこのような者たちのものなのです」(マタイ19:14)と言われたからである。ダビデが神のご性質を深く理解していたことは、神のさばきに対する彼の対応から明らかである。神のさばきが下る前に、ヤハウエがあわれみの神であることを知って彼は祈った。さばきが下った後、ヤハウエが義の神であることを知って彼は礼拝した。彼は過去のことを忘れ、神の懲らしめを受け入れ、将来に目を向けた。神がなおも祝福してくださることを知ったので、彼は絶望しなかった。そして彼の考えは正しかったのである。

12:24, 25 パテ・シェバはもう一人の息子、ソロモンを産んだ。ソロモンは父の後を継いで王となることが定められていた。神は預言者ナタンを通して、その子にエディデヤ(ヤハウエに愛された者)というもう一つの名をお与えになった。

12:26~30 さて、物語は11:1でダビデの罪によって中断されたラバへの攻撃に戻る。ヨアブは要塞のある頂上部分を除く、町のほぼすべてを制圧したようである。(ヨセフス^{*(16)}とNKJVは、ヨアブが町の給水施設を制圧し、降伏が迫っていたと述べている。)それから彼は、ダビデを呼び寄せて戦いを終わらせ、勝利の功績をすべてダビデのものとした。ヨアブによる驚くべき無私の行為であった。ヨアブは、よく言えば予測不能な人物である。時には、人格の本当の強さを示すようなこともあった。しかし、彼の全体的な行動は、狡猾で残忍、

かつ悪どい策略家のそれだった。ダビデはラバを制圧し、金一タラントの冠と、その他多くの戦利品という報いを得た。

12:31 聖書学者の間では、最後の節が、ダビデがアンモンの人々に課した残酷な刑罰を描写しているのか(KJV「そして民を石のこぎりや、鉄のつるはし、鉄の斧の下に置き、煉瓦を焼く窯の中を通らせた」)^{*(17)}、それとも単なる農作業や工業労働を強制しただけなのか(NKJV)について意見が分かれている。後者の方が、敵に対処するダビデの典型的な方法のように思われる。

III. ダビデの苦悩(13~20章)

A. アムノンによるタマルへの凌辱(13:1~19)

13:1~14 アブサロムはダビデとマアカとの間の子であり、アムノンはアヒノアムとの間の子であったため、二人は腹違いの兄弟であった。アムノンは、アブサロムの美しい実の妹、したがって自分の異母妹であるタマルに情欲を抱いた。厳重に守られた生活を送り、純潔を保っていたタマルにどのように近づけばいいのか、彼には見当もつかなかった。そこでヨナダブ(ダビデの甥、3節)が解決策を提案した。アムノンは病気のふりをして彼女を自分の寝室に誘い込み、看病させた後、無理やり彼女を犯した。

13:15~19 犯行が行われた後、アムノンは、よくあるように、これまで彼女を愛した以上に彼女を憎んだ。欲望と憎悪は密接に関係している。彼は彼女を追いつめようとしたが、彼女は去ろうとしなかった。そこで彼はついに彼女を力づくで追い出させた。「見なければ忘れる」(“Out of sight, out of mind.”)と望んだのである。彼女

は喪服を着ていたため、アブサロムは起こったことを察知した。

B. アブサロムのアムノンへの復讐と逃亡 (13:20~39)

13:20 アブサロムは、たいして重大なことではないかのように振る舞ってタマルを慰めたが、実際にはすでにアムノンへの復讐を企てていた。何の落ち度もないのに不名誉を受け、結婚相手として望まれなくなったタマルは、兄アブサロムの家でわびしく暮らしていた。これはおそらく、彼女が未婚のまま一生を送り、亡くなったことを意味している。情欲は罪ある者はもちろん、罪のない者をも傷つける。

13:21 ダビデは激しく怒ったが、アムノンを本来罰すべき仕方では罰しなかった。おそらく、彼自身の罪が誰の記憶にも新しかったからであろう。

彼は自分の義務を知ってはいたが、その両手は縛られていた。これは、故意の罪が私たちから道徳的自由、言論の自由、証しの自由を奪うやり方である (“*Daily Notes of the Scripture Union*”).

アムノンが彼の長子であり(I 歴代誌3:1)、王位継承者であったことも、ダビデに影響を与えたかもしれない。

13:22~29 アブサロムは復讐の時を待った。それは丸二年後に訪れた。ベテル近郊の羊の毛の刈り取りの時期に、いつものように盛大な祝宴が計画された。アブサロムの執拗な招待に父は乗り気ではなかった。おそらく息子に多額の費用をかけさせたくないと考えていたのであろう。しかし、王の息子たち全員と、とりわけ長男として不在の父の代理を務めるアムノンを招くことには成功した。あらかじめ決めておいた

合図で、アブサロムの家来たちはアムノンを殺した。残りの王子たちは恐怖に駆られて、急いでエルサレムへ逃げ帰った。

13:30~36 そうこうしているうちに、アブサロムが息子たちを皆殺しにしたという知らせがダビデに届いた！ダビデはまたしても悲しみに暮れた。ヨナダブは、死んだのはアムノンだけであり、アブサロムはタマルが暴行を受けたその日から彼の殺害を企てていたのです、と誤った報告を訂正した。その後間もなく、ダビデの息子たちは大きな嘆きとともにエルサレムに戻り、彼らがまだ生きている、というヨナダブの報告を裏づけた。

13:37~39 アブサロムは命からがらアラムのゲシュルに逃れた。そこは母が住んでいた場所で、母方の祖父タルマイが王であった場所でもある。アブサロムはゲシュルに三年の間住んだ。アムノンはアブサロムより年上で、死ぬまで王位継承権を持っていた。アムノンが死ぬと、アブサロムは自分が王位に就く姿を想像した。アムノンの死に対する悲しみが、時間の経過とともに和らいだダビデ王は、再びアブサロムに会いたいと切望した(※英訳、口語訳による)。

C. アブサロムのエルサレムへの帰還 (14章)

14:1 ヨアブは、王がアブサロムを何とかしてエルサレムに連れ戻したいと願っていることに気づいた。しかし民衆は、アブサロムが殺人の罪を犯し、処刑されるべきであることを知っていた。そのため、世間の非難を恐れたダビデはアブサロムを呼び戻すことができないでいた。

14:2~7 そこでヨアブは、ベツレヘム近郊のテコアから、ダビデと同じような家庭事情の女をダビデのもとに送った。彼女

は深い悲しみに暮れているふりをして、自分の息子がもう一人の息子を殺してしまったことを話した。彼女の家族は今、彼女の唯一の相続人の死を要求している。これでは家名が地上から完全に消えてしまうことになる。

14:8~13 最初、王は彼女に、家に帰って返答を待つように言った。おそらく、殺人犯を免罪にする良心の呵責を回避したかったのであろう。しかし彼女は即答を求めた。そうすれば、ダビデ自身の判断によってダビデを罠にかけることができるからである。彼女は、ダビデの判断が引き起こすかもしれない責任も自分が引き受ける、と申し出た。ダビデ王は、もう一度一般的な話をして、彼女の安全を約束した。すると彼女は、単刀直入に息子が殺されないことの保証を求めた。王がそうするや否や、彼女は王を罠にかけた。もし王が彼女の息子に赦免を与えるのなら、なぜ追放されているご自分の息子アブサロムを復権させないのですか、と。

この女性による仮定の状況は、ダビデの状況におおよそ類似している。息子の一人が死に、その親族は報復として、罪を犯した者の死を求めている（7節）。ダビデの決断は慈悲を示し、中東では何世代にもわたって続くことが多い血の復讐を一旦停止させた。しかし女性は、この話をダビデとアブサロムにしきりに当てはめようとするので、ダビデは、またしてもナタンの時と同じように、自分自身の正しい判断に縛られてしまう。追放され、怯えているアブサロムを、保護し、復権させないわけにはいかないからである（“*Daily Notes of the Scripture Union*”）。

14:14 女は、地面にこぼれた水のように、過ぎ去ったこと（つまりアムノンの死）は二度と集めることができないのだから、なぜそれにこだわるのか、と言いたかったようである。また、人生は、長引く争いに費やせるほど続かない、と示唆しているのかもしれない。^{*(18)} 14節の最後の部分は、（ダビデがよく知っているように）神は罪人をすぐに滅ぼされるのではなく、罪人が赦され、回復される手段を講じてくださる、という意味のように思われる。神がこのように行動されるのであれば、王もそうすべきではないだろうか、と。

14:15~23 女は、そのような神のごとき慈悲を期待して王のもとに来たのです、と言った。彼女は自分の息子のためにそれを得たので、今度は王の息子のために嘆願しているのである。王はヨアブが指図したのではないかと疑い、女も素直にそれを認めた。王は、アブサロムが悔い改めていないにもかかわらず、アブサロムをエルサレムに連れ戻すよう、ヨアブに力なく命じた。ダビデがこのようなことをしたのは不義の最たるものであり、そのために高い代償を払うことになった。

14:24~33 丸二年の間、アブサロムはエルサレムに住んでいたが、父の前に出ることを許されなかった。（彼の生まれつきの美貌と豊かな髪は、イスラエルの民の心を奪うことになる要因として挙げられている。）二年後、アブサロムはヨアブに連絡を取り、王に会う許可を得ようとした。ヨアブが二度も彼のもとに来ることを拒否したので、アブサロムはヨアブの大麦畑を焼くように命じた。するとヨアブはすぐに彼のところにやって来た！父に謁見したい、というアブサロムの願いは認められ、二人は再会した。タマルが犯されてから七年、アムノンが殺害されてから五年が経ってい

た。アブサロムは五年間、父に会っていなかった。ダビデはアブサロムを赦し、処刑することはせずにエルサレムに連れ戻したが、ダビデは起こったことを決して忘れるとはしなかった。しかし、二人がようやく対面したとき、アブサロムは完全な赦免を受けた。するとアブサロムは、父から受けた恩義を足掛かりとして反乱を起こした(15~18章)。ダビデは息子の命を助けたが、それに対してアブサロムは父の殺害を企てたのである。ヨアブの一連の行動は、ダビデの歡心を買うと同時に、次の王位継承者であるアブサロムの歡心を買うためのものでもあったようである。

D. アブサロムの反乱とダビデの逃亡 (15:1~18)

15:1~6 この時点までアブサロムは王になりたいという野望を隠していたが、今や錚々たる随行団を率いて旅をしていた。彼は大胆にも町の門(法的な問題を解決する場所)に赴き、イスラエルで民の福祉に真に関心を持っているのは自分だけであるかのように振る舞った。彼は、事実上、自分の父が十分な法的支援を怠ってきたと非難し、もし自分が王であれば、民は公正なさばきを受けるだろうと述べた。彼はイスラエルのさまざまな町の人々の支持を得ようとした。

15:7~12 四年たって^{*(19)}(七十人訳写本、シリア語、ヨセフス、NKJV脚注による)、アブサロムはヘブロンへ行く許可を得た。表向きは、亡命中に立てた誓いを果たすためだった。ヘブロンは、ダビデが首都をエルサレムに移したため、不満を抱いていたのだろう。また、ヘブロンはアブサロムの生まれ故郷でもあった。アブサロムに同行した二百人は、アブサロムの真の目的が、彼自身を王とする新政府樹立を宣言

することだとは知らなかった!ダビデの顧問の一人で、バテ・シェバの祖父であるアヒトフェル(11:3と23:34を参照)がアブサロムに寝返り、多くの民もアブサロムの王位篡奪(さんだつ)の陰謀に加わった。おそらくアヒトフェルは、孫娘に対してダビデが犯した罪の仕返しをしたかったのであろう。

15:13~18 その知らせを聞いたダビデは、事態は深刻であり、エルサレムを放棄すべきであると決断し、すぐに一族を集めて郊外へ逃げた。しかし、王は家を守るために十人の側女を残した。

E. ダビデの友と敵(15:19~16:14)

15:19~22 ダビデと行動を共にした者の中には、彼と一緒にガテを去ったペリシテ人の一団がいた。その一人がガテ人イタイであった。彼が後を追って出発したとき、王は彼に戻るように促した。結局のところ、彼はユダヤ人ではなく、亡命者であり、最近になってダビデ軍に加わったばかりである。その上、ダビデの大義名分はひいき目に見ても不確かなものに過ぎなかった。しかし、イタイは説得に応じなかった。彼は、どんな犠牲を払っても王に同行すると固く決心していた。ダビデはこの異邦人の忠誠に報いるため、彼とその従者たちが亡命に同行することを許した。イタイは言った。「王様がおられるところに、生きるためでも死ぬためでも、このしもべも必ずそこにいます」。信仰者であるなら、王が拒絶されている間、イタイがダビデに示したのと同じ献身の姿勢を王の王に対して持っていなければならない。

15:23 彼らはエルサレムの東にあるキデロンの小川を渡り、ヨルダン溪谷に向かった。それから約千年後、ダビデに優るダビデの子は、ご自身も拒絶された王として、その足跡をたどることになる(ヨハネ

18:1)。ダビデはキデロン川を渡り、命を守るために逃げた。イエスは多くの人の贖いの代価としてご自分の命を与える途上、谷を渡り、ゲツセマネで祈られた。

15:24～29 祭司のツアドクとエブヤタルは、ダビデの亡命に同行するつもりで、神の箱を担いで都から出て来た。しかしダビデは、主がいずれ彼を帰還させてくださるという希望をもって、彼らを送り帰した。また、ダビデは祭司たちに、(アブサロムの家臣たちの中であって、いわば内応者として)エルサレムに留まってくれた方が助けになる、と言った。ダビデはヨルダン川西岸まで行き、アブサロムの反乱の進展について彼らからの連絡を待つことにした。ダビデは亡命を余儀なくされたことに憤慨するのではなく、むしろ神が許されたことに素直に従った。詩篇3篇は、その表題によれば、この時期に作られたものである。この詩篇から、嵐が襲いかかってもダビデの主への信頼は揺るがなかったことがわかる。

15:30～37 ダビデは深い悲しみの中、忠実な従者たちとともにオリーブ山に登り、アヒトフェルがアブサロムにどんな助言を与えようとも、神がそれを打ち砕いてくださるように祈った。オリーブ山の頂上で、王はアルキ人フシャイに出会った。ダビデはフシャイに、エルサレムに戻ってアブサロムに忠誠を装うように頼んだ。そうすれば、アヒトフェルがどのような助言を与えようとも、フシャイはそれに反論できるかもしれない。フシャイは重要な知らせを祭司ツアドクとエブヤタルに伝え、彼らは二人の息子をダビデのもとに送って報告することができるはずである。フシャイがエルサレムに到着したのは、ちょうどアブサロムが政権を掌握するために到着した時であった。

16:1～4 ダビデがオリーブ山の頂を過ぎると、メフィボシェテのしもべツィバが、大量の食料とぶどう酒、それにろば二頭を連れてダビデを迎えた。ダビデがメフィボシェテについて尋ねると、ツィバは、ヨナタンの息子(メフィボシェテ)がエルサレムに留まったのは、王国がサウルの家に戻り、次の王位継承者として自分に返されると期待してのことである、と虚偽の報告をした(19:27参照)。ダビデはこの嘘を信じ、メフィボシェテの財産をツィバのものとしよう命じた。

16:5～14 エリコに向かう道の途上にあるバフリムで、シムイというサウルの子孫が出て来て、ダビデを激しく呪い、サウル家の血の責任をダビデに負わせた。ダビデの家来の一人であるアビシャイは、その場でシムイを殺したいと願ったが、王はそれを許さなかった。彼は、主がシムイに呪うように命じられたのかもしれないと言うのであった。結局、サウル一族の方が、自分の息子アブサロムよりもダビデの命を狙う理由があったのだ、と彼は指摘した。また、ダビデはウリヤの死を思い出し、シムイの告発に全く根拠がないわけではないことに気づいたのかもしれない。そしてダビデは、シムイの度を越した敵意が神のあわれみを呼び起こすことを願った。ダビデとその部下がヨルダン川に向かうと、シムイは彼らを追いかけ、呪ったり、石を投げたり、土のちりをかけたりしていた。亡命した王はやっと川に辿り着き、そこで王とその一行は疲れを癒やした。

F. アブサロムの助言者たち (16:15～17:23)

16:15～19 場面は再びエルサレムへ移り、アブサロムはちょうど到着したところである。フシャイはアブサロムに対し、

大声で熱烈な忠誠を表明した。最初は疑われたが、最終的には王位篡奪者であるアブサロムに受け入れられた。

16:20～23 アヒトフェルがアブサロムに最初に提案したのは、ダビデがエルサレムに残してきた十人の側女のところに入ることであった。そのような行為はそれ自体が名誉を傷つけるものであり、ダビデに対する許しがたい侮辱であり、和解を不可能にし、王位への直接的な権利を主張するものであった。アブサロムはその助言を受け入れ、全イスラエルの目の前で王室のハーレムに入り、こうしてナタンの預言(12:11, 12)は実現した。アヒトフェルの助言は、当時、非常に尊ばれていた。アブサロムは、父親がそうしたように、疑うことなくそれに従った。しかし、アヒトフェルがバテ・シェバの祖父であったことを思い起こすと、彼がこの助言を決定したのは復讐心のゆえであったことがわかる。

17:1～4 最初の助言が功を奏したので、次にアヒトフェルはアブサロムに一万二千の兵を召集してダビデを追いつめ、不意を突いて彼を殺し、彼に従った者たちをエルサレムに連れ戻すように進言した。

17:5～14 アブサロムは喜んだが、フシャイを呼んで助言を求めることにした。これこそフシャイが待ち望んでいた機会だった。フシャイは、アヒトフェルによるこの二回目の助言は「このたびは」良くないと言った。結局、ダビデとその部下たちは反乱に激怒し、激しく戦うからである。その上、賢明なダビデは、兵たちと一緒に夜を過ごすようなことはしない。彼はどこかの洞穴に隠れるはずである。アヒトフェルの最初の攻撃が成功しなければ、国中にパニックが広がり、アブサロムの大義は失われる、と。フシャイには別の計画があった。それはアブサロムへの忠誠を示してい

るように見えるが、実際にはダビデが逃げる時間を稼ぎ、アブサロムが死ぬ可能性を含んだものであった。彼は、アブサロム率いるイスラエルの全軍を動員することを提案した。そのような軍隊は無敵となる。ダビデは攻撃され、脱出は不可能になるであろう。アブサロムはフシャイの助言が最善であると判断し、ダビデが祈ったとおり、アヒトフェルの計画を退けた(15:31)。

17:15～17 フシャイは直ちに祭司ツァドクとエブヤタルに伝言を送り、ダビデにヨルダン川を渡って安全なところに逃げるように伝えよ、と指示した。祭司たちは、女奴隷を使って、町の外れのエン・ロゲルで待機していた息子たちにこの知らせを伝えた。

17:18～22 ところが、一人の若者がこの密会を目撃し、アブサロムに密偵の存在を報告した。そこで、祭司の二人の息子、ヨナタンとアヒマアツは、捜索隊が通り過ぎるまで、バフリムの井戸(枯れた野水池)に隠れた。それから脱出して、この知らせをダビデに伝えた。ダビデはヨルダン川を渡り、自分の部隊とアブサロムの部隊が、この自然の障壁(ヨルダン川)を挟む形になるようにした。その後、ダビデはギルアデの町マハナインへ急いで向かった。

17:23 アヒトフェルは自分の助言が退けられ、ダビデが勝利すると悟って落胆した。彼は家に戻り、家を整理してから首を吊った。生においても、死においても、彼はイスカリオテのユダを示す「予型」であった。

G. アブサロムの死とダビデの嘆き (17:24～19:8)

17:24～26 アブサロムは、アマサを軍団長に任命し、ヨルダン川を渡ってギルアデまで父を追撃した。アマサの父は、生

まれはイシュマエル人であったが（Ⅰ歴代誌2:17）、宗教的にはイスラエル人であった。アマサはダビデの甥であり、ヨアブの従兄弟にあたる。

17:27～29 ダビデがマハナインに宿営していたとき、三人の男がダビデとその民のために必要で腐らない食料を持って彼のもとにやって来た。彼らはショビ、マキル、バルジライであった。ショビは亡くなったアンモン人の王ナハシュの息子の一人であった。兄弟のハヌンはダビデの好意を拒否したため、その報いを受けた（10章）。しかしショビは、生まれは異邦人でありながら、ほとんどのユダヤ人以上にイスラエルの王を大切に思っていた。同じように、多くの異邦人が、「ご自分の民」に拒絶されたキリストを受け入れた（ヨハネ1:11）。マキルは、ダビデがメフィボシェテをエルサレムに連れて来るまで、何年も彼の世話をしていた（9:3～5）。彼は、足の不自由な王子であろうと、王位を奪われた王であろうと、困っている人々に仕えた。キリストの大義のために自分の財産をもてなしに費やす人は、キリストが栄光のうちに再臨されるとき、その親切が百倍にも報われるであろう。バルジライは、ダビデがマハナインに滞在していた間ずっと彼を支えていた。彼は非常に裕福な人物であり、彼の支援は王にとって大きな意味を持っていた（19:31～39）。臨終の床で、ダビデはソロモンに、バルジライの息子たちを宮廷の地位に昇進させるように命じた（Ⅰ列王記2:7）。キリストは、ご自分に仕えた人々を忘れることはない。彼らは神の王国で名誉ある地位を与えられるのである。

18:1～5 ダビデは自分の軍を三つの部隊に分け、ヨアブ、アビシャイ、イタイの三人を将軍とした。王は来るべき戦いに参加することを望んだが、人々は王に、町に

留まり、必要に応じて援軍を送るように説得した。兵士たちが町から出陣する際、ダビデは将軍たちに、自分に免じてアブサロムをゆるやかに扱うようにと公に命じた。

18:6～9 戦いはヨルダン川の東、マハナインに近いエフライムの森で行われた。その日、アブサロム軍は二万人の死者を出したが、これは主に兵士たちを閉じ込めた密林のせいだった。ダビデ軍は勝利を収めた。アブサロムは森の中を逃走中、巨大な樅の木に引っ掛かり、彼が乗っていたらばは彼を残して行ってしまった。彼があればと誇りに思っていた豊かな髪が、彼の破滅の原因となったのは、いわば一種の自業自得（poetic justice）である。

18:10～15 アブサロムの無力な状態をヨアブに報告した使者は、反逆者（アブサロム）を殺さなかったことを叱責された。彼は、いくら金を積まれても王の命令に背くことはできない、と慎重に釈明した。その上、アブサロムを殺せば、そのことが王に伝わり、ヨアブは彼を弁護してはくれないだろう、と。ヨアブは、このような話はすべて時間の無駄だと考えた。彼はアブサロムの心臓に三本の槍を突き通し、それから十人の道具持ちにとどめを刺させた。これはすべて王の命令に反する行為だったが、王国にとっては最善のことだった。ダビデは一貫して息子たちの犯罪行為に対する処罰を拒絶していたため、その任務は他の者に委ねられたのである。

18:16～18 任務が完了すると、ヨアブは賢明にも戦いを中止させた。主な目的は達成されたからである。アブサロムの遺体は大きな穴に投げ込まれ、非常に大きな石の山で覆われた。これは、アブサロムがおそらくエルサレムの近くにある王の谷に自分のために建てた記念碑とは著しく対照的であった。アブサロムには三人の息子が

いたが(14:27)、若くして死んでしまい、跡継ぎがいなかったと思われる。そのため、彼は自分の名を後世に残すために**アブサロム**の記念碑を建てたのである。

18:19~23 アヒマアツはダビデに知らせを伝えたかったが、**ヨアブ**はそれを望まなかった。アヒマアツは良い知らせを伝える者という評判があったようで(27節)、アブサロムの死の知らせを伝えるのは彼に似つかわしくないことであった。そこでヨアブは**クシュ人**を正式な使者として送った。しかし彼が去った後、アヒマアツは、たとえ報酬はもらえなくても、自分も行かせてくれるよう**ヨアブ**を説得した。彼は、より速い道筋を選択して**クシュ人**を追い抜くことに成功した。

18:24~30 ダビデは戦いからの知らせを待ち構えていた。見張り是一人の走者が近づいて来ると報告し、次いでもう一人の走者が近づいていることを報告した。ダビデは最初の走者がアヒマアツに似ていると聞き、**良い知らせ**を期待して心の準備をした。アヒマアツはこれまでいつも歓迎すべき知らせを持って来ていたからである。アヒマアツは王に近づき、主が反乱軍を打ち破ったことを儀礼的に告げた。しかしダビデがアブサロムのことを尋ねると、アヒマアツはうろたえ、**大騒ぎ**を見たが詳しいことは分からない、と曖昧な答えをした。

18:31~33 その頃には**クシュ人**が到着しており、ダビデの敵が打ち破られたことを告げた。アブサロムについての王からの質問は避けられなかったが、ダビデの敵は皆あの若者のようになるべきです、という素っ気ない返事が返ってきた。つまり死ぬべきである、という意味である。この知らせは、ダビデを深い悲しみに陥れた。ダビデの悲痛な嘆きは33節に記されている。これはダビデの生涯で最も大きな悲しみの

一つであり、彼が**ヨアブ**を赦したかどうかは疑わしい。

19:1~8 王の悲しみがあまりに大きかったので、民は恥と罪悪感に苛まれた。彼らは勝利者というより、犠牲者であるかのように振舞った。ヨアブはこれに我慢できず、王に厳しい非難を浴びせた。彼は、ダビデが忠実な部下よりも敵に関心を寄せ、命を救ってくれた者たちへの感謝がない、と不満を述べた。彼は、ダビデが直ちに民に誠意ある関心を示さなければ、その夜にでも民に見捨てられるだろうと警告した。ダビデはその忠告に従い、城門の前で民に語りかけた。

H. ダビデの亡命からの帰還(19:9~43)

19:9, 10 その頃、イスラエルの地には混乱が広がっていた。民はみな、互いに言い争っていた。ペリシテ人から自分たちを救ってくれたダビデ王は亡命中であり、王を自称した**アブサロム**は死んでしまった、と論じ合った。こうしてダビデを王位に戻す運動が始まった。「王を連れ戻すために、なぜ何もしないでいるのか」という問いは、今日の眠れる教会にふさわしい問いである。

19:11~15 イスラエルの十部族がダビデを王位に戻そうと話し合っていると聞いたダビデは、二人の祭司をユダの長老たちのもとに遣わし、なぜ彼らが血縁者であるにもかかわらず、最後までダビデを王位に戻すことをためらっているのかと尋ねた。ユダは反乱の際、アブサロムを強力に支持していたため、何らかの恨みや恐れがくすぶっていたことは間違いない。ダビデは**ヨアブ**を軍団長の地位から外し(おそらくヨアブがアブサロムを殺したため)、後任に**アマサ**を任命することにした。アマサはダビデの甥で、つい最近までアブサロムの將軍であった。部外者にとっては、ダビデが

忠誠を罰し、反逆に報いたように見えたに違いない。これは政治的安定をもたらすとは思えない政策であった。しかしこれらの措置はユダのすべての人々の心をダビデの側に引き寄せ、彼らは一致して「お帰りください (welcome home)」というメッセージをダビデに送ったのであった。

19:16~23 以前ダビデを呪ったシムイと、メフィボシェテを中傷したツイバは、帰還する王を迎えるためにヨルダン川に駆け下った。シムイの多弁な謝罪は、おそらく本心を隠したものであろう。ダビデが権力を取り戻した今、彼が強く望んでいたのは罰を逃れることだった。その時の高揚した気分の中で、王はシムイを殺したいというアビシャイの願いを却下し、代わりに恩赦を約束した。しかし、ダビデはシムイの呪いを忘れてはいなかった。後にダビデは、この口汚いベニヤミン人を情け容赦なく扱うようソロモンに命じた (I 列王記2:8,9)。

19:24~30 メフィボシェテも王を迎えに来た。その姿から明らかのように、彼はダビデが国外に脱出した日から、ダビデの亡命を嘆いていた。彼はツイバに虚偽の告発をされたにもかかわらず、王に忠誠を尽くした。王は彼が亡命に同行しなかったことに對し、かなり乱暴なことばを浴びせた。メフィボシェテは、ろばに鞍をつけるように家来のツイバに頼んだが、ツイバがそうしてくれなかったので、足の萎えた自分にはどうすることもできなかった、と説明した。ツイバが彼を中傷したが、王が帰還した以上、そのような不正はどうでもよい、と率直に述べた。ツイバとメフィボシェテとで地所を分け合えばよい、という、かなり不当な裁定をダビデが下すと、足の不自由なヨナタンの息子は、その心にある真の忠誠心を示し、「それよりはむしろ、彼に全部を取らせましょう。わが君、王が

平和のうちにご自分の家に戻られたのですから」と言うのであった。

19:31~39 バルジライという八十歳のギルアデ人もまた、ダビデの真の友人であった。彼はマハナイムで王に物資を提供した。そして今、彼は王に同行してヨルダン川にまで来た。ダビデは彼をエルサレムに招き、手厚い看護を約束した。しかし、バルジライは、余命が短いこと、快不快の区別がつかないこと、味覚を失っていること、耳が遠いことを理由に、行くことを拒んだ。自分が行けば、王の負担が増すだけである、と。そこで彼はダビデとともに、ヨルダン川をほんの少しだけ進み、その後、自分の町に戻る、ということに同意した。キムハム (おそらく彼の息子) がダビデと一緒に行くのがよい、という彼の提案は、すぐに受け入れられた。

19:40~43 その頃には、ユダ族のすべての民と他の部族の半数で王をエルサレムに連れ戻すための大行列ができていた。

ユダ族が十部族を招かずに、王の復権 (すなわち、ヨルダン川を渡って王をお連れすること) に非常に目立つ役割をしたため、内紛が起こった。ユダ族は、ダビデが自分たちの身内であり、自分たちが先頭に立ったからといって他の部族より何か得をしたわけではない、と説明した。一方、十部族は、自分たちにはユダの十倍も参加する権利がある、と主張した。ユダの人々のことばの激しさは、この先に待ち受ける深刻な問題を予感させるものであった。

1. シェバの反乱と死 (20章)

20:1, 2 ベニヤミン族のシェバという邪悪な反逆者 (おそらくサウルの親戚) は、ユダのことば (19:42) を反乱の根拠とした。ユダの人々は、ダビデを彼らの王だと主張していたからである。ダビデのうちには、

われわれのための割り当て地はないので十部族は離脱する、とシェバは挑戦的に宣言した。ユダ部族だけがダビデに残された。後の出来事は、シェバの支持者は比較的小なかつたことを示している。「すべてのイスラエルの人々」という表現は、十部族の反体制派だけを含む限定的な意味で理解されなければならない。

20:3 エルサレムに到着した王はそこに残しておいた十人の側女を見つけた。彼女たちはアブサロムから辱められていた。ダビデの計らいで、彼女たちは一つの住まいで一生やもめのように世間から離れて生活することになった。

20:4～7 この頃には、ヨアブは降格させられ、アブサロムの反乱軍の司令官アマサがダビデの軍の指揮を執っていた。王はアマサに、三日のうちにユダの兵士たちを召集し、反乱軍の首謀者であるシェバを追跡し、捕らえるように命じた。何らかの理由で、アマサは指定された期限までに任務を完了しなかつたため、ダビデはアビシャイが指揮を執り、選りすぐりの兵士を率いて、シェバが城壁のある町に拠点を築くのを阻止するように命じた。アビシャイに同行した者の中にはヨアブもいた。

20:8～10前半 彼らがギブオンにある大きな石標に着くと、アマサが彼らを迎えに来た。ヨアブは、兵士の戦闘用のよろいを身に着け、アマサを迎えようと進み出たが、そのときヨアブの剣が地面に落ちた。どうやら彼はわざとそうしたようだ。ヨアブは剣を拾い上げ、疑うことを知らない従兄弟に歩み寄った。ヨアブはいかにも親しげに、まるでアマサに接吻しようとするかのようにしてそのひげをつかみ、剣を一突きして彼を殺害した。

20:10後半～13 ヨアブとアビシャイがシェバを追跡し始めたとき、彼らの部下

は、アマサが大路で血まみれになって転がっているのを見て立ち尽くした。ヨアブの部下は、彼の遺体が運び去られるまで、ヨアブについて行こうとしなかつた。

20:14～22 シェバの追跡ははるか北のアベル・ベテ・マアカの町まで及んだ。ここはメロムの水の北に位置し、賢者の町として有名だった。ヨアブがこの町を包囲すると、一人の知恵ある女が彼に声をかけ、なぜイスラエルの母である町（つまり重要な町）、昔から知恵で知られた町を滅ぼそうとするのか、と問いただした。ヨアブが、城壁の内側に隠れている反乱軍の首謀者シェバを追い詰めているだけだと説明すると、彼女はシェバを殺し、その証拠として彼の首を城壁の上から投げ落とすことに同意した。この約束が果たされると、ヨアブは角笛を吹き鳴らし、エルサレムに戻った。彼の使命は果たされたのである。シェバの反乱はおそらく一週間も続かなかつた。

20:23～26 ダビデは以前ヨアブを降格させ、最初にアマサ（19:13）、次にアビシャイ（20:6）を代わりに任命した。しかしヨアブは軍の長の地位を取り戻した。

23～26節までの王の高官のリストは、8:15～18とほぼ同じである。ヨアブは軍を率い、ベナヤはダビデの護衛の責任者であり、ヨシャファテは史官、シェワ（セラヤと同じ）は書記官または速記者、ツアドクとエブヤタルは祭司であつた。（ツアドクとアヒメレクは、以前のリストと同じく祭司であつた。）唯一の違いは、アドラムが歳入を担当していたこと、ヤイル人イラムもダビデの祭司（または重臣）であつたのに対し、ダビデの息子たちは8章で言及されていることである。

IV. 付録 (21～24章)

サムエル記第二の残りの部分は、年代順ではないが、ダビデの治世における様々な事件に焦点を当てた付録である。(年代順としては列王記第一1章に続く)

A. 飢饉とその終息 (21章)

21:1 最初の出来事は飢饉で、三年間続いた。ダビデがその原因を主に尋ねると、サウルがギブオン人との契約を破ったためであると告げられた。この地の異教徒の住民であった彼らは、ヨシュアを欺いて彼らと契約を結ばせた。サウルはその契約を破り、ギブオン人を滅ぼそうとしたが、この事実は旧約聖書には書かれていない。「その一族に、血の責任がある」ということは、サウルの子孫がギブオン人の虐殺に積極的に関与したことを暗示しているのかもしれない。そうだとすれば、彼らの処罰(2～9節)は正当なものであった。すでに死んでいる一人の者の罪のために国民が苦しむのは酷に思えるかもしれないが、その何世紀も前にイスラエルはギブオン人に厳粛な誓いを立てていたのである(ヨシュア9:19,20)。飢饉が起こったのは、その誓いを破ったからである。時の経過によって神の記憶や正義の感覚が薄れることはない。

21:2～9 ダビデはギブオン人に歩み寄り、サウルが犯した過ちに対する償いとして彼らが何を受け入れるかを知ろうとした。彼らは、サウルの銀や金は一切望んでいないこと、またイスラエルでは彼らに人を死刑にする権利はないことを説明した。サウルの男系の子孫七人を処刑する以外に方法はない、と彼らは主張し、ダビデはこれに同意した。その七人の息子とは、リツパの二人の息子、アルモニとメフィボシェテ

(ヨナタンの子メフィボシェテではない)と、サウルの娘メラブの五人の息子である。(※英訳では「メラブ」が「ミカル」と訳されているが)「ミカル」が適切な読み方ではないとする二つの理由は、ミカルがアデリエルではなくパルティと結婚していたこと(Iサムエル25:44参照)と、ミカルには子どもがいなかったこと(IIサムエル6:23)である。ここで言及されているバルジライは、後にダビデがアブサロムから逃げるのを助けたバルジライとは別人である(17:27)。

21:10 サウルの忠実な側女リツパは、死体を守るために昼夜を問わず見張りを立て、はげたかや野獣が死体に触れないようにした。彼女は刈り入れの始まりから、神が雨を降らせてこれらの死をもたらしした飢饉を終わらせるまで、この見張りを続けた。

21:11～14 ダビデは彼女の献身的な行為を聞いて、これら七つの遺体と、ヤベシュ・ギルアデに葬られていたサウルとヨナタンの骨を、適切に埋葬するための措置をとった。サウルとヨナタンの骨はベニヤミンのキシシュの墓に納められた。

21:15～22 この箇所には、ペリシテの巨人とのさまざまな戦いが記されている。最初の戦いで、ダビデはイシュビ・ベノブにあやうく殺されそうになったが、アビシャイが彼を助け、このペリシテ人を殺した。それ以来、民はダビデを戦いに同行させなくなった。第二の戦いでは、ゴブ(またはゲゼル)で、巨人のもう一人の息子がシベカイに殺された。第三の戦いでは、エルハナンがラフミという名のガテ人ゴリヤテの兄弟を殺した(I歴代誌20:5参照)。四度目の戦いでは、両手に六本の指、両足に六本の指を持つ巨人が死んだ。プリニウス(※Pliny、ローマ帝国初期に活躍した博物学者)は、六本の指を持つローマ人について言及しており、この特異性は一部の家系

で遺伝する、としている。^{*(20)}

B. ダビデの感謝の詩篇 (22章)

22:1～51 ダビデはこの歌のことばで、敵からの救いと自分に注がれた数え切れない祝福のゆえに主を賛美している。この歌は、ダビデが王位を確立した後に書かれたものと思われる。サウルは死に、王国はダビデの指導の下に統一され、イスラエルの敵は撃退された。このことばは、多少の差異はあるものの、詩篇18篇に見られ、新約聖書ではメシアに当てはまるものとして引用されている（※英訳による。3節とヘブル2:13、50節とローマ15:9参照）。

これをメシアの詩篇として見るならば、次のように要約できるであろう。

1. 祈りを聞き、答えてくださる神への賛美（2～4節）。
2. 救い主に迫る死（5～7節前半）。
3. 救い主の復活を阻止しようとして失敗する地獄の軍勢と戦われる神（7節後半～20節）。
4. 神がメシアを死者の中からよみがえらせた理由（21～30節）。
5. 敵を滅ぼすメシアの再臨（31～43節）。
6. メシアの栄光の王国（44～51節）。

詳しい解説は詩篇18篇の注解を参照のこと。

C. ダビデの勇士たち (23章)

23:1～7 最初の7節は、ダビデの非常に美しい最後のことば、すなわち彼が靈感を受けて歌った最後のことばである。彼は理想的な統治者、メシアを描いている。その統治は輝かしい夜明けであり、長い嵐の夜の後の雲一つない朝である。^{*(21)} ダビデ

は、自分がそのような描写に当てはまらないことを自覚していたが、自分の子孫からメシアが出る、との神の契約の保証に慰めを得た。6節と7節は、キリストが再臨して御国を樹立されるとき、反逆の子らに下されるキリストのさばきを描いている。

23:8～12 8～39節には、ダビデの勇士たちの一覧が記されている。ヨアブがこのリストに名を連ねていないのは注目値する。それはおそらく彼がアブサロムを殺したからであろう（アブネルとアマサは言うまでもない）。このリストはダビデの治世の終わりに近いものであるのに対して、I 歴代誌11:11～47の並行するリストは治世の始まりに位置している。同一ではないが、この二つのリストには大きな類似点がある。これらの人々とその功績に関する詳細はI 歴代誌11章の注解を参照のこと。

最初の三人の勇士は次の通りである。

1. ヨシエブ・バシエベテ — 彼は一度に八百人を刺し殺した（I 歴代誌11:11は三百人としているが、この数字はおそらく書写者の間違いであろう）。
2. エルアザル — 彼は仲間の兵士たちが退却したとき、ペリシテ人を撃退した。彼らが彼のところに引き返して来たのは、ただ、はぎ取るためであった。戦いが終わったとき、彼の手は疲労で（おそらく痙攣して）、剣から指を離すことができなかった。
3. シャンマ — イスラエルの人々が逃げたとき、彼は一人でペリシテ人と戦った。レンズ豆の畑で敵を撃退し、大勝利を収めた。

23:13～17 ここで言及されている三

人の無名の勇士がダビデのもとに来たのは、ダビデがアドラムの洞穴にいた時、すなわちベツレヘムがペリシテ人の手に落ちていたときのことであった。ダビデは、ベツレヘムの井戸の水が飲めたなら、という願いを口にした。すると彼らは命を危険にさらしてペリシテ人の戦線を突破し、ダビデに水を持ち帰った。この犠牲に深く感動し、ダビデはそれを主へのささげ物として注ぎ出した。自分にはとても飲めないと思ったのである。ウィリアムズ(George Williams)は次のように述べている。

イエスの近くに生きる人々には、アフリカ、インド、中国からの愛の献身を求めるイエスの心の願いが聞こえる。そしてこれらの勇者たちのように、故郷にも富にも背を向け、自らの命を危険にさらし、命を投げ出すことをいとわない。それはベツレヘムの井戸がペリシテ人の手に落ちたように、サタンの力に支配され絶望的な状況にある諸国民の愛と奉仕をキリストのために勝ち取るうとしてのことである。^{*(22)}

23:18~23 ダビデのあと二人の有名な英雄は次の通りである。

1. アビシャイ — 彼は三百人を刺し殺した。彼は16節に言及されている三人の指揮官であったが、その中の一人ではなかった。
2. ベナヤ — 彼は獅子のようなモアブの英雄二人を打ち殺した。彼はまた、ある雪の日に洞穴の中で獅子を打ち殺し、自分より優れた武装のエジプト人を殺した。

23:24~39 ダビデの最後の勇士である三十人(あるいは三十七人)は、24~39節に記されている。この章のいくつかの数字は説明が必要である。たとえば三十人の長(13,24節)、三十七人(39節)などである。三十人は精鋭の軍団であったかもしれないが、一度でも従軍したことのある者をすべて数えると、合計は三十七人になる。最初のグループには、ヨシエブ・バシエベテ、エルアザル、シャンマの三人(8~12節)がいた。第二のグループには、アビシャイとベナヤの二人(18~23節)がいた。第三のグループ(24~39節)の「三十」という数字は、使徒たち「十二人」と同じように、専門用語だったかもしれない(たとえ、常に一人、またはそれ以上の人があるところになかったとしても)。また、文字通りの意味だった可能性もあるが、三十人を超える者たちは、リストの最後の勇士、バテ・シェバの夫のヒッタイト人ウリヤのように、戦闘で命を落とした兵士の補充兵だった可能性がある。

主イエスにも勇敢な男性たち(および女性たち)がいる。自分に勇敢に仕えた人々をダビデが記録していたように、主イエスは彼らのことも記録しておられる。私たちも「階級」が何であれ、信仰の良き戦いを戦おうではないか。

起てキリストの兵よ
まといえ主の鎧を
神が永遠の御子を通して
与える力に満ちて

立て主の大いなる力に
その強さをまとい
戦いの助けとして
神の武具を取れ

チャールズ・ウェスレー(Charles Wesley)

D. ダビデの人口調査とその結果 (24章)

クロケット (William Crockett) は、ここに書かれている出来事は、ダビデがエルサレムを攻め取った後 (5章)、契約の箱を聖なる都に運び入れる前 (6章) に起こったと推測している。^{*(23)}

24:1 まるで神が怒りに任せて、ダビデにイスラエルとユダの人口調査を命じられたかのようである。しかし、I 歴代誌 21:1 から、ダビデをそそのかしたのはサタンであったことがわかる。サタンがそれを促し、ダビデが (心の高ぶりのゆえに) それを実行し、神はそれを許容されたのである。1 節の七十人訳では、「神がダビデを動かした」のではなく「サタンがダビデを動かした」となっている。

24:2~9 王がヨアブに人口調査を始めるよう命じたとき、ダビデの軍の長 (ヨアブ) はダビデよりも優れた判断を示した。彼は人口調査の目的がダビデの誇りを満足させることにあると気づき、王に中止を勧めたが、無駄だった。ダビデに従い、ヨアブとその部下たちは全国を巡り、民を数え、イスラエルに八十万、ユダに五十万の兵士がいることを知った。出エジプト記 30:12, 13 では、人口調査を行う際には半シェケルの償い金を徴収するよう命じている。しかし、ダビデがそうしたという記録はない。ダビデが民を数えようとしたのは高慢のなせるわざであった。人口調査により、ダビデは主の御腕 (arm) ではなく軍隊 (army) の大きさに頼るようになったのかもしれない。

24:10~14 人口調査が終わると、王は良心のとがめを感じ、主に赦しを求めて叫んだ。神は預言者ガドを彼のもとに遣わし、次の三つの罰の中から一つを選ぶように示された。

(1) 七年間の飢饉が起こること

(2) 三か月間、敵に追われること

(3) 三日間、疫病が続くこと

ダビデは人の手ではなく、主の手に落ちることを選んだ。

24:15~25 主は三日間の疫病を送り、七万人が死んだ。滅びの御使いがエルサレムの町を滅ぼそうとしたとき、神はアラウナ (オルナンとも呼ばれた) の打ち場でそれを止められた。ダビデは主に、ダビデとその家に罪があるのに、なぜイスラエルの民を滅ぼされるのかと訊ねた。ガドを通して与えられた神の答えは、ダビデがアラウナの打ち場に祭壇を築くことだった。そこで王ダビデは、すぐにエブス人アラウナとその場所の購入の交渉を始めた。彼は異邦人であったが、打ち場だけでなく、いけにえのための牛と、薪 (たきぎ) にできる打穀機も無償で提供した。しかし、王の気高い答えは「費用もかけずに、私の神、主に全焼のささげ物を献げたくはない」というものであった。そしてダビデは、打ち場と牛を銀五十シェケルで買った (I 歴代誌 21:25 によれば、ダビデはこの場所に金六百シェケルを支払ったとあるが、これには打ち場の周囲の土地も含まれていたことは間違いない)。祭壇に全焼のささげ物が献げられると、疫病は止んだ (25 節)。モリヤ山のアラウナの打ち場は、おそらくアブラハムがイサクを献げた場所と同じであろう。そこは後に、ソロモンの神殿、そしてキリストの時代にはヘロデの神殿の場所となった。現在、そこにはイスラム教の聖地である岩のドームがある。そこはおそらく、患難時代の神殿、そして最終的には千年王国時代の神殿の場所となるだろう。

聖書は、信仰の英雄たちの扱いにおいてまったく正直である。ダビデにも欠点があり、それは彼の信仰とともに記されている。私たちは、ダビデを羊の世話をしていた時

代から、亡命の時代、そして最高の地位に就くまでの時代をたどってきた。ダビデほど神に近く歩み、ダビデほど深く罪に陥った人はほとんどいない。しかし、その間ずっと、ダビデは主に支えられていた。私たちは皆、ダビデが経験したことから恩恵を受けている。彼がそれを詩篇に記したからである。

マシュー・ヘンリー (Matthew Henry) は、サムエル記に登場するダビデと、詩篇に登場するダビデについて次のように述べている。

ダビデの歴史には、非常に教訓に富むものが多い。しかし、その主人公である英雄については、多くの場合、非常に偉大で、善良で、天の寵児として描かれているが、その栄誉は、年代記よりも詩篇の中での輝きの方がまさっている、と告白せざるを得ない。* (24)

詩篇40篇のことばは、ダビデの生涯を見事に要約している。

私は切に 主を待ち望んだ。
 主は私に耳を傾け
 助けを求める叫びを聞いてくださった。
 滅びの穴から 泥沼から
 主は私を引き上げてくださった。
 私の足を巖に立たせ
 私の歩みを確かにされた。
 主はこの口に授けてくださった。
 新しい歌を 私たちの神への賛美を。
 多くの者は見て恐れ 主に信頼するだろう。

(詩篇40:1~3)

後 注

1. (1:17, 18) Keil and Delitzsch, "The Books of Samuel," in *Biblical Commentary on the Old Testament*, VII: 286, 87 に引用されている。
2. (3:31-39) William Hoste and William Rodgers, *Bible Problems and Answers*, p. 214
3. (5:22-25) カイル(C. F. Keil)とデリッチ(F. Delitzsch) は、ギブオンが「間違いなく正しい読み方であり、ゲバは筆の誤りである」と主張する。なぜなら、ゲバはこの記述と合わない場所だからである。("Samuel," VII:326) .
4. (7:16, 17) Irving L. Jensen, I II Samuel, p. 92
5. (7:18-29) William Garden Blaikie, "The Second Book of Samuel," in *the Expositor's Bible*, p. 105
6. (8:3-8) 4節と I 歴代誌18章を比較すると、若干の混乱がある。4節には、千両の戦車(戦車という語は訳者によって補われている)、七百騎の騎兵が捕らえられたと書かれているが、I 歴代誌18章4節には、七千騎の騎兵が捕らえられたと書かれている。II サムエルに記されているのは1回の戦闘で捕らえられた数かもしれないし、I 歴代誌に記されているのは、戦闘を通して捕らえられた総数かもしれない。あるいは、これは単に写し間違いの可能性もある。
7. (8:13) もしここで「シリア人」(ヘブル語で「アラム」)が正しいとすれば、エドム人(ヘブル語で「エドム」)が彼らに助けを求めたということになる。しかし、ヘブル語の子音テキストでは、アラムとエドムはほぼ同じ綴りなので(「r」と「d」はしばしば混同される)、書写者の過誤である可

- 能性が高い。
8. (8:13) すべての保守的な注解者たちが、詩篇の副題が元々あったものと信じているわけではないが、本注解書の著者と編集者はそう信じている。
 9. (8:13) Eugene H. Merrill, “2 Chronicles,” in *The Bible Knowledge Commentary*, p. 608
 10. (9:1–13) しかし、“lo” は確かに「いいえ」を意味するが、“pasture”の標準母音は debarではなく doberである。子音 dbr はヘブル語で「ことば」や「物」を意味する。したがって、「何もない」あるいは「無」とも訳せる。
 11. (10:6–8) John Haley, *Alleged Discrepancies of the Bible*, p. 321
 12. (10:15–19) George Williams, *The Student's Commentary on the Holy Scriptures*, p. 166
 13. (11:1–5) Matthew Henry, “The Books of Samuel,” *Matthew Henry's Commentary on the Whole Bible*, II: 494
 14. (12:10–14) G. Campbell Morgan, *Searchlights from the Word*, p. 91
 15. (12:15–23) Henry, “Samuel,” II: 504
 16. (12:26–30) Flavius Josephus, *The Works of Josephus*, 1987, p. 193
 17. (12:31) カイル (C. F. Keil) とデリッチ (F. Delitzsch) は、より残酷な意味が正しく、再翻訳によって事実が緩和されるべきではないと考えている。しかし、彼らは、この処罰は捕虜になった戦闘員だけに与えられるか、「せいぜいラバのアクロポリスの男性住民にしか」適用されないと考えている (“Samuel,” VII:396)。
 18. (14:14) Hoste and Rodgers, *Bible Problems*, p. 215
 19. (15:7–12) ダビデの治世は全部で40年間だったので、ここでの伝統的な読み方
 - (40) は間違いなく書写者の間違いである。古代ヘブル語の写本では、数字を完璧に写すのは特に困難だった。
 20. (21:15–22) Cited by Keil and Delitzsch, “Samuel,” VII: 446
 21. (23:1–7) 3節と4節のすばらしい音楽は、アメリカの初期の作曲家の一人であるリチャード・ビリングス (Richard Billings) によって作曲された。
 22. (23:13–17) Williams, *Student's Commentary*, p. 309
 23. (24章書き出し部分) William D. Crockett, *A Harmony of Samuel, Kings and Chronicles*, pp. 138–40.
 24. (24:15–25) Henry, “Samuel,” II: 446

参考文献

サムエル記第一の参考文献の項を参照。

列王記第一

序 論

「この国の歴史が、ダビデの治世の終わりからアハズヤの治世の中頃まで記録されている。ソロモンのもとで栄華を極めた王国は、私たちの主の千年王国を予表するものである。国の繁栄は、統治者と国民のあり方にしたがって盛衰し、従順が祝福の条件であるという重要な原則を私たちに示している。」

F・B・マイヤー (F. B. Meyer)

I. 正典における独自性

もともと一巻の書物であった列王記の重要性は、列王記がソロモンの治世からバビロン捕囚までの400年にわたるイスラエルの歴史を扱う、という歴史観からうかがい知ることができる。列王記は、(歴代誌のように)ユダの歴史を記録するだけでなく、北の「イスラエル」あるいは「エフライム」と呼ばれる背教の国の治世も記録している。しかし、列王記は単なる歴史書ではない。王たちは主に仕えたのか、それとも偶像に仕えたのか、あるいは神への忠誠心が中途半端だったのかについて、霊的な分析を行っている。おそらく、聖書の読者の大半にとって最も有益なのは、預言者エリヤとその後継者エリシャのドラマに満ちた、しかし霊的教訓のある働きであろう。列王記の重要な教訓は、神は忠誠に報い、背信を罰するということである。ヒゼキヤとヨシヤ

は前者の最も顕著な例である(Ⅱ列王記18:3、22:2)。後者の明らかな例は、国家規模では、最初は北王国の捕囚(紀元前722年)、次いで南王国の捕囚(紀元前586年)が挙げられる。

II. 著者問題

列王記の大部分は、さまざまな記録から編纂されたもののようであり、そこに聖霊の導きがあったにしても、人間としての著者は不明である。著者は祭司だったという説もあるが、背教した北王国にふさわしい祭司がいたかどうかは疑問が残る。預言者が著者である可能性の方が高い。この書の最終的な編集者は、祭司であればエズラ、預言者であればエゼキエルかエレミヤではないかと考えられている。

III. 執筆年代

列王記第二は、バビロンの王エビル・メロダクが、ユダの王エホヤキンを、37年におよぶ牢獄生活の末、温情によってその位を引き上げる、という前向きで和解的な出来事で終わっている（紀元前560年頃）。さらに喜ばしい歴史的出来事は、その記述が欠落していることでかえって目立つユダヤ人のパレスチナへの帰還の始まり（紀元前536年）である。この帰還がすでに始まっていたとしたら、列王記の著者のような愛国的筆者が、それに何も言及しないということは考えにくいので、列王記の完成時期は紀元前560年から536年の間と考えられる。

IV. 背景と主題

列王記に登場する二つの代表的なグループは、王たちと預言者たちである。王に下されるさばきは、王が主に従順であるか不従順であるかに直接起因している。預言者の務めは常に、迷える国民をヤハウェに呼び戻すことであった。ギブソン (O. J. Gibson) は、本書を次のように要約している。

（列王記の）記述には、二系統の王たちが年代順に織り込まれている。十部族からなるイスラエルはエルサレムの北に位置していたため、北王国と呼ばれることもある。最初の統治者ヤロブアムから、アッシリアによる滅亡と捕囚に至るまで、イスラエルは神の前に不従順と偶像礼拝を繰り返した。エルサレムを中心とする、いわゆる南ユダ王国は、決して神に忠実とは言えなかったが、忠実な少数派の間

では表面的な従順さを保っていた。その時代で最も栄光に満ちていたのはソロモンの時代であった。神殿の建設とその奉獻は他のどの時代よりも注目を集め、それが神の目にどれほど重要であったかを示している。離反とさばきで終わるソロモンの治世は、神の特権と栄誉が濫用され、神のことが踏みじられるとどうなるかという厳粛な警告である。あらゆる恵みの訴えが、繰り返される不従順によって尽き果てたとき、異教の国々ではなく神が、まず北王国を、そして南王国を滅ぼされたのである。^{*(1)}

構 成

- I. ダビデの最後の日々 (1:1～2:11)
 - A. アドニヤの王位篡奪の企て (1:1～38)
 - B. ギホンでのソロモンの油注ぎ (1:39～53)
 - C. ダビデのソロモンへの最後の命令 (2:1～11)
- II. ソロモン王の黄金時代 (2:12～11:43)
 - A. ソロモンによる反対派の肅清 (2:12～46)
 - B. ソロモンの知恵 (3章)
 - C. ソロモンの行政官たち (4:1～19)
 - D. 栄華を極めたソロモン (4:20～34)
 - E. ソロモンの神殿 (5～7章)
 1. ソロモンとヒラム王の協定 (5章)
 2. 神殿の説明と建設 (6章)

3. その他の建物の建設 (7:1～12)
 4. 神殿の調度品 (7:13～51)
 - F. 神殿の奉献 (8章)
 - G. ソロモンの名声 (9、10章)
 1. 神との契約 (9:1～9)
 2. ヒラムへの贈り物 (9:10～14)
 3. ソロモンの臣民とささげ物 (9:15～25)
 4. ソロモンの海軍 (9:26～28)
 5. シェバの女王の訪問 (10:1～13)
 6. ソロモンの富 (10:14～29)
 - H. ソロモンの背教と死 (11章)
- III. 分裂した王国 (12～22章)**
- A. ユダの王レハブアム (12:1～24)
 - B. イスラエルの王ヤロブアム (12:25～14:20)
 1. ヤロブアムの偽りの宗教の中心地 (12:25～33)
 2. ヤロブアムと神の人 (13:1～32)
 3. ヤロブアムの偽りの祭司職 (13:33, 34)
 4. ヤロブアムの息子の死 (14:1～20)
 - C. ユダの王レハブアム (続き) (14:21～31)
 - D. ユダの王アビヤム (15:1～8)
 - E. ユダの王アサ (15:9～24)
 - F. イスラエルの王ナダブ (15:25～27)
 - G. イスラエルの王バアシャ (15:28～16:7)
 - H. イスラエルの王エラ (16:8～14)
 - I. イスラエルの王ジムリ (16:15～20)
 - J. イスラエルの王ティブニ (16:21, 22)
 - K. イスラエルの王オムリ (16:23～28)
 - L. イスラエルの王アハブと預言者エリヤ (16:29～22:40)
 1. アハブの罪 (16:29～34)
 2. エリヤと干ばつ (17:1～7)
 3. エリヤとツアレファテのやもめ (17:8～24)
 4. バアルの祭司たちに対するエリヤの挑戦 (18:1～19)
 5. バアルの祭司たちに対するエリヤの勝利 (18:20～40)
 6. エリヤの雨乞いの祈り (18:41～46)
 7. エリヤのホレブへの逃走 (19:1～18)
 8. エリヤのエリシャ任命 (19:19～21)
 9. アラムに対するアハブの最初の勝利 (20:1～22)
 10. アラムに対するアハブの第二の勝利 (20:23～34)
 11. アハブの不従順 (20:35～43)
 12. アハブのナボテに対する罪 (21章)
 13. アハブの最後の戦い (22:1～40)
 - M. ユダの王ヨシャファテ (22:41～50)
 - N. イスラエルの王アハズヤ (22:51～53)

注 解

I. ダビデの最後の日々(1:1～2:11)

A. アドニヤの王位篡奪の企て(1:1～38)

1:1～4 ダビデは七十歳となり、健康も衰えつつあった。彼は歴史の舞台から去ろうとしていた。2節の家臣たちの提案は、一見不可解で衝撃的である。しかし、ダビデのような病気の場合、この慣習は当時有益なものとして受け入れられていた。それは道徳的に問題のある行為ではなく、世間のスキャンダルになるようなこともなかった。一つ確かなことは、ダビデはアビシャグを（性交渉を持つという意味で）「知らなかった」ということである（4節）。また、第2章で、アドニヤが後に彼女を求めたことを、ソロモンは王位継承の要求と解釈していることから、アビシャグはダビデの正妻とみなされていた可能性が高い（2:21,22）。

1:5～10 アドニヤはおそらくダビデにとって生存する最年長の息子であり（2:22）、そのため自分が王位継承者であると考えていた。アムノンとアブサロムは二人とも死んでいた。キルアブもおそらく死んでいた（IIサムエル3:2～4）。父が亡くなる前に、アドニヤは自分が王であると宣言し、大勢の取り巻きを準備し、ヨアブとエブヤタルの支持を取り付けた。彼は大変な美男子であったため、多くの支持者を獲得した。6節は、ダビデが息子に甘い父親であり、アドニヤが甘やかされた息子であったことを物語っている。アドニヤがエン・ロゲルの近くで多くの家畜をいけにえとして献げたとき、彼は父に忠実であると分かっていた

者、すなわち預言者ナタン、ベナヤ、ダビデの勇士たち、そしてソロモンを除くすべての者を宴会に招待した。

1:11～38 ソロモンが生まれる前に、神はダビデに、ソロモンがイスラエルの次の王となる、と告げておられた（I歴代誌22:9,10）。ナタンは主のことばが成就するのを見たいと願っていた。アドニヤの脅威を懸念したナタンは、巧みにダビデに注意を促した。ナタンの助言を受けたバテ・シェバは、病に伏す王の前に現れ、その陰謀を知らせた。彼女はまた、（記録には残っていないものの）彼女の息子であるソロモンが次の王となる、とダビデが以前約束したことを思い出させた。ソロモンを後継者とするのを公に発表するよう彼女が懇願し終えたちょうどその時、ナタンが到着し、バテ・シェバは退席した。ナタンは、アドニヤが王国を乗っ取ろうと画策していることを繰り返し伝え、それが王の望みなのかどうか尋ねた。ダビデがバテ・シェバを呼ぶと、ナタンは退席した。ダビデはバテ・シェバに、ソロモンが確かに自分の跡継ぎとなる、と言って安心させた。それからダビデは祭司ツァドク、預言者ナタン、ベナヤに、ソロモンを王の雌ろばに乗せ、都の外にある泉ギホンに連れて行き、王として油を注ぐように命じた。

B. ギホンでのソロモンの油注ぎ（1:39～53）

ソロモンは父と二年間共同統治していたと広く考えられているが、そのためには油注ぎを受ける必要があったはずである。これはソロモンを唯一の統治者として認める二度目の油注ぎであった。祭司ツァドクによるこの公的な油注ぎは、ダビデに従う者たちの間に大きな喜びをもたらしたが、アドニヤと彼と一緒に宴会をしていた者たち

の間には動揺が走った。ソロモンが王座に就き、ダビデがこのことを主に感謝していることを聞いて、彼らはアドニヤの陰謀が失敗に終わったことを悟った。アドニヤは幕屋に逃げ込み、祭壇の角をつかんだが、この行為によって彼は罰を免れるはずであった。ソロモンは、アドニヤが立派な人物と認められれば助命されるが、今後、悪事に手を染めるようなことがあれば処罰されると定め、アドニヤを家に帰した。

C. ダビデのソロモンへの最後の命令 (2:1～11)

国を追われたダビデが、この恵みの時代に拒絶されたキリストの予型であるならば、ソロモンは千年王国の栄光の中で統治する王としてのキリストの予型である。キリストが戻って王国を樹立するとき、キリストが最初に行うことは、敵を滅ぼし、違反者を一掃することである。このことは第2章に描かれている。ダビデは死の直前にソロモンに厳粛な命令を下し、主に従順であるよう促し、特定の人々に関して適切な措置を取るよう指示した。ヨアブはアブネルとアマサを殺害した罪で殺されなければならない。バルジライの子たちは、アブサロムから逃げるダビデに対して彼らの父が親切にしてくれたので、親切な扱いを受けるべきであり、シムイはダビデを呪ったので最終的には殺されるべきであるが、具体的なことはソロモンに任された。「平和なときに戦いの血を流し」(5節)という表現は、NIVでは「平時に戦いさながら彼らの血を流した」と訳されている。40年の統治の後、ダビデは死に、エルサレムに葬られた。

II. ソロモン王の黄金時代 (2:12～11:43)

A. ソロモンによる反対派の粛清 (2:12～46)

2:12～25 ソロモンは王座に就き、王位は確立した。アドニヤは王位を奪われたことを悲しんだが、神の御心によって王位がソロモンのものになったことを認めざるを得なかった(15節)。純真な思いからか、あるいは陰険な思いからか、彼はバテ・シェバを通してソロモン王に、ダビデを看病したアビシャグを妻として与えてくれるように嘆願した。ソロモンはこれを、王国そのものを求めることに次ぐものとみなし、アドニヤを処刑するようベナヤに命じた。

2:26～34 王はまた、エブヤタルを祭司職から追放した。彼が、失敗に終わったアドニヤの陰謀を支持したからに違いない。これは、エリの家族に対する神のさばきの部分的成就であった(Iサムエル2:31～35参照)。エブヤタルの解任を聞いたヨアブは、避難場所を求めて祭壇の角のところに逃げた。ベナヤは彼に祭壇から離れるように命じたが、ヨアブは拒否し、そこで死ぬ決意を表明した。ベナヤは速やかに彼を処刑し、荒野にある彼の家に葬らせた。アブネルとアマサの死に対する復讐がついに果たされた。神の祭壇は、神の律法を破った者には何の保護も与えなかったのである。

2:35 ベナヤは軍団長に任命され、ツァドクがエブヤタルの後を継いで祭司となった。ベナヤはサウルの時代からダビデに仕えていた。彼は武勇に優れ、ダビデの近衛隊長でもあった(IIサムエル20:23)。彼の揺るぎない勇気を凌ぐものがあつたとすれば、ダビデ家に対する彼の不滅の忠誠心だけである。勇気と忠誠心は、ダビデに優

る偉大な御子、主イエス・キリストに仕える者たちの特徴でもあるべきである。

2:36~46 ソロモンはシムイの処刑をすぐに命じなかった。むしろ、彼はシムイを一種の軟禁状態に置き、町から出ることを禁じた。三年後、シムイはエルサレムを出て、ガテに二人の逃亡奴隷を捜しに行った。そうすることで、彼はソロモンが以前誓わせた誓いを破り、ダビデに対してもソロモンに対しても忠実ではないことを示した。彼が戻ると、王はベナヤに彼を殺すように命じた。このように、ソロモンは、自分の意に沿わない者を積極的に排除することで、王国を安泰にした。それ以後、彼の統治は平和なものとなった。クリスチャンは、内なるキリストの支配に反対するものを自分の生活から排除することによって、神の平和を知ようになるのである。

B. ソロモンの知恵 (3章)

3:1 ソロモンは当時エジプトで権力を握っていたファラオの娘と結婚した。これはおそらく、彼が政略結婚に信頼を置いていたことを示している。この結婚は政治的には好都合であったが、律法で禁じられていたのはもちろん、霊的には破滅的だった。この時点から、ソロモンのハーレムは拡大を続け、何百人もの外国人女性を抱えるまでになった。ソロモンはこうして多くの外国勢力とつながりを持ったが、主とは疎遠になった (11:1~8)。

3:2~4 ここでは、高き所が主を礼拝するために用いられた。これは厳密には律法に従ったものではなかった。神は定められた場所でのみ礼拝されることになっていたのである。しかし、ここではシロが紀元前1050年頃、パリシテ人によって破壊され、契約の箱が持ち去られ (Iサムエル記4章)、正式な神殿がなかったという理由

で許容されている。神殿が建てられた後も、高き所は使われ続けたが、それは偶像礼拝のためであった。この時、契約の箱はエルサレムにあったが、幕屋は約10キロメートル離れたギブオンにあった (I歴代誌21:29)。王が千匹の全焼のささげ物を献げたのは、おそらく治世の初めであっただろう。

3:5~15 神はギブオンでソロモンに現れ、何を一番望むかとお尋ねになった。王はイスラエルの民をさばき、統治するという重大な任務のために聞き分けの心を願った。その願いは主に喜ばれ、聞き届けられた。そして、ソロモンが神に従って歩むなら、という条件で、富と誉れ、そして長寿もそれに加えられた。今日、神はすべての人に、人が求めることのできる最大の賜物、主イエス・キリストを与えてくださっている。「このキリストのうちに、知恵と知識の宝がすべて隠されています」(コロサイ2:3)。

3:16~28 3章の残りの部分は、王の偉大な知恵の例を示している。二人の遊女が、どちらが赤子の母親であるかをめぐって言い争っていた。ソロモンが剣で赤子を二等分にしようと脅すと、たとえ自分のものにできなくても子どもを助けたいという願いによって、本当の母親が誰か明らかになった。このような知恵によって、ソロモンはイスラエル全土で大いに恐れられ、尊敬されるようになった。

C. ソロモンの行政官たち (4:1~19)

4:1~6 これらの節には、ソロモンの高官たち、つまり内閣のメンバーが列挙されている。大祭司として彼の跡を継いだと思われるツァドクの孫アザルヤ、國務長官エリホレフとアヒヤ、史官、つまり年代記作者ヨシャファテ、軍団長ベナヤ、祭司ツァドクとエブヤタル、役人たちを統率す

るアザルヤ、ソロモンの友人ザブデ、宮廷を管理するアヒシャル、労働力（貢ぎ物）を管理するアドニラムである。4節の「エブヤタル」という名前は、ソロモンが2:27で解任した人物と同一人物であるとする、困難が生じる。おそらく彼はこの時期以降に解任されたのであろう。あるいは、祭司としての職務を遂行していなかったものの、祭司の称号を保持していたのかもしれない。また、それは別のエブヤタルだった可能性もある（Ⅱサムエル8:15～18を参照）。マシュー・プール（Matthew Poole）は次のようにコメントしている。

ここに書かれているのは、ソロモンのすべての重臣、すなわち現在の重臣、以前の重臣、そして後の重臣、という見方が一部にある。11節と15節で、ソロモンの娘のうちの二人と結婚した二人の人物の名前が挙げられているが、それはこの時から何年も後のことでなければならぬからである。^{*(2)}

4:7～19 ソロモンはイスラエルの地を十二の地区に分け、各地区に守護を置いて民から食糧を集めた。担当官を擁する各地区は、一年に一か月分、王室に食糧を納める責任があった。ユダについては言及されていない。

D. 栄華を極めたソロモン（4:20～34）

4:20, 21 ソロモン統治下の王国は、ユーフラテス川、ペリシテ人の地、エジプトの国境にまで及んでいた（21, 24節）。この領土の多くは、ソロモンに貢ぎ物を納めてはいてもイスラエルの一部とはみなされない王国で構成されていた。したがって、ソロモンの王国はパレスチナ契約（創世記

15:18～21）の完全な成就ではなかった。

4:22～28 ソロモンの治世の壮麗さ、すなわち膨大な食糧供給、何千頭もの馬などが描写されている。しかし、そのような贅沢を支えるためには、民に非常に重い税金を課す必要があったことを忘れてはならない。また、ソロモンが次々と馬を買い集めたことは神の命令に違反していたことも見逃してはならない（申命記17:16）。（26節とⅡ歴代誌9:25が一見矛盾しているように見えることについては、当該の章の注釈を参照のこと。）

4:29～34 王の知恵が再び言及されている。彼は他の誰よりも賢かった。31節で言及されている賢者はゼラフの息子たちであり（Ⅰ歴代誌2:6）、マホル（「舞い手」）は単なる称号である。エタンは詩篇89篇の作者であり、ヘマンは詩篇88篇を書いた。他の人々については何もわかっていない。ソロモンは三千の箴言を語ったが、そのうちのほんの一部だけが『箴言』に残されている。彼の歌は千五首にのぼり、その中で最も優れたものは雅歌である。33節は、彼が多くの学問に関する幅広い知識を持っていたため、自然界の教訓を用いて自分の知恵を説くことができたことを意味している。人々は彼の話を聞くために遠くからやって来た。

E. ソロモンの神殿（5～7章）

1. ソロモンとヒラム王の協定（5章）

5:1～12 ヒラムはツロの異邦人の王で、レバノンに広大な木材資源を支配していた。彼はダビデに対して非常に友好的であり、ソロモンにも同じ友好関係を示したいと考えていた。そこで、ソロモンが主のために神殿を建てるための木材をヒラムが提供する合意が交わされた。ソロモンは北のレバノンに労働者を送り、伐採作業を手伝わせ

ることにした。次に、丸太は地中海まで運ばれ、**いかだ**でヨッパの近くまで流され、その後、陸路でエルサレムへ運ばれるのである。木材の対価として、ソロモンはヒラムの一族に毎年**食糧**を提供した。

5:13~18 この大規模な木材伐採作業に必要な人員を確保するため、**ソロモン**はイスラエルから**三万人**を徴用し、毎月**一万**人ずつ交代で**レバノン**に派遣した。これらの人員に加え、王はイスラエルの採石場で神殿の石材を準備する**八万人**のカナン人奴隷（**ゲバル人**）を働かせた（15節、Ⅱ歴代誌2:17, 18参照）。また、**荷を担ぐ者**も**七万人**いた。ソロモンの大規模な建築作業には、奴隷の労働力が大量に投入された（9:15~22参照）。しかし、それでも不十分であることが判明し、彼は現地のイスラエル人（おそらくユダを除く）を奴隷労働者としてではなく、強制労働者として、徴用せざるを得なくなった。イスラエル人は独立心を重んじる伝統があったため、これに激しく反発し、それが王国の分裂の大きな原因となった（12:4）。あらゆる事柄において神の知恵を持ち、他者の感受性や幸福を踏みにじらないことがいかに必要だろうか（“*Daily Notes of the Scripture Union*”）。（これら二つの章における数値の不一致の説明については、Ⅱ歴代誌2章の問題に関する注釈を参照。）

2. 神殿の説明と建設（6章）

6:1 1節には、神殿の建設作業はエジプトの地を出てから**四百八十年**後に開始された、と記されている。ソロモンが建設を始めたのが紀元前967/966年だとすると、出エジプトは紀元前1446/1447年に遡ることになる。ただし、これらの年代を絶対的な確度で決定することは不可能である。この問題に関しては学者の間で多くの議論

があるが、紀元前1446年は出エジプト早期説の年代に非常に近い。

6:2~6 6章では神殿の設計に関する詳細が述べられている。それらは時に専門的で複雑であり、正確なイメージを把握するのは困難である。しかし、神殿が次のように建てられたことは分かっている。神殿は長さ90フィート（27.4メートル）、幅30フィート（9.1メートル）、高さ45フィート（13.7メートル）であった（2節）。**神殿**は二つの空間に分かれていた。最初の空間は聖所で、長さ60フィート（18.3メートル）、幅30フィート（9.1メートル）、高さ45フィート（13.7メートル）であった（2, 17節）。おそらく最上部近くにあったと思われる格子窓は、採光と、煙の排出口の役割をした（4節）。第二の空間は至聖所で、長さ30フィート、幅30フィート、高さ30フィートであった。前庭は、東側または前端部の長さに加えて30フィートを加え、地面から15フィート（4.6メートル）高くなっていた。神殿の北側、西側、南側には、祭司のための三階建ての**脇屋**があった。これらは神殿の壁に接していたが、神殿の一部ではなかった。

6:7~10 神殿の木材と石材はすべて採石場で正確な仕様に仕上げられたため、エルサレムに運ばれたとき、**鉄の道具**を使わずに組み立てることができた（7節）。こうして、今日、神の生ける神殿が建てられているのと同じように、神殿は静かに建てられたのである。8節と10節には、脇屋の出入り口と各階の高さ（7.5フィート [2.3メートル]）が記されている。9節は、神殿全体の屋根について述べている。

6:11~22 建築中に主のことばが恵み深くソロモンに臨み、**ダビデ契約**を確認し、王が聞き従うなら、神が神殿でイスラエルの子らの間に住まわれることを約束した（11~13節）。建物の内部は**杉の板**で張り

巡らされ、**純金**で完全に覆われていた。石は全く見えなかった。これらの石は、非常に巧みに、そして精密に切り出されていたため、目に見えなかった。スポルジョン (Charles H. Spurgeon) は、霊的な適用をしている。

基礎石でさえ、ごつごつした荒削りのものではなく、切り出された高価なものであった。神は、ご自分のためになされるすべてのことが丁寧になされることを望んでおられる。神は、人の目に触れるものに関心を持たれるのではなく、人の目から隠された霊的な神殿の生きた石の美しさを喜ばれるのである。^{*(3)}

6:23～28 至聖所にある契約の箱の両側には、金で覆われた二体の彫刻されたケルビムが立っていた。その広げた翼は、一方の壁からもう一方の壁まで伸びていた。これらは、宥めの蓋のケルビムとは異なる (出エジプト記25:18、37:9)。

6:29, 30 神殿の内側には、金以外には何も見えなかった。

6:31～35 31節と32節には、至聖所に通じる**折り畳み戸**、または引き戸のことが説明されている。各空間は至聖所の扉の内側に掛けられた垂れ幕によって仕切られていた (Ⅱ歴代誌3:14)。聖所に通じる主な扉は33節から35節に記されている。

6:36 神殿の正面には祭司たちの内庭があった。内庭と外庭の間には低い壁があった。この壁は**切り石三段と杉の角材一段**でできていた。内庭には、いけにえを献げるための巨大な青銅の祭壇、祭司たちが清めのために用いた巨大な洗盤、および十の小さな洗盤があった (7章)。外庭はイスラエルの人々のものであった。

6:37, 38 神殿はソロモンの治世の四

年目に着工され、七年後に完成した。

3. その他の建物の建設 (7:1～12)

7:1 物語はここで、ソロモン自身の家と、大庭の中の他の王家の建物の建設に移る。

ソロモンの家、つまり王宮は、建設に十三年を要した。それは神殿のやや南東、内庭の壁のすぐ外側に位置していた。神殿よりも王宮の建設に六年長くかかったという事実は、ソロモンが神の栄光よりも自己満足を優先していたから、という考えが一部にある。一方、神殿がわずか七年で完成したのは、神のために場所を設けたいと願うソロモンの熱意があったからであり、彼の何千人もの労働者が (主のための) 「聖なる神殿」を急ピッチで建設したためかもしれない。

7:2～12 **レバノンの森の宮殿**(2～5節)は大庭の南側に位置していた。この宮殿の際立った特徴は、多数の杉の柱があることであった。おそらくこれがこの名前の由来であろう。この建物の用途ははっきりとは分からないが、Ⅰ列王記10:17から、武器庫であったと推測される。レバノンの森の家のすぐ北には、**柱の広間** (または玄関) があった (6節)。それはおそらく、**さばきの広間**と**玉座の広間**への入り口であった (7節)。王宮に隣接して**ファラオの娘の家**があり、王の妃たちが住んでいたと思われる (8節)。すべての建物は、正確な寸法に切り出された高価な石材で造られていた。また、大庭を取り囲む壁は、杉の梁で覆われた三列の石材で造られていた。

これらの聖句の別の解釈では、レバノンの森の家、柱の間、玉座の広間 (さばきの広間) はすべて宮殿の一部とされている。**ファラオの娘**のために作られた広間は王宮に隣接していた。

4. 神殿の調度品 (7:13~51)

7:13, 14 ヒラム (※NKVでは「フラム」)はツロの王とは別人である。彼はツロに住んでいたユダヤ人の血筋を引く名工であった。

7:15~22 次に神殿の入り口に立っていた二本の巨大な青銅の柱の説明がある。片方はヤキン (「彼は確立する」)、もう片方はボアズ (「彼には力がある」)と名付けられた。それぞれの柱の頂の上には、装飾豊かな鉢状の柱頭があった。これらの柱の物理的な詳細は記されているが、その背後にある霊的な意味は語られていない。ある人は、神の生きた神殿の柱とは、聖なる人格を持った信仰者たちのこと、という適切な見方をしている (ガラテヤ2:9)。黙示録3:12は、勝利を得る者は神の神殿の柱とされる、という神の約束である。

7:23~26 鑄造された青銅の海は、内庭にある巨大な洗盤である。それは十二頭の青銅の雄牛に支えられた大きな水盤で、神殿と祭壇の間、東南側に置かれ (Ⅱ歴代誌4:10)、祭司たちが手足を洗うための水を供給した。

7:27~39 大きな洗盤のほかに、四輪の台車または台座に載せられた十個の小さな洗盤があった。青銅の祭壇については8:64まで何も言及されていないが、それも内庭に置かれていた。

7:40~47 ヒラムは、神殿の灰壺、十能、鉢など、神殿に関連するすべての磨かれた青銅細工の製作を監督した。青銅器は、現代の方法とほぼ同じ方式を用いて、粘土で鑄造された (46節)。

7:48~50 聖所の調度品には、金の祭壇、臨在のパンを載せる金の机十卓 (Ⅱ歴代誌4:8)、純金の燭台十基、および金の器具が含まれていた。

7:51 ダビデは建設が許されなかった

神殿のために入念な準備をし、ソロモンはこれらの宝物を神殿に運び入れて使用し、保管した。本章とⅡ歴代誌2~4章の違いについては、歴代誌第二の注釈で論じている。

F. 神殿の奉獻 (8章)

8:1~5 神殿が完成すると、次の段階は契約の箱を、ダビデの町、あるいはシオンとして知られるエルサレムの地域から、モリヤ山の神殿に運ぶことだった。これが行われたのは、おそらく建物が完成してからほぼ一年後であろう (2節とⅠ列王記6:37, 38を参照)。仮庵の祭りの直前に、全国的な大祭が行われ、祭司たちとレビ人たちは、主の箱と、会見の天幕と、聖なる用具を神殿に運び込んだ。これには、おびただしい数の羊や牛のいけにえが伴った。

8:6~9 契約の箱は至聖所に置かれた。何らかの理由により、担ぎ棒の先は聖所からは見えていたが、外からは見えなかった。KJV (欽定訳聖書) に述べられているように、棒は取り除かれていなかった (8節)。このとき、箱の中にあったのは十戒が刻まれた二枚の石の板だけであった。マナの壺や芽を出したアロンの杖の行方は語られていない (ヘブル9:4)。

8:10, 11 契約の箱 (キリストの予型) が適切な場所に置かれるとすぐに、神の臨在を示す栄光の雲が主の宮に満ちた。主の栄光が神殿を満たしたので、祭司たちはその職務を遂行することができなかった。

8:12, 13 すべてが完了すると、ソロモンは主に向かって語った。神は黒雲の中に住むと言われた。ソロモンは神のために、神自身の栄光以外には光のない、至聖所を備えた荘厳な建物を建てた。マシュー・ヘンリー (Matthew Henry) はいつもの霊的な洞察力をもって、次のようにコメントしている。

特に望まれるさまざまな具体例を列挙した。

神は、ソロモンが今まさに捧げようとしている祈りを聞く用意があることを示された。それだけでなく、この建物に住まわれることで、祈りを捧げる人々が皆、神に願い出る勇気を持つことができるようにされた。しかし、神の栄光は雲、しかも暗い雲の中に現れた。それは次のことを示すためである。

- (1) 福音の光と比較した（旧約）時代の暗闇。福音の光によって、私たちは、顔の覆いを取り除かれ、鏡に映されたかのようにして主の栄光を見る。
- (2) 神の栄光が明らかにされる天の幸福と比較した私たちの現在の状態の暗闇。今、私たちは神がどのような方でないかを語るのみだが、やがて、神をありのままに見ることになる。^{*(4)}

8:14～21 それから王は振り向いて、民を祝福した。そして神がダビデに約束された神殿に関する約束の成就をたどり、契約の箱が定まった住まいを得たことに満足を表明した。

8:22～26 奉獻の祈りは22～53節に記録されている。神がダビデと結ばれた神殿に関する契約を守られたことを称えた後、ソロモンは神に、**ダビデ**と結ばれたもう一つの契約を成就して下さるよう求めた。それは、**ダビデの子孫**から王位に就く者が絶えることはないという約束である。

8:27～30 ソロモンは、地上のいかなる神殿も偉大な神をお迎えするには足りないことを理解しつつも、主がこの神殿を認め、彼やイスラエルの民がそこで神に祈るとき、主がそれを聞き入れ、赦して下さるように願った。

8:31～53 それから王は、主の答えが

1. おそらくは明確な証拠がないために宣誓を経て行われた訴訟において、神が有罪者を罰し、無実の者に報いてくださるように (31, 32節)。
2. イスラエル軍が罪を犯したために敗北しても、彼らが罪を告白するなら、彼らを赦し、国に帰還できるように (33, 34節)。
3. 干ばつのとき、人々が悔い改めて神の前にへりくだるなら、雨を降らせてくださるように (35, 36節)。
4. 飢饉や疫病、立ち枯れや黒穂病、虫害、敵の包囲、その他の災難が彼らに降りかかったなら、神殿に向かって捧げられる**祈り**を聞き入れ、その地を赦して下さるように (37～40節)。
5. もし、異邦人がイスラエルの信仰に改宗し、神に**祈る**なら、そのような改宗者の祈りに答えてくださるように (41～43節)。
6. ソロモンは戦いに勝利するための祈りを予想し、そのようなすべての願いを心に留めてくださるように (44, 45節)。
7. ソロモンは次に預言的に語り、イスラエルが罪のゆえに**捕囚**となる時を予見した。そして、主が彼らの悔い改めの祈りに耳を傾け、彼らを捕らえた者たちが彼らに情けをかけてくれるように求めた。何はともあれ、イスラエル人は神がエジプトから救い出した民だからである。これらの聖句は、バビロン捕囚と、

キュロスの勅令によるその後の
帰還によって成就した（46～
53節）。

8:54～61 神に祈った後、ソロモンは
神の臨在と、神への忠誠を全うする力、そ
して地上の国々の中で神を証しする力を与
えてくださるよう、滔々と、また雄弁に求
め、民を祝福した。

ソロモンの祝福のことばは、彼の祈り
の他の部分と同様に、偉大な霊的真理に
対する深い感謝の念を表している。

1. 神は完全に信頼できる存在である。「一
つとして、神が約束を破られたことは
なかった」（56節参照）——何とすば
らしい証言だろう！
2. 過去は未来を保証する（57節参照）。
神は不変であるから（ヘブル13:8参照）、
神が過去に示されたご自身の姿は、将
来、私たちに示されるご自身の姿と同
じである、という事実には私たちは立脚
することができる（ヨシュア1:5参照）。
3. 人が弟子として生きるには神の助けが
必要である（58節参照）。エレミヤは
この真理を知っており、その理由も述
べている（エレミヤ10:23、17:9参照）。
人の自由意志の衝動さえも神から来る、
というのは、まさに逆説的である。ヨ
ハネ16:8～11の聖霊の働きと比較し
てみよう。
4. 私たちは日々神の助けを必要としてい
る（「日常のことにおいても」59節参照）。
神はまどろむことも、休むこともない
（詩篇121:4）。
5. 神がその子どもたちを大切にされるの
は、決して彼らの利己的な楽しみのため

めではなく、他の人々が神を知るよう
になるためである（60節参照）。

6. これらすべてを考慮すると、私たちが
神に絶対的な忠誠と従順を尽くさない
でいいはずがない（61節参照）。
（*“Daily Notes of the Scripture
Union”*）

この祈りは、Ⅱ歴代誌6章（注参照）に
も記録されているが、唯一の違いは、Ⅱ歴
代誌ではソロモンが祈りを三つの願いで締
めくくっている（Ⅱ歴代誌6:40～42）のに
対し、Ⅰ列王記では省略されているという
こと、そして、Ⅰ列王記ではソロモンが民
を祝福している（54～61節）のに対し、
Ⅱ歴代誌では省略されているということであ
る。

8:62～65 犠牲として献げられた膨大
な数の家畜のうち、一部は集まった大群衆
の食料として用いられた（65節）。青銅の
祭壇は、すべての全焼のささげ物などを収
めるには十分な大きさではなかったため、
ソロモンは主の宮の前庭の中央部の、ある
場所を聖別し、その他の供え物を主に献げ
ることができるようにした。この盛大な祝
祭の特徴は、喜びと礼拝、感謝であった。
数千頭の家畜が屠られたが、そのうちの
一頭も罪のきよめのささげ物や代償のささ
げ物として献げられたものはなかった。同
じ頃、ソロモンは、北はダンの近くのレボ
・ハマテ、南はエジプト川から来たイスラ
エル人と共に仮庵の祭りを行った。奉献祭と
仮庵祭は合わせて十四日間続いた。

8:66 その後、人々は喜びにあふれて
家路についた。Ⅱ歴代誌7:9では「八日目」
に厳粛な集会が開かれたとあり、66節では
「八日目」に民が帰された」と記されている。
ジョン・ヘイリー（John Haley）は、こ

の二つの記述を次のように調和させている。

仮庵の祭りは15日に始まり、その月の22日に終わり、「八日目」の「聖なる会合」（レビ記23:33～39）で締めくくられた。その終わりにソロモンは民を解散させた。解散が実際に行われたのは翌朝、つまり23日である（Ⅱ歴代誌7:10）。*⁽⁵⁾

G. ソロモンの名声（9、10章）

1. 神との契約（9:1～9）

9:1～5 神はソロモンの祈りに応えて、神殿をご自分の住まいとして受け入れ、御名をそこにとこしえに置く⁽⁶⁾と約束された。ソロモンの神殿はすでに存在しなくなって久しいが、主イエスが世界的な王国を樹立するために戻られるとき、神はエルサレムの神殿に住まわれる。それまでの間、神は信者の体、そして教会という神殿に住まわれるのである。

9:6～9 ソロモンの一族については、神は、ソロモンとその息子たちが従順であれば、王座に座る子孫を永遠に残すと約束された。しかし、もし彼らが生ける神から離れて偶像礼拝に走るなら、神はその民を捕囚とし、神殿を破壊し、イスラエルは異邦人の間で物笑いの種、嘲りの的にされ、神殿は廃墟の山となり、訪れる者はその荒廃ぶりに驚くであろう、と。

2. ヒラムへの贈り物（9:10～14）

この段落に関して、一部の注解者は、ソロモンはその壮麗な建築計画の資金調達するために、ヒラムから金百二十タラントを借り（14節）、その担保としてガリラヤ地方の二十の町をヒラムに与えたのではないかと考えている。ソロモンが気兼ねなく融資を依頼できたのは、ヒラムが以前に

も援助してくれたからである（11節）。ヒラムはこれらの町々を見て不満を感じ、それを「カブルの地」（「不快な、汚い、またはゴミのような」の意。直訳では「何の役にも立たない」）と呼んだ。Ⅱ歴代誌8:2によると、ソロモンは負債を完済した後、これらの町々を買い戻した可能性がある。

3. ソロモンの臣民とささげ物

（9:15～25）

9:15～23 15～22節は、ソロモンが建設計画に用いた強制労働の経緯について述べている。ハツォル、メギド、ゲゼルは、ソロモンが防衛目的で要塞化した3つの都市であった。ハツォルは北に位置し、パレスチナへの北の入り口を守っていた。メギドはイズレエル平原を見下ろす、パレスチナ北中部の重要な都市であった。メギドは重要な交易路の交差点を支配し、ヨルダン溪谷（南から）と中央平原（北から）の防衛の要衝となっていた。⁽⁶⁾ ゲゼルはエルサレムの西に位置し、内陸部からペリシテの海岸地帯に至る主要交易路沿いに位置していた。20節に挙げられている異邦人の捕虜はすべて強制労働者であった。イスラエルの子らが奴隷にされたわけではない。ソロモンの工事には五百五十人の監督官が置かれた。

9:24 ソロモンが建設した「ミロ」は、エルサレムのための一種の要塞であった。それは、ファラオの娘のための宮殿が完成した後に着工された。

9:25 ソロモンは、年に三回、三つの大きな祭り、すなわち種なしパンの祭り、七週の祭り（ペンテコステ）、仮庵の祭り（Ⅱ歴代誌8:13）で主にいけにえを献げた。

4. ソロモンの海軍（9:26～28）

ソロモン王は、エイラトに近いアカバ湾

のエツヨン・ゲベルに艦隊を保有していた。ヒラムは、自分のしもべの一部を艦隊に乗せてオフィル（正確な場所は不明。アラビア南部、インド、アフリカなどとも言われている）に派遣した。彼らは、四百二十タラントの金をソロモン王のもとに持ち帰った。

5. シェバの女王の訪問（10:1～13）

第10章の目的は、ソロモンの栄光を強調することである。酒器から帆船、象牙の王座から意匠を凝らした戦車まで、ソロモンは人間の心が望むあらゆるものを、想像を絶するほどの量で所有していた。富を絵に描いたようなシェバの女王でさえ、ソロモンの知恵と王国の栄華にすっかり圧倒された。これは主の約束の成就であり、ソロモンはそのゆえにすべてを得たのである（3:11～13）。

シェバ（おそらくアラビア半島南部のサバ島）の女王はやって来て、ソロモンに難問を投げかけて彼の知恵を試したが、彼はどんな質問にも答えることができた（3節）。彼の王国の壮麗さを目にした彼女は、それまで聞いていた熱烈な報告が部分的なものでしかなかったことを認めざるを得なかった。彼女は彼に大量の黄金と香料を贈り、彼女も彼から贈り物を受け取って自分の国に帰って行った。

6. ソロモンの富（10:14～29）

10:14, 15 ヒラムの援助により、ソロモンはオフィルから金だけでなく、大量の白檀（びゃくだん）の木材や宝石も手に入れることができた。ソロモンは貿易関係において天才であった。

10:16～22 金は非常に豊富だったので、ソロモンはそれを使ってレパノンの森の宮殿に掛ける盾を作るほどであった。彼

の象牙の王座は純金で覆われていた。王座の両側には大きな雄獅子の彫刻があった。また、王座に続く六つの段の両側にも雄獅子が立っていた。ソロモンの時代、銀は比較的価値が低いと考えられた。ソロモンの商船は金や銀だけでなく、象牙、類人猿（※英訳。新共同訳は「ひひ」、猿などの珍しい品々を運んで来た。^{*(7)}

10:23～25 ソロモンの富と知恵は世界的な名声をもたらし、彼を訪ねて来た崇拜者たちからの贈り物が殺到した。

10:26～29 ソロモンが馬と戦車に莫大な投資をしたことが言及されている。ケベ^{*(8)}（おそらくキリキア）は馬で有名だった。ソロモンは国防のために戦車や騎兵、馬を手に入れただけでなく、他国にも輸出した。ここでは言及されていないが、ソロモンの治世の贅沢は、それを支えるための重税を必要とした。これは王国の分裂につながるものであった（12:3～15）。

「課税は壊滅的なものだったに違いない。この東洋的華やかさと贅沢の一方で、内部には腐敗が蔓延していた。ソロモンはユダヤ人にとってのルイ14世だったのである」とラムリー（J.R.Lumly）は書いている。^{*(9)} 富と馬を増大させることは神のみことばに違反していた（申命記17:16, 17）。

H. ソロモンの背教と死（11章）

11:1～3 申命記17:17は、イスラエルの王が異教徒の妻を娶ることを禁じている。ソロモンがこの重要な命令にここまで従わなかったことは衝撃的である。結果はまさに予言されたとおりで、彼の妻たちが彼を偶像礼拝に向かわせたのである。

11:4～8 4節は、偶像礼拝を避けることに関して、ダビデ王の心は彼の神、主に全面的に忠実であったが、ソロモンはこの点で父に倣わなかったという意味である。

彼はエルサレムの東にあるオリーブ山に偶像礼拝の祭殿を建てた。

11:9～13 神はギブオン (3:5) とエルサレムの神殿奉献式 (9:2) の二度、ソロモンに現れた。そして今、ソロモンの偶像礼拝のゆえに、王国はソロモンから引き裂かれ、彼の家来の一人に与えられると告げられた。しかし、それはソロモンの存命中には起こらない上、十二部族すべてがダビデの家から奪われるわけでもない。(ユダ以外に—12:23) 一つの部族 (ベニヤミン) がソロモンの息子に与えられることになった。

11:14～22 ここに、ソロモンの敵のうち三人が挙げられている。一人目はエドムの王の子孫、ハダドで、ヨアブがエドムの男子を皆殺しにしたとき、幼くしてエジプトに逃れた。彼はファラオに厚遇され、王妃タフペネスの妹を妻として与えられた。ハダドは、ダビデとヨアブが死んだと聞いて、難色を示すファラオからようやくエドムに戻る許可を得た。そこを拠点に彼は南からソロモンに対する軍事作戦を展開した。

11:23～25 第二の敵はレゾンで、ダビデがツォバの民を殺した際に逃れ、略奪者の一団のリーダーとなった。その後、彼はダマスコに独立王国を築き、ソロモンにとっては北からの軍事的な脅威となった。ダマスコはダビデがその町を征服して軍隊を駐留させて以来、イスラエルのくびぎの下に置かれた (Ⅱサムエル8:5, 6)。アラムの主要都市であるダマスコを失ったことは特に深刻であった。その後何世紀にもわたってイスラエルの悩みの種 (※直訳「肉体のとげ」) となるからである。

11:26～28 第三の敵は、神が11節で言及されたソロモンの家来、エフライム族のネバテの子ヤロブアムである。ソロモンは彼にミロの建設における責任ある地位を

与えていた。この権力が、ヤロブアムに全イスラエルを治めたいという野望を抱かせたのかもしれない。

11:29～39 ある日、ヤロブアムはアヒヤという預言者に会った。彼らが野原で二人だけになったとき、アヒヤは自分の新しい外套を持って、それを十二切れに引き裂き、その十切れをヤロブアムに与えた。それは神が彼にイスラエルの十部族の支配権を与えるというしるしであった。またアヒヤはヤロブアムに、(ユダを含め—12:23) 一つの部族 (ベニヤミン) がソロモンの息子のために残されること、そして王国はソロモンの死後まで分割されないことを説明した。もしヤロブアムが主に従うなら、主の祝福と助けが保証されることになる。神がヤロブアムに課した制限に注目しよう。彼は王国全体ではなく、十部族を支配すること、彼が権力を握るのはソロモンの死後であること、また主に従い、しかも完全に主に従う場合にのみ、神は彼を永続する家とされること、などである。

11:40 (ところが) ソロモンがまだ生きている間に、ヤロブアムは反乱を起こしたようで、王の怒りから逃れるためにエジプトに逃げなければならなかった。彼はソロモンが死ぬまでそこにとどまった。ソロモンは自分の罪と向き合っただけで悔い改めるどころか、ヤロブアムを始末することによって神のこぼの成就を阻もうとした。しかし、ヤロブアムは今や北の諸部族の後継者として神に任命されていたので、ヤロブアムと戦うのは愚かなことだった。サウルは後継者ダビデを殺そうとしたが失敗した。ソロモンも同様にヤロブアムを殺害しようとして失敗した。ヤロブアムが支配する部族は次のとおりである。ルベン、ダン、ナフタリ、ガド、アシェル、イッサカル、ゼブルン、エフライム、マナセ、およびレビとシ

メオンの一部である。ソロモンの息子が支配する部族は、ユダ、ベニヤミン、およびレビとシメオンの一部である。ほとんどの場合、レビ（Ⅱ歴代誌11:13～16）とシメオンは、ユダに忠実であった。

11:41 『ソロモンの事績の書』は、おそらく彼の治世の公式な年代記であったと思われるが、靈感を受けた聖書の一部ではないことは確かである。

11:42, 43 ソロモンは四十年間治めた後、死んでエルサレムに葬られた。息子のレハブアムが後を継いだ。ソロモンの始まりは終わりより優っていた。始まりが良くても、終わりが良いという保証にはならない。彼は偉大さの頂点に上り詰めたが、道徳的な墮落と偶像礼拝の深淵に沈んだ。もし王が伝道者の書12:13, 14で自ら説いたことを実践していればどれほど良かったことだろう。

結局のところ、もうすべてが聞かされていることだ。神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである。神は、善であれ悪であれ、あらゆる隠れたことについて、すべてのわざをさばかれるからである。

Ⅲ. 分裂した王国（12～22章）

A. ユダの王レハブアム（12:1～24）

ソロモンの子レハブアムは、ユダを17年間（紀元前931／30～913年、Ⅰ列王記12:20～24、Ⅱ歴代誌11、12章）治めた。

12:1～11 レハブアムは王として認められるためにシェケムに行った。ソロモンが死んだことを聞いたヤロブアムはエジプトから戻り、イスラエルの全集団とともにシェケムに赴いた。イスラエル人はレハブ

アムに最後通牒を突きつけた—「今、あなたは、父上が私たちに負わせた過酷な労働と重いくびきを軽くしてください。そうすれば、私たちはあなたに仕えます。」ソロモンは宮廷の東洋的な贅沢を維持するために、強制労働と重い税金を課していた。つまり彼らは、「あなたの父上が私たちを苦しめた税金を下げれば、私たちはあなたに仕える。さもなければ、反乱を起こす」と言っていたのである。レハブアムは三日間考えさせてくれるよう頼んだ。その間、彼はまず長老たちに相談した。彼らは民に親切に接し、彼らに仕えるようにと助言した。しかし、若い助言者たちは、それとは正反対のことを提案し、さらに重い要求で民を脅迫するべきだ、と言った。その意味では、レハブアムの小指はソロモンの腰よりも太く、ソロモンがむちで民を懲らしめたのであれば、レハブアムはサソリ（※英訳「とげの付いた鞭」）を使うことになる、と。

12:12～20 ヤロブアムとイスラエルの会衆が三日目に戻って決定を聞くと、若者たちの助言どおりの回答が返ってきた。15節は、これがシロ人アヒヤを通して語られた主のことば（11:30～39）を成就するために主が起こされた出来事の節目となったと指摘している。この時点で、イスラエルの民はレハブアムに対して反乱を起こしたが、彼らの一部はまだユダの領土に住んでいた。レハブアムは、これらのイスラエル人を服従させるために、強制労働の監督官で不人気の役務長官アドラムを遣わしたが、彼らはアドラムを石で打ち殺した。次にイスラエルの民はヤロブアムを彼らの王とした。20節によれば、レハブアムに従ったのはユダの部族だけであったが、ベニヤミン（21節）、シメオン（ヨシュア19:1）、レビ族の大半はユダ族に属していたことを忘れてはならない。

12:21～24 レハブアムはイスラエルに宣戦布告してこれを阻止する計画を立てたが、神の命令により、その計画を中止した。先に長老たちの忠告を無視したレハブアムは、今度は主の助言を聞き入れ、多くのイスラエル人の命を救った。主のことばが分裂を決定し、主のことばによって流血のない分割が保証されたのである。

王国の分裂

分裂した王国の歴史はここから始まり、列王記第二まで続く。ヤロブアムは北の十部族（通常は「イスラエル」と呼ばれ、預

言書では「エフライム」と呼ばれることもある）を治めた。この王国では九つの王朝が続き、どの王も邪悪であった。

レハブアムは「ユダ」として知られる南の王国を治めた。この王国には一つの王朝しかなかった。どの王もダビデの子孫であった。キリストが、養父ヨセフを通して持つダビデの王位への法的権利はこの王国に由来する（マタイ1章の系図を参照）。キリストはまた、ダビデの実子ナタンの子孫である処女マリアを通して、肉体的にもダビデの子であった（ルカ3章の系図を参照）。これらの王のうち数人は傑出した改革者であったが、そのほとんどは邪悪であった。

イスラエルとユダの王

王朝	イスラエル	王朝	ユダ
1	ヤロブアム一世 ナダブ	1	レハブアム アビヤム（アビヤ）
2	バアシャ エラ		アサ（名君） ヨシャファテ（名君）
3	ジムリ		ヨラム
4	オムリ、ティブニ アハブ アハズヤ ヨラム		アハズヤ アタルヤ（王位篡奪者） ヨアシュ（名君） アマツヤ（名君）
5	エフー エホアハズ ヨアシュ ヤロブアム二世 ゼカリヤ		ウジヤ（アザルヤ）（名君） ヨタム（名君） アハズ ヒゼキヤ（名君） マナセ
6	シャルム		アモン
7	メナヘム ペカフヤ		ヨシヤ（名君） エホアハズ
8	ペカ		エホヤキム
9	ホセア		エホヤキン（エコンヤ） ゼデキヤ

分裂した王国の歴史は4つの段階に分けられる。最初に、ヤロブアム(Ⅰ列王記12:1)からオムリ(Ⅰ列王記16:28)までの公然とした対立の時代があった。第二は、オムリ(Ⅰ列王記16:29)からエフー(Ⅱ列王記9章)までで、二つの王国は緊張緩和の時代に入った。第三の段階は、エフーからアッシリアによるイスラエルの捕囚(紀元前722年)までの比較的独立した時代である(Ⅱ列王記9～17章)。最後はユダ王国で、紀元前586年にバビロニアに捕囚されるまで、王国として生き残った(Ⅱ列王記18～25章)。

イスラエル王国が国としてその地に戻ることはなかった。ユダは70年間捕囚となり、その後、エズラ記とネヘミヤ記に記されているように、かなりの人数の人々が集団ごとにエルサレムに帰還した。こうして南の部族は、キリスト誕生の約500年前に、異邦人が支配する土地に戻ったのであった。

旧約聖書の歴史が終わる頃、この地のユダヤ人はバベル王に服属していた。その後、バベルはギリシアに征服され、ユダヤ人はこの世界的な大国に支配された。最後に、ギリシア人たちはローマ帝国に屈服し、主イエスが現れた時、権力を握っていたのはこの帝国であった。

分裂した王国を研究していると、しばしば年代の不一致に遭遇する。このような年代に関する困難のほとんどは、イスラエルとユダで王の在位期間の計算に異なる方法が用いられたためである。もう一つの重要な要因は、しばしば二人の王が共同統治者として一定期間在位したことである。王の年代学という主題そのものは、ティーレ(Edwin R. Thiele)著の『ヘブル人の王たちの神秘的数字』(*The Mysterious Numbers of the Hebrew Kings*)で非常に詳細かつ巧みに論じられている。^{* (10)}

本書では、王が列記されている順にそれぞれの治世における重要な出来事を解説しながら、分裂した王国について考察する。年代は前述のティーレの著書から引用したものである。

B. イスラエルの王ヤロブアム(12:25～14:20)

エフラ임族のネバテの子ヤロブアムは、22年間(紀元前931/30～910/09年)イスラエルの王であった。

1. ヤロブアムの偽りの宗教の中心地(12:25～33)

12:25～30 イスラエルの最初の王は、手始めにシェケムを都とし、次にヨルダン川の対岸にベヌエルを建設した。イスラエルの民が祭りの日に礼拝のためにエルサレムに戻り、再びユダの王に忠誠を誓うのではないかと恐れたヤロブアムは、独自の宗教制度を確立した。彼はダンとベテルを新たな礼拝の中心地とし、それぞれの場所に金の子牛を据え付け、これらの偶像こそイスラエルをエジプトの地から救い出した神々であると宣言した。

12:31～33 ヤロブアムは高き所に偶像礼拝の祭殿を築いた。彼はすべての民の中から新しい祭司たちを任命したが、必ずしも神が定められたレビ族からではなかった。彼は新しい宗教暦を制定し、第七の月の仮庵の祭りに代えて、第八の月の十五日に大祭を定めた。彼はベテルに築いた祭壇でいけにえを献げることで、自ら祭司職を篡奪した。イスラエルの民の多くがこのような変更を受け入れたことは、彼らの心が主から遠く離れていたことを示している。彼らの父祖は以前、子牛を拝み、そのために罰せられた(出エジプト記32章)。ソロモ

ンも高き所を築き、そのために王国のほとんども失った(11章)。コラとその一派は祭司職を篡奪しようとし、そのために命を落とした(民数記16章)。ヤロブアムが王国の安定を図ろうとしたこれらの工夫は、結局、王国の滅亡を決定づける結果となった。神を敬う人々はユダに逃がれ(Ⅱ歴代誌11:14~16)、人間が作り出した宗教の都合と結果に同胞を委ねるしかなかった。「ヤロブアムはその優れた地位(王位)にふさわしくなかったが、イスラエルにはこのような悪い君主がふさわしかった」という格言は、この状況を見事に言い当てている。

2. ヤロブアムと神の人(13:1~32)

13:1~3 ヤロブアムがベテルの祭壇で香を献げていたとき、ユダから神の人が遣わされ、偶像礼拝の祭壇を糾弾した。彼は、ユダにヨシヤという王が現れ、偶像礼拝の祭司たちを祭壇で焼くだろうと預言した。2節の預言の成就是Ⅱ列王記23:15, 16に記されている。この預言が成就するまでには300年以上の歳月が経過している。彼は預言が確実であることを示すしるしとして、祭壇が裂けて灰が注ぎ出される、と言った。

13:4~6 ヤロブアムが預言者を指さし、取り押さえるように命じると、王の手は萎えてしまった。また、祭壇は裂けて灰がこぼれた。これはヤロブアムの宗教が破滅する前兆であった。しかし、預言者のあわれみ深い祈りに応えて、萎えた手は元通りになった。

13:7~10 王が脅しても預言者を黙らせることができないのであれば、親交を築くことによってそうするしかない。神は預言者に、ヤロブアムの悪政を少しでも容認してはならない、と厳命しておられた。そのため、彼は主のご指示に従い、ヤロブアムとの飲食を断った。また、ベテルから帰

るにも別の道を選んだ。

13:11~19 その途中、彼はベテルの年老いた預言者に呼び止められた。最初、神の人は、老預言者がベテルで起きていることに少しでも共感を示すことのないように、そのもてなしを断った。するとこの老人は、御使いが神の人をもてなすように自分に告げたといい、この嘘が功を奏して、神の人はその接待を受けることになった。

13:20~25 彼らが一緒に食事をしているとき、主はベテルの老預言者に語り、老預言者は神の人にそのメッセージを伝えた。神の人はその不従順のゆえに死に、家族とともに埋葬されることはない、と。これが過酷で厳しいように思われるなら、神が愛しておられる人々、神の代弁者である人々、大きな特権が与えられている人々を、神はより厳しく扱われることを思い出すべきである。その帰り道、神の人は獅子に殺された。自然のあらゆる法則に反して、獅子も預言者のろばも、道ばたで彼の遺体を見守っていた。

13:26~32 その知らせを聞いた老預言者は、それが不従順に対する主のさばきであることをすぐに悟った。彼は悲劇の現場に行き、遺体をベテルに運び、自分の墓に葬った。それから彼は息子たちに、自分は神の人のそばに葬られることを望む、と指示した。彼は自分もその一部として関わっていた偶像礼拝の体制が神によって滅ぼされる運命にあることを悟ったのである。

3. ヤロブアムの偽りの祭司職(13:33, 34)

ヤロブアム王はその悪に固執し、あらゆる社会階層の人々を祭司とし、自らも祭司として仕えた。こうした罪が最終的にヤロブアム王朝滅亡の原因となった。ジェンセン(Irving Jensen)は次のように述べて

いる。

ヤロブアム王は、ユダの預言者がたどった運命によって、悔い改めなければ自分自身とその運命がどうなるかを思い知ったはずだった。ヤロブアムはあの預言者と同じく、神によって高い地位に選ばれた。またあの預言者と同じく、神が自分に何を望んでおられるかを完全に理解していた。しかしあの預言者と同じく、彼は神のことに背いたのである。^{*(11)}

4. ヤロブアムの息子の死 (14:1~20)

14:1~4 ヤロブアムの息子アビヤが病氣になったとき、王は妻を預言者アヒヤのもとに遣わした。アヒヤは以前、ヤロブアムが北の十部族を治める王になるとヤロブアムに告げた神の人である。王妃が変装したのは、いくつかの理由があったように思われる。第一に、公然と神の人を訪問すれば、ダンとベテルの偶像を本当は信じていないことが明らかになってしまう！第二に、ヤロブアムは、アヒヤが偶像礼拝に反対しており、彼女の正体を知ったら好ましいことを語るはずがないと考えた。第三に、おそらく王は、預言者を欺くことによって、主をも欺くことができると考えたのであろう。

14:5~13 主は盲目の預言者のところに王妃が向かっていることを事前に警告された。王妃が到着するやいなや、預言者は王妃の変装を見破り、破滅の知らせを告げた上で彼女をヤロブアムのもとに送り返した。王の不従順と偶像礼拝のゆえに、主はイスラエルの奴隷と言わず自由人と言わず、イスラエルのすべての男子を彼から絶やし、彼の家を滅ぼすであろう、と。そして彼の家族は、病弱の息子アビヤを除いて、誰も

まともな埋葬を受けることができず、アビヤは王妃が町に入るやいなや死ぬであろう、と。

14:14~16 神はヤロブアムの家族を滅ぼす別の王（バアシャ）を起こされる。ヤロブアムがアシェラ礼拝を始めたために、やがてイスラエルの国は捕囚となる。^{*(12)} アシェラ像は豊穡を象徴する木彫りの像であつた。

14:17, 18 17節から、ティルツアがイスラエルの首都となったことが分かる。王妃がそこに戻るとすぐに、その息子は死んだ。イスラエルは預言者が預言した通り、彼を埋葬し、悼み悲しんだ。

14:19, 20 ヤロブアムは二十二年間治めた後、死に、その息子のナダブが後を継いだ。『イスラエルの王の歴代誌』とは、聖書の『歴代誌』のことではなく、公的な国史として残された王たちの公式記録のことである。場面はここでユダ王国に切り替わる。

C. ユダの王レハブアム（続き）(14:21~31)

14:21~24 レハブアムの治世の前半は、すでに12章で学んだ。この部分は彼の治世の重要な特徴を要約している。皇太后がアンモン人であることが二度も言及されている（21,31節）のは、レハブアムの統治が失敗した根本的な理由、すなわち彼の父ソロモンが外国人の妻たちを娶り、彼とその家族を偶像礼拝に導いたことに読者の注意を促すためであろう。ユダでは偶像礼拝が蔓延し、神殿男娼（性的倒錯者）が神殿で忌まわしい行為を続けていた。

14:25~28 エルサレムはエジプトの王シシャクの攻撃を受け、略奪された。神殿と王宮から財宝が盗まれた。レハブアムは、奪われた金の盾の代わりに青銅の盾を

作よう命じた。ソロモンはファラオの娘と結婚してエジプトから身を守ろうとしたにもかかわらず、彼の死後間もなく、エジプトのシシャクがソロモンの黄金の都の輝きの多くを持ち去ったのは、何という皮肉であろう！

14:29～31 この時代はユダとイスラエルの間の戦乱の時代であった。それはユダのアサとイスラエルのオムリの治世を通して57年間続いた。主はユダとイスラエルの全面戦争を未然に防がれたが(12:24)、両王国は絶えず小競り合いをしていた。レハブアムは57歳で死に、その息子アビヤムが代わって王となった。

D. ユダの王アビヤム (15:1～8)

レハブアムの子アビヤムは、ユダの王として三年間(紀元前913～911/10年、Ⅱ歴代誌13:1～14:1)在位した。

15:1 1節には、列王記で頻繁に繰り返される定型句が含まれている。この定型句は、一方の王国を統治していた王の名前を挙げ、その統治期間を記すことで、もう一方の王国の統治の始まりを示している。したがって、この節は、アビヤムがユダを統治し始めたのは、イスラエルを統治していたヤロブアムの第十八年であったことを説明している。彼はアビヤとも呼ばれている(Ⅰ歴代誌3:10、Ⅱ歴代誌12:16)。

15:2 ここでアビヤムの母はアブサロムの孫娘(※英訳)マアカと記されているが、Ⅱ歴代誌11:21ではアブサロムの娘マアカ、Ⅱ歴代誌13:2ではウリエルの娘ミカヤとなっている。彼の母は二つの名前を持っていて、ウリエルの娘でアブサロムの孫娘であった可能性がある。「息子」または「娘」は聖書の用法では単に子孫を指すことが多い。)

15:3～8 アビヤムは偶像礼拝者である

父に倣ったため、彫像を拝むことを一貫して控えたダビデには倣わなかった。4節と5節は、ダビデとの契約がなければ、神がアビヤムの家を滅ぼされたであろうことを暗示している。5節の終わりで、模範的であったはずの人生も、一瞬の激情によって台無しになる場合があることに注意しよう。レハブアムの治世に始まったイスラエルとの戦争は、アビヤムの治世まで続いた。6節では、レハブアムとヤロブアムはそれぞれユダとイスラエルを表している。アビヤムの生涯を通じて、この二つの王国の間には戦争があった。彼は説得と武力の両方でイスラエルを取り戻そうとし、その過程で50万人のイスラエル人を死なせた(Ⅱ歴代誌13:1～20)。

E. ユダの王アサ (15:9～24)

アビヤムの子アサは、ユダの王として四十一年間(紀元前911/10～870/69年、Ⅱ歴代誌14:1～16:14参照)在位した。

15:9～15 アサはユダの数少ない名君の一人であった。彼は神殿男娼を国から追放し、先祖たちが造った偶像をすべて破壊した(12節。Ⅱ歴代誌14:3～5参照)。彼は母マアカを追放し、その卑猥な像を破壊したが、この偶像に関係する高き所は破壊しなかった。そして、父と自分からの寄進で神殿を豊かにした。

15:16～22 イスラエルの王バアシャがエルサレムの数マイル(※1マイルは約1.6キロメートル)北にあるラマを要塞化し始めたとき、アサは首都が危機にさらされていることを悟った。しかし、アサは主に頼るのではなく、アラムの王ベン・ハダドに助けを求めた。この外国の君主に大金を支払って、ガリラヤ地方で北からイスラエルを攻撃するよう説得した。これによってバアシャの軍勢は北に引き寄せられ、ア

サはラマを取り壊し、北の国境沿いにゲバとミツパという城塞都市を建設することができた。アサが神殿に運び入れた銀と金は主に献げられた。しかし、バアシャが彼の王国を脅かすと、アサはすべての財宝を取り返してこの異教徒の王に与え、神を欺き、アラムを富ませた。クリスチャンは、神に属するもの（すなわち、自分の時間、お金、能力など）を他人に与えてしまわないよう注意する必要がある。

15:23, 24 彼が足の病気に見舞われたという事実は、アサがアラムの王に頼って自分を救おうとしたことについて、神が不快に思われたことを示すために言及されているのかもしれない。アサの最後の3,4年間は、アサの息子ヨシャファテが、アサと共に治めたものと思われる。

F. イスラエルの王ナダブ (15:25~27)

エフライム族のヤロブアムの息子ナダブは、二年間（紀元前910/09~909/08年）イスラエルの王であった。ナダブは父に倣って偶像礼拝を行った。彼の臣下の一人、バアシャは彼に謀反を企て、彼を殺した。同時にバアシャは、ヤロブアムの家の残りの者を皆殺しにし、アヒヤの預言がここに成就した（14:10, 14）。

G. イスラエルの王バアシャ (15:28~16:7)

イッサカル族のアヒヤの子バアシャは、24年間（紀元前909/08~886/85年）イスラエルの王であった。

15:28~34 バアシャの治世は、イスラエル王国の第二王朝の始まりを示すものである。バアシャの治世を通じて、ユダとイスラエルの対立は続いた。彼はティルツアを首都として、ヤロブアムが始めた偶像礼拝を継続した。

16:1~7 エフーという名の預言者はバアシャに、「あなたがヤロブアムの偶像礼拝に従ったので、あなたの子孫も同じような運命をたどり、通常の埋葬を許されず、犬や鳥に食われるであろう」と告げた。バアシャが破滅したもう一つの理由は、彼がヤロブアムの家を死に追いやったから、と7節の終わりに記されている。バアシャは、そもそも神が意図された人物ではなかったか、あるいは、神のみこころに反して、彼が残酷で復讐心に燃えたやり方でそれを行ったかのどちらかである。

H. イスラエルの王エラ (16:8~14)

イッサカル族のバアシャの息子エラは、イスラエルの王として二年間（紀元前886/85~885/84年）在位した。

エラは邪悪な王で、偶像礼拝と酒に溺れていた。彼は二年間統治した後、戦軍隊の半分を率いるジムリに暗殺された。また、バアシャ一族の残りの者も全員殺害され、エフーの預言（16:3）が成就した。エラの死により、イスラエルの第二王朝は終わりを告げた。

I. イスラエルの王ジムリ (16:15~20)

ジムリは七日間イスラエルの王であった（紀元前885/84年）。ジムリの邪悪な統治は歴代の王の中で最も短く、わずか七日間しか続かなかった。彼が王位を篡奪したとき、イスラエル軍はペリシテ人からギベトンの町を占領しようとしていた。軍は司令官オムリを王と宣言した。彼は直ちに首都ティルツアに進軍し、王権を掌握した。ジムリは王宮の高殿に退却し、火を放ち、炎の中で死んだ。

J. イスラエルの王ティブニ (16:21, 22)

ギナテの子ティブニは四年間イスラエル

の王であった（紀元前885/84～881/80年）。イスラエルは軍の司令官オムリをイスラエルの王としたが（16節）、ティブニというライバルがおり、4,5年にわたる内戦が続いた（15節と23節を比較）。北王国の半分はティブニが死ぬまで彼に従った。

K. イスラエルの王オムリ（16:23～28）

オムリは、十二年間、イスラエルの王であった（紀元前885/84～874/73年）。

オムリの治世は北王国の第四王朝の始まりであった。ティブニは紀元前880年に敗れ、オムリが名実ともに王となった。最初の六年間、彼はティルツァで統治した。その後、彼はサマリアの山を銀二タラントで購入し、そこに首都を移した。彼の治世の邪悪な性格は、25節と26節で強調されている。

オムリの年譜はやや複雑である。彼は、ジムリの死後（15節）、アサの第二十七年に（民の半数だけの支持を受けて）王と宣言された。四年間の内戦を経て、彼はアサの治世の第三十一年（23節）に名実ともに北王国の王となった。彼はアサの第三十八年に死んだ（29節）。このように、彼は、約四年間は内紛に明け暮れ、約八年間は比較的平和であった。

オムリは進歩的な王で、イスラエルに一定の平和と繁栄をもたらした。聖書以外の資料には、オムリがモアブを征服したと記されている。アッシリア人にとってオムリは非常に目立った存在であったため、彼らはイスラエルを「オムリの家」または「オムリの地」と呼ぶほどだった。考古学者はサマリアでオムリの宮殿と思われるものを発見している。

L. イスラエルの王アハブと預言者エリヤ（16:29～22:40）

オムリの子アハブは、イスラエルの王として二十二年間（紀元前874/73～853年）在位した。

1. アハブの罪（16:29～34）

アハブは極めて邪悪な王であったが、それは彼がヤロブアムに倣って偶像礼拝を行っただけでなく、シドン人の王の娘イゼベルと結婚したからである。この悪女はバアル崇拝者であり、アハブに影響を与え、神殿、祭壇、木像を建ててイスラエルにバアル崇拝を広めることに成功した。ベテルのヒエルが神の呪いを無視してエリコを再建しようとした不遜さが、当時の不敬虔さを物語っている（ヨシュア6:26）。彼が土台を築いたとき、長男アビラムが死んだ。門が建てられたとき、末の息子セグブも死んだ。

2. エリヤと干ばつ（17:1～7）

17:1 17章では、預言者エリヤが紹介されている。彼の働きはⅡ列王記2:11まで続く。神は、罪と衰退の時代に、預言者たちを通してご自分の民に語られた。これらの預言者たちは、まさにヤハウエの代弁者であった。彼らは、偶像礼拝、不道德、その他あらゆる不義に対して恐れずに声を上げた。彼らは民に悔い改めて主のもとに立ち帰るように促し、そうしない場合には悲惨な結末が待っていると警告した。預言者のある者は、主にイスラエルに仕え、ある者はユダに仕え、またある者は両者に仕えた。イスラエルは二つの王国の邪悪な方であったため、神はイスラエルへの預言者のメッセージに奇跡と不思議を伴わせた。これによってイスラエルは言い逃れができなくなった。

エリヤはバプテスマのヨハネの働きに関連して福音書にも言及されている。ヨハネはエリヤの霊と力を持って現れた（ルカ1:17）。

エリヤはヨルダン川の東、ギルアデのティシュベの出身で、そのためティシュベ人と呼ばれた。彼の歴史は列王記にのみ記されている。彼の生い立ち、家族、預言者の働きへの召命については何も語られていない。しかし、彼が神から遣わされた人物であったことは誰も否定できない。彼は、姦淫と傲慢のイスラエルを屈服させるために、神に選ばれた器であった。彼の祈りは祝福（雨）を降らせることも、怒り（干ばつと火）を降らせることもできた。彼は恐れを知らない、体現された良心としてその世代に仕えた。記録に残る彼の最初の行動は、アハブにこの地が干ばつに見舞われると告げたことである。これは明らかに偶像礼拝に対する神のさばきであった。神は民の注意を引くために深刻な干ばつを選ばれた。民は、偶像礼拝がこの地に霊的な干ばつをもたらしたことを気にも留めなかったが、それを象徴する現実の干ばつを無視することはできなかった。

17:2～7 主に従い、エリヤはサマリアからヨルダン川の東にあるケリテ川に行った。そこで彼は、小川の水と、朝に夕に、鳥が奇跡的に運んで来る食物によって命を支えられた。しかし、しばらくすると、干ばつのために小川は干上がってしまった。

3. エリヤとツアレファテのやもめ (17:8～24)

17:8～16 主のことばに従って、エリヤは地中海沿岸のツロとシドンの中間にあるツアレファテに旅立った。神はそこで異邦人のやもめが彼を養うように手配しておられた。彼女には息子と自分の分の食事し

かなかったもので、最初はためらった。しかし、預言者は彼女に、まず彼のために一口のパンを作るように命じた。そうすることで、彼女は事実上、神を第一にしたのである。彼女は従うなら、神を第一とする人は生活に必要なものに欠くことはない、という貴重な教訓を学んだ。彼女のかめの小麦粉と壺の油が底をつくことは決してなかった。イエスは、エリヤが遣わされたのはイスラエルの多くのやもめたちのところではなく、異邦人のやもめのところであったという事実に着目された（ルカ4:26）。

干ばつの間、ヤハウェはご自分の預言者がどこまでも心を低くしなければならぬ方法で養われた。最初は不浄とされる鳥を通して、次に異邦人の女性、しかも貧しいやもめを通して、である。王は王宮で困窮のさなかにあったが、エリヤには必要なもののすべてがあった。神の声に従う神の人は、周囲の状況がどうであろうとも、常にその必要が満たされる。

17:17～24 その後、その女の息子は重い病気にかかり、死んだ。とっさに母親は、自分が犯した罪のせいでエリヤが息子の死を命じたのではないかと疑った。預言者はその子を寝室に連れて行き、その子の上に三度身を伏せて、主に叫んで祈った。すると少年は息を吹き返し、正常な健康状態で階下の母親のもとに連れて行かれた。これによって女性は、エリヤが神の人であり、主のことばが真実であることを確信した。彼女は異邦人でありながら、イスラエルの神への信仰を示したのである。

4. バアルの祭司たちに対するエリヤの挑戦 (18:1～19)

18:1～6 エリヤがイスラエルを去ってから三年後、そして干ばつが始まってから三年半後（ルカ4:25）に、預言者エリヤは

アハブに会いに行くように指示された。それは人間的に言えば、非常に危険な行為であった。あまりに飢饉がひどかったので、アハブと宮廷長官オバデヤ（オバデヤ書を書いた預言者ではない）は、家畜に与える草を求めて土地を探し回った。（イゼベルが主の預言者たちの何人かを殺し、他の預言者たちも絶滅させようとしていたとき、主の百人の預言者を救ったのはこのオバデヤである。）

18:7～15 そのオバデヤが草を探しているとき、エリヤが彼に会い、エリヤの居場所をアハブに知らせるように命じた。オバデヤは、これが自分の死を招くことを恐れた。アハブがエリヤを永久に黙らせようと、執拗にエリヤを捜していたからである。オバデヤがエリヤの所在を明かせば、王は必ず反応するだろう。しかし、その頃には主の霊がエリヤを連れ去っているかもしれない。そうなれば、アハブは「偽りの報告」の罪でオバデヤを殺すだろう。それに加えて、オバデヤは主の預言者たちを保護してきたため、王宮での地位はすでに危うくなっていた。エリヤはその場を離れないと約束し、会見が設定された。

18:16～19 アハブ王はエリヤに会いに行き、彼をイスラエルにわざわざをもたらす者だと非難した。この神の人がイスラエルにとって最大の味方の一であることに気づいていなかったのである。エリヤは自分の命の危険を顧みず、大胆不敵に、非難のことばをアハブに向けた。エリヤは、ヤハウエへの礼拝とバアル礼拝を混同している王の責任を問い、偶像礼拝を行っている預言者をカルメル山に集めて、誰が真の神であるかを見極めるように挑んだ。（バアルの預言者四百五十人はカルメル山へ行ったが、四百人のアシェラの預言者は行かなかった。19, 22節参照）

5. バアルの祭司たちに対するエリヤの勝利 (18:20～40)

18:20～25 エリヤは、集まったイスラエルの代表者たちに語りかけ、彼らがどっちつかずによろめいている、と非難した。彼らは主かバアルのどちらかを選ぶべきなのである。そして勝負が始まった。二頭の雄牛が殺され、薪の上に載せられることになった。エリヤは主を代表し、預言者たち四百五十人はバアルを代表する。火をもって答えた神が、まことの神として認められるのである。

18:26～29 バアルの預言者たちは朝から真昼まで彼らの神に叫び、祭壇の周りを飛び跳ねた。エリヤはバアルが答えなかったことについて、「参考になる」言い訳を考えて彼らを嘲った。「おそらくバアルは小さくて、か弱い神なので、二つのことが同時にできないのだろう」と。自暴自棄になった彼らは、（習慣に従い）剣や槍で自分たちの身を傷つけ、夕方のいけにえの時間までわめき続けた。しかし、何の声もなく、答える者もなく、注目する者もいなかった。

18:30～35 するとエリヤは、主の名によってイスラエルの十二部族を表す十二の石の祭壇を築いた。そして、奇跡以外の方法で祭壇に火がつく可能性をなくすために、牛と薪に十二樽の水を注いだ（四つの水がめを三回空にした）。

干ばつの最中に、エリヤがどうやってそんなに多くの水を手に入れたのかと不思議に思う人もいる。しかし、これは実際には難しいことではない。干ばつの時期に十二樽の水は不可能な量ではない。干ばつは農地に影響を及ぼしていたが、飲料水は入手できたに違いない。そうでなければ皆死んでいただろう。もう一つの説明は、この水は数マイル離れた地中海から来た可能性が

あるというものである。ウィリアムズ (George Williams) はこのように言っている。

キシヨン川 (40節)、海 (43節)、そして今も存在する井戸は、溝を埋めるために必要な水を、複数回、または一回で供給することができる (35節)。*⁽¹³⁾

18:36~40 タベのいけにえのとき、エリヤは、神が天から火を送ってご自身を現してくださるように祈った。するとすぐに主の火が天から降り、いけにえだけでなく、薪と石と土を焼き尽くし、祭壇の周りの溝の水もなめ尽くした。こうして人々は主を真の神と認めざるを得なくなった。そして彼らはエリヤの命令に従い、バアルの邪悪な預言者たちを殺した。人々がヤハウエこそ神であることを認め、バアルの預言者たちを処刑するとようやく雨が降り始めた。罪の告白と、神のことはへの従順は、祝福に至る道である。

6. エリヤの雨乞いの祈り (18:41~46)

預言者エリヤは、アハブに食事をとるように勧めた。カルメル山を離れて、迫り来る雨から逃れる必要があったからである。アハブが座って食事をしている間、エリヤは祈るために立ち上がった。彼はカルメル山の頂上に登り、地面にひれ伏し、自分の顔を膝の間にうずめて、主が雨を降らせてみことばを実現してくださるよう熱心に求めた。彼は、しもべが地平線上に小さな雲があることを報告するまで祈り続けた。エリヤにはそれで十分だった。彼は直ちにアハブに、王族が時々住まいとしたイッサカルの町、イズレエルへ急ぐようにと言い送った (21:1)。忠実な臣下、また忠実なしもべとして、預言者エリヤは、アハブの車の前を20マイル (32キロメートル)、土砂

降りの雨の中を走って、イズレエルまで先導した。

7. エリヤのホレブへの逃走 (19:1~18)

19:1~4 アハブがイゼベルに、カルメル山でバアルの預言者たちが敗北し、死んだことを告げると、彼女は一日以内にエリヤを殺すと誓った。すると、前日、その信仰によって大勝利を収めたはずの預言者は勇気を失った。彼は命からがらイズレエルから南へ走り、ユダの南境にある約100マイル (160キロメートル) 離れたベエル・シェバまで逃げた。エリヤはしもべをそこに残して南の荒野に、一日の道のりを入れて行った。やっとのことでエニシダの木の陰で休んだものの、エリヤは意気消沈し、敗北感に打ちのめされ、落ち込んだ。

19:5~8 この重度の抑うつ状態に対する神の治療法は興味深い。休息、食事と飲み物、さらに多くの休息と食事と飲み物、である。こうして力を得た預言者は、その食物の力で四十日四十夜かけて200マイル (320キロメートル) を踏破し、神がモーセに律法を授けたホレブ山 (シナイ山) にたどり着いた。

19:9~14 ある洞穴の中で、主は彼に対応された。エリヤは、独善的な心で、自分の忠実さを訴え、イスラエルの子らを非難した。彼は結局、自分だけが主に忠実を貫いた、と言っているのである。すると神は彼に、律法の山に立つように命じられたが、エリヤは従わなかった。それが分かるのは、この後 (13節)、彼は外に出て洞穴の入り口に立っているからである。山々は立て続けに大風と地震と火に見舞われた。これらの激しい嵐は、エリヤにその激しい批判精神を思い出させたに違いない。しかし、そのどれも彼を洞穴から連れ出すことはできなかった。最後に、火の後、預言者

はかすかな細い声を聞いた。彼を洞穴の入り口に導いたのは、この主の恵み深い声だった。そこでも彼は、神に唯一残された証人として自らを誇示している。ウィリアムズ (George Williams) は次のように述べている。

もし彼の心が自己に捕らわれていなければ、嵐も地震も火もできないことを、優しい愛の声は成し遂げられることを学んだことだろう。彼は自分の心と民の心には何の違いもないこと、そして、強制されても彼が洞窟から出なかったように、人々を強制的に罪から離れさせることはできないことを認めるべきだった。^{*(14)}

19:15~18 このようなうぬぼれた態度をとったとき、神のしもべとしてのエリヤの有用性は損なわれたように思われる。神はエリヤに北のダマスコの荒野に戻り、そこで三つの油注ぎを行うように命じられた。

- (1) ハザエルに油を注いで、アラムの王とする。不従順なイスラエル国民はこの王によって罰せられる。
- (2) エフーに油を注ぎ、イスラエルの王とする。エフーはアハブの家に神のさばきを下す。
- (3) 自分の後継者としてエリシャに油を注ぐ。^{*(15)}

これによってエリヤは、自分が必要不可欠な存在ではないと教えられることになる。この三人はイスラエルの偶像礼拝者に対して神のさばきを執行するが (17節)、主はバアルに膝をかがめず、バアルに口づけしなかった七千人を残される。

8. エリヤのエリシャ任命 (19:19~21)

19:19 エリヤは北に向かい、ヨルダン

溪谷のベテ・シェアンに近いアベル・メホラまで行った。そこで彼は、畑を耕している農夫エリシャを見つけた。エリシャが十二くびきの牛を持っていたことは、彼が貧しくなかったことを示している。彼はおそらくくびきで耕し、残りの十一くびきは彼のしもべたちが耕したのだろう。エリヤは自分の外套をエリシャに掛けたが、これはエリシャが後継者であることのしるしであった。

19:20, 21 エリシャは、家に帰って家族に別れを告げるための宴を開く許可を求めた。エリヤは同意したが、たった今自分に起こったこと、すなわちエリヤが彼に油を注いだことを忘れないように、と釘を刺した。贅を尽くした宴の後、エリシャは立ち上がってエリヤについて行き、専属のしもべとなった。

両親に別れを告げたいというエリシャの願いは、イエスが王国にふさわしくないと宣言された弟子志願者の願いと酷似している (ルカ9:61,62)。違うのは、エリシャの場合は即座に縁を切る真剣な決断だったのに対し、もう一方の場合は、時間稼ぎの手段であり、言い訳だったという点である。

9. アラムに対するアハブの最初の勝利 (20:1~22)

20:1~6 アラムの王ベン・ハダドは、以前は15:18, 20に出てくるベン・ハダドの息子であると考えられていた。しかし、その後の研究で、同一人物である可能性が浮上した。ベン・ハダドは三十二人のアラムの王と同盟を組み、馬と戦車でサマリアに進軍した。町が包囲されたとき、彼はアハブに降伏条件を突きつけた。「おまえの銀、金、最も美しい妻たちや子どもたちを差し出せ。」アハブはおとなしく、そして弱々しく同意した。ベン・ハダドは、アハブが

最初の条件に従ったことでは満足せず、さらに、家来たちが立ち入る権利と、欲しいものを何でも押収する権利を要求した。

20:7~12 イスラエルの長老たちはこの二度目の要求に憤慨し、従わないよう強く求めた。イスラエルが拒否したことを知らされたベン・ハダドは激怒し、兵士一人ひとりに対し一握りの塵も残らないほどにサマリアを剥ぎ取ってやる、と豪語した。これに対してアハブは、これから**武装しようとする者が、すでに勝利を得たかのように誇ってはならない**、と答えた。この嘲りにより、酒宴に興じていたアラム人とその同盟者たちは奮い立った。

20:13~15 このとき、主の預言者がアハブに近づいて、勝利を約束した。神は、諸州の首長の家来二百三十二人からなる小部隊と、それに続くイスラエルの民七千人を用いて、北から集結した軍隊を打ち破った。「**すべてのイスラエル人**」(15節)という表現は、サマリアの兵士全員を意味している。戦いの開始には少数の若い者たちが選ばれたが、これは勝利が肉の腕によるものではなく、主によるものであることを、より明白にするためであった。

20:16~22 アハブはベン・ハダドとその同盟者が酒に酔っていた真昼ごろに攻撃した。ベン・ハダドはイスラエルの二百三十二人が前進していると聞いて、彼らを生け捕りにしよう命じた。もちろん、これはイスラエル人に軍事的優位をもたらし、アラム人が大虐殺される結果となった。生き残った者たちは自国に退却した。主の預言者はアハブに、アラム軍は春になると戻って来るだろう、と警告した。

10. アラムに対するアハブの第二の勝利 (20:23~34)

20:23~25 ベン・ハダドの家来たち

は、自分たちの恥ずべき敗北の原因を二つの点に絞った。

- (1) イスラエル人は山地での戦いに勝利した。彼らの神が**山の神**であったことは間違いない。しかし**平地**では無力であろう。だから次回、アラム人は平地で彼らと戦うべきである。
- (2) アハブと戦った三十二人の王たちは、戦いに不慣れのものであることが分かった。ベン・ハダドの家来たちは、彼らを専門の総督に交代させるよう進言した。

20:26~30前半 春になると、ベン・ハダドは再びイスラエルに向かって進軍した。イスラエルの軍隊は、アラムの軍勢に比べれば、二つの小さなやぎの群れのように見えた。一人の神の人がアハブに、主はベン・ハダドに、主が山地だけでなく平地の神でもあることを示される、と告げた。この戦いで、イスラエルは十万の歩兵を殺した。逃げ延びたアラム人はアフエクの城壁に陣を敷こうとしたが、**城壁が崩れ**、二万七千人が死んだ。

20:30後半~34 ベン・ハダドはアフエクの奥の間に隠れた。家来たちは、自分たちが降伏と喪のしるしを身に着けてアハブのもとに行き、慈悲を乞うので、そうさせてほしい、と彼を説得した。会談の中でアハブは愚かにも王を「**兄弟**」と呼んだ。アラムの人々はすぐにそのことばを捉え、「そうです、あなたの兄弟ベン・ハダドです」と言った。アハブはアラムの王を連れて来るように命じた。ベン・ハダドは、アハブの先代から**奪い取った町々**を返し(15:20)、イスラエルがダマスコに**市場**を設けることを許可すると約束した(34節)。アハブはこの条件で契約を結び、本来であれば殺すべきだったベン・ハダドを逃がしたのだった。

11. アハブの不従順 (20:35～43)

20:35, 36 アハブは、イスラエルと、増大するアッシリアの脅威の緩衝地帯として、強いアラムを望んでいた。その後の出来事は、アハブの行動の愚かさを示すために、預言者が演じた実物教訓である。

預言者の仲間の一人が、主のことばにしたがって、仲間に自分を打つように命じた。その人は彼に従わなかった。それは主に従わないことでもあった。彼は主の御声に聞き従わなかったので、獅子に殺された。

神が「打て」と言われたのに、自分の友、神の友を容赦した善良な預言者がこのように罰せられたとすれば、神が「打て」と言われたのに、自分の敵、神の敵を容赦した邪悪な王は、もっと重い罰に値する应考虑すべきである。*⁽¹⁶⁾

20:37～43 預言者は別の人を見つけ、その人は言われたとおりに彼を打って傷を負わせた。それから預言者は目の上に包帯をして変装し、アハブ王を待った。王が通りかかったとき、預言者は戦いに参加したこと、敵の捕虜の監視を任されたことを話した。彼は、もし捕虜が逃げたら、自分の命、または銀一タラントという法外な金額で償わなければならないと警告されていた。変装した預言者は、他のことに気を取られて捕虜が逃げてしまった経緯を話した。王は寛大さを示すどころか、既定の刑罰を執行するように強く求めた。その瞬間、王は預言者の罠にはまってしまった。彼は目から包帯を外し、アハブが知っている預言者であることを明かした。アハブは敵である捕虜ベン・ハダドを捕らえていた。主に従うためには、アラムの王が殺されなければならなかった。不従順のゆえにアハブはやがて殺されることになる。モルガン(Camp-

bell Morgan) は次のように説明している。

この譬え話の意味はこうである。アハブは神から命じられた、たった一つのことをすればよかっただけなのに、百のことをする一方で、その一つをおろそかにした。失敗が絶えない理由と方法が、何とはっきり述べられていることだろう！私たちは神から一つの責任、ある中心的で明確な任務が与えられている。私たちは善意からそれをやり始める。すると、それ自体は間違っていない他のことが邪魔をする。私たちは、「あそこでも、ここでも」忙しくなり、中心となる一つのことをおろそかにしてしまうのである。*⁽¹⁷⁾

アハブは、先代のダビデ王のように、自らのことばで自分を罪に定めた。しかし、悔い改めたダビデとは違い、アハブは不機嫌になり、激しく怒って宮殿に戻って行った。主にあわれみを求めるところか、列王記第一の残りの章にあるように、相変わらず主の怒りをかき立てるばかりであった。

12. アハブのナボテに対する罪 (21章)

21:1～4 第21章は、アハブの死に至るまでの出来事をたどっている。場面はイズレエルで、そこにはアハブとイゼベルの宮殿があった。宮殿の隣には、イズレエル人ナボテが所有するぶどう畑があった。アハブはそのぶどう畑を併合し、菜園を作りたいことを望んだが、ナボテは土地を売ったり、交換したりすることを拒否した。イスラエルの律法は、土地は初めに割り当てられた一族に帰属する、と定めていたからである(レビ記25:23～28、民数記36:7、エゼキエル46:18)。

21:5～16 イゼベルは、夫が苛立ち、

不機嫌になっているのを見て、ナボテが売却を拒んでいるのを知ると、ぶどう畑はまもなくアハブのものになる、と約束した。彼女は**断食**と審問を命じた。二人の悪人が任命され、神と王に対する冒瀆の罪でナボテを告発した。その結果、ナボテは町の外に連れ出され、石打ちの刑に処せられた。

陰險な**イゼベル**はこうしてナボテを罠にはめ、ヤハウエの律法を破った罪で処刑されたように見せかけた。ナボテの死後、土地は息子たちに受け継がれることになるため、イゼベルは彼らも殺害させた（Ⅱ列王記9:26）。この卑劣な王妃は、邪悪であると同時に、やることが徹底していた。

21:17~26 アハブがぶどう畑を手に入れようと出向いたとき、**エリヤ**は彼に会い、殺人と盗みの罪で彼を咎めた。エリヤは、アハブ自身が殺され、彼の男子の子孫も殺され、彼の王朝が終わること、イゼベルの死体がイズレエルで犬に食われること、アハブの子孫がまともな埋葬をされないことを予告した（24節）。アハブの罰が厳しかったのは、彼が偶像礼拝の限りを尽くしたため、と説明されている。「アハブのように、自らを裏切って主の目に悪であることを行っただけ者は、だれもいなかった。」

21:27~29 アハブは自分の運命を聞いて、主の前に身を低くした。このため、主は、アハブの妻と家族に対するさばきはアハブの死後まで行わない、と定められた。

これらの節から何かを学ぶとすれば、神は恵みとあわれみの神であるということである。「わたしは決して悪しき者の死を喜ばない。悪しき者がその道から立ち返り、生きることを喜ぶ。立ち返れ。悪の道から立ち返れ。イスラエルの家よ、なぜ、あなたがたは死のうとするのか」（エゼキエル33:11）。アハブの表面的な悔い改めによってでさえ、猶予がもたらされた。しかし、

次の章は彼の心が変わっていなかったことを証明している。恵みに対して高慢で応じたため、主はアハブを死の御使いに引き渡し、エフーはエリヤの預言にしたがって、彼の家の残りの者たちに対する血なまぐさい命令を実行するように任命された（Ⅱ列王記9、10章）。

13. アハブの最後の戦い（22:1~40）

22:1~6 アラムとイスラエルの間に三年間の平和が訪れた後、アハブはヨルダン川の東にある**ラモテ・ギルアデ**をアラムから奪い返すことを思いついた。ベン・ハダドはアハブから恩赦を受けたとき、イスラエルの町々を返還すると約束していたが（20:34）、どうやらそれを果たしていなかったようである。**ユダの王ヨシャファテ**は、たまたまそのときアハブを訪問しており、この軍事作戦に協力する意向を示した。しかしヨシャファテはまず、預言者を通して主に何うことを提案した。アハブの宮廷にいた**四百人の預言者**たちはこの計画に賛成し、勝利を約束した。彼らはおそらく、エリヤとの対決のためにカルメル山に行かなかった四百人の預言者たちであろう（18:19, 22）。

22:7~12 ヨシャファテは、不安を感じたのか、相談できる主の預言者がいるかどうか尋ねた。そこで、妥協のないメッセージをしてアハブに嫌われていた大胆不敵な預言者**ミカヤ**に白羽の矢が立った。ミカヤが召喚されたとき、四百人の預言者は一致して、イスラエルとユダの王にアラムへの進軍を勧めていた。そのうちの一人、**ゼデキヤ**は鉄の角を作り、アハブとヨシャファテのアラムに対する圧倒的な力を誇示した。

22:13~17 ミカヤは、彼のメッセージを他の預言者のメッセージと一致させる

ように、と伝えられたが、その忠告は彼には無駄だった。アハブがラモテ・ギルアデに対する作戦を実行すべきかどうか尋ねたとき、ミカヤは最初、他の預言者たちと同じことを言った。「あなたは攻め上って勝利を得なさい。主は王の手にこれを渡されます。」しかし、彼はおそらく嘲笑を込めてそれを言ったのであろう。その口調からは皮肉と嫌味が漏れ出ていたに違いない。

それを察知したアハブは、ミカヤに真実を告げるよう誓わせた（レビ記5:1）。すると預言者ミカヤは、羊飼いがいないためにイスラエルが散らされる幻を語り、アハブは殺され、彼の軍隊は散らされることを暗に告げた。

22:18~23 アハブ王はヨシャファテに対し、これをミカヤが自分に対して悪いことしか言わない証拠とした。すると、勇敢な預言者は再び口を開いた。彼は、主の御前に現れた偽りを言う霊が、アハブを騙してラモテ・ギルアデに攻め入らせ、アハブが殺されるように仕向ける、という幻を語ったのである。偽りを言う霊は、この助言を王のすべての預言者の口に吹き込む。これは、神が悪の創出者ではないにしても、その究極のご目的を達成するために悪をお用いになるという一例である。神が偽りの霊を遣わされたというのは、神がそれを許されたという意味でしかない。

22:24, 25 この譬え話の要点はゼデキヤにも理解できなかったわけではない。自分と他の預言者たちが嘘をついていると非難されていることに気づいたゼデキヤは、ミカヤの頬を殴りつけてこう尋ねた。「どのようにして、主の霊が私を離れ、おまえに語ったというのか。」つまり、ゼデキヤはこう言っていたのである。

私はアハブ王にラモテ・ギルアデに進

軍するように、神の霊によって助言した。ところがおまえは、御霊によって語ったと公言しながら、全く正反対のことを勧めている。御霊はどのようにして私から離れておまえのところに行かれたというのか。

ミカヤは冷静に答えた。ゼデキヤが恐怖に駆られて秘密の場所に身を隠すとき、すなわち、アハブが死んでゼデキヤが偽預言者の運命をたどるとき、ゼデキヤは真実を知ることになる、と。

22:26~30 激怒したイスラエルの王は、ミカヤを獄屋に入れ、彼（アハブ）がラモテ・ギルアデから無事に帰るまで、パンと水を与えておくように命じた。ミカヤの別れの挨拶はこうだった。「もしも、あなたが無事に戻って来ることがあるなら、主は私によって語られなかったということです。」アハブは戦いに出る前に変装することに決め、ミカヤが予言した災難を避けようとした。一方、ヨシャファテは王の衣装を着て、アハブが逃れようとしていたまさにその危険に身をさらすことになった。アハブはこうして主とアラムの王を欺こうとしたが、「神は侮られるような方ではありません。人は種を蒔けば、刈り取りもすることになります」（ガラテヤ6:7）。アハブは殺されたが、ヨシャファテは助かったのであった。

22:31~36 アラム人はイスラエルの王を殺すよう命令を受けていた。これが彼らの第一の軍事目標であった。最初、彼らはヨシャファテをアハブと間違えた。ユダの王は恐怖で叫び声を上げ、自分の正体を明かしたのだろう。その後、アハブは無造作に放たれた矢に鎧の継ぎ目の間を撃ち抜かれ、戦闘から離脱した。彼は、自軍が戦意を失わないように、戦車の中で体を支え

でもらった。日没に彼が死ぬと、その事実が知れ渡り、兵士たちはそれぞれの家に引き揚げた。

22:37~40 アハブの遺体はサマリアに運ばれ、埋葬された。血まみれの戦車はサマリアの池のほとりで洗われたが、遊女たちはそこで身を洗っていた。これはエリヤの預言の部分的な成就にすぎず (21:19)、イズレエルではなくサマリアで起こった。アハブがへりくだったので (21:29)、神はあわれんで、その完全な成就を王の息子ヨラムに先送りされた (Ⅱ列王記9:25, 26)。

アハブは自分の死について三回、預言的な警告を受けた。一つは、アハブがベン・ハダドの命を助けたときに、無名の預言者によって告げられたもの (20:42)。もう一つは、アハブがナボテのぶどう畑を奪ったとき、エリヤによって告げられたもの (21:19)。そして三つ目は、波乱に満ちた戦いの前夜にミカヤによって告げられたものである (17~23節)。

M. ユダの王ヨシャファテ (22:41~50)

アサの子ヨシャファテは、ユダの王として二十五年間 (紀元前873/72~848年) 在位した。

最初の3, 4年間、ヨシャファテは父アサと共同統治した。ヨシャファテについては2~4節ですでに紹介したが、彼はイスラエルの邪悪な王と恥ずべき同盟を結び、その結果、危うく命を失いかけた。しかし、全般的には彼の統治は良いものであった。以下はヨシャファテの統治の重要な特徴である。

1. 彼は父の模範に倣って偶像礼拝と戦ったが、完全には根絶できなかった (43節)。
2. 彼は父アサと共同で統治した。
3. 彼はイスラエルの王アハブと和平を結んだ (44節)。
4. 彼は神殿男娼を国から追放した (46節)。
5. 彼の王国にはエドムの地も含まれていた (Ⅱサムエル8:14)。そこには守護を置いた (47節)。後に彼の息子ヨラムは内乱によりエドムを失った (Ⅱ列王記8:20)。
6. 彼はアハブの息子アハズヤと手を組み、エツヨン・ゲベルで造船事業を行った (Ⅱ歴代誌20:35, 36)。彼らの計画は、金を得るためにオフィルに船を送ることだった。しかし船は港を出る前に難破した (48節)。暴風によるものだったに違いない。預言者エリエゼルはヨシャファテに、これはアハズヤとの罪深い同盟を主がお認めにならなかったからだと告げた (Ⅱ歴代誌20:37)。アハズヤがこの計画の再開を提案したとき、ヨシャファテは断った (49節)。

N. イスラエルの王アハズヤ (22:51~53)

アハブの子アハズヤはイスラエルの王として二年間 (紀元前853~852年、Ⅱ列王記1:1~18参照) 在位した。

アハズヤの治世は、甚だしい偶像礼拝と邪悪の時代であった。彼の母イゼベルは、彼の父をそそのかしたように、彼をも不敬虔の道へ駆り立てたに違いない。彼はバアルを崇拝し、イスラエルの神、主を怒らせた。この父にしてこの子あり、である。列王記第一と列王記第二はもともと一つの書物であり、便宜上区切られただけなので、列王記第一は正式な終わり方をしていない。列王記第二はこの箇所から物語が続く。

後 注

1. (序論) O. J. Gibson, 未発表の注釈。
2. (4:1～6) Matthew Poole, *Matthew Poole's Commentary on the Holy Bible*, p. 657.
3. (6:11～22) C. H. Spurgeon, *Spurgeon's Devotional Bible*, p. 305.
4. (8:12, 13) Matthew Henry, “1 Kings,” in *Matthew Henry's Commentary on the Whole Bible*, II:614.
5. (8:66) John Haley, *Alleged Discrepancies of the Bible*, p. 223.
6. (9:15～23) *Baker's Bible Atlas*, p. 309.
7. (10:16～22) KJVで「孔雀」と訳されている語は、現在では一般にサル (NKJV) またはヒヒ (NIV) と訳されている。古代の王たちは確かに孔雀を好んでいたため、その翻訳 (おそらく推測) はラテン語ウルガタ訳でヒエロニムスによってなされた。
8. (10:26～29) Kevah (Kueとも音訳) は、KJVでは「亜麻糸」と訳されているが、これは17世紀にはそれが地名であることを知らなかったためである。
9. (10:26～29) J. R. Lumby, *The Cambridge Bible for Schools and Colleges*, The First Book of the Kings, p. 114.
10. (補説) 詳細は参考文献を参照。
11. (13:33, 34) Irving L. Jensen, *I Kings with Chronicles*, pp. 80～81
12. (14:14～16) KJVでgrovesと訳されている語は、正確にはAsherimと音訳されたヘブル語である。
13. (18:30～35) George Williams, *The Student's Commentary on the Holy Scriptures*, p. 195
14. (19:9～14) 前書p. 196.
15. (19:15～18) エリヤは後継者エリシャに、

ハザエルとエフーに油を注ぐという主の命令を果たすよう指示したに違いない。なぜなら、これらの油注ぎはエリヤの昇天後に行われたからである (Ⅱ列王記8:7～9、9:1～3)。エリシャは三人の中で唯一、エリヤが自ら油を注いだ人物である。

16. (20:35, 36) Henry, “1 Kings,” II: 692～93

17. (20:37～43) G. Campbell Morgan, *Searchlights from the Word*, p. 100

参考文献 (列王記第一、第二)

Gates, John T. “1 Kings.” In *The Wycliffe Bible Commentary*. Chicago:Moody Press, 1962.

Henry, Matthew. “1 and 2 Kings.” In *Matthew Henry's Commentary on the Whole Bible*. Vol. 2.

Jamieson, Robert. “1 and II Kings.” In *A Commentary, Critical, Experimental and Practical on the Old and New Testaments*. 3rd ed. Grand Rapids:Zondervan Publishing House, 1983.

Jensen, Irving L. *I Kings with Chronicles*. Chicago:Moody Press, 1968.

Keil, C. F. “The Books of Kings.” In *Biblical Commentary on the Old Testament*. Vol. 8. Grand Rapids:Wm. B. Eerdmans Publishing Co., 1971.

Lumby, J. R. *The Cambridge Bible for Schools and Colleges*, The First Book of the Kings. London: C. J. Clay and Sons, 1890.

McNeely, Richard I. First Second Kings. *Everyman's Bible Commentary*. Chicago: Moody Press, 1978.

Stigers, Harold. “II Kings.” In *The Wycliffe*

Bible Commentary. Chicago:Moody Press, 1962.

Thiele, Edwin R. *A Chronology of the Hebrew Kings*. Grand Rapids: Zondervan Publishing House, 1977.

———. *The Mysterious Numbers of the Hebrew Kings*. Rev. ed. Chicago: University of Chicago Press, 1983.

Whitcomb, J. C., Jr. *Solomon to the Exile*. Grand Rapids:Baker Book House, 1975.

列王記第二

「列王記の歴史は下降線をたどるものであり、事態はますます暗くなり、ついには救いようがなくなる。……まず十部族が捕虜にされ、次に二部族が捕虜にされる。」

サミュエル・リダウト (Samuel Ridout)

列王記第二の序論については、列王記第一を参照のこと。

構 成

I. 分裂した王国(列王記第一からの続き) (1～17章)

- A. イスラエルのアハズヤ王とエリヤの働き (1章)
- B. エリヤの昇天 (2:1～12前半)
- C. エリシャの働き of 始まり (2:12後半～25)
- D. イスラエルの王ヤロブアム (ヨラム) (3章)
- E. エリシャの奇跡的な働き (4:1～8:15)
 - 1. 奇跡的な油の供給 (4:1～7)
 - 2. 奇跡的な誕生 (4:8～17)
 - 3. シュネム人の息子の蘇生 (4:18～37)
 - 4. 毒入りの煮物の解毒 (4:38～41)

- 5. 奇跡的なパンの供給 (4:42～44)
- 6. ツアラアトに冒されたナアマンの奇跡的な清め (5:1～19)
- 7. ゲハジの貪欲 (5:20～27)
- 8. 斧の頭の奇跡的な回収 (6:1～7)
- 9. 奇跡的な軍事行動 (6:8～23)
- 10. サマリアの飢饉 (6:24～7:20)
- 11. シュネム人の財産の回復 (8:1～6)
- 12. ハザエルの治世に関するエリシャの預言 (8:7～15)
- F. ユダの王ヨラム (8:16～24)
- G. ユダの王アハズヤ (8:25～29)
- H. イスラエルの王エフーとエリシャの働き (9、10章)
 - 1. エフーの油注ぎ (9:1～10)
 - 2. エフーによる処刑 (9:11～10:17)

3. エフーによるバアル崇拜者の肅清 (10:18~36)
- I. ユダの女王アタルヤの王位篡奪 (11章)
- J. ユダの王ヨアシュ (12章)
- K. イスラエルの王エホアハズ (13:1~9)
- L. イスラエルの王ヨアシュ (13:10~13)
- M. エリシャの働きを終焉 (13:14~25)
- N. ユダの王アマツヤ (14:1~20)
- O. ユダの王アザルヤ (ウジヤ) (14:21, 22)
- P. イスラエルの王ヤロブアム二世 (14:23~29)
- Q. ユダの王アザルヤ (ウジヤ) (続き) (15:1~7)
- R. イスラエルの王ゼカリヤ (15:8~12)
- S. イスラエルの王シャルム (15:13~15)
- T. イスラエルの王メナヘム (15:16~22)
- U. イスラエルの王ペカフヤ (15:23~26)
- V. イスラエルの王ペカ (15:27~31)
- W. ユダの王ヨタム (15:32~38)
- X. ユダの王アハズ (16章)
- Y. イスラエルの王ホセア (17:1~6)
- Z. 北王国の滅亡 (17:7~41)
3. センナケリブによるユダへの第一次侵攻 (18:13~16)
4. センナケリブによるユダへの第二次侵攻 (18:17~19:34)
5. センナケリブの敗北と死 (19:35~37)
6. ヒゼキヤの病氣と回復 (20:1~11)
7. ヒゼキヤの愚かな慢心 (20:12~21)
- B. マナセ王 (21:1~18)
- C. アモン王 (21:19~26)
- D. ヨシヤ王 (22:1~23:30)
 1. ヨシヤによる神殿の修復 (22:1~7)
 2. ヨシヤによる律法の書の回復 (22:8~20)
 3. ヨシヤによる契約の更新 (23:1~3)
 4. ヨシヤによる改革 (23:4~30)
- E. エホアハズ王 (23:31~33)
- F. エホヤキム王 (23:34~24:7)
- G. エホヤキン王 (24:8~16)
- H. ゼデキヤ王 (24:17~25:7)
- I. エルサレムの陥落 (25:8~21)
- J. ゲダルヤの総督職 (25:22~26)
- K. エホヤキン王 (25:27~30)

II. ユダ王国から捕囚まで (18~25章)

- A. ヒゼキヤ王 (18~20章)
 1. ヒゼキヤの正義の統治 (18:1~8)
 2. サマリアの占領 (18:9~12)

注 解

I. 分裂した王国（列王記第一からの続き）（1～17章）

A. イスラエルのアハズヤ王とエリヤの働き（1章）

1:1 モアブはダビデによって征服されていた（IIサムエル8:2）。ソロモンの王国がイスラエルとユダに分割されたとき、モアブはイスラエルの支配下に入ったが、アハブの死後、モアブ人は反乱を起こして独立を勝ち取った。

1:2 アハズヤ王はサマリアの宮殿の屋上の部屋の欄干から落ちて重体に陥った。彼は主に癒やしを求めずに、エクロンの神バアル・ゼブブに使いを送り、回復するかどうかを確かめた。ホイットコム（John C. Whitcomb）は、この異教の神の定義をしている。

このアラムの神の本当の名前はバアル・ゼブル（「命の主」）であったが、ユダヤ人は嘲笑の意味でバアル・ゼブブ（「蠅の主」）と呼んだ。キリストの時代には、この神はサタンの象徴となっていた。^{*⁽¹⁾}

「ヤハウェが支えたもう者」を意味する名を持つ王が、バアルに癒やしを求めるとは何と情けないことか！

1:3～8 毛衣を着て、腰に革の帯を締めた人、エリヤは使者に会い、バアル・ゼブブに伺いを立てに行ったことを厳しく咎め、彼の病が命取りになることを告げて、彼らをアハズヤのもとに送り返した。

1:9～12 そこでアハズヤは、部下五十

人を従えた隊長を遣わし、エリヤに直ちに出頭せよと命じた。隊長がその傲慢な要求を伝えると、神は天から火を降らせ、隊長と五十人の部下を滅ぼし、エリヤの正しさを証明された。二人目の隊長は五十人の部下を率い、エリヤに「急いで下りて来てください」と命じたが、彼らも同じ運命をたどった。神は以前、天からの火でバアルとその祭司たちの信用を失わせた（I列王記18章）。今、その同じ天の炎が、エリヤに不遜にも手をかけようとしたバアルの兵士たちを滅ぼしたのである。預言者（エリヤ）は、偶像礼拝者である篡奪者からではなく、イスラエルの真の主（主）から命令を受ける者である。二人の隊長とその部下たちが殺された理由は特に言及されていないが、おそらく彼らはエリヤを亡き者にするというアハズヤの決意を共有していたのだろう。

1:13～16 三人目の隊長がエリヤの力を謙虚に認め、あわれみを乞うに至って、ようやく預言者は主の使い（受肉前のキリスト）からアハズヤに話しに行くように命じられた。エリヤは大胆不敵にも、王がバアル・ゼブブに伺いを立てて主を侮ったため、回復することはない、と告げた。

1:17, 18 アハズヤが死ぬと、王位を継ぐ息子がいなかったため、弟のヨラムが後を継いだ。このときユダはヨシャファテ（3:1）と、ヨラムという同じ名前の息子との共同統治体制が敷かれていた。

B. エリヤの昇天（2:1～12前半）

この章は、聖なるエリヤが「引き上げられる」（1～11節）ことで始まり、ベテルのならず者たちが「引き裂かれる」（23～25節）ことで終わる。

2:1～6 エリヤがその務めを終え、エリシャが後を継ぐ時が来た。しかし、その

前にエリヤはベテル、エリコ、ヨルダンを訪れなければならない。エリシャは熱心に、これらの場所に同行することを願った。ベテルとエリコで、**預言者の仲間たちはエリシャに、主がその日エリヤを彼から（※英訳「彼の頭から」）取り上げられる、と伝えた。**これは、弟子が師の足元に座る習慣を指しており、そのような場合、もちろん師は弟子の頭上にいたわけである。エリシャはすでにこれを知っていて、預言者たちに「**黙っていてください！**」と言った。これは、あまりにも悲しく、神聖なことであったので、話題にできなかったのである。

2:7～9 エリヤとエリシャはエリコからヨルダン川へ下って行き、五十人の預言者が遠くからついて来た。エリヤが**外套**でヨルダン川を打つと、**水が分か**れ、二人は**乾いた土の上を渡**った。エリヤはアハブの治世中にヨルダン川の東のギルアデから来て、預言者としての働きを始めた（Ⅰ列王記17:1）。そして、エリヤはその使命を終えるにあたり、天に引き上げられるためにヨルダン川を再び渡った。エリシャは、去りゆく預言者に願い事をするように励まされて、彼の霊の二倍の分け前を求めた。二倍の分け前は長男の権利であり、ここでは単にエリシャが彼にふさわしい後継者になることを望んだ、という意味かもしれない。ウィリアムズ (George Williams) は、エリヤが記録に残る奇跡を8つ行ったのに対し、エリシャは16の奇跡を行ったという事実、この願いの成就が見られると言う。^{*(2)}

2:10～12前半 エリヤは、その願いをかなえる力は自分にはない、と述べた上で、さらに自分の力の及ばない条件を付け加えた。すなわち彼が去るのをエリシャが目撃するなら願いはかなえられる、と。二人が歩きながら話していると、**火の戦車と火の馬**が二人を隔てた。そして竜巻がエリシャ

の目の前でエリヤを天に引き上げた。エリシャは「**わが父、わが父、イスラエルの戦車と騎兵たち**」と叫んだ。これは、エリヤが神の力の最強の武器であり、イスラエルの最高の防衛であったことを示しているのかもしれない。

C. エリシャの働きの始まり(2:12後半～25)

2:12後半～14 エリシャは、悲しみのあまり自分の衣を引き裂いた後、ヨルダンの東岸に戻り、エリヤの**外套**で川の水を打ち、「**エリヤの神、主はどこにおられるのですか**」と言った。この問いかけは、疑いや不信を表すものではなく、むしろ神がエリヤのときと同じように、今やエリシャとともにおられることを示す機会を与えたに過ぎなかった。水は**分か**れ、預言者（エリシャ）は五十人の預言者の仲間たちが待機し、見守っていた川の西岸に戻ることができた。

2:15～18 ヨルダン川が分かれるのを見て、彼らはエリシャが本当にエリヤの後継者であることを認めた。彼らはエリシャの賢明な判断に反して、**エリヤ**を捜すために捜索隊を出すことを主張したが、もちろんエリシャが警告したように、その旅は無駄に終わった。彼らはエリヤの昇天を目撃していなかったか、あるいは目撃していたとしても、その不在は一時的なものだと考えていたのである。

2:19～22 この時点から13:20までのエリシャの宣教は、イスラエル国民を偶像礼拝から真の生ける神に立ち返らせるための一連の奇跡で構成されている。これらの出来事は必ずしも年代順ではない。これらの奇跡の最初のは、エリシャがエリコの泉の汽水に塩を投げ込んだときに起こった。それ以来、**死**や**流産**は二度と起こらな

くなった。

2:23, 24 エリシャはエリコから子牛崇拜の中心地の一つであるベテルに向かう途中、乱暴な若者たちに出会った。彼らはエリシャを「はげ頭」と呼び、エリヤのように天に上ってみろ、とからかい、挑発した。エリシャが主の名によって彼らをのろうと、森の中から二頭の雌熊が出て来て、彼らのうちの四十二人をかき裂いた。神の使者に対する侮辱は神自身に対する侮辱である。

2:25 エリシャはエリヤの足跡をたどり、エリコとベテルの預言者学校を訪れた後、カルメル山とサマリアへ向かった。エリコの人々はエリシャを敬意をもって迎え、祝福を受けた。ヤハウェに不遜であったベテルの若者たちは、エリシャを辱めたため、呪いを受けた。

D. イスラエルの王ヤロブアム (ヨラム) (3章)

アハブの子ヨラムは十二年間 (紀元前 852～841年、Ⅱ列王記3:1～9:29) イスラエルの王であった。

3:1～3 アハブの子ヨラムがイスラエルの王として統治し始めたとき、ユダでは共同統治が行われていた (ヨシャファテとその息子ヨラム)。それによって、イスラエルの王ヨラムがヨシャファテの第十八年、ユダの王ヨラムの第二年に統治し始めたことが説明できる (Ⅱ列王記1:17)。ヨラムは両親ほど悪人ではなかった。彼はアハブが建てたパアルの石の柱を取り除いた。しかし、ネバテの子ヤロブアムによって制定された金の子牛礼拝に執着した。

3:4～9 アハブの治世下、モアブの王はイスラエルに毎年貢ぎ物を納めることが義務付けられていた。アハブが死ぬと、メシャ王は反乱を起こす好機だと判断した。

1868年にドイツ人宣教師によって発見された有名なモアブ碑文には、イスラエルによるモアブの征服とメシャの反乱の成功が記されている。^{*(3)} アハズヤはモアブの反乱に対して何もしなかった。しかし、彼の後継者ヨラムは権力を握ると、直ちにモアブを自分の支配下に戻そうとした。モアブからの莫大な貢ぎ物を失いたくなかったからである。ヨラムはヨシャファテと共に戦いに加わるよう求め、ヨシャファテは愚かにも前と同じように同意した。(Ⅰ列王記22章を参照。ヨシャファテはイスラエルと同盟を結んで、危うく命を落とすところだった。) 彼らは死海の西側を南下し、エドムを東に抜け、モアブへ北上する計画を立てた。この時、エドムの王はヨシャファテの家臣であったので、戦争には彼の協力が必要だったのである。

3:10～12 軍勢がモアブに近づいたとき、水が尽きた。主を責めるヨラムの無礼に対し、ヨシャファテは主の預言者に相談してはどうかと提案した。エリヤのしもべエリシャが近くにいると知ると、三人の王はエリシャのもとへ下って行った。

3:13～19 最初のうち、エリシャは、偶像を拝むイスラエル王と自分は何の関係もないと苦言を呈し、彼の父の偶像礼拝の預言者たちのところへ行っはどうかと提案した。ヨラムの返答は、問題の原因は偶像ではなく主である、と示唆していたことがうかがえる。エリシャはヨシャファテに敬意を表し、主の御心を求めることに同意した。奏楽者が演奏すると、神の力がエリシャに臨み、エリシャは、雨によらない池が谷にたくさんでき、モアブ人が敗北する、と予言した。

3:20～25 翌朝、エドムの方角から谷に水が流れ込んで来た。日の出の光に照らされたその水は、モアブ人たちの目には血

のように見えたので、彼らはイスラエル、ユダ、エドムの王たちが同士討ちをしたに違いないと考えた。戦利品を求めてイスラエルの陣営へ急いだ彼らは、壊滅的な攻撃を受けた。イスラエル人は耕作地を石で埋め、井戸をふさぎ、**良い木をすべて切り倒した**。

3:26, 27 モアブの王は、かつての同盟国であったエドム人に憤慨し、彼らの王がイスラエルやユダのように真剣に戦わないのではないかと思い、エドムの防衛線を突破しようとした。この作戦が失敗すると、神々の怒りを鎮め、兵士たちを奮い立たせ、敵を恐れさせるために、**城壁の上で長男をいけにえとして献げた**。イスラエルは、この人身御供にことばを失った。それはもちろん忌むべきことだったからである。神によって直接的に、あるいは自分たちの良心によって打ちのめされたイスラエルは、モアブを服従させることなく撤退した。スタイガーズ (Harold Stigers) は次のようにコメントしている。

著者は、次のように問いかけているようだ。「イスラエルがこの事でそれほど深く動揺したのなら、なぜ自らの偶像礼拝をやめるだけの衝撃を受けなかったのか」と。しかし偶像礼拝はイスラエルとユダで続いた。^{*(4)}

E. エリシャの奇跡的な働き (4:1～8:15)

1. 奇跡的な油の供給 (4:1～7)

敬虔な預言者の一人に先立たれた貧しいやもめが、借金を返済できないため、息子たちを奴隷として失う危機に直面していた。彼女は奇跡的に油を供給され、その量は、借りられる器の数以外には何の制限もなかった。その油を売ることによって、彼女は借金を返済し、家族を養うことができた。この出

来事は、負債を抱えた者の現在の必要を満たし、将来の生活を支えるに十分な恵みを示している。貧しい罪人に対する神の恵みは、私たちを負債と奴隷状態から解放し、新しい人生に必要なものすべてを提供してくれるのである。

2. 奇跡的な誕生 (4:8～17)

シュネムの名の知れた女性が、エリシャに破格のもてなしをし、自宅の二階に小さな部屋まで用意した。エリシャのとりなしによって王から地位や厚遇を提示されると、彼女は謙虚に、自分の民の中でつつましく暮らすことに満足しています、と述べた。預言者のしもべ、ゲハジは、彼女は男の子を望んでいるかもしれないと推測し、預言者のことばでそれは現実となった。翌春、彼女は息子を産んだ。死（不妊の胎）から主が命をもたらされたことは、すべての神の子たちの霊的な誕生を象徴している（エペソ2:1～10）。

3. シュネム人の息子の蘇生 (4:18～37)

4:18～25前半 それから何年かが経ち、少年は畑で何らかの発作を起こした。少年は母親のところに運ばれたが、正午に母親の腕の中で息を引き取った。母親は息子の遺体を預言者の部屋に寝かせた。そして、理由を明かさずに、夫に「カルメル山にいる神の人を訪ねたい」と告げた。夫は、宗教上の祝日でもないのに預言者を訪ねるのを不思議に思ったが、必要な移動手段を手配した。彼女はイズレエルの平野にあるシュネムからカルメル山まで雌ろばに乗り、大急ぎで道を進んだ。

4:25後半～28 彼女が近づいて来るのを見て、エリシャはゲハジを遣わし、彼女に会い、安否を尋ねるようにさせた。彼女は訪問の目的をゲハジに告げなかった。そ

れどころか、彼女は自分も夫も息子も元気だと言ってゲハジを欺いた。彼女は預言者に自分の事情を直接説明することを望んだのである。この女性はエリシャに会って感情を爆発させたが、もし預言者エリシャが彼女の深い苦悩を感じ取って彼女に話す機会を与えなかったら、ゲハジによって追い返されていたであろう。主は彼女の訪問の目的をエリシャに明らかにされず、彼女も明らかにしなかった。しかし彼女はこう言ってヒントを与えた。「私をご主人様に子どもを求めたでしょうか。この私にそんな気休めを言わないでくださいと申し上げたではありませんか。」言い換えれば、「息子を授けておいて、その後奪われるような欺きを私は望んでなどいない」ということである。おそらくエリシャはこのことから、息子が重病であると推測したのであろう。

4:29～31 最初に、預言者はゲハジを遣わし、死んだ子どもの上に自分の杖を置くように命じ、途中で、通常の東洋的な長い挨拶は避けるように指示した。しかし女性はそれでは不十分であると直感し、エリシャ自身が一緒に帰るよう強く求めた。彼らがシュネムに近づくと、ゲハジが出迎え、少年が目覚ましていないことを伝えた。

4:32～37 するとエリシャは遺体が置かれた部屋に入り、扉を閉め、祈りを捧げ、子どもの上に体を伸ばし、口と口、目と目、手と手を合わせた。預言者は立ち上がり、前後に歩き、再び少年の上に身を伸ばした。今度は、少年は七回くしゃみをして目を開けた。感謝にあふれた母親は、生き返った息子を取り戻した。エリシャは、口と口、目と目、手と手を合わせ、死んだ若者と完全に一体化したのであった。彼の杖は何も変化をもたらさなかったが、彼がその少年の上に身を置き、自らの命を吹き込むと、少年は生き返ったのである。

4. 毒入りの煮物の解毒 (4:38～41)

次に記録されている奇跡はギルガルで起こった。飢饉のとき(おそらく8章に記されている七年間の飢饉)、エリシャは召使いに預言者の仲間たちのために煮物を作るように命じた。誤って、毒のある瓜(英訳「ひょうたん」)を釜に入れてしまった。間違いに気づいたエリシャは、釜に麦粉を入れて、安全に食べることができるようにした。

5. 奇跡的なパンの供給 (4:42～44)

またある時、エリシャは丸くて平たい小さな大麦のパン二十個と新穀一袋(※英訳「数本の新鮮な穀物の穂」)で百人を養った。主が約束されたとおり、あり余るほど十分な量があった。エリシャは、無私無欲に、自分の正当な所有物を他の人々に与えたのである。私たちが他の人々と分かち合い、その結果を神にゆだねるなら、神は私たちの必要だけでなく、他の人々の必要も満たし、さらには余剰さえも残してくださるお方である(箴言11:24, 25)。

6. ツアラアトに冒されたナアマンの奇跡的な清め (5:1～19)

5:1～4 エリシャの奇跡の力は、アラムの軍隊にまで及んだ。捕虜となったユダヤ人の少女が、アラム軍の長ナアマンの家で召使いとして働いていた。ナアマンがツアラアトに冒されていることを知った彼女は、サマリアにいる預言者エリシャなら癒やすことができますのに、と言った。この少女は、たとえ世間的には取るに足りない存在であっても、鍵となる場所に置かれ、神に忠実であるなら、救いの歴史の進路に影響を与え得ることを示している。ムーディー(D. L. Moody)は次のように述べている。

召使いの少女の一言が、二つの王国で大騒ぎを引き起こした。神は彼女の信仰を尊び、イスラエルの誰に対してもなされなかったことを、偶像礼拝者ナアマンのためになされた（ルカ4:27参照）。子どもの指が、大人に正しい方向を示してくれる場合が何と多くあることだろう。召使いの彼女は、神はイスラエルの誰にもなされなかったことをナアマンのためにしてくださる、と言って神を誇ったので、神は彼女の信仰を尊べたのである。

* (5)

5:5~7 ナアマンは、アラムの王ベン・ハダドからイスラエルの王ヨラムへの紹介状を手に入れ、金銭と衣服の贈り物も持参した。どうやらその手紙はエリシャのことには触れず、ただナアマンの治癒を依頼するものだったようである。イスラエルの王はそのような無理な要求に激怒し、アラムの王がイスラエルを攻撃する口実を探しているのではないかと疑った。

5:8~12 エリシャは王の窮状を聞き、ナアマンを自分のところに寄こすように頼んだ。王宮には何の力もなかった。彼らはみな偶像礼拝者だったからである。しかしイスラエルには、人を清めて癒やす力を持つ神の預言者がいた。エリシャはナアマンと個人的に話をしたのではなかったものの、そのことばが信仰に基づいて実行されるなら、それで十分だった。エリシャはナアマンにヨルダン川で七回、自分の身を洗うようにということばを送った。ナアマンはもっと劇的で華やかな癒やしの方法を期待していたので怒り狂い、自分の生まれ故郷のダマスコの水の方がヨルダン川よりも優れているのではないかと抗議した。

5:13, 14 D・L・ムーディーは問題を正確に分析している。

ナアマンには二つの病気があった。高慢とツアラアトである。前者も後者と同じように治療が必要だった。ナアマンは高慢という戦車から降り、その後、定められた方法に従って身を清めなければならなかった。^{*(6)}

最後に、彼のしもべたちが、これほど簡単なことなのだから、預言者の言う通りにするよう説得したところ、彼は完全に癒やされた。「自尊心を捨てたら、病も去った」と、よく言われる通りである。

5:15~19 ナアマンはイスラエルの神に帰依し、エリシャに報いようとしたが、預言者は彼から何も受け取ろうとしなかった。そこでアラムの將軍は、らば二頭分の土を持って帰る許可を得て、イスラエルから持ち帰った土の上でまことの神を礼拝できるようにした。彼は、自分の公務上、主人と共に偶像リンモンの神殿に行き、ひれ伏す必要があるかもしれないが、主がそれを赦してくださることを願っている、と言った。エリシャはこれを肯定も否定もせず、ただ彼を送り帰した。

ナアマンの物語は、恵みの福音の典型的な例である。アラム軍の長であった彼は、神の敵であった。人間的に言えば、彼は無力で絶望的な状態にいた。ツアラアトに冒されていたからである（ローマ5:6~10参照）。異邦人であった彼は、神の約束や契約とは無縁であり、神の祝福を受ける権利もなかった（エペソ2:11, 12）。しかし、神の恵みは人間の必要に手を差し伸べた。ナアマンがすべきことは、へりくだって主のことばに従うことだけだった。彼はついに神のことばに従って身を清め、新しい肌と新しい心を持つ新しい人となった。

愛する主の 妙なる恵み
 罪と咎をも 越える恵み
 カルバリの 山にて注がれ
 小羊の血 そこに流れたり

ジュリア・H・ジョンストン
 (Julia H. Johnston)

7. ゲハジの貪欲 (5:20～27)

しかしゲハジは、エリシャが断ったナアマンからの贈り物を欲しがった。彼はアラム人ナアマンに、エフライムの山からちょうど彼のところに来た二人の若い預言者のために、エリシャが贈り物を受け取るように、自分を遣わしたのだと言った。そして、彼はその金と衣服を自分の家に持ち帰った。エリシャは預言者として、しばしば主から特別な啓示を受けた。今回、彼は自分のしもべがしたことを知らされ、ゲハジが到着すると、エリシャは彼がしたことを暴いた。エリシャは、この貪欲なしもべに、今は金や衣服、また金で買えるものを受け取る時ではないと論じた。ゲハジはたちまちナアマンのツアラアトで打たれた。彼は、神の無償の賜物である恵みが決して無償ではないと思わせる機会をアラム人に与えたことで、大きな罪を犯したのである。

8. 斧の頭の奇跡的な回収 (6:1～7)

預言者の仲間たちの中には、手狭な宿舎に不満を抱いている者たちがいた。おそらく、エリコかギルガルでエリシャと共同生活をしていたのであろう。そこで彼らは預言者の許可を得て、ヨルダン川の近くに移り住み、そこに家を建てることにした。建築中に、男の一人が、借り物の斧の頭をヨルダン川に落としてしまった。エリシャは彼の悲痛な嘆願に応え、棒切れを川に投げ入れた。すると斧の頭は浮き上がり、建築者の手に戻り、彼は感謝にあふれた。

9. 奇跡的な軍事行動 (6:8～23)

エリシャの奇跡的な力のもう一つの証拠は、敵陣営の極秘の軍事行動を知っていたことであつた。アラムの王は、自分の秘密の計画がすべてイスラエルの王に何度も筒抜けであつたので困り果て、部下の一人がイスラエルのスパイではないかと疑った。預言者エリシャがイスラエルの王に自分の計画を明らかにしていることを知ると、彼は何としてもエリシャを捕まえようと決心した。預言者がサマリアの北にほど近い町ドタンにいと聞いた彼は、夜中に略奪隊を派遣して町を包囲した。朝、エリシャの召使いは敵軍が町を包囲しているのを見て恐怖に襲われた。しかし、預言者の祈りに応えて、召使いは奇跡的な力を与えられ、神が民を守るために遣わされた火の馬と戦車からなる軍勢を見ることができた。

エリシャは、アラム人を盲目にしてくださるように主に願った。すると預言者は、苦勞することなく彼らをドタンからサマリアまで導くことができた。イスラエルの王が彼らを殺そうと提案すると、エリシャは自分が捕らえた捕虜を剣と弓で殺すつもりはないこと、そして王が勞せず自分の手に引き渡された者たちを殺す理由がどこにあるのか、と言って王を思いとどまらせた。むしろ王は、彼らに食事を与えて家に帰すように命じられた。この人道的な扱いによって、彼は善をもって悪に打ち勝ったのである。このような略奪隊はそれ以降イスラエルの地に侵入しなかった。

16節は、ヨハネの手紙第一4:4、「あなたがたのうちにおられる方は、この世にいる者よりも偉大だからです」を思い出させてくれる。悪の勢力との霊的な戦いにおいて、私たちは全能の〈味方〉に守られ、力を与えられている。信仰の祈りを通して、主は私たちの心の目を開き、主が私たちを守り、

サタンの破壊的な意図を阻止してくださっているという心強い事実気づかせてくださるのである。

10. サマリアの飢饉 (6:24~7:20)

6:24~31 ここから始まる出来事は、必ずしも時系列に沿ったものではない。アラムの王ベン・ハダドがサマリアを非常にうまく包囲したため、町に飢饉が広がった。(この包囲が、ある人々が言うように、8:1~2で言及されている七年間の飢饉の後に起こったとすれば、その状況がどれほど深刻であったかが理解できる。) 人々は、儀式上の汚れた食物(ろばの頭)や野菜や穀物に法外な代金を払わなければならなかった。「鳩の糞」*⁽⁷⁾は、食用の球根を持つ植物の名前である。この植物は今日、「ベツレヘムの星」と呼ばれている。イスラエルの王は、主のほかには誰も助けることができないことを認め、民が人肉を食べていることを知って深く嘆いた。王は、このようなひどい状況であること、また状況を打開するために何もしなかったエリシャを責め、その日のうちに彼を殺すと誓った。

6:32, 33 しかしエリシャは、神から王の意図について知らされ、王の使者がこちらに向かっており、その後に王自らも来ようとしていることを長老たちに告げた。そして、王自身が到着するまでは使者の立ち入りを拒否するように命じた。ほとんどすぐに使者が到着し、続いて王が到着した。王は、アラムに降伏するしかないと思っていた。そして王は言った。「見よ、これは主からのわざわいだ。これ以上、私は何を主に期待しなければならないのか。」この出来事は、「王の心は、主の手の中にあって水の流れのよう。主はみこころのままに、その向きを変えられる」(箴言21:1) ことを私たちに思い起こさせる。ここではイス

ラエルの王の名前は出てこない。事実、4~8章に記録されているどの出来事にも王の名は記されていない。多くの注解者は、包囲中の王はヨラムであったとするが、エリシャの働きは四人の王の下で半世紀以上にわたっており、時系列で記録されていないため、断定はできない。

7:1, 2 エリシャはその後、王に驚くべき予言をした。翌日には上等の小麦粉と大麦がサマリアの門で非常に安値で売られる、と保証したのである。王の懐疑的な側近が、そのような信じられないほど大量の穀物が売られるわけがない、と疑問視するとエリシャは、彼はそれを自分の目で見ることが、それを食べることはできない、と付け加えた。「もし信じる、と言うなら、『どのように?』という問いを十字架につけなければならない」とムーディー (Dwight L. Moody) は書いている*⁽⁸⁾(マルコ8:4で四千人に食事を与える前の主の弟子たちの記事を参照)。

7:3~7 その日の夕方、サマリアの門に座っていた、ツアラアトに冒された四人は自暴自棄になり、食物を得ようとアラム人の陣営に逃げ込むことにした。彼らが着いてみると、アラムの陣営は放棄された後だった。主が敵軍に、大軍勢の騒ぎを聞かせたからである。彼らは、イスラエルの王が雇ったヒッタイト人とエジプト人の兵士だと思い、大混乱のうちに撤退した。マシュー・ヘンリー (Matthew Henry) は次のように述べている。

ドタンを包囲したアラム人は、視力を奪われた (6:18)。これらの人々は、聴力を奪われた。その騒音が本当に御使いの働きによって空中に響いたのか、それとも彼らの耳に聞こえたただけなのかは定か

ではない。いずれにせよ、それは神からのものであった。^{*(9)}

7:8～16 最初、ツアラアトに冒されたこの人たちは、食物、お金、衣服を思う存分手に入れた。しかし、間もなく人々はアラム軍がいなくなったことに気づき、黙っていた自分たちを罰すると思い、王に知らせることにした。王はすぐにアラム人がイスラエル人に伏兵を仕掛けているのではないかと疑った。しかし、家来の一人は、数人を斥候として送ることを提案した。たとえアラム人に殺されないとしても、他のイスラエル人と同じように、いずれ餓死するであろうと考えたからである。偵察隊は、アラム人が実際に撤退し、略奪品を置き去りにして逃げたのを発見した。そこでイスラエルの人々はアラム軍の天幕を略奪し、飢饉は去った。

7:17～20 エリシャの預言のとおり、その日、上等の小麦粉と大麦が、非常に安い値段で売られた。予言を疑っていた王の役人はこれを見たが、城門で歓喜に沸く群衆に踏み殺されたので、それを喜ぶことはできなかった。18～20節では、この男が不信仰のゆえに主のことば通りに死んだことを改めて強調している。不信仰はその「犠牲者」から祝福を奪い、死という報いを与える。「われわれのしていることは正しくない。今日は良い知らせの日なのに、われわれはためらっている」(9節)という、ツアラアトに冒された人の忘れがたいことばは、贖いの恵みの福音を託された私たちに対する絶え間ない挑戦である。

11. シュネム人の財産の回復 (8:1～6)

七年間の飢饉 (おそらく4:38の飢饉) がその地を襲う前に、エリシャはシュネムの女性 (4章) に、家族と一緒にその地を去

るように警告した。そこには彼が生き返らせた息子も含まれていた。彼女はペリシテ人の地に行き、飢饉が終わると戻って来た。このとき、ゲハジはイスラエル王の宮廷にいたが、そこは通常、ツアラアト患者の立ち入りが禁じられた場所であった。彼が王に、エリシャが少年を生き返らせたことを話していたちょうどその時、その女性本人が自分の地所の回復を願いに来たのである。王は、その地所と、彼女が不在の七年間に、そこで収穫された作物の両方を彼女に返すように命じた。

12. ハザエルの治世に関するエリシャの預言 (8:7～15)

8:7～12 病に伏していたアラムの王ベン・ハダドは、エリシャがダマスコに来たと聞いて、自分が回復するかどうかを尋ねようと、多額の贈り物とともに将校ハザエルを遣わした。ナアマンはベン・ハダドが率いるアラム軍の将軍であったため、王はエリシャの癒やしの力を知っていたはずである (5章)。おそらくこの預言者によって自分も癒やされるかもしれない、と考えたのであろう。ハザエルに対する預言者の曖昧な答えは、「行って、『あなたは必ず治る』と彼に告げなさい。しかし、主は私に、彼が必ず死ぬことも示された」というものであった。これは、病気そのものは必ずしも致命的なものではないが、ハザエルが彼を殺そうとしているので、ベン・ハダドは回復しない、ということの意味していた。エリシャがハザエルをじっと見つめたので、ハザエルは恥じるほどであった。エリシャはまた、ハザエルがイスラエル人にひどい損失と苦しみを与えることを予見した。それがあまりにもひどいものなので、エリシャはそれを考えただけで泣いたのである。

8:13～15 ハザエルは、「(私は) 犬に

すぎないのに、どうして、そんな大それたことができるでしょう」と答えた。ウィリアムズ（George Williams）はこう言い換えている。

「犬に過ぎない私が、どうしてアラムの王位に就き、そのような大事業を成し遂げることができるでしょうか！」^{*(10)}

しかしエリシャは主から、ハザエルがアラムの王となることを告げられていた。この告知の後、ハザエルはベン・ハダドのもとに戻り、回復すると告げた後、信頼を裏切り、**水に浸した厚い布**で彼を窒息死させた。次の引用文はエリシャの預言がいかに正確であったかを端的に物語っている。

（ベン・ハダドの殺害の）すぐ後、ハザエルはラモテ・ギルアデでヨラムとアハズヤの連合軍と戦った（8:28, 29; 9:14, 15）。彼はエフーを何度も戦いで破り、南はアルノンから北はバシャンまで、ヨルダン川東側の全土を荒廃させた（10:32, 33）。エフーの後継者エホアハズの治世中、彼は繰り返しイスラエルの領土に侵入したが、完全な破壊を免れたのはただ神の慈悲による（13:3, 22, 23）。ハザエルはまたパレスチナ南西部に進攻し、ガテを占領した。彼はエルサレムを攻撃しない見返りにユダの王に多額の賄賂を支払わせた（12:17, 18、Ⅱ歴代誌24:23, 24）。イスラエルが、ハザエルの息子ベン・ハダド三世率いるアラムの侵略をようやく阻止することができたのは、ハザエルの死後であった（Ⅱ列王記13:24, 25）。^{*(11)}

F. ユダの王ヨラム（8:16～24）

ヨシャファテの息子ヨラムは八年間（紀

元前853～841年、Ⅱ歴代誌21:4～20参照）ユダの王であった。

8:16, 17 16節の年代は、Ⅰ列王記22:42, 51、Ⅱ列王記3:1、Ⅱ列王記8:25の年代と整合させる必要がある。一つの説明は、ヨラムが父ヨシャファテと五年間共同統治していたというものである。もう一つは、ヨシャファテが統治の一部をアサと共有し、アハズヤとヨラムの統治期間は、ヨシャファテ単独統治の初めから起算するというものである。

8:18～19 ヨラムはアハブとイゼベルの娘アタルヤと結婚した。この結婚は、父ヨシャファテがイスラエルとの融和政策の一環として画策されたに違いない。しかし、その結果、ユダ王国は北王国の偶像礼拝の道にさらに深く陥ることになった。この背教のゆえに、**ダビデとの約束**がなければ、主はユダを滅ぼされたことであろう（Ⅱサムエル7:12～16）。

8:20～24 ヨラムの治世に、エドムが反乱を起こした。反乱を鎮圧するために、ヨラムは軍隊を率いて死海の南にあるツァイルに進軍した。エドム人が彼を包囲したので、彼はエドムの防衛線を突破して安全な場所へ逃げざるを得なくなった。ヨラムの兵たちは自分たちの天幕に逃げ帰った。その時からエドムはユダに完全には服従しなくなった。預言者オバデヤがエドムに対する託宣を語ったのは、ヨラムの治世中だったかもしれない。

ペリシテに近い**リブナ**も反乱を起こしたことが言及されており、ヨラムの悪政下でユダ王国に内在していた弱点が浮き彫りになっている。リブナはレビ人の町だった。リブナの反乱の理由はⅡ歴代誌21:10, 11に記されている。ユダがこの町の支配権を取り戻したのは、明らかに後のことである（19:8）。

G. ユダの王アハズヤ (8:25～29)

ヨラムの子アハズヤは、ユダの王として一年間在位した(紀元前841年、Ⅱ歴代誌22:1～9参照)。

8:25～27 アハズヤは、26節で、オムリの孫娘アタルヤの息子として言及されている。アハズヤはⅡ歴代誌21章のエホアハズと同一人物であり、Ⅱ歴代誌22:6ではアザルヤとも呼ばれている(※英訳)。アハズヤはイスラエルの王ヨラムの甥であった。彼の母アタルヤはアハブの娘であり、イスラエルのヨラムの姉妹であった。歴史のこの時点では、名前が少々混乱する。イスラエルの王アハブには、アハズヤとヨラムという、相次いで王位に就いた二人の息子がいた。ユダの王ヨシャファテにはヨラムという息子がいて、彼の後を継いで王となった。このヨラムの跡を継いで王位に就いたのは息子のアハズヤであった。こうしてアハズヤとヨラムがイスラエルを治める一方、ヨラムとアハズヤはユダを治めた。

イスラエル	ユダ
アハズヤ	ヨラム
ヨラム	アハズヤ

ここで、ユダの王アハズヤは、王位に就いたとき二十二歳であったとされている。Ⅱ歴代誌22:2では、彼の年齢は四十二歳となっている。ほとんどの証拠は、二十二歳が正しい年齢であることを示している。もう一方の数字は、おそらく書写者の間違いであろう。

8:28, 29 アハズヤは、イスラエルの王である叔父ヨラムに加わり、ラモテ・ギルアデでアラムと戦った。ヨラム王は戦いで負傷し、回復のためイズレエルに運ばれた。アハズヤは、そこに行き、療養中の彼を見舞った。ヨラムの父アハブはラモテ・

ギルアデで命を落とした(Ⅰ列王記22章)。アハズヤの祖父ヨシャファテは浅はかにもそこでアハブに加わり、その結果殺されそうになった。しかしアハズヤは歴史の警告(イスラエルと同盟を結ぶこと)に従わず、その結果、後に殺された(9章)。

H. イスラエルの王エフーとエリシャの働き (9、10章)**1. エフーの油注ぎ (9:1～10)**

エリシャは預言者の仲間たちの一人に、ラモテ・ギルアデに行って、ヨラムの後継者としてエフーに密かに油を注ぐように指示した。エフーはニムシの子ヨシャファテの子であり(2節)、ユダの王ヨシャファテの子ではない。エフーはヨラムの軍の司令官であり、アラム軍を迎え撃つためにラモテ・ギルアデに駐留していた。預言者はエフーに油を注ぎ、エリヤの預言に従ってアハブの家を滅ぼすように命じた(Ⅰ列王記21:21～24)。エリヤはエフーに油を注ぐように命じられていたが(Ⅰ列王記19:16)、彼はこの任務を後継者のエリシャに託したようである。エリシャはさらに、自分に代わって無名の預言者をラモテ・ギルアデに遣わし、その油注ぎが密に行われるようにした。この秘密裏の行動によって、エフーは巧みに不意をつくことができ、王権を掌握した。

2. エフーによる処刑 (9:11～10:17)

9:11～13 エフーが奥の部屋から出て来ると、彼の主君の家来たちは「あの気のふれた者」が彼に何を言ったのか知っていた。エフーは最初、彼らがすでに知っていることだ、と言って質問をはぐらかそうとした。おそらくエフーは、彼らがヨラムを倒すために預言者を遣わして自分に油を注いだのではないかと疑っていたのだら

う。しかし、彼らがしつこく尋ねるので、彼は自分が王として油を注がれたばかりであることを明かした。彼の家来たちは慌てて、階段を自分たちの衣服で覆い、彼をイスラエルの王として公に宣言した。ヨシヤファテの子エフーは二十八年間イスラエルの王であった（紀元前841～814/13年、Ⅱ列王記9:14～10:36）。

9:14～26 エフーの治世により、北王国の第五王朝が始まった。エフーは、油注ぎの知らせがイズレエルに届く前にヨラムを殺そうと、そこへ急いだ。一人の見張りが、エフーの一隊が近づいて来るのを見て、ヨラムに知らせた。近づいて来る一隊の正体を知るために使者が二度遣わされたが、エフーは彼らが戻るのを阻止した。その頃になって、見張り人たちは、その激しい車の御し方がニムシの「息子」（孫）であるエフーのそれに似ていることを王に知らせた。そこでヨラムは、ラモテ・ギルアデについて重要な知らせがあると思い、甥であるユダの王アハズヤを伴い、王家の戦車に乗って出かけた。ヨラムはエフーに「エフー、元気か（シャローム）」と挨拶したが、返ってきたのは好戦的なことばであった。裏切りを感じたヨラムは逃げようとしたが、エフーの矢に射抜かれて死んだ。エリヤの預言（Ⅰ列王記21:19）が文字通り成就し、彼の遺体はナボテのぶどう畑に投げ捨てられた。

9:27～29 アハズヤも逃げようとしたが、彼も矢で射抜かれ、メギドで死んだ。彼はアハブの家と親交を深めたため、エフーが遂行を命じられた神の呪いを受けることになったのである。その後、彼の遺体は埋葬のためにエルサレムに戻された。Ⅱ歴代誌22:9では、アハズヤはサマリアで死んだ、とあるが、これはサマリア王国、あるいはその地域のいずれかを指している可能

性がある。29節は年代に沿っておらず、8:25の繰り返しである。言及されている年（11年と12年）の不一致は、おそらく計算方法の違いによるものであろう。

9:30～37 エフーがイズレエルの町に着くと、イゼベルは彼を嘲り、「平和な要件か（英訳）。主君殺しのジムリ」と叫んだ。ジムリも主君を殺してイスラエルの王となったが、平和とは縁がなかった。彼のクーデターは失敗に終わり、わずか七日間しか続かなかった（Ⅰ列王記16:9～19）。イゼベルはエフーに、彼の反乱は成功しないとほめかしていたのである。王宮にいた二人の宦官は、イゼベルを窓から突き落として、エフーへの忠誠を示した。彼女の血は壁や馬に飛び散り、Ⅰ列王記21:23の成就として、彼女の遺体はイズレエルの犬に食べられてしまい、頭蓋骨と両足と両手首しか残らなかった。

モルガン（Campbell Morgan）は次のように述べている。

犬たちでさえ、そのような忌まわしいことを計画し実行した頭蓋骨と手と足から目をそむけた。墓もなく、彼女の記憶を永らえるものは、悪名以外にない。^{*(12)}

10:1～11 エフーの次の行動は、サマリアに住むアハブの子孫七十人（「息子たち」）を殺すことだった。彼はまず、最後通牒を後見人たちに突きつけた。アハブの子孫の中から最も適任の者を王として選び、エフーとその部下たちと戦え、という内容である。しかし彼らは、二人の王（ヨラムとアハズヤ）がイズレエルでエフーに無力だったことを覚えていたため、従順な臣下となる、という返事を送った。エフーはその返答として、翌日アハブの子孫七十人の男子の首をイズレエルに届けるなら、彼へ

の忠誠を証明できる、と書いた。彼らはこれに同意した。翌朝、エフーは門の入り口に二つの山のように積み上げられた首を見に行った。集まった人々はエフーがこの大量虐殺を命じたことを知らず、エフーが怒ると思っていたことであろう。エフーはすぐに彼らの心を落ち着かせ、次のように述べた。「あなた方はこの行為について無実である。私も無実である。確かに私は主君であるヨラムを殺したが、これらの人々を殺したのは誰か。それは神のしもべエリヤに預言されたことを成就させた神に違いない。」エリヤの預言をさらに成就しようと、エフーはイズレエルにいるアハブの親族、身分の高い者、親しい者、祭司たちを皆殺しにした。

10:12~14 首都サマリアへ向かう途中、エフーはアハズヤの親族四十二人に会った。「身内の者たち（英訳「兄弟」）」（13節）とは、いとこや甥などを意味する。アハズヤの兄弟たちはすでに殺されていたからである（Ⅱ歴代誌21:17）。これらの人々はイスラエルの王家を訪問するためにユダから来ていた。彼らがアハブの家とつながりがあることに気づいたエフーは、ベテ・エケデの水溜め場で彼らを殺すよう命じた。

10:15~17 エフーはレカブ人ヨナダブにも会った。ヨナダブが自分に忠実であることを確信したエフーは、彼をサマリアまで自分の戦車に乗せて、主に対する彼の熱心さを見届けさせた。エレミヤ書35章には、ヨナダブについてもう少し詳しく書かれている。彼は自分の子孫に、モーセとヨシュアのもとでイスラエルが学んだ初期の生活様式に戻るよう命じた。それは、彼らが王国に従って背教する、というイスラエルの国家的罪に陥らないためであった。エフーの粛清を聞くと、ヨナダブは新しい王（エフー）に同行し、王はすぐに彼をバア

ル信仰との戦いにおける強力な味方として歓迎した。サマリアで、エフーは残っていたアハブの親族を皆殺しにした。モルガン（G. Campbell Morgan）は警告する。

彼（エフー）は自分の熱意を誇りにしていた。なんと巧妙な危険だろう！そしてそれは本当に危険なことである。それが存在するところではどこでも、他の悪事につながる。この人物はイスラエルに対する神のさばきを遂行する一方で、自分自身の生活は世と妥協していたのである。^{*(13)}

3. エフーによるバアル崇拝者の粛清 (10:18~36)

10:18~28 新しい王（エフー）の次の攻撃は、バアルの礼拝者に向けられた。彼らを特定するために、彼はバアルを祭る大祭を命じた。バアルの神殿は、イスラエル各地から集まった礼拝者で埋め尽くされた。彼らは特別な祭服を着ていたが、それは彼らを識別するためであった。ヤハウエを礼拝する者が一人もいないように注意が払われた。エフーは全焼のささげ物を献げるとすぐに、近衛兵と侍従たちに、すべての偶像礼拝者を殺せ、という合図を送った。八十人の兵が外に待機し、誰も逃げられないようにした。エフーの部下たちはバアルの神殿の奥の間にまで踏み込み、そこにあった聖なる柱を運び出して、焼いた。彼らはバアルの神殿を打ち壊し、便所やごみ捨て場に変えた。

10:29, 30 多くの点で、エフーはイスラエルの王の中で、おそらく最も優れた王の一人であった。彼はアハブの家に対する神のさばきを実行し、バアル礼拝者を国から一掃した。主は、その功績を称え、彼の王朝が四代目（すなわち、エホアハズ、

ヨアシュ、ヤロブアム二世、ゼカリヤ)まで続くことを約束された。

10:31~36 しかし、エフーは、ヤロブアムが始めた金の子牛の礼拝を推進し続けた。また、ホセア1:4では、アハブの家を根絶した彼の極度の残酷さが断罪されている。彼の失敗の結果、主はイスラエルの一部を切り取り始められた。アラムの王ハザエルは、もともとルベン族とガド族とマナセの半部族が占領していたヨルダン川東岸の地を攻略した。エリシャはハザエルの活動を予見していた(8:12)。このアラム王は、エフーがアハブの家にさばきを下したように、イスラエルの家に主のさばきを下していた。霊的な視点からは、これらの悪しき王たちの行動の背後に、人間の怒りを用いて御自分の目的を果たされるヤハウエの主権的な御手が見える。

1. ユダの女王アタルヤの王位篡奪 (11章)

アハブの娘アタルヤは、六年間ユダの女王であった(紀元前841~835年、Ⅱ歴代誌22:10~23:21)。

11:1 場面はここでイスラエルからユダに切り変わる。アタルヤは息子のアハズヤがエフーに殺された後、実権を握った。自分の支配を脅かすものを防ぐために、彼女はアハズヤの息子全員(少なくとも彼女はそう思っていた)の殺害を命じた。アタルヤが冷酷にも自分の孫の処刑を命じることができたということは、彼女がいかに母親(イゼベル)に似ていたかを示している。彼女はまた、父アハブの子孫に宣告された呪い(Ⅰ列王記21:21,22)を知らず知らずのうちに成就していたのである。

11:2, 3 エホヤダの妻エホシェバ(Ⅱ歴代誌22:11)は、滅ぼされる運命にあった王の息子たちの叔母であったが、勇敢にも王宮に侵入し、殺されようとしていた息

子たちの中からヨアシュという少年をさらった。アタルヤは王家の血筋を絶とうとしたが、主はダビデとの契約のゆえにヨアシュを守られた。彼女が試みたことの長期的な結果は想像を絶するものである。これは、王家のメシアの血筋を断ち切ろうとする悪魔的な試みであった。ヨアシュは乳母とともに、寝具をしまう小部屋に隠された。彼はそこに六年間留まり、その間、アタルヤが国を治めた。

11:4~11 七年目に、大祭司エホヤダはカリ人(英訳「護衛隊」)と近衛兵の百人隊長を呼び、彼らに王位継承者を示し、アタルヤを倒してヨアシュを王に擁立する契約を彼らと結んだ。ウィリアムズ(George Williams)はこう解説している。

王位奪還を実現するためにエホヤダがとった手順(4~11節)は、次のように言い換えることができる。エホヤダは王の親衛隊の将校たちを呼び寄せた。一つの連隊は王宮を包囲し、残りの二隊は神殿の前を行進するように命じられた。兵士たちの間を無理に通り返けようとする者はみな死刑にされることになっていた。その朝交代した衛兵(9節)は兵舎に戻ってはならず、交代した衛兵と合流して、王を守る主力部隊に加わることにしていた。^{*(14)}

11:12 その後、ヨアシュは民の前に連れて来られた。彼の頭には冠が置かれ、あかし(律法)の写しが手渡された。民からは、「王様万歳!」という叫び声が上がった。

11:13~16 アタルヤは騒ぎに気づき、神殿の庭に駆け寄り、その様子を見て、「謀反だ、謀反だ」と叫んだ。エホヤダは彼女が神殿の周辺で殺されるのを望まなかった

ので、彼女を兵士たちの列の間から外に連れ出し、馬の出入り口で殺すように命じた。

11:17～21 その後、主と、新しい王および民との間で、彼らが主に仕えるという契約が結ばれた。この誓いの証しとして、民はアタルヤが支援していたバアルの神殿を打ち壊し、バアルの祭司マタンを殺した。王は行列に伴われて王宮に向かった。その地の人々は喜び、アタルヤが処刑された後、町は平穏となった。

J. ユダの王ヨアシュ (12章)

ユダの王アハズヤの子ヨアシュは、四十年間（紀元前835～796年）在位した。

12:1～5 ホイットコム (John C. Whitcomb) はヨアシュの治世について次のように述べている。

ヨアシュの40年の治世は、彼の霊的な後見人であったエホヤダの死の前と後の二つの時期に分けられる。「ヨアシュは、祭司エホヤダが彼を教えた間、いつも目の目にかなうことを行った」という記述は不吉である。この大祭司の道徳的、霊的勇気がなければ、ヨアシュはアブラムのいない口のように不安定だった。そのため、神はエホヤダの寿命を130年という異例の長さに延ばされ、ユダの民にあわれみを示された（Ⅱ歴代誌24:15）。モーセの父アムラムが137歳で亡くなって以来（出エジプト記6:20）、エホヤダはそれまでの千年間の記録に残る誰よりも長生きしたのである。^{*(15)}

概して、ヨアシュの治世は称賛に値するものであった。しかし、彼は民が高き所で礼拝するのを止めることはできなかった。彼の大きな貢献は、神殿の修復に着手した

ことだった。これを実行するために、彼は祭司たちに、主の宮を修復する目的で一定の資金を取っておくようにという指示を出した。ウィリアムズ (George Williams) によれば、それは次の通りである。

- (1) 会計を通過したすべての人のお金、すなわち、出エジプト記30:12の人口調査税
- (2) すべての人に課されるお金、すなわち、レビ記27章の賦課金
- (3) 人が持参したいと望むすべてのお金、すなわち、レビ記に規定されている通常の自由意志によるささげ物^{*(16)}

12:6～16 ヨアシュ王の治世二十三年になっても一向に修理が行われなかったので、王はエホヤダと他の祭司たちを呼び、資金を集めて神殿を修理する新しい計画を発表した。祭司たちはもはや資金を直接集めることも、神殿の修理を監督することも必要なくなった（7節）。その代わりに、神殿修復のための資金を受け取るため、ふたに穴の開いた箱を祭壇の右側に置くことにしたのである。王の書記と大祭司は、その資金を合計し、職人たちに分配した。監督者たちは正直であったので、資金の公開会計を求める必要はなかった。13節は、Ⅱ歴代誌24:14と矛盾しているように見えるが、13節は、神殿の修復中にこれらの資金が神殿の器具の購入に使われなかったという意味であるのに対し、Ⅱ歴代誌12:14は、神殿の工事が完了した後、余剰資金がこの目的に使われたことを意味している。神のことば（レビ記5:16、民数記5:8,9）に従って、罪のきよめのささげ物の金は、引き続き祭司たちのものとなった。

12:17, 18 この頃、アラムの王ハザエルはガテを攻め取り、エルサレムに進軍した。ヨアシュは、ユダの首都を攻撃するのを思いとどまらせるために、神殿と王宮

から聖なる物品を彼に与えた。

12:19～21 エホヤダの死後、ユダの首長たちは王の心を偶像礼拝に向かわせた。大祭司の息子（あるいは孫）であるゼカリヤが民をヤハウエ礼拝に立ち返らせようとすると、ヨアシュ王は彼を石打ちの刑に処すよう命じた（Ⅱ歴代誌24章）。

ヨアシュの家来たちは陰謀を企て、ベテ・ミロでヨアシュを打ち殺した。これはゼカリヤ殺害に対する神のさばきであった。

イエスは、律法学者たちを非難されたとき、ゼカリヤ（ゼカリヤ）の死に言及された（ルカ11:51）。イエスは、アベルの血からゼカリヤ（ゼカリヤ）の血に至るまで、すべての預言者の血（の責任）がその世代に問われると言われた。こうしてイエスは、創世記のアベルの血から、ヘブル語聖書の最後の書である歴代誌第二のゼカリヤに至るまで、旧約時代のすべての殉教者の血をここに含められたのである。（ヘブル語聖書には、私たちの旧約聖書と同じ書物が収められているが、その順序が異なる。）

エホヤダは、王国と神殿に仕えるために献身した敬虔な人物であった。その見返りとして彼は二つの祝福を受けた。息子のゼカリヤが彼の後を継いだこと、そしてユダの王たちとともに葬られたことである。一方、ヨアシュはエホヤダの死後、悪化の一途をたどった。彼はかつて自分が修繕した神殿を略奪し、アラム人を買収するために王家の宝物を奪った。彼はゼカリヤを殺し、神のさばきを受けて死んだので、王たちの墓には葬られなかった。神の国を妨害することにならないように敬虔さを保つことは極めて重要である。エホヤダは輝く模範であり、ヨアシュは厳粛な警告である。

K. イスラエルの王エホアハズ(13:1～9)

エフーの子エホアハズは、十七年間（紀

元前814/13～798年）イスラエルの王であった。

エホアハズはヤロブアムに倣って、ヤハウエとアシェラを混合した礼拝を行った（6節）。神はアラム人をイスラエルに送り、彼を罰せられた。彼らはエホアハズの軍勢を、わずか騎兵五十、戦車十、歩兵一万にまで減らした。エホアハズが主に嘆願すると、主は一人の救う者を起こし、イスラエルをアラム人の手から救われた。その救う者とは、エホアハズの治世の末期にアラムをますます苦しみ、イスラエルを攻める余裕をほとんど与えなかったアッシリアの王アダド・ニラリ三世だった可能性がある。一部の注解者は、エリシャがその救い主だったのではないかと考えている。また、5節はヨアシュ（25節）かヤロブアム二世（14:26, 27）を指していると考えられる。23節は、神がエホアハズの祈りに答えられた理由を説明している。それは、アブラハム、イサク、ヤコブとの契約のゆえであった。

5節と6節は挿入部分であることに注意しよう。この挿入は恵みである。それから1世紀も経たないうちに、イスラエルはヤロブアムの罪に固執したため、約束の地から一掃されることになる。この国に救う者を与えることによって、主は、さばきの最後の一撃が下る前に、彼らを破滅への道から立ち返らせようとされた。しかし、彼らはヤロブアムの家の罪から離れず、むしろその罪の中を歩み続けた。

L. イスラエルの王ヨアシュ(13:10～13)

エホアハズの子ヨアシュは、十六年間（紀元前798～782/81年、Ⅱ列王記13:10～14:16）イスラエルの王であった。

13:10～13 このヨアシュ王は、この時治めていた同名のユダ王とは区別されな

ければならない。このヨアシュの治世は、ネバテの子ヤロブアムの治世に倣った邪悪なものであった。彼は王となったが、主の目に悪であることを行い、先祖たちとともに眠った。ユダのアマツヤとのやりとりは14:8～16に記録されている。

M. エリシャの働きの終焉 (13:14～25)

13:14～19 14～25節は、ヨアシュの治世に起こったエリシャの預言と死について述べている。預言者エリシャが死にかかっていたとき、ヨアシュは彼を訪ね、「わが父、わが父。イスラエルの戦車と騎兵たち」と言って泣いた。彼は、エリシャのようなスケールの大きい人物こそ、イスラエルの民にとって最も信頼ができ、最も優れた防衛だと言いたかったのである。エリシャは、エリヤの死を嘆くときにも同じことばを使った (2:12)。彼は、預言者の死が王国にとって大きな損失となることを悟っていた。エリシャは病床からヨアシュに、弓と矢を取って、東に向かって矢を放ち、残りの矢で地面を打て、と命じた。東に向かって放たれた矢は、ヨルダン川の東のイスラエルの地を占領していたアラム人に対する勝利を意味していた。ヨアシュは三回しか地面を打たなかったもので、アラムを打ち倒すのもわずかに三回となる。もし彼が五回も六回も打っていたら、アラムの脅威は取り除かれていたことだろう。しかし、彼には忍耐と辛抱が欠けていた。敵に対する勝利は、ひとえに服従の度合いにかかっている。ヨアシュは自分のしていることの意義を理解していたに違いない。そうでなければ、責任を問われることはなかったであろう。エリシャの死は、北王国に不幸な結果を招くことになった。

13:20, 21 毎年春になると、モアブの略奪隊がこの地に侵入していた。ある日、

イスラエルの男たちが、死体を埋葬するために運び出していたところ、このような略奪隊の一団が近づいて来るのが見えた。彼らは急いでエリシャの墓を開け、死体を投げ入れた。その人はエリシャの骨に触れるやいなや、生き返り、自分の足で立ち上がった。

13:22～25 聖書は、紀元前841年 (9章) のエフーの油注ぎから紀元前795年頃のエリシャの死までの、エリシャの最後の45年間の働きについては何も語っていない。(臨終の床からの) 彼の最後の預言は、勝利の預言であった (17節)。彼の最後の奇跡 (死後長く経ってからなされた。21節) は、イスラエルとその王に対する彼のメッセージと奉仕が本物であったことの証明であった。エリシャの預言の成就として、ヨアシュはハザエルがイスラエルから奪った町々を奪還した。これは、三度の連続した勝利によって達成された。

N. ユダの王アマツヤ (14:1～20)

ヨアシュの子アマツヤは二十九年間 (紀元前796～767年、Ⅱ歴代誌25章) ユダの王であった。

14:1～7 アマツヤの統治は良いものではあったが、ダビデの統治のような卓越性には欠けていた。むしろ、高き所を廃止できなかったという点で、父 (ヨアシュ) の統治に似ていた。アマツヤが最初にしたことの一つは、父を殺害した謀反人たちを殺すことだった (12:20, 21)。しかし、彼は申命記24:16に従い、彼らの子どもたちは殺さなかった。また、彼はエドムに対して見事な作戦を指揮し、その住民一万人を殺し、岩の町セラ (おそらくペトラと同じ) を占領した。残念なことに、彼はエドム人の神々を持ち帰り、それらを礼拝し始めた (Ⅱ歴代誌25:14)。

14:8~14 高慢になったアマツヤは、愚かにもイスラエルの王ヨアシュに、直接、対決しようではないか、と提案した。ヨアシュは、あざみ(ユダ)が杉(イスラエル)に「あなたの娘を私の息子の妻にしてくれないか」(大木に無礼な要求をする雑草)と言う譬え話で応えた。野の獣(イスラエル軍)はあざみ(ユダ)を踏みにじった。アマツヤはエドムに対する勝利に満足すべきであり、イスラエルを敵に回して災いを招くべきではなかった。アマツヤが聞き入れなかったため、ヨアシュはユダに攻め上り、エルサレムの城壁を壊し、財宝の一部を持ち去った。

14:15~20 この時から始まったユダとイスラエルの対立は、紀元前722年のイスラエルの滅亡まで続いた。アマツヤは陰謀から逃れるためにラキシユに逃れたが、追っ手を送られ、そこで殺された。

O. ユダの王アザルヤ(ウジヤ) (14:21, 22)

アマツヤの子アザルヤ(ウジヤと同じ)は、五十二年間(紀元前792/91~740/39年、15:1~7、Ⅱ歴代誌26章参照)ユダの王であった。イザヤ、アモス、ホセアの働きは、旧約の歴史のこの時期に始まった(イザヤ1:1、ホセア1:1、アモス1:1)。アモス書とホセア書は、イスラエルに広がっていた社会的、宗教的状況を明らかにしている。これらの預言者たちを通して、主はさばきの瀬戸際から民を引き戻そうとしながら、迫りくる災いについて絶えず警告された。アザルヤは、最初の二十四年間、父と共同統治をした。彼はアカバ湾の北にエイラトを建設した。彼の治世のより詳しい記録は15章とⅡ歴代誌26章に記されている。

P. イスラエルの王ヤロブアム二世

(14:23~29)

ヨアシュの子ヤロブアム二世は、四十一年間(紀元前793/92~753年)イスラエルの王であった。

ヤロブアムの治世の最初の十二年間は、父ヨアシュの治世と重なっている。宗教政策に関しては、この王は同名のネバテの子ヤロブアムの偶像礼拝を踏襲した。政治的には、ヨナが預言した通り、レボ・ハマテ(ガリラヤ)からアラバの海(ヨルダン川西岸)までの領土をイスラエルに回復した。この具体的な預言は聖書には記されていない。(25節は、ヨナの宣教の時期を正確に示しており、ヨナ書を研究する上で重要である。ヨナの説教によりニネベが悔い改めてから、わずか40年から70年後に、アッシリアがイスラエルを捕囚にしたのは衝撃的である!) ヤロブアム二世は、13:5で言及されている救出者かもしれない(14:26, 27参照)。26節と27節は、主の優しい愛と忍耐について深い洞察を与えてくれる。27節は文脈の中で理解されなければならない。イスラエル、そして後のユダは、その後一時的に歴史から姿を消したが、ユダヤ人の父祖たちに対する神の約束によれば、民族は再び集められ、その地に再び植えられることになる。

Q. ユダの王アザルヤ(ウジヤ)(続き) (15:1~7)

全体的に見て、アザルヤは名君であった。彼の失敗の一部は、ユダで高き所を存続させたことである。祭司たちの反対を押し切って、神殿で香を献げて祭司の職務に割り込んだため、彼はツアラアトに冒され、死ぬ日まで隔離された家に住まなければならなかった(Ⅱ歴代誌26:16~21参照)。アモスの働きはこの時期に終わりを告げた。

R. イスラエルの王ゼカリヤ (15:8~12)

ヤロブアム二世の子ゼカリヤは、六か月の間イスラエルを治めた(紀元前753~752年)。彼は前任者と同様に、ヤロブアム一世の先例に倣い、ダンとベテルで金の子牛を礼拝した。六か月という短い治世の後、彼はシャルムに暗殺された。RSV(改訂標準訳)は七十人訳に従い、アハズヤがエフーに殺された場所(9:27)に近いイズレエルの平原の町、イブレアムで殺されたと記している。ゼカリヤの死はエフー王朝の終焉を意味し、彼は、神がエフーにイスラエルの王位に就かせると約束された四代目にあたる(12節、10:30参照)。

S. イスラエルの王シャルム(15:13~15)

ヤベシュの子シャルムは、一か月間(紀元前752年)イスラエルの王であった。この王に関する記録はほとんど残っていない。彼の統治は十部族の第六王朝における唯一のものであった。シャルムは暗殺によって王位を奪ったが、一か月後に同じ方法で王位を失った。メナヘムに暗殺されたのである。

T. イスラエルの王メナヘム(15:16~22)

ガディの子メナヘムは十年間(紀元前752~742/41年)イスラエルの王であった。

メナヘムはティフサフの略奪を開始した。ティフサフとはユーフラテス川沿いのティフサフではなく、ティルツア近郊のティフサフである。町が降伏を拒否すると、メナヘムは妊婦を含む住民を残酷な方法で殺した。

この頃、アラム王国は衰退し、アッシリアがイスラエルの最大の敵となっていた。メナヘムの治世中、アッシリアの王プルがイスラエルに侵攻した。メナヘムは彼に銀千タラントを与えた。プルをなだめ、プル

の支援を得て自分の不安定な権力を確かなものにするためであった。イスラエルの王(メナヘム)は、すべての有力者にそれぞれ銀五十シェケルを供出させることで、この資金を調達した(20節)。当時のアッシリアにおける奴隷の値段は銀五十シェケルであった。メナヘムは、自ら進んでアッシリアのくびぎを受け入れた。そうすることが自分の利益になると考えたからである。プルは一般的にティグラト・ピレセル三世(29節)と同一人物と考えられている。

U. イスラエルの王ベカフヤ (15:23~26)

メナヘムの子ベカフヤは、イスラエルの王として二年間(紀元前742/41~740/39年)在位した。この王について私たちが知っているのは、その治世が短く邪悪であったことと、サマリアでベカと五十人のギルアデ人によって殺されたことだけである。彼の治世でイスラエル第七王朝は幕を閉じた。イスラエルの後代の王の中で、武力で王位を奪わなかったのは彼だけであったが、家臣の一人がその王位を武力で奪うまでそれほど時間はかからなかった。

V. イスラエルの王ベカ (15:27~31)

レマルヤの子ベカは、二十年間(紀元前752~732/31年)イスラエルの王であった。

ベカは、彼が殺したベカフヤの侍従であった。他の聖書箇所から、彼はユダを侵略し、ユダに対してアラムの援助を求めたことがわかる。しかし、ユダの王アハズは、アッシリアに助けを求めた。アッシリアの王はまずアラムの王レツインを殺し、次にイスラエルを攻撃した。彼はヨルダン川東岸の二部族半とガリラヤの領土を征服し、住民を捕らえ移した。これがアッシリア捕囚の第一段階である。ベカの侍従としての

権力は、メナヘムの統治期間（十年）とペカフヤの統治期間（二年）と重なっていた。アッシリアの支援を受けたホセアは、ペカを謀殺し、イスラエルの王位を掌握した。こうしてイスラエルの第八王朝は終焉を迎えた。

W. ユダの王ヨタム（15:32～38）

ウジヤの子ヨタムは、四年間のウジヤとの共同統治を含む合計二十年間、ユダの王であった（紀元前750～732/31年）。

ヨタムの治世の前半は父ウジヤとの共同統治で、最後の部分はアハズとの共同統治であった。彼の正式な統治期間は十六年であった。ヨタムは、**高き所は取り除**かなかったとはいえ、ユダの王の中では優れた王の一人であった。**彼は主の宮の上の門を建て、ユダの地で他の建設事業を支援した。**彼の死の直前、**レツィンとペカ**は共同でユダへの攻撃を開始した。預言者ミカはヨタムの治世中に宣教を始めた。

Ⅱ歴代誌27:6には、ヨタムを称える次のような論評がある。「ヨタムは勢力を増し加えた。彼は自分の神、主の前に、自分の道を整えたからである。」これは、ヤロブアムに倣って自分の道を定めたイスラエルの王たちとはまったく対照的である。

ヨセフスもまた、ヨタムの敬虔さに言及している。^{*(17)}

X. ユダの王アハズ（16章）

ヨタムの子アハズは、二十年間（紀元前735～716/15年、Ⅱ歴代誌28章参照）ユダの王であった。

16:1～4 アハズはおそらく十二間、父と共同統治した。アハズという名はエホアハズの短縮形である。アッシリアの碑文では、この王はエホアハズの名で知られている。接頭辞「エホ」はヤハウエを表すが、

アハズが背教者であったため、聖霊が意図的に省略したのは間違いない。彼はイスラエルの王たちに倣って偶像礼拝を行い、**自分の子どもたちに火の中を通らせること**さえした。モレクの礼拝では、子どもたちを真鍮の偶像の赤く熱した腕の間に通すことで、悪からの清めとモレク神への献身を意味していたと考えられている。時には、子どもたちは実際に殺され、焼かれることもあった（エレミヤ7:31、エゼキエル16:21）。

16:5～9 アッシリアに対抗してユダを味方につけ、傀儡王をユダの王位に就かせるため（イザヤ7:6）、アラムとイスラエルは連合してエルサレムを攻撃した。同時にアラムはエイラトを攻略し、そこにアラム人の植民地を築いた。窮地に陥ったアハズは、主の宮と王宮から銀と金の財宝を携えてアッシリアに助けを求めた。ティグラト・ピレセルはこれに応じ、**ダマスコ**を占領し、アラムの王を殺害した。これはイザヤの預言の成就であった。しかし、神は後にアッシリア人をユダの呪いとされる（イザヤ7:17～25）。

16:10～16 ティグラト・ピレセルを訪ねてダマスコに行ったアハズは、異教の祭壇を見て、エルサレムに同じような祭壇を建造することに決めた。そこで、祭司ウリヤにその模型を送り、ウリヤは**アハズ王が帰って来るまでに、その祭壇を建造させた**。アハズはその新しい祭壇に様々な供え物（罪のきよめのささげ物と代償のささげ物を除く）を献げ、ウリヤに命じて、以後、青銅の祭壇の代わりにそれを使うようにさせた。15節の最後の部分は、アハズが青銅の祭壇を占いのために使うつもりだったことを示唆しているようである。しかし、「青銅の祭壇については、それをどうするかは、私が尋ねる（考える）ことである」^{*(18)}という意味にも解釈できる。祭司ウリヤは、

アハズ王の冒瀆行為に対し、恐れずに戒める代わりに、罪深くも従った。ウリヤはイザヤ8:2で好意的に言及されているが、それはエルサレム攻撃以前のことである。彼がアハズの祭壇建造の要求に対して、おとなしく従う、という邪悪な選択をしたのは後のことである。

16:17～20 アハズは神殿区域から、特定の調度品を運び出した。おそらく、アッシリアの王がエルサレムを占領した場合にそれらを奪い取るかもしれないと恐れたのであろう。貢ぎ物としてそれらを使った、という説もある。Ⅱ歴代誌28:24は、アハズがその治世の終わりに神殿を完全に閉鎖したことを伝えている。アハズは彼以前の背教した王たちと同様に、王家の墓には葬られず（Ⅱ歴代誌28:27）、**ダビデの町**に父祖たちとともに葬られた。

Y. イスラエルの王ホセア（17:1～6）

エラの子ホセアはイスラエルの王として九年間（紀元前732/31～723/22年）在位した。

17:1, 2 私たちはついにイスラエルの最後の王、そしてイスラエルの第九王朝という最後の王朝のところまで来た。ホセアはペカを殺害し（15:30参照）、権力を握った。おそらく、彼がアッシリアのイスラエル侵攻に抵抗できなかったためであろう。ホセアは先代の王たちほど邪悪ではなかったが、国はすでに末期状態にあり、彼の改革も遅きに失した。

17:3～6 アッシリアの王シャルマネセルはサマリアに進軍し、ホセアに貢ぎ物を献上させた。ホセアはエジプトの王と共謀してアッシリアに抵抗し、貢納金の支払いを拒否した。そのため、アッシリアの王（シャルマネセル、またはその後継者サルゴン）はホセアを投獄し、サマリアを三年

間包囲し、一部の住民を捕らえ移した。ホセアのその後の消息は不明である。彼はただアッシリアの牢獄に姿を消した、とあるだけで、サマリアの最後の日々は王がいない状態になった。イスラエルの最終的な滅亡は紀元前723年か722年に起こった。

Z. 北王国の滅亡（17:7～41）

17:7～23 以下の節は、なぜ神がイスラエルに不満をお持ちになり、この国が征服され、捕囚となるのを許されたのか、という根本的な理由を説明している。彼らはほかの神々を恐れ、異邦の民の風習にしたがって歩み、至る所に高き所や聖柱、木の像（アシェラ像）を建て、偶像礼拝を盛んにした。彼らは神の預言者の言うことを聞こうとせず、頑固になり、自分たちの神である主のことばを信じようとしなかった。彼らは神の戒めに背を向け、隣国の人造宗教を受け入れたのである。彼らは悪を追い求めることに熱心で、息子や娘たちを偽りの神々に献げた。

17:24, 25 アッシリアの王は、イスラエルの北の十部族をメソポタミアとメディアに連れ去った。彼はまた、征服した他の五つの国の人々を連れて来て、イスラエルの地に住ませた。以前、イスラエルが主に従っていたときには、主はヨシュアの手によって異教の国々を追ひ払い、民をカナンの地に住ませられたが、彼らがヤハウエに耳を傾けなくなると、主は彼らを追ひ出し、アッシリアの王の手によって異教の国々を連れ戻されたのである。これらの異教徒たちは自分たちの異教の神々を礼拝し、特に〈インマヌエルの地〉に住むようになってからは、神の怒りを招くことになった。主の怒りは、彼らの間に一頭の獅子を送り込まれたことによって明らかにされ、獅子はその地を歩き回り、民の何人かを殺した。

17:26～28 獅子による災いは、イスラエルの神についての慣わしを知らない異国人の存在が原因であると、アッシリアの王に報告した人がいた。そこで、アッシリアの王は、異教徒の移住者たちにどのように主を恐れるべきかを教えるために、イスラエルの祭司を捕囚から帰還させるように命じた。戻って来た祭司は、ヤハウェの真の祭司ではなく、偶像を崇拜するイスラエルの祭司の一人であったようである。彼は子牛崇拜の中心地であるベテル（子牛はもうそこにはなかったが）に行き、新しい住民たちにヤロブアムの墮落した宗教を教えた。その宗教にはヤハウェに対する礼拝も含まれていたが、決してそれだけに限定されたものではなかった。これらの外国人入植者は地元のイスラエル人と結婚し、サマリア人として知られる、独自の宗教と習慣を持つ混血民族を生み出した。

17:29～34前半 以下の節は、この地に入植した外国人について述べているようである。それぞれの民族には独自の神々があり、自分の民の中から祭司を任命した。彼らはまた、ヤハウェの礼拝を取り入れたが、その結果、混合宗教が生まれ、それは純然たる異教よりも悪いものとなった。^{*}
(19)

17:34後半～40 34節後半（「彼らは主を恐れることはなく」）から40節までの部分は、その地に残ったイスラエル人について述べているようである。彼らは偶像礼拝に対する主の再三の警告を気にも留めず、金の子牛を礼拝し続けた。

17:41 これは、その地に定住した外国人入植者たちへの再度の言及である。彼らはイスラエルよりも罪が軽いように見える。彼らはわずかな光の中で、曲がりなりにも主を恐れていた。しかし、十部族は、彼らが持っていたすべての光にもかかわらず、

主を恐れなかった（34節後半）。

私たちが知る限り、十部族は二度とその地に戻っては来なかった。^{*(20)} 彼らは世界中に散らばっている。おそらく、エチオピアの黒人ファラシャ・ユダヤ人、開封府の中国系ユダヤ人、インドのコーチン・ユダヤ人も含まれるであろう。彼らのアイデンティティは神から隠されてはいない。神は将来彼らをイスラエルに連れ戻されるであろう。

預言者ホセアの働きは、おそらくこの時期、つまりサマリアの陥落とイスラエルの捕囚とともに終わりを告げた。

II. ユダ王国から捕囚まで（18～25章）

A. ヒゼキヤ王（18～20章）

アハズの子ヒゼキヤは二十九年間（紀元前716/15～687/86年、II歴代誌29～32章、イザヤ書36～39章参照）ユダの王であった。それ以前にも、紀元前729/28年から716/15年まで、アハズと共同統治をしていたと考えられている。

1. ヒゼキヤの正義の統治（18:1～8）

18:1～6 聖書では、ソロモンの時代以降のどの王よりもヒゼキヤに多くの紙面が割かれている。ヒゼキヤが神への信仰を通して得た霊的、政治的勝利をよりよく理解するためには、II歴代誌29～32章とイザヤ書36～39章の並行する記述を読む必要がある。ヒゼキヤが権力を握った時、ユダは事実上アッシリアの属国であった。彼の治世は大改革の時代であった。彼はあらゆる偶像礼拝を撲滅する、という運動を展開し、高き所や民数記21章の青銅の蛇さえも破壊した（イスラエルの子らがそれに香を焚いたため）。彼はそれをネフシュタンと呼

んだ。文字通りには「青銅でできた物」という意味である（NKJV脚注）。主なる神への信頼という点で、ヒゼキヤはユダの王の中で最も傑出した人物であった。ヨシヤは、悪を行う者を一人残らず国外追放する、という点で、最も傑出した王であった（23:24, 25）。

18:7, 8 最終的にヒゼキヤはアッシリアのくびきに対して反乱を起こすが、それは見張りのやぐらのある田舎から城壁のある町（人口が密集し、防備の整った場所）に至るまで、ペリシテ人を国中から追い払うという軍事的成功があったためであろう。

2. サマリヤの占領（18:9～12）

この段落はアッシリア人によるサマリヤの占領をまとめたものであり、おそらくこの時ヒゼキヤが直面していた脅威の深刻さを強調するために、ここに挿入されたと考えられる。9節と10節の時期が一見矛盾しているのは、ユダヤ暦では一年の一部でも一年として数えられるためである。サマリヤの包囲はヒゼキヤ王の第四年の後半に始まり、第五年に続き、第六年の前半に終了した。従って「三年間」となる。これは前述した共同統治期間中の紀元前725年から722年にあたる。

3. センナケリブによるユダへの第一次侵攻（18:13～16）

この頃、アッシリアは独自の問題を抱えていた。サルゴン二世が死に、バビロンが反乱を起こしていたのである。サルゴンの後継者センナケリブがパレスチナとフェニキアに進軍できたのは、紀元前701年になってからのことであった。センナケリブは自身の年代記の中で、ユダから四十六の要塞都市と二十万人の捕虜を奪ったと主張している。ヒゼキヤは、反乱を起こしたの

は間違いだった、と認める卑屈なメッセージを彼に送った。彼はエルサレムへの攻撃を防ぐため、観念したかのように銀三百タラントと金三十タラント（莫大な額）を支払った。当時、センナケリブはエルサレム南西部のラキシュにいて、エジプトに向かう途中であった。

4. センナケリブによるユダへの第二次侵攻（18:17～19:34）

18:17～19 その後、ヒゼキヤはエルサレムの防備を強化し始めた（Ⅱ歴代誌32:5）。後日、アッシリア王が軍の高官をエルサレムに派遣し、無条件降伏を迫ったのは、おそらくこの知らせを受けたのが原因だったのだろう。三人のユダヤ人の高官がアッシリアの特使に会ってその要求を聞こうと出かけた。NIVはこれらの用語を「最高司令官」、「最高責任者」、「野戦指揮官」と表記している。NKJVはこれらの役人たちを、タルタン、ラブ・サリス、ラブ・シヤケという本来の軍の称号で呼んでいる。これらは固有名詞ではない。^{*(21)}

18:20～25 ラブ・シヤケは彼らに向かってヘブル語（直訳「ユダヤ語」）で侮蔑的なことばを投げかけた。まず、ラブ・シヤケはヒゼキヤがエルサレムの要塞に頼っていることを嘲った。次に、ヒゼキヤがアッシリアに対してエジプトに助けを求めたことを暴露し、エジプトを傷んだ葦と嘲笑した（21節）。第三に、ヒゼキヤがすべての高き所と祭壇を破壊したので、ユダは主に頼ることができない、と言った。ラブ・シヤケは、これらが異教の祭殿であって、主が礼拝される場所ではないことを知らなかったのである。次に彼は、ヒゼキヤが乗り手をそろえることができるのなら、二千頭の馬を与えよう、という賭けを持ちかけた。ユダにはそれだけの騎兵はいない、

だから戦車と騎兵はエジプトに頼らざるを得ないのだ、と嘲ったのである。最後に、ラブ・シャケは、ユダを滅ぼすために主がアッシリアを遣わされたのである、と主張した。

18:26, 27 ユダの高官たちはすかさずラブ・シャケに、これ以上の話し合いはヘブル語ではなく外交の言語であるアラム語で行うよう提案した。彼らは内心、そのような横柄な物言いが、**城壁の上にいる民**の士気を挫くのではないかと恐れたのである。しかしラブ・シャケは、人々に飢餓と破滅が迫っていることを聞かせ、理解させたいのだ、と反論した。

18:28~37 ラブ・シャケは民に直接語りかけ、ヒゼキヤにごまかされて主に救いを期待してはならないと警告した。もし降伏するなら、一時的にエルサレムに住む特権が与えられる。そして、アッシリアの王がエジプトの遠征から戻ったら、「**おまえたちの国と同じような国**」であるアッシリアに連れて行く。他のどの部族の神々もアッシリアから諸国民を救出することができなかったのに、どうしておまえたちの神がそうしてくれると期待できるだろうか。城壁の上にいる人々は沈黙を守っていたが、三人のユダヤの高官はすっかり意気消沈してヒゼキヤのもとに戻った。

19:1~7 ヒゼキヤはラブ・シャケの嘲りを聞いて非常に動揺した。彼は**預言者イザヤ**に使者を遣わし、ユダは最も力が必要な時に無力であると告げた。さらに、ユダとエルサレムの**残りの者のために**祈るようイザヤに頼んだ。イザヤはヒゼキヤに、アッシリアの王を恐れる必要はないと伝えた。神が彼に恐れを与え、**うわさ**を聞かせて自分の国に帰らせ、そこで彼は殺されるだろう、と。

19:8~13 ラブ・シャケがラキシユに

戻ると、センナケリブは攻撃の矛先を隣の要塞**リブナ**に移していた。センナケリブは、上エジプト（つまり南エジプト）のエチオピアの王**ティルハカ**が自分を攻撃するために進軍していることを聞いた。彼は直ちに神を冒瀆する書簡を送ってエルサレムを脅し、速やかに降伏させようとした。一部の学者は、7節で言及されているうわさは9節で説明されていると考えている。すなわち、エジプト軍が近づいているといううわさである。また、それはバビロンが反乱を起こしているという報告であったと言う学者もいる。

19:14~20 ヒゼキヤは賢明にもその書簡を神殿に持って行き、主の前に広げた。彼の祈りは、ヤハウェに対する彼の深い信頼の表明であった。それに応えて、神はイザヤを通してヒゼキヤに二重の答えを送られた。

19:21~28 21~28節はセンナケリブに宛てられたものである。29~34節はヒゼキヤに宛てられている。イザヤの預言はアッシリアに対する嘲りの歌である。それは、処女であるシオンの娘エルサレムが、アッシリアの脅しを笑っている様子を描いている。また、センナケリブが神の聖なる御名を冒瀆し、ユダ（レバノン）を侵略し、その支配者と有力者（**そびえる杉の木ともみの木**）を滅ぼし、シオンの山の宮殿（英訳は「宿場と森」。※「宮殿」を揶揄か）に入ると豪語したことを非難している。センナケリブはまた、エジプトに対する勝利を含め、他の外国の征服についても自慢した。彼は、自分のしたことはすべて、神がすでに決めておられたことであることに気づいていなかった。神は彼を知り尽くしておられ、その尊大な驕りを打ち砕き、壊滅した軍隊の生き残りをアッシリアに送り返そうとしておられた。

19:29～34 それから、主はヒゼキヤに対し、アッシリア人がエルサレムを征服することはない、というしるしを与えられた。ユダの人々は二年間、アッシリアの侵攻によって通常の作物を育てることができず、自生するものを食べることになる。そして三年目には攻撃の脅威から十分に安全になり、通常の活動ができるようになる。エルサレムの人々は生き残るだけでなく、アッシリアの王は都に入ることも、矢を放つことも許されない。

5. センナケリブの敗北と死(19:35～37)

その夜、主の使い^{* (22)}がアッシリアの陣営を訪れ、兵士十八万五千人を打ち殺した。人々が翌朝早く起きて見ると、アッシリア人はみな死体となっていた。

センナケリブは首都ニネベに戻り、二十年後(紀元前681年)にそこで殺された。(結果的に彼はヒゼキヤより五年長生きした。)イザヤの預言(7節)は、センナケリブの二人の息子たちが彼を打ち殺し、三人目の息子であるエサル・ハドンが彼に代わって統治したときに成就した。

6. ヒゼキヤの病氣と回復(20:1～11)

20:1～7 20章の出来事は、一般的にはそれ以前、おそらく18章の前半、センナケリブの最初の侵攻の時に起こったと考えられている(6節を参照)。ヒゼキヤが重病になったとき、イザヤは死が差し迫っているので自分の家を整理するように、と告げた。王は熱心に回復を祈り、さらに十五年の命を与えられた。ホイットコム(John C. Whitcomb)は次のようにコメントしている。

神が私にあと十五年しか生きられない、と告げられたとしたら、私は残りの人生

をどうするだろうか。ヒゼキヤはその年月をどう過ごしただろうか。聖書には何も書かれていない。彼の治世で記録されている最後の出来事は、紀元前701年に、センナケリブの軍隊が全滅(これはおそらくヒゼキヤが病氣になってから一年も経たないうちに起こった)したことだからである。神が彼の寿命を延ばされた理由の一つは、彼に王位継承者の男子がいなかったからだという説がある(Ⅱ列王記21:1には、マナセが王位に就いたとき、彼はまだ十二歳であったと記されている)。しかし、おそらくマナセは父と10年近く共同統治をしたものと思われる。そうでなければ、バビロン捕囚の確定した日付から遡って、ユダの歴史のこの時期に彼の五十五年間の治世を当てはめることは不可能だからである。^{*(23)}

20:8～11 ヒゼキヤが癒やされ、礼拝のために神殿に戻ることにしるしとして、神はアハズの日時計(または「階段」、NASB訳)の影を十度戻された。(時系列的には、7節が8～11節に続く。)

Ⅱ歴代誌32:31から、これは超自然的な出来事であり、その知らせはバビロンにまで届いたと結論づけられる。バビロニア人は天体を崇拝していたので、どんな異変にも必ず気づくはずだった。この偉大な奇跡が起こったのはヒゼキヤのためだといううわさが瞬く間に広まった。

7. ヒゼキヤの愚かな慢心(20:12～21)

20:12～18 バビロンの王メロダク・バルアダンは、ヒゼキヤの回復を祝福する挨拶を送った。彼の真の目的は、アッシリアに対抗してユダとの絆を強めることにあったのは間違いない。ヒゼキヤは愚かに

も、バビロンからの使節団に彼の財宝のすべてを見せてしまった。(Ⅱ歴代誌32:31から、神はこの状況を通して、ヒゼキヤの心の内を知るために彼を試しておられたことがわかる。その答えは「虚栄」である!) イザヤは彼を叱責し、ユダがバビロンに捕囚され、ヒゼキヤ自身の息子の何人かがバビロン王の宮殿で宦官(NASBは「役人」となると預言した。これらの財宝はバビロンに行き着く前に、その多くはまずアッシリアに渡った。これはヒゼキヤの回復(18:13~16)の直後、アッシリアがパレスチナを侵略した際、ヒゼキヤがセンナケリブに支払った貢物の一部となる。

20:19 ヒゼキヤは神の命令に服し、その寛大なお取り扱いに感謝した。「彼は言った、『私の時代が平和で安全であるのなら、それで良いではないか』」(RSV)。

20:20, 21 ヒゼキヤは貯水池と水道を造り、それによってエルサレムの外にある井戸から都に水を引いた。このような隠れた水源は、町が包囲されたときには特に貴重であったことだろう。ギホンの泉からシロアムの池まで、ヒゼキヤのトンネルを歩いて通ることは今でも可能である。1880年、ヒゼキヤの労働者たちによって作られた古代セム語の、フォークのように先端の尖った文字が刻まれた碑文が発見された。それは、当時旧オスマン帝国の一部としてパレスチナを支配していたトルコの博物館に移された。^{* (24)}

(預言者)ミカの働きが終わったのはこの時期のことである。

B. マナセ王 (21:1~18)

ヒゼキヤの子マナセは五十五年間(紀元前697/96~643/42年、Ⅱ歴代誌33:1~20参照)ユダの王であった。

21:1~9 マナセの治世は、ユダのすべ

ての王の中で最も長く、最も邪悪なものであった。彼の記録に残る汚点には次のようなものがある。バアル、アシェラ、天の万象の崇拝を再開したこと、天の万象を崇拝するために祭壇を築いて神殿を汚したこと、自分の子どもに火の中を通らせたこと、ト占をし、霊媒や口寄せに相談したこと、アシェラ像(おそらく卑猥な性的シンボル)を宮に安置したことである。神の霊は、神殿に関連して神の民になされた約束を繰り返し述べることによって、この行為の深刻さを強調している(Ⅰ列王記8:29、9:3)。

21:10~15 マナセは民をアモリ人よりもひどい忌むべき行いに導いた。その結果、神はサマリアとアハブの家を罰したようにユダを罰する、と宣言された。測り縄と重り(13節)はさばきを象徴している。また、神はエルサレムを、皿をひっくり返して拭い去るように、空にされる。主の民は主をひどく怒らせたので、捕囚として連れ去られる。

21:16~18 偶像礼拝に加えて、マナセは咎のない者の血を多量に流した。外典である『イザヤの昇天』によれば、マナセは預言者イザヤをのこぎりで真っ二つにした(ヘブル11:37参照)。Ⅱ歴代誌33章から、マナセがアッシリア王(アッシュルバニパル)によってバビロンに捕虜として連行されたことがわかる。そこで獄中にいる間にマナセは悔い改めて主に立ち返った。その後、彼はエルサレムに戻り、統治を再開することを許された。これはまさに主の恵み、愛、あわれみの証拠である。マナセは自分が引き起こした損害を挽回しようとしたが、もはや手遅れだった。彼の息子も含め、民は彼の以前の例に従ったのである(Ⅱ歴代誌33:14~23)。

C. アモン王 (21:19～26)

マナセの子アモンは二年間（紀元前642～639年、Ⅱ歴代誌33:21～25参照）ユダの王であった。

アモンは偶像礼拝をし、真の神を捨てたことで悪名高い人物であった。彼の家来の何人かは陰謀を企て、二年の短い治世の後に彼を殺した。民衆は罪を犯した暗殺者を打ち殺し、息子のヨシヤを代わりに王とした。アモンもその父も、ユダの王たちの墓には葬られなかった。

D. ヨシヤ王 (22:1～23:30)

アモンの子ヨシヤは三十一年間（紀元前641～609年、Ⅱ歴代誌34～35章参照）ユダの王であった。

1. ヨシヤによる神殿の修復 (22:1～7)

ゼパニヤ（ゼパニヤ1:1）とエレミヤ（エレミヤ25:3）が預言者としての働きを始めたのはこの頃である。ハバククはヨシヤの時代の終わりごろ、その働きをしていたのかもしれない。ヨシヤの治世は、ユダ王国の最後の改革の時代であった。彼は偶像礼拝に対して断固とした行動をとり、民が主に立ち返ることを奨励した。治世の第十八年、二十六歳のとき、彼は神殿の修復計画を策定した。神殿に納められていた金は、労働力と資材のために職人たちに渡された。彼らは正直だったので、手渡された金の精算は求められなかった。

2. ヨシヤによる律法の書の回復 (22:8～20)

22:8～10 修理が行われている間に、大祭司ヒルキヤは律法の書の写し、おそらくモーセ五書全体か申命記の写しを見つけた。これはヨシヤ王のもとに届けられ、王の前で読み上げられた。

22:11～13 王は神のことばを聞き、

国がいかに神から遠く迷い出てしまったかを悟り、悔恨の思いから自分の衣を引き裂いた。そして、その罪のために神の憤りがユダの上に臨んでいるに違いないと考え、主に何うために五人の側近を遣わした。

22:14～20 側近たちは、エルサレムの第二地区、つまり市の郊外に住む女預言者フルダのもとに行った。彼らは直接エレミヤやゼパニヤのところには行かなかった。フルダはおそらくエレミヤの叔母であった（14節。エレミヤ32:7参照）。彼女は、民の墮落のゆえに神が間もなくユダに罰を下される、というヨシヤの恐れを確証した。しかし、彼女は、ヨシヤがへりくだり、悔いていたため、それがヨシヤの存命中に起こることはないと付け加えた。ヨシヤが後に戦死したという事実（23:29）は、20節と矛盾しない。「あなたは平安のうちに墓に集められる」というのは、「予告されたバビロン捕囚という破滅的な出来事が起こる前に」という意味かもしれない。あるいは、ヨシヤが神との平和のうちに死ぬという意味かもしれない（ヨシヤは確かに人と和解をして死んだわけではなかった）。

3. ヨシヤによる契約の更新 (23:1～3)

王は神殿で聖会を召集し、契約の書のことばをすべての民に朗読した。柱のそばに立って、王は律法のすべてのことばに従う契約を結んだ。民もまた主と契約を結んだ。

4. ヨシヤによる改革 (23:4～30)

23:4～9 次にヨシヤが着手した数々の改革のリストが続く。彼は偶像礼拝で使われたすべての祭具を神殿から取り除き、それらを焼き、その灰をベテルへ持って行った（そこにある祭殿を汚すため）。彼は偶像に仕える祭司たちを取り除き、おそらくは殺害した。彼は木製の像（アシェラ像）

を神殿から運び出し、それを焼き、その灰を共同墓地にまき散らした。彼は神殿の敷地内にあった神殿男娼（男色者）の儀式用の家を打ち壊した。そこでは、女たちがアシェラ像のために垂れ幕を織っていた。彼は高き所を汚した。それらが二度と使われないように冒瀆した、という意味である。彼は高き所でヤハウエにささげ物をしていた祭司たちをみなユダの町々から追い出した。神がこれらのささげ物を献げる場所として定めておられたのはエルサレムだったからである。ヨシヤはこれらの祭司が神殿でそれ以上奉仕することを禁じたが、彼らには種なしパンの分け前を与えた。

23:10~12 彼はベン・ヒノムの谷にある異教の祭殿トフェトを汚し、廃墟とした。そこはモレクに子どもをいけにえとして献げていた所である。彼は、ユダの王たちが太陽礼拝に使っていた、太陽に献納した馬を取り除き、太陽の車を火で焼いた。彼はアハズとマナセが建立した偶像礼拝の祭壇を破壊した。マナセ自身は、改心した後、これらの祭壇を取り除いたが（Ⅱ歴代誌33:15）、偶像崇拜者のアモンによって再び使用されたことは間違いない。ヨシヤはそれらが二度と使用されないようにした。

23:13, 14 彼は、ソロモンの時代から続く、オリーブ山（破壊の山）の南にあった高き所を汚れたものとした。彼は偶像礼拝の聖柱を破壊し、木製の像（アシェラ像）を切り倒し、その場所を人の骨で汚した。

23:15~18 彼は、ベテルにある祭壇を打ち壊し、高き所を焼いた。それから、近くの墓から骨を持ってきて、祭壇の跡の上でそれを焼いた。（「イスラエル人も異教徒も、死人の骨を永遠の汚れと見なした。」*⁽²⁵⁾）これらはすべて、300年以上前に神の人がヤロブアムに語った預言の成就で

あった。ヨシヤは、聖書の中で生まれる前から名前が挙げられている数少ない人物の一人である（Ⅰ列王記13:2）。彼は選ばれた器であり、ベテルの祭壇に対する無名の預言者の託宣を成就するよう定められていた。

ヨシヤ王は、ベテルの祭壇に対して証言した神の人の墓石を見て、誰もその預言者の骨を動かさないよう命じた。こうして、彼の骨はサマリアから出て来た名も無き預言者の骨とともに、そこに残されることが許された（Ⅰ列王記13:30, 31参照）。

23:19, 20 王の改革はサマリアにまで及んだ。アッシリアの力が衰えていたことが大きな理由で、王はこの地域の支配権を掌握したようだ。彼は高き所を破壊し、偶像礼拝の祭司たちを、彼らが犠牲を献げていた祭壇の上で処刑した。また、これらの場所を人の骨の灰で汚した。

23:21~23 エルサレムに戻ったヨシヤは、自分が読んだ主のことばに従って、過越の祭りを復活させた（詳細はⅡ歴代誌35:1~19を参照）。それは士師の時代以来、最も盛大な過越祭であった。それ以前にも、より盛大で華やかな過越祭はあったが、この祭りは特に主のみこころに適うものであった。聖書には、王国時代に行われた過越祭は三つしか記されていない。ソロモン（Ⅱ歴代誌8章）、ヒゼキヤ（Ⅱ歴代誌30章）、ヨシヤ統治下の三回だけである。

23:24 ヨシヤはまた、霊媒や口寄せ、占い師、その他の呪術師に伺いを立てる者たちをその地から一掃した。

23:25~27 王の改革の徹底ぶりは、ユダの王たちの間で最も際立っていた。神への信頼という点において、ヒゼキヤも同様の榮譽を得ていた（18:5, 6）。しかし、ヨシヤの善政にもかかわらず、主は民を捕囚に追いやり、エルサレムを破壊してユダ

を罰する、という計画を変えられることはなかった。

23:28～30 紀元前609年、エジプトのファラオ・ネコは、バビロンとの戦いでアッシリア人を支援するために、パレスチナの海岸に沿って北上した。さまざまな政治的理由から、ヨシヤはネコの進軍を阻止しようと決意し、その結果、メギドで致命傷を負った。彼の家来たちは彼をエルサレムに運んだが、そこで彼は息を引き取り、葬られた（Ⅱ歴代誌35:20～24参照）。ネコはユーフラテス川まで進軍したが、四年後、カルケミシュの戦いでバビロニア軍に敗れた（エレミヤ46:2）。

E. エホアハズ王 (23:31～33)

ヨシヤの子エホアハズ（別名シャルム）は、ユダの王としてわずか三か月間（紀元前609年、Ⅱ歴代誌36:1～4参照）在位した。

エホアハズは父の改革を無視し、民が偶像礼拝に戻るのを許可した。エジプトの王ファラオ・ネコは、彼をハマテの地リブラに召喚した。リブラはエジプト人が陣を敷いていた場所である。そこで、ファラオ・ネコはユダを朝貢国とした。その後、ファラオはエホアハズをエジプトに連れ去り、そこでエホアハズは死んだ（エレミヤ22:11, 12）。

F. エホヤキム王 (23:34～24:7)

ヨシヤの子エホヤキムは、十一年間（紀元前609～598年、Ⅱ歴代誌36:5～8、エレミヤ22:18, 19、26:21～23、36:9～32参照）ユダの王であった。

23:34～37 ファラオ・ネコは、ヨシヤの代わりにエホアハズの兄弟であるエルヤキムを王とし、エルヤキムの名前をエホヤキムと改めさせた。エホヤキムはヨシヤの生き残った息子の中で最年長であったが

(31, 36節参照)、民は当初エホアハズを王位に就かせていた。ネコはこれを覆し、エホヤキムを属王に任命した。エホヤキムはヤハウェよりもファラオに忠実であった。

24:1～4 紀元前605年、エジプトはカルケミシュでバビロンに敗れ、ユダはバビロニア人の支配下に入った。エホヤキムは預言者ウリヤを処刑し（エレミヤ26:23）、エレミヤがユダとイスラエルについて書いた神のこぼを焼却した（エレミヤ36:23）。彼はエレミヤと彼の書記バルクを捕らえようとしたが、主は彼らをかくまわれた（エレミヤ36:26）。エホヤキムの治世の三年目に、ネブカドネツアルはエルサレムに攻め入り（1節）、住民の一部（ダニエルを含む）をバビロンに連れ去り、神殿の器物の一部も奪った（Ⅱ歴代誌36:7、ダニエル1:1, 2）。彼はまた、エホヤキムを鎖につないでバビロンに連行した。その後、エホヤキムがバビロニア人に反旗を翻したため、ネブカドネツアルは考えを変えた、またはユダの王をエルサレムに戻した（24:1）。ホイットコム（John C. Whitcomb）はこの状況を次のように説明している。

歴代誌の作者は、ネブカドネツアルが「彼を青銅の足かせにつなぎ、バビロンへ引いて行った」（Ⅱ歴代誌36:6）と述べているが、その計画が実行される前に、ネブカドネツアルが考えを変えるほど重大な出来事が起こった。父ナボポラッサルが8月15日にバビロンで死去したという知らせを受け、王位が危うくなったことを悟った彼は、エホヤキムに臣下として忠誠を誓わせてから、アラビア砂漠を横断する最短ルートでバビロンへ向かったのであった。^{*(26)}

神はマナセの罪のために四つの国から侵略軍をユダに送られた。

24:5～7 主は王がろばのように埋葬されるよう定められた。つまり、王の遺体は町の外に引きずり出され、風雨と猛獣に晒されることとなった（エレミヤ22:19）。王の死の詳細は記されていない。

G. エホヤキン王 (24:8～16)

エホヤキムの子で、エコンヤ、コンヤとも呼ばれるエホヤキンは、ユダの王として三か月間（紀元前598～597年、25:27～30、Ⅱ歴代誌36:9,10参照）在位した。

この邪悪な王の短い治世の間に、ネブカドネツアルはエルサレムの町を包囲し、第二の捕囚の集団を連れ去った。エゼキエルもこの移送でバビロンに連れて行かれた。その中には王族、七千人の兵士、熟練した職人たちも含まれていた。実際、残されたのは、この地の最も貧しい人々だけだった。ネブカドネツアルはまた、神殿と王の宮殿から財宝も奪った。14節には、捕虜の総数が一万人と記されている。エレミヤは四千六百人の捕虜が連れて行かれたと述べている（エレミヤ52:28～30）。列王記の数字には、他の機会に捕らえられた捕虜も含まれている可能性がある。エホヤキンが三十七年間捕虜として過ごした後、バビロンの王エビル・メロダクは彼を牢獄から解放し、捕虜となった他の王たちよりも高い地位に就け、宮廷で名誉ある地位を与え、何不自由なく暮らせるようにした（25:27～30）。

預言者エゼキエルがその働きを始めたのもこの時期である。

H. ゼデキヤ王 (24:17～25:7)

エホヤキンのおじゼデキヤは十一年間（紀元前597～586年、Ⅱ歴代誌36:11～21、エレミヤ52:1～30参照）ユダの王であった。

24:17～20 バビロンの王はエホヤキンのおじマタンヤを彼（エホヤキン）に代えて王に任命した。バビロンの王はマタンヤの名前をゼデキヤと改めさせた。ゼデキヤはネブカドネツアルと契約を結び、彼の傀儡として仕えることに同意した。しかし、彼はその後、その契約を破り、バビロンの王に反逆し、エジプトに助けを求めた。誓いを破ったゼデキヤの裏切り行為と、その後の彼に対する神のさばきは、エゼキエル17:11～21に記録されている。

25:1～7 ゼデキヤのエジプトとの陰謀は、エルサレムの町に最後の打撃をもたらした。ネブカドネツアルはエルサレムを一年半包囲し、城壁内に深刻な飢饉を引き起こした。ゼデキヤとその戦士たちは、夜のうちに都から脱出し、死海近くの荒野に逃げ込もうとした。カルデアの軍勢は王を捕らえ、リブラ（アラムのハマト）のネブカドネツアルのもとへ連れて行った。バビロンの王は、ゼデキヤの息子たちをその目の前で虐殺した後、ゼデキヤの両目をえぐり出し、青銅の足かせをはめてバビロンへ連れて行くように命じた。これにより二つの驚くべき預言が成就した。エレミヤはゼデキヤがバビロンの王と対面する、と預言していた（エレミヤ32:4、34:3）。これはリブラで成就した。エゼキエルもまた、ゼデキヤはバビロンへ連れて行かれるが、バビロンを見ることはなく、そこで死ぬと預言していた（エゼキエル12:13）。ゼデキヤの両目はバビロンに着く前にえぐり出され、ゼデキヤはバビロンで死んだのである。

I. エルサレムの陥落 (25:8～21)

25:8～12 エルサレムの最終的な破壊は、紀元前586年、バビロンの親衛隊の長ネブザルアダンによってもたらされた。彼は神殿、王宮、おもだった建物をことごと

く火で焼いた。彼は城壁を打ち壊し、その地の最も貧しい民の一部を除くすべての人々を捕らえ移した。

25:13~17 これらの節は、神殿の財宝の徹底的な略奪について述べている。持ち去るには大きすぎるものは、小さく切り分けられた。押収された青銅は計りきれないほどであった。さらに、カルデア人は見つけうる限りの純金と純銀をすべて奪った。

25:18~21 ネブザルアダンはエルサレムの有力な市民約72人をリブラのネブカドネツアル王のもとに連れて行き、彼らはそこで即座に処刑された。^{*(27)}

J. ゲダルヤの総督職 (25:22~26)

バビロンの王は、ゲダルヤをユダに残っている民の総督に任命した。これを聞いた四人の軍の高官たちはミツバにいるゲダルヤのもとに來た。おそらく民にエジプトへ逃げるよう勧めるためであったと思われる。ゲダルヤは彼らに、バビロンのくびきに服従すればすべてはうまくいく、と助言した。その後、王族の一員であるイシュマエルがゲダルヤとその同僚たちを襲って殺害した。こうして統制された政府を失った民は、エジプトに逃れた。

K. エホヤキン王 (25:27~30)

この書は希望を与える雰囲気でも幕を閉じている。列王記第二とエレミヤ書は同じ結末で終わっている (25:27~30、エレミヤ 52:31~34参照)。捕囚三十七年目に、エホヤキンはバビロンの王から名誉ある扱いを受けた。これにより、捕囚の厳しさが緩和され、後になれば完全に終わるという希望が生まれた。

列王記第一はダビデの死で始まり、列王記第二はユダの滅亡で終わる。イスラエル民族はモーセのもとで失敗し、士師のもと

で失敗し、そして今度は王たちのもつで失敗した。人々は神のみことばに耳を傾けようとしなかった。預言者の涙にも動じなかった。彼らは心を閉じ、うなじを固くしたので、ついに神はアッシリア人とバビロニア人を遣わして、罪の報酬は死であることをお教えになった。捕囚はその目的を十分に果たした。捕囚によって、神の選民の心は偶像礼拝からやつと清められたのである。

後 注

- (1:2) John C. Whitcomb, Jr., *Solomon to the Exile*, p. 64. バアル・ゼブルは多くの学者によって「高貴なバアル」と訳されている。
- (2:7-9) George Williams, *The Student's Commentary on the Holy Scriptures*, p. 200.
- (3:4-9) See *Unger's Bible Dictionary*, pp. 217, 226, 227.
- (3:26, 27) Harold Stigers, "II Kings," in *The Wycliffe Bible Commentary*, p. 344.
- (5:1-4) D. L. Moody, *Notes from My Bible*, p. 58.
- (5:13, 14) Ibid.
- (6:24-31) これを文字通り鳥の糞だと考える人もいるが、燃料として使われている。
- (7:1, 2) Moody, *Notes*, p. 58.
- (7:3-7) Matthew Henry, "2 Kings," in *Matthew Henry's Commentary on the Whole Bible*, II:745, 746.
- (8:13-15) Williams, *Commentary*, p. 207.
- (8:15) Merrill C. Tenney, *The Zondervan Pictorial Encyclopedia of the Bible*, III:49.
- (9:30-37) G. Campbell Morgan, *Search-*

- lights from the Word*, p. 209.
13. (10:15-17) *Ibid.*, p. 104.
 14. (11:4-11) Williams, *Commentary*, p. 210.
 15. (12:1-5) Whitcomb, *Solomon*, p. 103.
 16. (12:1-5) Williams, *Commentary*, p. 211.
 17. (15:32-38) Flavius Josephus, summarized by Matthew Henry, "2 Kings," *Matthew Henry's Commentary*, II:785.
 18. (16:10-16) F. C. Cook, ed., *Barnes' Notes on the Old and New Testaments*, I Samuel-Esther, p. 273.
 19. (17:29-34前半) このような混合宗教は「シンクレティズム」と呼ばれる。
 20. (17:41) しかし、ルカ2:36には、女預言者アンナが「アシェル族」、つまり十部族の一つの出身であったと書かれている。どうやら、その部族の一部は帰還したようである。また、ヤコブは「離散している十二部族」に手紙を送った(ヤコブ1:1)。したがって、初期のキリスト教時代においても、十部族は完全に「失われた」わけではなかった。
 21. (18:17-19) KJVでは冠詞を省略しているため、これらの語が固有名詞であるかのような印象を与える。
 22. (19:35-37) 彼は受肉前のキリストであると広く信じられている(NKJVの脚注では、大文字表記の「Angel」がこの見解を示唆している)。
 23. (20:1-7) Whitcomb, *Solomon*, p. 127.
 24. (20:20, 21) 碑文の原文は、*Unger's Bible Dictionary* (pp. 481, 482)、およびRichard I. McNeely 著 *First and Second Kings* (p.145) に掲載されている。
 25. (23:15-18) Williams, *Commentary*, p. 221.
 26. (24:1-4) Whitcomb, *Solomon*, p. 146.
 27. (25:18-21) 25章には3つの数字上の問題があるが、II列王記のこの箇所、あるいは

I列王記とエレミヤ書の対応する節のどちらにしても、おそらくすべて書写者による誤りである。古代の写本における数字の正確な複写には特別な問題があった(この種の問題についての詳細はII歴代誌を参照)。問題となるのは、エルサレムが焼け落ちた日付(8節では月の7日、エレミヤ52:12では10日)、柱頭の高さ(17節では3キュビトとなっているが、I列王記7:16では5キュビトとなっている)、殺害された側近の数(19~21節では五人、エレミヤ52:25では七人が処刑された、となっている)などである。

参考文献

列王記第一巻末の参考文献を参照のこと。

旧約聖書注解 Ⅰ 創世記→Ⅱ 列王記

2026年5月1日 初版発行

著者 ウィリアム・マクドナルド

訳者 尾崎富雄

印刷 株式会社ジーシステム

発行 株式会社ゴスペルフォリオプレスジャパン

〒156-0053 東京都世田谷区桜2-21-9

<https://gfpjapan.raku-uru.jp/>

©2026 Gospel Folio Press Japan Printed in Japan

ISBN 978-4-9905543-8-5

